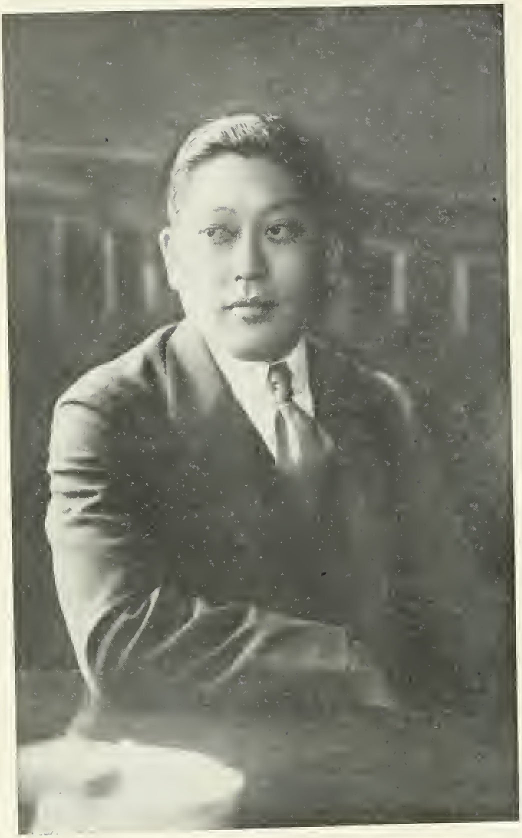


水上瀧太郎全集

十巻



昭和二年春

貝殼追放　二

目次

久米秀治氏

大正十四年一月一日久米秀治氏死去す。病名急性腹膜炎？

久米さんは實にいゝ人だつた。私は久米さんを評するに「いゝ人」といふ以外の適切なる言葉を見出す事が出來ない。

久米さんと私とのおつきあひは、明治四十三年に創刊せられた雜誌「三田文學」をくさびとして結ばれた。當時二人とも慶應義塾の學生で、私は理財科、久米さんは文科の哲學專攻だつた。私の方が二級上だつたので、何となく年上の積りでゐたが、久米さん死後その追悼會に列した時、始めて私の方が一つ下だつた事を知つた。

學級が違ふのとは反對に、世間智にかけては久米さんの方が遙かに先輩だつた。此點に於て甚だませて居た久米さんの目には、一本調子の私の如きは、をかしい程お坊ちやんに見えたやうで

ある。人に對する時、何時も目尻になつかしみのある微笑を浮かべて居た久米さんは、世間はそんなものではありませんよと、口にこそ出さないが、その微笑にものを言はせて居た。

ほんとに久米さんは、學生時代から世馴た人だつた。放縱無賴の學生の間に伍して、その連中に爪彈きされる程豐かなる常識を備へて居た。その爲めに同年配の學生などは、全く子供つぽく見えたやうである。勿論私の如きも、大人になり切れない人間として取扱はれて居た。しかし、自分で云つてはをかしいが、私のその大人になり切れないところを、久米さんは決して馬鹿にはして居なかつた。寧ろ多大の興味をもつて眺めるといふ態度だつた。

尤も私にして見れば、自己肯定のいやみはあるが、大人になり切れない心を失ひ度くないと思つて居る。久米さんが考へて居る程私だつてお坊ちやんでは無い。通りいつぺんの世間並を學べば學べるであらうが、それを學び度いとは思はないのだ。其處で久米さんの天衣無縫とも稱す可き人當りの圓滿なところや、事毎に穩當な判斷を下すところに感服すると同時に、時には餘りに大人過るのを淋しくなく考へる事もあつた。

當時「三田文學」を中心として、藝術創作の熱情に夢中になつて居た學生は澤山あつた。久保田万太郎さんのやうに、處女作「朝顏」を發表すると同時に、忽ち一般に認められて、新進作家の一

人に數へられたのは珍しいので、あとは志は大きいが扨て作品は思ふやうには出來ないとか、或は立派な抱負のあるやうな口はきゝながら、毎日毎日酒びたしになつて居るやうなのだとか、まともで無いのが多かつた。その連中の生活といふものは、うちを出て來る時は袴を穿き本を抱へて來るが、多くは當時文科の教室にあてられて居たヴィツカアス教授の舊宅の二階で、日の暮れる頃迄出鱈目な話をして居るのであつた。それから隊を組んで、其頃ぼつぼつ出來始めたカフヱを飲廻るのや、芝浦邊の料理屋で荒つぽい酒盛をするのもあつた。

久米さんは其仲間には加はらなかつた。加はらなかつたと云ふよりも、相手にならなかつたと云ふ方が當つて居るかもしれない。たくみに避けて、一人でさつさと姿を消した。右だか左だかに稍傾いた首を持つ特殊の後姿は、今も私の忘れ難く思ふところである。

金釦の制服を着るのは野暮だと思つて居たものか、大學部の本科の生徒は和服が多かつた。本を懷中に押込み、袴の紐にインキ壺をぶらさげて、懷手をして歩いて居るやうなてあひの中で、久米さんはブラツシのかゝつた制服に、山の高い中折帽子をかぶり、冬になると會社員好みの變色のオバア・コオトを着て來た。時には和服の事もあつたが、羽織も袴もたゝみめがくつきりついて居て、何れにしてもだらしの無い書生さんとは趣を異にして居た。その癖學業にかけては、

矢張り怠け者の一人であつた。

同級の久保田さんは別として、久米さんが他の學生と交渉を持つのは、何か催しのある時に限つて居た。親切で世話好だつたし、おまけに素晴しく能書たつたから、先づ掲示を書く事から、會場の世話まで、誰よりも眞面目に着實に取運んだ。ふだんは成る可く仲間になり度くない連中ともいつしよになつて奔走するところは、決して御義理いつぺんの事では無く、全く世話好の性分の發露だつた。いざとなると役に立たない惡玉は「久米幹事」といふ少なからぬ輕蔑の意を含ませた言葉で呼んで居た。

學生の書いたものが少しづゝでも「三田文學」に出るやうになつたのは、雑誌創刊の翌年からで、井川滋氏の「逢魔時」を眞先に、久保田さんの「朝顏」に續いて私の「山の手の子」松本泰氏の「樹蔭」などが出て、一段とみんなの野心を募らせた。例の文科の學生溜りで、創作の苦心などを語合つて居たものだが、そんな席ではあまり口をきかない久米さんも、その年の十二月號に「灯」といふ小說を發表して、事の意外にみんなを驚かした。創作ばかりが此人生に於て價値のある仕事だと思つて居た位夢中だつたから、「幹事さん」が小說を書いてゐたといふ事は、思ひもつかない事だつたのである。けれども其小說の出來榮は甚だ冴えないもので、矢張り「幹事さん」の仕事であつ

た。

その後「三田文學」と「スバル」に發表した久米さんの小說は、數に於ては相當あるが、どう贔負目に見ても拙劣なものであつた。一言にして之を評すれば、或事件の報告に止つて、味もそつけもないのが缺點である。常識の發達した世間人久米さんの處世の態度で、てきぱきと事務を處理するやうに書いたのであらう、商事會社の營業報告か官廳の文書の如き感がある。

世間には無技巧を標榜する作家もあるが、久米さんの小說こそほんとの無技巧だつた。それは意識して凝つた技巧を避けるとか、或は成る可く目につかない書方をしたいとか云ふのでは無く、全く無邪氣なる無技巧で、極端にいへば、技巧を凝らす丈の細かい苦心をしなかつたともいへるし、苦心をするといふ事にさへ考へ及ばなかつたとも云へる。一例として大正三年正月の「三田文學」に出た「烘麥」といふ小說を引合ひに出して見ると、先づ書き出しが、

貞子は五時頃樋口さんと連立つて學校の門を出た。

とあり、以下行の變り目に、その貞子といふ女主人公の名前で始まるのが四拾餘箇所ある。

貞子は豫て樋口さんに賴んで置いた貸間の好いのが見付かつて……

貞子は途々腹の中で、今夜兄に何と云つて家を出る話を切り出したものかと……

久米秀治氏

貞子は樋口さんと一緒に居る事なんか忘れてしまつて……

といふやうな風で、此の小說の最後の一節の如きは、貞子の次に貞子が續き、更に又貞子と來る著しい特徴のあるものである。

貞子は手紙を讀んでるうちに涙がほろほろこぼれた。以下一行

貞子の頭の中にはいろんな事が走馬燈の如く往來し初めた。以下二行

貞子は今度の事の責任が皆自分にあるやうな氣がした。以下二行

貞子は今は下らぬ悔恨や追想に耽つて居べき時でないと自分の心を勵した。

その外段切でない間々のセンテンスの、貞子に始まるものを數へたら限りが無い。いかにも智惠の無い書方で、斯ういふ無雜作無頓着が久米さんの小說そのものである。

明白にいへば、私は久米さんを藝術家だとは思つた事が無い。何かの氣紛れで文科を志望し、周圍の空氣に動かされて創作の筆を執り始めたので、恰も世間は斯うしたものだといふ久米哲學と同じく、みんなが書くから書いて見たと云ふ程度では無かつたらうか。久米さんが文科出身の、しかも哲學專攻だつたと云ふ事は、多くの人の意外とするところであつた。徹頭徹尾世間智の人であつた久米さん自身は、人々が意外に思ふのを寧ろ興がつて居た位である。

それでも久米さんは、常々小説を書く暇の無い事を嘆じて居た。それは創作慾が内に燃えて居る爲めと云ふよりも、書かないでは義理が悪いと思つて居たものらしい。しかも存外此の不義理を厭ふ心持は強かつたやうである。たとへば永井荷風先生が「三田文學」「文明」「花月」などを主宰しておいでになると、その雜誌に寄稿しないでは申譯が無いとか、或は大正五年に、「三田文學」を吾々若輩の努力で存續させて行かうと約束して以來は、私の顏を見る度に、何も書かないで濟まないとか、近いうちに屹度投稿するといふやうな事を口にした。何時もお恥かしいものではあるが、約九年間酬ゐられざる投書家として、殆ど休みなく書きつゞけて居る私に對して、義理を缺くやうな氣がするらしかつた。さうして、忙しい中で書いた小説を、かなり澤山寄稿した。此の義理堅さは、久米さんの人格を美しくした。

前にもいふ通り、久米さんは決して藝術家としては勝れてゐなかつた。處女作「灯」以後、大正十四年二月の「苦樂」に出てゐる絶筆「めぐりあひ」に至る迄、量に於ては充分あるが、私は一冊の本に纏めて殘し度いとは思はない。曾て「文明」に連載した「小菊の執念」と云ふつゞき物は、作者の名を明かに記してあるにも拘らず、或粗忽な本屋が永井先生の作だと思つて、出版し度いと申出た。何故これを永井先生の作品だと思つたかといふと、單にその文體が言文一致でないと云ふ

以外には理由を見出し難い。當時永井先生はしきりに文章體の隨筆を書いてゐらつしやつた。元來拮屈なる久米さんの文章は、到底世界を明治初年にとつた執念物をこなす事は出來なかつたのだが、本屋にはそれ丈の批判力は無かつたのである。念の爲めに其一節を拔いて見よう。

話は此某の家には何の交渉もなく、四十余年以前に溯り、相模屋と云ふ紙店に起りし事、某は誠にそれより三代目の家主に當るなり。

頃は明治の始め、世は德川家の治下を離れて、王政復古の御世となり、庶民は三百年の長き夢より醒めて、有難き天津日影を拜する事となりし時の事、江戸は東京と名を改めても、昔に變らぬ大繁昌、相模屋の店も世と共に榮え、軒に掲げし大福帳は、幾世替らぬ家の徵とぞ見えぬ。

本屋の間違は直ぐにわかつた。それでも永井先生の序文を頂いて一冊に纏めるといふ話が相當進んでゐた樣子だつたが、どうした事か結局お流れになつてしまつた。戲作風の「小菊の執念」の出版を條件として、眞面目に書いた短篇を集めて別に一冊出させようとした爲め、破談になつたのだと云ふ噂もあつた。

これよりさき、私が久米さんとへだてのない話をするやうになつたのは、明治四十五年に私が

學校を卒業した後の事である。その前には、私も亦久米さんを「幹事さん」としか見て居なかつた。卒業してから、其年の秋渡米する迄ぶらぶらして居たので、大概の日は學校の文科の學生溜りで日を暮らしてゐた。久保田さんと一番親しくなつたので、その同級生の久米さんともつきあふ機會が多くなつた。よく三人で、三田の山を下り、芝山内を抜けて日影町に出て、銀座迄歩いた事がある。カフヱ・パウリスタの安珈琲を飲みながら暫く無駄話をし、扨て三人とも別れ別れになると、久米さんは其近所の歌澤の御師匠さんのところへ稽古に通ふのであつた。袴を穿いて居てはをかしいといふので、學校の授業か濟むと、物置のやうな所へかくして置く事もあつた。同じ稽古友達は銀座界隈の商人が多かつたらしく、その人達とつきあつて居るうちに、忽ち銀座通（つう）になつてしまつた。若松といふ汁粉屋には若い藝者が澤山來るといふ事で、久保田さんと私もくつついて行つた事がある。生憎きれいな人は一人も來てゐなかつた。新橋の橋のそばの天松といふ天ぷら屋の天丼がうまいと云つて、これも久保田さんと二人で連れて行かれた。御汁粉の方は不得手だから、それつきり二度と足踏みした事も無いが、天松には其後も時々御世話になつた。久米さんが誰かに聞いて來たまゝの言葉で激稱した程の事は無く、先づ駄天ぷら屋としては上の部に屬する位のものであつた。

久米さんからわざわざ電話の誘ひをうけて、銀座近邊迄出向いた事もちよいちよいあつた。二人が偶然途上で出あつて、當時淺草田原町に居た久保田さんのところへ押かけて行つた事もある。淺草子の久保田さんは、外土地の者殊に山の手の住人を、其處此處引廻すのが大好きだつた。私の渡米の日も愈々近くなつた頃、矢張り二人で今戸あたりをぶらついた歸りに、金田へ寄つた事があつたが、酒を飲む二人を相手に、殆ど一滴もたしなまない久米さんも、同じ調子に昂奮して身の上話を始めた事があつた。久米さんが廣い世間を早く知つて居たのは、あの人の若い時代が數奇なる閲歴に富んで居た爲めで、茲にその日の話を詳しく記す事は差控へるが、中學を出るか出ないかの頃、一時親の家にはゐたゝまれ無い身の上となつて、北海道を流浪して居た事があるさうである。その頃新聞記者だか新聞配達だかをして、かつかつ自活して居た事は屢々小說の中にも描かれた。大正八年五月及六月の「三田文學」に載つてゐる「葡萄棚の下」は、主として其當時の消息を物語るものと見て差支へ無いであらう。

金田を出てから、酒を飲んだ二人は、飲まない久米さんの爲めに松むらといふ汁粉屋に行つた。尤も當時久保田さんは「お米と十吉」といふやうな小說を書いた時代で、御汁粉屋も亦戀愛憧憬の念と共になつかしまれたところかもしれない。

久保田さんと別れた後でも、久米さんの身の上話はなほつゞいて、二人とも別れともなくなり、電車に乘つて邪魔者の介在するのも面白くなく思はれ、たうとう新橋迄歩き通してしまつた。久米さんと私とのおつきあひの十余年間に、此の日程久米さんが眞面目に話した事は無い。

それから間も無く、久米久保田兩氏の外に大場惣太郎さんが加つて、大金で私の送別會をしてくれたが、愈々出立するといふ前の日にも、又久米久保田兩氏と散歩して、日本橋の花村で晝飯を喰べた。此の日の事は先頃久保田さんが或雜誌に書いて居たが、その中で久保田さんの間違だと思ふのは、誰も酒を飲まなかつたといふのが、私の記憶によれば、久米さんは勿論飲まなかつたけれど、久保田さんと私は一本の御銚子をあけたのである。たゞ、その晩私は親類の者とのお別れの會があるので、一本きりにしようと主張した丈である。久米さんと私が鮪の刺身をあつらへたのに、久保田さんは生ものは喰べられないと云つて憮然とした事も覺えて居る。誰かゞ一人で勘定を濟ませたのを、傍の酒客に今時の若い者に似合はないとほめられた事は、正に久保田さんの書いてゐる通りである。

久米さんが帝國劇場に入つたのは其翌年の事である。小說作家としては氣の毒な程下手だつたが、株式會社帝國劇場の事務員としては、確に適材適所だつた。一度何かの事情で、大正八年頃

に退職した事はあつたが、間も無く呼戻されて有樂座の主事となつた。

私は帝國劇場の芝居は大概感心出來ないし、又色慾兩道の豪の者として非理非道を行ひながら免れて恥なき大株主の或者を憎む爲めに、屢々はげしい言葉を以て攻擊した事もあるが、專務取締役山本久三郎氏の、いかにも多血質らしい經營振には、少なからず痛快味を感じてゐる。時々文士連との紛爭を起した場合にも、その原因如何は別として、兎角煮切らない文士連の態度よりも、全責任を一人でしよつてかたをつける山本氏のやり口に同情を持つ。若い久米さんを登用する事に於ても、山本氏は隨分きびきびとやつてのけたやうである。斯ういふ事を忖度するのは如何かとも思ふけれど、死んだ友だちに對する私の哀惜のことばとして許して頂けば、恐らく山本氏の後をうけついで、將來帝國劇場をしよつて立つのは久米さんだつたであらう。義理堅く、人情に厚く、さばけて居て、人當りが柔かく、その癖自ら信ずる事にはひた向に忠實だつた久米さんは、疑も無く適材適所だつた。それなのに、漸く自由に手腕を振ひ得る地位になるかならないといふところで、憎む可き病の爲めに死んだのは、かへすがへすも殘念である。永い間苦勞をしたあげくに、此の不幸に遭遇した奧さんの御心をおもふと、私はあきらめ切れない感が一層切になる。

私が最後に久米さんにあつたのは、昨年の十二月五日である。その日の朝帝國劇場の荻野さんが、久米さんの御使として私の勤務先に、その晩のヂンバリストの演奏會の切符を届けて呉れた。私は帝國劇場の芝居には感心しないと云つたが、外國のすぐれた音樂家を招いて聽かせてくれる事に對しては深く感謝して居る。音痴に近い癖にひどく好きで、殆ど毎回一度は必ず聽く事にして居るが、それと知つてから久米さんは、屢々切符を屆けて呉れた。元來人から物を貰ふ事を好かない私は、口實を設けて固辭する事もあつたが、久米さんの厚意に對し、又何時も御使に來る荻野さんの斷られてほんとに弱るらしい様子に對し、自分の我まゝを抑へて頂戴する事が多かつた。最近には家内の分迄頂く事もあつて、五日の晩も正に二人分の切符を頂いた。それがヂンバリストの最終の演奏日だつたが、客はまばらで空席が多かつた爲め、久米さんも吾々の傍に來て一緒に聽いて居た。いつもの通りにこにこして、快活に話をして居たけれど、何と無く疲れた様子で、殊に顏色が惡かつた。

「大變顏色が惡いぢやありませんか。」

と心配して訊くと、

「いゝえ、たいした事はありません。もつとも藥は飲んでゐますけれど……」

と答へて、ポケツトから藥を取出して見せた。決して御心配には及びませんと云ふ樣子だつたので、それつきり外の話にうつり、別れる時には近日將棋の手合せをしようと約束した。

十四日に私の家で將棋の會をやる事にして、岡田三郎助先生、馬場孤蝶先生、勤務先の先輩山下さん並に久米さんに案内を出した。その時始めて、久米さんが病氣で入院し、窒扶斯の疑があるといふ事を知つた。馬場先生も御差支があつて御出にならなかつたので、些か寂しい集りだつた。

それから數日後に又岡田先生に御目にかゝつた時、久米さんは浦島病院に入院して居るさうだと、誰かゝら先生が聞いてゐらつしやつた通りをうかゞつた。浦島病院なら產婦人科だといふ事で、久米さんの呑氣を笑ふと同時に、何となく病氣は輕いに違ひ無いと思つた。見舞に行き度いと思ひ、度々家内にもさう云つてゐたが、ひどく忙しい日がつゞき、元日から豫ての計畫で伊豆の温泉場に出かけてしまつたので、遂に悔んでも追つかない事になつてしまつた。二日の朝新聞を手にして久米さんの死を知り、浦島病院が岩島病院の間違ひだつた事も、其時始めて明かになつた。

私は自分も勤人をして十年の辛抱をつゞけて居るので、勤人としての久米さんの死を特別に氣

の毒に思ふ。久米さんと同期に學校を出た久保田さんは、學生時代からひとかどの作家として認められ、今日迄に既に立派な仕事を殘し、押も押されもしない地位を築きあげたが、さういふ事は勤人には許されない。特別の事情の無い限りは、長く年季を積まなければならない。久米さんはやうやく年があけて、ほんとに腕を振ふ日も遠からぬ事となつた時に死んでしまつた。明るい將來の見極めがついたところで、僅かに四十にして死んでしまつた。

繰返していふが、久米さんは實にいゝ人だつた。親切で、義理堅くて、人の爲めにはよく盡した。底の底には強情なところもあつたが、人當りの柔かい人で、多く人と爭はなかつた。

自分の意に滿たない事があれば、相手をえらばず論爭する私さへ、久米さんとは其おつきあひの十五年間、曾て一度も爭つた事が無い。不滿に思つた事も無い。私を一度も怒らせた事の無かつた友達として、久米秀治氏は永久に忘れる事の出來ない人である。（大正十四年一月十九日）

――大正十四年二月號「三田文學」

「鏡花全集」の記

去年三月初旬の或夜、泉鏡花先生の御招きをうけて、或ところで御馳走になつた。その時先生から、

「實は御相談があるんですが……」

とあらたまつた御挨拶に接した。さういふ時には必ずきちんと正した膝の上に、行儀よく手を置くのがおきまりで、且あらたまつた時には、羞かしさをまぎらす爲めでもあらうか、あらたまつた語調で話し出すのも亦先生のおきまりである。

御相談といつたところで、決してほんとの相談では無い。何事にも信念の強い先生は、處世の上にも獨特の方式があつて、他人——殊に私の如きものに相談なんかある可き筋では無い。單に時々——たとへば吾々程度のへぼ將棋で端歩(よしふ)を突く位の事で、要するに言葉づかひに特殊のつゝ

ましさを保持される先生の洒落と見て差支へ無いのである。其晩の御相談は「鏡花全集」を春陽堂から出版する約束をしたといふ御報告であつた。

併し乍ら、私としては、此の御相談を原稿の事とうけとつて、

「原稿ならば、私の手許にあるのを何時でも御用達致しませう。」

と答へた。多年並ならぬ苦心をして集めたものではあるが、地震の後の事とて、東京の本の大半は焼失したらうと思はれたし、又私以上に集めて居る方もあるにはあるだらうが、最も平生親しくつきあひを願つて居る者が之を提供するのが、萬事につけて一番よからうと思つたのである。地震でひどいめにあつた春陽堂が、此の大仕事にとりかゝる奮發に對しても出來るだけの援助を與へたいと思つた。

正直のところ、私は春陽堂の商賣振を好まない。明治文學の興隆には少からぬ貢獻をした老舗ではあるが、今は仕事に熱が足りなくて、愚痴つぽくて、何彼につけて不滿足だつた。しかし私をして此の店に多大のなつかしさを覺えしめるのは、紅葉露伴鷗外鏡花その他の諸先輩の名作を出版し、當時の私の感激の問屋の如き觀があつた爲めである。「多情多恨」「青葡萄」「心の闇」「五重の塔」「即興詩人」「月草」「かげ草」も其處から出た。私が愛誦した藤村先生の「夏草」も「落梅集」

も其處から出た。就中泉先生の諸作は、殆どすべて春陽堂版である。「なにがし」「錦帶記」「湯島詣」「照葉狂言」「通夜物語」「三枚つゞき」「黒百合」「田毎かゞみ」「風流線」のむかしからの馴染である。幾度も讀み返し、或は感激の涙を流し、又自分の人生觀さへ之によつて築きあげたと云つても差支へないやうな之等の本を出版した春陽堂だ。最も光輝ある歴史を有する老舗に對して、私は數へて少からぬ不滿を有しながら、なほ且先生の全集を出すのに最もふさはしい店たと思はざるを得なかつた。

全集の賣行から考へると、近頃賣出しの出版屋に任せた方が、遙に成績を擧げるであらうが、泉先生と春陽堂との多年の關係を、むざんに切捨るのは惜い氣もする。もつとも今日迄の春陽堂は、先生の著書の出版で大儲けをしながら、酬いるところは極めて薄かつたらしい。曾てその店の不心得な人間は、泉先生が近頃の原稿の市場價格を知らないのをいゝ事にして、當時かけ出しの吾々に酬いるよりも更に低い稿料を差上げてゐたやうな事さへあつたのだから、反省を促す爲めに他に全集を持つて行つた方がよくはないかといふ氣もした。此の考へは敢て私に限らず、ほかにも同感の人の頗る多い事は後に知つた。春陽堂は速かに悟つて、全集の發行を許された泉先生のため、又第一には店のそろばんの爲めに、奮勵努力すべきであらう。

何れにしても私は、全集出版の御話をうかがつて、先づ盃をあげて祝意を表した。

「ところが、其處で、ひとつ御願があるんです。」

と先生は未だ膝を崩さない。

その御願といふのは、私の名前を貸してくれといふ意外なものであつた。小山内薫、谷崎潤一郎、久保田万太郎、芥川龍之介、里見弴五氏と共に、私の名前を並べ度いと云ふのである。

「編纂者とでもいふ事になるんですか。」

私は實際原稿を差上げる以外には自分の役目は無いと思つて居たので、全く腑に落ちなかつた。

「いえ編纂者などゝ云つては失禮です。御贔負といふ事にでもして頂きませう。」

先生の言葉通りとすれば、「御贔負」といふ文字を冠(かぶ)せて、六人の名前を並べるといふのである。

「御贔負はをかしいでせう。」

これも泉先生の辭令に過ぎないとは思ひながら、私のしつこい性分で、「御贔負」はいけないといふ事を繰返しながら、何時の間にか酒たけなはとなつたのである。

その後小山内、谷崎、久保田、芥川、里見五氏も名をつらねる事を承諾されたとは聞いたが、扨てそれが「御贔負」なのかどうか、又全集が何時になつたら出るのか何もわからなかつた。久保

田さんや里見さんに逢ふと、いつたい全集はどうなつたんでせうと、互に聞きあふばかりで、肝心の泉先生と春陽堂の思惑がわからないといふ事であつた。

此の全集は誰か考へても、出版書肆としては引受けさせて貰ひ度いものに違ひ無いが、泉先生と春陽堂の多年の縁故を知つてゐて差控へて居るのもあるだらうし、假に申出たとしても先生は春陽堂との間柄を重んじてうむとは云はないだらうし、何れから考へても春陽堂としては難有いものに違ひ無い。しかし、さういふ縁故があるからと云つて、うむともすんとも挨拶も無く長い時間を過ごすのは面白く無いと思つて居た。春が來て、夏が來て、秋が來て、最初の話では第一卷が出るといふ筈だつた十二月もやがて押詰つてしまつたのである。

突然、泉先生から、全集の事で愈々立入つた相談をし度いと云ふ御案内をうけたのは暮の二十八日であつた。

小山内さんは差支へがあり、谷崎さんは上方に住んで居るので不參だつたが、他の四人と御主人と外に春陽堂の當主和田利彦氏が席につらなつた。

其處で正式に、泉先生から吾々に對し、全集出版に關しいろいろ相談し度い事もあるからよろしく賴むといふ意味の御挨拶かあつた。

頼まれた方は、その時互に顔を見合せたのである。何故といつて誰一人自分達が如何なる事を頼まれたのか見當がつかなかつたからで、事實泉先生の流儀では、斯ういふ場合に「あなた任せ」の手を用ゐられるのである。又春陽堂は吾々をどういふ風に考へて居るのか、これは一層わからなかつた。此の方は名前だけ利用すれば充分で、あまり立入つて口を出されては迷惑なのではないかと――少くとも私は想像した。

結局吾々の相談で、或は名前だけでいゝのかもしれないが、萬一眞劍に心配すべき役目なのならば理想的の案を作つて提出して見ようといふ事になつた。協議の上で定めた覺書は左の如きものである。

鏡花全集相談會に關する覺書

一、小山内薫谷崎潤一郎久保田万太郎芥川龍之介里見弴水上瀧太郎を以て編輯相談人とし出版書肆は事務の萬端に亙り右相談會の決議を經可き事

一、經濟方面の決定にも相談會の口出しを許容する事

一、相談會の常任責任者を水上瀧太郎と定め同人の招集に應じて隨時會合相談する事

一、相談會々員は無給且つ會合に要する費用總て自辨の事

一、別紙提言書の他に事務の進捗に從ひ隨時提言す可き事

一、相談會々員の名は全集中に之を錄せざる事

但し他の機關を以て發表することは差支へなし

一、相談會の決議は會員三名以上の出席を以て決定せらる可き事

鏡花全集に關する覺書(相談會より提言)

一、鏡花全集と命名する事

一、作品の全部を收錄する事

一、小說脚本隨筆(俳句を含む)の三部に分ち各年代順に並べる事

一、卷數は全作品を集めたる上一部の收容枚數を定め然る後之を確定する事

從而一冊の頁數、活字の號數等はそれ以後に定むる事

一、廣告發表の時期を以て收錄すべき作品を打切る事

一、書型は菊判の事

一、裝幀は岡田三郎助氏を煩はす事

一、題字は著者の筆跡を用ふる事

一、作品年表を附する事
一、肖像は出來るだけ各巻に附する事
一、自序廣告の作品に附隨すべきものはその作品に附し置く事
一、發表の時期は大正十四年三月とし締切は五月五日とする事
一、全集の廣告文は相談會に於て引受けてもよろしき事
一、編輯事務取扱者として濱野英二氏を推薦し又小村雪岱氏に萬事の配慮を煩はす事

此の覺書は吾々から泉先生に手交し、先生は和田氏に示して、大體の方針は之を守る事に定まつた。

尤も、裝幀を岡田先生に委囑する事は、泉先生の御希望である。明治四十一年の正月に出た傑作「草迷宮」の纖細優婉を極めたる裝幀は岡田先生苦心のもので、その作品と共に讀者の忘れ難く思ふ所である。泉先生が全集の裝幀に岡田先生を煩はし度いと申し出られたのは故ある事である。

小村雪岱濱野英二兩氏に編輯其他の事を委囑し度いと申出たのは吾々の提議した事の中で、全集出版の實行方面に於ける最も有意義な事であつた。春陽堂は、主人も番頭さんも一生懸命で働き、且又特に熟練無雙の校正係を雇ひ、決して手落は無いから安心して下さいと云ふ事であつた

が、吾々としては職業的義務心を超越した人に是非とも仕事を見て貰ひ度かつた。
小村さんは多年泉先生に親炙しこのところ十餘年間先生の著書の殆ど全部の装幀を擔任した人だ。先生の氣心をこれ程よく知悉して居る人は、先生の奥さんの外には無い。濱野さんは泉先生を崇拜する事神の如く、獻身的熱情を捧げて先生の作品の研究蒐輯に努め、人若し誤つて先生の人或は藝術について間違つた事をいはゞ、命がけで之を説破しなければ承知しない人である。或雜誌の出鱈目欄に、此の人の噂を掲げ、泉先生の惡口をいふ者があると決闘するさうだと記したのも、案外出鱈目では無いかもしれない。今日迄全集の仕事を滞り無く運んで來たのは、偏に此の兩所のいかなる事をも厭は無い誠意の賜ものである。

扨て正月も松の内が過ると、直に全集編輯事務は始まつた。明治二十六年から三十餘年間不斷の努力をもつて五百餘篇の作品を發表した泉先生の原稿を、遺漏なく集めるのは至難である。春陽堂がいかに力んでも、濱野さんが命を捧げても、短時日に之を全くする事は不可能である。其處で先づ私が二十餘年間に集めたものを提供し、之を土臺として不足のものは廣く探し求める事にした。廣からぬ私の住居の一室で仕事をする濱野さんの手助けをして、押入の中で埃を浴びて居た雜誌を整理して見ると、意外にもなくなしてしまつたものが十指にあまつた。長年下宿住居

をして居た間、本を預けて置いた本家にも移轉の事があり、其後自力で所帯を持つてからも、何時も借家住居のことゝて、あつちこつち引越して廻るうちに、私にとつては大切な品でも、心無い者には汚らしい古雜誌に過ぎ無いのだから、何時の間にかなくなしてしまつたのであらう。泉先生に對して、甚だ申譯ない氣がする。

兎に角ある限りの物を整理し、散逸したものは濱野さんの手で集める事になつた。春陽堂の番頭木呂子君も濱野さんと共に拙宅の狹い一室で、埃で鼻の下を黑くしながら、枚數を合せる爲めに算盤を彈いた。木呂子君の熱心と、主人おもひには私も感激した。時には全集の完全を望むあまり、吾々は激論に及ぶ事もあつた。私が春陽堂の仕事振を忌憚なく難じた時の如きは、忠義一圖の木呂子君は泣いて口惜しがつた。

「萬一今度の仕事をしくじつたら、この首を差上げます。」

と悲痛なる聲を擧げた。

「そんな首なんかいるもんか。」

と云ふと、

「そんなら切腹して見せます。」

と此の在郷軍人は力んだのである。

泣いたといへば、もう一人の春陽堂の番頭さん、林君も泣かされた一人である。此の方は一月二十三日第二回目の相談會を開いた席上、吾々の質問が何處迄も打切りとならず、遂には主家の事に迄及んだ時、さめざめと泣いた。斯う迄みんなに熱情を示されると、此の人々の爲めにも盡力しなければ濟まない氣になるのであつた。かゝる主人おもひの人を集めて居る春陽堂は愈々勉強しなくては相濟まないわけである。が、これ或は主人和田君並に靜子夫人の德望のしからしむるところであらうか。

此の第二回目の相談會で、吾々もやうやく「御贔負」では無く、「參訂」といふ名目の下に名をつらねる事にきまつた。此の時の覺書は左の通りである。

一、編輯相談人を參訂者と呼ぶ事

一、內容見本案文は芥川龍之介引受る事

一、新聞廣告案文は里見弴引受る事

一、小說と隨筆を區別する事は水上瀧太郎引受る事

參訂といふ文字は芥川さんが探して來られたもので、私の耳には全く新しいものであつた。

芥川さんの引受た內容見本は、夙に出來上つて、御希望の方には春陽堂から差上て居るから、御承知の方も多からうと思ふが、その苦心の程察するにあまりある名文で、これが爲めに內容見本は獨立したる藝術品となつた。玆にその全文を掲げるのは、旣に知つて居る方には無駄な事であるが、未だ知らない方には是非とも讀ませ度い私の願から、特に拜借した次第である。芥川さんも許して下さい。

鏡花泉先生は古今に獨步する文宗なり。先生が俊爽の才、美人を寫して化を奪ふや、太眞閣前、牡丹に芬芬の香を發し、先生が淸超の思、神鬼を描いて妙に入るや、鄒湛宅外、楊柳に啾啾の聲を生ずるは已に天下の傳稱する所、我等亦多言するを須ひずと雖も、其の明治大正の文藝に羅曼主義の大道を打開し、艷は巫山の雨意よりも濃に、壯は易水の風色よりも烈なる鏡花世界を現出したるは啻に一代の壯擧たるのみならず、又實に百世に炳焉たる東西藝苑の盛觀と言ふ可し。

先生作る所の小說戲曲隨筆等、長短錯落として五百餘篇。經には江戶三百年の風流を呑却し、萬變自ら寸心に溢れ、緯には海東六十州の人情を曲盡して、一息忽ち千載に通ず。眞に是れ無縫天上の錦衣。古は先生の胸中に輳つて藍玉愈溫潤に、新は先生の筆下より發して蚌

珠徧粲然たり。加之先生の識見、直ちに本來の性情より出で、夙に泰西輓近の思想を道破せるもの尠からず。其の邪を罵り、俗を嗤ふや、一片氷雪の氣天外より來り、我等の眉宇を撲たんとするの概あり。試みに先生等身の著作を以て佛蘭西羅曼主義の諸大家に比せんか、質は擎天七寶の柱、メリメエの巧を凌駕す可く、量は拔地無憂の樹、バルザツクの大に肩隨す可し。先生の業亦偉いなる哉。

先生の業の偉いなるは固より先生の天資に出づ。然りと雖も、其一半は兀兀三十餘年の間、文字三昧に精進したる先生の勇猛に歸せざる可からず。言ふを休めよ、騷人清閑多しと。痩容豈詩魔の爲のみならんや。往昔自然主義新に興り、流俗の之に雷同するや、塵霧屢高鳥を悲しましめ、泥沙頻に老龍を困しましむ。先生此逆境に立ちて、隻手羅曼主義の頽瀾を支へ、孤節紅葉山人の衣鉢を守る。轗軻不遇の情、獨往大歩の意、俱に想見するに堪へたりと言ふ可し。我等皆心織筆耕の徒、市に良驥の長鳴を聞いて知己を誇るものに非ずと雖も、野に白鶴の迥飛を望んで壯志を鼓せること幾回なるを知らず。一朝天風妖氛を拂ひ、海內の文章先生に落つ。噫、嘘、先生の業、何ぞ千萬の愁無くして成らんや。我等手を額に加へて鏡花樓上の慶雲を見る。欣懷破顏を禁ず可からずと雖も、眼底又涙無き能はざるものあり。

云々。私は此の莊重華麗なる文章の、いたづらに莊重華麗ならずして、一言一句に誠情溢れ、しかも總て芥川龍之介氏が平素抱懷するところの泉鏡花論なる事に驚くものである。顧れば私は、十餘年間數千萬言を費して泉先生に對する思慕の情を寄せた。しかし其の言葉數は徒らに多くして要を盡さず人を感ぜしむる事能はざりしは自ら認めて恥る所である。然るに芥川さんの此の一文は、よく泉先生の藝術の特長を明かにし、又吾々參訂者が先生の藝術に傾倒する所以を述べて餘すところが無い。私は此の文を讀む事既に幾百回、常に感激の涙を催すのである。かういふ心持を抱くものは私のみでは無い。四谷通りの某書店の主人の如き、此の内容見本を讀んで涙禁ずる能はず、店頭に泣面をさらしたといふ事である。

新聞廣告を引受けた里見さんの苦心も亦ひとゝほりでは無かつた。如何に氏が苦心したかは、頃日泉先生が朝日新聞に書かれた「獻立小記」の中に詳しい。しかし里見さんの場合は、結果に於て芥川さんの場合とは違つた。苦しみ苦しんで、しかも出來上らなかつたのである。最後の日限も切れたので濱野さんと私の計らひで、同じく芥川さんの筆になる內容見本の一部「鏡花全集の特色」中の一節を借用して、第一回の新聞廣告とした。第二回目のは大急ぎで私に書けといふので、一度は斷つたが、全集出版の爲めの必要止むなきものだといふ濱野さんの說に服し、一夜づ

くりで左の如きものを草した。茲に最も私の苦んだのは、前に記した芥川さんの文章の中に、泉鏡花論は總て盡されて居るので、之以外の一言たりとも贅言で無いものはないやうに思はれる事である。又、廣告の事であるから、字數に制限があつて、四百字の原稿紙の最後の二行ばかりは殘して貰ひ度いといふ註文にも閉口した。それらの苦心を察して、拙文を讀んで頂き度い。

泉鏡花先生の藝術は憧憬と反抗の藝術なり。その憧憬の念たるや、あらゆる美と眞とを求めて止まず遂に神祕の境に及び、その反抗の精神たるや、あらゆる社會人心の醜惡なる一面を嘲罵して止む事無し。幼時の追憶と江戸の讃美と、女人崇拜と意地と任俠と、數ふれば何れも燃ゆるが如き憧憬の對象ならざるは無く、權柄と野暮と不粹と慾張と髭面は、冷嘲熱罵を浴る運命の下に在り。義理人情は作者の懷にはぐゝまれ、不義理不人情は作者の足下に踏躙らる。戀は何ものよりも強く、戀愛至上主義は作者が一生涯の藝術を貫いて永遠に輝く可し。憧憬と反抗の精神を基調とする羅曼派の巨匠が筆に成る幾百篇、斷簡零墨に至る迄收めて此全集に在り。げに其作品は色調並び優れ、恰も文字を以て描ける繪畫なり、音樂なり。古今東西斯の如く自在に文字を驅使し得たる人ありや否や。我等作者と時代を同じうする幸を有するもの、此全集を得て歡び更に新なり。

私はこれを、濱野さんの列する席上で泉先生に見て頂いた。由來泉先生は所謂外づらのよすぎる程いゝ方である。吾々の如き取るに足りない者に對しても、ひとまづは結構々々と涼しがらせて下さる。但しあれほど「すぐれた癖」のある藝術家の事だから、底の底には、誰が何と云つても自分の好みに適(かな)はない以上は承知しない強さを持つて居る。しかも其の好みたるや頗る細かい。大ざつぱにそつくりかへつて顎を撫でゝ居る人間とは違ふのだ。極度の近視眼鏡を幾度も拭つて物を見る癖そのまゝ、自家一流の近眼鏡で、隅から隅まで見透さなくては承知しない。今度の全集にして見ても「獻立小記」などに據ると、總て「あなた任せ」らしい事を云つてゐらつしやるが、實はなかなかさにあらずで、内容見本の最後にある作品見本の如きも、あれは私が選ぶ役廻りで、何分よろしくとの事だつたが、いざとなつて見ると、私の選んだものゝ大半は御意に適はなかつた。

その他總てその通りで、芥川さんの文章も、假名を振らない方が一層ひきたつといふみんなの意見にもかゝはらず、作者の好みに從つて之を振つた。卽ち今度の全集は、決して泉先生は炬燵にあたつてちひさくなつて居るのでは無く、全く先生が隅から隅まで氣を配り、好みを通して居られるのである。もう一つ重ねて例をひけば、全集の校正も先生自身でなさるし、字づかひの如

きは必ずしも正字法に據らず、萬事先生の好みに從ふ筈である。例之文法上正しいといふ事は第二で、先づ第一には作者の心懸る音色の最もよく現はれる文字を使ふのである。くだくだしく云ふ必要は無い。要するに全集は泉先生の編まるゝもので、吾々は其の御相談の一端にあづかるばかりなのである。此點は後日の爲めに明かにして置き度い。作者自身の好みにより、作者自身が力を盡してこそ、此の全集の價値はあるのである。

さういふ風に作者の好みを主とする全集の事だから、廣告文と雖も一應は先生の目を通して頂かなければならないと思つたのである。

「いや結構です、結構です。」

と果して手際よくほめて下さるのを、後の怖さは承知して居るから、しつこくせつついて、文字づかひを二三箇所直して頂き、これでいゝと云ふので安心した。

ところが其の翌日、下谷の火事で、小島政二郎小村雪岱兩氏の見舞に行き、兩家とも無事だつた喜びを傳へる爲めに泉先生のところへ寄ると、たまたま濱野さんも來て居たが、先生はさもいひにくさうに、昨夜の廣告文中の一箇所に消して貰ひ度いところがあると云ふのである。言下に濱野さんが、全集の仕事が始つてこのかた、寢る時は枕元に、醉拂つて往來でころぶ時もしつか

は拙文である。

り抱いてゐて、自分の顏や手足は擦むいても、これ丈は身をもつて守る折鞄を開いて取出したの

「ちよつと此處のところを……」

と眼鏡をかけ直して先生は近々と原稿紙に顏を寄せたが、

「おや、もう消してあらア。」

と云つて私に示された。

權柄と野暮と不粹と慾張と髭面は、冷嘲熱罵を浴る運命の下に在り

といふところが、赤い鉛筆で抹消されて居た。先生の御意のまゝに、理も非も無く濱野さんが

手を下したのであらうが、私はむらむらと不愉快になつた。卽座に寸斷して叩きつけようかと思

つたが、あやふく我慢した。だから一度目を通して貰つたのでは無いか。何故最初から、此處が

いけないとは云つてくれないのだ。結構々々と云つて置きながら、このありさまは……私は目頭

が熱くなつた。私の書いた無類に下手な字のみすぼらしい原稿のまん中に、赤々と引かれた鉛筆

の暴虐を見てゐると、萬感胸をついて漲つた。

「なあに一寸こゝ丈消して頂けばいゝのです。」

と事もなげに先生はいはれるけれど、私としてはさうはいかない。先生の藝術は憧憬と反抗の藝術なりと眞向からふりかざし、對句のやうにたゝみかけて來たのを、其處丈削られては浮ばれない。一度歸宅して、考へた上で書直しますと云つて辭去した。

その晩私は、頭に血が上つて眠られなかつた。書直すとは云つたけれど、如何しても駄目だ。やけになつて斯う書いた。

（鏡花全集）出づ。「冠彌左衛門」（明治二十六年作）のむかしより今日に至るまで、小說、戯曲、隨筆、五百二十四篇、何れも永遠に傳ふ可きものゝみなり。長篇小說には「誓之卷」「貧民俱樂部」「照葉狂言」「七本櫻」「髯題目」「辰巳巷談」「黑百合」「通夜物語」「錦帶記」「湯島詣」「三枚續」「式部小路」「風流線」「續風流線」「無憂樹」「婦系圖」「草迷宮」「神鑿」「白鷺」「參宮日記」「星の歌舞伎」「日本橋」「炎さばき」「鴛鴦帳」「芍藥の唄」「由縁の女」いづれも紳士淑女の讃嘆するところ、短篇の傑作としては「女客」「祝盃」「さゝ蟹」「外科室」「夜行巡査」「妙の宮」「化鳥」「清心庵」「波がしら」「國貞ゑがく」等枚擧に遑あらず、戯曲には「愛火」「戀女房」「夜叉ケ池」「天守物語」「海神別莊」「山吹」等夙に萬人の知るところなり。隨筆俳句亦比類なき事今更いふを俟たざる可し。（鏡花全集）出づ。（鏡花全集）出づ。

これでいけなければ泉先生御自身御書きになるのが一番いゝでせうと云ふ言葉を添へて差出した。勿論沒書と思つて居たところ、意外にもこれが採用された。冷靜に考へて見ると、之が採用になつたのは、私に對する先生の御遠慮だつたのであらう。私はむかつ腹を立て易い私の性質を恥ぢた。

「紳士淑女の讚嘆するところとは何事だ。」

と憤慨した人があつたさうである。その事を聞いた時、私はあさましくも知己を得た感を禁じ得なかつた。

私の値打の無い憤りは間も無く覺めた。兀々三十餘年間小說道の爲めに苦心を積まれた先生が、一生の記念たる可き全集の爲めに、吾々は一切の小感情を捨てゝ、力を盡さねばならない。あつても無くても、いゝやうな私の廣告文案の如きは、一行削られようとも二行消されようとも、何等の差支へは無い。先生の好みのまゝにしてあげるのが、吾々藝術道に勉勵する後輩の、せめても捧ぐる花冠であらう。

先生の文壇生活は誰よりも長い。二十歳にして早くも天才の名をほしいまゝにし、三十餘年間第一の詩人として嘆稱されては居るものゝ、其間には隨分苦しい日を送られたのである。今こそ

文筆の士も衣食に事を缺かぬ程度の報酬を受ける樣になつたが、それは永年奮闘してくれた諸先輩の賜である。泉先生の如きも、衣食に窮して生の難く死の易きをおもひ、自ら命を斷たんとした事もあつたさうである。名作「鐘聲夜半錄」の成りし頃、先生は郷里金澤に在つてその師紅葉山人に書を寄せて苦境を訴へた。それに對する紅葉山人の手紙は、涙無くして卒讀する事は出來ない。(全文は寫眞版として全集中の一卷に載せる筈)

(前の方を略す)果然今日の書狀を見れば作者の不勇氣なる貧窶の爲に攪亂されたる心麻の如く生の困難にして死の愉快なるを知りなど、浪りに百間堀裏の鬼たらむを冀ふその膽の小なる芥子の如く其心の弱きこと芋殼の如し。(略)破壁斷軒の下に生を享けてパンを咬み水を飮む身も天ならずや。其天を樂め！　苟も大詩人たるものはその腦金剛石の如く、火に燒けず、水に溺れず、刄も入る能はず、槌も擊つべからざるなり。何ぞ況や一飯の飢をや。汝が金剛石の腦未だ光を放つの時到らざるが故に天汝に苦楚の沙と艱難の砥とを與へて汝を磨き汝を琢くこと數年にして光明千萬丈赫々として不滅を照らさしめむが爲也(略)汝の腦は金剛石なり。金剛石は天下の至寶なり。汝は至寶を藏むるものなり。天下の至寶を藏むるもの是豈天下の大富人ならずや。(略)近來は費用つゞきて小生も困難なれど別紙爲換の通り金三圓だ

け貸すべし倦ず撓まず勉強して早く一人前になるやう心懸くべし。

當時の泉先生を洞察した紅葉山人の手紙は泉先生の命を救つた。やがて金剛石は燦然として輝いたのである。

その後先生の文名一時に高く、既に動かし難い地位を占められたが、それでも一飯の食事さへ事を缺く事も稀では無かつたと聞く。殊に自然主義が提唱され、同黨異伐を事とし異色ある作家を排斥した頃は、最もひどかつたさうである。はつきりいへば、原稿を買ふ本屋は無かつたのである。泉鏡花の作品を揭げる雜誌には壓迫を加ふべしと公言したものもあつたさうで、それが爲めに、一度依賴した先生の原稿を、出來上つた後で斷つた編輯者もあつた。

しかも先生の天才と異常なる努力は、その間永遠に傳ふ可き幾多の名作を出し、誰が何といつても今日文壇の一枚看板として、押も押されもしない地位をきづかれた。それが、何等の黨派的勢力によらず、全くの筆一本で殘した藝術の力である。此の天才作家を有し、その優れたる藝術を有する事は、吾々の國民的の誇である。我等時代を同じくするもの、先生多年の功績と、三十餘年間の悲痛なる努力の成果なる全集を讃ふる爲めに、感謝の念と祝意を表し度いのである。

曾ては秋聲、花袋兩氏の誕生五十年、英吉利の戲曲家シェクスピアの三百年祭も盛大に擧行さ

れ、近く伊太利の小說家ボッカチオの爲めの藝術祭も行はれるといふ事である。吾々は今泉鏡花先生の全集の出版を機とし、此の國民詩人の壯擧をさかんにし度い。「鏡花全集の記」をつゞる所以である。

鏡花全集は旣に着々進行して居る。泉先生は後から後から出て來る校正に追かけられて、神經衰弱になりさうだとの御話。春陽堂も、主人番頭小僧さんまで、殺到する申込の受附に多忙を極めて居るさうである。濱野さんは新小說臨時號「天才泉鏡花」の編輯を終つて、全集の原稿中只今私の手許に無いもの丶蒐輯に、朝から晚までかけ廻つて居る。

その手許に無い原稿といふのは左の如きもので、若し御所持の方がありましたら、是非とも一時拜借させて頂きたいのです。

(一)窮鳥、明治廿六年八九月頃北海道の新聞に出でたるもの。新聞は北海道每日と聞き、特志家明治生命保險株式會社札幌支店副長石岡致誠氏は、熱心に之を探し求められたれど、同紙二十六年八九月分には掲載無之事明白となり、目下新聞名不明なる爲め當惑し居れり。

(二)黑猫、明治二十八年七月頃金澤市の北國新聞に出づ。

(三)怪語、明治三十年八月雜誌「太陽」第三卷十四號掲載。

（四）監督喇叭、明治三十三年新聲社版「秋風琴」の中にあり。
（五）海浴雜記、明治三十五年九月雜誌「文藻」寅の八に出づ。
（六）書齋の花、明治卅五年十一月頃何かの雜誌に出しもの丶如し。
但し泉先生自身も記憶せられず、或は廣告のみにて本物は無いのかも知れずとの事。
（七）滿洲道成寺、明治三十七年三月錦文堂發行「日露戰誌」第一巻二號に出でたりといふ。これも泉先生の記憶に無し。
（八）隅田の橋姫、明治三十七年十月雜誌「時代思潮」第十一巻九號に出づ。
（九）たそがれの味、明治四十一年三月雜誌「早稻田文學」に出づ。これは私の不注意で紛失しました。
（十）雅號の由來、明治四十一年十一月雜誌「中學世界」第十一巻十五號に出づ。これも私の不注意で紛失しました。
（十一）「お伽花束」の序、明治四十二年九月宇野一氏編むところのお伽ばなしの本の序文です。
これは誰かに貸したまゝ戻つて來なくなりました。
（十二）內輪話、明治四十五年三月雜誌「日本婦人」に出づ。

（十三）若松家挨拶、大正七年五月赤坂の待合若松家の爲めに書かれしもの。これは泉先生から頂いて持つて居りましたが、いくら探しても見當りません。甚だ申譯無く思つて居ります。幸ひに御貸與願へるものならば、下記宛に御知らせ下さい。麹町區下六番町二十九番地阿部章藏。（大正十四年四月二十六日）

——「時事新報」大正十四年四月三十日・五月一日・二日・三日・五日・六日・七日・八日・九日・十日・十二日

いましめ

自分の腑に落ない事は決してするな、筋のとほらない事に負るなと、わたくしは常々自分自身にいひきかせて居る。自分が正しく無いと思ふ事はしりぞけよ、妥協するなといひきかせて居る。

けれども、修業が足りないので、屢々いましめにそむく事がある。そんな場合には、結果は必ず悪い。何故心弱く妥協してしまつたのかと、自分を責る時の心持はひどくよくない。其處で自分の腑に落ない事は決してするな、筋の通らない事に負るなと、更に強く自分をいましめるのである。

ところが、折角自分は肚をきめて、よき道を歩いて行かうとするのに、他人のおせつかいで、とんだ間違つた方角へ引摺られて行つてしまふ事も少くない。そんな場合には、他人にむかつて

も反省を求め、腑に落ない事、筋の通らない事をしてはいけないではないかと、いましめる事にして居る。つい先頃も斯ういふ事があつた。

泉鏡花先生の全集出版を機として、芝山内の紅葉館で鏡花會の催された日の事である。發起人は多勢だが、前以て準備をしたり、當日の受附や會計をうけたまはつたのは、書肆春陽堂を主とし、全集の編輯に最も親しく携はる人々、それにまじつてわたくしである。會場の交渉、案内狀の發送などはわたくしが責任を持つた。文壇の人々、平素泉先生とちかしい方々、雜誌社新聞社などに、一列に案内を出す事にした。

ところが、その中で新聞記者の會費はどうしたらいゝだらうと云ふ問題が起きた。

「勿論貰ふのさ。」

わたくしは、そんな事が問題になるのを意外に感じて、言下に答へた。

然るに此の問題は、それ程簡單にかたづける事の出來ない性質のものだと主張する人がある。全集を出版する書肆としては、全集出版を機會に催される此の會の記事の新聞に出る事を願つて居る。だから、なるべく多勢の新聞記者に來て貰ひ度い。御馳走しても賑かに書いて貰ひ度いのである。その上世間の實際を見るのに、多人數の集る催の時に、新聞記者から會費を徵收する事

は殆ど無いといふのである。

「うつかり會費をとらうとすると、怒鳴つけられますぜ。」

「いや、はりとばされるだらう。」

といふ話で、わたくしは愈々驚いた。わたくしの考へでは、記事を書く材料を取りに來る人、その場の光景を撮影する人などは、勿論會費を頂かなくてもいゝが、宴席に列して御膳に着く人からは、會費を貰ふのがあたりまへだ。あなたは新聞記者だから會費はいりませんといふのは失禮である。そんな事をしてこそ、怒鳴つけられたり、はりとばされたりするであらうと云ふのであつた。

「だつて世間一般にとらないものをとるのはむづかしい事ですよ。第一會費は用意して來なかつたと云つたらどうします。」

「そんな事はないさ。案内狀に、ちやあんと會費金十圓也と書いてあるのだから。」

世間しらずはそれだから困るといふやうな相手の態度に對し、わたくしは自分の腑に落ない、筋の通らない事は承知出來ないと思つたのである。結局わたくしが強情を張通して、誰からも同じやうに、會費を頂く事にきめて、案内狀を投函した。

けれども、新聞記者會費不徴收論者は、なかなかあきらめないで、他の發起人だの世話人の意見も聞いて、自説の方が世間並である事を立證しようとする。

さうまで云はれると、わたくしは自説を正しいとは信じながら、流石に一脈の不安があつた。自分丈の事ならば決して讓歩する事は無いが、萬一自分が強情を張つた爲めに、御目出度い會の感興を殺ぐやうな事があつては申譯か無いと思つた。

森鷗外先生の御話になつたものか、或は先生の御話を誰かゞ書いたのか只今記憶があやしいが、ゆくりなくも想ひ出した話がある。その要點は斯ういふのである。鷗外先生は人の知る如く新聞記者を嫌つた方であるが、いつたい新聞記者といふものはどう取扱へばいいのかと、當時陸軍部内きつての新聞記者操縱の名人と稱された石本新六氏に質問した。すると石本氏の答は、新聞記者といふものはどう取扱つてもいけないと云ふのだつた。

其處でわたくしは大事をとつて、平生尊敬する二三の友達に、一部始終を話して意見を訊いて見た。

「さあ、會費はとるのがほんとうだらうが、とらないのが世間のあたりまへかもしれない。」と云つた人もある。

「とらないのがあたりまへかもしれないが、案内狀に會費十圓也と書いてあるのなら、とつても差支へあるまい。」

と云つた人もある。要之わたくしの如く、當然とる可きだと眞一文字に考へる者は無く、寧ろとらない說を是認する傾向が著しかつた。

「新聞記者から會費を取らうなんて、そりやあいけませんよ。」

と頭からわたくしの愚を笑つた人もある。その人の話によると、凡そ會費とか入場料とかいふものは、新聞記者丈は免除されるものだといふのである。

さういはれると、わたくしにも想ひ出す事があつた。まだ中學の二年生の頃、夏休に旅行して、當時地方の新聞を經營して居た叔父の家に泊つた事がある。恰も京阪合併相撲がかゝつて居るから、それを見せてやるといふ事で叔父は忙しくて出かけられない爲め、若い記者が案内役でつれて行かれた。木戸へかゝると、先方では木戸錢を要求したが、若い記者は新聞社のものだといふ理由で、たゞで入場しようとする。しばらく押問答をして居るのを、わたくしは肩身の狹いおもひをして側で聞いて居た。相撲なんか見たくないと思つたが、たうとう記者の方が勝つて吾々は場内に入つた。わたくしは相撲の打出迄、不見目な心持に苦しんで居た。

「はゝあ、あの木戸御免の手なんだな。」

とわたくしは考へたのである。若しあゝいふ態度で會費を拂はないといふのなら、そんな新聞記者なんか突出してしまへばいゝと思つた。

然るに、更に最もさかんなる實例を擧げて、會費徴收論者のわたくしを笑つた人がある。その人は或る贅澤品を賣る店に關係があつた。店では洋服もこしらへて居るが、一番困るのは新聞記者で、季節の變目には新柄のものをあつらへるが、金は拂はないのを通則とする。女の記者でさへ拂はない。強ゐて請求すれば店の爲めにならないといふので、年貢を納めた氣になつて默つて居るのだといふのである。

「それですもの。會費なんか取らうつたつて取れるもんですか。」

といふのが結論だつた。わたくしは世の中の凄いのに全く驚いてしまつた。澤山の新聞記者の中には、さういふ不心得の者もあるだらうが、あまり珍しい話では無いといふに至つては驚くの外ない。わたくしは一種の公憤と好奇心をもつて、二三の大商店について事の眞僞をたゞしてみた。ところが不幸にして、右の如き事實は往々行はれてゐるといふ事であつた。

それでも、わたくしは會費をとる事を主張した。噂にきくやうな、そんな惡い人間もあるにには

あるだらうが、鏡花會に來る新聞社の人々は、そんな人間では無い。そんな人間の仲間うちに存在する事を、恐らくは知らないか、萬一知つて居るとすれば、なげいて居る人達であらう。さうすれば、そんな惡い人間とひとしなみに扱つては申譯が無い。

「どうしても會費は貰ふ事にきめましたよ。」

わたくしは自分の腑に落ない事はあくまでも拒けなければならないと考へて、三四の人々に念を押した。

扨て當日になつて、受附には書肆の主人や番頭さんが詰て居て、わたくしども世話人はこれを助けて働いて居た。定刻になると、澤山の人がぞくぞく來られた。受附は混雜して居たが、その中で、

「新聞社の人の會費はどうしたらいゝだらうと、未だ心配して居る人があるのですが……」

と或人がわたくしの意見をもう一度訊きに來た。

「この間きめた通り、どなたからも例外無しに頂きますと、はつきり云つといて下さい。」

わたくしは中腹で答へた。此の期に及んでまだそんな心配をしてゐるのか、もう變がへすべき時では無いと思つた。それで、見知越の新聞社の人からは、わたくし自身會費を頂戴したのもあ

つた。
あつちこつち知つて居る顔のところへ挨拶に廻つて居ると、どなたゞか知らないが一隅の壁によりかゝつて居る若い方に、受附の書肆の番頭の一人で何かいひながらひよこひよこ頭をさげてお札を返して居るのを見つけた。わたくしはあわてゝ、先刻新聞社の人の會費はどうする積りかと最後にきゝに來た人のところへ馳つけて、たつた今目撃した景色を話した。
「えゝ矢張貰は無い方がいゝと云つて會費は不要だと斷つてゐますし、既に貰つてしまつた人には一々返して居るやうです。」
と共の人は困つた樣子で答へた。
「まづい事をして呉れたなあ。」
とわたくしは舌うちした。いつたいみんなで相談してきめた事を、今になつて勝手に變更してしまひ、あまつさへ既に拂つた人に返すといふのは益々面白くない。氣を惡くした人かありはしないだらうかと心に懸つた。しかし今更爭つても爲方が無いので、不愉快を忍んで沈默した。會は目出度終つた。
果して、わたくしが心配したやうに受附の處置に憤慨した人がある。佐佐木茂索氏だ。新小説

臨時増刊「天才泉鏡花」に寄せた同氏の文章の中に斯う書いてある。

氣になつたといへば、當夜受附子が私の顏を見ると、「佐佐木さんの會費はよろしいので。」といきなり云つたのは氣になつた。何故私は會費がいらないのか。私が新聞社に籍を置いてゐるからなのだなと、私はすぐ氣がついたので、よつぽど怒りつけやうかと思つたがお祝ひの席なので、ぢつと我慢した。私は再三度押問答して、やつと會費を拂つて無理に受とつてもらつて席に通つた。會費をまけてやればどうだといふのか、私が舞文曲筆すると思つたのか、それとも其處までゞなく唯世間並の御挨拶のつもりだつたのか、御挨拶なら御挨拶らしくするがいい。

これを讀んだ時、わたくしは受附子一味に對し、「どうだい、わかつたか。」ときめつけてやつたやうな痛快な心持を感じた。同時に又、世話人の一人として事に携つた自分にも責任があるから、佐佐木氏に對し甚だ申譯無く思つた。

恐らく佐佐木氏ばかりではあるまい。佐佐木氏は喧嘩早いので、ただちに此の一文を叩きつけたのであるが、何にも云はないで不愉快に思つて居る人も澤山あるであらう。あらためて御詫び致します。

わたくしは二三の人に此の話をして、だから最初わたくしが主張した通り、すべての人から會費をとれば、こんな間違ひは無かつたのだと云つた。ところが驚いた事には、下のやうな說をなしてわたくしを駁した人がある。

君はそんな事をいふけれど、會費はいらないと云つた爲めに怒つたのは佐佐木氏のやうな特殊の人ばかりかもしれない。萬一會費をとると云つたらもつと怒鳴る人がゐなかつたといひ切る事が出來るか。

わたくしは當日集つた方々の顏觸を知つて居るので、そんなべらぼうな人間は斷じてゐなかつたといひ切る事が出來たが、よしんば怒る人があつたとしても、あの場合會費を拂ふのがいやだといひはるなら、その人間の方が間違つて居る。吾々はこれに對抗して充分勝味がある。それなのに、當日の受附子の處置に對する佐佐木氏の一文を見ると、味方のまけいくさなる事は爭ふ餘地が無い。わたくしが甘んじて御詫びする所以である。

これはたゞ手近の一例に過ぎないのであるが、わたくしが心のいましめとする「自分の腑に落ない事は決してするな」「筋の通らない事に負るな」「正しくないと思ふ事は拒けよ」といふ事も自分自身の弱い心から守り兼る（かね）ばかりで無く、他人によつても破られる事右の如くである。いかに

志を行ふ事が難いかを思ひ、わたくしは更に自分を鞭うつて、我がいましめを堅く守らうと思ふ。

（大正十四年七月十日）

――「不同調」大正十四年八月號

噂の迷惑

凡そ天下の報道機關で、最も強力なものは新聞紙である。その報道が正確であると否とを問はず、いつたん記事となつて現はれたが最後、津々浦々迄行渡つてしまふ。しかも其の記事には出鱈目や間違かふんだんにあるのだから堪らない。殊に出鱈目の記事に限つて、舞文曲筆をほしいまゝにして居るから、無責任に讀めば面白い。面白いから印象は長く殘つて、ちつとやそつとの取消では到底對抗出來ないのである。又新聞紙は、根も葉も無い事に花を咲かせる爲めには如何なる努力も惜まないが、出鱈目の記事を取消す事には極端にやぶさかである。

わたくしは先年都下の諸新聞に、廢嫡される息子として、寫眞入で二段三段にわたる記事の主人公とされた事がある。わたくしはやつきになつて其の出鱈目を難じ「新聞記者を憎むの記」を草して孤軍奮鬪したが、いつたん傳へられたる挑撥的の記事の興味は人の心をしらないで、わたく

しの努力は何等の甲斐が無かつた。

數年前、三菱の原に起つたお艶ころし——新聞紙はお艶ごろしといふ——といふ事件があつた。その時報知新聞は、大きな活字を使つて、その犯人の兄がわたくしの勤務してゐる會社の重役であるといふ事を、小標題に迄組入れて報じた。全く嘘の事であるし、又會社のおとくいは二十餘萬人もあつて、地方の人などはこんな記事を見ても不安を感じる實狀であるから、わたくしは重役の命を受けて新聞社に取消の申込に行つた。編輯長とか社會部長といふ職に在る人は、始終出社してゐるものと思つてゐたが、留守だと云ふ事で面會出來無い。わたくしは取次の人に來意を告げて歸り、翌日又出かけた。眞夏の炎天だつたが、かくする事五日に及んでやうやく責任ある地位の人にあふ事が出來た。わたくしは、お艶ころしの記事に引合に出された會社の迷惑と、その事實ならざる事を話して、こちらの迷惑を察しる事が出來るなら、特に有效なる記事として取消て貰ひ度いと申入れた。先方では、記事の出所が確かだといふ一事で暫時の間承知しなかつたが、わたくしは豫め會社の名簿などを用意して行つて、記事中に掲げられた人間か重役にも使用人にも無い事を立證したので、やうやく取消す事丈は承諾させた。しかし、例の版で押したやうな活字のちひさい、人目に立たない場所を特に擇んで出すやつでは何の役にも立たないから、是

非とも記事にしてくれと云つて、これも最後にうんと云はせ、且わたくしは新聞社宛の手紙の形式で、事實無根の事を記したものを掲げて貰ふ事にして安心した。使命を果した得意を感じて歸社したが、二三日たつて紙面にあらはれたものは、三文版に等しい例の取消文以外の何ものでも無かつた。

これは一例に過ぎないが、わたくしの見聞した實例はまだ澤山ある。玆にはそれを記さないけれども、出鱈目の記事によつて人の名譽を傷つけ、多大の迷惑を及ぼす事の餘りに狂暴なのに憤慨して、わたくしは機會ある每に新聞紙の反省を求め、その改善を促し、又わたくしの說に對して世人一般の贊成を求めて來た。

わたくしは新聞紙の出鱈目記事が、すべて惡意に出るものとは思は無い。その大部分は速報主義に起因するものと認めてゐる。今日の如く競爭の激しい時代に、速報主義は止むを得ないとも考へるが、それだからと云つて人の名譽を傷つけたり、人に多大の迷惑を及ぼしても構はないといふ議論は成立たなく、記事の發表にあたつて、調査を精密にする事が出來れば何よりだが、それが出來ないとすれば有效なる取消をする丈の誠意を要求し度い。一枚を折る者は一指を斬るべしといふ主義で、二段費したら出鱈目記事の取消には二段提供させ、三段ならば三段提供させる

のは酷かもしれないが、兎に角當初の記事が人目を引いたのと同程度に有力なる取消文を掲げて謝罪するのは當然であらう。

最近わたくしが意を強くしたのは、慶應義塾教授小泉信三氏が雜誌「財政經濟時報」に前後二回「新聞紙と個人の名譽」と題する正論を掲げた事である。玆には其の所説を紹介する手數を省いて、同誌大正十一年九月十五日號及大正十四年七月十五日號を御一讀あらん事を希望する。

「財政經濟時報」は眞面目一方の地味な雜誌である。傳へ聞くところによると、同誌は近く新聞記事指摘欄なるものを設け、月々の新聞記事中よきものと惡きものとを特記し、前者を賞揚し後者を糺さうとする、有意義の計畫を發表實行するさうである。多くの爲政者が頭を惱めてゐる人心の輕佻浮薄狂暴無節制を匡正するには、新聞紙の記事論欄の改善をするのが第一だと考へてゐるわたくしは、此の雜誌の計畫に贊成すると共に、既に新聞紙の專制横暴を許し難しとする氣風の、擡頭しつゝある事を新聞經營者に知らしめ度い。然らざれば、毒筆を以て鳴る東都の一大新聞が、暴力團に脅迫されて金圓を差出したやうな恥しい事件が頻出しないとも限らないのである。

新聞記事の出鱈目によつて迷惑をかうむる事の如何に多いかは、既に屢々論じたから、此處ではこれ限りにして置くが、近頃甚だ面白くないのは、文藝雜誌其他に流行する所謂ゴシツプの迷

惑である。文藝春秋子の餘興物と稱するものである。

餘興物も、氣の利いた、誰が讀んでも毒にもならないやうなものならいゝが、當今流行のものは卑陋下劣なものが多く、中には全く惡意を以て人を嘲笑したり、傷つけんとするものも見受ける。文士見立てなども微笑させる程度のものはいゝが、當の本人を不愉快にするやうなものは差控へる事にし度い。況や人の羞恥部を云々し、大きいとかちひさいとかからかつたり、新婚の人を捉へて赤面せざるを得ないやうなうがちをしつゝこく浴びせかけたりするのは、お互に愼み度い。いかに人間にはゴシツプ本能があればとて、他人のいやがる種類のゴシツプを、しかも印刷に附して天が下の座興に供する事は許し難い。

何もそんな事に居丈高になつて怒る野暮も無いぢやあないかと云ふ人もあるだらうが、わたくしは餘興物全廢を叫ぶのでは無い。無責任に人をいやがらせる餘興物をやめようといふのである。

いつたいに我國民はゴシツプ好きた。他人の事になると、ある事無い事つきまぜて、誹謗したり嘲笑したりお笑草にしたりする。倶樂部でも、井戸端でも、涼臺でも、話材の大半がそれらしい。又ゴシツプ好きのそれが、特性なのか、他人の身の上に關する噂話たと、どんな事でも眞實だと思ひ易い。その爲めに、かりそめの冗談か、噂の主にとつてはひどい迷惑になる事が多い。

他人に迷惑をかけていゝといふ事を肯定しない限りは、われらと共に下らないゴシツプは愼む可きである。

文學雜誌にあらはれる餘興物で、文人の身上に關するお笑草は、中央文壇の內輪に馴染のある人には左程毒にもならないが、所謂文學靑年や文學少女、或は全く方面違ひの人々には、どこ迄がほんとで何處迄が冗談だか區別がつかないから、意外な思ひ違ひを殘したり、或は實物とは全然違ふ一人格をこしらへあげるやうな事になる。他人の事を引くのは失禮に當るから、例によつてわたくしの身の上にかゝはる事に限つて、實例を擧げて見る。

何に出たのか記憶してゐないが、水上瀧太郞は會社の重役たといふのがあつた。これは善意の間違だから爲方が無いが、その後わたくしを會社に訪問する人の多くが、重役の水上さんに面會し度いといふやうになつたのには閉口して居る。わたくしも學校を卒業して旣に十數年たち、今勤めてゐる會社に雇はれてからでも足かけ十年になるのだから、うでのきく人間なら夙に重役になつてゐるかもしれない。昔の學校友達などで、此の噂話を信じ切つて、ひどく羨望してゐるのがあるのには愈々閉口する。物貰ひに來る人間なども、その積(つもり)でやつて來るのである。

ところが、こんな間違つた噂が因をなすのか、わたくしを大金持だと思つてゐる人間がある。

大正十三年十一月の「文藝春秋」に出た「文壇諸家價値調査表」といふ有害無益な餘興物によると、わたくしは左の如く評價されて居る。

學殖	六十八點
天分	七十二點
修養	七十六點
度胸	六十七點
風采	八十點
人氣	三十九點
資産	百萬圓
腕力	八十二點
性慾	八十六點
未來	六十點

誰のいたづらか知らないが御覽の如く愚劣なものである。人の性慾なんぞに出鱈目な評點をつけるのなども、近頃の雜誌の惡傾向で、殊にさういふ事をいやがる女の人達をつかまへて、同じ

憂目を見せてゐるのなんか、愈々面白くない。すつきりした騎士があらはれて、いたづら者を懲らしめてくれゝばいゝ。

　こんな價値表なぞは、其の場かぎりの御笑草で、抗議を申込むのは大人氣(おとなげ)ないと考へる人が多いだらうが、さうでは無い。かういふかりそめのいたづらが、人に迷惑を及ぼしてゐる。わたくしの知つてゐる文壇以外の人の如きは、性慾だとか度胸だとかいふものは一笑に附しても、學殖天分修養未來といふやうな評點は、動かすべからざるものだと思ひ込み易い。わたくしの例をあげたのでは、やうやく及第點に達した位極めて平凡なものに過ぎないが、他の人々の中には、未來零などゝいふ苛烈なものもある。それを、ひとかど權威ある批評の如くに思ふ人間が多いのだから氣の毒といふの外はない。

　わたくしの資產百萬圓の如きも、ほんとにして羨(うらや)しがつたり、驚いたりした人間が澤山ある。最もをかしいのは、わたくしの會社などに勤めてゐるやうな人は、文壇の事などはまるつきり知らないので、その方面の噂ならなんでも信じる傾向がある。或雜誌に文士原稿收入調とかいふものが出て、わたくしのが月額四百圓と書いてあつたのなども、ほんとの事にして羨しがつた。わたくしは主として三田文學といふ殆ど原稿料の無い雜誌にばかり書いてゐたので、四百圓といふ

金高は、或時には一年分の稿料よりも多いのである。

それと同じく、資産百萬圓も、信じる人が多かつた。わたくしは相當樂た暮らしの家に育つた爲めか、放膽なる母方の血を多分に持つてゐる爲めか、私經濟のやりくりは極端に下手で、あればある丈つかつてしまふ。そのむくいで親の家を出てから數年間、年中月末の心配をしてゐる位だ。さういふ內情だらうとうすうすは知つてゐた連中迄、ひとたび百萬圓の資產があると價値表に掲載されると、不思議な事にはそれを疑は無い。それ程噂は信じられ易いのである。

何と思はれたつて構は無いぢやあないかといふ人があるだらうが、此の百萬圓の資產家にされて以來、わたくしは寄附金の勸誘と、高等物貰ひに攻寄せられて困つて居る。わたくしは何事によらず、他人に強ひられて動く事が大嫌ひだ。親しい友達の爲めなら、借金しても援助し度いと思ふが、見ず知らずの人間だと、その用途に贊成するか、又は先方の境遇に同情するか、話をきけばあとはこつちから進んで差出し度いと思はれる節が無ければ御免かうむり度い。ところが近頃の物貰ひの多くは、強請がましいのか、或は最初から露骨に脅迫して來るので、わたくしとしては堪らない。餘裕の無い懷なのだと事情を話しても、あなたなんぞに出して貰はなくては貰ひ所が無いとか、中にははつきりと、あなたは百萬圓の資產があるさうぢやありませんかと云つた

ものもあつた。いやになるのは、それが一人や二人では無いのだから「文藝春秋」が賣れる賣れると編輯後記で喜んでゐるのも正に實證である。社會主義者もあばれ、國家主義者もあばれ、無政府主義者もあばれ、忠君愛國主義者もあばれる世の中だから、出金を斷るのにも危險が伴ふ事は、誰しも御承知の事であらう。わたくしの迷惑を察して下さい。

かういふいろいろなゴシツプが、後から後から出て來る。わたくしは自分で讀んだわけで無いから少々不安心だけれど、信頼すべき人の話によると、小島某氏著「文壇出世物語」といふ本に、水上瀧太郎はひどく神經過敏で、或時汽車に乘つて旅行する途中、同車の人間が煙草の吸殼を捨てたり、烟がたてこめたりするので、すつかりぴりぴりしたあげく、氣が遠くなつてしまつた云々といふ逸話が出てゐるさうである。それがほんとなら意外な事である。小島氏にはあつた事も無いから、いづれは出處あやしき出鱈目の噂に違ひ無いが、あまりといへば馬鹿々々しい。

かういふ數々のゴシツプを寄集めて、人々は、眞實の水上瀧太郎以外に、もつと色彩の強い水上瀧太郎といふ人間をつくりあげてゐるであらう。おやぢと喧嘩して廢嫡され、會社勤をして重役となり、資產百萬圓を貯へ、文人としての天分は七十二點、人氣は三十九點、未來は六十點、病的に神經質で、愛犬の名はブランデイとベルモツト――以下略。

右の犬の名は先頃H日新聞の社會欄の噂話に出てゐたもので、御愛嬌につけ加へた。わたくしの可愛がつてゐた犬は、夙に死んでしまつたが、ウイスキイとジンといふのであつた。

ゴシツプ又は餘興物の爲めに、いやなおもひをさせられたり、迷惑をかうむつた人は随分あるであらうし、又かういふ悪洒落か流行する爲めに、眞面目に勉強する心持の失はれる傾もあると思ふ。わたくしは菊池寛氏や中村武羅夫氏などに御目にかゝる機會が無いから、「文藝春秋」や「不同調」の編輯者として、どういふ意見を持つて居られるかうかゞふ機會が無いが、身に降りかゝる迷惑には、人一倍敏感で、且眞正面から抗議を申込みさうな兩氏の平素の言説にてらし、わたくしの申狀を尤もと思はれるであらうと思ふ。特に兩氏の名前を拜借する所以は、上記の二雜誌が共にゴシツプを以て宣傳されるのを、常々遺憾に思つてゐるからで、人のいやがる御笑草や、漫罵に等しい餘興物を、率先して除去する編輯振を示されたならば、文壇を益する事至大であらうと思ふ。(大正十四年八月九日)

——「文藝春秋」大正十四年九月號

取消

大正十四年九月の「文藝春秋」に「噂の迷惑」と題する一文を寄せ、新聞雜誌の出鱈目記事、殊に近頃の文學雜誌の餘興物ゴシツプ種が人々にいやなおもひをさせ、迷惑をかける不都合を難じたところ、諸方から同感だといふ言葉を聞かされて、わたくしは大變滿足しました。

ところが十月の同じ雜誌に出た、小島德彌氏の「ゴシツプの辯」を讀むと、曩にわたくしが「噂の迷惑」中に其の一例として擧げた「文壇出世物語」といふ本を小島氏の著書の如く記したのは全然間違ひで、そんな本を書いた覺えはさらになく、苦笑を禁じ得ない、腹が收まらないとあるので、わたくしは甚だ申譯無く思ひました。噂の迷惑を力說するわたくしが、不詮索の爲めに人に噂の迷惑をかけたのは、心苦い次第です。顧て恥入りました。近頃のこれが文壇流行調かと思はれる卷舌で小島氏の述べられた、

出處のあやしき、下らない噂を信頼し、ありもせぬことを輕はずみに吹聽して、ひとり悦に入つてゐるなんてことは、實に馬鹿々々しいことである。生意氣なゴシツプメーカーよ、いゝ加減にくたばつてしまへ。

とある。「生意氣なゴシツプメーカー」といふのはわたくしの事であらうと思ふが、くたばるわけにも行かないので、先づ「文藝春秋」編輯者に依賴し、此の取消を載せて貰ふ事にしました。

「噂の迷惑」の中に書いた通り、わたくしは「文壇出世物語」といふ本を見た事はありません。他人から聞いた話で、其の本には下らない噂話が澤山集めてあつて、何が出世物語なのかわけがわからないと云ふ事でした。その著者を小島氏だと思ひ込んだのは、わたくしの間違ひに違ひありません。あの原稿を書く時に、自分で見た事も無い本の事を例に引くのは、輕はずみのわたくしでも氣になりました。どうかして其の本を手に入れ度いと思つて、十數軒の書店できいて見ましたが、賣切れてゐてありませんでした。然し、それは小島氏の著書で、大正十二年秋の震災後に出たものたから、出版書肆を調べて取寄せて見れると云つた本屋も二三軒ありました。又、平生つきあつて居る友達の中にも、確かに小島氏の著書だと云ふ人も一人二人で無いので、まさか間違はあるまいと思ひ込みました。それでも一度讀んで置き度いと思つて、人に賴んで一本を購ふ

事になつて居たのですが、原稿〆切が切迫したので、遂に閲覧の機を失しました。尤も友達の中に、著者は小島氏に違ひないが書名は「文壇出世物語」では無く、「文壇出世譚」か「文壇百話」かもしれないと注意してくれた人もあつたので、雜誌社へ送る原稿に貼紙をして、よろしく訂正して頂き度いと編輯者へ依賴しました。それで漸く安心したのでしたが、意外にも全然間違ひだつたといふので、わたくしは狐につまゝれた樣な氣がしました。どうしてあれ程多くの人が、「文壇出世物語」或はそれに類似の名前の本を、小島氏の著書だと思ひ込んでゐたのか不思議で堪りません。

斯ういふ言分(いひわけ)めいた事を書くのは未練らしくていけませんが、輕はずみは輕はずみでも、ゴシツプメーカーと呼ばれる事は些か承認致し兼(かね)るので、相當手を盡した上で尙ほ且つ間違を演じたといふ事の筋道を明かにして置き度いのです。

「ゴシツプの辯」を讀んで、わたくしの間違が小島氏に迷惑をかけたのは申譯が無いと思ひ、直に同氏へ宛てゝ御詫の手紙を差出ました。同時に、あまり不思議に思はれるので、一切の事を明かにして「文藝春秋」誌上で取消し度いから、若しわたくしが「文壇出世物語」だと思つた本に類似の著書があるならば、其の書名と發行所を敎へて頂き度いと申入ましたが、未だ御返事に接する

事が出來ません。然し、わたくしの間違は疑も無く、又小島氏に迷惑をかけた事は明白なので、取消は迅速にしなければ效果がないと思ひ、「文藝春秋」編輯者に依賴して、「噂の迷惑」の一節、小島氏の著書にと思ひ込んで書いた箇所は、全くわたくしの輕はずみが生んだ間違である事を記してあやまります。

たゞ、いまだに不思議に思はれるのは、「ゴシップの辯」を讀みながら、矢張り小島氏の著書に、あゝいふものがある筈だがと首をひねる人が多い事です。わたくしのところへ手紙を寄越した無名の讀者の說によると、小島氏の著書に「文壇百話」といふものがあつて、內容は文壇の噂話である、又「文壇出世物語」といふのは「文壇百話」を出したのと同じ本屋から出たもので、著者の名は明記して無い、しかしこれも小島德彌氏の著作だといふ噂で、曾て或る雜誌には其事を確說してゐた云々とあります。これも勿論間違で、ゴシップメーカーのひろめた出鱈目を、無名氏は其のまゝ信じて居られるのであらうと思ひます。けれども、斯う迄人々が小島氏にゴシップ集の著作があるやうに思ひ込んで居るのを見ると、かりそめの間違が何處迄も廣く深く行互るものか恐ろしく思はれます。事柄が事柄だから、これは氣の廣い人なら笑つて濟まされるでせうが、同樣の不祥事が、どのやうな重大事と結びついて起らないとも限りますまい。震災の時の鮮人騷動の噂

を思ひ出しました。わたくしは自分の不詮索から人さまに迷惑をかけた事を御詫すると同時に、「噂の迷惑」を更に力說し度いと思ひます。

乍末小島氏に諒解を求め度いのは、わたくしは間違つた事を書いた爲めにひどく申譯無く思つて居るので、決してゴシツプメーカーではありません。ゴシツプメーカーに對しては、あなたが云はれる通り、「烈火の如き怒氣」を覺えるものです。何とかして低劣なるゴシツプの流行に終を告げさせ、文壇の調子を高くし度いと微力ながら念じるものです。「噂の迷惑」を書き、今又「取消」を認めるのも、同じ精神に出るものと認めて頂き度いのです。

ついでに書くのはどうかと考へましたが、多少關係もある事と思ひ、もうひとつ「噂の迷惑」に對する抗議について記します。

「中央新聞」紙上で、松崎天民氏が「噂の迷惑」に對して數十行を費してわたくしの申狀に言及して居ました。要は、新聞記事の間違を咎るが、忙しい編輯室を一度のぞいて見ろ、間違位爲方がないぢやあないかと云ふのでした。

これは「噂の迷惑」を熟讀しなかつた間違で、わたくしは速報主義の新聞の間違は爲方が無いが、それが爲めに人に迷惑をかけた時は有効に之を取消す丈の誠意が欲しいと云ふのです。忙しいから

爲方が無いと云ふ心持でゐられては困るのです。斯ういふ事は、松崎氏が書いて居るやうに、わたくしの身上に關した記事が出たから愚圖々々いふのでは無く、廣い世の中に、ひどく迷惑をかうむつた幾多の人のあるのを遺憾に思つて主張するのです。何處かの新聞で――わたくしは現在愛讀してゐる都新聞に最も多くの期待をかけてゐますが――率先して有効なる「取消欄」を設けたならば、吾々はもつと安心して新聞を讀む事が出來るだらうと常々思つてゐます。わたくしの眞意を御諒解願ひ度い。（大正十四年十月八日）

――「文藝春秋」大正十四年十一月號

小說家小島政二郎氏

小島政二郎氏の處女作集「含羞」(がんしう―東光閣版)が市に出て間も無く、わたくしは「含羞の作者」と題する一文を公にして、集中の作品と併せて作者其人を批評した。詳しくは拙著「第三貝殼追放」(東光閣版)について知つて頂き度いが、玆に之を約言すれば、第一にわたくしは小島氏の初期の作品は全然作者の批判をさしはさまないで對象を描かんとする寫生文脈から出で、之を小說的手法としては「內容なんか何でも構はない。よく描けて居ればいゝ」といふ信條に賴つて、作者の心を少しも動かす事なき觀察の記述に安住の地を見出して居たが、其の描寫は氣の毒ながら色彩に乏しく、力は弱く、新味を缺き、一面的で、韻律が無く、熱が無く、血が無く、情が無く、一言にして盡せば氣稟が無いと論斷した。しかしさういふ作者の精神的に浮ばれない時代はかなり長かつたが、努力苦心のあげくに、次第に光明を見出して、正統寫實主義に信仰を求め、

俄かに觀る眼は廣くなり、心に觸るゝ人生の味は深くなり、描けばいゝのだ主義から脫離して、藝術はおのれに在りといふ確信に迄進んで行き、此の確信の下に傑作「一枚看板」を完成した。わたくしは其のおろそかならぬ進步を認めて「此の力を失はない限り、永く迷路に難澁し、修業の苦勞に惱んだ小島氏も、やがて動かす可らざる自己の藝術境に押も押されもしない自信を持ち得る日が來るであらう」といふ期待をもつて批評を結んだのであつた。

それは大正十二年の事であるが、わたくしの此の批評は極めて正しいものである事を最近殊に痛感して、評者としての喜悅を禁ずる事が出來ない。わたくしが期待した通り、此の作者は不斷の勉強を積んで、今や正に大物にならんとして居る。

しかし、正直にいふと、わたくしが想像して居た作風には進まないで、更に別の方面に道を開いて行つた。なぞつて云へば、わたくしは小島氏は「一枚看板」の如き客觀的描寫を後生大事に守つて進むだらうと思つて居たのだが、實は此の大作の完成に安んじないばかりで無く、寧ろいさぎよく今迄の手法を振捨て、曾ては些かも持合せてはゐないかのやうに見えた主觀的要素を作中に盛る事を企てたのである。幾多の非難はあるが、「生理的腫物」は此の作者の意圖を明白に現はして居る。「新居」「奧さんと妻の公約數」の如き、何れも同一傾向のものである。作者の根本思想

に於ては、リアリズムは動かし難い根を張つて居るが、今は冷々たる寫生派の態度はまるつきり影を消した。事毎に深き反省と批判を示し、身を以て人生の只中にぶつからうとして居るのである。ヴアルガリズムに迄も踏込んで行つた。客觀と主觀の融合が熱情をもつて希望されて居るらしい。

多くの批評家、殊に文學の作品に新聞記事的概念を求むる批評家の言によれば、リアリズムの作風は行詰つたと云はれて居るが、わたくしはさうは思はない。未だ行詰る迄行つてゐないと思ふ。殊に我國に於て然りといひ度い。其の意味で、小島氏の努力には多大の期待と滿足を覺えるのである。

「含羞の作者」の中で、わたくしは小島氏を弱蟲だと云ふ意味の言葉を云つて居るが、此の弱蟲は果して眞の弱蟲であるかどうか、今日になつて見ると疑はしい。日常瑣末の人事關係に於ては、小島氏は今もなほ弱蟲かもしれないが、其の底には動かし難き強さ、ぽつきりと折れず、しなしなしながらもちこたへる強さを藏して居るらしい。長い間文壇にもてはやされないで、それを人一倍苦に病みながら、年中勉強に勉強を重ね、今日のあの人迄築き上げた力は決して弱蟲のしわざではない。曾て強氣弱氣といふ言葉がはやり、弱氣の大將のやうに人もいひ已も云つた人が、

わたくしどもから見るとづうづうしい迄強氣に見えたが、小島氏も自ら許す弱蟲ながら、之亦人と己をあざむくものでは無いだらうか。わたくしは曾て此の作者を弱蟲だと云つた自分の不明をさらけ出す日の來た事を喜ぶものである。

小島氏は、未だ完成された作家ではない、しかし、今日までの制作第一主義を信仰とする勉強を持續すれば、その將來は大したものにちがひ無い。現在わたくしの尊敬する作家の一人である。

——「新潮」大正十五年五月號

（大正十五年二月二日）

「三田文學」の復活

先頃慶應義塾の學生の發行して居る「三田新聞」に、近時塾内の士氣甚敷く衰へたりといふ噂しきりなるが事實果して如何といふやうな意味の質問と共に、之に對する教授や先輩の回答の載つて居るのを見た。その中で私が面白く思つたのは教授連の回答で、何を以て士氣衰へたりと云ふか指摘して見ろとか、早慶野球試合に負けたのを以て士氣衰へたりとするのかと云つた風の詰問を以て返事に代へたのもあり、概して士氣衰へたりとは思はないと云ふ意を示したものが多かつた。恐らくは教職にある身として、自分の學校の不景氣な噂をこゝろよしとしない爲め、語氣を強くして打消さうとしたのであらうが、何となくあわてゝ事實を揉消さうとする形の覆ひ難きものがあつた。それは私の僻目かもしれない。何故ならば、私は多くの學生と共に塾内の士氣衰へたりと嘆じてゐる一人だからである。

何を以て士氣衰へたりといふか、指摘して見ろと云ふ反問に對して、彼是と例を擧げる事は難かしい。それは同塾の圖書館や大ホールの破損の如く形にあらはれた事では無いからである。しかし、多數の學生、否それよりも更に多數の義塾出身者が一齊に士氣衰へたりとの感を深くいだくに至つた事實が、既に士氣の衰へを語るものではないだらうか。士氣衰へたりとの直感から、不安に堪へず、上記の如き質問を學生がするに至つたのだと考へても間違へはないと思ふ。私は三田新聞が質問を發するよりも遙に前から、慶應義塾は早くも頽廢期に入つたのでは無いかといふ不安をいだき、多くの先輩友人に所感を述べ、又その人々の意見を聽いて、等しく憂ふる人の甚だ多い事を知つて居た。私と感を同じくする者は、塾員と稱さるゝ卒業生ばかりで無く、現在義塾の教職員中には殊に多い。失禮を顧みず敢て推測するならば、三田新聞の質問に對して、語氣鋭く反問した人も、實は同感では無いだらうかとさへ思はれるのである。

斯う書續けて來ると慶應義塾改革論のやうに思はれるかもしれないが、それも腹案にあるにはあるが發表は他日の事として、茲に私が述べんとするのは表題の示す通り「三田文學」に關する事である。

明治四十三年五月に創刊號を出した「三田文學」は大正十四年二月迄續いたが、どうしたのか突

然休刊して今日に及んで居る。

「三田文學」がどういふきつかけで生れたのか、私は之を審かにしない。當時の記録としては同雜誌初號に、主幹永井荷風先生が「三田文學の發刊」と題して書かれた文章以外には何も無いのでは無いだらうか。玆にその數節を拜借すれば、

　春の日光を一面に受けた書齋の障子を閉切つて、机にもたれて、烟草を吞んで、その青い烟が座敷の中に渦巻くさまを眺めてゐた——單調なる、平和なる、倦怠し易い、然し忘れられぬ程味ひのある我が夢想の生活の午後に、自分は突然黑い洋服を着て濃い髯のある嚴しい顔立の紳士の訪問を受けた。

　この紳士は平素自分の書齋へ遊びに來る連中とは全く階級の違つた人である。臣民の義務として所得税をも收める人だ、手紙を出せば必ず幾時間の中に返事を寄越す人だ、往來を眞直に歩く人だ、ぼんやり風の音を聞いたり、雨の降るのを眺めるやうな暇のある人ではない。だから自分は燒焦しのある羽織を着換へて、いつも横坐りしてゐる坐住居をさへ直して挨拶した。

其の次の日から自分の生活に多少の變化が生じた。

その頃自分は銀座の裏通りに立つて居る英吉利風の倶樂部で幾度か現代の紳士と晩餐を共にした。マロツク皮の大きな椅子に腰をかけ石炭の焰が低い響を立てる暖爐を前にして大勢の人と葉卷を喫しながら話をした。

文藝雜誌「三田文學」は斯う云ふ時間の進行の間に兎に角世に出る事になつたのである。如何なる動機、如何なる必要、如何なる目的から三田文學が發刊さるゝに至つたかは自分の知る處でない。

これによつて見ると、當時佛蘭西から歸朝されて間も無く「あめりか物語」「ふらんす物語」「歡樂」とつゞけさまに、豐麗なる文章に鋭い批評と優婉なる詩を巧妙に織まぜた創作を發表して、久しく自然派の天下だつた文壇の單調を破り、明治大正にかけてこれ程はなばなしい姿を文學史上にとゞめた人はないと思はれた永井先生の書齋へ訪れたいかめしい顏つきの紳士は御使者の役

目で、その背後には英吉利風の倶樂部で葉卷をふかす人々の在つた事は明白である。はつきりいへば、「三田文學」は塾の出身者や學生中に書かんとする志をいだくものが多くなつて、その要求によつて、生れたのでは無く、恐らくは實業家として名を成した先輩で且義塾の評議員たる人々の思ひつきによつて生れたものに違ひ無い。

「三田文學」の生れた時私は理財科の生徒だつたが、當時文科の學生の數は極めて少なく、一級二三名乃至五六名に過ぎなかつた。傳ふる處によると、何時迄たつても振はない文科の廢止を唱へた人さへあつたといふ。さういふ微々たる有様にあきたらず、人を育てるには先づ氣勢を擧げなければならない、既に帝國大學に「帝國文學」あり、早稻田大學に「早稻田文學」あつて、慶應義塾に「三田文學」なきはみつともない、こつちもさかんにやる可しといふ意氣で立案されたものであらう。けれども、內輪には純文學雜誌を主宰する適材は一人も居ないので、往年三田山上で美學の講座を引受けた事のある森鷗外先生にはかり、永井荷風先生の出馬を煩はしたのに違ひ無い。永井先生の出現は、新たなる星を發見したやうな喜びであつた。その喜びを傳へるものには、久保田万太郎氏の「半生」（平和出版社版　駒形より）と、拙文「永井荷風先生招待會」（東光閣版　第三貝殼追放）がある。物好きの方は御讀み下さい。

「三田文學」は永井先生たゞ一人の力で成長したと云ひ切つてもいゝ。掲載した小說が風俗壞亂と認められ、發賣頒布を禁じられたといつては學校の體面にかゝはると怒り、裏表紙に裸女の彫刻の寫眞を掲げたのは怪しからんと憤慨する熱情家はあつても、進んで先生の仕事を助ける人は無かつた。年少血氣にはやる私は「夢がたり評議員會」といふ對話を書いて「三田文學」に寄せたが、時の塾監局の權威者は、評議員諸氏の憤りを招く事を怖れて掲載を許さなかつた。私は之を「スバル」に載せて貰つたといふやうな挿話もあつたのである。

遮莫(さもあらばあれ)「三田文學」には次第に若い學生の作品が出るやうになつた。文科を出たばかりの澤木梢、小林乳木、井川滋諸氏を始めとし、小說戲曲の作家として大にあらはれたものには久保田万太郎氏がある。新感覺と上品なるをかしみと淡い哀愁を兼備へた松本泰氏の短篇も愛す可きものであつた。後年小說家として名を成した佐藤春夫氏の鋭い詩風も目ぼしいものであつた。斯く僅の間に幾人かの作家を內部から出したのは偏に永井先生の力である。何故ならば、當時十數人しか數へる事の出來なかつた文科の學生の數はめき／＼殖え、其の多くは永井先生と「三田文學」にひきつけられて來たのであつた。現に當今賣出の小說家小島政二郞氏の如きも、永井先生在るが爲めに入學し、恰も其の年先生は退職の不幸に遭遇して、何の爲めに慶應義塾なんかに入つたのだら

うと心底から悔んださうである。

永井先生の功績をくだ〳〵しく述べる事は差控へる。先生は大正五年の春突然慶應義塾の教職を辭され、同時に「三田文學」の主幹もおやめになつた。あれ程迄に學生に慕はれた先生が辭任されたのには何か特別のわけがあるか、如何か、私は知らない。先生は其の創作に於ては好んで放蕩無頼の人間を描き、又花街の婦女の姿を浮彫の如く描寫する事を得意とせられ、學校當局者の中には兎角の事をいふ者もあつたらしいが、教室に於ては當時の怠け者の學生に對して嚴格に學業を授けられた。又先生の學問を尊重せらるゝ事極めて厚きを見ては、吾々後輩も讀書思索のゆるがせに出來ない事を痛感した。

先生の在職の期間は餘り長いとは云はれないが、慶應義塾が先生を招いた目的は達せられたと見てもよい。それは其の時迄殆んど一人もゐなかつた作家を世に出す事を得た事である。學校の使命は人を育てるにある。義塾は實業界に無數の人材を出し、政治家としても比較的少數ながら勝れた人物を送つたが、純文學の方面に於ては、永井先生のすつきりした長身が三田山上にあらはれてから、やうやく一人前の人間を生む事が出來た。

中心人物を失つた「三田文學」が、忽ち衰退の色をあらはしたのは、免れざる運命であつた。す

べての仕事は人の力にある。有象無象が數をつらねても駄目だ。先生辭任直後、雜誌は文科の教員中の數氏によつて繼續されたが、內容體裁の下落した事簃く外たく「三田文學」によつて生れた作家批評家の殆んど總てが、餘りの事に慨嘆した。

その危機を救つたのは、當時新歸朝の澤木梢氏である。美術史の講座と共に「三田文學」の仕事を引受て主幹となつた。同人一同が、雜誌を立派にして見せようと誓つた。

しかし、時勢は既に變つてゐるばかりでなく、學校當局の「三田文學」に對する熱はさめてゐた。移り變つた時勢に適合する施設をたす事に何等の盡力をもしなかつた。

雜誌創刊當時「三田文學」の拂ふ原稿料は、時の一流文學雜誌に比べて些かも劣らなかつた。寧ろ新進の作家にとつては他よりもよかつたのだから、三田の山以外からどんな原稿でも求める事が出來た。森鷗外先生は、いかに學校を中心とする雜誌にしろ、相當の稿料を拂ふにあらざれば立派に繼續して行く事は不可能である、折角新しい作家が生れても他の雜誌に奪はれてしまふであらうといはれたさうだが、不幸にして「三田文學」は其の實例を示したのである。南部修太郎、小島政二郎、井汲清治、三宅周太郎、宇野四郎、水木京太の諸氏が相次いであらはれ、世間之を新三田派と呼んだが、作家の出現と反比例に雜誌は次第に氣が拔けて、僅に強情を張りつゞけ

て書いたのは私一人であると大きい聲を張上げても、誰からも苦情の出ない悲境に陥つてしまつた。

即ち「三田文學」は新作家を世に出す踏臺にはなつても、一度世に出た作家は書かないと云ふ狀態になつたのである。

編輯者としては幸福だつた第一期の井川滋氏は別とし、勢が傾きかけてからの南部修太郎水木京太二氏は名編輯者として同人の推稱する處ではあつたが、何れも自分の意見は用ひられず、必死の努力も酬いられずに苦闘をつゞけてゐるばかりであつた。恰も歐羅巴の大戰爭の影響をうけて所謂好景氣な時代が到來し、すべての社會狀態に變革が起ると同時に文壇も昨日の文壇では無くなつた。それが學校側には充分わかつてゐないのだ。文人といへば、喰へないものと相場のきまつて居たのが、資本いらずのいゝ商賣だと惡口を云はれる程になつた。「中央公論」「改造」の如き、れつきとした商業主義の雜誌が其の發展の頂上迄行きついた。天才樋口一葉は駄菓子を賣り鬼才齋藤綠雨は陋巷に窮死し、その他幾多の先輩が貧苦の中に一生を終つたが、今では一篇の長篇小說で當て土地を買ふ小說家もあれば、家を建てる戯曲家もある。最も多く自動車を乘廻すのは文士だといふ新聞の噂さへ否定出來ない世の有樣となつた。それがいいか惡いか、よくもあり

惡くもあらうが、暫く間はない事として、文筆をもつて世に勝れた人間が、一生涯喰へないといふのは正當で無いから相當の收入を得る時代の到來は喜ばなければならない。

然るに我が「三田文學」は、斯ういふ時代にぶつかつて全く手も足も出なくなつてしまつたのである。學校が年々豫算に計上する雜誌の補助費は多分創刊當時と同じか、或は僅に增額されたに過ぎない。世間が支拂ふ稿料の半分にも及ばないのだ。どうして昔の如く第一流の作家の原稿を廣く一般に求める事が出來よう。しかも一方此の雜誌に處女作を發表して文壇に見(まみ)えた作家も、何時迄も親がゝりでは居ない。家を構へ、妻を迎へ、子供が生れると、生計の資を稼がなければならない。「三田文學」に書いて居ては衣食の途が立たないのだ。衣食の途が立たないばかりでは無い。萎微振はざる雜誌に載る作品は、相當の價値ある物と雖も人が讀まない。卽ち默殺の憂目にあふのである。既に世間一流の作家の作品を求むる事が望めなくなり、今や同人中世に名のあらはれた者の原稿も得る事が難かしくなつたのだから自滅の外はないのである。たゞ殘された唯一の途は、あらゆる犧牲を拂つても同人が結束して自分達の仕事として雜誌を續けて行く丈である。それには人の和が必要である。

運の惡い時は惡いもので、主幹澤木氏は病を得て湘南の地に靜養を要する身となつた。しかも

病状はかばかしからず、年を越え又年を越えた。其間氏は「三田文學」の挽回を策し、文學と哲學と美術とを合せて主要目錄とする計畫を立てた。幸ひにして義塾の哲學專攻者中にも秀才が育ち、又雜誌經營の才能と野心とを合せ有する若手も出て來た。大正十二年の春、從來の純文學側と、新來の哲學側と雙方から編輯者を出して、共に內容を整へんとし、時には一冊を哲學側に任せて新しい興味を呼ばうとしたが、運は何處迄惡いのであらう、文筆の才ある若き哲學者がつゞいて死んで、何時の間にか哲學側の原稿は集まらぬ事になつてしまつた。「三田文學」が萎微振はぬ狀態をつゞけて居るにも拘らず、慶應義塾の文科は年々學生の數を增し、現在では五百人を數へるとか聞いて居る。その五百人の中には、作家を志望して居る者も多いのだから其の爲めにも「三田文學」はつぶしてはならぬものとなつた。

私は十數年來最も熱情ある投書家であつたが、曾て「三田文學」經營の相談に深くあづかつた事は無い。他人の仕事に干涉する事を好まないので、いひ度い事の數々を持ちながら、默々として寄稿して居た。しかし今や眼前に倒れんとする「三田文學」を見ては、何時迄も傍觀しては居られなくなつた。

私には二つの案があつた。補助金の增額と主幹の交代である。二つを併せ行へば何よりも幸ひ

だと思つた。澤木氏は私の心持をよく了解してくれる人であるから、遠慮無く思ふが儘を申送つた。

氏の病氣が長引き、學校に顏を出さない間に、變な野心家があらはれて臺無しにされては殘念だと思つたのだ。所謂新三田派も今では新といふ字をかぶらせるわけには行かない程はつきりした存在となつたのだから、その人々に任せれば、きつと仕事をすると信じた。しかし世間の事は中々簡單には行かないから、數人の中の誰を擇ぶといふ事が難しいとすれば、一時私が引繼いで、時機を見て更に交代するのが穩當だと思つた。文壇の人としては久保田氏に賴むのがいゝのだけれど、承知しないとわかつて居るので、三田文學會同人中の年長者として、私自身を擇んだのである。

けれども、私の受取つた返事は「否」であつた。學校の教職員以外の者に任せるのは後日に惡例をのこす事となるから不可であると云ふ理由だつた。

それ丈の理由では尤もとは思へないが、自分自身にかゝはる事だから繰返して說を述べるのはやめにして、更に一案を出した。「三田文學」をさかんにする目的の爲めに、曾て永井先生を迎へた如く、もう一度他所から當代一流の文學者を招聘せよといふのである。それも亦いけないとい

ふのなら、若手に任せて委員制度による外はない。

さういふ事を提議して居たところ、突然「三田文學」は休刊してしまつた。どういふ理由で、誰が休刊しろといひ出したのか一切吾々にはわからないうちに休刊となつたのである。十年一日の如く努力した投書家として、一言の挨拶も無いのはひどいと思つたが、驚く可きは、獻身的に働いて居た編輯者水木氏にさへ、何等の通告も無かつたのである。他人の思惑などには頓着せず、恰も封建時代のおかみの御處置の如く斷然たるものであつた。いさぎよしともいさぎよき事であつた。

乍併、間も無く復活を希望する聲が高まり、學校當局も何とかしなければならないので、私も招かれて會見した。意見の交換といふよりも、私が一人で喋つた形だつたが、學校側の申狀は、今迄の純文學一點張のものでは面白くないから哲學を取入れる事にしろといふにあつた。私も勿論異存は無い。既に澤木氏の主唱で、二者提携の實行に迄及んだ位で、たゞ哲學側の都合から原稿が出て來なかつた迄だと說明した。此の時も私の案としては、補助金の增額と、文壇有能の士を招聘するか、然らざれば、一切を擧げて若手に任す事の外には無かつた。

私の意見は、私と會つた人々の肚の中で消化されてしまつたのかどうか、その後何等の報告に

も接しない。たゞ徒に月日のたつうちに「三田文學」の復活に就て面白からぬいろ〳〵の噂がしきりに行はれるばかりだつた。

其の噂の中には、私並に「三田文學」正系の者、言葉をかへていへば作家側に對する非難として傳へられるものもあつた。傑作を書きもしないで金ばかり欲しがつて居るといふのがそれである。主として義塾の教職員の口にのぼつたものだと傳へられて居る。傑作さへ出れば雜誌は賣れる筈だとか、傑作が出るなら何とか盡力してもいいがとか二言目には傑作々々と云ふ。紫式部清少納言近松西鶴ダンテ、ミルトン、シエクスピアといふやうな古典作家が、數百年かかつて幾人出るかには考へ及ばず、圖書館の棚にづらりと並んで居る名著の容易に引出して讀めるのと同じく無暗矢鱈に傑作の出現を望むのである。それ程の傑作が毎月の雜誌にあらはれる世の中を想像する事が出來るであらうか。敢て問ふ、經濟政治哲學其他何でもよい、他の部門の學術に關する論文でも研究でも果して不朽の傑作を、濕地の菌の如く續出しつゝありや。かゝる事を求めるのは學校にむかつて雨後の筍の如く天才を輩出せしめよと要求するに等しい。吾々の望む可きはそんな空論では無いのだ。先づ傑作を生む氣運を作る事を第一の仕事とする。先づ勝れたる作家を生む爲めの舞臺を必要とするのである。補助金の增額を望むのも其の爲めに外ならない。金を目的と

するのなら、「三田文學」などに寄稿するよりも、他の商賣雜誌に書く筈である。

右の如き非難をする人の頭には、文人は竹の林で風を吸つて鶴と遊ぶものだといふ様な考へがこびりついて居るのであらう。原稿紙一枚に對して、傑作でも無いのに五圓六圓の稿料を支拂ふ世間は怪しからんといきまいた人もあつたと聞く。

かゝる時怨府となつたのは評議員である。何故ならば何人の宣傳か、評議員が此上の援助をする事を拒むから爲方が無いといふ言葉が廣く傳はつたからである。玆に義塾の評議員制度に就て云々するのは岐路に入るものであるから他の機會に讓る事として、現在義塾塾員中には評議員の選擧方法、評議員の實際行動に對して不滿の聲が頗る高い。野球仕合で早稻田に負た。評議員が悪いからだと云ふ。卒業生の賣行がおもはしくない、評議員が悪いからだといふ。何でもかんでも其處迄持つて行く程人々の心は平かでない。勿論誤解であらう。しかしその不滿の夥しい事は事實なのである。

「三田文學」が突然休刊し、且復活に惱んでゐるのも評議員の責任だといへば、誰しもうなづく位なのだ。だから此の風說はみんなが信じた。然し、在野の政黨が元老を攻擊するやうに、一から十迄評議員のせゐにするのも餘りといへば無責任な話だと思つて、私は一二先輩にして且評議

員たる人に、義塾文科の現状と「三田文學」の成行を説明し、補助金增額の要を說き之をはゞむ理由の無い事を述べた。ところが先輩は意外の事をきくものだといふ面持で、曾て學校當局から、會議の席上事の經緯を聞かされた覺えは無く、何かの間違ひたらう、自分達は「三田文學」の發達を希望するものたから、筋道さへ立てゝくれゝば援助を惜むもので無いと云ふのであつた。私は直に同人に報告し「三田文學」復活促進の實行に進んだ。

此の事に就ては釋明する人があつて、その言によれば「三田文學」の補助金增額などゝいふ事は評議員會に提案出來る性質のもので無い、義塾には他に「三田學會雜誌」其他があり、何れも「三田文學」以下の補助金でやつてゐるのだ、そんな勝手な要求があるかと云ふのである。然し、これは雜誌の性質を知らない人の言葉に違ひ無い。「三田學會雜誌」は數千の學生相手に半分義務として買はせ、然らずとするも講義の參考として讀ませる性質を帶びて居るのである。又其處に執筆する人の多くは教職にあつて生活してゐるが、片方の連中は筆一本で衣食しようといふのである。

それはそれとして、復活する「三田文學」は、學校當局の明白に要求する如く文學と哲學とを共合しなければならなかつた。茲にも一つ誤解のあつたのは、一度一緒になつた哲學側が間も無く

自滅したのを、恰も文學側が之を迎へなかつたか或は排斥するもの丶如く考へた人間のあつた事だ。とんだ迷惑な話である。

其處で雙方の連中が顏を合せて協議をする事になつた。私は日常勤務に縛られて居る體なので、出席出來なかつたが、不幸にして提携してやつて行かうといふ計畫は纏まらなかつた。相談不調の結果、哲學側は獨立して年二回の雜誌類似のものを出す事になつた。それは勝手であるが、困つた事にはもともと不足で弱つて居た「三田文學」の補助金の幾分を資金として持つて行つてしまつた事である。年十二回出す「三田文學」よりも遥に割のいゝ金高である。

結局「三田文學」は、一層少なくなつた補助金で、やれるものならやつて見ろと云ふ立場に置かれた。有力なる學校當局の一人の如きは、自分の任期の切れないうちは一錢たりとも增額しないからその積りでゐろと啖呵を切つたさうである。どういふ積りでそんな變な事をいふのか知らないが、恐らくは可愛い子に旅をさせ、獅子が谷間に我子を突落すのと同じ慈愛から出たものであらう。

新しく哲學雜誌を出すのは頗る結構である。しかし、その爲めに資金が入要なら何故之を要求しないか。たゞさへ苦んでゐる「三田文學」から奪ふと同一の憂目を見せるのはどういふわけか。

之も亦評議員會の議決によるのか。縄張を荒されると命のやりとりをしても顔を立てるのが博徒俠客の道徳ださうだが、吾々は意氣地無く旅にさまよひ、谷間に突落されて忍んだのである。

かうなると、是が非でも吾々の力で復活させる外に途がない。同人は數次會合して共同の決意を堅くした。雜誌が出たら背に負つて街上を賣歩いてもいゝと云ふ熱情家も出て來た。結局石井誠、井汲清治、西脇順三郎、横山重、南部修太郎、久保田万太郎、小島政二郎、水木京太、水上瀧太郎を編輯委員とし、勝本清一郎を編輯擔任者として全力を捧げる事となつた。其の外に若い學者批評家創作家及び多數學生が協力する事はいふ迄も無い。印刷發賣は、明治文學と切つても切れない深い關係のある老舗春陽堂が引受けてくれた。

一月二十日三田山上で「三田文學」復活報告大會を開いた時は頗る盛會で、義塾の大先輩波多野承五郎氏もわざ〳〵出席されて、激勵の演説をして下さつた。

復活第一號は四月一日に出る筈で、原稿は既に印刷に廻つてゐる。永井荷風先生小山内薫先生の原稿も頂戴し、同人は總出で、豫定の紙數を遙に超過したゝめ半分は次號へ廻さなければならないやうな勢である。

たゞみかけて斯う書いて來ると、いかにも仕事は樂々と運んで居るやうであるが、實はさうで

は無い。毎度いふ通り、足りない補助金を又削られたのであるから手足の自由を失つた氣がする。あくまでも憎まれ口をたゝく者は、最初金が足りなくて仕事が出來ないと云つたのに、それよりも更に減らされてもやつて行かれるなら、前の言葉は噓かぺてんかと云つてゐるさうだが、それは見當違ひである。一文も無くてもやればやれるかもしれないのだ。たゞ吾々は立派な雜誌を出し、又後に來る人々の爲めにも充分の土臺を築いて置き度いので、補助金の增額を求めたのである。

ほんとの事が、雜誌は出るが、以前の如きすつきりしたていさいの物は費用が無くて出せないのだ。たゞ吾々の努力丈で、何とかして美事に育てゝ行きたいと願つてゐる。誰か、吾々の此のこゝろざしを酌んで、援助を惜まない人は無いだらうかと、私はあさましくもあきらめ切れずに念じてゐる。友人知己を訪問して、前金購讀の依賴をし、廣告の揭載を承諾して貰ふ爲めには、多忙の中で步き廻つてゐる。慶應義塾には先頃體育奬勵の爲めの後援會が出來たが文學の後援會は出來ないかしらと空想する事もある。

幾多の邪魔を排つて「三田文學」は復活する事になつた。その經路を述べる丈で、抱負を語る勇氣は無い。私は將來一層の困難にぶつかる事を豫期して心配してゐるが、然し乍ら母校の爲めに

多大の犧牲を拂つて「三田文學」を守育てゝゆく事は、福澤大先生の爲殘された仕事の一つだと思つて居る。同感の人々があるならば幸ひである。（大正十五年三月四日）

——「時事新報」大正十五年三月六日・九日・十日・十二日・十四日・十六日・十九日・二十二日・二十三日

島崎藤村先生のこと

雜誌「文章往來」の編輯者が來て、今度藤村號を出すから何か書いてくれと云ふ。藤村論を書けといふ註文かと訊いたら、その逸話の方がよろしいと云ふ事であつた。既に確定した執筆者は馬場孤蝶平田禿木蒲原有明窪田空穗吉江喬松加能作次郎白石實三の諸氏たといふから、若し私もその列に加はるならば、巴里時代の島崎先生のことを書けば多少の色どりになるかもしれないと思つた。外の人とは違ふから時間さへあれば書かうと思つたが、何分にも〆切迄に五六日しか餘裕が無いので御斷りした。

一方、私は今「三田文學」の復活の爲めに全力を擧げて盡し度いと思つて居るので、他の雜誌は斷つても、金も人手も少ない此の方には毎號投稿し度いと願つて居る。しかし、近來多忙の爲め體が疲れて居るので、休息し度い願もある折柄、久保田万太郎氏が五月號には自分が書くから君

は休みたまへ、あんまり心身を虐待してはいけないといたはつてくれたので、それでは久しぶりで樂々と手足を延ばし、積みたまつた雜誌でも讀みませうと思つて居た。ところが五月號の〆切が近づき、忽ち之を過ぎても、肝心の久保田氏の原稿は出來ない。文壇の流行兒の中で、この人の原稿を取る程手數のかゝる事は無いと云ふのだから、「三田文學」の編輯擔當勝本淸一郎氏の如き素人を、その爲めに苦しめるのも氣の毒だし、又一人で心配して馳廻つて居るのを見るに忍びず、久保田氏の身替り(がは)と云つては僭越だが、たま／＼「文章往來」記者によつてヒントを與へられた島崎藤村先生の事を少しばかり書く事になつたのである。

私の古い記憶は尋常小學の時代に溯る。その頃の自分の文學書に對する讀書慾は、一生のうち最もはげしいものであつた。既に蟲の喰つて居る「八犬傳」初版百八冊を讀み、「太平記」を讀み、「源平盛衰記」を讀み、「浮城物語」を讀み、「谷間の姫百合」を讀み、「源氏物語」さへ意味もわからずに讀んだ。母の所有に屬する本箱だつたらうと思ふ。外に歌の本が澤山あつた。けれども、父や母の本箱の中には、ほんとに當時の私の心を動かしたものは無かつた。私が、文學の力に動かさるゝ感激の止度も無く強い事を知つたのは兄の藏書によるのである。七歳違ひの兄は私と違つて、幼にして才氣人に優れて居たらしく、五歳か六歳で百人一首を暗(そら)んじて居たとか、小學時代

に詠んだ歌でも形を備へて居たとか、學級は一度だか二度だか飛越したとか、すべて私の腕白と對照させてうちの年寄が屢々云つてきかせたものであつた。慶應義塾の普通部時代には廻覽雜誌を出して居て、評論と劇評を得意としたらしい。さういふ風だつたから、當時の代表作家紅葉露伴鷗外二葉亭柳浪鏡花一葉その他の著書のぎつしりつまつた本箱を持ち、多年第一位の文學雜誌だつた「新小說」は殆んど全部揃つて居るといふ有樣だつた。兄はひどい潔癖で、自分の茶碗や箸は手づから庭前の淸水で洗つて用ひ、自分の持物には一切他人の手を觸れさせ度がらなかつたので、本なども買つて來た時のまゝの紙の白さを保つて居た。餘り綺麗に揃つて居るので、それを貸してくれとはいひ出せなかつた。私はひそかに拔出して耽讀したのである。小說では泉鏡花先生の作品に夢中になつたが、その外では島崎先生の新體詩——斯ういふことばを使ふのもなつかしい——に感激した。私は今でもその幾章かを暗誦する事が出來る。あんまり度々ぬすみ讀むので、何時となく本に手垢のついたのを、兄に發見されはしまいかと惧れながら、矢張讀まないではゐられなかつた。

感傷的な心の止まるところなく成長しつゝあつた少年時代には、人の世の悲しみをうたふものが多く心を打つた。

潮は落ちて歸りけり
生命の岸をうつ波の
やがて夕に回れるを
ひきとゞむべきすべもなし

といふのに始まつて居る「まだうらわかきたをやめ」の死を悼む「終焉の夕」は、私の涙をしぼらせたものである。かりそめの風邪で寢て居る姉を、やがてこの様に見送るのではないかと、ひどく心を傷めた事もあつた。

島崎先生は「若菜集」「一葉集」「夏草」「落梅集」を「藤村詩集」一巻にまとめ、其の後詩作をされなくなつたが、そのかはり小説家としては我國には珍しい建築的描法を用ひて「春」「家」その他の名篇をあらはして、實質的に押も押されもしない作品を殘した。吾々は先生の詩によつてすこやかなる青春の情熱をはぐくまれ、先生の小說によつて大人の鑑賞にかなふ立體的描法を學んだ。その上に、私は先生の嚴肅なる制作態度を常に御手本と思つて尊敬感謝して居る。淺間登山の際小諸なる古城のほとりを過ぎ、先生の舊居の前に佇んだ時の感激も忘れられない。淺草新片町に住んでいらつしやる頃、友達と共にわざ〳〵格子先を通る事も度々あつたが、先生の住む家の前を

歩くといふ事丈でも深い感激があつた。

明治四十四年の初夏の頃、三田文學會主催の講演會があつて、島崎先生にも御願ひしたが、最初は御承諾の筈だつたのが御都合で駄目になつた。その時是非とも來て頂き度いといふ使者の役を買つて出たのが久保田万太郎氏だつた。久保田氏は、創作の上で一番影響をうけたのは島崎先生だと稱し、時には――大概お酒の廻つてゐる時だが――

「私は島崎藤村の模倣をしてゐるんです。」

と昂然として宣言する事がある。

講演會には出て下さらなかつたが、その後間も無く芝浦のいけすといふ料理屋で開いた雜談會には先生も來て下さつた。以前は座敷の外は直に海だつたが、當時は埋立の終つた後で、それ丈の風情は無かつた。それでも泥臭い潮風の眞當面に吹込む南向の緣側の障子を開けるとお臺場が見えて、東京ばなれした一種の景色だつた。初期の三田文學會の連中は度々其處で亂醉した。

島崎先生の出席された日は表面は茶話會といふ事で、文學部の長たる人も來て居た。永井荷風馬場孤蝶兩先生の外に、當時の「三田文學」の發行を引受けて居た先輩籾山庭後氏も居た。吾々の連中は澤木梢小泉信三井川滋小澤愛圀松本泰久保田万太郎佐藤春夫といふ顏觸の外に、學生が大

勢居た。風のはげしい日だつたが、座敷の外の貝殼の白々と散つて居る砂地を踏んで聲色つかひが來た。永井先生が銀貨を紙に包んで投げておやりになつた。

島崎先生は正客だが、折角御出を願つて置きながら近づきにくくて、學生側は遠くから怖る／＼見て居るばかりだつた。雄辯に無雜作に、わだかまりなく話をなさる馬場先生と並んで、島崎先生は煙草で黑くなつた齒を見せて低くかすれた聲で笑つて居られた。窮屈な感じのする程きちんと坐つた上半身を、上下に搖つて笑ふのが特徴だつた。

會の世話人はいふ迄も無く吞助である。何とかして茶話會の看板をはづして酒戰場とし度いのだが、部長が居るのでびくびくして居るのだつた。座が白けてしまつた。あつちこつちで二三人づゝ額を集めて、これでは爲方が無いから何とかしようといふ評議が始まつた。間も無く部長に耳うちする男があつて、やがて部長の姿が消えると、忽ち御膳が出て酒になつた。正客の右隣には馬場先生が居たが左隣は誰も敬遠して行かないので、結局私が久保田氏を誘つて其處に坐つた。始めて先生と言葉をかはす事が出來た。久保田氏は其の月の「三田文學」に「朝顏」を發表し、それについて小宮豐隆中村星湖二氏が可否の論をたゝかはせ、一躍新進作家として認められ、私は四月の休暇に處女作「山の手の子」を書き、永井先生に見て頂いて及第か落第かと心配して居たとこ

ろ、七月號には出して頂けるといふ喜びと不安を持つてゐる時代だつた。

「あなたも何か御書きになるのですか。」

と島崎先生に訊かれてすつかり恐縮してしまつた。盃を頂いても、私は固くなつて居た。芝浦の色の黒い藝者があらはれて鳴物が入り、座敷は正客をないがしろにして滅茶滅茶に賑かになつた。

「まるで戰地から廣島へ歸つて來たところですね。」

と永井先生のおつしやつたのを覺えて居る。

その翌年の九月，私が亞米利加へ行く二三日前，久保田氏と共に友人高見澤遠治君に招かれて代地の深川亭で飮んだ事がある。嵐の後の靜かに曇つた日で，銀灰色に光る大川の水に近い畫の座敷が大層よかつた。その日も島崎先生の御宅の前を通つたのがきつかけで，少し前に新聞にあらはれた先生再婚の噂が盃のとりやりの間を縫つた。先生の奥さんのおなくなりになつたいたましい事實は先生の作中にも描かれて居るが，その後添になるのが柳橋の藝者だと麗々と名前迄出して新聞は書いて居たのだ。高見澤君はその女の人を知つて居て呼んでくれた。おちついた上品な人だつた。新聞の記事のあてにならない事は知りながら，さりとてむげにも拒めない好奇心か

ら、これが我が島崎先生の奥さんになる人かしらといふやうな特殊の興味もあつた。此の日の事は久保田氏の小說「川波」の中に巧妙に描かれて居る。

それで私は亞米利加に行き、二年間滿足に心の底をうちあけて話す友達も無く、大學町の下宿屋で乏しい生活をしつゞけたが、大正三年に倫敦に渡つた時は、歐羅巴から戰亂を逃れて來た多くの友達にあつた。戰爭が持久戰に入り、巴里も兎に角砲彈に見舞はれる危險はないときまると、その人々は順々に海峽を越えて佛蘭西へ渡つた。大正四年の冬私もみんなの後を追つた。戰時の事で、入國に手間取り、巴里へ着いたのは眞夜中だつたが、小泉氏が迎ひに來て下宿へ案內して吳れた。

吾々の宿はセイヌ河の左岸、羅典街にあつた。サン・ミツシエルの大通を一寸入つてソルボンヌの禮拜堂の前のセレクト・ホテルといふのであつた。おもて側は一寸した部屋だつたが、吾々の住んだのは三和土の內庭をぬけた裏手の格安の方で、細く急な段梯子の兩側にひとつ宛狹い部屋があつた。寢臺と洗面臺と一脚の椅子の外には何も無く、旅鞄や手提鞄を置くと足の踏場も樂でない樣なところだつた。澤木氏が下の方に住み、小泉氏は屋根裏に近く、私はその一階下の空いてゐるところに落ちついた。朝は町に出てさゝやかた珈琲店の土間に立つた儘、笊の中からパ

ンをとつて喰べ、一杯の珈琲を飲んで歸り、晝も夜も近所の安料理屋で質素な食事をすると云ふ生活だつた。ホテルとはいふもの丶堂々たる食堂のあるやうなものでは無かつた。

宿の前の廣場にオウギユスト・コムトの石の胸像が立つてゐた。パンテオンの周圍やリユクサンブウルの公園は私の手近な散歩區域だつた。

マロニエの並木のつゞくサン・ミツシエルの大通を少し行くと天文臺があつた。そのそばのムルネタス孃といふのが私の佛蘭西語の先生だつた。孃は骨格のたくましい赤ら顔の、口髭の生えたお婆さんである。教科書にはモオパツサンの短篇集を選んでくれた。簡潔明快流麗なる此の作者の文章は、最もよく佛蘭西文の特質を備へて居るのだと老孃は說明してくれた。此の人のところに島崎先生も通つて來られた。

その人は巴里に集まる外國人を相手に佛蘭西語を教へて、それを糊口として居るやうな年とつた婦人であつたが、英語で講釋をして吳れるので岸本には好都合であつた。取りあへず彼は語學の教師の許に通ふことを日課とした。

と「新生」の中に書いてある。

島崎先生の下宿は老孃の家から遠くなかつた。「エトランゼエ」の中に詳しく出て居る通り、ポ

オル・ロワイアルの通りを隔てて産科病院の蔦のまつはる石塀を見下し、又窓に立てば天文臺の塔の見える位置にあつた。

夕方が來た。私の旅の心は落ちつかなかつた。圓い行燈のやうな石の塔につく天文臺の燈火が私の部屋の窓から望まれた。私はその燈火を眺めて、暮れさうで暮れない夕方を耐へた。長い間の勞作に疲れ、又はげしい苦悶に惱んで居られた先生は、薄暗い部屋を僅かにあかるくする窓に立つて、屢々旅愁をまぎらしたのであらう。

巴里で始めて先生にあつたのは、たまたま倫敦から來た日本人が吾々の宿のおもて側の方に泊つたのを尋ねて來られた時だつた。その時は一寸挨拶した丈だつた。その後澤木氏が先生のところへ連れて行つて呉れた。先生は私の名前は知つて居て下さつたが、曾て芝浦のいけすで席を隣した事は覺えていらつしやらなかつた。その日は附近のカフエ・リラといふのに三人で行つた。往年佛蘭西自然派の作家達がゾラを中心として屢々集まつたところだと聞いた。

耶蘇降誕祭の前夜には、吾々の宿で骨牌(かるた)をして遊ばうといふので島崎先生を招待した。判事鶴峰氏、大藏省の黑田氏、日本銀行の青木氏など丶吾々だつた。麥酒を飲み燒栗を喰つて、さかんに勝負を爭つた。十二時過ぎて、一人二人は減つたけれど、結局朝迄續いた。すつかり白んでか

ら先生は宿に歸り、私は寢床にもぐり込んだ。

晝過に目が覺めると雨が降つて居たが、先生はみんなを誘ひに來て、モンパルナスのちひさい茶店で祭日の菓子を喰べた。

骨牌は大變流行つた。誰しも海外の旅の終に近づいて居たので、無闇に勉強する時代は過ぎて居たやうに思はれる。大晦日の晩にも吾々の宿に集つて夜を更かした。

一月には先づ澤木氏が巴里を後に歸途につき、二月初には小泉氏も行つてしまつた。その人々の送別會も島崎先生の發意で催した。

小泉氏を見送つた歸りに、私はひとりぼつちになつて些か寂しく感じて居ると、島崎先生はその宿に來て食事をしないかと勸めて下さつた。私は遠慮無く御馳走になる事にした。食堂は先生の部屋の隣で、食卓には主婦シモネエと鶴峰氏が一緒だつた。佛蘭西語の先生ムルネタス孃の口髭の生えた顏は今もはつきり覺えてゐて、人ごみの往來であつても直ぐに見分ける事が出來るが、シモネエがどんな婆さんだつたか、私はまるつきり記憶して居ない。

味の濃いポタアジュと、肉と野菜の煮込んだ料理だつた。その中に人参がまじつて居て、それを好むかと私にきく婆さんの言葉に何か特別の意味があるやうだつたが、島崎先生の說明による

と、此の國でも之を喰べると慾情が強くなると云ふのださうである。

その後も度々先生の御宿にうかゞつた。古風な暖爐の側で綠茶を頂いた事もあつた。巴里には今でも電燈の無い家があるであらう。先生の部屋もランプだつた。あらゆる家屋設備の便利第一に完備して居る亞米利加に長く居た私には、不便異樣に考へられたが、先生は爐邊の暗いランプの光で讀書するのを好まれたらしい。ランプといふ時代遲れの、手數のかゝる物に對しても、その物に伴ふ味をおろそかならず思つて居られたらしい。

物を大切にする事、物の存在を尊敬する事は、今の若い人よりも昔の人の方がよく心得てゐる樣だが、私は島崎先生の紙一枚さへ粗末にはしない心の修練に學ぶところが多かつた。

或時、先生は私にひとつの林檎を勸めて下さつた。ひとつ丈でふたつは無かつた。私は林檎の齒ざはりを好まないので御斷りしたが、その紅くつやつやとまるみを持つ果實の肌の美しさを、先生はしみじみ眺めて嘆稱して居られた。

又或時は一枚の鳥の子紙の皺を延ばしながら、その紙の特質の尊さを說かれた。先生にとつては、それらの物の生命が限り無く尊とまれるのであつた。

曾て先生は、自分は人生の從軍記者だといふ意味の事を云はれたやうに記憶する。それは、あ

らゆる人生の出來事に心を動かされず、正しい觀察を失はずに之を記錄するといふ意味だつたと思ふが、先生は決して冷かなる觀察者では無い。むかしの儘の情熱を底に湛へながら、事物の本質をとらへる爲めに必要な靜かに鋭い眼を働かして居る詩人である。

その頃戰爭ははかばかしく進行して居なかつた。町は暗く、女といふ女が喪服を着て居るやうに見えた。或夜は獨逸の飛行船が爆彈を投下して、十六人の死者と三十八人の負傷者を出した。宿の生白い虛弱な息子も銃をかついで軍事教練を受けて居た。

雪が降り、霙が降つたが、三月になると街路のマロニエの並木の梢も芽を吹いて薄綠に霞み、セイヌの水の色も深くなつた。私は先生にしたがつて其處此處と散歩した。

夜は宿で鶴峰青木二氏を加へてブリツヂをやつた。島崎先生は決して上手では無かつた。が、のべつに烟草をふかしながら遲く迄たゝかつた。どうせやり始めたら朝迄やつてしまはうといふ心持になるのではないかと想はれるところがあつた。物事を中途半端にはして置けないのが先生の性格の強さとなつてゐるのではないだらうか。

しまひには先生もセレクト・ホテルの人となつた。シモネエの家が戰爭の影響をうけて止宿人が減り、繼續困難になつて移轉する事になつたのである。其の時は先生の滯在もあと二ケ月にな

つて居た。

「どうだね、歐羅巴へ來てから、すこしはエラくなつたかね。」

「むゝ、すこしはエラくなつたやうな氣がするね。」

こんな會話がセレクト・ホテルの一室で、あのソルボンヌの古い禮拜堂から時を知らせる鐘の音が近く聞えて來るところで、長期の留學を終りかけた舊友同士の間にかはされるのも、旅らしかつた。それを笑ひながら尋ねる方の人が小泉君で、また笑ひながら答へる方の人が澤木君であつたことも書いて置きたい。

翌年三月、私が三年近くも辛抱したシモネエの下宿を辭して、そろそろ歸國の支度をするために引移つたのもその旅館だ。阿部君は二階、私は三階で、晝に晩に附近の希臘飯屋へ連立つて出掛けたのもそこからだつた。

と「エトランゼエ」の終の一節に書いてある。澤木小泉二氏の此の會話を傍で聞いて、先生はひどく面白がられた。烟草で黑くなつた齒を見せて、上半身を搖つて笑つた先生の姿は今も目の前にある。

先生がセレクト・ホテルに來た時は二氏は旣に去つた後で、私は澤木氏の居た部屋に入り、先

生は其の二階上だつた。頭の上で先生が寢床に入る寢臺のきしむ音や、朝、顏を洗ふ水の音か聞えた。

希臘飯屋といふのはパンテオンの前通にある家で、遠くロダンの「考へる人」に見守られながら、吾々は安價な食事を認めに行つた。

或時、先生は宿の裏手の方に露西亞料理を發見して試み、つぎには私を誘つて下さつた。

「チエホフの小說に出て來るやうなおぢいさんが居ますよ。」

と云つて、且その家の料理迄もほめて居られた。しかし、私には此の料理はまづかつた。ふだん行き馴れた希臘料理よりも更に二三段下の家で、粗末極まるところや、主人や客の恰も露西亞小說に出て來る無智で正直な人間を見るやうなのが、先生の氣に入つたものらしい。こんな些細な事を例にとるのは如何かと思はれるが、一面冷靜なる觀察者である先生は、何よりも多分に持つてゐる詩情の爲めに、屢々自分の想像力に身を任せてしまはれる樣である。その爲めに何の特徵も無い露西亞料理さへ、先生の想像によつて吾々に親しい露西亞小說の一場面としてなつかしさを覺えたのではないだらうか。

いつたい吾々並に吾々より以前に生れた人間は、それ以後の人に比べて人を尊敬する心が深い。

それを歎く人もあるが、私はこれ程のしあはせはないと思ふ。偉い人をうやまふのは卑屈では無い。自分を鞭撻し、練磨するばかりで無く、此の世に生甲斐を感じるのである。たゞ實際尊敬する人に面接すると、自分の弱小を顧みて恥ぢ怖れ、のびやかに口をきく事さへ出來ない事がある。私は島崎先生と同じ下宿に住みながら、何故もつと藝術上のはげみとなる可き御話を伺つて置かなかつたのかと、その後の十年間に度々思ひ出しては悔むのである。しかし、先生の日常生活が私に教へた事は少なくない。

先生は繪畫を見ても音樂を聽いても、各々その道の專門批評家が見るやうな筋の立つた觀方は不得手である。けれども、何を見ても聽いても、すべてが先生自身の解釋によつて獨特の生命を持つのである。何事をも文學的に見る傾がある。それが文人としての先生の強味である。文學に於てさへ、先生の批判は決して客觀的に正しいとは云へない樣である。先生のは自分自身の詩の中に總てを融かし込んでしまふのである。あの冷靜なる傍觀者と人にも云はれ、自分でも許して居られる先生の態度か、ほんとの先生をあらはして居るか、或は又物を見るよりも、自分の好きな色と香と味とで勝手に調味してしまふ態度が先生の本質のあらはれか、それは疑問である。恐らくはふたつながら先生の特質をかたちづくり、どの面に於ても普通人よりは遙かに色彩が強い

のであらう。

巴里滯在中、私は先生に何か日本文字の本を貸して下さいと云つた事がある。その時「芭蕉全集」を貸して下さつた。若し持つていらつしやるなら「藤村詩集」をと云つて、それも拜借した。詩集は昔に變らぬ魅力を持つて居た。長い間の鎖國主義の島國に、海を越えて近代西洋の思想の押寄せて來た明治の中頃の若者の心のみに訴へるものでは無い。あの詩集に盛られた純情、浪漫的な情熱、清新素直なる韻律は、此の世の中に新しく人間の生れて來る限り亡びないものであらう。

先生は「藤村詩集」を私の手に渡す時、

「今讀んでも一寸可愛らしいところがありますよ。」

と云つて微笑された。

巴里に居る間、私は先生がどういふ心持で日本を後にされたのか知らなかつた。後日「新生」を讀む迄、あの大作の中に描かれた苦悶をいだいて居られようとは思はなかつた。たゞ、巴里に於ける先生の姿は如何にも寂しかつた。陰鬱だつた。内に藏する力の強い先生には、悲喜哀樂の情を小兒の如くあらはす事は出來ないらしい。先生は吾々と膝組で談笑されるが、たとへば笑ふ時

でも、いかにも相手の心持をいたはる爲めに樂しさを示さうとされながら、しかも決して安易なる笑は出て來ない。それは先生の心の底に、何事につけても忍ばうといふ深い根ざしがあるからではないだらうか。先生は馳足の速力をほこる人ではない。何時迄も膝を崩さずに坐つて居る人である。聲を張あげてうたふ人では無い。默つて聽いて居る人である。心の重さが、音になつては現はれないのである。「新生」の苦悶も亦、何をもつて紛らさうとか、やけになつてごまかさうとかする事なく、運命の來るがまゝに忍んで之を受けたのである。巴里の長い滯在は、その受難の日だつたのであるが、私にはうかゞひ知る事が出來なかつた。

私は先生に絡はる暗鬱な陰影を、先生の血統の故ではないかと思つて居た。「家」に描かれてゐる通り、先生の父上は發狂して晩年を座敷牢の中で過されたのである。甚た失禮な事ではあるが、靜かに端坐した先生の姿を見ても、私には何時かは狂はんとする心の怖れから、強ひて自分をおさへつけて居る人の姿に見える事がある。

先生が巴里を立つて故國に向はれたのは四月の末だつた。古びた色の石造の巴里の町も若葉の頃だつた。その一週間ばかり前に、みんなが私の部屋に集つて骨牌をした時、人々を驚かしたのは先生の濃い口髭が青々と剃落されて居た事である。先生の髭は、いかにも先生らしかつた。そ

れは先生自身もよく承知して居られた筈だ。「新生」の中でも、此の事件は重大に取扱はれてゐる。少し長いけれども引用させて頂く。

かねて岸本には斯の旅を終る頃に爲し遂げたいと考へて置いたことが有つた。巴里を引揚げる頃が來たら自分の髭を剃落してしまはう、そして歸國の途に上らうと考へて居た。不思議と云へば不思議、突飛と云へば突飛な考へではあつたが、心に編笠を冠る思ひをして國を出て來た岸本には別にそれが不思議でもなく突飛でもなかつた。何か彼は現在の自分の心を實際に自分の身に現したかつた。

しばらく岸本は部屋の寢臺に腰掛けて自分で自分の爲ることを制止めやうとして見た。しかし、かねての思ひを遂げる時が來て居た。そこで彼は髭を落しに掛つた。部屋には壁に寄せて造りつけた石の洗面臺がある。その上に姿見がある。彼はその前に立つて、自分で剃刀を執つた。惜し氣もなく剃刀を動かす度に、もう幾年となく鼻の下に蓄へて置いたやつが曲めた彼の顏を滑り落ちた。好くも切れない剃刀で、彼は唇の周圍の腫れ上るほど力を入れて剃つた。

曾て國の方で人を教へたこともある自分の姿のかはりに、ずつと以前の書生時代にでも歸つ

て行つたやうな自分の姿がそこへ顯れて來た。最後に姿見の方へ行つて剃り立ての顔を眺めた時は、今まで髭に隱れて居た鼻の下あたりが青々として見えた。ところどころからは血も滲み出た。

岸本の顔はまるで變つてしまつた。しかし彼はさも心地よげに、兩手で口の周圍を撫で廻した。斯の顔でこそ、もう一度國の方へ歸つて行つて節子の親達にも逢へると考へた。

さういふ先生の心を知らない骨牌仲間は、別段の深い考も無く、笑つたり、又は極めてお座なりの言葉で惜んだ。私は「春」の中の、岸本が品川の海近い宿屋でない宿に泊つた翌朝、頭をまるめた事を思ひ出した。

「岸本さん、髭が無くなりましたね。何かそれには意味が有るんですか。」

同じ旅宿に泊つて居る留學生が小旅行から戻つて來て、それを岸本に尋ねた。この人は慶應出で岸本から見るとずつと年下ではあつたが、何かにつけて彼の力になつて吳れた。

「昔、岸本さんは坊主にお成んなすつたとか――」と復たその留學生が男らしい眉をあげて、岸本の方を強く見て言つた。「何かそれと同じやうな意味でもあるんですかね。」

さすがに、この人の言ふことは鋭かつた。岸本は返事に窮つて、

「自分の髪の白くなつたのは鏡にでも向はなければ分りませんが髭の白いのは見えて、心細くて仕様がありません。もう一度書生の昔に復らう。さう思つて、君の留守に剃つてしまひましたよ――」これ以上のことは岸本には言へなかつた。

この「新生」の一節に出てゐる會話は、語調が全然私のものではなく、島崎先生好みではあるけれども、執着のある髭を落された日に私の發した質問と先生の答とである。私は先生の返事に何か不純な陰影を見てとつたが、敢て繰返しては訊なかつた。若し先生のいふやうに、書生の昔にかへる爲め形容を變へようといふのなら、先生程の人にあるまじき芝居氣だと心の中で思つて居た。後に「新生」を讀んで眞意はわかつたが、なほ且私には不滿がある。頭を剃るとか髭を落すとかいふ、しぐさにあらはれた事をしないで、何故先生一流の肚でこたへて忍んでしまはなかつたのだらう。私はさう思ふ。或はそれは先生の、昔ながらの情熱のあらはれか、心の底に燃る浪漫主義の象徴か。しかし、それさへも僅かに苦悶をまぎらさうとした心の破綻であるといふのならば、最早何事もいふ事は無い。

髭のなくなつた先生は間も無く巴里を立つた。同じ年の秋、私も日本へ歸つたのである。

月日のたつのは實に早い。それからもう十年になる。巴里の郊外に住んで居た私の從兄鈴木の

家で、先生と私とを露臺に立たせ、主人か主婦かどつちかゞ寫した寫眞は今も私の手許にある。まだ髭のある日の先生の肩に手をかけて私の顏が並んで居る。素人寫眞の手際のせいか、既に光澤は褪せて、白いぶつぶつが出て來た。

昨年、久保田氏と共に先生を御誘ひして、築地の八百善に行つた事があるが、その時の先生は和服の着流しに白足袋下駄ばきで、山高帽子をかぶつて居られた。近頃全く見かけない風俗だつたが、たぶんその山高は巴里時代のものであらうと思ふ。先生は佛蘭西人のやうに、好んで山高を用ひられたのである。（大正十五年三月二十七日）

――「三田文學」大正十五年五月號

無題一

◇「三田文學」の成長の爲めに特に三田の先輩並に學生諸氏に御願ひがあります。正直に申せば

第一に寄附金を頂き度い

第二に前金購讀の申込をして頂き度い

第三に廣告を出して頂き度い

ベース・ボールにも勝ちませう。テニスにも勝ちませう。「三田文學」もさかんにしませう。

◇復活號に久保田小島宇野水木諸氏の原稿の無かつたのは殘念だと云つて來た愛讀者がある。私も殘念に思ふ一人です。諸氏は「三田文學」を愛するあまり間に合はせ原稿は載せられないと云ふので何れも只今一生懸命になつて制作中です。或は五月號にも間に合はない人があるかもしれませんが我慢して下さい。私も我慢してゐるのです。

◇復活號に紹介した新進作家木村庄三郎氏の作品について同じ愛讀者から批評を承はつた。久保田万太郎氏以後三田の生んだ第一の作家だといふのである。かねて敬服してゐる私は木村氏の爲め「三田文學」の爲めに喜んで祝杯をあげた。

◇先日時事新報に載つた「三田文學の復活に就いて」と題する拙文に對し諸方から激勵の手紙を頂いた。その多くが匿名なので返事を差上る事が出來ない。六號欄を借りて御禮を申述べ且將來一層の御援助あらん事を切望します。

「三田文學」大正十五年五月號

「古溪隨筆」讀後感

「古溪隨筆」は波多野承五郎氏の隨筆集である。「實業」といふ雜誌に批評を載せた人のいふ所によると、二千部刷つて二十冊しか賣れなかつたさうだが、まさかにそんな事はあるまい。しかし、此の書に興味を持つ人は、著者の閲歴を知る人に限られてゐるに違ひ無い。

著者は、むかし三田の學窓を出て新聞記者となり、官吏となつては原敬氏の後をうけて支那の領事となり、再び新聞を經營し、更に轉じて實業家となつては三井の波多野さんで知られ、その後政友會の代議士として出馬し、扨て最後に文壇の人たらんとこころざした。既に齡七十を越してゐる事は疑ひ無いが、ひたむきに進んで行く元氣が愉快だ。

今こそ一萬人の塾員を有する慶應義塾であるが、私が幼少の頃は三田の山を取卷く人の數は未だ左程多くなかつたから、めぼしい人の名前は常に耳にして居た。波多野氏の名前も小學時代か

ら知つて居た。稍長じては、學校の運動會、野球試合、兩國の角力場、各所の芝居などで、夫人令息令嬢を伴ふ此の先輩の姿を屢々見かけた。今日に於てこそ野球は競馬と共に魚河岸の兄哥の人氣をそゝり、選手の姿をひそかに胸におもひ描く令嬢もあるし、藝者のファンも簇出し、役者もてあそぶ盛況を呈するに至つたが、當時波多野氏程の地位聲望ある人の來觀するのは珍しかつた。角力も、幕の內の出ない十日目以外には女に見せなかつた昔の名殘か、女の見物といへば花柳界の人が多く、貴婦人令嬢の姿は餘り見かけなかつた。それで、波多野夫人の姿は目立つた。今日も波多野さんの奥さんがいらつしやつたと、私は母に傳へるのを常とした。時代も餘程違ふのだが、良人たる人の氣風の相違が力を振つてゐるに違ひ無い。私の母などには、角力を見に行くといふ事は、亞米利加へ渡る程遠い世界であつた。

こんな事を引合に出すのは、本論と何の關係も無いやうに思はれさうだが、さうでは無い。波多野氏が廣く新奇の興味に心を動かし、躊躇無くそれを目あてに進んで行く態度が自らうかゞはれるのである。七十にして文壇にうつて出んとする風格が偲ばれるのである。

昨年三月、鎌田榮吉先生の催された劇談會が紅葉館に開かれ、私も御招きにあづかつて席末を汚したが、その時始めて波多野氏に挨拶した。齒の間から言葉の漏れるのを氣にするのか、しき

りに談じ、しきりに唇をきつく結びながら、自分は今後文士となる、現に戯曲の創作に從つて居ると話して居られた。

御當人はひどく眞面目だつたのだらうが、その場に居合せた人の大半は冗談半分に聞いてゐた。私の如きは、果してほんとに戯曲が生れつゝあるのかを疑つたし、よしんばほんとにしても、大倉某の狂歌程度の洒落に過ぎまいと思つてゐた。

しかし、波多野氏が文學好である事はわかつたので、當時恰ももぎだうに休刊になつた「三田文學」を話題とした。その談話によると「三田文學」の創刊を主唱したのは波多野氏である。雜誌の悲運は殘念だから、今後何とかして盛返し、昔に勝る力を見せなければならないと、ひどく生一本の熱情を示された。

それに對して私は、あたりに些かはゞかりはあるらしかつたが、雜誌不振の原因から、十年苦心の經過を述べ、その挽回策迄辯じた。酒席の事とて話は兎角散漫になり勝だつたが、波多野氏が壯大なる計畫を立てゝ力說される態度を見て、大層力強く思つた。

席上の少時間の對談中、私は下(しも)の如き印象を受けた。波多野氏は自說を述べる時に極めて生一本の熱情を示されるが、他人の喋つてゐるのを聽くのは下手だといふ事である。當夜の御主人鎌

田先生は頗る話の上手な方であるが、同時に聽上手でもある。どんな下らない話でも、面白さうに聽く。否、下らない話の中にも、何かしら面白味を見出す異常なる才能を持つて居られるやうである。それにひきかへ波多野氏は、下らない話を聽く辛抱が無いのではないだらうか。折角こつちが喋つてゐて、未だ結論に達しない前に、先に自分の意見をまとめさつさと論斷してしまふ流儀らしい。頭腦頗る明敏、鋭過る程鋭どく、あらゆる事に說を成し、之を確信し、他を顧るひまの無い人の姿がはつきりと私に見えた。失禮ながら私は、一人の人としてその特質を面白く思つた。

それから約一年たつて「三田文學」は若い者の努力で復活した。その報告演說會を三田の山の上で開いた時、波多野氏も來會せられ、應援演說をして一層吾々の鬪志をさかんにして下さつた。これよりさき、紅葉館で披露された大がかりの戲曲は、雜誌「實業」にあらはれたさうだが、文筆の士には緣遠い雜誌たから、その道の人の目には觸れなかつた。たまたま耳にする噂によると、なつてゐないといふのであつた。さもあらんと思つた。

何故さもあらんと思つたかといふと、いかに頭腦明敏でも、いかに新聞主筆として鋭い論說を書き、又實業家として第一流の人であつても、方面違ひの戲曲創作の修業を積まないで、直に人

を驚かす事は出來ないのが通例だからである。

けれども、その後「時事新報」に出た輕井澤の有島武郎最後の場所を訪ふの記を讀んだ時は、文體の新しさに感心した。茲に新しいといふのは、新感覺派などゝ稱される一派の人々の文章を新しいといふ意味とは違ふ。あれは努力して、無理にも新奇ならんとするのであるが、私が茲にいふのは現代の文體だといふ意味と思つて貰ひ度い。波多野氏と同年配の人は、いかに文章家と稱される人でも、當今の若い者の書くものとは型が違ふ。德富蘇峰氏は一代の文章家たる事疑も無いが、近頃試みられる言文一致體の文章に至つては、ちよん髷で燕尾服を着た感がある。然るに波多野氏のあの一文は、古めかしく無いばかりで無く、ちぐはぐなところが無い。又その内容も、兎角御談義になり勝な老人臭さが無い。アツプ・トウ・デエトの隨筆なのである。試みに私よりも更に一時代若い文人數氏に訊いて見ても、何れも同意見だつた。餘程熱心に、且鋭い批評眼をもつて現代文學を味はつて居られるに違ひ無いといふのが吾々の感想だつた。

ひとつ「三田文學」に原稿を貰つて見ようか、あの調子なら面白いかもしれないと、ひそかに同人と話したのである。

その後數人の人から、波多野氏の文壇にうつて出んとするこゝろざしは極めて眞面目なもので

あると聞いて、いろいろの意味で愉快に思つてゐた。恰も「古溪隨筆」が出版されたのである。

序文に於て、著者は先づ下の如き事を述べて居る。「隨筆とは隨感隨想隨憶を隨時隨所に筆記したものだ。故に筆記中の各項目に聯絡がない。」「隨筆には主題がないから、學術文藝よりして以下趣味嗜好の末に至る迄、世間萬般の事象を包括した記述であるべき筈だ。尙其上に、非專門的の立場から素人臭い所があるのが面白い。」「隨筆記者は萬能萬藝、多知多聞の人である事を要する。」云々

看板にいつはりなく、集められた短文九十五篇を見ると、千字文の冒頭の一句天地玄黃の解說に始まり、亞米利加に於ては何故にブロンドすたれてブルネツト讚美の聲が高いかを解釋し、佛教を論じ、二食主義を排し、繪畫漢詩俳句音曲を論じ、活惚の淵源を探り、泥棒を說き、鮨の喰ひ方を述べ、庭球を論じてはラケツトの握り方の微を穿ち、何から何迄知つて居る嬉しさを全篇に漲らして居る。まことに萬能萬藝多知多聞の人たる事を明かにして居る。

その筆に上るところのものは、學術文藝から興味嗜好に及び各項目に聯絡が無い。序文中に定義の如く示された隨筆の特徵はすべて備はつてゐて且素人臭いところが充分ある。

むかしから隨筆にもいろいろあつて、自分の感懷を述べる事を主とするものもあり、世の中の

話をそのまゝ記述するものもあり、種々さまざまだが、此の著者のは徹頭徹尾說明解釋である。說を成すといふ事は、明治初年究理の學を修めた福澤門下の一つの特徴である。政治方面に活躍した犬養尾崎兩氏は一番明白にこれを證明して居るが、議論には緣遠いのを通例とする實業家となつた人々――例之(たとへば)莊田平五郎氏小泉信吉氏阿部泰藏氏その他大勢――も事每に說のある人だつた。なりゆきにまかせたり、多數がさうなら爲方が無いと考へるより先に、自分の解釋自分の主張があつて、先づ一說を述べなければ安んじないのだ。波多野氏もその例にもれない。

同じく說を成したがる人々の中にもいろいろの流儀があつて、大がかりの陣を張るのもあるし、小手先のきくのもあるし、正面から押て行くのもあれば、逆手を用ゐるのもある。波多野氏のは變化の多い方では無く、主題は幾百千あつても、論斷する態度は一つらしい。あゝも考へられる、斯うも考へられるといふ迷ひを見せないで、自分のよしとする說をぬきさしならぬものにして一直線に進んでしまふ流儀らしい。「古溪隨筆」中九十五篇の大方は――もう一度讀んで見たら其の全部といひ切つても差支ないかもしれない――一刀兩斷の意氣をもつて事每に解說を下(くだ)したものである。その說に誤があるなら教示して貰ひ度いと前がきして居るのは、著者自身確信をもつて居るものと見る可きである。

然らばどういふ形式で說をたてゝゐるかといふと、物理化學の說明の如くはつきりしてゐるか、讀者に味はせる餘裕も與へず、著者自身が味はひ樂んだ跡さへ文字の間に殘してゐない。「鮨の喰ひ方」を論じてゐるが、うまいまづいはわからないのでは無いか、「淨瑠璃各派の節」を論じてゐるが、音樂として味はひ得るのかしらといふ疑が起る位乾燥してゐる。著者の喜びは味はふよりも「わかる事」である。わかつた事を「說く事」である。「わかる事」と「說く事」と、これが此の隨筆集の特徵である。

その「わかる事」にも、「說く事」にも、專門家の如く、四方八方から觀察したり、他人の說を引用したりする手間はかけない。聞き學問らしいものさへ、何等逡巡する事無く、自說の強さをもつて論じてゐる。我の強い書き方である。

僅かなる特志家を除いて、多くの名を成した實業家は讀書をしない。無用のおつきあひや無駄な宴會がつゞいて時間も無いのだ。樂みといへば、ため込んだ金を數へるか、妾を圍ふか、馬鹿にされたりいやがられたりしながら藝者を弄ぶとか、俗物の癖に侘だとかさびだとか云つて茶人がるとか、大概相場はきまつてゐる。繪畫には相當の興味を持つが、それは値があるからだ。買つて置いても値の出ない文學なぞはかへりみない。

さういふ連中の中にあつて、年中新知識をあさり求め、殊に現代文藝に興味を持つて勉強して居られる波多野氏の如きは珍しい。政治家や實業家の中にも、稀には筆を執つて藝術を論じる人もあるが、全く餘技といふ看板を掲げてゐるのが通例だ。それなのに此の著者は、自ら文壇人たらん事を切望してゐる。その生眞面目は尊敬すべきである。世間普通の例としては、既に一家を成した人は自分の得手とするところを固守して、新しい方面には手を出さないものだが、此の著者は往年未だはしりの域を出ない頃の野球に凝つたと同じ心意氣で、あらゆる物事に新鮮な興味を見出す意力は頗る若々しく、努力主義を奉ずる私の最も愉快とするところである。

しかし、折角興味を持つても、此の著者はそれを愛撫し、靜かに味はひ樂む事をしないらしい。明敏なる頭腦をもつて或點迄その事を理解すると、忽ち一家の說をたてゝ他人にむかつて論述說法しなければ承知しないらしい。しかもその說明は、諄々と教へるといふ風では無く、自分一人さつさと說を述べて、他人がどう考へようと頓着しない風があるらしい。「古溪隨筆」の文學的弱味は此處にある。

殊に前書によると、全篇何れも口述筆記らしく、それが爲めに一層味はひが乏しいのではないかと思はれる。輕井澤の記の如き情が無い。讀者は、はゝあ左樣ですかといふ外は無い。そんな

事は著者の欲するところで無いと云はれるならば、吾々には緣の無い事になる。「わかる事」と「說く事」ばかりで無く、味はひ、時には溺れる事もあり度い。さうなつてこそ始めて文學的の風味と氣稟が伴ひあらはれるのである。（大正十五年六月九日）

――「三田文學」大正十五年七月號

讀後所感

◇最近讀んだ小說で一番感服したのは志賀直哉氏の作「痴情」(中央公論四月號)である。結末の手紙は學習院育の人に特有の機智が顏を出して來て全作を輕くしてしまつた感があるが、それは僅かなるきずで、私は三度つゞけさまに繰返して讀んで息苦しくなつた。小說修業のむづかしさを痛感したのである。

◇最近讀んだ小說で一番愉快だつたのは、川端康成氏の作「文科大學挿話」(女性五月號)である。全體の組立にたるみがあつて、完成品の感じは無いが、上品で且つ素晴しくいきいきした文章から、新綠の頃の微風の如き快感を受けた。私は今日迄此の作者の作品を見る機會が少なかつた。恐らくはもつと勝れた作品が既に存在するのであらう。讀後、創作の樂しさをしみじみおもつた。

◇今東光氏の作品は豫て私の愛誦するものである。少なからずけれんはあると思ふが「海の良人」

人らしい心持を多分に持つてゐるらしい。後者がはゞをきかせる時、作品に破綻が來る。私が氏の小説を常に愛誦しながら、小説以外の文章を好まないのもその爲である。氏の關係してゐた雜誌「文黨」は廢刊する事になつたと聞いたが、果してほんとならば氏の小説の愛讀者として私は寧ろ喜ぶ。純情の詩をもつて作品の中に溺るゝ時、此の作者は一層私をよろこばせて哭れるであらう。

——「三田文學」大正十五年七月號

（新小説三月號）もよかつた。此の作者は多くの詩情を有する一方に、これが流露を妨げる政黨

（大正十五年六月十日）

紅蓮洞

人を呼ぶのに「氏」とか「さん」とかいふのは普通であるが、或場合には之あるがためにひどくそぐはない感じを伴ふ事がある。紅蓮洞（ぐれんどう）坂本易德氏の場合も正にそれだ。若し止むを得ずさんづけにしなければならない時は、略してグレさんといふ外は無い。世間は悧巧だ。紅蓮洞さんと呼んだ人を私は知らない。グレさんで通つた。稀に坂本さんと呼ぶ人もあつたかと思ふが、そんなら誰がさう呼んだか私も記憶しない。私自身が、時々さう呼んだ事丈はたしかであるが。

紅蓮洞自身が人を呼ぶのに、敬稱を用ゐるのは福澤諭吉先生丈だつた。福澤先生丈は、福澤先生とか、或は單に先生と云つた。若い時に三田の山で親しく教を受けた時のならはしが消えなかつたのであらう。外の人はすべて呼びつけだつた。第三者の話をする時は、その名前をいふか、然らざれば「あいつ」だつた。面とむかつて居れば「あいつ」が「お前」に變るのである。

私は紅蓮洞の閲歴を知らない。明治以前の出生か、明治生かも審かにしない。明治二十一年に慶應義塾を卒業した事丈は、手近にある同塾の卒業生名簿で知つた。これによつて推測すると、明治以前の出生らしい。

出生地については、

「俺は江戸子ぢやあないよ。」

と自分で云つて居た。そんなら何處の産だと訊くと、

「麻布だ。」

と羞しさうに答へた。紅蓮洞は人一倍羞しがりで、かゝる時酒さびの滲み出てゐる顔面にうすく紅を潮するのであつた。

「麻布なら江戸でせう。」

と重ねて訊くと、

「べら棒めえ、麻布なんざあ江戸のうちにやあへえられねえんだ。」

と吃りながら見榮を切つた。

十數年前、吾々が學生時代に聞いた話では、紅蓮洞は塾の文學部長川合貞一氏などゝ同時代の

秀才で、就中數學の天才と稱されたといふ事だつた。誰から誰に傳つたのか知らないが、意外な話だつた。當時、紅蓮洞は既に酒毒の廻つた人間になつて居て、數學などゝは縁もゆかりも無ささうな柄だつた。

紅蓮洞の名は夙に雜誌や新聞で承知してゐたが、親しく風貌に接したのは、明治四十三年に「三田文學」が生れてからである。文學會の講演會や茶話會には缺かさず姿を見せた。九代目團十郎に比べた人のあつた程異色ある長面で、その筋肉のすべてが病的に弛緩し。爛れてゐた。甘郎の一族然たる顎を撫でながら、何時も着流しで、よいよいじみた足どりで飄然とあらはれるのであつた。

慶應義塾の學生は、むかしは和服の着流しだつた。嘘かまことか、學生に袴なんか無用の贅澤だと福澤先生がいつたといふのである。大學部は申す迄も無く、普通部の生徒さへ袴をつけず、中には絹物づくめで雪駄をちやらつかせて教場へ出る者も見かけた。紅蓮洞もその時代の心持を失はなかつた。

「袴なんか穿く奴は神田の書生だ。」

とすくなからぬほこりをもつていひ切つて居た。

先輩紅蓮洞の慶應義塾の昔話は面白かつたが、いかなる會に出て來ても、會費を拂つてくれないのには弱つた。もともと切詰めた會費だから、一人でもたかられては閉口する。したがつて紅蓮洞の出現は歡迎出來なかつた。どうして嗅ぎつけて來るのだらうとか、何とかして會のある事を知らせない工風は無いものかといふやうな冗談をいひあつたものだつた。かまふもんか、無理にも會費を取つてやれといふので、一人が近々と進んで請求した事があつた。紅蓮洞は色をなして、

「無え。」

と一言の下にしりぞけた。恐らく彼は何處へ行つても木戸御免で、會費なんか請求された事は無かつたのであらう。しかし、さも威勢よく「無え」とは云つたものゝ、間の惡さはかくせなかつた。前にも書いた通り、私は紅蓮洞を羞しがりと睨んでゐた。「無え」といふ一言も、その外に手が無いから云つたまでゞ、紅蓮洞の本音では無いと思つた。

さういふ風に敬遠しながら、吾々の仲間は紅蓮洞を嫌つてはゐなかつた。落魄の一生ではあつたが、肚の底には舊幕時代の武士の持つてゐたやうな意地があつた。痩我慢があつた。私はそこが好きだつた。

紅蓮洞が、どういふ風にして衣食の資を得てゐたのか今以て私にはわからない。學校を卒業すると、一寸の間土佐の中學の先生になつたさうだがつとまらなかつた。

「教師なんて、俺の性分に合はねえんだ。」

と自ら稱してゐた。

その後はたぶん文筆をもつて稼いだのであらうが、國木田獨歩氏などゝ共に戰時畫報の記者たりし外に何を職としたか知らない。新聞や雜誌に時折短い雜文を書いたのは見たが、かさだかな稿料の酬はる可き質でも量でも無かつた。勿論まとまつた著述などは無く、何時かあらはした筈の短文集の如きも、本文よりは文壇知名の數十氏の序文によつて有名だつたのだ。玆にあらはした筈としたのは、私はその廣告を見たばかりで、實物を見てゐないのである。果して上梓されたかどうか一脈の疑さへ持つてゐるからである。

紅蓮洞は小說も戲曲も書かなかつた。批評も筋の立つたものは無かつた。徹頭徹尾雜文に終始したのである。若い時はいざ知らず、後には文學そのものに興味を持つてゐたかどうか疑問である。彼の興味は文壇劇壇たつたらしい。しかしその文壇を罵つても、女優の內輪話をしても、堂々と壓して行く力が無かつた。息が續かなかつた。持崩したたらしの無い生活と、病氣の爲めか

酒の爲めか、しやつきりしない體とは、到底努力を要する仕事には堪へられなかつたのである。

結局紅蓮洞は、文筆の士だつたかどうか疑はしい位だが、文壇の人ではあつた。かういふ不思議の存在は他にも例がある。何等筆の上の功績は無くても、單に文壇づきあひの上で、いつぱし大家らしく思はれ、自分でも大家らしく振舞つて居る人がある。しかし紅蓮洞の文壇に於ける存在は誰よりも寂しかつた。彼はどんな會合にも顏を出す事と、その特殊の風采と、家を成さない事と、つんだくれと、その他文學そのものには何の關係も無い奇行逸話によつて文壇の人たつたのである。

したがつて紅蓮洞の文學談は文壇人の噂が多かつた。誰某はけちん坊だとか、誰某は何とかいふ女文士に手を出したから怪しからんとか、誰某は義理知らずだから嫌ひたとか、誰某は僞善家だから面罵してやつたとかいふ類の事ばかりだつた。何處で探して來るのか、さういふ種類の材料はふんだんに持つてゐた。

「まさか、そんな事は無いでせう。」

と信じ難い噂に反問すると、

「うゝんや、ほんとだ。おゝおれが知つてる。」

大きな口を堅く結んで力んで見せる。一度で信じないとひどく自說をけなされたやうに思つて、俄かに卷舌の度を加へ、手を振りながら喋るのであつた。さういふ時、外の人だとうるさい感じを與へる筈だが、紅蓮洞の姿は矢張寂しかつた。世の中を罵る事によつて僅かに自分の立場に安心を見出さうとするのに、それを否定し又は疑ふ者のあるのは許し難いに違ひ無い。彼の昂奮する心持は諒す可きである。私は常に同情をもつて紅蓮洞の與太を聽いた。

紅蓮洞は慶應義塾を愛した。恐らく文壇よりも彼の心に觸れるものが多かつたのであらう。その爲めか、文壇の話よりも慶應義塾の古い話の方が面白かつた。誰彼の容赦なく惡口を云つた彼が、福澤先生の事になると、心中の尊敬をかくし切れなかつた。

小泉信吉氏が一時塾長となり、改革ぶりが學生の喜ばぬところとなつて騷動の起つた時の話も紅蓮洞得意の出物だつた。彼は小泉塾長の宅を訪れたのである。

「おゝおれは小泉の味方だつたのだが、せんせい醉拂つてるもんだからみさかひがつかねえんだ。ブランデヱの壜をひつつかんで玄關に出て來て、俺をぶんなぐらうとするのには驚いたよ。」

としかたばなしで聞かせた。紅蓮洞は小泉家の當主信三氏を知つて居る爲めに特別の面白さを感じるらしく、度々此の話を繰返した。

私は此の騷動の眞相を知り度いと思つて居る。或人の說によると、一度小泉氏を塾長にして見たものゝ、福澤先生にも多少姑根性があつて、學生側の不平に油をそゝいだ形が無くもなかつたといふ。私にはそれが戲曲的の面白さを覺えさせた。

小泉氏がブランデェの壜を手にしてあらはれたといふのは、有名なる酒豪で、一日一壜を傾けたといはれ、比較的に若くて死んだのもその爲めだといふ位だから、紅蓮洞が訪問した時、たまたま杯を手にしてゐたのであらう。非常なる美丈夫だつたと聞くから、玄關に立ちあらはれた姿は凄かつたらう。未だ若かりし紅蓮洞がいちもくさんに逃げて歸つたのを想像すると愉快である。

慶應義塾は偉い實業家を澤山出したので、紅蓮洞もその方面の先輩の名前や顏をよく知つて居た。同時代の人の批評をするのもひとつの樂みだつた。

「藤山は頭がよかつた。」

さうかと思ふと、或大會社の主腦者をつかまへて、

などゝ顎を撫でゝゐた。

「おめえ今何してゐる。」

と問ひかけ、その人が會社に勤めて居ると答へると、

「外交員か。」

とたゝみかけ、重役だといふ返事に驚いた話もあつた。

「あいつは頭の悪い奴だつたが、會社なんてものはあんな奴でも結構つとまるんだなあ。」

と、私が會社員なのでいやがらせを云つたものだ。

慶應義塾には評議員といふものがあつて、それが亞米利加などのやうに金を寄附する役目をしよつて甘んじて居るのでは無く、常に姑の位置を保つてうるさく口を出すものらしい。大分近年は非難の聲が高く、騒動好の學校なら夙に問題を惹起して居る筈だが、事を好まない此の學校では精神的怠業の形をとつてゐるやうである。その評議員の選擧に、我が紅蓮洞は多大の興味をもつてゐた。あんな奴を選擧してはいけないとか、もつとわけのわかる奴を出せとか、かげで力んで居るばかりで無く、自ら選擧開票に立會つた事もある。自分も評議員になり度かつたらしい。文學部出身者が氣を揃へて投票したらどうかなる位の夢は見てゐたらしい。開票に立會つた時、紅蓮洞の外にはたつた一人しか居なかつたさうである。

「どうも塾の奴は不熱心でいけねえ。」

と慨嘆してゐたが、それでも、

「俺に投票した奴もゐやあがつた。」

と相好を崩した。私は常に紅蓮洞の爲めに淸き一票を惜まなかつた。

紅蓮洞がどうして暮らしてゐたかは私の不思議とするところだが、或人にきくと、女優達の巾着からみつがれるのだと云ふ話だつた。果して眞か僞か、私は保證しない。彼は年中貧乏して居たにもかゝはらず、他人にねだりがましい事をしなかつた。勿論電車賃や烟草代や飲代位はあつさりねだつたらうが、少なくとも、それをいさぎよしとしない所があつた。だから、かへつてみつがれる事になつたのかも知れない。紅蓮洞と女とは餘程緣遠く思はれさうで、その實彼は女性愛護者の一人だつた。女にはひどく親切だつた。その味方だつた。

或時代に、新しい女と呼ばれてゐたはねつかへりがあつた。何の素養も無いくせに音樂會を催して獨唱を聽かせたり、芝居をして見たり、さうかと思ふと忽ち人の妾になつたりして、しきりに噂の種子を蒔いた。その女を、紅蓮洞は言葉を盡してかばつて居た。

「あいつは馬鹿だ。人がよすぎやあがるんだ。」

といふやうな事を繰返してゐた。その女はたやすく男の自由になる。或大劇場の重役と關係があつた。それで、普通ならば別れる時には金にこだはる筈なのに、何の要求もしずに綺麗に身を

引く。紅蓮洞はそれを馬鹿だ、人がよすぎると荒々しい口調でいひつゝ、心中大に稱讚してゐたのである。

嘗て私のところへ小說の原稿を持つて來た女の人があつた。その小說は十七八の娘の手になつたものとしてはしつかりして居た。一二の作は私が紹介して雜誌に載つた。紅蓮洞はその人を何處かで知つて、何とかしてものにならないものかとしきりに力瘤をいれて居た。眞面目に勉強すればいつぱしの作家となるべき人たつたが、雜誌記者になり、新聞記者になり、やがてぐれてしまつたらしい。一二度、引眉毛厚白粉頰紅といふ定石通のモダアン・ガアルになりすまし、好みの悪い洋裝で、金があつて道念の無さゝうな男とつるんで歩いて居るのを見たが、その後の事は知らない。紅蓮洞に訊いてみたら、

「あいつは淫賣になりやあがつた。」

と忌々しさうにいつてのけた。

或時、婦人雜誌の女の記者がたづねて來た。夏の事で、御手製らしいうすつぺらな洋服で、その洗濯もあまり行屆いてはゐなかつた。中年の女の洋服を着てゐるのは大概田舍者に限つてゐるが、その人も上野か下野かあつちの方の訛のひどい言葉で、しきりに小說を寄稿しろと勸めた。

「あたくし未だ斯ういふ仕事に馴れませんのよ、いつたい如何したら書いて頂けるんでせう。」

などゝ、白粉の厚い顔を傾けて質問した。私は、多忙で執筆の時間に乏しく且婦人雜誌は好まないといふ理由で斷つた。その翌日、紅蓮洞がひよつこりやつて來た。

「おい、昨日洋服を着た女がやつて來たらう。あいつは俺が差向けたんだ。」

新米の女の雜誌記者にからかひ、又その女の樣子を私がいやがるに違ひ無いといふところに興味をもつて、あいつに書かしたら偉い、うんといはせたら一人前だなどゝけしかけたのであつた。

「變な奴だつたらう。ゑ、變な奴だつたらう。」

さも面白さうに笑つてゐたが、

「けれどもなあ、書く氣があるなら書いてやれよ。」

不馴な女記者の爲めに承知しろと、しまひには眞面目になつて云つた。紅蓮洞の本音なのだ。

その時は、彼が私に對するたつた一度の訪問だつた。

紅蓮洞は、何時も洗ひざらした着物に兵兒帶をしめ、ちびた下駄をひき擦つて居たが、たつた一度背廣の服を着たのを見た。昔のものをつゞらの中からでも引張り出したのか、或は誰かに貰つたのか、借着か、色の褪せた紺無地で、ネクタイは茶色のを結んでゐた。ひどく似合はなかつ

た。平生の紅蓮洞にはありあまる程異色があつたので、あたりまへのみなりをしては却つて可笑しかつたのである。本人もひどく羞しさうに、置きどころの無い手を、しきりにネクタイに持つて行つた。

その後ルパシカを着て歩いて居る時代もあつた。最初その姿を見たのは報知講堂で、新派の若手の勉強芝居のあつた時だ。稍濁りを帯びた緑色のルパシカを着て、勞農露西亞然たる面魂（つらだましひ）に見えた。紅蓮洞は子供のやうににこにこして、大勢に取巻かれて居た。新しい此の服裝は、某夫人からの贈物だといふ事であつた。どうも女の人に可愛がられる性質をもつてゐたやうである。

大正十二年の夏の事であつた。淺草の公園劇場で岡田夫人の「黃楊の櫛」を上演した時、私は作者や久保田万太郎氏と共に見物した。場内で紅蓮洞といつしよになつた。開演中に、誰が聞込んだのか、有島武郎氏が輕井澤で心中したといふ噂が吾々の耳に傳へられた。有島氏はかねがね謹嚴な人として通用して居た。文壇の消息通こそ、彼の女此の女と怪しいと、三四の人の名をつらねて話のたねにしたやうだが、女性の崇拜者の多い作者に對する嫉妬か、からかつて面白がらうといふ無責任ないたづらだらうと思つて居た。殊に心中とは突飛過ぎて信じられなかつた。

「まさか。」

私ははつきりさう云つた。

「いゝえ、讀賣新聞の記者から出た話なんです。相手は例の夫人ださうです。」

と一大事に遭遇した人に特有の呼吸の切迫した様子で確說する人もあつた。當時二三の新聞が堂々と誤報した如く、美貌で聞ゆる某代議士夫人が相手だといふのであつた。その夫人と有島氏との間がたゞ事ではないといふ噂は屢々聞いてゐた。矢張ほんとだつたのかとつぶやく人もあつた。

幕間(まあひ)はその話で持切つた。久保田さんの贔負にしてゐた淺草のうまいもの屋先代まるきの亭主は奇聲の持主だつたが、平生有島氏を崇拜してゐたものか、すつかり昂奮して、

「えらい方ですねえ。どうも實に偉い方ですねえ。」

と上(うわ)ずつた調子で繰返し繰返し、人々の間を泳ぎ廻つた。あれ丈の資產とあれ丈の聲望のあつた人が、女の爲めに命を捨てゝ惜またかつたのが偉いといふ積りだつたらしい。

「べら棒めえ、俺ああいつはでえ嫌(きれえ)た。」

と一方では紅蓮洞があたりを憚らず有島氏を罵つて居た。

「あいつは女郎買をする勇氣がねえからいけねえんだ。金を出さねえでこつそり他人(ひと)の女房なん

かに手を出しやあがるからいけねえんだ。」
これもひどく昂奮して吃りながら辯じてゐた。紅蓮洞の解釋は頗る簡單明瞭だつた。慾情があるなら廓へ行け。其處には天下御免の公娼がゐる。それなのに世間をはゞかつて、こつそりいたづらをするのは怪しからない。殊に他人の女房と關係するが如きは許せない。若しも亭主に見つからなかつたら、何時迄人をあざむいたかわからないと罵るのだ。
「けゝけちだからいけねえんだ。こゝこん性が汚ねえんだ。」
全然戀だとか愛だとかいふ事は問題にしなかつた。豫々私は、紅蓮洞は定木にあてはまらない生活はして居るが、根本には舊道徳を重んずる事極めて厚いのを知つて居たが、此の時は彼の道徳観念から、どうしても有島氏を許す事が出來なかつたらしい。他人事ならずとする氣勢を示した。偉い偉いと繰返して奇聲を發してゐた流石のまるきも、紅蓮洞の激越なる怒罵の前ではけげんな顔をして口をつぐんだ。まるきは、文壇的の見方をすれば誰しも有島氏のとつた道を是認するものと思つてゐたらしかつた。
紅蓮洞は酒のみ、私も酒のみであるが、大勢の會合は別として、二人きりで飲んだのはたつた一度しかない。私は紅蓮洞の舊幕精神を好み、何時か一度ゆつくり飲みながら話し度いと思つて

ゐたが、機會が無かつた。たぶん地震の前と思ふが、夏の夕方、私が平生獨酌を試る銀座の岡田へ紅蓮洞を誘つた。格子縞の單衣はつんつるてんで、はだけた胸からのぞかれる肋の邊の骨だつて見えるのが、ひどく哀れつぽかつた。紅蓮洞は名だゝる豪酒と想像してゐたところ、一向飲めないのは意外だつた。昔は飲めたのだが、體の衰へと共に弱くなつたのかもしれない。その日は僅かに二三合しか飲まなかつた。喰べるものには殆んど箸をつけなかつた。

「俺は喰へねえ。喰ふものは何もいらねえんだ。無駄だからよせ。」

何か口に合ふ物は無いかと心配するのを、手を振つて止めた。酒さへあれば何もいらないといふのだ。

これよりさき、紅蓮洞が博覽會だか共進會の飲食店を廻り歩いて試食した記事を婦人雜誌で見た事があるので、私並に旺盛なる食慾を持つて居るものと思つてゐた。

「あいつには流石の俺も弱つたよ。雜誌の奴が引張廻しやあがつて、酒を飲むと歩かなくなるといふので、ちつとも飲ませずに喰はせやあがるもんだから、腹がはつてたまらなかつた。ほんとにひどいめにあはせやあがつた。」

今でもお腹がいつぱいで苦しいといふやうな顏をして、さも不平らしく話した。

紅蓮洞は醉顔を崩してのべつに饒舌を振つてゐたが、ふだんから怪しい舌は直ぐにもつれて、話は愈々筋が通らなかつた。いゝ御機嫌で同じ話を繰返してゐた。數々の御しやべりの中で、私が今でも覺えてゐるのは、彼がむかし數學の天才だといはれた自信を、未だにはかない自慢にしてゐる事だつた。

「數學程下らねえ學問はありやあしない。あいつは學問とはいはせねえよ。どうして世間には數學の出來ねえ奴がゐるのか、いまだに俺にはわからねえんだ。二と二をよせれば四つになるつて事は、開闢以來變りはないだらう。だから外の學問と違つて、數學には進歩つてものがねえんだよ。」

最初私は、紅蓮洞と飲むのもいゝけれど、あんまりだらしなく長々とお相手をさせられてはかなはないと、内心びくびくして居たが、いざとなると私の方が長尻で、紅蓮洞に促されて其の家を出た。しかし紅蓮洞はそのまゝでは別れなかつた。私を引張つて近くの露西亞屋に行つた。其處には御定連が大勢ゐて、紅蓮洞は忽ち一座の中心になり、火酒（ウオツカ）を二三杯ひつかけて、共々に夜更の銀座に出た時は、すつかり足もとが危なくなつて居た。

地震後、私はしみじみ紅蓮洞と話した事が無かつた。時々芝居などで顔を合せる事はあつたが、

肉體の衰へが目立ち、口をきいてもとんと氣勢があがらなかつた。何處か體が惡いのではないかしらと、かげながら心配して居た。

紅蓮洞が病氣で、よくないさうだと聞いたのは去年の夏だつた。ひとりもので下宿住居に違ひ無いから、さぞかし困つて居るだらうとは思つたが、つい見舞にも行き兼て居るうちに、中央新聞で見舞金を募る企てが發表された。報ずるところによると、重態の紅蓮洞は、友人の盡力で築地の聖路加病院に入院して居るが、或は再び毒舌を振ふ事はむづかしいかもしれないといふのであつた。久保田さんも御見舞を贈り度いといふので、御一緒に願ふ約束をして居たが、忙しさにまぎれて新聞社へ金を届ける時を逸してしまつた。

見舞金は相當に集まつた。一時あやふいと云はれた紅蓮洞は又盛返し、此の分なら助かるかもしれないといふ記事が出た。筆者は、紅蓮洞は見舞金の集まつた時に死んでくれなくては困る。本復して病院を出て來ては困るなどゝ手きびしい諧謔を弄した。

その記事に促されて、久保田さんと私は十月のはじめに病院を見舞つた。水に近い秋の空はあかるく澄んで、築地の燒跡の草原にある病院をめぐつて涼風が立つてゐた。

紅蓮洞は看護婦に守られて寢てゐた。一時よかつたのはほんとだけれど、その頃は又微熱が出

て、あまりいゝ容體では無かつた。目に白く薄い膜がかゝつて居た。附添の看護婦がいやな奴で、病人の前でつけつけと氣になりさうな事を喋つた。

紅蓮洞は元氣が無かつた。何か口を動かしても、何をいつてゐるのかわからない事が多かつた。それでも醫者や看護婦を罵つて快とした。

「あいつらは病氣をあつかふ事は知つてるかもしれねえが、人間をあつかふ事を知らねえ。」

枕もとには女優に贈られたカステラの箱があつた。

あまり長居はよくないと思つて、看護婦のゐない時に、兩人からの御見舞を紙に包んで出した。

「いらねえ。金なんかいらねえよ。」

紅蓮洞は力の無い聲で拒んだ。

「貰つたつて酒が飲めるわけでもなし、つまらねえ。使ひみちがねえんだ。」

しきりに繰返してゐたが、

「そんなら石井つて男に渡して貰はう。そいつが俺を此處に入れてくれたんだ。」

と云つてやうやく受けてくれた。石井氏といふのは、竹本綾之助の良人で、紅蓮洞の學校友達である。綾之助との戀物語は、誰も知る話だが、その人が病院の事務に携つてゐたのだ。

辭去しておもてに出ると、二人は紅蓮洞の命數のもう長くない事を語合つた。果して間も無く死んだのである。

紅蓮洞は家を成さず、仕事をしず、放浪者として一生を終つた。世間はだらしの無いのんたくれと思つたり、豪放磊落な人だと思つてゐたやうだが、さうでは無い。彼は極めて小心、神經質なモラリストだつた。あらゆる因習を意に介さない樣な顏をしながら、全くそれにとらはれてゐた。

其處にあの人の味があつた。舊幕時代の名殘、明治初年らしい精神をもつてゐた。たゞ性格の弱さが、その精神を積極的に生かさないで、一種のすね者らしい形となつて現はれてしまつた。その爲めに寂しい一生だつたのだ。失敗は失敗で仕方が無い。紅蓮洞は人となり極めて善良で、誰からも愛され、不思議な容貌風采をいたる所にあらはして、身をもつて一篇の小說を描いた。私は何時迄もなつかしく想ふのである。(大正十五年六月二十七日)

――「三田文學」大正十五年八月號

「愛慾」を見て

武者小路實篤氏の戯曲「愛慾」は雜誌で讀んだ時は感心しなかつた。私は此の作者を尊敬し、その作品を愛讀してゐる。但し氏の思想に感心するよりも、その思想をはつきりと表現する獨特の腕力に敬服してゐるのである。しかし「愛慾」には餘計なものが多くて、肝心なものにぴつたりと觸れる事が出來なかつた。ところが、築地小劇場の舞臺で見るに及んで、私は又感心した。土方與志氏の指揮する演出が素晴しい効果をあげた。冗長なところが大分影をかくし、いゝところが明かにあらはれて來た。作者と演出者の血液に一脈相通ふものがあるに違ひ無い。殊に第一幕の底力には全く壓倒されて、見てゐても呼吸（いき）が詰るやうだつた。プログラムの端に、ストリンドベルヒに比較した言葉が書いてあつたが、ほんとにおし迫る幅の廣い力は日本離れしてゐた。私は感激の極涙に似たものが鼻や咽喉（のど）にいつぱいになつた。惜い事にその作品の力は持續しなかつた。

幕數を重ねるにしたがつて、無駄が我もの顔に出しやばつて來た。主人公がその妻を殺してから後の二幕の如きは、全然無い方がよい。惡夢の場の如きは失笑を禁じ得なかつた。案ずるに、作者は陰慘たる此の戯曲を陰慘なるまゝに大詰にしては置けなかつたのであらう。自分の理想をもつていろどらなくては心がすまなかつたのであらう。それが戯曲の效果を弱める事を知らなかつたのか、知つてゐても、なほ且敢てしないではゐられなかつたのか、私は知らない。何れにしても理想に執する人は、時に理想の重荷にわざはひされる。私は作者の心持に同情すると共に感慨深きものがあつた。（大正十五年八月五日）

――「三田文學」大正十五年九月號

「デリケート時代」を讀みて

「三田文學」八月號に出た小林きよ氏の小說「デリケート時代」を讀んで感心した。小說といふよりも小品といふ方がぴつたりはまる樣な作品だから、力瘤を入れて批評する丈の材料は與へられないが、私は作者の素質により多く感心し、深い期待をもつて第二の作品の發表を待つものである。此の作者は、鋭い感覺に觸れるものを、明敏な理智で批判し、巧妙なる選擇を行つた上で、適確に表現してゐる。底力ある文章には、新鮮純眞の感と豐かなる柔軟性が伴つてゐる。得やすからざる文品で、作者の氣稟も迫つて來る。きくところによれば、小島政二郎氏が多大の助言を與へてゐるさうだが、その爲めか、文章の句切り方や、物のいひあらはしに小島氏の影響の少なくない事を認める。「デリケート時代」といふ餘りデリケートで無い題名も「生理的腫物」の作者の近頃の好みに媚びるものではないだらうか。此點は私のあたらしとする所である。（大正十五年八

月五日）

——「三田文學」大正十五年九月號

山を想ふ

富士の嶺はをみなも登り水無月の氷のなかに尿垂るとふ

與謝野寛氏の歌だ。近頃の山登の流行は素晴しい。斷髪洋裝で舞踏場に出入し、西洋人に身を任せる事を競ふ女と共に、新興國の産物である。一國の文化に古びがついて來ると、人々は無闇に流行を追はなくなるが、國を擧げてモダアンといふ言葉に不當の値打をつけてゐる心根のはびこる限り、生理的に山などへ登つてはいけない時期にある娘もいつしよになつて神域を汚す事は、活動寫眞じこみの身振と共にすたらないであらう。高きに登りて小便をする程壯快な事は無いと云つた人があるが、女もその快感を味はゝんが爲めに、汗臭くなつて健脚をほこり、土踏まずの無い足で富士の嶺を踏つけ、日本アルプスを蹴飛ばすのか。

机にむかつて無責任にこんな事を考てゐる私は、むげに登山熱に反對するものでは無い。實は

私も充分時間があつたら、山頂の曉に放尿する快感を味はひ度いのである。望んで行へないので、些かやけ氣味になつてゐるかもしれない。

日常生活に追はれてゐる私には時間が無い。自由に遊ぶ休息の時間が充分に惠まれてゐない。勤務先の會社の內規としては、一年間に二週間を限つて請暇を認められてゐるが擔當してゐる仕事の性質上、私はそれ丈の休暇をとつた事が無い。今年の如きは、上役が突然退職したので、一日も休めなかつた。或は今後も、世間所謂使用人の地位を脫しない限り、幾年の間休暇の無い生活を送るのでは無いかとさへ悲觀する事もある。そして、机にむかひつゝ海を想ひ山を想ふのである。年齡の關係か、年々海よりも山の姿に心が向くやうになつた。むかし富士山に登つた時、砂走で轉んで擦むいた膝子の傷痕を撫でながら、日本晴の空にそそり立つ此の國の山々の姿を想ひ描くのである。

山といふと、私は第一に淺間山をなつかしく思ふ。燒土ばかりの富士の山は、遙かに下界から仰ぎ見るをよしとする。空氣の固く冷たい信濃の高原の落葉松の林の向うに烟を吐く淺間は生きて居る。詩がある。私はまだ、山の彼方に幸ひの國があると夢見てゐた少年の日に登つた。

もつとも、一度は麓迄行つて大雨の爲めに追拂はれてしまつた。既に二十二三年前の事である。

當時の相棒と東京を立つ時は、先づ長野に行き、それから輕井澤に引返して淺間へ登らうといふ計畫だつた。

古びた記憶の中に、旅で逢つた二三の人の姿がはつきりと殘つてゐる。その中には、汽車に乘合せた旅役者の群もある。座頭らしい薄痘瘡(うすあばた)の男、その女房、十二三の娘、色の青白い黒眼鏡の女形らしい男、その男に寄添つてゐる十八九の田舍娘。空想好の私は、外の者とは口もきかず、寧ろおど／＼しながら、只管隣席の男に身も心もゆだねた樣子でもたれかゝつてゐる田舍風の女を見て、旅役者にだまされて家を捨てたのでは無いかと想ひ、硯友社時代の小説のやうにはかない行末を作りあげて同情した。しかし、さういふ女がゐたといふ事はつきり記憶してゐるのだが、その顏かたちはすつかり忘れてしまつた。否、その女ばかりでは無く、一座の者の顏かたちも、たつた一人の座頭の外はすつかり忘れてしまつた。どうしたものか薄痘瘡の座頭丈は、その後歌舞伎座や帝國劇場の大舞臺を見てゐる時、何のきつかけも無く想ひ出すのである。色の褪めた大形の鳥打帽子、浴衣の上に腑のぬけた絽の羽織を着て、仲間うちでは格式を示しながら、側にゐる唐人髷の娘に饅頭を二つに割つて半分を與へ、あとの半分をさもうまさうに喰べてゐた姿を、三等の汽車に特有のお辨當のにほひと共に想ひ出すのである。大歌舞伎の舞臺を見ながら旅

役者を想ひ出すのは、如何いふ連想の脈が成立つてゐるのか知らないが、こんな無益に立派な劇場を一日買切つて、あゝいふどん底の役者に思ふ存分の芝居をさせて見たいと思ふのである。

八月のなかばだつたが、碓氷峠を越ると秋の景色だつた。百合撫子萩桔梗紫苑女郎花を吹く風の色か白かつた。草津へ通ふ馬の背の客の上半身が草の穂の上にあらはれてゐた。淺間は男性的な姿を空に描いて居た。

長野の町は吾々の氣に入らなかつた。善光寺の御堂も淺草の觀音様程なつかしくなかつた。御燈明をあげ、お階段廻りをして外に出ると、山の影が町に迫つて既に暗かつた。

此處に一泊するのはつまらないといふので、姨捨の月を見る事にした。

驛の待合室で見た光景も忘れ難いものであつた。手に手に提灯を持つた巡査、フロック・コオトや、紋附の役人や土地の有志に取巻れてゐる、群を抜いた大男と、川島武男のやうに氣取つた士官と、喪服の婦人を見た。大男は知事で馬鹿々々しく尊大な態度だつた。喪服の婦人の良人で、海軍士官の兄に當る人が此地で死んで、遺骨が見送られる場面だつた。それ丈の事ならば長く記憶に殘る筈は無いのだが、その婦人が勝れて美しいといふ方では無かつたけれど四圍と調和しない程粋なからだつきで、泣いた頰におくれ毛のへばりついたまゝ、冷々として見送の人を見てゐ

たのである。そのめつきは、ながしめといつてもよく、きつく結んだ口邊には冷笑に似た影さへあつた。藝者の風情を持つその婦人は、喜多村緑郎が手がける泉鏡花先生作中の人物のやうに思はれた。私と相棒とは、後々迄此の婦人にさまざまの色彩をつけ足して噂した。

屋代で汽車を下りて車に乘つた。折柄の名月で、爽かな音を立てゝ流れる千曲川は銀色に光つてゐた。長い橋を渡る時欄干に腰かけてゐる二人の女を見た。その一人が此の邊には珍しい都の風情だつた。白いうなじと廣い帶を車上から見て過ぎたが、前の車に乘つてゐる相棒も振返つて見てゐた。

車やに連れこまれたのは汚ない旅人宿だつた。麥酒と林檎を持つて直に姨捨に登つた。稻が延びてゐるので田毎の月の趣は無かつたが、虫の音が滿山をこめて幼稚な詩情を誘つた。

宿に歸ると、あがりがまちに先刻の車やの一人が酒を飲んでゐた。吾々を見ると、これから郡の大雲寺といふのに案内するといひ出した。

「わしやあ錢ほしいぢやあねえでごわす。道歩くのが道樂でごわすから。郡の大雲寺の石垣はまづ大きいものでごわすわ。わしやあ知んねえが廣い東京にもあれ丈のものはごわすまい。春はまづ櫻の名所でごわすわ。わしやあ錢ほしいぢやあねえでごわす。」

と呂律の廻らないのがしきりに御伴(おとも)するといふ。こんな汚ない宿屋にゐても面白くないから、勧めるまゝに従つた。車やは千鳥足で先に立つたが、ふらふら揺れて行く月下の影は狐のやうだつた。

ある家の洋燈(ラムプ)の下に五六人車座になつて賽ころを振つてゐるのを見た。車やは其處で烟草を買つた。

「やい、誰だ。此處迄來て寄らねえつつうことがあるか。やい、面あ出しやあがれ。」

と外に待つてゐる吾々を見て怒鳴つた男があつた。頬髯の凄い男だつた。

大雲寺といふのまで三十丁もあつた。境内には大きい池と、それを取卷く櫻があつた。花見の時には此の池に舟を浮かべて遊ぶ。

「そん時はお女郎がわしらの車に乘つてくれるでごわす。」

と車やはひどく光榮がつてゐた。池と櫻とは月光を浴びて私の記憶にあるが、どんな寺だつたか、いかなる由緒があるのか一切忘れてしまつた。醉拂ひの車やは、それからお女郎のゐる所へ案内して呉(くれ)ると云つたが、やうやく斷つた。宿に歸つて二階の座敷に寢たが、夜具の惡臭はまだしもとして、忽ち全身に蚤が這ひ始めた。四疋五疋つかまへてつぶしてゐるうちに、手足腹胸首

背中、全身はれあがつてしまつた。一睡も出來ないで曉の光を見た。

朝の飯は臭くて咽喉を通らなかつた。吾々をあてこんで同じ宿に泊つた車やが、もう一人つれて來て驛迄乘せて行つた。

吾々は上田(うへだ)へ寄つて、その日輕井澤へ行つた。停車場前の油屋といふ宿屋にとまつた。時々雲は去來したが、空は眞靑に晴れてゐたので、その晩十時から登山の爲めに出立し、翌朝下山したら直ぐに汽車に乘つて、途中妙義山に登らうと日程を定めた。縁側に出て見ると、淺間は鼻の先にあつた。湯に入(はい)つて長々と寢そべつてゐると、不意に障子が暗くなつた。あけてみると、山の方はすつかり霧にかくれ、風は水のほとばしるやうに草を分けて吹いた。忽ち大粒の雨が縁側を打つて横ざまにしぶいて來た。

翌日も雨は止まなかつた。隣室の客が、此の雨は東から來たから五六日は晴れまいと話してゐるのを聞いて、急に思ひ切つて歸る事にした。ふりかへつても振返つても、淺間は姿を見せなかつた。

翌年、恰度同じ頃に、私は一人で東京を立つた。前の年の相棒も同行の約束だつたが、俄に都合が惡くなつて斷つて來た。しかし、今度は淺間山麓に一人の友達が待つてゐた。

小諸なる古城のほとり
　雲白く遊子悲しむ
と島崎藤村先生のうたつた城趾を訪ひ、又先生や三宅克己丸山晩霞などといふ人が教鞭を執つたといふ小諸義塾も見た。友達も其處で學んだのであつた。
山國の石の多い、傾斜した町の姿は面白かつた。惠まれない天然に抵抗して土にしがみついて生きてゆく信濃の國は人の心を嶮しくしてゐる。議論好で、堅意地で、どうしても負けないぞといふ根性が深い。さういふ人の姿が、燒土にしつかりとまきついて離れない蔓草にも想ひ見る事が出來た。歡樂を知らない町の向うに、不平さうな顏をした淺間が烟を吹いてゐた。
友達の家は小諸から小一里あつた。土地の舊家で、ひつそりと廣い家だつた。緣も柱も磨き込んで黑光してゐた。私に與へられたのは新建の二階で、長方形の恰も小學校の教室の樣な部屋で、疊をかぞへたら二十五枚あつた。窓から首を出すと、空氣が澄んでゐて、遠方の山の肌迄はつきり見えた。靑い草は香が高さうだつた。窓の下には細流があつた。大きな柳のかげに水車が廻つてゐた。その流から水を引いた池には、肥つた鯉が群つてゐた。夕方の景色は一層美しく、夜は星が數限りたく輝いた。山風のひやひやする野に出て見た。田圃道で出あふ人が、みんな、

「おつかれ。」

といふ挨拶をした。

次の日の朝、丘の向うの聖護院(しやうごゐん)といふ禪寺から、

「東京のお客さんが見えてゐるならお遊びにお出でなすつて。」

といふ使が來た。七十を越(こし)た老僧がたいくつして困つてゐるのだ。露を踏んで、なだらかな丘を越(こえ)て行つた。

小柄な住職は、少し黄ばんだ白髯をしごきながら、信州辯で喋つた。ペロリ〳〵と舌を出して、上唇をなめる癖があつた。

「近頃こちらには窒扶斯(チフス)がはやりやしてなあ、昨夜も此の先の村の者が一人いけなくなりやしたが、全體窒扶斯つうものは喰ひ度がる病だから、構はずうんと喰はせるがいゝでごわすわ。そいつを今時の醫者は、やれ何を喰はしてはいけねえのつつうて喰ひ度がるやつを喰はせねえで殺してしまふでさあ。わしら若い時飛驒(ひだ)に行きやしたが、あちらあ赤痢が地方病でごわしてなあ、まるで村中赤痢だつつうに死ぬ者あ一人もねえでごわす。それつつうが、みんな赤痢の性質をわきまへて居るからなんで、なんでも赤痢は命にかゝはる病ではねえやつで、病人がしきりに糞をま

り度がつちやあ便所へ行きやせう、ところが出てえには出てえだが、さて出ねえのが此の病のきまりでごわすから、何度通つても同じだ。たゞからだをこはすばかりでごわすわ。これで皆いけなくなりやすが、それにやあ病人を便所へやらねえ工風をしねえぢやあいけやせん。まづ爐の上に板を渡し、又その上に蒲團を敷き、蒲團も板も病人の着物も、恰度お尻の當るところをまるく切抜きやして、病人がまり度がつたつちやあ寢かしたまゝでやらせるやうにするでごわすわ。それで醫者の藥は駄目でごわすから無花果の葉を煎じていやつつう程飲ませるがいゝでごわす。飛驒ではみんなそれで助かるんで、なあに醫者の藥なんかきくもんぢやあごわしねえ。一體藥つつうものは人間の壽命を延ばす事は出來ねえもので、たゞ苦痛をすくなくするばかりでごわす。人間つうものは生れた時から十歳で死ぬか七十で死ぬかちやんときめられて來るものだで、藥だらうが何だらうが壽命丈はどうする事も出來るもんぢやあごわしねえ。人間何時死ぬかつう事も、親の生れた時と子の生れた時さへはつきりわかつてせえゐりやあ、すつかり知れるものでごわすからなあ。××寺の先の隱居なんか何月何日何時に死ぬつて知つてたから、さあ其の日になりやすと、頭を綺麗に剃りやして、白い着物を着て、さあ今死ぬぞつつうて弟子やなんかを呼集めたが、一時間たつても二時間たつても死なねえわ。そんな筈はねえがつて云つたつて、現在死なねえだか

らしやうがねえ。そんな理窟はねえ筈だと云つたが、その日はたうとう死なずに濟んで、隱居も首をひねりやした。ところがどうだ、これが生れた時を間違へて勘定してゐた事がわかつて、さあこれから二百七十日たつと、今度こそはほんとに死ぬぞつて事になりやした。それが二百七十日目に、ころりと死んでしまひやしたぞ。つまり誰でも死ぬ時はきまつて居るでごわすわ。わしらとこの息子も二人とも十歲にもならねえでいけなくなりやしたが、これも定命(ちやうみやう)で、實は此の人間の生れる月といふものは一年のうちに四月(よつき)しかねえでごわす。その外の月に生れた子はどうしても十歲より上に生延(いきのび)る事がごわせん。もう三千年も前の人でお釋迦樣つつう人は究理家でごわしたなあ。人は三百六十の骨、四萬八千の毛穴ありと、ちやんと本に書いてゐやすからなあ。それればかりぢやあごわせん。何の動物には何本の骨がある。何の虫には幾本の骨がある。何の鳥には何本の毛がある。ちやあんとしらべがとゞいてゐやすわ。ところがこれも理窟を知つて見ればわけのねえ事で、すべて動物は胎生卵生濕氣生化生の四つに分(わけ)られてゐるもので此の四つしかねえだから、そこ迄考へてみれば何の不思議もねえ、わけのねえ事ですわなあ。で、すべて血のあるものには骨がある。骨のねえものには血がねえと、かうきまつたものだ。それ、みゝずには血がねえ、骨がねえ。あの海にゐる海鼠(なまこ)でごわしたかなあ、あいつなぞも血がねえ、骨がねえ。」

和尚の話は何時迄も盡きなかつた。淺間山には天狗(てんごと發音する)が住んでゐて、現に自分も若い時に見た事、近頃もゐるにはゐるが、あまり里には出て來なくなつた事などを、一人ではなし、一人でうなづいて倦きなかつた。面白いには面白いのだが、面白過ぎて参つてしまつた。しまひには逃出すやうに辭去した。

その日の夕方登山の支度をして出た。友達も私も單衣一枚で、草鞋を穿き、落葉松(からまつ)の杖をついた。友達は杖銃を肩にかけた。下男の孝治さんといふのが、今夜と翌朝の食料と毛布を一包にして背負つた。おあつらへのちぐさ色の股引に縞のぬのこを着て、腰には大きな烟草入をぶらさげてゐた。

山は荒(あれ)氣味で、吹下(おろ)す風が強かつた。道ばたの蕎麥の畑から山鳩が飛んだ。友達は直に身構へた。銃聲が山に響いてこだました。傷ついた鳩は少しさきの豆畑に落ちた。

だらだら登の松原にかゝつた。林中で夕陽を見た。風が止んで、虫の音がしげくなつた。林はいつか落葉松に變つた。枝も葉も細かく隙間の無い林と林の間の防火線を行くのだ。時々足下(もと)から兎があらはれて、叉草にかくれた。日が暮れて提灯をつけた。歩いてゐると暑いが、足をやすめると寒い。私は何處かで、小錢の入つてゐる嚢口を落した。

道は次第に急になつて、杖の力による事が多くなつた。時々流にかけた丸木橋を渡つた。三時間の後、山の三分の二の位置にあるといふ小屋に着いた。

「お疲れ。」

といひながら友達が先に入つた。此の小屋はその年はじめて出來たもので、まだ大工や屋根屋や樵夫(きこり)がゐた。みんないつぱい機嫌だつた。

爐ばたで、持つて行つた握飯を喰つた。榾(ほだ)の烟が目にしみて、だらしなく涙がこぼれた。腹がはると眠くなつた。山の上は五十五六度だといふ。毛布をかぶつて横になつたが、私は眠れなかつた。寒さと蚤のためだ。それなのに外の者はみんな樂々と眠つてしまつた。誰だか、しきりにおならをした。

二時頃、靜かな山の下の方から、ほいほいとかけ聲して登山者が來た。戸をあけて、六七人の一行が、へとへとになつて入つて來た。みんな爐のそばに倒れるやうに寢てしまつた。

その連中は一時間ばかり休んでから、早く登らないと頂上で朝日が拜めないと云つて出かけた。

吾々も起きて、又握飯を喰つた。

孝治さんは小屋に殘つた。友達と二人で外に出ると、暗い立木の梢に、細く青い月がかゝつて

ゐた。あの澄んだ色を見ろ、東京の月とは違ふからと友達が云つた。頂上迄もう一里あるのであつた。

右に聳えてゐるのがぎつぱ山だ。人々は鬼の牙の形と見てゐる。木立が盡ると俄かに寒くなつた。道は燒石ばかりになつた。風がまともにおろして來て、屢々帽子を奪はうとする。

東の空が稍明るくなつた。遙かに下の方の山々の腰を圍つて白い雲が湧上つて來た。急傾斜で息切がするが、友達の足は早い。彼は八度目の登山だつた。私は負けない氣を出して踏張つた。風は益々烈しく、山鳴が聞えて來た。小屋を出て一時間の後、吾々は絕頂の噴火口のふちに立つた。硫黃臭い黑烟のうづまく底に、眞紅の火が見える。たとへるものが無かつた。

つい此の間、長野の町の女學校の生徒が、妊娠のからだを此處に捨てた。擂鉢形になつてゐるので、底の火の中迄落ちて行かずに、中途の岩に引かゝつて、何時迄も白い足が二本むき出しになつて見えたさうだ。

雲を破つて日が登つた。もくもくと湧く白雲の海の向うに、はつきりと富士山が見えた。岩のかげから、拍手が起つた。吾々より後から小屋に來て、先に出た連中だつた。

くだりは早く、かけ足で天狗の露地といふところ迄下りた。其處には草花が咲き亂れてゐた。

露に濡れてゐる地梨の紅い實や、こんまらつぱじきと呼ばれる黑い實を摘んで喰つた。
小屋迄戻ると、昨夜の若衆達は、木を削つたり壁を塗つたり、せつせと働いてゐた。

　淺間山から鬼が尻出して
　鎌でかつ切るやうな屁をたれた

と怒鳴つてゐる奴があつた。
夜中で氣が付かなかつたが、小屋の前にはもう一つちひさい小屋があつた。樵夫の親子が住んでゐるのださうで、十八九の娘がゐた。特別の村の者なので、同じ小屋には住まないのださうだ。新しい手拭を姐さんかぶりにした可愛らしい娘だつた。昨夜爐邊で若衆達が、どうしても五六日中に何とかしてしまはうなど丶亂暴な事を云つてゐた話の主題がやうやくわかつた。

東京に歸つてから、當時イヴン・ツルゲネフの小說を耽讀してゐた私は「山の少女」といふ題で、小說まがひのものを書いた。

小屋を出て、朝露を踏んで山を下りた。登る時は夜中でたゞ闇だつたところが、花に埋れてゐるのであつた。稱讚の辭をみちばたに投捨てながら忽ち麓迄かけ下りてしまつた。

「今度の、小説ですか。」
私が汗を流しながら淺間登山の此の紀行文を書いてゐる横から、家内が口を出した。折角高原の晴わたつた朝の空を仰ぎながら、若々しい詩情にひたらうとするところなのに、前かけにはお醬油のしみがついてゐるのである。
「今度は紀行文だ。淺間登山の記だ。」
「へえゝ、淺間山なんかに登つた事があるんですか。何時。」
「もう先だよ。十八だつたかなあ。十七だつたかなあ。」
「そんな不精な人によく登れましたねえ。」
「そりやあ若かつたもの。」
年をとつた亭主を持つた家内は、そんな時代なんか想像もつかないやうな顔つきだ。
「今ではもう駄目でしよ。御酒を飲んで贅肉がついてしまつたから。」
「なあにこれで鍛へたからだなんだ。時間さへあれば今だつて淺間位わけなしだ。」
憮然として軒先の空を仰いだ。そゝり立つ高峰を想ひながら。（大正十五年九月二日）
――「三田文學」大正十五年十月號

藤原誠一氏紹介

「三田文學」九月號に出た藤原誠一氏の小說「普請好き」は私の推擧したものである。諸方の評判がいゝので我事のやうに嬉しい。氏は鄉里愛媛縣波止濱(はとはま)町といふ所で一生懸命に小說を書いてゐる。餘程からだが弱いらしい。實は私は未だ逢つた事が無い。大正十三年の暮に突然手紙を貰ひ、爾來創作を拜見し、遠慮の無い批評をして、お互に勵んでゐる。大正十四年三月の「三田文學」に出た「千代松の神經」といふのが氏の作品中印刷された最初のものであらうと思ふ。新鮮にして且天邪鬼(あまのじやく)をほしいまゝにした面白い作品だつた。

「普請好き」は一層すぐれてゐる。便利の爲めに氏の作風を一言でかたづければ所謂新感覺派に屬するものである。特異の感覺と、奇警なる觀察とは著しい特徵である。時として之を弄び過(すぎ)るきらひがなくもない。かなりいたづらつ兒の性質を持つてゐるやうだ。近頃は、他人に原稿を見

て貰ふとか、雑誌の編輯者に原稿をつきつける人の多くが素晴しく鼻いきが荒く、うつかり悪口をいふと忽ち貴様なんかにわかつてたまるものかと啖呵を切り、直(すぐ)に雑誌に載せないと貴様達に侮蔑される人間ぢやあないのだと尻をまくるのが定式のやうになつて居るが、藤原氏の心がけは極めて深く、常に修業を忘れない。その癖肚の底では自分を信ずる事厚いのである。氏の原稿には一字一句の消もなく、表紙をつけて叮嚀に綴ぢてある。書直し書直した上で清書するものらしい。おまけに、清書したものを私の方へ寄越すと同時に、自分の手許にも綺麗に清書した複本が残してあるらしい。私が讀んで、何處其處が面白くないと指摘すると、それを尤もと思ふ場合には、幾度でも書改めて來る。改める毎に、又一字一句も消のないのを送つて來る。「普請好き」は三度書改めた。此の御手本とすべき態度に私は屢々鞭撻される。氏の作品の未發表のもので、推稱し度いのが未だ澤山ある。若し「普請好き」を讀んでその特徴を認め、自分の雑誌に藤原氏の作品を載せ度いといふ編輯者があつてくれるなら、私は祝盃をあげる。氏は自分の作品の世にあらはれる事を藥餌として、病弱の身を以て勉強してゐるのである。(大正十五年九月四日)

――「三田文學」大正十五年十月號

小島政二郎氏の第二小説集

小島政二郎氏の第二小說集「新居」が出た。素晴しく面白い。殊に一家のスタイルを成した文章のうまい事は御手本となる。私は曾て第一著作集「含羞」の批評を書いた。長い間世間に認められず、あゝでもない斯うでもないと惱んでゐた人が、集中の大作「一枚看板」にいたつて漸く藝術製作の正道を見出した事を說き、作者と喜びを共にした。此の作は氏の生涯の第一期を劃したもので、はじめて廣い藝術境を見出した作者は、その後飛躍的に人として藝術家として面目を一新しようと試みた。第二著作集は此の記念すべき「一枚看板」を再び收めた外は、その後の作品即ち面目一新の努力の結晶から成立つてゐる。そんならどういふ風に變つたかといふと、作品としては寫生文から入つて行つた物語風の記述から、著しく主觀的傾向の強い作風に移り、人としては熱情をもつて人生にぶつからうと心がけ、且つ行爲にも示すにいたつた。おのれ以外の世の態を冷

かに記述する事を手ぬるしとし、おのれそのまゝを作中に盛らうと企てゝゐるのだ。その結果東京下谷町に幾代か續く舊家に生れ、傳統正しい商家のひかへめとつゝましやかさを專一とする訓練をうけた自分を振捨て度いといふ焦躁に驅られてゐる。傍若無人に振舞ひ度い、禮儀を無視し度いといふやうな形式さへ、一生懸命で自分のものにし度がつてゐる。つい先日、或る文壇の人にあつた印象を話して、もつと野蠻な人間だらうと羨しく思つてゐたら存外禮儀を知つてゐるのでつまらなかつたといふ樣な事を眞顏で云つてゐた。私は馬鹿々々しいと一笑に附したが、少なくとも此の一二年小島氏は、そんな風な事に迄も心を勞してゐる。むかしから自分を束縛してゐるいろ／＼の羈絆を脱しようと心がけてゐる。それは氏にとつて一大事業なのだ。此の大事業を遂行する主人公として、ひどく昂奮してゐる。出來る事なら泥棒も人殺もまをとこもし度いといふ位、曾てのおのれと反對の事を想像し、その芝居の主役としての自分を考へて一層昂奮するといつた調子だ。私のいふ事は嘘では無い。日常生活にも作品にもはつきり出てゐる。しかし、現在の小島氏の藝術製作上の信條たる主觀と客觀とを熱情をもつて融合し、おのれが身をもつて生活する人生をひた押に描寫するといふ事が、果して目的を達してゐるかどうか。「新居」一卷を精讀して、意外にも作者の企てたところとは違ふ效果を認めた。矢張り小島氏は描寫するよりもよ

り多く物語つてゐる。實に饒舌に喋つてゐる。「一枚看板」迄漕ぎつけた正攻法的描寫を捨てゝ、樣式こそアップ・トゥ・デェトではあるが、むかしに歸つたと云つてもいゝ位お話をしてゐるのである。しかもその話は、他人がどう聽かうと頓着なく、自分が夢中になつて高く調子を張つてゐる。殆んどうたはんとしてゐる位だ。時とすると、あんまり夢中になつて呼吸切れのしてゐる事もある。成程、人としての作者の一面は其處に出てゐるかもしれないが、それが果して多年磨きあげた眞の小島氏かどうか、一脈の疑が在る。集中最近の作はすべて代表的のコントである。或る主題がある。それを說く事に非常なる熱情をそゝいでゐる。ひとつひとつの章句の面白さが讀者を引張つて行く。凝つた表現がふんだんにある。その面白さは無類だが、作者自身が誰よりも面白さに醉つて愈々饒舌になる。面白さが面白さを消してしまふ事もある。作者は靜かに座蒲團の上に坐つてはゐられないで何時の間にか疊の上に乘り出してゐる。話がおしまひになつても、作者はまだ醉つてゐる。話の全體がはつきりと浮彫の如く展開されたかどうかを顧るひまもない位だ。ひどく遠廻ししないひ方になつたが、最近の小島氏の作品の長所と短所は右の如くに思はれる。私は今度の集中でも「一枚看板」を第一に推す。轉機以後の作としては「新居」を採る。次には「子にかへる頃」「生理的腫物」「家」をあげる。何故「一枚看板」が一番いゝかといふ事は玆にはもう

いはない。拙文「含羞の作者」の中に述べた事と、此の短い文章全體の意味を汲んで了解して頂き度い。恐らく作者は、私が「一枚看板」を擧げる事は承知しながらも不滿があらう。又私としても、轉機後の作を一括して惡いとはいはない。寧ろ小島氏の努力はよい實を結んだものと思つてゐるのだが、なほかつ「一枚看板」の堂々たる手法と、作品の持つこくの濃く且つこまやかなる事には及ばないと思ふのだ。これは月々の雜誌で作品を讀んだ時にははつきりわからなかつたが「新居」精讀後の確信なのである。常々考てゐる事だが、作品を二つに區別して、雜誌で讀んで面白く、本になつて左程でない作品と、雜誌で讀んでは左程でなく、本になると眞價を發揮する作品がある。大體に於て、泉鏡花先生とか島崎藤村先生とかいふ時流をぐうんと拔いた作家の作品は後者で、文壇意識の強い作家の作品は前者である。「一枚看板」は後者で、他の諸作は前者である。斯う書きつづけて來ると「新居」をそれ程に買はないやうに思はれるかもしれないが、さうではない。冒頭に云つた通り素晴しいものだと思ふ。明かに小島政二郎氏の生涯の第二期を劃したばかりで無く、我國の文壇にほこる可き一人の作家を加へた事を認めるものである。たゞ私には、作者の心の構へ方に疑がある。それが作品の短所となつてあらはれてゐると思ふのた。そして、小島氏が身をもつて野蠻がつたり、滅茶々々がつたりする心事に同情しながら、それを無用の努力では

ないかと思ふにいたつた。人には各々の道がある。小島政二郎氏よ、もう一度書齋裡に靜かにおのれを反省し、君が憧憬する熱情は、手や足に燃え出るより前に、腹に藏さる可き事に思ひ當られ度い。(大正十五年九月六日)

——「三田文學」大正十五年十月號

新聞嫌

新聞や雜誌に私の噂が出ると、恰もまくらことばの如く新聞嫌(ぎらひ)といふ三字を名前の上に冠(かぶ)せる。例之(たとへば)新聞嫌の水上瀧太郎とか、例の新聞嫌の水上とかいふのである。その場合多分の憎しみが附隨してゐるのはいふ迄も無い。

何故斯ういふ不快な文字を頭に頂く事になつたかといふと、私程熱心に新聞紙に對して道德を求めた者が無いからではないかと思ふ。その外には思ひ當る事が無い。

十數年間、私は機會ある每に、新聞紙も吾々平民と同じく、社會に對し個人に對して責任感を持たなくてはいけないと主張して來た。嘘を吐いたり、人をきずつけたりしてはいけない、萬一間違つた報道をした事がわかつたら、直に有效なる取消をなし、それが人に迷惑をかけたら明白に謝罪しろと力說して來た。

一體世間では、新聞の強大な勢力に怖れをなし、正當の要求とは知りながら口を緘して何事も泣寢入ですましてしまふ。新聞はそれをいゝ事にして愈々暴君の如く振舞ふのでは無いだらうか。斬捨御免は、今日新聞紙に丈許されたる特權である。たまたま私の如く眞正面から反省を求めると、その不心得をさとれとばかり、新聞嫌といふやうな惡名を頂戴するのである。いくら割引してみても、不逞何々と稱すると同程度の惡名であらう。

しかし、何時迄も此の狀態を續けるのは新聞にとつて危險である。先年小泉信三氏に「新聞紙と個人の名譽」なる一文があり、最近菊池寛氏に「新聞專制時代」と題する文章があつた。「財政經濟時報」誌の新聞記事指摘欄の如きは新聞に對する最も有力なる批評として私の愛讀するものである。

これ等は有識の士の抗議であるが、近頃は暴力をもつて對抗する者があらはれたといふ噂をきく。ほんとうとすれば歎かはしい事であるが、あまりに強大な力を振つてしかも無責任を極めると、暴にむくゆるに暴をもつてする者の出現するのも必然の事かもしれない。此の噂は新聞にこそ出ないが、人から人に傳へられ、中にはひどく痛快がる者も少なくないのだ。寒心に堪へない。

子供の頃は、世の中で一番強いのは大將だと思つたり、横綱だと思つたりしたが、今では何の

躊躇も無く新聞だと思ふ。それに對して命知らずが陣を張るのでは天下のみだれである。さういふ弱味の無いやうに、もう一段の強さを加へるには、最初に言つた弊害を除く事に努力す可きである。その改善をまつて一日も速かに新聞嫌の名を返上し度い。（昭和二年三月十三日）

――「財政經濟時報」昭和二年四月號

「ブルドッグ」の序

「ブルドッグ」の著者伊藤治郎さんは横濱本牧（ほんもく）の畜犬商で且我邦有數の犬學者です。茲に犬學者と云ひますが、動物學の先生だとか、犬猫專門の獸醫だとか云ふ意味ではありません。多年犬を愛し、飼育の經驗を積み、犬に關する書籍を讀破して學理と實際のこつを兼備へおのづから一家の見識を有するに至つた愛犬家の事です。世間によくある猫可愛がりに可愛がつたり、犬の啼（なき）眞似をしたりする類では無く、理論の體系を建てた強味は充分もつてゐるのです。「ブルドッグ」のねうちは、その理論がすべて實驗によつてうらうちされてある事です。

元來伊藤さんは私の弟の友達です。その弟と云ふのは犬きちがひで、幼少の時分から兄弟のお小遣をねだり集めて犬を買つて來ました。私も犬は好きですが、きちがひと呼ばれる程の熱はありません。殊に、東京にも未だ空地（あきち）が多く、犬ころしが無制限に跋扈した時代に育つたので、犬

は道端で拾つて來るか、他家でもてあましてゐるのを貰つて來るのが定式だと思つてゐました。だから、弟がポインタアを求め、セツタアを求め、コリイを求め、ビイグルを求め、フォツクス・テリアを求め、ブルドツグを求めて來るのを見て驚嘆し、世の中の贅澤になつたのに眉をひそめました。ところがいけない。値段のついてゐる犬は、拾つて來る犬よりも姿かたちの美しさは申す迄も無く、育ちが違ふのかしつけがよいのか、極めて柔順で人なつゝこく、又愛情がこまやかたのです。

私の友人の劇作家に一通ならぬ猫好きがゐます。稍病的に猫を嫌ふ私から見ると、いやらしい程の猫好きです。此の人の說にしたがふと、猫は犬の如く人間の奴隷とならず、食物を與へる人間に對してもつめたい眼つきで輕蔑してゐる態度を忘れない、その精神がいゝのだといふのですが、こゝ迄來ると彼自身も實は猫の一疋ではないかと思はれます。何故ならば、猫族の立場からいへば、いくら人間の恩愛に浴しても、猫は猫の獨立を守り、自尊の念を失はず、萬物の靈長らしく溫情主義で手なづけようとする奴なんぞには嬉しい顏を見せないで、化る機會があつたら敢然として化るのが有爲の猫の踏む可き道かもしれないからです。恰も、祖先の國は亡びて異國に隷屬するとも、決して其國の善良なる臣民にはなりさがらないといふ一國民の氣槪に比す可きも

のかもしれません。私が猫ならば、矢張そのやうな強情我慢を張り通すかもしれません。
しかし吾々人間の立場から考へると、凡そ家畜を飼育するからは、何か實利上の目的の無い限りは、これを我意のまゝに手なづけ、先方からも親愛の情をもつて慕つて來る事を第一に希望します。犬も猫も家畜です。狼や虎ではありません。山野を勝手にかけ廻るのが、彼等の天地では無く、人間のかたちづくる文化の世界に、人間のつくる食物と住居をあてがはれて生存してゐるのです。何代かかゝつて、人間がつくつた動物です。なつけばなつく程可愛いのが自然でせう。何時迄も白い眼をして人を見る猫は、つくりそこなひかもしれません。
少々横道に外れましたが、私のいひ度いのは、犬は柔順でわきまへがよく、人の心を素直に感じてくれるのがよい、野放しの犬よりも、人間が智惠をしぼり手を盡して育て上た犬の方がよい。即ち拾つて來たり貰つて來たりする犬よりも、値段のついてゐる犬の方がよいといふ事なのです。私は犬は道端で拾つてくれば足りるといふ先入觀念の誤りなる事を悟つて、いさぎよく改心しました。出來る事なら、自分も素晴らしいひとつがひを手に入れ度いと思ふやうになりました。
私の指導役は弟です。そんなら伊藤さんに賴んで、世話をして貰ふがいゝ。伊藤さんは大正六年の慶應義塾の出身で、時代は大分違ふけれども、先方では私の顏を知つてゐるといふ事でした。

たまたま、亞米利加へ渡る兄の見送りで横濱迄行きましたので、弟を先達にして伊藤さんをたづねました。横濱は未だに私の異國趣味におもねるところです。文明開化が黒船に乘つかつて此の開港場に渡來した光景と、その時代の珍奇な物語は、幼時の私の耳目に迫つて來るものでした。けれども、市街は地震のいたでから未だ回復してゐませんでした。

伊藤さんも震災で家藏を失つた一人です。今の住居は、犬を飼ふには極めて不適當なものでした。

一目見て、私は伊藤さんの中學時代の姿を想ひ出しました。開港場育ちの學生にはハイカラが多くゐましたが、その頃の伊藤さんも服裝の整つた眉目秀麗の少年でした。それが今は年をとり、日に燒け、父犬の世話をする爲めに泥まみれになつてゐて、貴公子の如き昔の面影は僅かに殘るばかりでした。

門を入つた時から、私は伊藤さんの家に來たといふよりも、犬の世界を訪問したやうな感じをいだきました。座敷には病體の御母堂が長火鉢にぴつたりと身を寄せてゐらつしやる直ぐ側に、ふとくたくましいブルドツグが二疋、頑張つた面をして、唐獅子のやうに控へてゐました。床の間には犬どもが品評會で得たリボンやメダルがいつぱい飾つてあります。次の間にも犬です。眞

黒なスパニイルの小とりまはしな奴が、ちよんぎられた尻尾を振つてかけ出して來ました。縁先の空地には、大きなブル・テリアと木兎のやうなボストン・テリアと、生れて間もないブルドツグがゐました。玄關の格子の前の犬舍には、私が望んでゐる英吉利セツタアの黑胡麻の牝犬が、乳房に縋る仔犬を抱きはぐくむでゐました。初產の後の面やつれのした、目のうるむだ顏に、母親らしい優しさと、產婦に特有のなまめかしさがありました。

私はその乳吞兒の中からふたつを擇んで豫約する事にしました。伊藤さんの令妹が、緣の日あたりに座蒲團を置き、また目もあかない六疋を並べて見せて下さいました。芋蟲のやうに這ひ廻る仔犬が、ところ構はず粗相すると、令妹は白い手を汚して始末をします。その扱ひ振りは、人間の赤ン坊を手がける母親のやうに慈愛の籠つたものでした。

病氣の御母堂は、傍に鼻を鳴らす巨大なるブルを老後の伴侶としてゐらつしやる樣に御見うけしました。妙齡の令妹は、なりふりも構はずに一切の世話をしてゐらつしやる。伊藤さんが時々振上る鞭も、慈愛の笞です。犬共はみんな甘つたれ、命の儘に服從し、朝は共に起き、夜は共に眠るのです。伊藤さん一家の生活が犬の生活で、犬の生活が伊藤さん一家の生活です。これでなくては犬の心はわからず、人の心をわからせる事も出來まいと思ひました。

不幸にして約束した仔犬は、私共へ來る前に夭折してしまひましたが、そのかはりに伊藤さんは、あの優しい親犬を讓つてくれました。ドナと云ふ名前でしたが、私の好みによつてヂンと改名させました。ヂン、ウイスキイ、シエリイと云ふやうな酒の名をつけるのが我家のしきたりです。ヂンはその優美な姿、しかも堂々たる歩き方、重味のある咆哮によつて、私共の家には過ぎたるものとされてゐます。

伊藤さんとはそれ以來の御馴染です。此間「ブルドツグ」の原稿を持つて來て、これを出版し度いのだが引受さうな書肆を紹介してくれないかといふ御話で、私も考へました。一圓本で夢中になつてゐる本屋は到底引受さうもありません。さうだ、大岡山書店に頼まう、彼處以外には無いと思ひました。この書店を主宰してゐる横山重氏は慶應義塾の國文學の先生で、アララギ派の舊い歌人で、我が「三田文學」の編輯委員の一人です。マキシム・ゴルキイに似てゐると云ふ評判ですが、ブルドツグにも似てゐるのです。果してブルドツグの剛氣、沈勇、忍耐を兼備してゐるかどうか知りませんが、すくなくともブルドツグ的精神を尊重じ、これを學ばんとする意思を有する人のやうに思はれます。大岡山書店の出版書目及び出版豫告を見ると「人類學研究」「先史學研究」「東印度諸島蕃族文様の人類學的研究」「純粹生體アイヌ人の口腔特に齒牙の研究」「實驗動物

學」「日本産蛙の研究及び圖譜」「日本原始繪畫」「鑑鏡の研究」「銅鐸の研究」などとその商賣ばたれした物が多いのです。そんな本を出しても賣れますまいと質問すると、賣行が惡かつたら背中にしよつて行商しますと答へるのです。

伊藤さんの「ブルドツグ」は世間にありふれた動植物に關する通俗本ではありません。上記大岡山書店出版の諸學者の著書と並べて些かも恥(はづ)る必要のないものです。自信の強い伊藤さんは、此の種の研究で斯く迄廣く斯く迄深く極めたものは歐米にも無いといつてゐます。

愈々大岡山に限る、大岡山以外には無いと心をきめて紹介狀を書きました。横山さんは快諾し、今や素晴らしく美しい本となつて市に出んとしてゐるのですが、行がかりから私が序文を書かされる事になりました。つい此間迄、犬は拾つて來るものだと思つてゐた私として內容に觸れる事は恥入ります。たゞ此の書を讀めば、ブルドツグに關する一切の事が知悉出來ると簡單に宣傳するに止め、わざととりとめも無い事を認(したゝ)めました。（昭和二年五月十日）

――昭和二年五月二十三日「都新聞」

芥川龍之介氏の死

昭和二年七月二十四日芥川龍之介氏逝去。その日私は朝から他出して、夕方歸宅した。入浴し、食事をして、机にむかはうとしてゐるところへ久保田万太郎氏から電話がかゝつた。
「芥川さんが藥を嚥んで死にました。」
久保田さんの聲はふたんよりも高く、ふだんよりも一層せき込んでゐた。私は電波を全身に感じた。
「自殺ですか。」
「さうです。九時に新聞社の人に集つて貰つて發表します。」
久保田さんの昂奮してゐる樣子を感じて、私は多く訊く事を差控へ、直に芥川さんの御宅へ出向く事にして電話を切つた。

「誰か、どうかしたんですか。」

最初に電話を取次いだ家内は顔色を變へてゐた。

「芥川さんが自殺したさうだ。」

私は直に出かける身支度をした。

「芥川さんが？　どうなすつたのでせう。」

たつた一度、拙宅へ來られた時しか御目にかゝつた事は無いのだが、家内は平生芥川さんを尊敬して居た。もとより文學などはわからないのだが、宅へ集まる人々の口から傳へられる氏の風格を敬慕してゐた。しきりに事の顚末を訊かうとするのだが、私とても何も知らない。想像をたくましくして人の死を噂するのは禮を失する事だと思つて、一種の不機嫌な沈默をつゞけた。

先づ御近所の泉鏡花先生に御しらせしなければならないと思ひながら、家内の揃へて呉れる衣類を前にしてゐるところへ、泉先生の奥さんがいらつしやつた。先生の方へもたつた今久保田さんから知らせがあつたので、これから里見弴氏を誘つて芥川氏の御宅へ行くといふのであつた。

眞暗な夜で、雨がしきりなく降つてゐた。泉先生のところで里見さん、中戸川さん、小村雪岱さんを待合せた。

田端迄の道は遠かつた。おまけに道を間違へて、大變手間取つた。その間、みんな言葉數は少なかつた。

私はさまざまの事を思ひ、心持は沈んで行つた。久保田さんが電話で「芥川さんが藥を嚥んで死にました。」といつたのに對して「自殺ですか。」とき丶かへした事が變に氣になつた。あたりの人をはゞかる心づかひではあらうが「藥を嚥んで死にました。」といふのは、いかにもおもひやりの深い言葉だ。それ丈で自殺といふ事ははつきりわかつたが、私はつい「自殺ですか。」と露骨にたしかめた。なんといふ言葉づかひの荒さか。恐らく私が久保田さんと位置をかへて居たら、私はいきなり「芥川さんが劇藥を嚥んで自殺しました。」といふ言葉で電話をかけたであらう。私は久保田さんの奥床しいひとゝなりに比べて、いかにもがさつな自分を恥ぢた。流石に久保田さんは生れながらの藝術家であると思つた。

芥川邸へ着く頃はいとゞ雨がしげくなつた。今、近所の貸席で、新聞記者に對して事の次第を發表してゐるところだといふ事で、御宅の方は割合に人數が少なかつた。夫人や母堂に對しては、たゞ頭をさげる外に言葉が無かつた。悲歎の底にありながら、とりみだしたさまを見せまいとつとめるけなげな心には涙を誘はれた。奥の間に安置された遺骸にむかつて燒香した後で、二階の

書齋で貸席の方へ行つてゐる人々を待つた。

昨夜迄、主人のゐた書齋だ、机の上には讀みかけた本や、讀捨てた手紙が雜然としてゐた。インキの瓶にはペンがさゝつてゐた。それによつて命を絕つた二種の催眠藥が並んでゐた。机の上には、藥が多量にこぼれてゐたさうである。

私は芥川さんとのおつきあひを回想した。常々口にするのだが、私は文學は好きだけれど文壇は好きで無い。文壇のおつきあひは努めて避けてゐる。知名の文學者でも、お互に知らない人の方が多い。芥川さんとの御つきあひも決して深いものでは無かつた。たゞ私は、此の人丈は進んでおつきあひを願ひ度いと思つた。今になつて殊にその感が深い。

最初に芥川さんと逢つたのは大正六七年頃かと思ふ。麴町富士見町の新詩社の短歌會の席上だつた。生田長江、高村光太郎、佐藤春夫の諸氏が出席したやうに記憶するが、それは別の時かも知れない。遲ればせに席に加つたのが芥川さんと江口渙氏だつた。兩氏とも初對面だつた。芥川さんは私の隣へ來て坐つた。

芥川さんは歌についても一家の見を持つてゐたやうだが、その歌風はアララギ派に屬するものと稱して差支無い。新詩社の短歌會は互選だつた。芥川さんは僅かに二三首を投じた丈だつたし、

歌風も違ふので、多くは選ばれなかつた。

席上僅かの會話のうちで、私が當時「三田文學」につぎ〳〵に發表してゐた外國を舞臺にした小說をほめてくれた。

「近頃あなたのおかきになる外國物はいゝですなあ。」

といふやうな言葉だつた。敢然とものをいふといふ態度を示しながら、ひどく羞しさうな樣子を作つた。羞しがりをまぎらす爲めの敢然たるものいひであつたかもしれない。

文壇の人は好んで「いゝですなあ。」とか「感心するですなあ。」とか「怪しからんではないですか。」とかいふやうな言葉を使ふ。軍人が、東京生れたると東北生れたるとを問はず、「さうぢや」「いつちよる」といふやうな九州辯を使ふ程あさましくは無いが、文壇人の「ですなあ」訛も隨分耳ざはりである。「新潮」の合評會の速記なぞを讀むと、すべての人が「ですなあ」訛だ。速記者の辯ばかりでも無いらしい。芥川さんの「ですたあ」もひどく似合はないものであつた。その不似合な言葉と、特異の美貌――殊に素晴らしい魅力を持つ眼の印象が長く殘つた。

その後、大勢集まるところで二三度逢つた事はあるが、親しく話をする事は無くて、久しく過ぎた。

偶々大正十三年に「鏡花全集」上梓の計畫が立つて、小山内薫、谷崎潤一郎、久保田万太郎、里見弴、芥川龍之介の諸氏と共に、私も參訂者として御相談にあづかる事になつた。これが機縁となつて、屢々芥川さんと談笑する喜びを得た。

「鏡花全集」の相談會では、芥川さんは一番年少だつたし、又他の人同志のつきあひ程へだての無いつきあひは無かつたゝめか、一座の中で一番言葉數少なく、愼み深かつた。全集といふ大きな仕事を中心にして、めいめいの異なる性格のあらはれるのを、小説家の興味をもつて見てゐる態度だつた。本屋の番頭さんを相手に、里見さんや私がずばずば口をきくのには驚いたと云つた。芥川さんや久保田さんは、東京人のつゝましやかな心づかひから、面とむかつては本屋側の心持をいたはる事に多く心が働くのであらう。里見さんや私は、仕事の爲めなら何を云つても許して貰へる積りで、將棋に所謂王手を次から次と打つたのだ。番頭さんが口惜泣きに泣き出すといふ場面さへ現出した。

その頃から、先方ではどう考へてゐたか知らないが、私の方では非常に親しい心持で芥川さんに接した。常に久保田さんが間にあつて、度々會合の機會をつくつて呉れた。拙宅へも來てくれた。招かれて自笑軒で御馳走になつた。酒は飮まなかつたが、芥川さんは痩つぽちに似合はぬ健

喫だつた。よく喰ひ、よく談じた。矢張敢然とものをいふ態度と羞しさとのまざつたかたちで「ですなあ」訛をさかんに使つた。議論めかしい事に及ぶと、機智と諧謔で巧みに論旨をまぶしてしまふ話振りだつた。

最後に逢つたのは昨年の三月で、その時は、しばらく病氣で鵠沼に行つてゐた芥川氏の歸京を迎へる意味で、久保田さんが二人を誘つたのであつた。場所は日本橋の浪花家(なにはや)で、久保田さんと私は例の如く酒を飲んだが、芥川さんは何時も程健啖で無かつた。ひどく元氣が無く、その不元氣に誘はれて吾々も活潑に喋る心持にならなかつた。

「あなたは大變疲れてゐる。毎月『文藝春秋』で拜見する『侏儒の言葉』にもその疲勞があらはれてゐます。文字に氣力がありません。」

私は餘程前から芥川さんの書くものに氣力の衰へを感じてゐたので、敢てさう云つた。

「えゝ全く疲れてゐます。身心共に疲れてゐるんです。」

芥川さんは直に應じて、肉體の強壯でない事を嘆じた。

「生存力を失つてしまつたんですなあ。」

それには矢張敢然とものをいふ態度を示した。

強い體をもつて酒を飲むのが羨しいといふやうな話から、しきりに洒客の噂が出た。近いうちに齋藤茂吉氏と私とを一座させようと芥川さんは豫約した。

それつきり芥川さんには逢はなかつた。「三田文學」が復活してから、私は一層世間へ顔を出さなくなつた。愈々暇も無くなつたのだ。たゞ時々著書を送つてくれたり、手紙をくれたりした。

芥川さんは死ぬかもしれない――私は浪花家の日以來、時々さう思つた。引續いて芥川さんの書くものには氣力が無い。最近超人的の馬力で書くものにも、焦躁の氣が著しくて充實した力が乏しかつた。「文藝的な餘りに文藝的な」――この題は實にいやだ。「ですなあ」以上である。芥川さんともあらう人がどうしたのだらうと、私は雜誌を手にする毎に不愉快に思つた。――の如きも、あせりにあせつてゐて感心出來なかつた。谷崎潤一郎氏との論戰の如きも、論旨如何は別として、氣力旺んなる相手に對して、芥川さんは呼吸が切迫してゐるやうに思はれた。私の不吉なる豫感は消えなかつた。しかし、それは病弱の人の體を心配したのであつて、決して自殺を豫知したのでは無い。

芥川さんが倚り馴れた机の前で、劇藥を嚥下した場所に坐して回想してゐるうちに、私は段々感傷的になつた。最も親しく出入してゐた人の話によると、芥川さんは二年位前から死を決して

ゐたといふ事である。自殺未遂とも見る可き行爲もあつたさうである。よく觀、よく知り、よく味つた事を自ら痛感して、生を惜む心が無かつたといふ事である。今貸席の方で、新聞記者に對して讀みあげてゐる遺稿にも、その事はうかゞひ知られるといふ事であつた。果して二年前から死を決してゐたとすれば、私とのおつきあひは其の決心の後であつたかもしれない。此の世の中に執着を失つた人の目の前に、私の存在が何であつたか。私の心は一層暗くなつた。

やがて貸席の方から、次第にみんなが歸つて來た。誰も異常に緊張した顔つきで、口々に憤慨してゐるのは、半ぺらの原稿紙十八枚に認めてあつた遺稿を、新聞記者の乞ふがまゝに寫させ、寫眞をとらせてゐる間に、二枚紛失したといふのである。盜まれたといふのである。故人が死ぬ前に「ある舊友へ送る手記」と題して認めたものである。故人が最後の呼吸の一字々々に通つてゐるものである。家族の方々にとつても、友人にとつても大切なものである。委員は辭を低くして返戻を求めたさうだが、誰人のポケツトの中に納まつたのか、行方はわからなくなつてしまつた。しかも、新聞社の人々も、一座の者がポケツトに入れた事を認めてゐて「とつたのはあつちの方だ」などゝ指さして叫ぶ者もあつたさうだ。新聞社獨特の、手段を擇ばぬ所業である。他を出拔いて特種を競はんとするものか、單なる蒐集癖から出たものか、後日珍品として他に誇示せんと

するものか、或は芥川氏崇拜の極此の無分別を敢てしたのか、動機の如何にかゝはらず、餘りといへば亂暴である。近來世間で「新聞社に對抗するには暴力の外に手段が無い」といふ聲を聞き、又實行に及ぶ者もあると噂にきくが、成る程その外に手段はあるまいと思はれた。世の中は益々惡くなる。芥川さんが見限つたのも無理は無い。

夜半、吾々は家人の疲勞を加ふる事を惧れて辭去したが、あらためて燒香し、芥川さんの死顔を拜した。

芥川さんの死相は莊嚴だつた。劇藥は人の相貌を醜くすると聞いてゐた私には、劇藥で死んだといふのは間違では無いかとさへ思はれた。芥川さん程つきつめて死の境地をのぞんだ人は、死なうと思ふおもひ丈で、靜かに息を絕つ事が出來るのでは無いだらうか——さういふ據所の無い考が、ひとつの信念のやうな力をもつて浮んだ。安心と滿足が死顔に美を加へた。安らかなる眠りといふ言葉そのまゝであつた。しかも凛然たるところがあつた。何ともいへない嚴肅な感じが胸に迫つた。

斯く迄に端正なる死顔を保ち得た事を知つたなら、恐らく芥川さんは、死後その作品の永く世に殘る事よりも深く喜んだであらう。死の手段を冷靜に考へ、縊死や轢死に對しては美的嫌惡を

感じた人だ。生前、文人としての態度、言語動作、衣服の事に至る迄たしなみを忘れなかつた人だ。何らとりみたしたあとも無く、美貌生けるが如くして死に得た事は何よりの滿足であらう。
芥川さんは何故死んだか。誰しも此の悲報を耳にした時、直に思ひ浮べた疑問であらう。新聞に遺書として發表されたのは、吾々が普通に考へる「かきおき」では無い。恐らくほんとの「かきおき」は、夫人宛のものと、友人菊池寛氏宛のものであらう。それは發表されてゐないからわからないが、それを讀んでも何故死んだかはわかるまい。文字に殘されたものによつて死の原因を知る事は困難である。よく、「私は今喜んで死んで行く」といふやうなかきおきがあるが、だからと云つてその人の心が歡喜のみでみたされてゐたと考へるのは無理だ。
「ある舊友へ送る手記」は一篇の隨筆と見て然る可きものと思ふ。一般にいふ遺書としては餘りに文學的である。私は寧ろ遺稿と呼び度い。その中には、自殺者自身の心理をはつきりと傳へ度いと書いてあるが、又直ぐ後に「もつとも僕の自殺する動機は特に君に傳へずとも宜い」と明言してゐる。此の遺稿が自殺の動機を明かにしようとしたもので無い事は疑ふ餘地が無い。その點について僅かに下の如く記されてゐるばかりである。
「少なくとも僕の場合は、唯ぼんやりした不安である。何か僕の將來に對する唯ぼんやりした不

安である」

これに對して、いろ／＼忖度するのは愼む可き事であらうが、しかしその死を悼む事深く、又その死の止む無き事をも痛感する者が、世俗の疑惑誤解を解く爲めに、一言を費す事は許して貰へると思ふ。

古今東西にわたつて、藝術家の自殺は他の仕事に從事するものよりも遙かに多い。生活難で死んだものもあらう。戀愛の破局の爲めに死んだものもあらう。氣ちがひになつて死んだものもあらう。生よりも死を擇ぶ人生觀をつきつめて死んだものもあらう。それを細かに分つ時は際限が無いが、何故に藝術家は他の仕事に從ふものよりも多く自ら命を絕つのであらうか。人にすぐれて敏感なのも、神經質な事も數へられるであらうが、それよりも其の仕事を生命とする念の強さが第一の原因では無いだらうか。

芥川氏の死後、某新聞に某實業家の談として「働く事に徹すれば死ぬ事なんぞ考へない」といふ意味の言葉があつた。芥川氏の死を嘲つたものである。小說家なぞといふものは、のらくら遊んでゐるものだときめてかゝつてゐるやうな言葉もつけ加へてあつたが、作家の生活はそんなものでは無い。殊に芥川さんの如きは、もう少しのらくらしてゐて呉れたら、死ぬ事なぞは考へなか

つたに違ひ無い。眞劍に生きんとしたゝめに、死んだのである。親分子分の關係で出世をしたり、閨閥で引立てられたりする事の多い政界や實業界とは違ふ。一度重役になれば、存外頭が働かなくても其の地位を保つ事の出來るのとは違ふのだ。心をくだき骨を削る苦心は、トタン板の如くかけがへがありあまり、安價に間に合ふ人間にはわからない。

芥川さんの生涯は僅かに三十六年で終つた。その最後の十年間が文學者としての活動に捧げられた。はなばなしく世に出て、その名聲の頂點に於て死を擇んだ。尾崎紅葉先生は三十八歳で世を終り、樋口一葉女史は二十五歳で死んだ。何れも短い一生であるが、しかしその生涯を充分に生きた人である。芥川さんも亦短い月日の間に、彼が藝術家として惠まれた一切を表現して死んだ。命數に於ては憾があるが、最もよく此の世に生きた人の一人である。芥川さんは死に臨んで此の點をかへりみ、安らかな心境に到達し得た事を疑は無い。

芥川さんは明晰な頭腦を惠まれたかはりに、虛弱な肉體を與へられた。常に病氣に脅かされ惱まされた人である。若し一身を打込む精神的活動が無かつたならば、此の世は最初から住みにくいところたつたに違ひ無い。

若し藝術　殊に文學が此の世になかつたならば、芥川さんの一生は、氏にとつて生甲斐の無

いものであつたらう。芥川さんは文學に遊び、文學の爲めに死んだといひ切つても差支へあるまい。私は芥川さんの死の原因を徹頭徹尾文學そのものにあると見る。文學によつて生きた人が、文學の爲めに殺されたのである。文學と心中したのでは無い。あまりに偉大なる「文學」は、冷酷につつぱなして、唯一人死んで行く芥川さんの姿を嚴かに見守つてゐたのだ。

假に若し、芥川さんが自分の藝術境の行き詰つた事に心を勞して死んだとするならば、藝術至上主義者の死として私は讃美したい。

當今多くの文士は、自分の仕事に對して眞劍な心持を失つたやうに見える。商賣とでしやばりだ。麻雀だ。將棋だ。花合だ。野球だ。競馬だ。カフヱだ。本屋のひろめやだ。通俗小説の美名?にかくれて低級小説を賣るのだ。芥川さんにしてさういふ氣散じに浮かれる事が出來たならば、ゴシツプ的名聲を一身に擔つて天壽を全うする事が出來たであらう。悲しいかな芥川さんは、餘りに文藝的であつた。

芥川さんの死は人々に反省を強る(しひ)ものである。私は芥川さんの莊嚴な死顔を拜した時、はげしい鞭をもつて發止(はつし)と打たれた感があつた。藝術家の生涯は遊びでは無い。死に面したる眞劍の仕事である事を痛感した。(昭和二年八月四日)

――「三田文學」昭和二年九月號

手帖の落書

「手帖」といふ雜誌を出す、贅澤な紙をつかひ、體裁をよくし、執筆者には一頁を限つて隨意に書かせる、字を書いても繪を描いてもよい、詩でも歌でも何でも評論でも隨筆でも小說でも戲曲でもよい、又卷尾には白紙數頁を添(そへ)て讀者の使用に任せる、面白い計畫でせう、あなたにも一頁あげますから何か御書きなさいと勸められた。紙も印刷もおかまひなし、安からう惡からうの壹圓本全盛の折柄、かゝるいたづらも一寸面白さうに思はれたので、何時か書きませうと約束した。

同人の顏觸を見ても才人揃た。少しの文字で何か效果を擧げんとするには、勝れた機智が必要である。利口人の展覽會だ。智慧くらべだ。此の雜誌に執筆する人が、すべて手品師の如く掏摸(すり)の如く小手先を働かす根性になるのは當然である。それは一寸見て面白く、屢々見てあさましい。

もう澤山だ。既に雜誌誕生の理由は明かにされ、身上丈(しんじやう)の事は見せてしまつた。昭和二年とい

ふ時代に「手帖」といふ雑誌があつたこと、後代のものずきの口の端に上り、その時代にも八笑人やお雑人の寄集りがあつたのかと悦喜する昭和文學研究者もあらはれるであらう。「手帖」の古本には値が出るであらう。高値を呼ぶには数の少ない方がよい。既に刺戟の薄くなつた「手帖」は、現代の執筆者を救ひ、後代のものずきを喜ばせる爲めに、此際斷然廢刊すべきである。（昭和二年八月十日）

——「手帖」昭和二年九月號

押の一手

押さば押せ、引かば押せ、押して勝つのが角力の極意――ださうである。

一押、二金、三男――女を口説くには、男ぶりなどは最後の事で、金は随分有力だが、押の強いのにはかなはないといふのだ。

世の中を渡るにも、矢張押の一手だそうである。末世だなどゝなげいてゐては、忽ち押切られてしまふのである。身をへりくだり、己を卑下するのは生存の適者の態度では無い。世界中で伊太利と日本程乞食の多い國は無いといはれたが、街頭にあはれみを乞ふおこもの姿は、近頃とんと見かけなくなつた。一國の外觀美を整へようとする施政方針の結果であらう。恰も、電車の中で太股を出す事を禁じるのと同じ主意に基づくのであらう。しかし、根本的に禮の意義を説き教へる事は無いのだから、電車の中で太股を出すものは減つたかもしれないが、世の中の行儀は益

々悪くなるやうである。止むに止まれずあはれみを乞ふおこもは減つたかもしれないが、物貰ひの精神は愈々旺んで、姿形を變へた乞食は日に日に數を增してゐる。襤褸を纏ひ、面桶を持ち、裸足でとぼとぼさまよひ歩く感傷的な乞食は見るよしも無いが、堂々と表玄關から乘込んで來て、高飛車に物をねだる者は應接にいとまなき有様である。頭を地びたに擦りつけて、あはれつぽく持ちかけるのでは壹錢にもありつけないのだ。乞食をするにも押の一手でなければ有效で無い。

何時何處で刊行されるのかわからないやうな新聞や雜誌が、金をくれなければあだをするぞと脅かす。顏を立てゝくれといふ。つきあつて貰ひ度いといふ。斷ると、顏をつぶされたと云つて怒鳴り出す。亂暴狼藉を働く奴もある。一文にもならなかつた腹いせに、ある事無い事書立てゝ置いて、又ゆすりに出直す奴もある。勝手に揑造した記事を揭げて置いて、いくらか呉れゝば取消してあげますとねだる奴もある。甲の雜誌が惡口を書くと、乙の雜誌社から人が來て、あなたの方の味方をしますからいくらか下さいといふのも一つの手だ。甲との仲を調停するから口きゝ料を出せといふのもある。中には全く馴合ひで、甲がさかんに惡口を書き立てると、乙が猫撫聲を出して、あんな奴と喧嘩をしては御損ですから私に任せて下さいなどゝ忠義ぶつて、結局貰つた金を山分にするのもある。或るうがつた人の說によると、曰く附の雜誌に惡く書かれる會社の

株を買へば損は無いといふ事だ。ゆすられるやうな弱點が無いから金を出さない、出さないから惡く書く、卽ち惡く書かれるのは實力のある證據だといふのである。一面の眞理たる事を認めないわけには行かない位、世の中にはゆすり專門の雜誌が多い。それがみんな押の一手だ。

世人は一般に、新聞はゆするものだと思つてゐる。所謂大新聞でも、朦朧新聞でも、廣告揭載の勸誘を受けて之を拒めば、きつとあだをされるものと思つてゐる。あだをするなぞといふ事があるものかと、新聞社の人は居丈高になつて怒るであらうが、不幸にして世人は、故なき恐怖の爲めか、過去の經驗の爲めか、あだをされるものとかたく信じてゐる。

新聞の販路擴張も屢々脅迫に等しい態度をもつて行はれる。每朝郵便受箱や玄關へ投込んで行き、いゝ加減の時分に押かけて來て代金をねだる。何々新聞御斷りといふ紙片の貼出してある家は到る處に見受るが、賣る方はそんな事には頓着なく、はりがみをひつぺがして新聞を放り込む。少し手剛い相手と見ると二人三人組んで來て強請する。わざわざ主人の留守を擇んで屈強の男が無理に承知させようとやつて來る。押して押して、押切らうとする。

最近十年間の流行らしいが、社會主義や虛無主義を看板にして金を貰ひに來る者も少なくない。他人の物は自分の物といふ主義だと解釋してゐるやうな口吻である。

さうかと思ふと畏れ多くも忠君愛國を看板にしてゆすりに來るのもある。うつかり斷ると、不忠だ國賊だ非國民だとたけりたつ。

孤兒院が來る、救世軍が來る、苦學生と稱するものが來る、名士無名士を發起人とする寄附金をねだりに來る。右翼が來る。左翼が來る。どれもこれも押の一手だ。

之に對して、銀行會社大商店などには、ねだりゆすりに應接する係員がゐて、毎日忙殺されてゐる。或會社は腕力の強いものを雇つて置いて對抗したさうだが、ゆすり側では甚だくみしやすしとして、喧嘩を吹かけ、わざとなぐられて慰藉料や治療費をねだるので、結局腕力家ではかへつて先方の思ふつぼにはまる事になつてしまつたといふ挿話もある。

斬取強盜武士のならひといふ精神に出るものもあらう、金は天下の廻り持ちといふ金言を信條とするものもあらう、なさけは人の爲めならずといふおためごかしをモツトオとするものもある。新しいところになると、人類愛だ、人道主義だ、相互扶助だ、社會奉仕だと、さまざまの便利な語彙がふんだんに用意されてゐる。何れにしても身をへりくだり、額をさげてあはれみを乞ふ式はすたつて、今は大威張で乘込んで來る。反對にゆすられ、ねだられる方が頭を搔いたり、いひわけをしたり、謝つたり、叱られたりする。此の社會的風習は、恐らく我が日の本に特殊のもの

で、紅毛人のわきまへぬ事に違ひ無い。ゆすりに行つてふんぞり反り、大向の喝釆に値する啖呵を切る事は、ひとつの見榮であり、ほこりである。辨天小僧や切られ與三は、長く後世に範を垂れた。

かういふ堂々たるものねだりに對してはその筋の取締も寛大である。襤褸をまとひ面桶を手にする物貰ひは野犬の如く荒々しく追拂はれるが、洋服を着たり袴を穿いてゐる鼻下髭の物貰ひに對しては、警視總監の交替した當座一時的にきびしくなる事もあるが、又直にゆるんでしまふのを常とする。きびしい時と雖も、その道の名高い猛者には手をつけない。折角電話で知らせても、あいつは札つきの奴だからまあ我慢してくれ給へなどゝいつて取合はない。押の一手には、おかみも押切られてしまふのである。

まことに世に處するには此の手に限るやうだ。どんな事があつてもめげないで、高飛車に出るのだ。少々心にやましくとも、ひけめを見せずに、ひた押しに押進む。毒を喰はゞ皿までだ。盗人はたけだけしいに限る。

最近私が最も驚いたのは久米正雄氏の押の強さである。所謂原稿横領事件に際して、尻をまくつたやり口だ。それは雜誌「女性」の巻頭を飾つた――實は汚した――久米氏近來の力作とプラト

ン社が自慢をした「安南の曉鐘」といふ小說は、實は安藤某の作で、久米氏は前後に數行の文字を加へたに過ぎないといふ事件である。これは都下の新聞に、例の特種扱ひをうけてあばかれたのであるが、常に仲間以外に對しては苛酷なる迄正論を唱へて止まない文壇はくさい物にふたをして多くを語らない。そんなら新聞の記事が出鱈目で、久米氏の作に違ひ無いかといふと、誰が讀んでも久米氏の筆で無い事は明白であらう。久米氏は近時愈々制作力の衰へたやうた狀態をつゞけて居るが、それにしても「安南の曉鐘」程冴えないものは書かないに違ひ無い。安藤氏は將來偉くなる人かもしれないが、此の小說は全く未熟者の作品である。

往年某作家は原稿の二重賣をして非難の的となり、一時文壇から失脚した。他人の作品を我物として發表する罪は二重賣よりも遙かに深い。二重賣も決してほめた事では無いが、藝術的良心にからまる問題としては、まだしも許し易い。私は久米氏の所業に對して何等かの制裁があつてもよいと思ふものである。藝術の尊嚴を保ち、藝術家の良心を高むる爲めには、久米正雄氏を永久に文壇から失ふとも敢て悔まない。

殊に情狀酌量の餘地が無いと思ふのは、その後新潮主催の所謂合評會の席上で、久米氏は此の事件をあばいた新聞社の人を捉へ、さかんに自分の立場を力說して、かへつて新聞を咎めるやう

た態度を示してゐるのだ。押して押して押切らうとする態度を示してゐるのだ。

合評會の速記によれば、久米氏と雖も「安南の曉鐘」の冒頭と末尾に數行を加へた外は、全然自分の物で無い事を認めてゐる。それは自分に提供された原稿で、意のまゝに處置して構は無いものと思つた。恰も約束の小說が出來上らないので、雜誌社の立場を考へ、之を自分のものとして發表したのだ。それを世俗人の道德で非難されては困る。その時の苦しい立場と心持を酌んでくれなくては困るといふのだ。一步進んで、同情してくれないのは怪しからないではないかといふ位押の強い語氣である。

久米氏は平素弱氣を看板にし、他人も亦神の如く弱しなどゝ調子を合せてゐるが、實は世にも稀なる強氣の人らしい。他人の原稿を盜用しながら、手前勝手の主張をして、些かも世の中を恐れぬところを示してゐる。謝罪の心などは毛頭無さゝうた。稀に見る生存の適者である。その意味に於て、まことに羨む可きひとゝなりである。

乍然彼の所業は、安藤氏から訴へれば橫領であり、雜誌社から難ずれば詐欺である。しかも自ら顧みて深く恥ぢず、尻をまくつて高胡床(あぐら)で舞臺をしよつて立たうといふのは、押がりゆすりにひとしいものである。僞物の書畫をほんものと稱して賣る事は差支へないのか。贋札をほんもの

らしく行使する事は許されるのか。小說丈が除外例とはならないであらう。藝術家ならば何をしても構はないといふのは虫がよすぎる。

私は文筆の士が餘りに商賣人になり過る事をこゝろよしとしないものである。藝術尊重の精神から、渴しても盜泉の水を飲まぬ瘦我慢のけだかさを求むるものである。私は長い年月の文學生活にも拘らず、未だほこるに足る創作の一篇すら成し能はぬものであるが、自分も作家のはしくれには違ひ無い。仲間のなかに斯ういふ忌々しい事件の發生した事は、我家から破廉恥罪の人を出したやうに肩身が狹い。その罪を憎んでその人を憎まない寛大なる心も勿論美しいが、憎む可き罪は強く憎んでもいゝのである。

先年山本有三氏の作品が帝國劇場で上演された時、その一部を無斷で改作した事件があつて紛爭を起したのは、未だ世人の記憶に明かであらう。その時作家側は奮然として帝國劇場にあたり、筆と口を揃へて攻擊した。

同じ作者の「坂崎出羽守」を、松竹の某氏が燒直したといふ問題の起つた時も、作家達の形造る協會は結束して攻めた。安藤氏は未だ名を成さない作家だから、さういふ組合の一員ではないだらうが、若し之を小說家の形造る協會に訴へて捌を求めたならばどうするか。帝國劇場松竹合名

會社の行爲を非なりとしてあく迄も攻擊した人々は、果して同じ正論を唱へるであらうか。

私は個人としては久米氏に對して何等の恩怨も無い。同氏の如き才能ある人が努力の作を見せて世に榮ゆる事を希ふものであるが、明白によくない所爲に對しては、あらゆる非難を當然のものとして受けて貰ひ度い。さうでなくて、何等の悔を持たないならば、文壇廓清の爲めに葬つてしまつても構はない。かういふ事が公然行はれ、流行られては堪らない。

私自身に關しても、世に訴へ度い事がある。それは「白山文學」といふ雜誌に出た杉本捷雄といふ人の「C」(ベルファストの老人)といふ小說である。

私は人の好意で送つてくれる雜誌を讀まないのは申譯が無いといふやうな心持と、何處にどんないゝ作品があるかわからないのに、それを見落してはいけないといふ心持から、寄贈される雜誌は殘らず讀む。所謂同人雜誌も手許に來ればみんな讀む。「白山文學」もさういふ雜誌の一つで、杉本氏は編輯兼發行人である。

最初、何心無く此の小說を讀んでゐるうちに、私は狐につまゝれたやうな氣持になつた。大正七年に私の書いた小說「ベルファストの一日」と同じ場面に、同じ人間が動き出したのである。たゞ違ふのは、私の小說では日本の一青年旅客が愛蘭土のベルファストに旅して、路上で老人に呼

び止められ、半日を共に過して別れる間に、小說的調味を加へたものになつてゐるのだが、杉本氏のはCといふ老人を主にして、日本人を客としてゐるのだ。主客を入替て書いたのである。老人と旅の青年との會話の中には、私の用ゐたのと一字一句も違はないものさへある。あんまり意外だつたので、私は他人が自分の作を書替たとは思はないで、不覺にも無意識のうちに、自分が他人のものを盜んだのでは無いかといふ、いはれの無い疑を起した位だ。

私はひと頃歐米を舞臺にして、旅行記に類する平淡な小說を好んで書いた。當時の私は、血氣の情熱のさめ際にあつて、それより前に書いた小說の小說らしいわざとらしさを嫌ひ、自分の癖をいつたん捨てゝしまはうと願つてゐた。「ベルフアストの一日」もその種の小說の一つで、自分の作品の中では稍々心にかなふものであつた。「三田文學」に寄稿し、後に春陽堂から出した短篇集「旅情」の中に收めた。その小說の燒直しなのだ。正直のところ、私の作よりも遙かに下手だ。しかも其の最後には下の如き斷書がある。

附記――さる日、水上瀧太郎氏作る所「ベルフアストの一日」を手がけぬ。斯くて、食指動きて、成れる一篇「C」(ベルフアストの老人)なり。

これを讀んだ時、誰もゐない部屋の中で、私はひとりで吹出した。何といふ氣取つた積りで、

しかも一人前のていさいをなさぬ文字であらう。「手がけぬ」とは何の事だ。手にとつて讀んだといふのか。彼の所爲から考へ、且文字のまゝの意味をくめば、「手がけぬ」とは「燒直した」といふのと同意義のやうであるが、それにしては次の「斯くて、食指動きて、成れる一篇なり」といふのと意味が二重になつてをかしい。何にしても、故人の作を燒直したり、異人の作を飜案したり、他人の小説を脚色したりするのは往々見る事であるが、現在生きてゐる作家の小説を、同じ小説の形式で作りかへるのは亂暴過すぎる。それがいかに拙劣で、不人氣で、あるかないかの作者にしろ、又その短篇集は久しく絶版になつてゐるにしろ、傍若無人過ぎではないか。何といふ押の強さだらう。物貰ひと雖も決してあはれな姿は見せず、ゆすりねだりは高飛車に出る世の中だ。押の一手に限るのである。

あまりにずばぬけたやり口で、且「附記」が御覽の如き舌足らずなので、私は憤る事を忘れて笑つてしまつた。ひた押に押して來る相手の出足の速さに、私はひとたまりも無く押切られてしまつたのである。(昭和二年九月二日)

——「三田文學」昭和二年十月號

感謝

「小山内薫戯曲全集」の出版を記念する爲めに批評を書かないかといふ勸說を受けたのは、たしか今年の初めであつた。その時は、第一卷が出て間も無かつた。

たつた一册出たばかりで批評なんか出來るものか、よしんば批評を求めるにしても私は適任で無い。むかしは向ふ見ずに劇評の眞似みたやうな事もしたが、今は世の中が進んで、私の如き戯曲構成の法別もわきまへない者が戯曲を評するやうな無鐵砲は愼むべきである。小山内さんの身邊にはその道の研究者が澤山ゐるから、さういふ人に賴むがよいと言つて斷つた。

いゝえ、さういふ身內の人では正直な事をいはないからいけない。あなたのやうなつかずはなれずの人に限るのですと、勸說者はあきらめない。

私は又、一册出たきりでは爲方が無いといふいひわけを繰返したが、その辭、若し此の際私に

と共に此二人の人は、たゞに小山内さんの戲曲集を批評するのに適當であるばかりで無く、一般演劇に關する學識と味到力に於いて抜きん出て勝れてゐる。いたづらにその背後にかくれようとしたのでは無いのである。

第一回の勸說は一時逃れに逃れた。

數箇月後に第二卷が市に出た。熱心なる勸說者は再び訪れて、前言を繰返す。私は、たつた二冊出たきりでは材料不足だと抗辯したが、先方は頗る口說上手で、遂に筆を執る約束をしてしまつた。但し、私は批評は柄で無いから、たゞ此の全集出版の機に際して、漫談か所感を述べるに止めるといふ條件をつけた。

小山内さんは詩人として文壇に出で、短篇小說家として名を成し、戲曲作家演劇評論家として聞え、殊に演出者として最も大なる力を示した。吾々の時代は、森鷗外先生によりて泰西の戲曲を正しく紹介され、小山内さんによつてその正しき演出を見る事を得た。此のすぐれたる二人の先達か無かつたならば、今日の戲曲、今日の劇評、今日の演出は、もつと幼稚であり、或はもつと邪道に踏迷つてゐたであらう。

まことに、自由劇場の運動は、我國演劇史上の革命であつた。舊劇の衰勢を早からしめ、新派に致命的打擊を與へ、所謂新劇の簇生を促したのは自由劇場である。その運動が、當時芝居に興味を持つてゐた文學者、文學青年に與へた影響は素晴しいものだつた。泰西戯曲の演出の手本だつた。今迄文字によつて理解してゐたイブセン以後の戯曲が、生きて動いてくれたのだ。これを見た者は、生命の躍動を感じた。俄かに戯曲作家たらんとこゝろざした人の數は恐らく少なく無いであらう。又人々は、始めて演出者の力を知つた。芝居は役者さへうまければいゝのだと思つてゐたのが、演出者の權威をはつきり認めたのである。

私個人の問題としても、一生の中で最も深い感激を受けた出來事であつた。

曾て某雜誌の質問に對して、私は左の如く回答した。

問(一) 新劇運動の功勞者は誰か。

答(一) 小山内薫氏。

問(二) 最も印象の深かつた新劇。

答(二) 小山内薫氏の指揮監督したる自由劇場の拔群なりし事。其他の劇團のいゝ加減なりし事。

問(三)　どんな俳優にどんな新劇をやらせて見たいか。
答(三)　小山内薫氏の指揮監督に絶對に服從する俳優をして小山内薫氏の選擇する戲曲をやらせて見たし。

これは今から五六年前の事であるが、今日もなほ此の問に對して此の答へは至當のものと信じる。誰が、小山内さんの占める第一の座を讓れと主張し得るものぞ。

小山内さんは世にも稀なる多能の人である。詩人で、小說家で、戲曲家で、評論家で、飜譯家で、演出家である。どの方面に於いても勝れたる才能を示した。しかし、小山内さんの眞の値打と功績を、一言にしていひあらはさうとするならば、近代日本に於ける演劇一切の指導者としてのそれである。

もう一度はつきりいへば、小山内さんは、吾々の時代の芝居の指導者である。戲曲飜譯者としての仕事、演劇評論家としての仕事、演出者としての仕事、戲曲作家としての仕事——それらは總て指導者としての仕事の一部である。

その一部の仕事丈で見ると、隨分あきたりないところもある。たとへば、小山内さんは芝居學の隨一人で、學識と經驗と味到力と併せ得てゐながら、理論を說く場合に腦裡の總てを整然と出

し切れない憾がある。論爭に於いては殊の外此の缺點が著しい。正々堂々と押して行く論理の道を辿らず、アフォリズムの易きについて却て主張す可き事を主張し得ない事が多い。それは都會人の弱味であり、詩人の弱味である。此の點に於いて、亡芥川龍之介氏と頗る似てゐる。

小山内さんは詩人でありながら常に實行を尊び、實行に對する憧憬に熱情をそゝぐ人である。書齋裡の學者として閉籠つてはゐられないのだ。自由劇場、土曜劇場、俳優學校、映畫制作とその俳優の養成、築地小劇場などに力を盡し、犧牲を惜まないのはその精神のあらはれである。仕事をするといふ事に對して、ひとつの宗教的熱情が燃え立つのである。同時に又浪漫派詩人の憧憬が伴ふのである。曾て基督教を信じて內村鑑三氏に從ひ、戰時の昂奮に國民の熱狂してゐる時、軍港に赴いて非戰論を說く師に一身を捧げたのも同じ精神である。巣鴨の至誠殿とかに屢々歩を運んだのも、大本教に凝つて正に綾部に立籠らうとしたのも、身を以て描かんとする詩と見て差支へない。一事に熱中して之を行ふ爲めには、冷靜なる判斷と堅固なる意志を必要とするが、小山內さんの場合には何よりも詩的情熱が湧き立つのである。この上潮に乘つた時は、一切他の事を顧みない。先年映畫に熱中した頃は、極端に之を讃美して戲曲をおとしめるやうな口吻さへもらした。

さういふ時には、ひどく浮氣者に見える。しかし結局は又芝居に戻つて來る。芝居こそは小山内さんの生れた家である。スウヰト・ホオムである。米の飯である。長い年月の間には、時に横道へ心のそれんとした事もあるであらうが、何といつても別れられないのは芝居だ。恐らく小山内さんの今後の長い生涯に於いても、芝居と緣を切る事は不可能であらう。芝居がやがてその墓標となるのであらう。

一般には、好きな道には溺れ易いものだ。溺れゝば進歩は阻まれる。ところが、小山内さんは常に新しい興味を求めて止まない。今日もなほ藝術に對して、少年の如き純粹の憧憬を失はない。何か新しい演劇運動が起る。誰よりも早く、誰よりも正しく、理解し、歡喜し、而してその知識を吾々ぼんくらにも分かち與へ、喜びを共にしようとするのが小山内さんだ。小山内さんは我國の芝居の先達であるが、講壇で講義を賣る教師の態度では無く、全身をあげて自ら感激し、詩をうたふ陶醉をもつて人に傳へるのである。

實行を尊ぶ小山内さんは、常に理想を持つてゐる。明日の芝居だ。之は世上一般の實業家の實行では無い。政治家の實行では無い。あく迄も詩人の冒險的精神にみちた實行である。愉快に、しかし嶮しい道を、小山内さんは今日まで踏んで來た。自由劇場も築地小劇場も、物質的には恵

まれないのだらうが、仕事としては成功した。吾々の時代の者は、之等の事業のおかげで、戯曲を見る眼、演劇を見る眼を開かれた。

それにも拘らず、小山内さんの過去の姿を想ひ起す時、孤獨な寂しさの中に立つのを見る。世俗的には寂しいのだ。先驅者の免れ難い運命であらう。彼の文藝協會だの藝術座のやうに、こつちから調子を低くして大衆の意を迎へる事は詩人小山内さんには出來ない。詩人小山内さんの根本精神は、誰が何といはうとも、藝術至上主義だ。デヤアナリズムが今日の如く幅を利かせ、惡德を彌漫させなかつた時代の藝術家の持つてゐた生一本の藝術尊重心が、世俗に媚る事を許さないのだ。ぼんくらはいくら馳出しても、先驅者の踵に迫る事は出來ない。世間に理解が無い。自分には財力が無い。頼りにする仲間が少ない。常に小山内さんを取圍むものは、實力なき若者である。しかもこの若者と雖も、先達の早い足並にはついてゆかれないで、何時の間にか置いてきぼりになつてしまふ。そんな事には頓着無く、小山内さんは前進する。時々は道に迷ふかもしれないが、勇敢にかけつゞける。行手には永久に滿足を與へない理想が太陽の如くまどかである。小山内さんはそれを目あてにまつしぐらに進んで行く。追隨者は息切れがして、大概途中で道端の捨石に腰を下す。

戯曲家としての小山内さんも、勿論我國の芝居の指導者たる事を裏書するものである。戯曲制作にあたつて、小山内さんの心には實行家としての興味と、詩人としての興味とが手を取つて現れる。實行家としての小山内さんは、戯曲構成の方法を理論から制作に移さうとする。餘りに小說的戯曲の多いのにあきたらないで、戯曲本來の性質から考へて、讀物的要素の排除を企てる。さまざまの形式の戯曲か試みられる。しかしその形式にぴつたりはまる內容は、詩人小山內さんが提供する。戯曲全集を通讀して、何よりも著るしい特徵たと思ふのは、そのスタイルである。曾て小山內さんの戯曲「第一の世界」の初演を見た時、私は蕪雜な批評を書いたが、その一節を左に抜書する。

小山內さんは勝れたるスタイリストである。短篇集「窓」「蝶」「笛」其他を讀めば、多種多樣の小說の形式が、模範的に示されてゐる。里見好みもあれば、芥川好みもある。菊池式もあれば、久米式もある。平俗無器用鈍感を極めた作家の輩出した自然派全盛時代、平面描寫流行の第一の世界に於いて、小山內さんが纖子扱ひにされたのは寧ろ當然であつた。小山內さんにとつては、例之(へば)小說の材料甲乙內は、各々その特殊の內容に從つて、何れも異なる形式を自ら持つてゐるのだ。その形式を適確に見出した時名作が生れ、その形式を見誤つた時、作

品の出來榮は面白くない事になる。

これは小山內さんの短篇小說に言及したのであるが、戲曲に於てもいろいろの形式が模範的に示されてゐる。「小山內薰戲曲全集」の面白さは、戲曲の形式にある。

舊劇畑の人は別として、所謂新しい戲曲の作者は、多くは小說家である。時に小說を書き、時に戲曲を書く。一二の例外はあるだらうが、大概は小說が本藝で、戲曲は餘興めいてゐる。したがつてその戲曲は小說的なのが多い。讀む爲めの戲曲だ。讀む文學としては相當面白く、上演すると構成上の破綻があらはれて欠伸の出るのが普通だ。其處に行くと小山內さんは、戲曲と小說の異なる性質を悉く知つてゐて、役者と演出者とその他の係の協力によつて始めて完全なる戲曲となる特質を明かにした。會話には動作と間が伴ふ事を、正確に豫測してゐる。讀んではつまらなくても上演すれば效果のあがる事が作者にはわかつてゐるのだ。少し無理ないひ方かもしれないが、戲曲は文學にあらずといつても差支へ無さゝうな際迄進んでゐる。

文字は極端に節約されてゐる。その節約された文字に、いかなる動作が伴ふかを想見する事の出來ないものには、此の全集を讀んでも面白くあるまい。讀みながら、舞臺上の效果を想像し得れば深い興味が湧く。白狀すると、私は常に小山內さんの戲曲を雜誌で讀んで左程感心せず、後

に舞臺で見るに及んで敬服する。私が、戯曲構成の骨法を充分了解して居ないからである。

小山内さんの戯曲は、上手のこしらへた建具の如く、こゝちよく組立てられ、目的にしつくりはまる。多くの戯曲には、何處がいゝとか悪いとか、一部分についていふ可き事があるが、小山内さんにはそれが無い。どこもかしこも寸法がぴつたりあつてゐて何のくるひもない。

「小山内薫戯曲全集」は啓蒙的意義を多分に持つ。曾て小山内さんによつてイブセン以後の戯曲の正しき演出を見せられた吾々は、茲に又戯曲の書方を教へられた。自由劇場の後に幾多の新劇運動が起つたと同じやうに、近頃小山内さんの示した戯曲構成の手法を眞似する亞流の徒が頗る多い。模倣は概して卑しむ可きであるが、正統なる戯曲構成法を學ぶことは結構である。私は小山内さんの戯曲を、小山内さんの多くの仕事の中の上位に置くものでは無いが、我が國の芝居の指導者としての功績を、一層明かにしたものとして推稱し、且深く、感謝するものである。（昭和二年十月四日）

——「都新聞」昭和二年十月十八日・十九日・二十日・二十一日・二十二日

對話

客　大變御無沙汰しましたが御變もありませんか。

主人　こちらこそ御無沙汰ばかり。不相變忙しいものですから。

客　忙しいのは吾々です。貴方なんか、何がそんなに忙しいのです。近頃は何も御書きにならないではありませんか。

主人　冗談いつちやあいけません。此の二年間ほど、のべつに物を書いた事は曾てありませんよ。

客　へえ、ちつとも拜見しませんが、雜誌ですか、新聞ですか。

主人　「三田文學」です。その外には殆んど何も出しません。

客　「三田文學」なんて雜誌が今でも出てゐるのですか。むかしはいゝ雜誌でした。私なんかも

愛讀したものです。

主人　困るなあ。貴方のやうな慶應義熟出身者で、慶應主義者で、年下の亭主を持つた年增のやうに、のべつに塾が塾がと塾の事ばかりいつてゐる人が「三田文學」の復活を知らないなんて。

客　一言もありません。全く知らなかつた。「三田評論」や「三田學會雜誌」の廣告は新聞にも出てゐるが「三田文學」のはつひぞ目にふれた事が無い。

主人　廣告は是非とも出し度いのですが、金が無くて出來ないのです。

客　だつて「三田學會雜誌」の廣告が出るのなら「三田文學」だつて學校で出してくれさうなものぢやありませんか。

主人　駄目です。實子は可愛くて、繼子は憎らしいのです。

客　洒落ですか。皮肉ですか。

主人　育ちが違ふのです。「三田學會雜誌」は學校でつくり、先生が執筆し、生徒に讀ませる雜誌、「三田文學」は吾々のやうな直接學校と關係の無い者が參加して、無理にはじめたもので且敎材にはならないから、自然愛情が湧かないのでせう。

客　そんな事はありますまい。それは貴方のひがみですよ。

主人　私も自分のひがみであつてくれと祈つてゐます。けれども、學校當局が今の「三田文學」に同情の無い事は事實なのです。

客　それは雜誌がつまらないからでは無いのですか。むかしは森鷗外さんや永井荷風さんが每號書いてゐましたが、今はどういふ人が執筆してゐるのです。菊池さんや久米さんも書くのですか。

主人　そんな市價のある原稿は買へません。又買へるにしても買ひ度いとは思ひません。吾々があらゆる犧牲を拂つて、「三田文學」を復活させたのは商賣の目的では無くて、人を生む爲めなのです。はつきりいふと、慶應義塾から、よき藝術家を生み育てようといふのです。此の趣意が學校當局にも充分わかつてゐないやうに思はれて殘念です。これも私のひがみであつてくれゝば幸ひですが。

客　失禮ながら貴方は少しどうかしてゐますよ。我が慶應義塾はむかしから人才を世に出す事を目的とし又ほこりとして來たのです。「三田文學」をはじめたのも、勿論すぐれたる藝術家を生み育てる母胎とするにあつたのでせう。

主人　さうだらうと思ひます。少なくとも明治四十三年に「三田文學」の創刊を促した塾の先輩

連にはさういふ考があつたらうと思ひます。しかし二十年近く經つた今日はどうでせう。是非共やらうといふ熱情の無い事はいふ迄もありませんが、その上にいろいろの誤解が重つてゐるやうに思はれます。第一には、雜誌の效果をはつきりと認めない事、第二には現在の塾の文學部の實狀をはつきり認めない事です。此の頃はやる言葉でいふと、認識不足といふやつです。

客　たとへば？

主人　たとへば「三田文學」は人を生む爲めに存在するといふ事は知つてゐても、商事會社の決算報告のやうにはつきりした數字があらはれないので、果して期待に添ふ結果があつたか無かつたか心もとない。今の實業家や政治家は、文學などはわからないといふのが自慢で、自分達のやうに忙しいものにはそんなひまはないと放言してゐる位ですから無理もないのです。又、世の中で成功した年寄は極めてせつかちで、直ぐさま效果のあらはれない事に努力する辛抱は持合せてゐません。だから、此の十數年の間に「三田文學」を踏臺として世に出た文學者の名も知らないか、或は十人や十五人では滿足しないか何れにしても效果をはつきり認めてゐないのです。

客　さう手きびしくやられてはたまらない。私なんかも、その御仲間なんだから。だが、いつたい「三田文學」はどれ丈人を生み育てたのです。

主人　先づ作家としては久保田万太郎さん。いくら貴方でも、此の人の名前位は御存じでせう。

客　知つてゐますとも。芝居も見たし、ラデイオでも御馴染です。久しく月給取ばかり育てゝ來た塾から、あゝいふ人が生れたのは珍しいと思つて喜んでゐます。

主人　私にいはせると、久保田さん一人を生んだ丈でも「三田文學」は充分使命を果したといつてもよからうと思ひます。

客　そんなに偉いのですか。菊池さんとどつちが……。

主人　角力のやうにどつちが強いとはいへませんが、兎に角一流の作家なのです。近代慶應義塾の生んだ最も偉い人の一人でせう。

客　しかもさういふ人が我が義塾から現はれた事を知らないといふのですか。

主人　さうなのです。世間ではよく知つてゐますが、內輪では存外知らないのです。久保田万太郎といふのは私の筆名だと思つてゐた人さへありました。

客　まさか。

主人　ほんとですよ。

客　話ですね。その外にはどういふ人がゐます。

主人　「三田文學」第一期にあらはれた作家としては久保田さんの次には先づ私を擧げるのが順序でせう。私の如きは久保田さんと同時にあらはれたといふ幸運で、久保田水上と一口に呼ばれてゐますが、作品を比べて見るとまるで段違ひです。

客　ひどく御謙遜ですね。

主人　謙遜ではありません。殘念なのです。殘念だけれど、公平なる批評家としての私は段違ひを認めます。なんといつたつて久保田さんと私では……

客　わかつた、わかつた。それよりも外の人を敎へて下さい。

主人　第一期は渾沌時代でしたから澤木梢小林澄兄などゝいふ學者も小説を書きました。やがて各々落つくところに落つきましたが。それから大凡五六年たつて、第二期の文學者が輩出しました。小説家としては南部修太郞、小島政二郞、戲曲家水木京太、文藝評論家井汲淸治、劇評家三宅周太郞、詩人西脇順三郞の諸氏が一時にあらはれました。此の時、若し學校が新興の機運を認めて炬火に油をそゝいだなら「三田文學」創刊の目的を達する上から見て、素晴しい景氣を現出したらうと思ひますが……

客　惜しいかな認めなかつたといふのですか。

主人　認めるどころですか、見捨てゝしまつたのです。間も無く「三田文學」は廢刊しました。

客　すると今は第三期ですか。

主人　さうです。その間に加宮貴一、勝本清一郎、甲田正夫、石坂洋次郎、久野豐彥、藏原伸二郎、木村庄三郎、小松太郎、倉島竹二郎、平松幹夫、長尾雄の諸氏が續々出て來ました。私は慶應義塾は、最近に於て、醫學部の創設と「三田文學」の復活といふ二大事業を成した事で、やうやく多年の冬眠から覺めたのだと思ひました。前者は學校當局も夢中になり、多くの塾員が多額の金を出し合ひ、後者は學校は極めて冷淡に構へ、貧乏な連中が金と勞力と作品を持寄つて、苦しみもがきながら續けてゐるのです。

客　御苦勞さまです。しかし、みなさんの努力を認め「三田文學」の使命を認めてゐるので、學校は補助金を出してゐるのでせう。

主人　いやいや出してゐるのかもしれませんよ。何故といへば、當然「三田文學」が受く可き補助金を、他の方へぶんどつてしまつたのですから。

客　そんな亂暴な事はないでせう。貴方の誤解ですよ。

主人　こつちの誤解ではありません。先方の無理解です。こゝで第二の認識不足、即ち現在の

塾の文學部の實狀を知らないといふ非難がはつきりして來ます。かいつまんでいふと、慶應義塾の文學部は文學と哲學と史學とで成立つてゐる。だから文學丈に力瘤を入れるのはいけないといふ人があります。私も同感です。しかし、それだから純文學の雜誌「三田文學」の補助金を奪つても構は無いといふ議論は成立ちません。哲學史學の爲めに、新たに補助金を支出するのが當然なのです。若しそれらの部門が活動をはじめるならば。

客　同感ですなあ。

主人　又、斯ういふ論者もあります。「三田文學」の存在は結構だが、今の樣な內容ではいけない。小說や戲曲などを掲載するのは學校の雜誌として面白くない。文學で無ければいけないといふのです。

客　文學ですつて。

主人　或人がはつきりさういつたさうです。此の場合文學とは、文學原論とか、或は講壇で學生にノオトを取らせる文學で無ければいけないといふ意味だらうと想像します。又、同じやうな立場から、西洋諸國に於ても創作本位の雜誌を大學で出すところは無いといふ消極的論者もあるさうです。

客　成程。それは全くでせうなあ。獨逸でも、佛蘭西でも、亞米利加でも……

主人　私は詳しい事は知りませんが、よしんば外國に例が無くたつて構はないではありませんか。又學校に講座の無い事だからといつて一向差支ないではありませんか。殊に、現在の文學部の生徒の中には、作家志望の人が澤山ゐるのです。その實狀を無視して、ヒステリイの老孃のやうな感情論を口にするのは怪しからないと思ひます。

客　へえゝ、作家志望の學生がそんなに澤山ゐるのですか。時勢は變りましたなあ。

主人　さういふ人が大學に入るといふ事がいゝ事か惡い事かは別問題です。兎に角事實です。追風が吹いて來たら、帆をはるがよい。さういふ心持で、その人々に「三田文學」を提供し度いのです。

客　御話を伺つて見ると一々同感です。吾々如き者でも何か手助けが出來るならやつてもいゝと思ひますが、雜誌經營の方はどんな景氣です。

主人　勿論苦しいのです。學校からの補助金と、一人二人の先輩の寄附金と、吾々の寄附金を合せてやうやくそろばんを彈いてゐますが缺損は免れません。

客　それは無謀ではありませんか。缺損の場合には結局學校に迷惑をかける事になるでせう。

主人　御安心下さい。私が借金をしても、學校には迷惑をかけません。

客　そんな事をいはないで、補助金の增額を要求する道がありさうなものですねえ。

主人　そこに如才は無いのです。同情のある先輩を動かし、評議員會の協議にかけて貰ひました。

客　そんなら心配はなくなつたわけですね。

主人　その席に列した二三の先輩の話ではいくらか增して貰へる事になつたといふのですが、學校の人の話では、いろいろむづかしい事があつて中々吾々の手には渡りさうもありません。だから、今ではあてにしてゐません。

客　そんなら今後どうしますか。何か名案でもありますか。

主人　資金が無いから積極的に發展を講ずる事は不可能です。爲方が無いから儉約に儉約を重ね、原稿料は一切支拂はず吾々も步き廻つて廣告を取ります。幸ひに前金購讀者が五百人ありますから、どうかかうか續けて行けるだらうと思ひますが、なほ塾員のこゝろざしある人に援助の意味で加入して貰ひ、壹千人の前金購讀者を得度いと願にかけてゐます。寄附をしてくれる人があると、何よりありが度いのですけれど。

客　廣く手紙を出して口說いて見てはどうです。いゝ事にならいくらでも出すといつてゐる人がありますよ。

主人　手紙を出すのはいゝのですけれど、假に塾員全部に出すとして御覧なさい。學校からくれる補助金年額の半分は飛んでしまひます。野球の後援會といふのがありましたが、文學の方は御贔負が少ないやうです。

客　そんな事はないでせう。みんな私同樣、貴方がたが如何に苦心してゐるか、又その仕事がよい事であるといふ事を知らないのです。「三田文學」が發行されてゐるのを知らないのは、私一人では無いかも知れませんよ。

主人　困つた事ですねえ。慶應義塾は頹廢期に入つたと世間でいつてゐますが、「三田文學」の活躍はやうやく認められて來てゐるのです。かういふ仕事に援助を與へ、新興の意氣に素晴しい力を盡させるのが、塾員共同の任務かと思ひますが、如何でせう。

客　大に贊成です。福澤先生は修身要領の中で、かういつて居られます。「文藝の嗜は人の品性を高くし精神を娛ましめ之を大にすれば社會の平和を助け人生の幸福を增すものなれば亦是れ人間要務の一なりと知るべし。」

主人　福澤先生が現在いきていらつしやつたら、きつと御喜びになるでせう。先生は安逸を貪ることが御嫌ひで、よき目的の爲めにはあく迄も元氣でぶつかる事を好まれたと聞いてゐます。

客　全くです。

主人　どうもたまに來て下さつた方に面白くもない話ばかりして申譯がありません。「三田文學」の吹聽はいゝ加減に切上げませう。

客　いや、私には頗る愉快な話でした。私も近來慶應義塾は不元氣でいけないと思つてゐましたので、何事にしても活氣のあるのは嬉しいのです。早速前金購讀者になりませう。

主人　前金購讀も結構ですが、寄附金も頂き度いもので……

客　これはきびしいたあ。寄附金ならもつと金持を勸說して下さい。まさか五拾圓や百圓も出せないでせう。

主人　どう致しまして。五圓でも、十圓でも結構です。私共としては、御金も頂き度いのですが、そのこゝろざし丈でも感謝します。どうぞ卽金で思召の程を示して頂きませう。

客　さう押して來られてはかなはない。では少々ですが……　（昭和二年十月十日）

――「三田文學」昭和二年十一月號

無題二

毎月出る夥しい作品を全部讀む事は不可能です。自分が讀んで面白く思つたものを他人にも讀むやうにすゝめ、他人が讀んで面白いといふものは教へて貰つて自分も讀む。お互に知らせあつて喜びを共に分ち度い。私は先づ復活以來の「三田文學」に出た作品の中から左のものを選んで、未だ讀まない人には是非讀んで頂き度く、一度讀んだ人にはもう一度繰返して頂き度い。今度は特に小說丈にしました。忙しくて一々讀返す事が出來ませんでしたから、後日後悔する事もあるでせうし、他に擧ぐ可きもので落したものもあるでせう。

加宮貴一氏　幾分の眞實　大正十五年四月號

久野豐彦氏　ある轉形期の勞働者　同

木村庄三郎氏　嘘　同

廣く文壇に認められた作品です

久野豐彦氏	物質の門	同	五月號
同	ナタアシヤ夫人の銀煙管	同	七月號
小林きよ氏	デリケート時代	同	八月號
倉島竹二郎氏	汚點を洗ふ	同	九月號
藤原誠一郎氏	普請好き	同	
原圭一郎氏	肥瘦	同	十月號
藏原伸二郎氏	草の中	同	
水木京太氏	形見	同	
和木清三郎氏	結婚愛	同	十一月號
倉島竹二郎氏	浩吉の道化	同	

すぐれたものでした。もつと小說を書いて頂き度いと思ひます。

此の作者は短篇小說の手法を樂々と我物にし素晴しい才氣を示しました。最近の連載小說「戀愛破產者」は感心しませんでしたが、失敗しても大物に手をつける方がいゝと思ひ

ます。下らなく悄氣るのは贊成しません。

平松幹夫氏　汗の味　同　十二月號

勝本英治氏　アレキサンドリアの太陽　同

勝本清一郎氏　肉體の距離　昭和二年一月號

底力のある大作です。「三田文學」に出た小說の中で第一位を占む可きものと思ひます。此の作者は評論家として認められましたが、小說作家としても大成する事を信じます。今の文壇の一般的傾向に反する勉強家で、しつゝこい程の精力家です。

石坂洋次郎氏　海をみに行く　同　二月號

力強い作です。表面はをかしく、底にはのつぴきならぬ憂鬱を藏し、笑泣を強るものです。

加宮貴一氏　萎れた頰　同

勝本清一郎氏　骨董の本場　同　三月號

平松幹夫氏　感傷罪　同　四月號

加宮貴一氏　錨のない小艇　同

小林きよ氏　大きく見える影　同

冴えた手腕は現在の閨秀作家の上位を占むるものと思ひます。描線の鋭く細く、自在に延びてゆくのは並々ならぬ才氣の賜でせう。

小松太郎氏　ナタアシヤ　同　五月號

まとまりの悪いところはありますが力作です。此の作者は、長篇を書く力量を持つてゐるやうです。

杉山平助氏　下層一斷面　同

柴野てふ子氏　物　干　同　六月號

小林夫人程小手はきゝませんが、人生智の廣く深い觀察者で且多分の熱情を持つてゐる人です。相當の年配の方ですが、よき作品を出して廣く認められる日は遠くありますまい。

石坂洋次郎氏　爐邊夜話　同　七月號

小松太郎氏　フリイダの一日　同　八月號

長尾　雄氏　五月の空の如く　同

甲田正夫氏　田舍の家　同　九月號

平松幹夫氏　ドキュメント　同

當節はやらない地味な作風ですが、しつかりしたものです。めきめき腕をあげた人の一人です。但し此の作風では、はでな人氣を得る事はむづかしく、今後多難の道を踏む事と思ひます。それに打勝たれん事を切望します。

――「三田文學」昭和二年十一月號

「多情佛心」を評す

すぐれたる小説は必ず大なる描寫力を持つ。描寫といふ文字が狭過(せますぎ)れば、表現といひかへてもいゝ。兎に角表現能率の高くない小説は、小説としての價値は乏しい。トルストイを見よ。ドストイエフスキイを見よ。ロマン・ロオランを見よ。フロオベルを見よ。ゾラを見よ。バルザックを見よ。モオパッサンを見よ。その描寫が、主として客觀的手法を執るとも、或は主觀的色彩の濃厚なものであらうとも、兩者の適當なる併用であらうとも、何れにしても表現力の素晴らしさが、吾々の眼前にひとつの世界をあざやかに展開するのだ。小説と雖も、お説教の役目をつとめる事もあらう。宣傳の用具となる場合もあらう。階級鬪爭の武器として利用する事も勝手である。しかしそれがすぐれたる小説である爲めには、常に表現の腕力がなければならない。小説作家の第一に心がく可きはそれである。いかにして、文字をもつて繪畫的效果を出すか。音樂的效果を

出すか。彫刻的効果を出すか。建築的効果を出すか。いかにして、文字を以て此の人間の形造る世界を描き出すか。それが第一義の問題だ。

里見弴氏は吾々と時代を同くする作家の中で、表現力の強い人である。大體に於て、客観的描寫を用ゐて居るから、此の人の場合には描寫力が強いと云ふ方がぴつたりはまるやうだ。此の作者の小説は、一篇の主題に同感の持て無い場合にも、描寫の面白さを容易に求める事が出來る。曾て泉鏡花先生は、里見氏のうでの冴えを、煙管を持たせても短刀位につかふと評されたが、里見氏自身も充分自分のうでに信頼し、描く事にかけては思ふ存分の振舞をして、決して遠慮しないのである。

或人が同じ作者を評して「神を恐れないのがいけない」と云つた。それは必ずしも作品評では無かつたかもしれないが、私はこれを里見氏の奔放なる描寫に對する批評とし度い。實に大膽不敵である。誰しも、里見氏を描寫至上主義の作者だと思ひ、その手法は純粋の客観描寫だと信じてゐるが、實は一字一句には思ふさま作者の主觀を露出させながら、全體の效果に於て客觀世界を現出させて居るのである。敬服すべき特異の描法である。

里見氏は昔から自然派の傾向の少ない人であつた。人間の心理解剖には科學的執刀を怠らない

が、しかも心臓をつかみ出すと、それを醫者や科學者の眼では見ない。形としての存在以上に、何等か飛躍すべきしろものとして叮重に取扱ふのだ。小説の筋立てにも、完全に自然派の影響を拒んだ。平面的の眞實は此の作者の求むるものでは無い。從而平面描寫は、此の作者の好まないところである。たいくつなる人生は、此の作者の住む世界では無い。寧ろ常にストライキングな事に興味を持つて居る。初期の作品の中に「念力の飛行機を飛ばす」といふ機智に滿ちた文字を繰返して使つてゐたが、さういふ心の定め方にも、靜的な一生懸命では無く、動的な活力を示すものがある。人生の中に、何か飛躍を求めるのである。だから、小説構成の筋立てにも、あり得可らざる事を如實に描く興味が強く、あるがまゝの人生を、寫生的に描く事は好まない。常識人の世界のもうひとつ向ふ側に、あつて貰ひ度い人生を作り出さうとするのだ。讀者は、此の作者の小説を讀んで、吾々の日常生活に親しい場面を見る事は稀で、一生の中に一度あるか一度も無いかもしれないといふやうな特異の世界の現出する事が屢々ある。但し、その場面にも、作者は特異の世界の面白い場面を描くよりも、寧ろその間に處する人間の心の飛躍に興味を持つてゐるやうである。むかしは「念力の飛行機」、今は「まごゝろ」である。

私は「多情佛心」を里見氏の傑作だとは思は無い。却て破綻の多い作品だと思つてゐる。けれど

も、數多い氏の作品中最も面白いもののひとつに數へてゐる。何が面白いのかといふと、一言にしていへば「まごゝろ」を主題としてゐる點に興味を持つてゐるのである。作者の心構のはつきりわかるのが面白いのである。

「まごゝろ」は何時の頃からか里見氏の唱へ出したお題目である。天邪鬼の心持も多分に持ち、どんな事でも突放して見てゐられるのかと思ふと、變にお説教好なところのある人だから、又かと思ふ程繰返して「まごゝろ」を說いてゐる。第三者は、舌を出したり、ひやかしたり、漫畫に諷したりして居る。

その「まごゝろ」とは何であるか。里見氏の隨筆集「白醉亭漫記」の中に「まごゝろ」を題とする感想文があるから、玆に引用させて貰ふ。

冒頭に斯ういつて居る。

私の作品や感想文のなかに、ちよくちよく出て來る「まごゝろ」と云ふ言葉について、近頃或る人から說明を求められた。

言葉といふやつは妙なもので、生れて初めて聞く場合は別として、例へば「まごゝろ」と云ふやうな、平常誰でも使ふ、耳に熟し口に馴れた言葉でも、よく解つてゐるやうで、その實

考へてゐるうちに、はつきりしなくなつて來ることがよくある。凡そ解つてゐても、人によつて、解り方に、深い淺いがあり、巾の廣さ狹さがあり、意味の強さ弱さがあるのは當然のことだ。それは全く各個人の實感、認識の如何に拘るところで、百人よれば百人ながら、少しづゝでも違つたものでたければならない。

さういふ風に、何處からつつついても隙を見せたい言葉でいひあらはす事は不可能だと斷書を繰返した上で、次のやうに說いてゐる。

そこで「まごゝろ」とは何か、（少し略す）それは眞實でたければならない、また一念一向でなければならない。更に今樣に云ひ換れば、――己に忠實に、實感をもつて認識を深め、そして作るところなく、赤裸に行へ！　さう云ふことになるのだ。

此の描寫藝術家は理論を述る事は極めて拙劣である。あれ程の描寫力を持ち、如何なる場面でも、どんな人間の姿でもはつきりと描き分ける作者も、自分のおもひを述る事は意のまゝにならないやうだ。「まごゝろ」の定義を讀むと、讀まない前よりもかへつてわかりにくゝなる。むべなるかな里見氏は、右の定義を述べた後で、

が、どんな風に云つてみたところで、要するに言葉だ。說いて縷々數萬言を費さうと、凝

らせて一言に盡さうと、解る人には聞かずとも解り、解らない人には遂に解らない。と、どうとも勝手にしろといふやうに結着をつけた。

私は「まごゝろ」が何を意味するかの詮議立てに興味を持つてゐないわけでは無い。しかし、小説作家の信念としてそれを述る時、解る者には解り、解らない者にはわからないでいゝと云ふ作者の心持に同感である。楊子で隅つ子の埃をほじくり出す仕事は講壇批評家に任せて置くがよい。そんな詮議立てにこだはらずに「まごゝろ」を信念として、只管描寫藝術に精勵する作者の態度を是認するものである。

たゞ右の定義によつて察するに、里見氏の「まごゝろ」は世間つい通りの「まごゝろ」よりも、ひどく主我的の觀念である事が感じられる。昔からの用語例に從へば「まごゝろ」は大概他人あつて初めて適當の意味をあらはした。君にまごゝろを捧げるとか、友にまごゝろを盡すとか、さういふ場合誠心誠意を意味するのだ。ところが里見氏の「まごゝろ」は、己に忠實に、己を偽らず、赤裸たれといふのであつて、ともするとイブセンの臭もするし、トルストイの氣配も感じられ、ニイチヱの呼吸もかゝつてゐようといふのだ。己れに忠實であり、作らず赤裸に行ふのだから、他人は二の次になる。從而他人の爲めに盡すよりも、時には他人を傷つける事もあり兼ない。そん

た時には、此の「まごゝろ」の持主は、時々の間違ひは爲方か無いさ――といつた位の心持で押切つてしまふのであらう。

此の里見氏の解する「まごゝろ」は、長篇「多情佛心」の主旨である。或は「多情乃眞心」と解しても差支無さゝうだ。作者は此篇の主人公の多情がいたづらで無く、まごゝろである事を筆を盡して說いてゐる。

しかし、作者は描寫を第一とする本筋の小說家だ。悠々として種々の場面を展開し、その各場面に遺漏なく「まごゝろ」のひらめきを見せる手法を選んだ。どの場面にも「まごゝろ」は果物の種の中の核のやうに、動かぬ中心をなしてゐる。

自分の都合の爲めに一篇の荒筋を記させて貰ふならば「多情佛心」は主人公藤代信之の御遊蕩一代記である。多情にして「まごゝろ」の持主なる此の男は、作者の語らんとする多情乃佛心說を人格化したものらしい。尤も、此の人と接觸する他の人物も、何れも同じ、「まごゝろ」の所有者には違ひ無く、その意味では、作者は性善說を奉じ、人はすべて「まごゝろ」の持主であるといふ信條を抱いてゐるものと見てよさゝうだ。銳い觀察眼を光らせ、逆說的な天邪鬼の魂を活躍させた此の作者も、次第に銳角が擦り減つて、まどかなる心をいつくしむ方に傾いて來たのではあるま

いか。成長盛の若い心は破壊を喜ぶが、年齢(とし)は何時か破壊の快感を奪つて行く。よりどころの無い破壊よりも、己れの信ずる道を確立して、動かし難い安住の心構へを築く事に向いて行く。里見氏が「まごゝろ」を說く心持は、その過渡期にあるのでは無いかと思はれる。

藤代信之は三十を越して既に四十に近い年配だ。清廉剛直の實業家を父とし、その遺産で相當贅澤に暮らしてゐる。英法科出身で辯護士の資格も持つてゐるのだが、稼ぎはしない。貞淑な妻があり、むやみに可愛がつてゐる子供も三人ある。文學尊拜者で、雜誌「高踏」の金主だ。お酒が好きで、胃癌で排血する體になつてもやめられない。これが頗る多情で且「まごゝろ」の持主なのである。先づ料理屋よし野の女將おもんところぶ。その妹のお澄といゝ仲になる。ヒモト(日本橋の事ださうである)の藝者幾代とも他人では無い。上方(かみがた)の藝者里奴とも仲よしになる。不良少女萩原鈴江にも手を出す。茲でひどくをかしいのは、信之の心に祕めてゐる言葉で「金鵄勳章」といふのがある。最高の情愛のしるしとして相手方が拜領する「まごゝろ」なのである。

> 二人のうちどちらでも危篤と云ふ場合には、どんな境遇のもとにあかの他人になつてゐやうとも、必ず知らせ合ひ、見舞ひ合はうといふ約束

と作者は說明してゐる。此の「金鵄勳章」はおもんと幾代と里奴が拜領し、お澄は貰ひそこなつ

た。彼女は信之の多情なる事のみを知つて、佛心に深く觸れる事が出來なかつたからである。
茲で注意すべきは「まごゝろ」の持主は惚れる事に於て無計算でなければならないといふ作者の考へ方である。いたづらはいゝ。何故ならば多情乃佛心だから。例之おもんは、全くふとした酒席の興味から、いろをとこの若女形瀧十郎の目の前で、又信之に岡惚して居る妹お澄の目の前で、まづ初對面に近い信之に凭れかゝつたり、口うつしに飲ませろとせがんだりしたあげくに、先手を打つてしまふのである。信之は信之で、お澄の心持を知りながら、おもんの持ちかけるまゝに誘はれて些かも「まごゝろ」を傷つけられない。たつた一度のころび寢た。直ぐその後で、行く可きところに行きついてお澄と仲よしになる。おもんの方はその後惡い坊主にだまされて、持つてゐた物は悉皆捲上げられ、ひどい虐待をうけながらも坊主が思ひ切れないで、甘んじて悲慘な境遇に陷つたまゝ矢張坊主にしがみついてゐる。おもんは卽ち「まごゝろ」の持主とされてゐる。それにひきかへお澄の方は、信之と別れ、旦那窪井謹五郎の手も離れ、やがて華族の息子の妻となる。相手はお澄の爲めに女房と二人の子供を追出した。此の事件を信之は人から聞かされて、忽ちお澄に對して好意を失つてしまふ。尤も、作者は直に信之に反省させ、當の二人がほんとに惚れあつてゐるのなら、相手の女房や子供に氣の毒な目を見せようとも構はないと、里見氏解する

ところの眞心卽ち己れに忠實に、己れを佯らず赤裸に行へといふ信念を取戻すが、そこには實感が出てゐないで、いひわけとしか受取れない。要之お澄は「金鵄勳章」に値ひしないのである。「まごゝろ」は全く我儘だ。持續性を缺いてゐて、或瞬間に不意にあらはれて來る事が多い。「まごゝろ」さへ底に持つてゐれば、ふだんは何をしても構はないといふ事は、信之の言葉の中にはつきり出て來る。他人を殺さうと泣かさうとおかまひ無しだ。思ふが儘に振舞つてこそ「まごゝろ」なのだ。

私はさういふ風に此の作中の「まごゝろ」を解するものである。解る者にはわかり、解らない者には遂にわからないのだから、そんなに淺薄な解釋をされては困るといはれるかもしれないが、許して貰はう。

前にもいつた通り、此の小說には「まごゝろ」といふ主旨があり「多情佛心」といふはつきりした標語を掲げてゐて、極力それを場面描寫で呑込ませようとしてゐる。由來テーマのはつきりした小說には無理が多い。テーマを生かす爲めには、自然性を犧牲にして憚らない。「多情佛心」にもその傾向は著しい。殊に神を恐れずに描寫する作者の事だから、意識して自然らしさを無視してゐる事はいふ迄も無い。自然派以來綿々として盡きない第一課的ありのまゝ描寫主義とは全く背

馳してゐて、どしどし冒險を敢てする。遂には、信之にしん底から惚れてゐる薄命の妓里奴の幽靈さへ描出した。但し、私は此の場合幽靈を出すのは冒險好の作者のやり過ぎで、寧ろおだやかに、信之の臨終に里奴の死を報ずる電報の屆く事にした方が效果か多かつたらうと思ふものである。

斯ういふかき過ぎは、うで達者の作者として免れ難い病疾である。何でも描けるといふ自信か、あまりに描き過る結果を伴つて來る。「多情佛心」がひとつの主旨を持ちながら、一貫してその主旨の重壓を感じさせないのは玆に原因するのではあるまいか。切離して短篇とすれば幾多の名篇となりさうだが、存外だらだらと繰返しに過ぎない場面の展開に終つて、長篇としては物足りない。相手かはれど主變らずの信之は、到る處で誰とでも仲よしになり、ふとした心のあらはれを捉へては、ちえかたじけないと「まごゝろ」を拜んで感涙を流すのだが、同じやうな段切を持つ各場面が、次第に重量を重ねて來るのでも無く、何時も同じ步調で散步してゐるのは覆ひ難き缺點である。

(一)お澄に旦那があつて、それか亡父の仇とも思ふ窪井だと知つて「嘘をつくなアよくねえや」と泥醉したのが口癖にいひながら、ふらふらとお澄の家卽ち窪井の妾宅へ逢ひに行く。その門口

ではじめて吐血するのだが、それからお澄にむかつて、何故眞實をうちあけてくれなかつたかと語ると、お澄は泣く。信之の膝に縋つて泣く。そこで信之の「心の眼は明るみ亘り、清い涙に潤つた……」とあるところで、

何に捧げる禮心か、有難涙がはらはらと落ちた。

とある。

(二)不良少年の西山普烈がゆすりに來る。性善說の信奉者信之は、不良少年の心の中にも忽ち「まごゝろ」の存在するのを見出して、互に握手しつゝ感激の涙を流す。

(三)亡父の仇だと思ひ込んでゐた窪井がお澄の旦那だとわかつた。その窪井とお澄が箱根の宿にゐる。偶然信之も泊り合せる。感情家で人道主義者で、多情で「まごゝろ」の信之は、直に窪井にむかつて「眞心をもつて、眞心に御相談ねがふ」といふ切出しで、お澄と切れてくれと申入れる。ところが此の窪井が亡藤代信策の息子だと知つて懷かしがる態を示すと、信之は忽ち感激とゞめ敢ず、

はつと胸のあたりが熱くなつたと思ふと、もうこらへる暇もなく、眼のなかいつぱいの泪になつてゐた。眞正面に近よつて來た窪井の顏も、ギラギラと泪に映る光のために、忽ち消え

て了つた。……しばたゝきもしないのに、筋を引いて、熱い泪が頬へ流れ落ちて來た。

(四)不動堂の坊主にさいなまれて居るおもんをたづねて行つた信之が、雨の夜の道端でたづねる人に逢ふ。自分の身はどんなになつても構はないと心を定めて相手の坊主の側を離れる事の出來ないおもんの「まごゝろ」に感じて信之は涙を流す。こゝでは「まごゝろ」至上主義の信之が、あまりに純粋の「まごゝろ」を持つおもんの心根にかぶとを抜いで、

「だけど、あたしには、貴方みたいに、自分はどうなつても構はないつてほどの氣持で、好きで好きでたまらない人があるわけぢやアなし、寂しくつて、寂しくつて、……酒でそれを紛らさうなんて、意氣地のない話だけれど」

云々と述懐するが、こゝでは「まごゝろ」主義の信之が、實は世の常の蕩兒に過ぎないやうな姿に見える。しかもその方が藤代信之の本質であるやうだ。

(五)マツケンゼンを殺した後で、おもんのゐる不動堂の緣の下に身をかくしてゐた普烈を我家に伴つて來て、又しても信之は此の不良少年の「まごゝろ」に涙を流す。

近々と見合せて、一二秒すぎたと思ふと、普烈の眼の中は、いつぱいの涙になつて了つた。

それを見ては、信之とて我慢ができなかつた。

その外にも探し出せば、同じやうな景色が出て來さうだが、私の云はうとするのは、かういふ風に人と人との機智に滿ちた會話のやりとりの間に、人々の姿を充分描きながら、段切れには必ず「まごゝろ」を形に見せて一篇の主旨を貫かうと企てたにも拘らず、結果は存外平調な場面の繰返しに終つた事を惜むのである。マツケンゼン殺の前後、不動堂附近、三好と美津枝がしめし合せ美津枝と瀧十郎が赤坂へ向ふところなど、切離してしまへばとりわけ勝れたる短篇だと思ふが、扨て長篇としては部分的に感心する丈で、一團となつてのしかゝつて來ない憾みが深い。

瓦をもつて玉にかへんとするそしりをまぬかれないが、私の長篇「大阪の宿」に對して新進の批評家勝本清一郎氏の與へた批評は、移して茲にあてはまる。卽ち繪卷物のやうに場面の展開はあるが、立體的構成に缺けてゐるといふのだ。繪卷物式の小說だつて存在理由はあるとすましてゐてもいゝのだが、私は勝本氏の批評を甘受した。恐らく里見氏も甘受されるであらう。

此の缺點は、ひとつには一年餘も新聞に連載し、毎日々々追かけられてゐるので、自然に招いたものかもしれない。殊にうでのある作者だから、いかなる場面にでも人間を二人登場させれば、容易に一回分の責を果す事が出來るといふ誘惑もあつたであらう。その日その日讀めば何等の不滿を知らずに過ぎるかもしれないのである。それ程、短篇的にはすぐれてゐる。殊に私が描寫力

に感心するのは、對談する二人の人の、さほど意味の無い會話のやりとりをしてゐる姿である。とりかはす會話の意味のぴつたり合つてゐるのはいふ迄も無く、細かい神經の働く人間か、顏面に脂肪を浮かべ、人間臭いあたゝかさを漂はせて活きて動く事である。何といふ素晴しいうでだらう。

とはいへ里見氏と雖も、得意の場面と不得意の場面のある事は爭はれない。料理屋待合は氏の筆の自由自在に活躍する舞臺を提供する。その世界の細かい組織と慣習の中に、迫眞力のひた押に來る描寫を見せられると、襟を正して聲を呑む心地がする。あまりうまいので小面憎くなる事もある。

それに反して此の篇の中の裁判所の如きはお門違ひである。

人間に於ても同じ事が云はれる。藝者、待合の女中の如きは、里見氏の技眞に迫つて、名人吉田文五郎の使ふ人形のやうにいゝ型を殘しつゝ自在に動くが、辯護士としての藤代信之の如きは、甚だしい場ちがひで、その長々しい辯論には屢々笑を誘發された。勿論、作者には、わざと辯護士型をはづれた人間にしようとした意圖はあるのだが、それはそれとして、些か木偶に近くなつた感があるのである。

一人々々吟味して來ると、大物丈に藤代信之は描けてゐない。姿は描いてもその人となりは出てゐない。それは他の人間――例之三好だとか、瀧十郎だとか、おでんやの丸三などは、形から描いて行く丈で濟むのだが、一種の主題を持つ小說の內容を一身に荷ふ信之は、その內面生活を描かねばならぬ大荷物だ。短篇的に、その場その場の人間の心理描寫には充分覺えのある作者も、一貫した人格をかたちづくる事にはなほ未だ表現能力に不足するところがあるのでは無からうか。或は又、里見氏の心がけてゐる「まごゝろ」か、未だほんとに苔のつく迄に到らない爲めでは無いだらうか。

多情ではあるが、しかし「まごゝろ」の所有者だといふ人間はをかしくない。「まごゝろ」の人ならば多情な筈は無いといふ解釋は女學生に媚るものである。だが、何といつても描かれたる信之の全人格は、直に「まごゝろ」を以て吾々に迫つて來ない。たまたま感傷癖に傾いて、彼が「まごゝろ」の涙に頰を濡らす時も、それはおひとよしの世間知らずの姿しか彷彿させない。又彼が「まごゝろ」を他人に說く時、相手も多くは感激して此の人の「まごゝろ」の中に溺れてしまふ段取になつてゐるが、吾々讀者側から見ると、何をいつてやがるんだ、自家辯護はよせと叫び度くなる。そこに信之を表現する上の弱さがあり、又作者の解する「まごゝろ」になほ大なる精神力を必要と

する例示ではないだらうか。

もう一度言葉を換へて繰返せば、情痴の世界に溺れ切つてゐる時の信之は活きてゐて、「まごゝろ」意識を持つ時の信之はこしらへものになる。他の人間も同じだ。みんなが勝手氣儘な洒落をいつたり、酒を飲んだり、姦通したり、口説のやりとりをしてゐる時の姿は、巻を閉ぢてなほ眼前に見るが如き現實性を持つてゐるが、突然「まごゝろ」に觸れる場面になると、芝居がかりで、わざとらしく、よく氣羞しくないなあと思ふのである。描かれたる人々にも、作者にも、多情あまりあつて佛心足らざる憾があるのである。(昭和二年十一月八日)

——「三田文學」昭和二年十二月號

應援歌

「三田文學」復活後間もなく、私は同誌の六號欄に投書した。

「三田文學」の成長の爲めに特に三田の先輩並に學生諸氏に御願ひがあります。正直に申せば

第一に寄附金を頂き度い

第二に前金購讀の申込をして頂き度い

第三に廣告を出して頂き度い

ベースボールにも勝ちませう。

テニスにも勝ちませう。「三田文學」もさかんにしませう。

私は、どんな短い文章でも、筆者は責任を明かにする爲めに氏名を記す可きだと主張してゐる。

だから、世間普通の六號記事の例に倣はず、明白に名前を出して置いた。

それにも拘らず、これを讀んだ或人が私を捉へて、あなたにも似合はない、いやしい事をおつしやる、誰かゞお名前を拜借したのではありませぬかと、いとものやはらかな口調で皮肉を云つた。

どう致しまして、正に私の心から望む事だつた。

扨て、いちはやく天下に覇を唱へたのは庭球である。多年さんざんに負かされてゐた早稻田を、殆んど段違ひの成績で破る事旣に二シイズンに及んだ。野球も、今秋に至つて、宿敵早稻田をストレートで破つた。完全に零敗せしめたのである。お次は「三田文學」の番だが、何時になつたら銀座のカフヱで放歌亂舞し、警察にあげられる迄歡喜の極みを盡す事が出來るのであらうか。

斯う書いたからといつて、あの晩の塾生の行動を非難するのではない。私も銀座へ泳ぎ出した一人だ。私の目擊したところによれば、翌朝の新聞の記事は些か大袈裟だつた。勿論騷がないに越した事はないが、止むに止まれないのだから大目に見てもいゝではないかと、いひ捨てゝしまひ度い。

何といつても慶早野球戰の前後程慶應義塾が生きた存在を認めさせた事は近年見ないところである。聲を張上げて應援歌をうたはんと欲するものは、三田山上の學生ばかりでは無かつた。七

十八十のおぢいさんから、幼稚舎の生徒迄、同じく慶應義塾を愛する心持を殘りなく披瀝した。あれは、單に野球戰の應援ではない。何となく沈滯した氣分の濃厚な慶應義塾に、いきいきした力を吹込まうといふ熱情のあらはれである。その爲めに、うたふ者の心の底には絕望的な覺悟さへあつたやうに感じられた。

毎度繰返していふ事だが、獨立自尊はひとりよがりではない。たゞたゞ事勿れを念じつゝ、平和に頭の禿るのを待つ心ではない。しつかりした自己を確立せよと、封建時代の町人根性を破壞する爲めに警世家福澤諭吉先生が旗じるしのひとつにされたのだ。そんな文字はどうでもいゝ。福澤先生が身をもつて示されたやうに、いゝ事には勇敢に進む可きだ。獨立自尊の人が共同の目的の爲めに結合してこそ、はじめて道は行はれるのである。いたづらに御先祖のありがたさを繰返してゐるばかりではいけない。理想と實行と――それが慶應義塾の精神だ。

先年も塾歌の問題があつて、既にひとつの塾歌があるのに、更に新しく作るなどとは怪しからないといふ議論も出たさうだが、結局新たに作る事にきまつたのは結構な事である。塾歌なんかはいくつあつたつて、錦の御旗ではないのだ。誰も歌はない塾歌、歌つてもつまらない塾歌などは、回顧趣味の爲めに記錄して置く丈でいゝ。新規の應援歌の歌詞が拙劣だといつて笑ふものも

あるが、少々位下手だつて構はない。勿論上手に越した事はなく、又實際拙劣には違ひないが、歌ふものの心に情熱を感じさせれば目的は達してゐる。作曲も些か教會音樂のやうな感じがあるが、あきたら又作ればいゝのだ。開戰前に歌ふ應援歌、一點先取した時に歌ふ應援歌、危機に臨んで強打者のボックスに立つた時歌ふ應援歌、本壘打をかつとばした時に歌ふ應援歌、ゲームセットとなつた時の凱歌、その外いろいろ取揃へて置いて、指揮者の指揮のまにまに、機に應じ變にのぞんで歌ふのも面白いではないか。吾々が愛するものは塾歌ではなくて慶應義塾なのだ。吾々が尊しとするものは應援歌ではなくて、もろともに勝たんとする心である。

學校は單に學問を教へればいゝのだといふ考へ方は、あまりに非慶應主義である。慶應義塾は單に一箇の學塾たるに甘んぜずとは、福澤先生の喝破せられたところである。一年に一度や二度は學校の庭にも浪漫的な情熱によつて多數を結合するお祭があつていゝ。來年は、三田の山の上に大篝火を焚き、麥酒の樽を叩いて歌はうではないか。うたへ、うたへ、もろともにうたへ。慶應義塾の精神は自ら感得されるであらう。

吾々が「三田文學」の再興をはかつた時、第一にのぞんだ事は、此の雜誌を中心にして、三田の山から多くの文學者、創作家を生み出さうといふのであつた。塾員も援助してくれるであらう。

先生も生徒も應援してくれるであらう。

もろともに力を合せたならば慶應義塾に、更に光輝ある歴史を加へる事が出來るであらうと思つた。しかし、事は思ふやうには行かない。みんなの小遣錢を集めて葉書や切手を買ひ、一萬の塾員に應援を求める事三度に及んだが、未だ聲を合せて歌ふ感激を惠まれない。しかし、段々に新人を生んで行きつゝある。やがて文壇の主力たる可きは三田であらうと豫言する人さへ現はれた。誰も彼も、聲を張上げて應援歌をうたつて下さい。

ベースボールにも勝ちませう。テニスにも勝ちませう。三田文學もさかんにしませう。（昭和二年十一月二十六日）

——「三田新聞」昭和二年十一月卅日

無題三

◇此頃は忙しくて雜誌も手つかずで殘つてゐる。僅かに讀んだものゝ中で面白かつたのは、

一、「三田文學」十一月號所載。小松太郎氏作「黒鶯のエンミイ」

二、「文藝春秋」十一月號所載。野球を話題とする座談會速記中にあらはれたる慶應義塾野球部監督腰本壽氏の態度に感服す。座談會につきものゝ浮々した氣分にならず、無駄口をきかず、度胸と覺悟を示し、慶應早稲田に勝つ事疑無しと思つた。

又日日新聞の橋戸信氏が決して公平で無く、母校早稲田贔負なる事を明言したのは、どうせわかつてゐる事であるが一段と明白になつてよかつた。

――以上

――「三田文學」昭和二年十二月號

「綠の騎士」とその作者

「綠の騎士」は原稿紙約壹千枚に及ぶ小島政二郎氏の小說である。小島氏の文壇生活も既に十年に及んだが、これはその間に生れた唯一の長篇小說で、今日迄に氏が刻苦勉勵して習得した作家としての力を傾け盡して書上げたものである。ほんとに體得したものを殘らず吐出した形だ。此の大作の完成と共に、深い疲勞が來た樣に思はれる。天分薄くして早くもへたばつたのか。否々、私は左樣は思はない。ありとあらゆるものを出切つたので、新たなる榮養を攝取しなければ、潑剌たる活動を期する事が出來ないのである。それ程「綠の騎士」は、作者にとつて大仕事だつた。

數年前此の小說が都新聞に連載された時の作者の意氣込を私は知つてゐる。讀者の評判のよいといふ噂の傳へられた時の作者の喜びを知つてゐる。近頃安價粗末なる圓本流行の折柄、四六判六百五十餘頁といふ部厚な美本として市に現はれたのは、吾々友達の痛快に思ふ所である。

小島氏は、恐らく幼少の時分から、文學の物語的要素に最も強く心を引かれた人であらう。それは知識慾の旺んな人には當然伴ふ傾向である。森鷗外先生にも、夏目漱石先生にも、芥川龍之介氏にも此の傾向は著しい。小島氏が國文學に沒頭したのも、講釋場へ入浸つたのも、物識で話上手なのも、總てそのあらはれである。此の傾向の人は、主として文學の詩的要素に惚れてその道に入つて行く人達と違つて、己れを忘れてがむしやらに物を書く態度を執らない。在來の文學に對する知識が役に立つか、或は邪魔になつて困る場合もあらう。何れにしても最初から表現樣式について一家の見を持し、不ていさいな眞似はしないのである。

小島氏の場合には、曾て私が氏の第一創作集「含羞」の批評をした時に細かに述べたやうに、少年時に愛讀したホトトギス派の寫生文を土臺とするお話風の寫實から入つて行つた。いくつかの御話が、ひととほり手際よく紙上に展開された。しかしそれは、吾々にとつて何のかゝはりも無い、恰も時代を異にする物語に等しい效果しか擧げなかつた。

此の點に氣のつく迄に、小島氏は長い間、一人前になり上れない事を苦に病んでゐたらしい。弱氣の底に、柳に雪折れの無いやうな撓んでも折れずにはねかへす精神を藏してゐる作者は、並ならぬ勉強のあげく、次第に實人生に直に迫る藝術境を打開した來た。峠を越えて平坦な一路を

見出したやうに、逆流を乘切つて順風に帆を張つたやうに、作者は目標をつかんでまつしぐらに進んだ。「喉の筋肉」「一枚看板」の如きすぐれた作をつぎつぎに發表して、鑑識の確かな批評家に手堅い手腕を認めさせた。「一枚看板」は此の作者の第一期を劃するものであつた。

小島氏は此の作品を創造した事によつて、正に確信をつかんだ。しかし、それ丈で滿足しなかつた。寫生時代の延長と見る可き、冷かなる觀察ではあきたりなくなつた。情熱を内部に深く抑へて居る態度さへ、捨てゝしまはうとする。新たなるめあては、主觀と客觀の融合に外ならない。曾ては見る事と、知る事と、記述する事を身についたわざとしてゐたのが、今度は歌ひ、叫び、わめかうとするのである。第二著作集「新居」の中に收められてゐる數篇はその所産である。これが第二期と見て差支ない。

その間に在つて、第一期の總決算をし、且第二期の特色を合せ有するものが「綠の騎士」だ。

由來日本は短篇國である。文學雜誌の數が多く、月々の制作を要求する事も一因であるが、それよりも此の國の氣候風土、それに支配される生活が、極めて短篇的だからであるらしい。家屋の構造でも、食物の材料でも、手輕で、あつさりしてゐて、風情があつて、實質的で無い。所謂心境小說――家常茶飯小說、身邊雜記小說は我國の特產物らしい。ありのまゝに描くといふ自然

派の主張を忽ち巧妙に日本化したのだ。形式の複雑を嫌ひ、内容の大がかりを厭ひ、趣を愛し、情趣を味はふ心は昔から根ざしが深いのである。此の道を踏んでも、奥の院迄到達する事は困難であるが、いゝ加減のところ迄進む事は比較的に容易である。通俗小説、大衆小説は別にして、經驗の豐富で無い若い作家が短篇に專念し、長篇と引組まないのは自然である。

私は多くの長篇の我國に出現する事を希望するものである。長篇小說の方が面白いといふ理由からでは無い。我國の近代文學はその形式を歐羅巴に學んだのであるが、質に於ては未だ比肩する事が困難である。ひとつの事件をひとつの心持で貫く短篇の手法は割合に吾々の手に合ふのであるが、廣大無邊の人生を背景とし、多數の人物と、錯綜したる事件を立體的に描寫する事は吾々の不得手とする所である。その不得意の道を選んで努力し、やがて之を征服する事に、私は浪漫的な希望をかけてゐるのである。

大體論として、短篇の制作よりも長篇の制作には豐富なる經驗を必要とする。従而多くの作家は、漸く成熟期に入つて始めて長篇に手をつけるのが通例である。トルストイの傑作「アンナ・カレニナ」は四十一歲「戰爭と平和」は四十八歲にして完成した。ドストイエフスキイの「罪と罰」も、ロマン・ロオランの「ジヤン・クリストフ」も四十代の作である。ユウゴオの「レ・ミゼラブル」に

至つては六十歳にして完成したといふ事である。我國に於ても、夏目漱石先生が他の多くの作家の如く二十代から小説を書いたならば、恐らくはもつと多くの短篇を殘したであらう。若くして純情の詩集幾卷かを吾等に與へた島崎藤村先生は、三十代にしてはじめて長篇「破戒」と「春」を著はし、傑作「家」は齡四十の年の秋に上梓せられた。

我が小島政二郎氏も、齡やうやく長けて家を成し、妻をめとり、親となつて、はじめて長篇「緣の騎士」を完成したのである。

長い間、浮ばれない文壇生活に難澁してゐた作者が、やうやく脂が乘つて來て、腕にも自信の出來て來た時、偶々新聞といふ新しい舞臺を提供されたのだから、功名心に燃えた事は想像に難く無い。新聞の小説は、その日その日の面白さを主とするものが多いが、小島氏もそれを忘れないで、しかも通俗小説に陷らずに、一般の讀者をひきつけて行かうと企てた。事件を追へば面白く、描寫法を檢すれば藝術的である。

あら筋は、主人公壬生龍一が、ひそかになつかしく思つてゐる日暮梢が水泳中潮流に流されたのを救つたのが緣となつて、結婚を申込み、受諾される。ところが梢は龍一の師匠株の戲曲作家類家陽一郎の爲めに暴力をもつて自由を奪はれ、みごもる。不幸な運命の收拾の爲めに、梢は類

家の後妻となるが、此の酒飲の變態的慾情の所有者の虐待に堪へず家出をする。一方龍一は失戀の苦惱に打勝つて、人としての肚が出來、藝術家としての力量を蓄へる。家出後、梢は繪を稽古し、偶々帝國劇場に類家と龍一との新作戲曲が共に上演される時、背景のプランを引受けて龍一に助太刀する。戲曲上演の結果は類家の方が不出來で、龍一の方が上出來だつた。

善人榮え惡人亡ぶといつた趣もあるのである。

先づ此の作には、三人の主役がある。その一人の龍一を、作者は自分の育つたと同じ環境に置き、自分の強味であり又弱味であると認める性格を惜みなく與へた。但し、龍一のロマンスが卽ち小島政二郎氏の身上の事だと早合點されては困る。事件は作者の想像が都合よくこしらへ上げたので、多分據處は無いのであらう。兎に角龍一のモデルは作者自身と見て差支無い。水泳は小島氏のお得意だ。氏が知つてゐる唯一の男性的遊技であらう。だから、これを龍一にあてはめてもをかしくなかつた。その龍一が野球試合に出場する場面がある。彼が野球技に拙劣な事は作者も特に斷つて居るから差支無いが、作者が之を描く事の下手なのは見苦しい。何故下手なのか。小島氏は斯ういふ近代的スポオツを全然知らないのである。曾て此の小說が新聞に出て居る時、新聞社の舊式な畫家が描いた選手の姿といふものは、明治二十年代に吾々の愛讀した「少年世界」

の運動會の挿繪そつくりで、作者と畫家と兩々相まつ時代錯誤に、惡友共は吾等の騎士小島政二郎氏をからかふ好材料とした。

近代スポオツに緣の無い江戸生え抜きの舊家に生れた壬生龍一は、餘りに自分が「町家育ち」で、損德を常に忘れ得ない社會人的常識家であることを意識させられた。ちつとも藝術家氣質のあつて存するものがなかつた。彼はその「社會人」であり「常識家」であることから擺脫しなければならない……
と思ふのである。
又「面從腹非」の態度をとる自分をかへりみて、

無論、大根は自己の性格にあることは論を待たなかつた。しかし、龍一に云はせれば、「氏より育ち」だと云ひたかつた。彼が連綿たる江戸町人の家に育たなかつたなら、いやいや、その上「損して德取れ」主義の町人教育に從順でなかつたなら、かうまで情ない人格になり果てはしなかつたらう。三田の獨立自尊の精神も、既に彼に影響を與へるべく手遲れであつたのだ。

成程、彼はこの歲になるまで、損をしたことはなかつた。先輩からは愛された。しかし、

それが何であらう。愛される海鼠のやうな存在よりも、憎まれてもいゝ、風に嘯く柵の木にならなければならなかつた。それだけの根強さが早急に得られないとするならば、猫のやうな柔和なエゴイズムでもよかつた。兎に角、個性の確立が欲しかつた。

斯ういふ性格の龍一だ。美しくて、おとなしく、そのくせ別段特徴の無いやうに描かれてゐる開巻當初の梢の手を握る位の事は出來たが、その後の龍一の戀愛上の精神活動はどうなつたのかわからない。類家に奪はれたと知つても、何の手出もしない。失戀して、自分自身の弱さから脱却する事に努める丈だ。さういふ性格だから爲方が無いといへばそれ迄だが、これ丈の規模の長篇小說としては物足りない。ひとつの事件を、ひとつの心持で貫けば足る短篇小說と違つて、何處迄も人と人との關係を押して行かなければならないのである。龍一は結婚の申込をして受諾されてから、梢とはどういふ關係にあつたのかはつきりしない。梢が類家の家にゐる間の二人の關係もあまりに淡過るやうである。梢が類家に奪はれたと知つた時の龍一と類家、龍一と梢の對立ももつとあくどく見せて貰ひ度い。

いつたい、作者が自分をモデルにした場合は、これを意識して滑稽化するか、愚劣化するかしない限りは、どうしてもいたはり過ぎたり、氣がさしたりして、描き足りない結果を招き易い。

此の場合に於ても、作者の同情が龍一を中途半端なところに止まらせてしまつたのであらう。

さういへば、同じ同情の惠みに浴してゐる梢の性格は、一層はつきりしてゐない。梢は龍一に命を助けられた感謝を深く胸にいだいてゐるのだから、たやすく唇を許し、結婚の約束をするのは當然のなりゆきと見ていゝが、その後の龍一に對する思慕の情は些かも描かれてゐない。火事で家が燒け、類家の家に行儀見習に行つてから、彼女の心には殆んど龍一の存在が無いやうに思はれる。その爲めに、類家に手込にされる不運に際して、類家と梢と龍一との三者の對立が極めて弱くなつた。

若い女といふものは、その姿を描く事は容易であるが、その性格を描く事はむづかしい。何故といへば、餘程變な奴で無い限りは、單純な受身の性格しか持つてゐないからである。殊に作者は此の無能な女をいたはる心が深く、何とかして末大吉にしなければ氣が濟まないので、類家の妻と定まつてからは、俄かに強い女にしてしまつた。暴力によつて從はせられた目前の類家に對する心、いひかはした龍一に對する心は、當然力を盡して描かる可き筈なのに、作者は筆を惜んだ。身心に著しい打擊をうけ、甚大の變化をかうむつたのであるから、以前の梢でない事はわかつてゐるが、さうなつた事を肯定させる事を作者は忘れた。だから、以前の梢と、現在の梢とは

全く別人のやうに思はれるのである。最もひどいのは、最初には文學的素養のない女だと說明しながら、後には繪畫の天分の惠まれてゐる事を突然發表し、しかもその繪は素人ばなれしてゐて、忽ち龍一の戯曲の背景の下圖を描くといふ大仕事に及ぶのである。吾々讀者は、又々別の梢が出現したのかとあやしむ位である。憎む可き類家に對する腹いせに、作者はかたきを討たんとするかよわき者に獲物を與へて助太刀したのであらう。

其處にゆくと類家は人間の輪廓が大きく、且性格が特異の爲めか、四方八方から描寫する事が出來ると見えて、一番大地に足を踏まへた人間としてあらはれた。龍一には一騎打の相手で無い。寧ろ稽古臺だ。作者も類家に對しては全身を以てぶつかつて行く事が出來た。龍一や梢のやうな靑い人間だと頭突は喰はされないが、類家なら張手を用ゐても差支ない。從而稍々殘酷になる迄根強く、此の意地悪のひねくれ根性の、我儘者の變態的性格を、微細に描く事が出來た。作者に愛される人間よりも、憎まれる人間の方が確固たる實在性を帶びた。

三人の主役の中で、類家が一番いきてゐるし、又その複雜な性格から、彼の一身を取卷く出來事が最も戯曲的である。此の長篇の底力は、類家の存在によつて與へられた感がある。だから、彼の出現しない場面、卽ち龍一が梢を海の危難から救ふ「ヴイーナスの誕生」にはじまつて「結婚

申込」に至る迄、大凡全篇の三分の一はつまらない。その筆致は細かく叮嚀であるが、話の進行を語る丈の平淡なる記述で、いはゞ筋を賣る序幕である。兎角初戀の場景といふものは、情緒ゆたかに感傷をそゝらない限りは、面白くない場面を展開する外に道が無いのであらう。

又、梢が類家の家を逃れて、龍一の友情に感謝しつゝ繪の勉強をするところ、及最後の帝國劇場で、龍一が類家と力を競べて勝つところは、小説の結末をつける爲めのこしらへ事で、あまりにあわたゞしく、あつけない。折角こゝ迄たゝみ込んで來た事件の發展が、突然力無く崩壞してしまつた感がある。

少しく残酷な批評であるが、要するに類家が主として描かれてゐる眞中の十數節が最も力の充實したところで、こゝでは單に筋が物語られてゐるので無く、類家と梢との對立がどこ迄も深く探られて行つて、直ちに讀者の胸を打つ。若しも小説の效果を高めんとするならば、思ひ切つて龍一をしだしにしてしまひ、類家と梢の靈と肉との闘爭に主題をかへた方がよかつたであらう。類家と梢との不自然な生活が始まつて、梢が類家を自分の思ふがまゝに引つけ、愛情をもつて類家の悪癖悪趣味を匡正しようとする。しかし、そんな事は類家にとつては一時の遊びに過ぎないのだから、次第に本性をあらはして來る。肉體の距離が二人の間の溝渠を深くする。類家は「肉

體の復讐」を受けて「變態」の度を高める。遂に狂暴た快感から梢を鞭うつに至る迄の、心理的にも外部の抗爭にも複雜な多面的な效果を描いて進展して行くところは、因緣話のやうな重苦しさを伴つて迫つて來た。此の長篇の中で、最も迫眞力の强大なところだ。最初は些か退屈してゐた私も、壹千枚の長篇の壓力を胸にうけた。本文の冒頭に於て、作者はあらん限りの力を出したと云つたが、こゝに至つて正にさう思つたのである。

しかし、作者の力量か此の大物と四つに組む丈充分であつたとは思はない。事件が進行し、各場面の效果が重なつて來て高潮に達するか、或は轉回するところに來ると、力の不足があらはになる。例之龍一が「古都」をたづねて感激に打たれ、人生觀か變り、智識を捨てゝ感覺溫泉に浸らうと心の定まるところは、もつとも難しい一節には違ひ無く、苦心の程同情するが、吾々を打つて來る力は無い。その時から新たに元氣づいて來た彼の精神力が、龍一をして立派な藝術境を開かせたわけなのだが、どうして、何時の間に偉くなつたのか、吾々にはわからない。靑年の、こどもらしい一時的感激としかうけとれないのは、結局結末の弱さを招來した原因となつた。

小島氏は文章家だから、一字一字拾つて行くと、數限りない巧妙な敍事を發見する。しかし、小說の文體としては效果の點から見て如何かと思ふ。國文學を修め、正字法を得意とする人だか

ら、間違つた文章やだらしのない文章は書かないが、描かんとする對象を明確にする線と色とは存外弱い。勿論丹念で、且素晴しく達者だが、感覺的では無いのだ。所謂文章のうまさは認めるが、描寫のうまさでは無いやうに思ふ。餘りに饒舌である爲めに、客觀世界を現出しないのでは無いだらうか。たとへば、

　まだ手入れをして間も無いと見えて、芝生が縞をなして、雙方から百足のやうな手足を伸ばし合つたまゝ、狐色に枯れてゐた。日溜りのところだけ一面に生え揃つて、幾分眞夏の色を斑に殘してゐたが、胡麻鹽頭を見るやうに、却つて見た目は猥雜だつた。

とあるのは、いかにも巧妙な文章だと思ふが、さういふ細かいかき方は、恰も木の葉を一枚々々描いた繪のやうに、手際には感心しても、いきた景色となつて眼前に廣がらない。失禮な事ではあるが、もつと簡單にする方がいゝといふ評者の老婆心を許して貰つて、左の通り書き改めさせて頂き度い。

　まだ手入れをして間もない芝生は狐色に枯れてゐた。日溜りのところだけが一面に生え揃つて、幾分眞夏の色を殘してゐた。

見た目丈の描寫ですませて、作者が頭で考へた比喩や、文字の遊びは捨て度いのである。これ

は一例に過ぎないのだが、全篇かゝるわづらはしさに覆はれてゐる。或人には口をついて洒落を連發する事は容易である。小島氏には、つぎからつぎと巧妙なる形容詞が浮んで來て止度が無いのであらう。私は此の作者の文章に對して、もつと音樂的効果と、繪畫的効果を要求し度い。格調の正しい事は結構であるが、速度と諧調に變化が欲しい。もつと原色を塗抹して、綜合的効果をあげて貰ひ度い。それが乏しい爲めに、折角描寫に力をそゝぎながら、結果に於ては物語風の印象を殘したのである。

好んでむづかしい文字を使ふ事も贊成しない。それが一番適確な文字だと作者は思つてゐるのであらうが、その外に、文字に對する迷信が伴つてゐるのではないだらうか。例をあげる煩はしさは避けるが、多くの人は私に同感を惜むまいと思ふ。

文字の好みの外に、作者は至るところで道徳と趣味を明かにしてゐる。それは何かといふと、明治時代から今日迄に次第に根を張つた女性尊重と、江戸時代から傳承した市民の禮儀、及び文化生活の讃美である。緑の騎士は女性讃美の聲をあげると同時に、女性の前で野卑粗暴な言動を敢てする者を憎む。緣側から放尿する類家とその友、庭に痰を吐く類家、女の前でしもがかつた話をする類家とその弟子は、共によはひす可き人間では無いのだ。まして況や、女を弄び、女を

虐待する者に於てをや。しかし龍一は氣が弱い。これに對して正面から反抗を示す勇氣に乏しく、屢々自分の禮儀正しい教育をうけた事を歎いてゐる。

文化生活の讚美は近頃の小島氏の小說にも隨筆にもうるさく出て來る。いつたい或種の下町の人は・傳統的の下町の生活様式は既に現在の吾々の生活には邪魔であると考へてゐる。恰も田舍者が歌舞伎劇や、江戸趣味の文人の影響をうけて、今日の下町生活さへ極めて讚美すべき情趣にみちたものだと買ひかぶつてゐるのと好對照をなすものである。彼は自分がその世界の泥の中に足を突込んでゐるのを嫌つて、一切の下町的のものから離脫しようとする。之は自分の育つた田園の生活を嫌つて、詩的下町を空想し、あこがれるのである。後者の氣障はいふ迄も無いが、前者が反動的にあこがれる文化生活も隨分をかしい事が多い。「緑の騎士」はその手引草のやうな氣がする。

第一に「緑の騎士」といふ表題から、香水の匂がするではないか。小標題の中には「ヴイーナスの誕生」「結婚申込」(プロポーザルと假名が振つてある)「受難のテス」などゝいふハイカラぶりである。あゝ片假名の持つ文化的感激よ。若い男女は避暑地の別れに、伊太利の歌劇や榊原トリオの演奏會に行く約束をする。疲勞をリフレッシュする爲めにカツフエ・クロコダイルの重いドア

を押した龍一や梢姉妹は、ビフテキを喰べ、ホット・クラレツトをストロオで飲んで、血管に新しいエネルギイを送り、やがてペーブメントの上を散歩し、スヌードを買ふ。梢の手紙は勿論ラヴェンダア色のレタアペーパアに書かれる。その梢が類家の妻として郊外の文化式の家に住む事になると、百花一時に開くが如く、片假名趣味が旺溢する。三味線はいけなくてピアノはいゝ。日本料理はいけなくて西洋料理がいゝ。ブランスキツクのフオノグラフが据ゑられ、フランス窓をあけてベランダの籐椅子に長くなつて、スタンドの上の銀盆にはガルトン式の製品なる西瓜のシヤーベソトが涼しく盛上げられる。煽風機がふえ、電氣ストーブが備へられ、タイル張りの湯殿でお風呂に入つた後で、サモワールを取寄せてお茶を飲みながら、一生に一度でいゝから黒い天鵞絨の洋服を着度いと希ふ。まだまだ澤山あるのだが、疲れるばかりだからやめにしよう。

斯ういふ片假名趣味が、いかにもとつてつけたやうに思はれるのは、龍一或は作者が、それとは縁遠い世界に育つて、自分自身の本質には片假名らしいものを一切持つてゐないくせに、趣味として擇んだ爲め、未だしつくりと身につかないのであらう。たとへば小島氏の舊派に屬する文章に、いかに新しい比喩を加へ、いかに片假名を振りまいても、決してハイカラな印象を殘さないやうなものである。水に油なのだ。

此の水に油は、現在の小島氏が力を盡して搔き廻し、融合させようとしてゐるものであらう。言葉を換へていへば、十年學んだ自分の手法に滿足しず、新たなる藝術境に突進しようといふ努力のあらはれであらう。寫生文的作風の延長である事から斷然自分を切離して、生活即藝術主義に進まうとするのである。

私はいろんな口小言めいた批評を並べたけれど、そんな破綻がいくらあらうとも、此の作の壓力には打たれた。三人の主役と、數人の助演者をそれぞれの性格に描き分け、相當波瀾の多い筋立を、筋本位の小說に墮落させず、描寫藝術の本領を守つて纏めあげた手腕と氣魄を充分認めるものである。少なくとも此の作を完成した時代の小島氏の全力は盡された。この大仕事によつて、作者の心境が一層廣く深く豐かになつた事は疑が無い。ちひさくまとまつた作品を多く書くよりも、破綻があつても構はないから、力いつぱいの仕事にぶつかる事が、吾々修業時代の者の心懸く可き事である。

小島氏は今、實際生活に於ても龍一の如く、舊家の嚴格な教育の結果と自ら認める「面從服非」の態度を脫しようとあせつてゐる。氏には、靜かに自分をかへりみつゝ、一歩一歩進む事は出來ないらしい。形の上から先づ身についた銹を落さうとしてゐる。禮儀を無視するといふやうな、

吾々には無益と見える芝居さへ敢て實行してゐるらしい。いろいろの點に於て、寧ろ類家に學ばんとする心持があるかもしれない。緣側から放尿するか、庭に痰を吐くか、それは知らないが、少なくとも多數集會の席上、女性の前でも、立膝をしたり、胡坐をかいたり、太股や毛脛を露出させる位の型は示してゐる。それが彼のこゝろざす、智識を捨てゝ感覺溫泉に浸る藝術境に進んで行く爲めに、果して役立つ事かどうかは私のあづかり知らざるところである。たゞ私は、作者が常にひとところに停滯しないで、希望と努力に血を湧かしてゐる事を信じ、近く第二の長篇小說を起稿するといふ宣言を聞いて、大なる期待を持つてゐるのである。(昭和二年十二月四日)

――「三田文學」昭和三年一月號

原稿紙

私の目の前には年中原稿紙がある。十七年間、十行二十字詰の原稿紙は、私の洋筆(ペン)からインキを吸取るやうに、私の生涯の大切な時間を奪つた。

私は幼少の時から小説を讀んだ。文學の鑑識のたしかな兄のおかげで、最初から第一流の作家の作品に親(したし)む事が出來た。紅葉露伴鷗外二葉亭柳浪鏡花風葉天外といふやうな、明治文學史を價値づけた人々の作品は、「日本お伽噺」や「少年世界」よりも、遙かに強く心を捉へた。私は中學を七年かゝつてやうやくおなさけで卒業したのだが、その落第時代が私の文學修業の基礎を置いた。若し文學が無かつたならば、此の世の中に生甲斐を感じなかつたのでは無いかと疑ふ位である。

私にとつて、文學はそれ程尊いのである。いくら感謝しても感謝しきれない。あまりに神聖視する爲めに、自分のやうな者が作家になれようとは思ひも及ばなかつた。私が小説を書くやうに

なつたのは、全く偶然の機會が到來した爲めであつた。若しも、明治四十三年に「三田文學」が生れなかつたならば、私は一生小說を書く氣にはならなかつたであらう。若しも「三田文學」の出現が、私の學校卒業後であつたならば、私は小說を書く氣にはならなかつたであらう。私の尊敬する永井荷風先生が三田の山に來られ、「三田文學」が生れ、身邊の空氣は著しく私を唆かした。友達の眞似をして原稿紙を買込んだ。春陽堂製の十行二十字詰の粗末なもので、今もその型に倣ふものを用ゐてゐる。

私はふたつの習作を破棄した後で、處女作「山の手の子」を書上げた。明治四十四年の春の休暇に、湯河原へ行つて、中西といふ宿の溪流にのぞむ裏二階で起稿完了したのである。それを二三の友人に讀んで貰つた上で、永井先生の前に差出した。

自分の書いたものがどんなものか、印刷される迄は全然わからなかつた。ひどく稚拙なもので、みんなに笑はれるに違ひ無いと思ひ、雜誌の出る迄は不安で堪らなかつた。存外評判のよかつたのは嬉しかつたが、私自身その作品のねうちを高く買ふ事は出來なかつた。

一度や二度、作品が雜誌に出たからといつて、直に作家として存立して行けようとは思はなかつた。將來自分の書く物が、市價を持たうなどゝは全然考へられなかつた。

その後、私の作品は「三田文學」と「スバル」に載せて貰つてゐたが、はじめて原稿料を貰つたのは四十五年、雜誌「新潮」五月號に出た「沈丁花」に對するものであつた。最初手紙で寄稿を勸められたのだが、果して稿料をくれるものかどうか、なかば期待し、なかば期待しなかつた。當時、久保田万太郎氏は既に原稿料の味をしめてゐた。年齡も學級もふたつ下だが、文學に於ては氏の方が先輩である。久保田氏の出世作「朝顏」は、私の處女作「山の手の子」よりも一箇月早く世に出て、大した評判だつた。私は自分の作品を氏のものに比べて、遙かに劣る事を知つてゐるので、氏と同じやうに原稿料を得る事があらうとは想ひも及ばなかつた。「沈丁花」は原稿紙幾枚を費したのか忘れてしまつたが、たぶん百枚近かつたらうと思ふ。それに對して、二十圓だか二十五圓を受けた。銀座のカフヱ・ライオンで、初對面の中村武羅夫氏から紙包を貰つたのだ。中村氏はその金額があまりに少ない事を氣の毒がつてゐたが、私としては生れてはじめて稼いだ金なので、母から貰ふ小遣錢とは比較にならない尊とさをもつてゐた。何か後に殘る物でも買つて置けばよかつたが、矢張飮んでしまつた。

私はライオン開業當時からの客で、散步の度每に立寄つた。東京市內にカフヱといふものは數へる程しかない時代だから、今のやうにごろつきが巢を喰つてゐる景色とは違つて、靜かに休息

する事が出來た。但し私は人間に愛嬌が無く、又技巧が拙いので、つひに一度も女給さんから親しく話かけられる嬉しさを經驗しなかつた。

その頃の中村さんは、痩せた、青白い、いかにも文學青年型の人だつたやうに記憶する。カフエみたやうなところは嫌だと云つてゐた。しばらく文學談をして別れたが、二度目にあつたのには秋聲花袋雨氏誕生五十年祝賀會の席上だつた。十年あひみざる間に、氏の風貌はすつかり變つた。つやつやと日に燒けた顏に粗髯を蓄へ、院外團の風があつた。私はその時中村さんたとは思はずに過ぎた。曾てライオンで包金をくれた人は、中村氏では無く、その氏名をかたつたのでは無いかと疑つた程である。

その次に原稿料を貰つたのは同じ年の夏、「新小説」に「途すがら」を書いた時だ。此の時は一枚八十錢の割だつた。その頃私共は頁かなかつたが「三田文學」の原稿料は壹圓で、世間並以上だつた。たぶん「新小説」も一流作家に對してその位しか拂つてゐなかつた筈た。それなのに私が八拾錢の稿料を貰つたのだから大變ありがたかつた。

その頃は未だ文學では飯の喰へない時代たつた。吾々が見聞する文人の生活は悲慘なものたつた。明治時代第一の人氣作家も、死後には何も殘らなかつた。陋巷に窮死した文人を數へれば、

忽ち十指に餘る有樣だつた。私は幸ひに生活には困らない家に生れたのであるが、四男の身の上で、且兄弟が多いから、後日何もしないで喰つて行く丈の保證があるかどうか疑はしかつた。里見弴氏の如き人さへ、自分の身についた財産があると親からきかされて、はじめて作家として立たうと決心したといふのだから、大凡察して貰ひ度い。私には、將來ぐんぐん延びて立派な作家になれるといふ自信は無かつた。人一倍勉強するぞとは思つても、人にすぐれた才能があるとは考へられなかつた。どうしても一定の職業をもつてゐて衣食の資を得なければならない。それを二重生活と稱して、意氣地なしか卑怯者のやうに見る一般の白い眼は、私の怖れるところでは無かつた。それよりも、衣食の爲めに追かけられて間に合せ原稿を書く方がつらい。

大正五年以來、私は晝間は會社づとめをし、夜は机にむかつて、十行二十字詰の原稿紙を汚した。足かけ三年大阪勤務を命ぜられた時も、下宿の机の上には原稿紙が主人の歸りを待つてゐた。

その間、世の中の姿は一變した。文人といへば貧乏ときまつてゐたのが、資本いらずのぼろい商賣と人に見られるやうになつた。金錢には淡白なのがあたりまへだつたのに、最も金儲のうまい人間だといふ實例を示す勇士も出現した。純文學の雜誌は商賣主義の雜誌に壓倒されてかげが薄くなり、一流の作家は一番收入の多い婦人雜誌につゞき物を書く事を專一とする有樣となつた。

昔は息子が小説家になるといへば、兩親はいふ迄も無く、親類一同反對したのに、今ではこれ程樂に名を成し、これ程容易に金のとれる商賣は無いと、おやぢの方から乗出して來るのも珍しくなくなつた。つましい生活をしたのは昔の文人で、はなやかな生活を享樂するのが今のならはしとなつた。

私の如き所謂二重生活者も餘徳をうけて、乏しい月給を原稿料で補ひ、どうにかかうにかくらしを立てる事が出來た。殊に感謝すべきは大阪時代で、新聞に小説を書く事によつて、やうやく下宿料を拂ふ事が出來た。大正八年に獨所帶を持つてからも、私經濟に於ては極めてだらしの無い私は、原稿收入が無ければ、とても月末は越せなかつた。妻が來て第二年目に大病をした時は、長篇「大阪」のおかげで病院の費用を拂ふ事が出來た。

私の文人生活は十七年、月給取生活は十二年に及んだ。新聞辭令、文壇ゴシップ辭令では夙に重役に選擧されてゐるが、實は會社の所謂使用人に過ぎない。このまゝ辛抱してゐても、果して使用人階級を脱し得るかどうか疑はしく、萬一脱し得たとしても、なほ十年や十二年の歳月を要するに違ひ無い。

しかし、月給取の生活は必ずしも悲慘では無い。一面から見れば極めて安穩である。景氣がよ

ければ儲かり、不景氣だと儲からないとか、或る瞬間の機會を捉へれば巨利を博し、之を逸すれば大損をするといふやうな商賣に從事する人の如く、はでな事も無いかはりに、損德を自分が背負ふ心配は無い。もつとも、一生金には緣が無い。明治初期には月給取も頗る酬ゐられたので、昭和時代の小說家さへ未だに月給取を實業家といふ文字であらはし、さもみいりのある階級のやうに書いてゐるが、それは少數の資本家か、少數の企業家か、少數の資本家を代表する月給取に限られた事で、外の連中はまるつきり惠まれない。圓本流行の爲め文人の懷に入る金高は、恐らくは相當の月給取が一生奉公して退職する時の涙金よりも多いであらう。

私の如き凡庸にして且人氣の無い作家でさへ、若し月給取をやめて原稿收入をめあてに稼いだら、みいりは餘程多いであらう。そのかはりには、自分自身に何の感興も無い原稿も書かなければなるまい。どつちの道を擇ぶか、私としては私自身のとつた道を擇ぶ外は無かつたのである。

文人の生活程度の高まつたのは祝す可き事であるが、同時に考へねばならぬ事もある。貧乏してゐてはその日その日に追はれるから、いゝ作品が出來ないとは、昔の人の泣言であつた。ところが今、存外みいりのいゝ文人が果しておちついて仕事をしてゐるかといふと、寧ろその反對の例を擧る方が早い位だ。矢張文士は貧乏させて置く方がいゝなどゝいふ人さへある。先年或人の

創作全集が出た時、私も緣の下の力持をつとめた。それに對して某新聞の投書欄に、餘計な事をするな、貧乏してゐてこそすぐれた作品を生んだのだ。全集の印税などを稼ぐやうになつては駄目だと云つた人があつて、私は甚だ義憤を感じた。貧乏を美德だと思ふが如きその人に對して、一言述べようとした事があつたが、しかし文士は貧乏に限るといふ言葉の裏に、金が取れると怠けていけないといふ事實がありとすれば、こつちも反省しなくてはならない。

しかし、何かしら書いてゐれば金になるといふ黃金時代は一時の現象で、今日既に過去の事になりつゝあるやうに思はれる。近き將來には、歐米諸國のやうに、少數の作家のみが充分に酬いられ、多數の凡庸作家は衣食に窮し、筆丈では喰へない時代が來るであらう。無名の作家が文壇へうつて出るのは益々むづかしく、息子が小說家になるといへば親類一同が反對する時代がもう一度來るであらう。

私は近頃「三田文學」以外には殆んど書かない。此の雜誌は財政が豊かで無いので、一文も原稿料を拂はない。拂はないどころでは無い。原稿を寄附させる外に、金錢の寄附もしなければならない。從て、私の小遣錢、下宿料、病院費用を生んで危急を救つてくれた我が十行二十字詰の原稿紙も、全く稼がなくなつてしまつた。「三田文學」のつゞく限り、此の狀態はつゞくであらう。

十行二十字詰の粗末な原稿紙は、私が墓に行く迄、毎日私の眼の前につめたく光つてゐるに違ひ無い。洋筆(ペン)をとつてそれにむかふ時、私には何か深い感謝が湧く。同時に又、十七年間、未だ後世に傳ふ可き一文をも草し得ない自分を恥(はぢ)るのである。(昭和二年十二月三十一日)

――「三田文學」昭和三年二月號

芝居の「すみだ川」

夏目漱石先生の小說「坊ちやん」は、先生生涯の作品中最も通俗の面白さに富むもので、多分に含む機智諧謔をもつて讀者を甘やかせ、稱讃をほしいまゝにした。平生小說を讀んだ事の無い人にも面白く、紅葉山人と弦齋居士の優劣をきめ兼ねる人にも面白く、積極的に小說の存在を呪ふ人さへ、例外として認めて、腹を抱へて笑はうといふ小說である。

これを誰かゞ脚色して、人氣物の猿之助並にその一黨が演じ、近來無比の大入をとつたのは、偏に原作が數十版――數百版か――を重ねてゐるおかげである。正直にいふと、私は彼の小說を脚色したと聞いて、その大膽不敵な根性に驚いたのであるが、それはあゝいふ非戲曲的な小說を、いかにして戲曲化するかといふ眞面目な心配を持つてゐたゝめである。しかし、餘計な御世話だつた。場面々々のをかしさゝへあれば、大方の觀客は悅喜するのである。

兎に角、明治時代の人氣小說が芝居營業上の成功を收めたのだ。直ぐに第二陣を立てる事は明白である。改造社が「日本文學全集」であてたとなると「明治大正文學全集」が出る。「世界文學全集」が出る。何が出る彼が出るで共喰ひの狀態を現出するのが今日の浮世の姿だ。山本改造子を一人立の英雄にして置かないのと同樣「坊ちやん」と王座を爭はんとするものが續出するに違ひ無い。當分明治大正時代の小說は、向ふ見ずの脚色者の手垢によつて汚される事だらうと思つてゐると、果してさうだ。しかも人の意表に出て、選ばれたのは永井荷風先生の傑作「すみだ川」であつた。

「すみだ川」は明治四十二年、先生三十一歲の時の作である。文壇は久しく自然派の横暴を許したが、その堅壘にむかつて、最も勇敢に、最もはなばなしくたゝかつたのは先生である。代表作「すみだ川」は、その意味に於て歷史的にも尊ぶ可きもので、早熟なる天才は三十を越る事僅かに一歲にして既に圓熟の境に達してゐた。西歐文化の複雜多岐なる諸相をうたつた二十代の情熱にかはつて、吾々が生れ、吾々の祖先が殘した東洋特殊の自然と人事とに回顧のおもひを寄せるに至つた先生は、江戸時代の名殘の風景を、主としてすみだ川のほとりに見出した。

空氣はしめつぽく、土は黑いそのあたりに住む人は、隅田堤の風景が、烟突と自動車の捲上る

砂塵に汚されて行くやうに、他國から侵入して來る生存力の強い人種に壓迫されて亡ぶのであらう。主人公長吉は心身共に弱く、到底喧騷なるカフヱの卓にウヰスキイを飮んで、マルクスを論じ普選をあげつらふ青年では無い。七歳八歳の頃から三味線をもてあそび、學校は落第していやになり、役者になり度いといふうまれつきだ。役者になつたところで、劍劇の舞臺では使ひみちもなさゝうな人柄に想はれる。その幼馴染のお糸は、父親が死んで頼りが無くなり、橋場の御新造の世話になり、そんなこんなの義理ばかりで無く、雙方の好意から自然と藝者になる經路に、何の疑をもさしはさまない娘だ。公娼廢止に耳を傾ける柄では無い。長吉の母親は我兒を立派な學生に仕立てたいばかりに、女の身ひとつで生活と戰つて來た常磐津のお師匠さんだ。世界の平和は婦人の雙肩にかゝつてゐるといふ議論などは飮み込む事さへ覺束ない。その叉兄の松風庵羅月は、若い時分にしたい放題身を持崩した俳諧師だ。新傾向の俳句とは何であるか、プロレタリアの藝術が何であるかに頭を惱ます必要の無い人間だ。その女房に至つては、むかし金瓶大黑の華魁で、明治の始め吉原解放の時、羅月をたよつて來ていつしよになつた女だ。動物愛護も花の日會もわきまへないに違ひ無い。すべての登場人物が、現代の中心には遠く、しかも何處かに殘つてゐる事、恰も隅田川にも僅かに昔の面影のうかゞはれるに等しい。

その人々の住むところは、竹垣に朝顔のからむ小梅瓦町の羅月の佗住居、何となく水の香の漂ふ地面の低い今戸の文字豊の家、うす暗く埃臭い宮戸座の立見場、隅田川から大川へかけての両岸の、泥水と煤烟とのしみ込んだ陰惨なおちつきを見せた風景だ。作者のねばり強い筆は、これらの人と景色をつゝむに春秋の季節の微妙なうつり變りをもつてし、日本人のみが沁々感じる氣象の觸覺迄も紙上に描き出した。人と景と何等の不調和を許さず、あふるゝばかりのなさけと哀感を漂へる事に成功した。

もとより一貫した筋もあるが、作品の特質は筋よりも、その筋の展開に必要な場面と人との調和にある。それは單なる寫生では無い。一篇を貫くしつとりした詩境を盛上る爲めに擇ばれた、ぬきさしならぬ場面なのだ。就中、宮戸座の立見場から、十六夜清心の舞臺をのぞく一場面の如きは、一度此の作を讀んだ人の永久に忘れ能はぬところであらう。

「すみだ川」が後代にほこる可き明治時代の逸品である事には疑が無いが、それは詩的小説であつて、戲曲的小説では無い。主人公長吉の若き愁は、ゆく水の如く川上から川下へ流れてゆくばかりで、岩に激し淵に淀むものでは無い。彼のはかない思慕に對して、お糸の心は之を迎へて火と燃る事無く、全く違ふ方向か、或は幾十間か先を無關心にかけて行つてしまふのである。葛藤

の無いところに劇は無いといふ名言は、玆にも適例を示すのである。いかによき小説と雖も、戯曲化されてよき效果を擧るかどうかは、疑ふ丈野暮だ。永井先生の作品の多くは抒情詩である。「すみだ川」には餘程立入つて客觀的描法を用ゐてあるが、しかも作品の底をつらぬく主調は、昨日の東京に對する追慕の情に外ならぬ。

これらの非戯曲的な特色をかへりみずに、四幕六場の大芝居とした脚色者の大膽が、開幕前の私をひどく心配させた。

序幕は初秋の夕ぐれと指定して、今戸橋の欄干に凭れて長吉が水面を見下してゐるところから始まる。所謂原作尊重といふのであらう、永井先生の丹念な描寫をそのまゝ舞臺に持つて來ようと心がけた事がわかる。正面に川を距てゝ、黄昏の隅田の土堤を見渡し、上手には門口に柳のある、格子づくりの二階家を見せた舞臺だ。小村雪岱氏の舞臺裝置といふ事たつたが、いつもの小村氏のものに似ず線の細かく行儀のよいところが無く、おちつきが惡かつた。限られたる舞臺に、不相應に大きい橋を中心にした爲め、調和を保つ事がむづかしかつたのか、大道具の不手際の爲めか、配光の強過る事と共に遺憾だつた。芝居だから爲方が無いといふ芝居道の人の慣用語を是認すれば兎に角、原作に描かれた夏の終りの寂しい水邊の黄昏の味は出なかつた。

最初に橋を渡つて來た人影は黑い麻の僧衣を着た坊主であつた。つゞいて尻端折の股引にゴム靴をはいた請負師らしい男の通つた後、暫くしてから、蝙蝠傘と小包を提げた貧し氣な女房が日和下駄で……

と本文にある通りのしだしの外に、うるさく通行人をつけ加へたのも、靜かなる可き舞臺をいたづらに煩雜にした。橋の上に長吉がゐて、靜かに月がのぼる丈で充分だ。殊にうるさいのは、ホーカイ節の男女を二度舞臺にあらはしたり、醉拂の職人がうるさくわめいたり、長吉とお糸の色模樣とも見る可き場面にをかしみを加へる爲めの邪魔者として壯士を出したりした事だ。ホーカイ節は一度で澤山だ。外のは出て來るに及ばない。

しだしは新派がうまい。いつたい私は、通俗小說の燒直を專一とし、それでかたまつた型にとつつかれてしまつた新派の芝居を好まないのだが、何時も感心するのはしだしのうまさだ。別段やかましい舞臺監督のゐない時でも、しだし丈は生きてゐる。尤も、華族の邸の園遊會だとか、大廣間の親族會議だとか、山の手の景色になるとなつてゐないが、往來の風景詩を模する事にかけては素晴しく器用だ。單に扮裝上の寫實に止まらず、雰圍氣をこまやかに示し、屢々詩趣を横溢させる。立物(たてもの)がいゝ氣になつてあくどい芝居をしてゐるのに反し、しだしは頗る生眞面目に一

瞬間の舞臺をつとめてゐる。どうして斯うもしだしに關する神經丈が極端に發達したのか不思議である。

何故舊派のしだしが新派のそれに比して劣るかといふと、しだしに對する觀念の相違に歸すべきものと思ふ。舊派のしだしは、しだしの效果を認めてゐない。たゞ賑かしに舞臺を横斷するものだと考へてゐる。それに反して新派の方では、しだしにも相當の存在權を認めてゐる。彼等によつて舞臺效果があがるか、ひどく害されるかを問題にしてゐる。認められゝば力を入れるし、認められなければいゝ加減にするのは人情の自然だ。彼がふざけ、これが自重するのには理由がある。

此の場のしだしも甚だ不出來だつた。たゞ下手から上手へ橋を渡つて消える丈の人間が、立物に舞臺裏的尊敬を示して、自分達の安つぽさと、無價値を露骨にあらはした。これは主として舞臺監督の罪に歸す可きであらう。

しだしは下手だつたが立物はうまかつた。長吉は年齡十八、下町育の中學生である。相當の年配の役者にとつて、二十前の少年に扮するのは難事である。時代物ならまたしもごまかせるが、現代物では化け悪い。雁次郎が十次郎になつて若い若いとほめられて得意になつても、ざんぎり

紺がすりさつま下駄の書生さんになつて脚光を浴る事は出來ない。

壽美藏の苦心は、小心翼々たる彼の藝風と相俟つて、些か窮屈になる事は免かれなかつたが、流石に藝の底力で、たくみに破綻を切拔けた。少年と見せなければならない、學生と見せなければならない、又このはげしい生存競爭には堪へられない弱い人間に生れた運命を背負つてゐる姿を見せなければならない。それらは總て自分を殺す消極的の努力によらねばならないのだ。日かげの努力だ。壽美藏の育ちのいゝ心がけは、兎に角此の難役を持堪へた。

内へ内へと身をせばめる事に努めなければならない壽美藏に比べて、松蔦のお糸はもつと明るく、外へ藝をあらはす事の出來る役柄だ。何處かに屋敷風の品格のある人だから、下町の娘や藝者には一分二分なり切れないところのあるのは止むを得ないが、行儀のいゝうまさを充分見せた。くよくよ思ひ惱む長吉と對照させる事に力を入れて、姿態の描き出す線がはでになり、きつくなり、又屢々正面を向いて十六七の下町娘になりおほせましたと誇示する風のあつたのは遺憾だつた。

道具が廻ると葭町になる。藝者家町の路地内で、四軒目の家を見せようといふのだから、舞臺裝置は殆んど不可能事を強ゐられてゐるやうなものだ。此の場の裝置が一番惡い世評を受けたさ

うだが、無理のない話である。しかし私には、他の場面よりは小村氏の特色が出てゐて面白かつた。平面の格子づくりの家が紙細工のやうに並んでゐるのも、寫實を離れた見方をすれば悪くない。

長吉が學校を怠けて、藝者になつてしまつたお糸の住む葭町の路地をさまよふところは、原作では叮嚀綿密な筆致で描寫してあつて、當時吾々は深く感動を受けたものだつた。小說家小島政二郎氏は、長吉と同じ十八歲の中學生だつたさうだが、永井先生の靈筆に感激し、自分自身長吉のやうに、葭町の路地をうろついたさうだが、私もその例にもれない。恐らくは、長吉のやうに學校を休み、宮戸座の立見をしたり、人形町界隈をさまよつたわか者の數は素晴しいものであらう。

二幕目は文字豐の家だ。兄の松風庵羅月が來てゐて、長吉の此の頃の事などを、愚痴つぽい母親の口から聞かされてゐる。金釦の制服姿の長吉が歸つて來る。羅月が辭去すると、いれ違ひに幌俥に乘つたお糸が來る。

紅若の文字豐は少し時代が古く、土用干で祖母の着たといふ小紋にめぐりあつたやうな、なさけないなつかしさがあつた。

友右衞門の羅月は、鰹の刺身を註文したのに、鮪を持つて來られた形で、しかも大とろだつた。こゝは松蔦の見せ場である。本人もその積りで、思ふさま誇張して見せる事、時にはさはりの如き感があつた。長吉の胸には永久に變らぬお糸が描かれてゐるのだが、ほんのちよいと出たばかりで、言葉も表情も藝者たらんとしてゐる女を、原作者は何等の露骨な皮肉も無く、冷笑さへおもてには示さずに、しかしかんどこを力強く押へて描いてゐるが、舞臺に之を示すには、松蔦のとつた道郎ち誇張を愛嬌とする遣口に出るのは止むを得ない。その點を是認して、松蔦のうまさを稱讚したい。

それにひきかへて、制服を着せられた長吉は、一層氣の毒な立場になつた。學生服で若者に扮する事は至難である。きりやう自慢の伊井蓉峰は屢々金釦の學生になるが、とても見られたものでは無い。壽美藏も愈々固くなつて、肩の窮屈が同情に値ひした。

幕切にお糸が縮緬のふくさだか風呂敷だかを忘れて行く。長吉が拾つて胸のところでじいつと握りしめるのは脚色者の工風だらうが、いたづらに幕切をつくる爲めの淺智惠で感心しなかつた。

三幕目は淺草公園、五重の塔の下の大銀杏の根方で、長吉が煩悶してゐる。淺草公園は原作にも出て來るが、床屋の吉さん今は新派の女形玉水三郎とめぐりあふのは宮戸座の立見場で、前に

も書いたが、遥かに遠い舞臺の上で演ずる十六夜清心の一幕は、描寫藝術の最高位に在る可きものので、作者の至妙に驚くのであるが、立見場を舞臺で見せるのは構成派の様式にでもよらなくては無理だから、乍残念淺草公園でも爲方が無い。しかし、考へて見ると此の一場は全然無用で、長吉の心の經過を語る爲めにも蛇足である。若しも、原作の一番すぐれた描寫が宮戸座にあるのに引かれて、その面影をせめても傳へる爲めに此の場を出したのならば、脚色者の心持には同情するが、結果に於てはいけなかつた。殊に長吉の優柔不斷と對照させる爲めに、二人の同級生を出して強健らしく振舞はせたのは、舊派新派共通の常套手段だが、惡趣味たるを免かれない。殊にその二人の中學生がなつてゐないのだから尚更困る。たぶん、一座で威張つてゐる役者の息子の爲めに役をつくる必要があつたのであらうが、迷惑な事である。

　舞臺が廻ると向島小梅、羅月の侘住居となるのだが、舞臺づらは決して侘住居ではなかつた。舞臺監督の行屆かない事、權威の無い事が愈々明白になつた。れつきとした商家のあととりと生れながら、道樂のあげく家倉をつぶした俳諧師の住居とはうけとれない。金持の息子が、好きこのんで弟に家督を譲り、氣隨氣儘に遊び暮らしてゐる景色だ。みなりも肉體も、生活力の強さうに見える友右衛門の羅月が、むかしは吉原の華魁だつたといふ女房と差向で、行火にあたりなが

ら飲んでゐるのを見ると、小金を蓄めた妹をだまかして横領するか、長吉の氣の弱いのにつけ込んで、お糸を横取りして妾にするたくらみをしてゐるのではないかと心配しても無理はない。

羽三郎の女房は言語道斷だつた。

此の場の長吉は文學青年になり過ぎた。原作の長吉は決して文學青年ではない。「梅暦」の名は原作にも出てゐるが、それを懐に入れて持つて歩いたのがいけなかつた。遊藝は好き、體操は嫌ひには違ひ無いが、思索に悩む近代青年では無いのだ。彼の悩みは若い者に共通のやるせなさと、生れつきの心弱さ、母親の希望する學校生活が性に合はないのと、お糸が遠くへ行つてしまつた事にあるのだ。それを表現するのはむづかしいに違ひ無いから、つい意味あり氣な心いれをして、文士の玉子らしく見せてしまつたのである。

此の幕切にも脚色者は創作をして、長吉の歸つた後で軒先の松の枝が一陣の風にもまれて折れるところを見せた。ぽつきりと枝を折られて雪の松かと、羅月にせりふをいはせて幕切の形をつくつたのだ。變に幕切に色氣のある人と見える。

大詰は文字豐の家で、長吉が死んだ通夜の晩といふ事になつてゐる。これは全然脚色者の考案で、原作では長吉が病氣になるところで結末になつてゐて、死ぬといふ暗示は全然無い。何故死

なせたのか、私にはわからない。幕切好きの脚色者が、最後にはつきりとけりをつけて、思ひ殘りの無いやうに殺してしまつたのであらう。

こゝでもおしまひに羅月をして感傷的な文句をいはせ、友右衞門は義太夫物の老役らしく、無闇に首を細かく刻んで振り立てながら、泣くのである。參考の爲めに記す。

羅月。(悲しみをかくして)久し振りでお糸ちやんと、隅田堤の花を見ながら、醉へるだけ醉つて見るか。はゝゝゝゝ。(ト笑ひながら文字豐を顧み)おい、お豐。これは先刻長吉の、日記の間に入つて居たんだ。(ト佛間へこなし)あいつの思ひの種だから、棺の中へ入れて遣んたよ。

(羅月は懷中から紙包を取出して、文字豐の膝の上へ投げてやる。文字豐が包みを開けると、出の姿をしたお糸の寫眞と、長吉が書きかけて引裂いた長い手紙なので、不審さうにひろげて讀みかけ、驚く。)

文字豐。兄さん。こりやあ長吉が。(ト言ひかけるのへ冠せて)

羅月。何にも言ふな。開きかゝつた花が散らあな。(ト密にお糸の方を指す。)

(お糸は氣附かず、帶揚を締め直して居る。折から降り出す雨の音に誘はれて、文字

豐は手紙をひしと抱きしめ、遂に其處へ泣き倒れる。）

これではどうしても大芝居にならざるを得ない。友右衛門の解釋ももつともかもしれない。木村富子といふ人の手腕は別として、藝術に對する理解には始めから不安を感じてゐたが、その心配はあだにはならなかつた。原作から受けて寶玉のやうに大切にしまつて置いた印象は、まがひものの侵入によつて害された恨がある。私は小説の戲曲化を喜ばない。殊によき小説の脚色される事を拒み度い。小説と戲曲とは形式に於て、內容に於て異るのが當然である。筋を主とし、いつでも來いで脚色者を待つてゐるのは別として、描寫に命を托す小説を、極端に時間と人によつて制限され、ことばとしぐさであらはす芝居にしくむのは無理だ。敢て「すみだ川」に限らず、私はよき小説の脚色される事を望まない。

もう一つつけ加へていつて置くが、由來偉い作家の小説の脚色される場合、原作を尊重し、出來る丈原作通りに脚色するといふ事を賣物にするならはしがあるが、私には疑がある。原作に忠實といふ事が、場面を同一にしたり、會話をそのまゝ用ゐたり、或は他の文にある事を會話に直したりする事ならば、それは何等の意味が無い。聲なき文字を以て描くのと、脚光を浴び、姿をあらはし、科白をもつて表現するのとは全く違ふ。「すみだ川」の脚色も、原作尊重主義を賣物に

した形がありながら、少しもその精神には觸れる事が出來なかつた。殊にいけないのは、形の上に於ても末節には原作忠實主義をとりながら、大詰のつくりかへや、幕切毎の芝居がかつた遣口で、原作破壞を行つた事である。

但し、私は些かも戯曲でない原作「すみだ川」を、こゝ迄お芝居にしたうで達者を認めるものである。原作に同情を持たず、脚色者の味方をすれば、よくも斯う迄お芝居らしい筋を立てたとほめてもいゝ位だ。

演出には誰が携つたのか知らないが、舞臺に原作の情趣を漂はせ、作中の人々の心を生かす事には不念であつた。季節のうつろひに對する作者の敏感と、これを描く巧妙とは定評のあるものであるが、それにも心が配られなかつた。

又羅月の解釋の如きは全然なつてゐない。これも友右衞門のみを責む可きで無く、舞臺監督の鈍感か無力かを示す一例と見て差支あるまい。多分友右衞門は原作「すみだ川」を讀んでゐないだらう。或は、讀んでも深くはわからない側の人だらう。彼は新時代の人らしい頭の働きを示す役者では無い。何となく緞帳芝居の臭味の濃い、古めかしい役者だ。したがつて羅月を解釋するのに、大どこの若旦那で、道樂者で、家をつぶしたといふ事に力點を置く程度のはき違ひはあつた

であらう。こしらへも、態度も、金持の旦那らしさを失はなさ過ぎた。原作の羅月は、もつと世の中の片隅に、脂肪分乏しく暮らしてゐるよなげた人だ。義太夫めかした腹で行つてはいけないのである。

さういへば他の人々も、永井先生の描ける隅田川と一體になつて生殘つてゐる人達とは時代を異にしてゐる。此の人々は、餘りに電車通に出過ぎた感じがある。小梅や今戸の風情といふものは、現代の役者の體にはそぐはなくなり切つたのであらう。

いろいろの事をいふもの丶、私は松蔦と壽美藏を稱讚したい。想つたよりも面白く見てゐられたのは、此の二人の力だ。

松蔦と壽美藏は近來めつきりうまくなつた。そのうまくなる階段を踏むのに、他の役者とは違ふ心懸(こゝろがけ)を見せたやうに思ふ。二人とも一時的の喝采をめやすにしない愼み深さをもつて、よく己れを知り、わき目をふらずに修業した。新人ぶつたり、舞臺を武術の道場化したり、輕業を見せたり、怒鳴つたり、あばれたりしないで、自分達の持味を忠實に磨いた。その結果が、次第にあぶなつけの無いうでを身につけた。殊に松蔦は、つゝましやかな藝風に自信を得て、近頃は達者と呼ばれてもいゝ程進出して來た。彼の藝風が明るく、大きくなり、描き出す輪郭の強くなつた

事は祝福すべきである。

私は壽美藏が立派な座頭にならうとは思はない。しかし松蔦や此の人のやうな心懸の役者を珍しく思ふ。手前勝手で、天狗で、早呑込で、賣名病で困るのは敢て役者ばかりではなく、吾々も日に三度かへりみてつゝしまなければならないのだ。松蔦や壽美藏のやうな藝道修業の心懸は、とつて範となすべきであらう。（昭和三年四月八日）

――「三田文學」昭和三年五月號

「嫉妬」寸評

讀んでうけるこまかい味が舞臺に出るかどうか、そのこまかさが戲曲的でないといふやうな意見を持つてゐましたが、實演を見ても此の感を打消す事は出來ませんでした。殊に結末が弱いと思ひます。しかし、私のおそれてゐた程散文的ではありませんでした。矢張芝居になつてゐるところは作者の手腕です。水木趣味のいろんな景物が、最後迄見物の心に何かの輕い期待を與へて引張つて行きました。但し、期待してゐた物が結局與へられなかつたといふ憾みは誰しも感じたらうと思ひます。(昭和三年四月十日)

――「三田文學」昭和三年五月號

「嫉妬」私見

水木京太氏の戯曲「嫉妬」が、淺草の松竹座で、伊井喜多村一座の一番目に据ゑられた。同じ作者の「殉死」も此處で上演され、大東鬼城の不思議な持味の充分發揮された印象は未だに鮮かである。水木氏の作品で舞臺に上つたのは、たぶん此の二つ丈である。「殉死」は其後諸地方に持つて廻られたが「嫉妬」の方はさうは行くまいと思ふ。

水木京太氏は孤高の作者である。劇に關する正統なる學識と觀照眼を有し、極めて着實なる構成法を守つて制作に從ひ、文壇劇壇の有象無象にまじつて、文壇政治や文壇仁義に日も足らず、あくせくする態度をいさぎよしとしない。輕薄なる其日主義の、十錢デパアトメント・ストアの如きお先走の御時節を冷かに嘲りつゝ、概して言葉少なく、己を正しく守る事にのみ熱心なる作者である。イブセンは古い、ハウプトマンは甘い、チエホフは弱いと一口にかたづけて、寸劇ま

がひの表現主義や、劍劇まがひのプロ戲曲を生產する人々にくみせず、謙讓に己をかへりみながら、先人(せんじん)のひらいた大道を辿つて、藝術の殿堂に到らんとする作者である。闇雲(やみくも)に新しがり、利口ぶり、實の伴はぬ名を欲しがり、流行の衣裳をまとつて姿體のまづさをかくさうとする今日の世の態(さま)には、意識的にも反對の道をとらうとする。しかし、氏にあつては、聲高に世の風潮を罵つたり、自分の態度を吹聽したりする遣口も亦厭はしいのである。だから、默つて書齋に籠つて、美しく賢き夫人と、可愛らしい子供の外には、机上の本が最も親しまれる事になる。今日の日本には極めて乏しい保守黨の精神を、確實に所有する珍しい人である。ヂャヅは水木氏の喜ばぬ音樂である。盲目的に近代的なものは、彼の趣味では無い。あやしげな混合酒や、ウヰスキイ曹達のがぶ呑に一時の醉を藉りて、己をあざむく事の出來ないひとゝなりである。靜かにつがれた盃の酒を、一滴もこぼさず、つゝましく味ひつゝ飮まうといふのである。作者の此の態度は、そのまゝ作品の姿となつて悉く現はれてゐる。

通俗なる意味で戲曲的といふ、筋の波瀾を尊ばない。寧ろ之を避ける。

舞臺の上の、全身的活動を好まない。そのくせ、細かい身邊雜記的の動きには注意深い。斬つたり張つたり、自殺したり、他殺したりする事を嫌ふ。短銃も刀槍も必要が無い。

英雄も、近代的エゴイストも出て來ない。強調されたる性格を好まないのだ。いかなる意味に於ても、客間の戯曲では無い。茶の間の戯曲である。平凡人の平凡な家庭の日常生活に、水木氏の詩ははぐくまれる。田舎の舊家の内部も、初期には屢々見せられたが、近頃は東京市に隣接する郊外の新築の二階家の茶の間に、水木氏の戯曲の登場人物は、それぞれの生活を營んで居る。何處の家にもある小喜悲劇、どんな人と人との間にもあり勝な小葛藤、それが水木趣味の風物や、小道具につゝまれて、殆んど吾々が日常用ゐてゐるテムポの會話と、身動さによつてあらはされる。

尤も、此の茶の間の戯曲家も、時には世のさまを笑ふ心の動くものか、日常生活の悲喜劇の外に、おどけ人形を舞はせる事もある。その場合、鋭い皮肉となつてはあらはれないで、或程度のをかしみを愛嬌とする諧謔を弄するに止まる。「殉死」「敵討増補」などがそれだ。此の場合書齋詩人の面目がはつきりして、平生好む隨筆趣味に傾く。せつぱつまらないをかしさ、現在と交渉の乏しい笑ひだ。うつかりすると、作者のひとりよがりになり兼ない。私は水木氏の戯曲の中で、此の系統に屬するものを好まない。

「嫉妬」は水木氏の家の藝である。「殉死」系統のものがお茶受なら、これは米の飯である。作者

自身の口に合ふものに違ひ無い。しかし、見物にとつては、殘念ながらおかずが足りない。

舞臺はおあつらへ通り郊外の二階建の家の茶の間で、出て來る人物も水木氏の神經をいらだゝせない平凡人だ。此の家の主人は若い勤人で、金持では無いが生活に困る樣子も無い。妻は病氣で海邊へ行つてゐる。養生をさせ、其處に送物をする位の事には事を缺かぬ生計らしい。妻の留守中、その妹が來て婆やと共に家事を見てゐる。婆やといふ存在も、水木氏の好むところである。田舍の舊家の婆やは度々引張出されてゐる。これも、郊外の新築の二階家、若い夫婦、新綠の頃といつた風景と、なごやかに調和する一階級であらう。

妻の妹は女學校を卒業して一二年たつたとしごろだ。發育しきつた肉體に、ネルの着物をきせて汗ばませたのは、作者のひそかにほゝ笑む好みである。何となく冷かなセルでは感じが出ない。ともすると肌にぴつたり吸ひつきさうなネルに限るのだ。此の戯曲の季節は、一枚のネルの着物の爲めに選ばれたのでは無いだらうか。

そのネルの袂でこどもらしく額の汗を拭く、といふト書がある。こどもらしいしぐさの拔け切らない、しかし充分大人になつた處女の心には、夫婦のなかからひを純潔な、理想的なものに夢想するロマンテイシズムと共に、不可抗力を以て壓迫して來る衝動のナチユラリズムが、春先の土

の中に萌んとして温められてゐる草のやうに潛在する。一雨降れば、土を破つて芽を出すのだ。「嫉妬」は此の三人の住む郊外の家の、梅雨晴の日曜日といふ水木好みの一日に、とんでも無い出來事となる。

繰返していふが、家は二階家で、吾々の眼前に展開される舞臺の中心は、いふ迄も無く茶の間である。「二階へ上るはしご段の裾が見える」といふ指定も、此の作者の好むところだ。襖の外へ出て、姿が消えるのではいけないのだ。どうしても二階へ上つて行く姿を見せ、とんとんと下りて來る姿を見せなくては承知しない。

幕が開くと、伊勢子が義兄の洋服を始末してゐる。婆やがお盆を持つて二階から下りて來る。それで、二階に人のゐる事が直ぐわかる。かういふ細かい段取は、此の作者の特に心を盡すところで、又屢々その細かい味に自ら溺れんとするところである。

伊勢子と婆やが、二階の主人とその友達、海邊に行つてゐる主婦の噂をしながら、いつしよに御飯を喰べる。姉の留守をあづかつてゐる二十日そこそこの間に、四度もうちをあけた義兄に對する嫉妬と、留守をあづかつてゐるといふ自負心の傷つけられた憤懣をもつてゐる。

其處へ二階から煙草の注文がある。伊勢子が自分で買ひに行く。婆やは臺所へ入る。直に裏手

で機械井戸のがつちやんがつちやんといふ音を聞かせて、洗濯の景色を想像させる。

空虚になつた舞臺に、二階から友人三島が下りて來る。ふつか醉で水を求めに來たのだ。婆やを相手に油を賣つてゐる。おかげで、三島と松井の昨夜の事が、吾々にはつきり想像出來る。松井が下りて來る。伊勢子が歸つて來る。三島が辭去する。婆やは再び裏へ引込む。松井と伊勢子――義兄と義妹が舞臺に殘つて、此の戲曲の主題の祕箱の蓋が開かれる。

松井は今日の日曜を利用して、妻の賴んで寄越した買物を持つて見舞に行く筈だつたのが、三島といつしよに耽溺してしまつたので、その買物丈を小包で送らせようとする。品目の中のヘヤ・ネツトが無い。買忘れたのだ。それを婆やが買ひに出て行く。

松井は昨夜の不始末の爲めに、伊勢子と口をきく時わざとつつけんどんだ。伊勢子は伊勢子で、義兄の昨夜の行動をこゝろよく思つてゐないのが色に出てゐる。事毎にその心持が衝突する。伊勢子は堪へきれなくなつて、突然泣崩れる。その肩を抱いて松井がなだめる。

伊勢子は泣きながら、姉の留守に自分が行屆かないものだから、つらあてに遊びに行つたのだ、姉さんに濟まないといふ。

伊勢子。いいえ、どうせ兄さんの御氣に入らないのよ。だから、だから――

松井。何を思ひちがひしてるんだ。僕はお前が好きで、好きでたまらないんだ。(腕を握りしめる)

伊勢子。うそよ、うそよ。氣に入らないから、あんないやしい所へ行つて、あたしをいぢめたんだわ。居たゝまれないやうにするんだわ。

松井。(益々迫つて)ちがふ、ちがふ。お前が好きで好きでたまらないから、遊びに出かけたんだ。

伊勢子。いゝえ、いゝえ。あたし歸るわ。姉さんにあやまるわ。(もがく)

松井。(熱情を以て抑へる)伊勢ちやん、お前が來た其日から、もう僕は好きで好きでたまらなくなつたんだよ。

伊勢子。(やゝ落付いて)そんなこと。——だつて、もう四へんもあんなところへ……

松井。それがお前を好きなせゐだ。たまらなく好きたからだ。

突然切迫した場面が展開された。郊外の新緑のかゞやきの中で、人間のほしいまゝなる慾情は、二人の男女をすつかり戲曲化してしまつた。

松井。遊びに出かけたのも——お前が好きたからだ。好きで、好きで、たまらなくなつて

た。（熱して抱く）

伊勢子。（うつとりとなつて）あたしなんか……あたしなんか……

松井。いつまでもかうしてゐてくれ。僕はどこへも行かない。お前さへ居れば、お前さへゐれば……

此の呼吸切れのする會話のやりとりの後に、頗る重大なト書がある。曰く

二人の接吻は奥の間へ隱される。

間も無く伊勢子が出て來て、紙白粉で涙に濡れた顏を直してゐるところへ、婆やが歸つて來る。伊勢子はうはの空の手つきで小包をつくる。松井がそれを見守る――幕。

私は、水木氏の戲曲全體中で、最もスケエルの大きい「門を毀つ」を第一位に置き、氣魄人を打つ「仲秋名月」を第二位に數へるものであるが、作品價値を標準とせずに、作者の好みを代表するものを擧げよといはれゝば、躊躇せずに「嫉妬」をその一に數へるであらう。米の飯だといふ所以である。恐らく水木氏にとつては「殉死」の上演よりも、此の作の上演の方が、幾層倍か嬉しい事であらう。故郷の唄をきくおもひがあらうと思ふ。

しかし、私は水木氏の此の傾向の戲曲――水木氏の臺所の米の飯の味を、あまりに淡いと思つ

て憾んでゐる。讀んでも、見ても、決していやな氣持はしない。神經にさはるものは無い。程よく洗練された味がある。無理強にのしかゝつて來るヴアルガリズムが無い。作者は自己の領分を守り、その垣根の中で、靜かに樂しく遊んでゐる。だが、その樂しみは、一人つきりで樂んでゐる形だ。郊外の家、若い夫婦、妻の留守をあづかる妹、處女の嫉妬、ネルの着物、主人と妻の妹の接吻——それは作者の描く溫柔郷だ。上品な春畫である。誰にも見せないで、作者は自ら描き、自ら眺めて樂んでゐるのだ。

それだけ、他人に見せるものとしては四疊半趣味過る。登場人物の心は、しぐさとなつて吾々を納得させない。作者のねらふ心の動きは微妙過る。私は此の戯曲が雜誌へ出た時、かなり面白く讀んだが、それは小說的の面白さで、戯曲的の面白さでは無かつた。

今度實演を見ても、同じ感じは消えなかつた。しかし、私が想像したよりも、見物を引きつけて行く事が出來た。それは此の作者が素人でない事を證明するものである。

私は淺草の見物がいかなるものであるか知らないが、少なくとも此の一幕のなかばにして、あくびと嘲罵を浴せかけはしないかを恐れて居た。ところが見物は決して湧かなかつた。不思議な靜かさを保ち、何かの期待をいだいて見てゐた。私には頗る意外だつた。案ずるに、水木氏の技

巧が、たくみに見物を引擦つて行つたのであらう。注意深い舞臺技巧にだまかされて、今に何か起る、今に何か起ると、絶えず期待を新しくして、たいくつを感じなかつたのであらう。しかし、最後に至つて、大衆が満足したかどうかは疑はしい。私は否と答へ度い。なあんだ、何かあるのかと思つたら、あれつきりの芝居かと、恐らくは馬鹿々々しがつた事であらう。それ程、此の戯曲は世に謂ふ所のお芝居には遠いものである。どつちかといふと、身邊雜記的風物詩の味であつた。

その癖、吾々の目の前には、素晴しい出來事が起つてゐたのだ。二人の接吻は奥の間へかくされるといふト書は、決して單なる唇と唇の接觸を意味するものでは無いのださうだ。その筋のお咎をおそれて、かげで接吻させるのかと思つたら、そんななまやさしい事では無いのださうだ。作者がいふのだから間違ひは無い。

水木氏は一幕の大半を寫生詩のやうな細かい運びで順を踏んで來て、此の大きな出來事の起ると同時に幕を閉ぢた。そして吾々見物に、これから戯曲は始まるのでは無いかといふ疑を殘して行つた。接吻の後から第一幕が始まり、三幕か五幕の大芝居が展開さる可き筈に想はれる。けれども、水木氏の溫柔郷は、さういふどえらい葛藤を喜ばないのであらう。接吻の場面をくすぐつ

たく想像させるところでおしまひにした。そこに此の作者の好みかあり、又吾々の物足りなさかあるのだ。

役々では村田美禰子の伊勢子がよく、伊志井寛の松井がその次、もつといゝ筈の雪岡の姿やが不出來、南の三島はひどかつた。(昭和三年五月八日)

――「三田文學」昭和三年六月號

原稿拜見

「三田文學」復活以來、私は一層多忙になつた。自分が毎月何か書かなければならない外に、他人の原稿を見なければならない責任を感じるのである。

「三田文學」は商賣雜誌では無く、吾々の道場である。金が無いから、原稿を買つて來て雜誌を飾る事は望めない。吾々が勉強して偉くなるのが第一の望たが、ほかからいゝ人を探して來て紹介する事も心がけてゐる。同人は、執筆し、編輯し、又販賣の仕事も各自分擔すべきである。私が毎號寄稿し、購讀者を募り、廣告を集め、寄附金を頂戴し、原稿を拜見するのもその爲めである。

しかし、同人が協力して働くとしても、主として實務を司どる人か無ければ仕事ははかどらない。そこで、復活後約二年間は勝本淸一郎氏を煩はして編輯擔當者とし、總ての雜務と共に原稿

の採否決定迄も委囑した。同氏辭任後は、平松幹夫氏に引受て貰つた。けれども、同人中の古顔で、年長者で、且一番むきになつて雜誌の發展に努力してゐる關係から、世間では、私が一切の事を思ふが儘にやつてゐるものと誤解してゐる向もある。その爲めにも、屢々未見の人から私へ宛て原稿を送つて來る。忙しい時に他人の原稿を見るのは隨分重い負擔であるが、「三田文學」としては、いゝ作品を持ちながら發表機關が無くて困つてゐる人を紹介する使命を帶てゐるのであるから、歡迎せざるを得ないのである。

兎に角、私は毎月いくつかの原稿——主として小說戲曲——を受附け、拜見してゐる。

私は二十年近い年月、文學制作の勉强をしながら、未だこれぞといふ仕事をしでかさないものだ。自分自身安んじて身を置く可き藝術境に到達する事の出來ない人間だ。その爲もあらうが、藝術家は作られるよりも生れるものだといふ信仰が强い。ひと頃の民主々義から最近の唯物史觀の流行迄脈を引いて、英雄崇拜心の打破は、新人がりのあひことばである。何でも彼でも水平線迄引下す事が、大なる安心と安價なる歡喜をもたらすのであらう。藝術は熟練勞働に過ぎない、天才なんぞといふものは無いのだといふ議論が行はれ、相當の喝采を博してゐるのも無理は無い。すぐれたる個性を呪ひ、一切を環境の責任にしてしまふ御都合主義は、デンダ・バンドの騷々し

さを以て、文壇の新開地を練歩かうとしてゐる。

勿論人間の天分が、惠まれたる環境によつてすこやかに延び、惠まれざる環境によつて成長を阻まれる事は否まない。ロバアト・オーエン流の理想は、人道主義的情熱を帶びて、時に吾々をユウトピアに誘ふ事もあるが、それは或點迄事實であるとしても、それ以上天賦の相違の不可思議は嚴として吾々を脅かす。同じ親の腹から生れた金魚を、同じ器物の中で、同じ餌で飼つても、敏捷なのもあれば鈍い奴もある。いたつて鈍いくせに敏捷がつて、やたらに突進し、限りある容器に鼻をぶつけて死ぬ奴もあるし、悠々と泳いで姿の美しさをほこつてゐる奴もある。私は天賦の如何ともしがたい事を屢々痛嘆する。

さうかといつて、私は藝術行動丈が超經驗的だと主張するのでは無い。大工や左官の如き職人のうでも、天賦のものであると認めざるを得ない場合が多い。近代の大工や左官の仕事は、次第に個人的行動から集團的行動に移り、著しく機械化された事實は否めないが、しかもなほうまいまづいの問題は動かす事が出來ない。まして、建築設計の仕事の如きは、主腦者の天賦の如何によつて、效果はどつちにも傾くものと思ふ。要するに、機械力による生產の可能なる物の場合に於ては、個人の才能が多く問題とならないが、うでの仕事による場合には天賦が幅をきかせる筈

だ。小工業は亡び、職人階級はかげのうすくなりつゝある今日、藝術も同じ道程を踏んで、その生産は機械的に行はれるに違ひ無いといふ理論的遊戲は、藝術嫌の人間の弄ぶものとしてのみ存在する事が出來る。觀念の遊戲に耽る者をして、勝手に興奮させ、踊らせるがよい。

實際藝術の制作に苦勞してゐる者は、誰しも自分の天分について、疑ひ、惱み、わづらふであらう。その疑ひや惱みをどうにかして乘越さうと努力してゐる者にとつて、天才なんぞといふ者は無い、熟練と環境次第でどうにでもなれるといふ宣傳は、何よりの福音だ。しかし、それは無責任な彌次馬の聲で、その道の者をうなづかせる事は出來ない。

さういふものゝ、私は一方に於て正しき習練の必要を認め、それによつて或程度迄藝術制作の技術の上達を疑はぬものである。自由畫は一寸は面白いが、正確なるデッサンを學ばなければ、ほんとに素晴しい繪は描けない。文學も同じだ。素人の味のよさもあるにはあるが、習練無くして眞に力強いものが出來ようとは考へられない。

その意味で、むかし文學にこゝろざす者が、時の大家の玄關に年季を入れた組織を、私はむげにしりぞけない。むろん一面には弊害もあつて、師匠が自分の好むまゝにゆがめてしまひ、本來延びて行く可き方向を見失はせてしまふ事もあらうし、師匠の癖ばかりのみこんで、亞流の徒と

なり易い危險もあらうが、ひとりよがりの旦那藝よりも、本筋を學ぶ事が出來るやうに思はれるのである。

私は屢々いふ如く「三田文學」といふ雜誌が生れたのに誘はれて、創作の大望をいだきはじめたのである。當時「山の手の子」といふ小說を書いて、二三の友人に讀んで貰ひ、けなされたり、おだてられたりした後で、永井荷風先生の御手許に差出して批評を仰いだ。先生は朱を入れたり、言葉數多く批評をするやうな方ではない。何もいはずに雜誌へのせて下さつた。その後は大概書上ると、直接編輯者の手に渡して、先輩にも友人にも、原稿を見て貰ふ機會が無くなつた。いつ迄たつてもうだつのあがらない自分の天分のうすさに愛想の盡る時は、若い時にもつと先輩の指導を仰ぐ事が出來たならば、もう少しは何とかなつたのではあるまいかと、愚痴つぽく考へる事がある。

さういふ風に、他人に原稿を見て貰つた經驗の少ない自分が、他人の原稿を拜見するのは僭越な氣がする。私のやうな實力の無い人間をさへ何かの力にして原稿を送つて來る人のあるのは、いかに文壇に出る事がむづかしいかを物語るものであらう。私は未見の人の原稿を前にして、屢々同情の爲めに批判の曇る事を如何ともしがたくなる。

私のところへ原稿を送つて來る人々の中には、その勉強の根強さで、私を鞭撻してくれる人もあるが、不幸にして自己反省の足り無い人が多い。いつ頃からの風潮か、はつきりいふ事は出來ないが、大體に於ては「白樺」の出現以來と思ふ、文學青年の鼻息が頗る荒くなつた。武者小路實篤氏の自信にみちたものゝいひ方は、青年を醉はせ、おだてる效果が著しく、幾多亞流の徒は、お伽噺の王子の如く無鐵砲に出現した。その連中の落ちこぼれが、今も時々襲つて來る。藝術は一生の苦行だと思つてゐる私などのいふ事を、素直に聞いてくれる筈が無い。うつかりまづいとでもいはうものなら、俺の偉さがお前達にわかつて堪るものか、今に見ろ、成長するものは成長するに違ひ無いのだと、忽ち叱りつけるのが定法だ。無闇に卑下する事は決して美德では無いが、己れを知らずして自信のあり過るのは、正に不德の甚しいものである。

大體に於て、都會の人は弱氣だ。世の中の並々ならぬむづかしさを見聞きしてゐるから、自分なんぞが出て行つてもとても駄目だ、誰それの足下にも及ばないと、手も足も出ない心持をいだきやすいが、田舎者は氣が強い。大臣にならうとこゝろざす者が幾人ゐるかわからない。菊池寛氏が人氣があり、原稿料が高く、本が賣れ、僅かに十數年で産を成したと聞くと、自分もその道を踏まうとする強氣は田舎でなければ育たない。それも惡くない。あんまり若隱居めいた意氣地

無しよりも結構だが、藝術のよき作品は、抱負丈では生れない。いかに自信が強くても、十人が十人すぐれたる素質を持つてはゐない。そこで原稿を拜見する側では、惡いところを指摘する事もあり、書直す事を勸める事もあるのである。ところが先方では此方の立場を考へてくれない。貴重な時間をさいて二度三度讀返し、馬鹿正直の親切から、齒にきぬ着せぬ事をいふと、不親切だ、わからずやだと忽ち喰つてかゝるのである。近代の青年は、へりくだる禮儀は學んでゐないが、變な強氣で突かゝつて來る事は得意である。

一度でこりてしまふ人が、何故かう多いのだらうと、なさけなくなる。それも、默つて引込むのはまだしもいゝが、大概は捨ぜりふを殘して行く。

最近には斯ういふのがあつた。突然たづねて來た學生が、原稿を見てくれないかといふのである。自分は未だ文字を印刷に附した事は無く、たゞ一人で修業してゐるのであるが、自分で自分の缺點を知るのは困難だから、是非とも讀んで批評してくれといふ。彼は繰返して發表慾を持つてゐない事を口にした。私はすつかりまに受けて、何時でも原稿さへ送つて寄越せば拜見しようと約束した。間も無く、最近非常なる努力をして書上げたといふ說明つきで、かなり長い小說が屆いた。恰も私は雜用に追はれ、家にゐる時間の乏しかつた時なので、つい一週間ばかり封を切

らなかつたが、その間に彼は一度訪問し、一度は手紙で催促して來た。その小說がいゝか惡いか氣がかりで何も手につかないといふのた。私はその熱心に感激して、三度繰返して讀み、詳しい批評を添へて送り返した。相當底力のあるものではあつたが、何といつても習練不足で、布置には破綻があり、描寫は冴えず、文章は冗長であつた。但し、材料は作者の身についたもので、感情がぴつたりと盛られてゐたから、巧みに書直せばものになると思つた。ところが、折返して彼から手紙が來た。曰く、忙しい中で讀んでくれた事は難有が、自分はあなたなぞに批評を求めたのでは無い、實は金に困つてゐるので、何處かの雜誌に世話してくれるかと思つてゐたのだ云々と、極めて齒切れのよい申狀だつた。

それと反對に、私が常に感服してゐるのは藤原誠一といふ人だ。此の人は伊豫に住んでゐるのだが、數年間手紙のやりとりをしてゐるばかりで未だお目にかゝつた事は無い。藤原氏の原稿程きれいな原稿は無い。叮嚀に清書して、一字の消も無く、器用に表紙をつけて綴てある。それを遠慮無く批評して返すと、私のいひ分を尤もと思ふ時には、直に書改めて、又叮嚀に清書して送つて來る。一作を三度四度書改める事もある。私は雜誌の〆切に追はれて詰らない漫談をなぐり書きする今の自分を恥ぢながら、氏の態度の學び易くたない事を愈々深く感じるのである。

その外にもいろいろの人が想ひ出されるが、曾て下のやうな手紙を受取つた事があつた。

突然手紙を以て失禮致します。

私は先生と同年同月に生れたものであります。長い年月を滿蒙の土地に流浪し、政治に、軍事に、浪人に、或る時は〇〇仲間に、或る時は〇〇探偵に、殊に十有餘年間は支那人に化けて變化極りなき生活を致しました。

幼少の時より、家出する迄の悲劇、人生の最も悲惨なる獄舍の生活、終に今日は懺悔の身、宗教的方面に餘生を捧げたいと思ひ、未熟ながら目下其の梗概を著述中であります。近き日には出版致し度希望もありますが是非共先生に御斧正御加筆を願つて出版の上更に脚本として一種の劇に及ぼし度いと存じます。目下五十字詰四十行位の原稿百枚位有ります。唯今日迄の順序を認めた而已で加工すれば茫大なる著書、最も面白きものであると信じます。(以下略)

ところが此の手紙の封を切ると、中に附箋があつて

本人は出鱈目の詐欺漢ですから相手になさらぬ方がよいと思ひます。　係り

と認めてあつた。親切な郵便局員の注意であらう。私は何と返事をしたのだつたか、今では覺

えてゐないが、久々で讀返して見ても、いきいきしたユウモアが躍動してゐて、腹を抱へる價値があつた。かういふのは原稿拜見の役得である。

役得といへば、ひとむかし前には、私でさへ女から手紙を貰ふ事があつた。その中の一人で、原稿を見て貰ひ度いといふ妙齡の人があつた。鋭い觀察と、露骨な描寫で、何時も際どい場面のある小説を書いて寄越した。一作は一作と著しく進歩を示すので、私もひどく期待してゐたが、或日うちへたづねて來た。當時私は家事一切を女中任せにして、一軒の家を借りてひとりで暮らしてゐた。客は勿論自分の容姿に充分の自信を持つてゐた。そして、自分が處女である事を、機會のある毎に發表した。男といふものはみんなしやうのないみだりがましいものであるかとか、多くの男が何故自分に手紙をくれたり變な事をいつたりするのであらうかとか、いかにも男子を輕蔑する語調でいふのであつた。やがて日が暮れて、食事を共にし、なほしきりに話し込んだが、何かのきつかけに、その頃重症に陷つてゐた明治時代に貢獻した一人物の事を私が話した。少時ではあつたが、私はその先輩の指導のもとに働いた事があつて、嚴格極まり無き指圖には、常に叱咤されてゐるやうな感じだつた。私は何心なく、あゝいふ偉い人に、もう少し泣かされ度かつたが、惜しいかな死病にとりつかれたやうだと嘆息した。その言葉が終るか終らない瞬間に、まあ

さうなんですか、あたしは先生に泣かされ度いわと、女の人ははつきり云つて膝を進め、ぢいつと隙をうかゞつた。むかうは水際の五位鷺で、こつちは泥の中の鮒のやうな形勢だつた。

この人は續けて勉強してくれたら、きつと相當の作者になつたらうと思ふのだが、間も無く私のところへは寄つかなくなつた。たぶん、私が彼女を泣かさなかつた爲めであらう。（昭和三年七月五日）

——「三田文學」昭和三年八月號

三宅周太郎氏の世界

「中央公論」に連載された三宅周太郎氏の「文樂物語」——昭和三年一、二、三月號——と「文樂人形物語」——昭和三年七、八月號——は、近頃讀んだもの丶中で一番面白いものであつた。たゞ面白いといふ以上に、私は感動し、感激した。い丶ものを一人わたくしするやうな氣がするので、既に讀んだ人とは互にそのよき事を語合ひ、未だ讀まない人には勸めて讀ませた。既に讀んだ人は、いづれも私同樣、實に面白いといひ、勸めて讀ませた人は、誰も彼も、私の勸說によつて、かういふい丶物を讀み得た事を感謝して來た。

廣い世の中だから、何處にどういふ人がかくれてゐるかわからないが、あらはれてゐる人の中で、三宅氏程歌舞伎劇を熱愛し、正解して居る人は無いやうに思ふ。その姉妹藝術である人形淨瑠璃に就いても、氏の研究は日に日に廣く深くなつて行きつ丶ある。吾々の如く、その道の奥の

事を全く知らない者にとつて、氏の如き信頼すべき人の在る事は何より難有い。

尤も、物識といふ點では、他に人があるかもしれない。文獻をあさつて、浩澣なる著述をする人もあるだらうし、多年芝居を見歩いた經驗から、活字引のやうになりすました人もあるだらうが、さういふ種類の人と三宅氏の異なる値打は、藝術に對する生一本の情熱を以て、知識を感覺的になし得るところにある。知識を藝術化するところにある。兎角つめたくなり勝な博識が、三宅氏の體溫をもつてあたゝめられ、呼吸し、時には汗ばんで再現するところにある。

「演劇往來」の昔から「演劇評話」の今日迄、三宅氏はわき目もふらずにひとつの道を追求して來た。雜然紛然たる今日の世の中で、しかも年中自分を文字にして曝し、絶ずうるさい批評をうけ、きびしい刺戟に惱まされてゐる者は、兎角自分の仕事に迷ひをいだき易い。迷ひは今日の世の姿であり、疑は吾々の呼吸する空氣よりも屢々重く迫つて來る。あつちへ行き、こつちへ行き、年中岐路に迷つてゐる人間ばかりだ。その迷ひの中から、いかなる未來を發見するか、創造するかわからないが、個人の一生にして見れば、多くは無駄に迷ふばかりで、おしまひになるに違ひ無い。さういふ世の常の姿を見せず、三宅氏は一歩々々眞直に進んで來た。あわてゝかけ出さず、つまさきも踵も大地に跡を殘して來た。

勿論三宅氏と雖も、心の中では自分の態度に疑惑の目を向ける事もあるであらう。人並すぐれて感受性の鋭い藝術家として、それがあたりまへだ。しかし、藝術家の命は表現されたものによつて定まる。而して、三宅氏の場合に於ては、迷ひは形をとつて現はれた事が無い。

つい此間の事であるが、先輩某氏を久々で迎へて、數人の者が集つた。席上「文樂物語」が話材になつて、みんな激稱した。殊に三宅氏が、十年一日の如く演劇研究に沒頭してゐるひた向な態度をほめた。先輩も氏の不斷の勉強を稱揚したが、それにつけ加へて、もつと西洋の本も讀まなくてはいけないと言つた。傍にゐた私は、それが三宅氏の態度を難ずる言葉では無くて、いゝにはいゝが更に望めばもつと廣く東西にわたる鑑識を見せて貰ひ度いといふ程度の、親しさから出た激勵の意味と考へてゐた。ところが三宅氏は、存外此の言葉を、眞向から打込まれたやうに感じたらしく、後まで心に殘してゐた。どうも未だ勉強が足り無い、どうしても西洋の本を讀まなくては駄目だといふやうな事を、日を經て繰返して言つて居た。

又別の機會に、三宅氏の新著「演劇評話」を貰つた仲間が、著者を主賓として集つた事があつた。さかんなる談笑の間に、二三日前に新聞に出た或る批評的感想文に對する是非の論が持出された。それは、小山內先生の「演劇論叢」と三宅氏の「演劇評話」の讀後感を記したものであつた。私は新

聞を讀んでゐなかつたので、口をさしはさむ餘地が無かつたが、當の三宅氏は、弱點を強く非難されてゐるやうに解釋して、しきりに氣にしてゐた。それに對し、一人の友達が、かなり酒機嫌もまじる雄辯で、何も氣にかける程の事ではない、君の態度はそれでいゝのだと、右からも左からも反覆して納得させせようと努めてゐた。數日後、私は新聞の切拔を手に入れて讀んだ。その要點をつまんで記せば、三宅周太郎氏は新興の藝術などはどうでもいゝと思つてゐるのではないかと傍目に見える程、歌舞伎のやうな古藝術に耽溺し、其處に不朽の生命を見出さうとしてゐるが、かういふ風に一つの藝術に沒頭して、一生を托し得られるのは寧ろ羨しい、といふのである。筆者の持味で、強ゐてもつけつけものをいはうとする傾はあるが、私には三宅氏が氣にするやうなものとは考へられなかつた。

これ等の挿話が示すやうに、三宅氏は傳統的藝術にばかり沒頭してゐるといふ事に、時には不安不滿を感じる事があるらしい。けれども、それだからといつて、直に方向轉換をしたり、よそほかの事にちよつかいを出したりする事は無い。一時水面にさゞ波が立つ事はあつても、再び靜かに動かぬ常の姿にかへるのである。

いつたい、むかしのものゝ研究に夢中になる人といふものは、兎角その事に凝りかたまり、新

しく成長するものには盲目になり勝である。詮索好は識る事にばかり價値を置いて、感じる事にはうといのが多い。古きものゝ中によき事を認めるのでは無く、頑固であるために古きを喜ぶのではないかと疑はれるてあひが少なくない。

そこにゆくと三宅氏は、世の常の頑固屋のむかし崇拜とは違ひ、近代人の感受性は人一倍も強いのである。親しくたゞした事は無いが、純粋の古風な歌舞伎を喜ぶ一方に、築地小劇場の演出を稱讃するらしい。氏が古藝術に傾倒するのは、それが古いからでは無い、珍しいからでは無い、やがて亡びゆく殘りすくないものだからでは無い、それがすぐれたる藝術だからである。即ち、新しい方のはしりのやうに見られてゐる築地小劇場でも、よき脚本の正しき演出に懸命である限りは、氏の嚴密なる觀照に値する筈である。

私は思ふ。三宅氏は今日の藝術にも、明日の藝術にも關心をもつてゐるには違ひ無いのだが、完成品を尊ぶ審美眼が、未成品の發達を樂む主觀的態度に出る事を許さず、目前に現存するものに對して、觀照の喜びをほしいまゝにしようとさせるのであらう。しかも、氏に於ては、廣く淺きを求めないで、狹くとも深きを望み、生一本に惚込んで行くのだ。あれにもこれにも氣が散つて、中途半端になる事は、性格としても出來ないのだ。自然よそ事にかゝづらふ事は制限される。

此の態度に對して、たまたま批評の出るのは當然であらう。

自分は街頭に立つよりも、物靜かな家居を好む性格だと、三宅氏自身書いてゐるが、全くその通りらしい。きちんとしたみなりで、頭も顏も綺麗に手入が行屆き、曾て粗野不潔な風をしてゐた事が無い。日常の會話も決して大きい聲をしない。酒をたしなまず、談偶情事に關する事にでも及ぶと、ぽうつと顏を染める特徴がある。育のいゝ、禮儀の身についた人柄なのである。おまけに、屢々自ら歎いてゐるやうに、肉體的に弱い人である。からだが大事だから、ライスカレイとサンドウイツチの外には喰べる物の無い築地小劇場に行くのは恐いと書いてゐる位だ。さういふ質の人だから、自然蠻的な行動に對してはけんのんがり、常に靜かな室内に身を置く安全を考へ、且守る事にもなるであらう。それは形の上にも、心の中にも影響する。蕪雜な事、未完成のものに對しては懷疑的であり、近寄りたがらない。果していゝか惡いかわからないやうなものに期待をかけて、のぼせ上る事は出來ない。方角もはつきりは定まらないのに、人の先に立つてかけ出す事は思ひも及ばない。寧ろ蝸牛の如く家を背負つて歩く事が出來れば歩き度い人である。三宅氏の安住の世界は、決して廣いものではないが、喧噪混亂の街から横にそれた靜閑の地に營まれてゐるのである。

ところが、その蝸牛の三宅氏にして、話が芝居の事に及ぶと、忽ち顔面にはいきいきした表情をあらはし、言葉は些かせきこみ加減になり、相手がうまい事をいふか、或は自分の說を上手にうけて吳れると、首を小刻に上下にうなづかせながら、もう我慢が出來ないといふかたちで、膝を乘出して來る。ほんとにそれは、あまりに芝居に對する恍惚感が露出して、屢々猥褻にさへ見えるのである。少々卑俗ないひ方だが、三宅氏にとつては、芝居は女であり、酒であり、米の飯である。しかも決して不見轉をせず、吟味をし、いけないのはしりぞけ、いゝ時には舌うちをしてむさぼるのである。平生靜閑を愛し、決して街頭に立たうとしない人が、たゞひとつ芝居の事になると、己れを忘れて情熱の燃るが儘に夢中になる。打込んだ藝術に對する熱情は、一種きちがひじみた底光を發して人に迫るものがある。

それ程の熱があつてこそ、二十年一日の如く芝居にかゝづらつてゐられるのである。かう迄ひとつの事に夢中になる時は、多くは新鮮感を失つて停滯狀態に陷り易いものであるが、三宅氏には些かの疲勞倦怠も無く、研究次第に深まさるのはよろこばしい限りである。

その三宅氏が、文樂の人形淨瑠璃について何を書いてゐるかといふと、最初に大序の人々といふみだしを揭げて、いかに文樂の藝道修業が困難なものであるかを、數々の實例をあげて說いて

ゐる。

長い見習の年季を入れて、やうやく大序を語る迄になつたところで、客の來ない間に、しかも簾內で、五行本十數枚を、十數人がかはるがはる語るのだ。一人で語つても十數分で濟んでしまふのを、力のあらん限りの聲をふりしぼつて、右の人數が努めるのである。先に望があるかといへば、大概は二十年三十年同じところに止まつてゐる。一生そのまゝで終る者も少なくないのだ。そして收入は、最下級の洋服勤人にも及ばず、まして況や近代的勞働者の足もとにも隨ふ事が出來ない。どうしてそんな待遇に甘んじてゐるかといへば、好きな道に一生を賭けたからである。

此の大序の人々に、三宅氏は多大の同情をそゝぐと同時に、隱忍無抵抗の修業に身を捧げる愛着の深さ根強さに、少なからざる尊敬を拂つてゐる。又「文樂物語」の最初に、大序の人々の生活を說き、逸話を並べたのは、此の一篇の構成上の成功であつた。私は「文樂物語」の中で、何に最も強く打たれたかといふと、大序の人々の條であつた。今、文明開化の世の中では、一事に愛着する念力信仰は次第に影をかくして行く。人々は劃一的教育を受け、新聞雜誌は全國にゆきわたり、あらゆる知識は廣く淺く、誰の頭にも容易に入る事になつた。輕便迅速は誰の心にも訴へる標語である。少し大ざつぱ過るかもしれないが、何かの道にこゝろざし、終生それに身を捧げる

のが昔の道徳なら、深入りしないで素早く見切をつけるのが今の處世の道であらう。就中、根強い自國の文化を持たない爲めか、海を渡つて來る新しい刺戟の中で生れ育つた現代日本人には、古きものに對する愛着はむげに輕蔑されるのである。はやらないものに執着するのは、事の如何に拘らず馬鹿々々しいとされるのである。雛祭や五月の節句は次第にさびれ、耶蘇降誕祭は大祭日の如く賑はふのである。

ひとつには、此の國が他の國と國境を接してゐない事にも原因する。四面海もて圍まれる神國は、幸にして日清日露の戰に勝ち、歐洲大戰の時には戰禍の眞只中に引擦り込まれないで濟んだばかりで無く、不時の大儲をして成金氣分を味ふ事が出來た。此の世紀に於て、亞米利加に次ぐのほほん國であらう。のほほんは自己批評を持たない。だから、永い間の鎖國から解放され、四方八方から新奇なものが渡來すると、何の顧慮するところも無く無批判に受入れて享樂する事が出來る一方には、自分の持つてゐる物に對する正當の評價も忘れてしまつた。異人の持つてゐる物は何でも羨しく、セルロイドの玩具とまがたまを交換する事さへ敢て辭さない意氣組である。錦繪は一度二束三文に外國人の手に賣渡された時代がある。それが外國で研究されると、忽ち又高價を拂つて買戻す。つい先頃、某富豪が財界の海嘯に押流された結果、手放さなければならな

くなつた錦繪を、公衆の面前に展覽した時の如きは、社交界の婦人として之を見なければ、世間に顔が出せないやうに騒いだ。

同様の悲慘事が各方面に行はれた。刀の目貫に名工が心をこめた細工は、今日西洋の美術館のほこりになつてゐる。傳へ聞くところによると、むかしみやこのあつた土地の、今は國寶になつてゐる建築物も、あやふく異人の手に渡らうとした事があるさうである。

何でも彼でも舶來が上等と目された時代には、日本畫家は喰へなくなつて一代の名匠が萬燈の繪を描き、能樂の大家が蕎麥屋の出前持になつてもりかけを運んだといふ話の殘つてゐるのも無理では無い。文樂の人形も、早く異人の手にかゝつて研究され、稱讃されなくては、現代日本人の喝采を博する事は覺束ない。

かういふなさけない時代に、むかしから幾人かの名人が生涯を捧げ盡して、工風に工風を重ね、今日に傳へる人形を默々として使ふ一群や、大概は一生簾内で終る運命と知りつゝ、好きな道に命を賭ける太夫や三味線彈(ひき)の殘存してゐる事實は、一種悲壯の美觀である。三宅氏の傳ふる所によると、古今東西にほこる可き人形淨瑠璃は、十年をまたずして亡ぶであらうと、當の人形扱(つかひ)が言明してゐるさうである。さういふ事を聞くと、北極の氷上を飛行機に乘つて飛ぶ勇士の冒險を喝

采するのと似寄つた心持で、此の道の狂信者達に、深き尊敬を捧げ度いのである。
次々に三宅氏が紹介する文樂の制度組織、又すぐれたる太夫三味線彈人形扱の逸話は、すべて浮世とかけはなれた藝道の特殊相を物語るものである。
そこには、はげしい訓練が要求される。しかも全然報酬を念頭に置く事が出來ない。「文樂物語」の一節に、現在の紋下竹本津太夫が、入門志願者にむかつて、文樂で修業する氣なら金の事は忘れてくれと、のつけからいひきかせるとあるのも、嘗て文樂にゐた或る太夫が、あすこだけは世の中をあきらめてしまはなければゐられません、といつたといふのも、すべてが藝道本位といふ意に外ならない。太夫でも、三味線彈でも、人形扱でも、きびしい修業が生命を脅すのである。清元や長唄だと、生れついての美聲の所有者ならば、數年の修業でひとかどのものにならないとも限らないらしいが、義太夫はどうしても數十年の修業を要するらしい。すべて藝事は一生の修業に違ひ無いが、これ程その度の強いものはあるまい。それが何故であるか、私は審かにしないが、經驗は之を明白に語つてゐる。多分、主觀的文學――殊に詩歌、或は身邊雜記風の短篇小說ならば、比較的に若い年齡でも逸品を出し得るが、客觀的描寫による大規模の小說は、人生經驗の豐富な、年功を積んだ作家でなければ書けないのと、同じ理由が伏在するのであらう。あ

らゆる性格を、あらゆる境遇に置いて、まんべんなく理解し同情し、立體的に描き出す事は、心にゆとりのある事と共に、あらゆる手法を體得してからでなければむづかしい。そこで、十年二十年下積みになり、頽齢に至つてはじめて一流の名聲をかち得る辛抱努力が要求されるのだ。汽車があり、自動車があり、飛行機のあるテムポの速い現代に、かう迄根強く好きな道に執して、一生を終るものは無いであらう。三宅氏は、此の苛烈なる修業を、藝道修業の本筋として高唱してゐるのである。言葉は宣言の調子を帶びてゐないが、その然る事は疑ふ餘地が無い。

淨瑠璃文學の内容は、既に吾々にも訴へるところが少なくなつた。人形淨瑠璃も、或はその道の人がいふ如く、十年をまたずに亡びるかもしれない。しかし、文樂の人々が藝に對する心懸(こゝろがけ)は、長く傳へて殘さねばならぬ。小說家も、畫家も、音樂家も、すべて一藝に秀でんとするもの、自己の藝術を創造しようとするものには、此の覺悟と實行が必要である。

私は近頃つくづく思ふのだが、近來文壇には文學嫌の人間が多過ぎ、文學きちがひが少な過(すぎ)る。自分は文學は嫌ひだ、嫌ひだけれど外にする事が無いからやつてゐるのだ、嫌ひだけれど金が欲しいからやつてゐるのだと、自慢さうに公言する者も少なくない。文學は政治闘爭に役立つ意味に於てのみ存在の價値があると說く者はあまりに多い。むかしから、文學は教育の爲めに存在す

べきた、道徳の爲めに存在すべきたといふ功利説は、藝術家以外の人々からうるさく聞かされたものだが、今日ではそれに類する事が、制作者自身から叫ばれる有樣である。藝のむしの愈々すくなくなるのは當前であらう。

勿論藝術も、何かの大事變の起る際には、衣食住とその存在價値を爭ふ事は困難であらう。戰爭が起れば、藝術家と雖も銃を執る可きだ。しかし、平生文化の世の中の一員として、めいめいのこゝろざす道にいそしむ限り、その制作者が制作の態度に於ては、藝術至上主義を奉ず可きは當然の事だ。

むかしの藝道にこゝろざした人の、皆がみんなさうでは無かつたかもしれないが、少なくとも今日よりは、好きなものが好きな道にこゝろざしたに違ひ無い。嫌ひだけれども、外に金になる仕事が無いから爲方が無いと放言するのとは魂の打込み方が違ふ筈だ。藝術家は貧乏と相場のきまつてゐた時代は、寧ろ氣安かつたかもしれない。世の中には、或ひとつの事にばかり能があつて、他の何事にも向かない人もあるものだ。多數の人の苦手とする算術に堪能で、ほかの事は一向出來ない人間をさして「算術馬鹿」といふが、藝術家には此の傾向が必要では無いかと思ふ。私は近頃座談の間に、往々「小説馬鹿」といふ言葉を用ゐてゐるが、それは小説が好きで好きで堪ら

ず、他の何事をも顧みない人間をさすのだ。今日のお利口作家の仲間には、小説馬鹿がゐなさ過(すぎ)ると思つてゐる。此の種の馬鹿が、要するに文樂の人々では無いだらうか。むかしの工人などに、のつそりだとか、のろまだとかいふあだ名つきの名人のゐた事は、屢々傳へ聞くところであるが、一事に執し、他をかへりみない人間に、動かし難い力を認める事が多くある。文樂の人々が、慾得はなれて藝道をはげむ偉さは、兎角安樂に呢(なづ)み勝な吾々にとつて、もつて範とするに足るものである。

それにつけても文樂が、次第に衰滅の道を歩いてゐるのは殘念である。ほんとに人形淨瑠璃の命は、旦夕に迫つてゐるのかもしれない。大阪人は、口では文樂を土地の自慢のひとつに數へながら、いざとなると聽きに行く者は極めて少ないさうである。客が少なければ、興業師は儲からないから、燒けた文樂を再建する氣にならない。現在に於て、文樂は松竹合名會社の繼子に等しいらしい。うつちやつて置けば、自滅の外はないのである。私は、三宅周太郎氏の名篇「文樂物語」の出たのに目を覺まし、此のほこる可き藝術を、國家が保護する事を提唱し度い。天子様にも御目にかけ度い。

繰返していふが、三宅氏の一文はなまけ者を鞭うつ力がある。靜閑を愛し、傳統的藝術の完成

美の探究に全力を盡してゐる氏のつくり出した世界は、一脈文樂の世界と相通ずるものがある。わきめもふらず、丹念に道にこゝろざす氏には、多くの他の事を望まずに、獨自の道を歩かせ度い。氏の如きは、或は「歌舞伎馬鹿」と呼ぶ可き人かもしれない。

誰も彼もが三宅周太郎氏の世界に立籠れとはいはない。しかし、藝術修業者にとつて、その境地の尊敬すべく、學ぶ可き事は力說し度いのである。(昭和三年八月七日)

――「三田文學」昭和三年九月號

信仰の作者

――改造社版現代日本文學全集のうち泉鏡花集のために――

天才は狂人だといふ。百千萬の人間と同じ考へ方をせず、同じ生き方をしない點に於て、水平線下の人間と、何かにつけて違つてゐるのは當然であらう。泉鏡花先生は天才と呼ばれて最もふさはしい人である。さりとて、決してきちがひじみたところなぞは無いのだが、日常生活に於ても、藝術作品に於ても、他の人とは全然異なる様式を固守してゐる事は事實だ。それにはいろいろ原因を數へる事が出來るが、第一には先生の精神活動に結びつけて考へなければならない。

泉先生は現代稀なる批評的精神の乏しい作者である。そのかはりに素晴しい信仰に燃(もえ)る作者である。先生は何から何迄自分一流の信仰に強い感情を託し、一種獨特の情熱世界を創造して、其處に安住境を見出してゐる。神佛に對する信仰の深さは、私の如き不信心の不所存者には想像も

ゆるされない。観音菩薩、摩耶夫人、今は世になき紅葉先生、御父上御母上、おばあさまのみたまに、幼子の如く取縋る心を、先生は今も忘れない。此の世の外に果て知らぬ想像世界があつて、恍惚にわれを忘れる少年を誘つて行く事は、先生の靈筆によつて屢々描かれた。

なんでもかんでも、いゝとなれば絶對にいゝ。悪いとなれば斷然いけない。それも批評を無視した信仰のひとつのあらはれであらう。好きと嫌ひは妥協を許さない。夕方雷の鳴る日には、朝からお腹が痛む。狂犬が恐いとなると全く散歩を廢し、黴菌がおそろしいからなまものは一切口にせず、何から何迄煮沸しなければ氣が濟まない、あれ程好きなお酒でも、あたら煮燗にしてしまふのである。年中、寢しなに食べる饂飩も、目の前の長火鉢で、奥さんの煮返したのでなければいけない。尤も、奥さんに對する信仰は、たぶん現世に於て一番強いものであらう。奥さんの煮たもの焼いたものなら安心して食べるが、ほかの人の手にかゝつたのでは、なかなか御箸をつけて貰ふ光榮に浴さない。

客觀的批評の尺度を採用しない先生は、たぐひ稀なる自分勝手である。自分の主觀でつくりあげた世界に、自分の思ふまゝの人間を動かすので、いろいろの個性を持ち、いろいろの環境に支配される人間が、めいめいの成長を要求する事は許されない。だから、英雄か、馬鹿か、いゝ男

か、ぶをとこか、トテ・シャンか、でぶか、黒でなければ白だ。中途半端な、平凡無事の人間は、先生の目には映じない。

江戸つ子に粋な人間の最左翼で――或は最右翼か――田舍者は野暮の最右翼――或は最左翼か――である。下町はほめられ、山の手は罵られ、藝者は不當に讃美され、女學生や奥さん階級はこつぴどくやつつけられる。一方を完全なものにし、一方をなつてゐないものにしなければ、強い信仰は保ち難いのである。善玉は本花道からあらはれ、惡玉は假花道から出て來る。惡玉が悔悟すれば忽ち善玉になり、善玉が宗旨をかへれば惡玉となる事はあるが、善玉でもなく惡玉でもない奴や、善玉でもあり惡玉でもある奴は、なかなか鏡花世界の本舞臺に登場するきつかけを與へられない。將棋をさせばぶら金いつてんばりだ。信仰があつて批評の無い事がはつきりあらはれてゐる。

先生には酒の味がわからない。何かのきつかけでいゝときまれば、それがよくなる。信仰してゐる家の酒なら、樽底だらうが、別口に變つてゐようが、決して疑はない。客觀的批評は無いのである。

批評が無くて信仰のある人の強味――それを最も深く惠まれてゐる泉鏡花先生は、その直線的

の強味に於て、第一の詩人の座を要求する權利がある。（昭和三年八月十三日）

――「三田文學」昭和三年十月號

白水郎句集

私は俳諧のみちには暗い。殆ど何も知らないといつていゝ。殊に、年をとるにしたがつて、いよ〳〵人間が散文的になると見えて、俳諧の面白さはます〳〵わからなくなつた。むかし持つてゐたゞれかれの句集も、みんな賣拂つてしまつた。籾山さんや久保田さんから句集を頂戴すると、いちどは目を通すけれど、正直のところお義理に過ぎない。此の頃白水郎句集を贈られて拝見はしたが、特に記すべき感興は無い。

大場さんと私とのおつきあひは、白水郎とのつきあひではなく、惣太郎さんとのつきあひである。氏は珍しくあかるい人だ。東京人のひとつの特徴と見る可きこだはりの無いほがらかさを充分恵まれて生れた人だ。私の目に映る氏は、年中微笑してゐる。曾て、怒つたり、歎いたり、くつたくしたり、滅入つたりした表情を、彼の顔面に見出した事が無い。

俳人といふと、何となく氣むづかしやか、きどりやか、ぢゞむさいか、すべつこ過ぎるかどつちかのやうに想像して居る私にとつて、白水郎を見る事は、これでも俳人かと思ふ輕い驚きに外ならない。

彼の句もその通り、素直にあかるいものである。そのみちの人はどう見るかしらないが、私には平明過ぎるやうに思はれる。藝術には、もつと底意地の惡いものゝみかたと、もつと癖のある表現が必要である。大場惣太郎さんは、俳人としてはあまりに人間があかる過ぎるのでは無いだらうか。惣太郎さんはそれでいゝ、白水郎は、もうひとくせもふたくせもあつて貰ひたい。（昭和三年五月十六日）

――「俳諧雜誌」昭和三年十一月號

築地小劇場をたたふ

つい此間、築地小劇場で、同劇場創立滿四周年を記念する講演會が催され、私も口說かれて壇上の人となつた。係の人の話では、講演者は特に關係の深い人に限つたといふことで、武者小路實篤、中村吉藏、藤森成吉、北村小松氏等の名前がつらねてあつた。この人々の創作戲曲は、曾てこゝの舞臺に上演された事があるから、その意味で近しい人と呼ばれて然るべきだが、いつたい私は何だ。關係の深い人に限りましたといふ劇場の人の言葉に對して、些か顏を赫らめざるを得ない。私にも數篇の戲曲があるが、乍殘念上演に値すべきものは無い。ひそかに自分自身にたづねて見た結果、私は自分が最も熱心なる築地贔負の一人たる事を認めて強ゐて安んじた。

その夜は定刻から芝居の興行があるので、講演會の方は五時にはすませ度いと、係の人からきかされてゐたのであるが、私が會社の勤をしまつてかけつけた時は、既に四時を過ぎてゐた。講

演をすませた人は歸つたと見えて、樂屋は寂しく、舞臺では中村吉藏氏のお話が進行中だつた。

結局私に順番の廻つて來たのは、閉會時刻の五時に近かつた。時計を氣にしながら喋つたが、忽ち時間は過ぎてしまつたので、いひ度い事の半分もいはずにやめてしまつた。いつも講演をした後はひどく不愉快になるならはしだが、思ふ事を充分盡さなかつたゞけ、その日は一層胸が重かつた。演壇から引さがると直くに、ろくに挨拶もしないで戸外に出た。聽衆の誰よりも早く、往來の空氣を呼吸した。馴染の飲屋にかけ込んで休息し、一時は不快を忘れたが、その後日がたつても、意を盡さなかつた話の滓は安珈琲の茶碗の底のやうに舌ざはり惡く殘つてゐて、一人でも喋つてしまひ度いやうないらだゝしさを感じるのであつた。あゝいふ筋の立たない話をきかされた人は、さぞかし馬鹿々々しかつたらう。あゝいふ筋の立たない事をきかせつぱなしにして置いては、自分も不愉快だ。私は、當日喋るべき筈で喋り足り無かつた事を、文字にして、その日の聽衆に讀んで貰へる機會をつくり、同時に外の人々にも、私の所論に贊成を求め度いのである。

講演會の日に、私の揭げた演題は「築地小劇場に感謝す」といふのであつた。

築地小劇場の出來たのは、つい此間の事のやうに思はれるが、もう四年を完全に經過したのだ。

夏は藪蚊が脚をさし、冬は寒氣の骨にしみる、墓場の如き劇場も、區劃整理の爲めに隣接地へ移轉すると同時に、新裝をこらして面目をあらためるさうである。何よりも目出度い事で當事者で無い私も感慨なきを得ない。

正直のところ、私は築地小劇場が、斯う長つゞきしようとは想像しなかつた。大正十三年八月の「三田文學」に、私は「築地小劇場に就て」と題する一文を載せた。文中、此の事業の繼續の困難なるべき事を繰返して述べたが、その時肚の中では、どうかして長つゞきして貰ひ度いものだが、たぶんつゞきはしないだらうと考へてゐたのだ。その爲めにも言葉を強めて、此の劇場の使命を說き、存續が短かければ、發生の意義の少ないことを說いた。何故ならば、此の劇團は自由劇場のやうな既成俳優の研究やうでだめしとは違つて、全く新しい領土を開拓すべき新しい俳優を養成しなければならないのだから、正統なる訓練を授けるのに長い時間を必要とする。近代劇は斯ういふものだといふ手本を示し、觀客を教育して行く使命も、此の劇團に負擔させて考へた。それには、今迄いくつもあらはれた素人芝居類似の小劇團のやうな泡沫的存在では駄目なのである。

明治の末期から今日迄、いつたいいくつの小劇團が存在したか。どれもこれも立派な宣言をして生れ出たが、すこやかに成長したものがひとつでもあるか。何某劇團第一回公演といふびらを

見る事は度々あつたが、第二回公演の數は少なく、第三回とつゞくものは、十指を越るか越ないかでは無かつたらうか。それでは、舊劇の方のすきしやが、眞白に塗つてあらはれたがるたぐさみ芝居と大差が無い。成長も發展も無く、たゞ其の日限りのいい氣持を演者自身が味はふばかりだ。

私は、泡沫的小劇團を罵るつもりは無い。いかに此種の事業が困難であるかを實證したいのである。俗衆のよろこびに迎合する仕事で無い限りは、多大の忍苦が必要である。面白づくでは駄目だ。「築地小劇場に就て」の中で、私は當事者に不快を與へはしないかをおそれながら、執拗に忍苦の必要を力說した。全く長つゞきしさうに思はれなかつたからである。

何故永續しまいと考へたかといふと、第一には經濟問題である。築地小劇場は他の小劇團と違つて、小屋を持つてゐる強味はある。たぶん、その建築費は土方與志氏の負擔したものであらう。しかし、かういふ性質の劇團の興行が、商賣になり、儲かる筈は無い。收支相償ふ事は到底望めない。僅かなる例外は別として、大體は興行毎に損をするものと見たければならない。しかも、その損失は大きいであらう。さうすると、餘程の資源か無くては出來ない仕事だ。世の中の人は、金持や貴族に對しては常に眼がくらんでゐる。或者はひどく尊敬しすぎ、或者はむげに憎み過ぎ

る。親の作つた金ならば、なくなしたつて平氣ぢやあないかと、事もなくいひ捨てたがるところだ。だが、冷靜に考へれば、親讓の金なればこそ、使ひにくい場合も多いのである。出資者が貴族だといふ事も、仕事を困難にするひとつの原因に數へられる。華族は皇室の藩屛だといふ。その行動には常にうるさい監視がついてゐる。わづらはしい殼を脱しようとしても、周圍の壓迫は容易に讓るまい。そのうるさゝは、到底吾々平民の想像出來ない所であらう。さういふ不自由な境遇の人が、つい半世紀前迄、河原乞食とまで罵つてゐた階級の仕事に身を投じようといふのだ。お家の大事とばかりに、引とめようとつとめるに違ひ無い。世が世ならば、三太夫の一人位は、切腹して諫止する程の出來事である。それを押切つて敢行する勇氣は、尊敬に値するが、勇氣はありあまつても、資金には大凡限りがあるであらう。そして興行が儲からないとすれば、壽命は長く保つまい。それが第一の心配であつた。

第二には、內部の人の結束である。かんじんの小山內先生に對して、私は此の心配を持つてゐた。度々いふ通り、先生は劇文學者として、演出者として、世界の舞臺に出して恥しくない人だ。殊に先生の演出に對して、私は深く信賴するものである。しかし、先生の根氣には信賴出來ない。先生を一口にうつり氣だといふのはあたらないかもしれないが、幼童の如きひとむきの心を以て、

新奇を追ふ傾向が著しく、意地を張つて一所に足をふんばつて立つ事は、先生の得意としないところだつた。先生は、一でなければ二だといふ議論を好む。あれ程細かく心の働く人でありながら、議論にはゆとりが無い。何か新しい事に熱中すると、それ丈が尊く、今迄のものは一切つまらないものゝやうに振捨てようとする。一でもあり、二でもあるとはどうしても考へない。一と二の中間のものは認めようとしない。たから、その時の自分の意見に反對のものにぶつかると、さばさばした態度をとる事をいさぎよしとして、どつちでもいゝ事柄でも妥協しない。その上、先生には宣言癖がある。何か仕事をはじめる時には勇しく宣言する。その仕事をうつちやる時もまた勇しく宣言する。宣言の手前、愈々一でなければ二の態度に出たければならなくなる。少しの無理は忍んでも、最初の目的を貫く爲めに進まうとする我慢が乏しいやうに思はれる。築地小劇場は、小山内先生あるが爲めに重きをなすと同時に、小山内先生あるが爲めに長つゞきしない事はないか——私にはさういふ疑があつた。

ところが、事實は美事に私の心配の無用なる事を證明して、築地小劇場は滿四周年を迎へたのである。しかし、その四年は決して樂な四年ではなかつたであらう。我國の演劇史の幾頁かを占るに足る立派な仕事をした裏面には、人の知らない苦痛があつたに違ひ無い。

私が一番心配した營業成績はどうなのか、ほんとの事は知らないが、僅かなる例外を除いて、四年間の大概は、損失を繰返してゐたものと見て差支無いであらう。滿員になつたところで、五百人位しか入るまいと思ふ觀客席の十分の一そこそこの入りの夜も度々見た。立派な小屋、パノラマ式の背景、いゝ男振の役者、綺麗な衣裳、甘いか賑かかどつちかの筋立て――さういふやうな、今の大衆客の喜ぶものは、ひとつも築地には無いのだ。其處には汚ない小屋、質素な背景、ぶこつな役者、粗末な衣裳、むづかしい脚本がある。賣物になるものが無くて、どうして客が來るものか。

いつたい今の芝居の大多數の客は、役者を見る客で、戯曲の演出を見る客では無い。藝を見る客さへ極めて少ない有樣だ。だから、活動役者の實演程大衆を喜ばせる事は無い。

さういふ大勢の中で、築地小劇場は役者を見せる芝居をしてゐない。はつきりいへば、こゝでは演出を見せる事を主としてゐるのだ。だから、築地贔屓の人といへば、文學書生か演劇學徒に限られてゐる。營業成績のいゝ事を望むのは無理だ。

しかし、私が築地小劇場に感謝するのはこゝにある。物質的に酬ゐられざる事甚しい中で、決して妥協せず、どこ迄もよき選擇を經た戯曲の演出を主とし、劇場全體の人が、固い結束をもつ

て進んで行く。近代戯曲の古典とはしりとは、共に吾々の眼の前に豊富なる見本を展覽した。

築地小劇場は民衆の爲めに存在するといふやうな意味の事が、創設當時の小山内先生の宣言の中にあつたと記憶する。民衆とは何であるか、その意味の解釋次第で右にも左にもなるが、最も普通の意味に解すれば、大多數の世間の人と見ていゝのであらう。果してさうとすれば、民衆は築地小劇場などに引かれる心を持合せてはゐない。民衆の要求する芝居は、立派な小屋、パノラマ式の背景、いゝ男振の役者、綺麗な衣裳、甘いか賑かかどつちかの筋立てだ。澤田正二郎か、五九郎か、活動役者の實演で充分堪能するのである。

私は、築地小劇場はその道の專門家の爲めに存在すると宣言して貰ひ度い。過去四年間のこの劇場の功績も、その意味に於て偉大なものだと思ふのである。恐らく、築地贔屓の演劇學徒は、みんな同感であらう。築地あつて、はじめて吾々はよき戯曲のよき演出を見る事が出來るのである。

それは極めて地味な仕事だ。酬ゐられない仕事だ。にも拘らず、演出者も、俳優も、舞臺のかげで働く人も、切符を賣る人も、受附の人も、尊い犧牲を拂つて押通して行くのに對しては、たゞたゞ感謝の外は無い。

たぶん、築地小劇場に働く人は、些少の報酬しか得られないのであらう。殊に俳優は、劍劇か駄洒落喜劇か、活動寫眞に走れば、いくらでもみいりのいゝ仕事で、且喝采を身に浴びる事がある筈なのに、じいつと根をはやして、こつこつと暗い舞臺で働きつゞけてゐるのは偉い。その上、築地小劇場は、前にもいつた通り、演出本位の劇團だ。役者個人のはなばなしい存在を明かにする機會は、原則として與へられない。嚴しい訓練の下に、一團體としての演技を見せる事に甘んじなければならない。舞臺の上の花形とならうといふ誘惑は隨分強いものであらうが、此の劇場の俳優は、その慾望を強情に斥けてゐる。

今、日本では思想國難が叫ばれてゐる。それは主としてマルクシズムかレエニニズムに對する恐怖であらうが、それよりも深く人心をうばつたのは、映畫とヂヤヅが代表する亞米利加流の享樂主義だ。亞米利加は底の知れない富力に惠まれた大國で、映畫の亞米利加、ヂヤヅの亞米利加は僅かにその國の一面にしか過ぎない。山の頂迄も耕作されてゐる日本とは違つて、未だ神經の通はない山や廣野が横はつてゐる。そこに住む人間だ。あらゆる方面の活動的な元氣者ヤンキイは、頗る健全な肉體と強い神經をもつてゐて、馬鹿々々しくはでな映畫の世界や、素晴しく騷々しい音樂の世界に在つても、新鮮なる空氣を呑吐するやうに平氣なのだ。彼等は、映畫や音樂に

魂を奪はれる程纎細には出來てゐない。ありあまる土地を所有する國民には、敗頽的の心持はまだ知られないのである。それに引かへて、この國では、忽ち全生活をあげて映畫とヂヤヅの支配を受けんとしつゝある。安つぽい享樂に根底から動かされてしまふのである。恐るべき事には、日本程全國的に流行の波動の及ぶところは無い。はやらないとか、人氣が無いとかいふけぶりを見てとると、忽ちみきはめをつけて轉換する。何かはじめて、はなばなしい喝采をうければよし、さうでなければ素早く見捨てゝしまふ。是が非でも、石に噛りついてもやり通すといふ精神は稀薄である。

かういふ時代にあつて、我が築地小劇場は強情の美德を發揮した。感謝せざるを得ないではないか。

感謝の意を明かにする爲めに、私はひとつの提議をし度い。それは、吾々築地贔屓が擧つて集つて、お祭を催すのである。恰もよし、此の劇場の新築落成し、近く新舞臺が開かれようとしてゐる。この思ひつきを、私は講演會の日の話の中にとり入れた。その時は、築地の名女優山本安英さんの名を特に拜借して、同孃の不斷の努力を表彰してはどうかといつてみた。築地小劇場には多くの尊敬すべき俳優がゐる。汐見洋氏や友田恭助氏が、一歩々々築いて行つた技藝の如きは

特記すべきである。その外の人達も、一團として感謝すべきであるが、お祭ははなやかなるをよしとする。卽ち山本さんを引出した。

勿論私は山本さんのひとゝなりを知らないのだが、あの人の舞臺を見ると、この人こそ強情の象徵の如き氣がするのである。自由の國と自慢する亞米利加の大都、紐育の灣頭には自由を象徵する女神の像が立つてゐるが、築地小劇場に於る山本さんは、同劇場の強情の美德を象徵するやうに想はれる。

山本さんは肉體的には惠まれてゐない。近代劇を演じるには、もつとすこやかに發育した肉體を要求する。山本さんの顏は、玉子に目鼻の舊式な型に近く、決して近代的では無い。それにも拘らず舞臺の上に白熱した美しさを示すのは、あの人の持つてゐる意志の力が、すべての缺點を壓倒してしまふからであらう。山本さんには感覺的の魅力は乏しい筈だ。感情的の藝風では無い筈だ。しかも、意力を以て熱情をつくり出す。完全に成功を收める時の如きは、つめたい大理石が人肌にあたゝめられて汗ばんで來るやうな不思議な感覺を示す。

私は時々、築地小劇場歸りの山本さんと乘合自動車に同乘する事がある。女優といふとはでなもの、はなやかなものと世間ではきめてゐるが、それはそこいらのお妾女優の事で、山本さんは

極端に質素だ。小柄で、顔色が冴えず、少し猫背のやうな感じがあつて、此の頃の銀行會社商店の婦人事務員よりももつとくすんでゐる。込合ふ車内で、伏目になつてちひさく腰かけてゐるが、そのくせ何處となく強い精神力を身に備へてゐる。恰もそれは、墓場の如く薄暗い築地小劇場が、今日の劇界に於て一番しつかりした仕事をしてゐるのと同じ姿だ。私が、築地小劇場に對する感謝の心の發表を、山本さんの名をかりてしてはどうかといふ所以である。

お祭は賑かなのに限る。山本さんを花車に乘せて銀座を練るのもひとつの景色たが、その方の事は若い人の工夫に一任して、私は築地小劇場の改築を機とし、感謝の意を表する爲めに何か催してはどうかといふ事を提議する。(昭和三年九月二十八日)

――「三田文學」昭和三年十一月號

「たのむ」と「大寺學校」

築地小劇場は、新築後第二回目の十一月興行に、里見弴氏の「たのむ」と久保田万太郎氏の「大寺學校」を並べて上演した。いづれも此の特色ある作家の代表的戯曲と稱して差支ないものである。

里見氏も久保田氏も、現代の作家の中で、最もうでの冴えた、所謂玄人筋の作者である。思想或は主題を文字につゞる事に急で、その表現された姿には細かい注意の行屆かないといつた側の作家とは違ふのである。いづれも、描寫した場面と人間に神經を通はせ、如實の印象を招來する丈の手腕を鍛へあげた人である。

けれども、此の二作家は、決して議論の雄では無い。就中久保田氏の如きは、評論家的天稟に惠まれざる事極めて甚しい人である。此の人程論理の道を辿らない作家は、現代稀である。里見氏の方は、評論家的形式はとらないが、頗るつきのお談義好(だんぎずき)である。まごゝろを說き、愛憎不二

を說き、多情佛心を說く事恰も道學者の觀がある。何事にも、世俗人の常識から一歩進むか、逆に行くか、用ひる手は何にしろ、兎に角己の行ふところを、一般人とは違つた準繩ではかり、之を人に說き聽かせて、うなづかせなければ承知しない。戯曲を書くにあたつても、先づ戯曲制作の態度を明かにしてかゝつた。

　小說家里見弴氏は、戯曲と小說とは全然別の心がけをもつて制作すべきものであると宣言した。簡單に作者のいふところをつまめば、讀む戯曲でなく、上演用戯曲の制作を心がけてゐるのである。小說はその儘文學的價値を備へてゐるが、戯曲は役者や舞臺上の設備と綜合されて、はじめて生きて來るといふのだ。だから、小說の場合には作者が全責任を負ふが、戯曲の方になると、上演のあかつきに自分の期待するところがうまくしいかされる事をこそ望め、讀物として直接讀者に訴へようとは考へないのである。

　そんな事はあたりまへではないかと云ふ人も多いだらうが、これが今の文壇の新戯曲制作者の常識とは違ふのである。今の多くの人は、戯曲制作の場合にも、主として文學的價値を目標として力を盡してゐる。この態度の相違から、里見氏の戯曲のひとつの特徴が生れた。おそろしく綿密なト書によつて役者のしぐさを縛つてしまふ事である。

里見氏の場合に於ては、戲曲は獨立したる文學完成品では無く、必ず役者のしぐさによつて生かさなければならないのだが、さりとて粗筋（あらすぢ）丈を書いて、する事は役者の自由に任せるといふ態度はとらない。常に鋭い眼玉を光らして居る此の作者は、ぼんくらの解釋に一任して默つて見てはゐられないのである。何から何迄氣のつく、人の仕事のあらのよくわかる人だから、自分の指定よりいゝものは無いと思ふ暴君の心持も強いのである。

ヂョオヂ・バアナアド・ショオの戲曲は、本文よりも序文とト書の方が面白いと、口の惡い批評家が評したが、ショオのト書は細かいけれども、必しも戲曲上演の際に缺く可らざるものでは無い。これに反して里見氏のト書は、本文よりも遙かに必要な役目をつとめ、一行と雖も削除する事を許さないものである。恰もそれは建築技師の引いた設計圖の如くきちんとして、ぬきさしならぬものであると同時に、つとめて文學的餘情を殘す事を避けてゐる。

反對に久保田氏は、戲曲の文學的價値を重んずる事誰よりも深いやうである。此のすぐれたる散文詩人は、小說の場合に於けると同樣、戲曲に於ても情緒的寫實主義に根ざしを置いて、やがて亡び行く階級とその周圍の風物を描く事を中心興味としてゐる。勿論當今屈指の芝居にあかるい人だから、人間の出入、會話のやりとり、殊に巧妙なる間（ま）を保つ事で、舞臺に乘せてもあくび

を催させるやうなへまはやらないが、しかし上演價値よりも文學價値に重きを置いてゐるのに疑が無い。その結果、里見氏があれだけの小說家のうでを殺して、戲曲は小說とは違ふのだといふ事を作中意識に入れてかゝつてゐるのと反對に、久保田氏の戲曲は屢々その小說と同じ效果をもたらし、地の文のかはりにト書があるといふ事の外には、餘り甚しい差異を見出さない場合もあるのである。

二作家の態度の相違は當然その作風を右と左に分たねばならぬ。里見氏は或意味に於て役者本位の制作態度であるから、自然役者をいたはる氣持が強く働いてゐる。役者のしいゝやうに考へてやる。うごきをつけてやる。大向から聲のかゝりさうな見せ場さへこしらへてやる。事も細かなト書でしぐさを指定するのもその結果である。但しあんまり氣のつく姑の親切は、嫁にとつて却て身うごきのとれない事にもなるのである。

芝居にあかるい久保田氏は、むろん役者の事も充分頭に入れてゐるのだが、それよりも自分の詩情をはぐゝむ事に一生懸命である。元來久保田氏は、舞臺の上の芝居は好きであるが、日常生活の上に於ては芝居がかつた事を拒否する人である。泉鏡花先生の好んで描く芝居氣のある江戸子の如きは、久保田氏が意識的にも江戸子の範疇から追出さうとしてゐる種類に屬するのである。

宣傳好(すき)の現代人、新しがりの現代人、議論好の現代人は、いづれも此の詩人の神經がつきあふ事を拒むものである。したがつて、さういふ人間の寄合つてまき起す闘爭は、久保田氏の面をそむけるものである。靜かなる情緒世界にはかない詩を見出す事が此の詩人の天職なのだ。戯曲には必ず意志と意志の衝突があると考へる一派の人から見れば、これ程非戯曲的戯曲は無いのである。芝居のこつをよくよく承知しながら、芝居がゝりにならないやうに、殊更めかした事の無いやうに、目立たないやうに、控目にと心がけて制作するのである。それが、久保田氏のみづから好む詩境を完全に保つ唯一の道なのだ。

些か餘談にわたるけれど、久保田氏の纖細なる描寫に導かれて淡い感傷世界に遊ぶ人々は、十九貫だか二十貫だかある大兵肥滿の作者を目のあたりにみて、屢々驚きの聲を發するさうであるが、姿體にこそ微塵も纖細感を伴はないけれど、久保田氏のひととなりは、作品の通りあかるく、柔かく、且一脈の寂しさを湛へてゐる。私はおつきあひ既に二十年に及ぶのだが、いかに亂軍の酒席に於ても、曾て一度たりとも氏の口から猥談がましい事をきいた事が無い。此の事は、いかに此の作者がヴアルガリズムに遠いかを證するものである。

私は冒頭に、「たのむ」と「大寺學校」は共に二作家の代表作と呼んで差支ないものだと云つた。

役者のうごきをまつて、はじめて生きて來る戯曲で、例のト書が姑の眼を光らせてゐるのである。その上に里見宗の御題目なるまごゝろが、作の主題となつてゐる。

「たのむ」の方は、里見氏の聲明する戯曲制作の態度をはつきり示し、文學的作品と見るよりも、役者のうごきをまつて、はじめて生きて來る戯曲で、例のト書が姑の眼を光らせてゐるのである。

まをとこを殺した老車夫が、深編笠、手錠、腰繩で實地檢證の爲めに我家へ連れて來られると、十二三も年下の女房は、更に十二三も年下の男と、長火鉢を向前に酒をくみかはしてゐる。其の場で老車夫は、姦夫を殺した當時のありさまを、いちいちやつて見せなくてはならない。老車夫の眞劍な、その癖おそろしく人のいゝ肚の中は、鼻つぱりの強い新規の男の心にもぴつたり感じられて來る。男は湯呑に酒をついで老車夫に飲ませる。ぢいさんも感迫つて泣きながら「たのむよ、お前さん！」と、ひたすら女房の事を賴みながら又引かれて行く。

此の一幕物は尾上菊五郎の爲めに書かれたものださうだが、どういふわけか菊五郎は未だ手がけない。老車夫の心持も充分深いものであるが、まをとこ殺しの實況を物語で見せるしぐさの多い芝居で、菊五郎には持つて來いのものだ。尤も、中村吉右衛門或は井上正夫でも別種の味が出て悪くないと思ふ。

兎に角大向うけもする見せ場があり、且まごゝろで泣かす事も出來るのだから、作者が意圖す

る上演價値は充分にある。私が代表作と稱する所以である。

たゞ、玆に多少氣になり、又多くの人から非難されるだらうと思ふのは、あゝいふ形式の實地檢證は現實には行はれないといふ事だ。繪そらごとだ。しかし、現實に行はれない事を芝居は昔から平氣で行つて來てゐる。里見氏が、實際には無い事だと知りつゝ敢てしたのか、知らずにしたのか、どつちだつて構ふものかと肚をきめてかゝつたのか、審かにしないが、多分どつちだつて構はないといふ態度に出たものと想像する。その場合「たのむ」のまごゝろを強く表示する爲めには、不自然を敢てする事は許されるものと度胸を定めたのであらう。假にそれに相違ないとして、果して斯ういふ遣口が許さる可きものかどうか、抽象論としてはどつちからも論理の道を辿る事が出來るが、私は個々の作品について、その取扱はれる主題によつて決定すべきものと考へるのである。そして「たのむ」のやうな外面形式は寫實にのつとりながら、實はひとつの理想派の作品と見る可きものには、此の不自然を許してもいゝと思ふのである。

根本の不自然を犯しながら、作者の寫實的手法は隅々迄屆いてゐる。それは菊五郎にもつて來いのこまかさで、人目につくかつかないかのかねあひを保ちながら、ちらちらと鋭い光を見せて行く冴えたものだ。作者は頭の中に、うで達者の役者を置いて書いてゐる。此のうでの方面に於

では菊五郎がよく、まごゝろの方面では吉右衞門のものといつてよさゝうに思はれる。

ところが築地小劇場では、丸山定夫が主人公の老車夫をつとめるといふので、私は作者並に吾々ファンの期待にかなふ出來榮は望めまいと思つてゐた。丸山はうでの役者では無い。彼は歌舞伎の臭味を持つてゐないといふ事を第一の強味とする役者である。それが築地小劇場の大立物の一人にしたのだ。この事は一寸面白い現象で、新劇團の素人役者と雖も、多くは芝居好の若旦那達が舞臺に立ちたがるのとさほど違はない心持で志願したのであらうから、音羽屋橘屋の聲色のひとくさり位は心得てゐるのが多い筈だが、丸山はひどい田舍訛で、到底勘平や與三郎はつとまらない柄だ。ところが飜譯劇だと、舊劇味はひどく邪魔になるので、その反動的の意味から、田舍まるだしが却て強味になる場合がある。丸山定夫の身についた粗野と野蠻と單純は、熱情につゝまれて時に效果をあらはす事は確かにある。しかし、うまいまづいを論じて、彼を下手だと稱するのは決してあやまりでは無い。

そこへもつて來て、演出者土方與志氏は、從來寫實的の演出を嫌ひ、本來作者が寫實的に書いたものまでも非寫實的に、時にはメロドラマ風にやつてのけた。さういふ場合、原作者の意圖を踏躙るのは、傳統的の技藝の何ものをも持たない役者が一番便利である。土方氏の演出の場合、

主役は大槪ひ丸山なのは此の理由に出るものであらう。

私はひそかにおそれた。里見氏の戯曲を表現派風に演じ且とぼけて見せはしないだらうか。ところが今度の「たのむ」では、私の心配は無益だつた。正道を守り、隅々迄行屆いた非凡の演出で、土方氏の傑作と稱すべきものだつた。

丸山定夫も頗る熱心に愼妙につとめた。まをとこをしようが何をしようが、遙かに年下の女房が可愛くて堪らないおひとよしの、とぼんとした人物を、情熱をもつて自分のものにした。姦夫殺の罪人となり、實地檢證の爲めに我家へ引張られて來て見ると、なつかしい長火鉢の前に能代膳をひかへて、我子程年の違ふ男がゐる。こいつは殺してやつた男の又おかはりなのだ。何とも名狀出來ない心持でゐるところから、人殺の實地をしかたで見せる段になると、俄かに興奮して、實際よりも芝居がゝりにうごく見せ場迄、丸山はうごきにとらはれて情熱を忘れるやうなへまはやらなかつた。こゝいらは素人のよさを充分發揮した。歌舞伎役者だと、うごきにいゝ形を見せると同時に、心を何處かに置忘れて來たがるところだらう。愈々最後の「ぢや、ほんとにたのむぜ！」「仲よく暮しねえよ。いゝか……」といひ殘して引かれて行くところまで、些かの遲緩も無かつた。平生頑張つたり、怒鳴つたり、舞臺を街上化する事によつて特徴を認めてゐた此の人に、

これ程の出來榮を示されたのは非常なる喜びであつた。

但し丸山定夫の老車夫が、里見氏の描いた老車夫かといふと、そこには多少の疑がある。里見氏の持前の鋭い描線は、丸山の持前の太い描線に變つた。しかし、その爲めに作者は決して損してゐない。里見氏の手法が兎角お芝居になりたがるところを、全然免れる事が出來たからである。或は此の老車夫は、丸山定夫一代の當り役かもしれない。

小杉義男の新規のいろをとこは、誰がやつてもやりにくい役で、あれまでにこなせればよしとする外はない。たゞ土方らしくなく、車宿の挽子で明大の專門部に通つてゐるといふ感じがあつた。

田村秋子の女房も及第點を與へていゝ。慾をいふと、この人の利口な目つきが、こまかく働き過ぎた。もつと思ひ切つて無智らしくありたかつた。けれども、そんなら誰がこれよりうまくやるかといふと、一寸右に出る人間は考へられない。同じ築地畑の山本安英では貞操を堅く守つて經木眞田(きやうぎさなだ)の內職をしてゐさうだし、村田嘉久子は器用にやつても、田村秋子程の實感を出す事は覺束ないし、菊五郎が老車夫ならば鬼丸、吉右衛門ならば時藏だらうが、比べて想像して見て、田村秋子の方に歷々たる勝算がある。たゞ新派の芝居として、井上の老車夫に喜多村をして女房

たらしめば、うまい味を見せはしないかと想ふ丈である。

その外島田敬一の豫審判事をはじめ、檢事も、裁判所書記も、刑事も巡査も、近所の男も、築地小劇場一流の訓練があらはれて、一人芝居をする根性を出さず、一團としての統一ある演技を見せてくれたのには敬服した。

たゞ、家の外の群集の物音と、高窓から顏を出す町つ子は騷々しかつた。これは作者の指定なのだが、寧ろ窓から顏を出すやうな事はしないで、出入口に殺到する事にした方が、家の內部の緊張感を亂さないでよかつたらうと思ふ。

又著しくお芝居になつて面白くなかつたのは、襖に新しく貼つてある新聞紙をはがすと眞黑く血痕があらはれ、それを見て老車夫が震へあがる段どりで、作者の好みの惡い方面を代表したものだつた。

時にはつけを打ちたくなる程舊劇仕立の里見氏の戲曲に對して、久保田氏の戲曲は水の流れるやうにゆるやかなテムポをもつてはじまり、且終るのである。

「大寺學校」は四幕五場の大芝居である。一體久保田氏の作品は、小說でも戲曲でも、はつきりした主題をつかんで、これを賣らうとする傾向のものでは無く、情緒的寫實主義の手法をもつて、

時勢の推移に押流され、取殘されて行く人々の姿を描き、風物詩的情趣を湛へる事を得意とする。然るに「大寺學校」は、久保田氏の作風にひとつの重要なる進轉機をもたらしたもので、明治年代に存在した代用小學校の必然的に亡びて行く運命を描き出した。此の作をチエホフの「櫻の園」に比した新進の批評家があつたが、その聯想には無理が無い。たゞ久保田氏は、矢張從來の通り、亡びてゆく學校の校長の一身に中心興味を置いて、社會的變革の潮流を見る事には遙かにうとかつた。

大寺學校の校長大寺三平は、義理人情の世界に育ち、それに信頼して安んじてゐる好人物である。彼は既に年老い、靜かに平凡な餘生を終れば、それで滿足すべき筈の人間である。しかし、時勢の潮はかゝる微力な存在に何等の憐憫をもかけない。代用學校は、三平の氣づかないうちに、亡ぶ可き運命に迫られて來てゐるのだ。

淺草の詩人、久保田氏は、此の題目を捉へながら、決して社會的批判を加へるやうな事はしない。所謂テエマ物にはしなかつた。氏一流の詩的寫實主義によつて、はかない人事を描く事に感傷の心を托してゐるのだが、しかし少なくとも此の戲曲の內容と構成の上に、從來のものよりも深き認識をもつて世態の變遷を把握した事は明白である。「大寺學校」が久保田氏の作品中重要な

る地位を占る所以もこゝにあるのだ。

最初に云つたやうに、里見氏が戲曲と小說とに對して、夫々違ふ制作態度をとつてゐるのに反して、久保田氏は文學的效果を第一のものとしてゐる。里見氏が意識的に、あからさまに芝居らしさを心がける時、久保田氏は芝居らしくない手法を選んで、しかも芝居にしあげようとしてゐる。「大寺學校」の如きも、同一材料を他の形であらはした小說「くづれやな」よりも、遙かによき小說的價値を持つてゐて、しかもしつかりと芝居のこつをつかんだものである。

由來久保田氏は英雄豪傑義人節婦の類を筆にした事が無い。さういふ芝居がゝりの人間の存在を喜ばないのだ。氏の親しく呼びかけるのは町中の平凡人である。そして、すべてが善人だ。惡人は取扱はれない。

「大寺學校」には澤山の人物が出て來るが、どれもこれもいたる處の町内に住むよき市民である。大した野心も無く、つゝましく暮す人々である。

さういふ好みをもつて貫く戲曲だから、里見氏の戲曲のやうに役者のうごきで見せたり、或箇所でぐうんと人の心をついてやらうといふやうな意圖は毛頭ない。久保田氏の望むところは、自分のいつくしむ詩情を、役者にも觀客にも感じさせる事であらう。

しかし、久保田氏の詩境が靜かなものである丈に、役者にとつては隨分むづかしい仕事に違ひ無い。殊に此の作者の戯曲は、會話と間の戯曲だといふ事が出來る程で、會話のやりとりがまづいか、間を活用することが出來なかつたら、致命的の失敗になるのだ。東京人は敏感だから、お互の會話は半分いへば用が足りる。久保田氏の戯曲の會話は、一切切口上を避けた、調子できかせる式に出來上つてゐる。ところが、築地小劇場の役者は、概してせりふのうまみを持つてゐない。平生テムポの早い、息切れのするせりふを口にしてゐる連中だから、第一にこれが難儀であらう。又いつもの飜譯劇では我慢の出來る田舍訛も、こゝでは許し難くなるのである。これは大なる心配の種だつた。

ところが、築地小劇場の訓練は、頗る立派に效果をあらはした。萬事叮嚀綿密な演出で、これも亦青山杉作氏の傑作と見る可きものであつた。演出者も役者も、平生身に遠い久保田氏の世界に、敬虔なる態度で入つて行つた。みんなが己を殺して、作者の詩情を尊敬した。

役者は、むづかしい會話をかなりの味をふくませて驅使した。就中うまく、躊躇無く滿點を與へていゝと思ふのは汐見洋の尋常科受持の先生で、つゞいては友田恭助の校長大寺三平である。

此の二人は築地小劇場の生んだ名優であるが、四幕目に見せた意氣の合つたうまさは、技藝の正

道を奧深く進んだものであつた。舊派と新派とつつくるめて、此の場を此の二人程完全に演じ得るものは想像出來無い。何といふ謹嚴な藝だらう。技藝の力をもつて私を打つ事、かくの如く深きは稀であつた。

伊達信の高等科受持の先生も惡く無かつたが、此の人特有の近代的の鋭さが、久保田氏の描いた時代から遠くはなれさせた。あれ程の神經は必要が無い。

時代の相違をいへば、汐見友田の二名優を除く殆んどすべてが、大正人種である事を免かれなかつた。代用學校などゝいふものゝ存在した事を知らない若い人々にとつて、無理の無い事かもしれない。その爲めに、完全に作者の好む時代をあらはした四幕目と他の三幕との間に、このところ二十年さかのぼり申候といひ度いやうなへだゝりを感じさせた。祝賀會の發起人や世話人、裁縫の弟子、校長の姪、いづれも久保田氏の描く人々よりも新しかつた。その人々の中で、伊藤晃一の發起人はすぐれた出來榮だつた。

作者に對して私のいひ度い事は、「大寺學校」は傑作には違ひ無いが、四幕物の必然性に乏しく、一幕物のつなぎ合せらしさを感ぜしめる憾がある。それは久保田氏の戲曲が水平線に副つて進行して行くばかりで、事件に起伏の無い爲めでは無いかと思ふ。たとへば二幕目の幕切の如きは、

あれから先の人々の心のかけちかひを、突込んで見せて貰ひ度いのである。あまりに餘情を殘さうとする爲めに、どの幕切も同じやうな強度の足りない感じをとゞめた。

餘情といへば、久保田氏の好きな風物詩的效果を助ける爲めの、チャルメラや物賣の聲や虫の音や雨の音は、一幕物の場合には役立つても、四幕五場の大物には寧ろ餘計な景物である。

いろんな事をいふもの丶「大寺學校」は久保田氏の傑作に違ひ無く、作者が描く世界に、わびしい人生詩を味はふ事が出來た。うまいものだなあと、心の底から感じる事が出來た。

私は、里見久保田二氏の、夫々にむづかしい戯曲を、美事にしいかした築地小劇場の演出者と役者の並々ならぬ努力に感激して、再び劇場に足をはこんだ。同じ芝居をつゞけさまに二度見る事は、私には曾て無い事だつた。(昭和三年十一月十八日)

——「三田文學」昭和三年十二月號

鏡花世界瞥見

鏡花泉鏡太郎先生は明治六年十一月四日加賀の國金澤市新町に生る。父は清次、政光と名告る金屬の彫工にて、母は鈴、江戸下谷の出生、葛野流の鼓の家、中田氏の女、能樂師松本金太郎の小妹なり。

十一歳の時母にわかれ、二十二歳にして父に死別す。

明治二十三年十一月上京、二十四年十月尾崎紅葉先生の門下たることを許され、二十六年五月「冠彌左衛門」を京都日出新聞に連載す。年僅に二十一。

泉先生の文學上の活動は此の時に始まつて、爾來三十有餘年、今なほ不斷の制作を續けて居る。明治文學はじまつて以來、先生の如く制作期の久しきは無く、藝術作品の質に於てすぐれたると同時に、量に於ても壓倒的に群を拔いてゐるのは、その比を見ない所である。

父方も母方も藝術家の血筋だつた事は、先生の藝術至上主義をはぐくむ上に、決定的の運命であつた。先生の藝道に對する信仰は、いにしへの名工の如く深く、今日の幾多の文學志望者が、即成出世の方便と考へて居るやうな不心得はもつての外の事である。

「冠彌左衛門」は甚だ不評判だつたさうだ。先生みづからその事を記していふ。

明治二十六年五月、京都日出新聞に「冠彌左衛門」を連載す。うけざる故を以て、新聞當事者より、先生（紅葉先生の事）に對し、其の中止を請求して止まず、狀信二十通に餘る。然れども少年の弟子の出端を折られむをあはれみて、俠氣勵烈、折衝を重ねて、其の（完）を得せしめらる。

尤も此の作は、翌年轉賣されて北陸新報に掲げられ、大に喝采を博したといふ。今日これを見れば、此の時代物は作品としては極めて幼稚で、その後間もなく發表された同じく時代物「亂菊物語」「祕妾傳」などと共に、泉先生の作中最も特色の無いものである。

作者の親しく物語るところによれば、北陸新報に連載中、毎日その社の前に佇み、掲示板に貼出される新聞紙上の自作を、心をふるはせて讀んだものださうだ。文學にこゝろざす者にとつて、今日よりももつと、自作の印刷になる事のむづかしかつた時代だから、その喜びと心配の入りま

じつた感情は、さこそと推察されるのである。

此の年少の作者は、翌二十七年には、早くも「豫備兵」「義血俠血」の如き、今日もなほ多くの人の記憶に殘る作品を發表して、非凡の才能を認められた。

日清戰爭當時は、國を擧げて外敵にあたる意氣の最もあがつた時代だが、文學は全く顧みられなくなつた。藝術は平和の世でなければ尊重されない。國家的社會的不安の時代には、花より團子がもてはやされる。當時一流の大家も、米鹽の代に窮する事極めて甚しかつたといふ事である。ましてや未だ大に賣出したとはいへない泉先生の如きは、全く衣食の途を見出し得ず、鄕里金澤の舊城趾の御堀に身を投げて死なうとおもひ詰めた。

當時成つたものに「鐘聲夜半錄」があるが、これを鄕里から紅葉先生に送つたところ、編中の人物を描く筆に鬼氣の迫れるを看て取つて、師は其の愛弟子の命を捨てん事をあやぶみ、書を送つて激勵した。

(略)「鐘聲夜半錄」と題し例の春松堂より借金の責塞に明日可差遣心得にて此二三日に通編刪潤いたし申候巻中「豐島」の感情を看るに常人の心にあらず一種死を喜ぶ精神病者の如しかゝる人物を點出するは畢竟作者の感情の然らしむる所ならむと私に考へ居候ひしに果然今日の

書狀を見れば作者の不勇氣なる貧窶の爲に攪亂されたる心麻の如く生の困難にして死の愉快なるを知りなどと浪りに百間堀裏の鬼たらむを冀ふ其の膽の小なる芥子の如く其心の弱きこと苧殼の如し（略）破壁斷軒の下に生を享けてパンを咬み水を飲む身も天ならずや。其天を樂め！　苟も大詩人たるものはその腦金剛石の如く、火に燒けず、水に溺れず刃も入る能はず、槌も擊つべからざるなり、何ぞ況や一飯の飢をや。汝が金剛石の腦未だ光を放つの時到らざるが故に天汝に苦楚の沙と艱難の砥とを與へて、汝を磨き汝を琢くこと數年にして光明千萬丈赫々として不滅を照らさしめむが爲也（略）汝の腦は金剛石なり。金剛石は天下の至寶なり。汝は天下の至寶を藏むるものなり（略）近來は費用つゝきて小生も困難なれど別紙爲換の通り金三圓だけ貸すべし倦ず撓まず勉強して早く一人前になるやう心懸くべし。

此の祕藏の手紙を筐底より取出す時、泉先生は眼底に感涙を湛へ、必ずおし頂いてから披見される。

厚きなさけの籠る師の手紙は、年少の弟子の死を希ふ心を烈しく鞭打つた。金剛石の腦は艱難の砥に磨かれて、光明千萬丈、數年をまたずして赫々の光を放つに至つた。

その頃「新小說」と對峙して第一流の文藝雜誌だつた「文藝倶樂部」に「夜行巡査」と「外科室」の出

たのは二十八年の事で、清新にして力ある文體は先づ人の目を奪ひ、主題を把握する事の強く、熱情を以て至純の感情を描いて世人に是非を問ふ挑戰的態度は、感傷的寫實主義時代の文壇に大なる驚異をもたらした。作者は忽ち新進作家中の第一人者に數へられ、潑溂たる制作力は潮の如くあふれて來た。

先生みづから二三の作品の名をあげて、

世評皆喧し。褒貶相半ばす。否、寧ろ罵評の包圍なりし。

と書いて居るが、それは一部分眞實で、一部分は謙遜に出る嘘である。褒貶相半ばした事は本當であらうが、之を貶す側の評者と雖も、最も注目すべき作家なりとした事は疑ふ餘地がない。

此の新進作家の特異の作風に對して、時の批評家は觀念小說或は深刻小說の名を與へた。尤も、廣津柳浪、川上眉山の如き先輩も此の派の中に數へられた。觀念小說とは、當時の文壇の主流をなす寫實主義に對して、ひとつの理想主義と見る事も出來るし、後年大に流行(はや)つたテーマ小說の先驅を爲したものと見ても失當で無い。例を泉先生の出世作にとれば、「夜行巡査」は職務の爲めには人情も、恨も、愛も捨てゝ一身を犧牲にした。その結末の數行を拔けば、觀念小說の何たるかは容易に了解する事が出來るであらう。

あはれ八田は警官として、社會より荷へる負債を消却せむがため、あくまで其死せんことを、寧ろ殺さむことを欲しつつありし惡魔を救はんとし、氷點の冷、水凍る夜半に泳を知らざる身の、生命とゝもに愛を捨てぬ。後日社會は一般に八田巡査を仁なりと稱せり。あゝ果して仁なりや、然も一人の渠が殘忍苛酷にして、恕すべき老車夫を懲罰し、憐むべき母と子を嚴責したりし盡瘁を、讃歎するもの無きはいかん。

もうひとつなぞつて「外科室」を例にとると、これは醫科大學の學生が、植物園の内で高家の姫を見る。やがて九年、醫學士は病院の外科々長になつてゐたが、疾患を癒すべく雪の肌に刀をあてた美しき伯爵夫人は、彼が心に忘れぬ植物園内の姫であつた。夫人も醫學士をおもつてゐたので、みづから胸にあてた刀に手を添へて、乳の下深く掻切つた。醫學士もその後を追つたのである。

青山の墓地と谷中の墓地と所こそは變りたれ、同一日に前後して相逝けり。

語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。

今にして見れば、テーマは幼稚だといひ捨てられさうだが、當時に於てはその熱情のはげしさに於て、常識以上遙かなるものであつた。夫ある妻が他人を想ひ、夫ある妻を他人が戀する、そ

の熱烈なる至情を咎むるなと、此の戀愛至上主義の作者は、道學者に對して勇しく叫んだのである。
更に大膽極まるのは「海城發電」で、主題は矢張職務の神聖を說くものゝやうであるが、一篇を構成する事件としては、愛國心と人道主義の對立を取扱つてゐる。時は恰も日淸役直後だ。月琴を彈いても國賊呼ばはりされたり、石つぶてを打たれたりした時代に、作者は敢然としてあやまれる愛國心を非難したのである。

予は目擊せり。

日本軍の中には赤十字の義務を完うして、敵より感謝狀を送られたる國賊あり。然れども、また敵愾心のために淸國の病婦を捉へて、犯し辱めたる愛國の軍夫あり。

小說といへば、支那傳來か、江戶時代から持續きの、架空物語を文章の綾で讀ませるものと思つてゐたところへ、少なくとも自分達の當面の問題となり得る人生の矛盾や葛藤を端的に把握し、力強い表現力で描寫し、熱情を籠めて讀者の贊成を求めたのであるから、今迄考へてゐた小說の概念とは甚だ違ふものが出現したわけだ。當時の知識階級の代表者たる大學生が、就中此の作者を讚美したのは當然であらう。

しかし泉先生の持つて生れた浪漫趣味は、長く此の境地に止まる事を許さなかつた。現實世界

に感激の純情をもつて呼びかける態度をとつたのは束の間で、やがて作者の情熱は、他の對象を求めて遠く去つた。それは何であるかといふに、超自然の神祕境に憧憬のおもひを寄せる事であつた。「妙の宮」「蓑谷」「龍潭譚」の如きがそれで、やがて兩者は打つてひとつとなり、泉鏡花先生の作風を定めたのである。

現代の文章の普通の體をなす言文一致は、二葉亭四迷と山田美妙齋によつて始められたものだと傳へられるが、明治二十年代には、小說は多く文章體だつた。尾崎紅葉先生は「豆腐と言文一致は大嫌ひだ」と揚言して居たと聞くが、そのお弟子の泉先生も、二十年代には殆んどすべて文章體で書いて居た。尤も個性の強い先生の事であるから、同門の他の人々のやうに、紅葉先生張(ばり)の文章を書く事はせず、森鷗外先生や森田思軒居士の飜譯調をとり入れた自分一流の雅俗折衷體を用ゐた。

夜半渠の如き姿態と氣色とは、最も良く自殺に適せり。予は直ちに「貴女身を投げるのではありませんか。」と問はむとせり。斯く謂はゞ、戯るゝに似たらむ。他に人無き時、諧謔以て生面の婦人に蒞むべからず。或は「若し姉様(ねえさん)氣を着けておいでなさいよ。」こはまた要らざる御世話なり。予は若年男子の身、老婆にあらずして奚ぞ這般の深切を說くべき。（鐘聲夜半

録）

見本を示すとこんなものだが、しかし御大将紅葉先生さへ後には言文一致を採用するやうになつた位だから、泉先生も明治三十年前後から文體を一變した。

私の詮索にあやまりが無ければ、三十年四月の「新著月刊」の巻頭を飾つた小說「化鳥」が、泉先生の言文一致體の最初のものであらう。そのかき出しは斯うふのである。

おもしろいな、おもしろいな、お天氣が惡くつて外へ出て遊べなくつてもいゝや、笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしよびしよ濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。

續いて翌月の「文藝倶樂部」に出た「堅パン」になると、すつかり手に入つたもので、思ひ切つて力強くたゝみ込み、ひた押しに押して行く急調子のものとなつた。

「入らつしやい！」

權の野郞が其聲といつたらない、腸を絞り出して打つつけるやうな音であるから、客を呼ぶやうな容易なことではない、乘車を勸めるといふやうな手輕なものではない。

まるで其九段の上に群つてる人を、坂下の總井戸の處に居て、引摑んで胸倉を取つて、ずるずると馬車の中へ引摺込まうとする聲だ。恐しい聲だ。

こゝ迄來ると、その後二十年たつた昭和時代の小說の文體と何等の變りがない。
ところが先生は、言文一致體の文章を意の儘になし得ると同時に、更に飛躍を試みた。文章の音律を第一とする事である。
僕はかの觀音經を讀誦するに、訓讀法を用ゐないで、音讀法を用ゐる。蓋し僕には觀音經の文句――なほ一層適切に云へば文句の調子――其ものが難有いのであつて、その現してある文句が何事を意味しやうとも、そんな事には少しも關係をもたぬのである。（略）僕は唯かの自ら敬虔の情を禁じ能はざるが如き、微妙なる音調を尙しとするものである。そこで文章の死活が又屢々音調の巧拙に支配せらるゝ事の少なからざるを思ふに、文章の生命は慥かに其半以上懸つて音調の上にあることを信ずるのである。
かういふ信條から、先生は文章體と口語體との融合を試み、全く獨特の文體を創設した。
射損じたり、第一矢
淸瀧の女房、柳眉を逆立て、控への二の矢を、
「貴方！」と取つてさし出すを、屹と見て、打頷き、新三郎は取直して、再び丁と番へたのである。

思ひ切つて一歩を進み、更に秋水の瞳を凝し、姫神の御名を胸に、鎧の袖を揺直せば、白氣再び空を射て、放たずして疾く貫く的、矢頃可矣、飛禽の翼縫ふ可き也。
曳固め、きりゝと〆め、兵弗と切つて放す、弓は大浪を打つて返した、矢響き高く白羽の神箭、遥に霏々として、風と相打つ雪一片。
さて手應は胸にあつた。新三郎は見る見る中、割然として、心ひらけ、鏘然として文字聲あり、腹案成んぬ、立處に。（白羽箭）
これよりさき、泉先生は素晴しい創作力を示して幾多長短の名篇を世に問ひ、浪漫派の大道を打開した。當時第一流の雑誌の創刊號、正月號の巻頭には、爭つて先生の作品を載せ、老舗春陽堂が自慢の年頭初刷には、必ず先生の單行本を市に出した。
森鷗外先生の小説「灰燼」の中には、慶應義塾の學生二人が、互にまだ口をきいた事は無いのだけれど、一人の讀んでゐる小説が、「春陽堂で出した、見覺えのある鏡花の小説」なので、他の一人がいきなり聲をかけるところが書いてある。
（略）そして、すぐに「君は鏡花をどう思つてゐます」と疊み掛けて問ふのである。
節藏は「君も崇拜家の一人ですね」と反問して、自分の意見は云はなかつた。

「さうです。大好きです」相手は熱心に答へて、「露伴とはどうでせう」と、是非鏡花に對する贊否の聲を聞かなくては氣が濟まないらしい樣子で附け加へた。

節藏は少しもどかしいやうな感じがしたが、窮屈な着物を已むを得ず着た積りで使ふ敬語と同じ心持で、無造做に云つた。「そんな比較論がどこかの新聞にあつたつけねえ。僕は鏡花も好きだが、露伴も好きだ。どつちが好いの惡いのと云ふことは出來ない。僕はそれの出來ないのが當り前では無いかと思つてゐる。露伴は第一の詩人と云はれた時が過ぎてゐる。鏡花は今丁度第一の詩人と云はれる時が來てゐるのだ。これも今に過ぎ去つてしまふのだね。見てゐ給へ。これからいろんな人が代る〴〵第一の詩人に擬せられるから。（略）」

「そんな物ですかねえ。僕は鏡花の作に限つて面白くて溜らないものですから。」

此の小說は明治四十五年の「三田文學」に連載されたのであるが、その中に描かれてゐる時代は、泉先生賣出しの頃に相違無いのである。

「君も崇拜家の一人ですね」とある通り、當時泉先生の崇拜者はその數頗る多く、且その熱度は戀愛か宗教に等しいものであつた。先生の門に集まる者も多く、又澤山の模倣者があらはれ、その頃の新聞雜誌の懸賞小說といふと、必ず鏡花張の作品がいくつとなく集つたものださうだ。け

れども、泉先生の藝術は、到底他の模倣を許さない。模倣は誰を模倣しても詰らないのが當前だが、外の人の場合には、やがてその域を脱して並行して行く道が開かれるであらうけれども、泉先生の模倣者には、此の一筋の道の外に別路もう道も無いのである。先生の門下から遂に一人の作家もあらはれなかつたのは、極めて自然の事であらう。

はなしは些かそれたが、明治三十年代のはじめに於て、泉先生は我國文壇の第一の詩人となつた。しかし「灰燼」作中の人物がいふ通り、此の王座は長く一人の獨占する事を許さない。明治三十六年には尾崎紅葉先生逝去せられ、その頃からさかんになつた自然派の運動は、獨立獨行の浪漫派の詩人を迫害する事極めて手きびしくなつて來た。自然派の運動は我國文學史上最も目覺しく、最も有意義のものであつた。その功績の第一に數ふ可きは、荒唐無稽を本質とするが如く認められてゐた小說に、人生の眞實を取入れた事にある。美辭麗句を文學の第一義と思ひ違へてゐたのに對して、客觀的描寫の方法を示した事にある。勿論その一面に、科學と藝術との誤れる認識と、ゆき詰つた人生觀から、成長飛躍の道をとざした憾はあるが、我國の文學が急速に著しい發達を遂げたのは、自然派の努力に負ふ所多大である。

しかも、此の派の運動は、曾て無い組織だつたものだつた。紅葉露伴時代には、個人の偉さが

一派をひきゐてゆく基となつたが、自然派は、主義を共にする者が、ともにせざる者に對してた〻かひを宣した。文壇に於て、多數者の力の素晴しく發揮される時代が來た。ほんとか嘘か保證の限りでは無いが、或人の話によると、來月は誰某の作品をほめた〻へよといふ傳達が、その派の參謀本部から四方に發せられたといふ事である。旣成作家は、自然主義的觀點から、何等の價値なきもの〻如く批判された。曾ては一代の寵兒だつた紅葉先生の如きも、反動的の過酷なる批評を受けねばならなくなつた。泉先生も亦同じく、默殺か、然らざれば古いといふ一語を以ていひ捨てられる運命を免れなかつた。昨日迄の第一の詩人も、その穿物を揃へた若者に迄きびしい言葉を浴せられた。斯ういふ時代だから、文學靑年の大半は自然派の亞流であり、旣に一家を成した者も、今日の所謂轉換を試みて、命脈をつなぐ事に腐心した。

傳ふる所が眞ならば、或る有力なる雜誌の編輯者は、泉先生に創作を依賴し、その出來上るに及んで俄かに揭載する事を拒絕した。理由は簡單で、自然派にあらざる大家の作品を載せると、自然派の連中にボイコツトを食ふおそれがあると云ふのである。

しかし、泉先生は他人に學ぶ作家では無く、己の信ずる道をまつしぐらに進む方の選手だから、たやすく轉換する事は不可能である。かなり長く續いた此の受難時代に、一層壘を高くして一人

鏡花世界に閉籠つてしまつた。

けれども、自然派の天下も何時迄も續くわけが無い。なす可き事は相當にしとげ、數人の代表作家を世に出したが、やがて亞流の徒は本質を離れて、平俗凡庸の作品をもつて安んじ、身邊雜記的小說の單調に陷つてしまつた。その一方に、新しい傾向の文學は、自然主義に對抗して起つて來た。主として「三田文學」「スバル」「白樺」「新思潮」に據る作家が擡頭して來た。曾ては泉先生を崇拜してその門を叩き、後には自然派前線の鬪士の一人として先生を價値なきもの丶やうにいひならはした一文人は、時の非なるを知つて遠く鄕里へ落ちて行くに際し、先生の前に頭を垂れて、記念の揮毫を求めたときく。泉先生の眞價は、更に又新しい時代の認めるところとなつた。

明治以後の文學も幾多の變遷を經て來たが、殆んどその最初から今日迄、泉先生は常に別格の一枚看板で、その作風は全然類を絕してゐる。大體論として、明治以後の文學の特徵は、その以前のものに比して寫實的である。時代々々に從つて、さまざまの傾向は示しながらも、少なくとも其の描寫法は、寫實に卽してゐるものが多く、然らざるものは極めて少ない。ところが泉先生は「冠彌左衞門」の昔から、寫實を旨としないのである。多くの作家が希ふ、あるがまゝを描いて

眞實感を出す事は、先生にとつては第一義の問題で無く、先生としては、寧ろある可らざる事を描いて迫眞感を出さうとするのである。

先生は見たものを其儘再現させようとはしない。それよりも、自分の欲する世界をつくり上(あげ)る事に努めるのである。客觀世界の散文的眞實には何等の興味が無く、理想世界の美を讃美する事に忙しいのである。これが先生の一切の心的活動の方向を決定する。好きと嫌ひと、いゝ事と惡い事と、憧憬と反抗と、美と醜と、善玉と惡玉と、讃美と罵倒と、すべて極端なる對立を成して鏡花世界を形成する。信仰するものは極端に尊く、然らざるものは亂離忽敗(らりこつぱい)である。

先づ先生の信仰讃美の著しいあらはれは、神佛、父母、紅葉先生、江戸つ子、美人、藝術、戀愛に對する熱情である。神佛の存在は、極端に臆病で神經質の先生に、大なる安心を與へてゐる。麹町下六番町十一番地の先生の御宅の茶の間、即ち先生と奥さんが長火鉢をさしはさんで、他の家では決して見られない泉家獨特のいろいろの流儀で、日常生活の營まれてゐる神聖にして濃厚なる情愛世界には佛壇があつて、朝夕先生の信仰心を預つてゐる。往來を歩いてゐても、神社佛閣の前を過(すぎ)る時は、一々眼鏡をはづして禮拜する。神も佛も、先生にとつては、大好きなお化と共にあきらかに存在するのであつて、目に見えない存在だから、一層美しくなつかしく、おもふ

が儘の信仰の對象となるのである。

僕は明に世に二つの大なる超自然力のあることを信ずる。これを強ゐて一纏めに命名すると、一を觀音力、他を鬼神力とでも呼ばうか、共に人間はこれに對して到底不可抗力のものである。

「おばけずきのいはれ少々と處女作」と題する談話筆記の中にかういふ一節がある。二つの超自然力の前には、人間は全然無力なのであると堅く信じれば、觀念小説時代のやうな對社會的態度を持續し得ないのは當然である。

異常なる神經の所有者泉先生は、常に鬼神力に對して畏れをいだいて居る。鬼神力は宇宙間に彌漫してゐるのだ。雷の鳴る時は前以てお腹が痛み、ひとたび雷鳴が聞えれば、見榮も外聞もなく蚊帳の中へもぐり込む。泉家に於る蚊帳の必要は、蚊の出る時節には限らない。知らない家で會合でもある時は、其處に蚊帳の用意があるか無いかが大きな心配になる。雷の次にはいものには犬がゐる。散步好きの先生も、これあるが爲めにままにならない。そこで太いステツキを持つて出かけるが、そのステツキを犬が見つけて、かへつてあやしみはしないかといふ心配が起る。卽ち向ふから犬が來ると、折角のステツキを袖でかくして逃出さなければならない。犬はよく人

の心を讀む、默つて通り過る人には目もくれないが、眞靑になつて逃出す人間を見れば、追かけ度くなる本能が猛然と起つて來る。先生の恐怖は倍加される。止むを得ず女中を連れて歩く事を考へたが、これは萬一犬が襲つて來た時、身がはりになつて貰はうといふのたから、人道上許せないと反省して、おやめになる。次には奥さんといつしよに散歩することを企てたが、夫婦いつしよに歩く事は野暮とされてゐるので、此の手も稀にしか用ゐられない。屈強な車屋でも雇つて散歩しようかと考へてゐると、しみじみ歎息してゐるのを聞いたが、實行されたかどうか未だ審かにしない。

蠅も恐い。既に「蠅を憎むの記」がある位だから、泉家に於ては、鐵瓶の口、煙管の吸口、その外いろいろのものに、奥さん手製の筒が着せてある。中には千代紙で出來てゐるのもある。みんな蠅よけなのだ。生ものはあたると恐いから一切食べず、御酒はぐらぐら煮立てゝ飲む。海老は溺死人を食ふからいけない、あれもいけない、これもいけないで、食物の種類は極めて少しに限定され、それも奥さんの手にかゝつたもので無ければなかなか信用しない。宿屋に泊つても食べる物は自分の部屋で煮かへし、汽車の旅で、車中アルコホル洋燈で饂飩を煮て食べるといふはかなさである。殊にコレラとか赤痢でもはやつて來ようものなら、豆腐と煮豆の外にはお粥がなく

なつてしまふ有様だ。

先生の恐がる物を數へて居てはきりが無いが、もう一つ附加へれば、世間もこはいもの丶ひとつであらう。前にも書いた通り、夫婦いつしよに家の外を歩く事を憚かるのも、世間の口を恐れるのではないだらうか、旅行はしたいが、夫婦揃つて留守にしては町内の人に申譯が無いといふやうな言葉は、先生の口から屢々きくところである。

さういふ風にこはい物が多く、それが何れも全身震へ上る程のこはさなのだが、ありがたい事には一方に觀音力があつて、これにお縋りすれば、安心して長火鉢を向ふ前に、番茶の香高く、神聖にして濃厚なる情愛世界に安住してゐられるのである。こはい物がこはければこはい程、觀音力を信仰する力も強い。その點に於て、神も佛も信じない代りに、何事も科學の力で解釋出來ると心得てゐる現代一般人は、先生のやうな情熱をもつて感謝する心を知らないのである。

先生が浪漫派である事は、科學者が自然主義者であると同様當前の事だ。だから、寫實派の大家尾崎紅葉先生の門下となり、神の如く崇拜しながら、なほ且個性の赴くがまゝに、異なる道を踏んだのである。

超自然力に對する信仰を持つ先生は、神かくしにあふ子供、幻を見る人、深山の夜更には草木

も禽獸も人語を解して不思議を物語る場面をこそ描け、自然派以後の日本文學の一特色となつた家常茶飯事、身邊雜事を平面的に描く事は、全く顧みない所である。理想世界を構成する爲めには、ありのまゝの世の姿は往々邪魔になるから、兎角きびしい嘲罵を加へられ勝だ。理想世界の唯美境を讃美する一方に先生の心は常に現在の世の中の醜惡面に對して反撥する。例を初期の作品にとると、うでの修練に對する尊敬から「取舵」が生まれ、義俠心に對する熱情から「義血俠血」が生まれると同時に、衆俗に對する反抗から「豫備兵」が生まれ、威張つた奴を叩きふせる精神から「金時計」「大和心」「鐘聲夜半錄」が生まれた。極端な例は「貧民倶樂部」で、上流貴族に對抗する四谷鮫が橋の貧民窟の一團を描き、作者は後者に味方して前者の祕事をあばき、僞善を罵り、遂に彼等を屈服せしめるのである。

先生の觀音力を賴む心は、對人關係に於ても同じ力を以て發表される事がある。父母に對する信賴は、神佛にむかふと等しく、年下の少年が年上の美女を慕ふ心持にも、神佛に縋るやうな絕對信賴が伴ふ。師に對する弟子の信仰は、紅葉先生をモデルにした人物をかりてあらはされる。萬一紅葉先生又は紅葉先生の作品に對して惡しざまにいふ者があるなら、泉先生は生涯その者と盃のやりとりをしないであらう。

だが何といつても、鏡花世界の本舞臺で、作者の理想を一身に荷つてはなばなしく活躍するのは美女である。先生は頗るつきの女性讃美者だ。但し醜婦は此の限りで無い。明治三十年に發表された「醜婦を呵す」といふ一文は、最も痛快明白に此の事實を宣言したものである。

村夫子は謂。美の女性に貴ぶべきは、其面の美なるにはあらずして、單に其意の美なるにありと。何ぞあやまれるの甚しき。

かういふ書出しで、男子が花鳥風月を樂むのは、畢竟するに未だ美人を得ざるものか、或は戀に失望したるもの丶萬止むを得ずしてなす負惜の好事に過ぎない、宇宙間最も美なるものは女で、女たる以上は美ならざるべからずと喝破した。

薔薇には恐るべき刺あり、然れども吾人は其美を愛し、其香を喜ぶ。婦人もし艶にして美、美にして艶ならむか、薄情なるも、殘忍なるも、殺意あるも亦害なきなり。(略)

希くば、滿天下の妙齡女子、卿等務めて美人たれ、其意の美をいふにあらず、肉と皮との美ならむことを、熱心に、忠實に、汲々として勤めて時のなほ足らざるを憾とせよ。讀書、習字、算術等、一切の科學何かある、唯紅粉粧飾の餘暇に於て學ばむのみ。(略)

あはれ願くば巧言、令色、媚びて吾人に對せよ。貞操淑氣を備へざるも、得てよく吾人を魅

せしむ。然る時は吾人其恩に感じて、是を新しき床の間に置き、三尺すさつて拜せんなり。

かういふやうな美人禮讃は、やがて先生の唯美主義的傾向を示すものであるが、これを以て直ちに女は男の爲めに美しければいゝ、男のおもちやに過ぎないのだといふ意味に解釋するのは間違ひで、女性崇拜の先生は、女——或は美しき女に限る——を男に隷屬するものとは考へない。反對に、女も獨立、自由、我儘、奔放でなければならないのである。之を許さず、手枷足枷を強ゐる道學者は、屢々作品の中に引摺(ひきずり)出されて、袋叩きにあはされる。殊に、結婚によつて女の自由の束縛される事に對し、先生は熱烈なる語をつらねてその非を鳴らし、女の肩を持つ。

明治二十八年に發表された「愛と婚姻」といふ論文は、先生の戀愛觀を知るべき合鍵だ。

媒酌人先づいふめでたしと、舅姑またいふめでたしと、親類等皆いふめでたしと、知己朋友皆いふめでたしと、渠等は欣々然として新夫婦の婚姻を祝す、婚姻果してめでたきか。

冒頭にかういふ疑問を提出して、當時二十三歳獨身童貞の先生は、婚姻は當事者本人達にとつて決してめでたい事では無いと喝破した。

一旦結婚したる婦人は(略)吾人は渠を愛すること能はず、否愛すること能はざるにあらず、社會がこれを許さゞるなり。愛することを得ざらしむるなり。要するに社會の婚姻は、愛を

束縛して、壓制して、自由を剝奪せむがために送られたる、殘絕、酷絕の刑法なりとす。(略)妻なく、夫なく、一般の男女は皆たゞ男女なりと假定せよ。愛に對する道德の罪人は那邊にか出で來らむ、女子は情のため其夫を毒殺するの要なきなり。男子は愛のために密通することを要せざるなり。否、たゞに要せざるのみならず、爾く不快なる文字はこれを愛の字典の何ページに求むるも、決して見出すこと能はざるに至るや必せり。

結局戀愛の自由を主張して「婚姻は蓋し愛を拷問して我に從はしめむとする、卑怯なる手段のみ」と叫んだ。尤も此の論文の最後には、結婚はめでたくはないが、社會の爲めに身を犧牲にして行ふものであるから、慇懃に新夫婦に向つて感謝すべきであると說いてゐる。

生れながらの浪漫派なる泉先生の思想には、常に自由を欲し、束縛を嫌ふ心持が強い。從つて血の通は無い道德はいさぎよく踏破る事をよしとする。何を置いても讃美せねばならぬ女性の上に束縛を加へるものは憎む可きで、世上の亭主が女房よりも大きな面をして威張つてゐるのなどは、先生の任俠到底默視してはゐられないのである。鏡花世界に於ては、いかに多くの美しき妻が絕大の讃稱を受る一方に、いかに多くの亭主が極端なる嘲罵をかうむるか。妻の美を高調する爲めに、亭主は薄野呂で、やきもちやきで、鼻の下が長い事になる。かういふ幾多の御亭主が、

作者の後光を身に浴びて美しい女房に、面罵され、まをとこされ、間抜けよばはりされる運命を背負はされる。通俗小說常套の手段は、佳人に配するに才子を以てするのだが、鏡花世界の夫婦は大概不釣合だ。それは作者が、婚姻によつて結ばれた夫婦を讃美せず、惚れた同志の戀愛ばかりを美しいものとするからである。そこで美しい妻を婚姻によつて得た亭主は、當然手きびしくやられるのである。又此の世界に於ては、亭主は女房に惚れてゐるが、女房は亭主になんか惚れないのが多い。亭主を嫌ふ美しい女房に對して悶々の情遣瀨ない亭主は、度々先生の描くところとなつた。要するに美しい女は藝術品に等しく、一人の人間がわたくしするのを許し難しとし、公憤おのづから叱咤するが如き文字を成すのであらう。

既に、女は美しければよく、學問教養の如きは全然無用だといふのだが、そのかはり女は、美しきが上に情熱を多分に持合せてゐなければならない。

「湯島詣」の主人公神月梓は、佛蘭西で教育を受けた夫人を捨てゝ、數寄屋町の妓と共に死んだ。その親友龍田若吉は、二人の女を對比して夫人を罵り、蝶吉をたゝへてゐる。曰く。

先方ぢやあ巴里で、麵麭を食つてバイブルを讀んで居た時に、此方ぢやあ、雪の朝、顫へてるのを戶外へ突出されて、橫笛の稽古をさせられたんだ。(略)同じ我々同胞の中へ生れて來

て、一方は髯を生して馬車に乘つた奴に尊敬される、一方は客とさへいやあ馬の骨にまで、其の笛を以て、其の踊を以て、勤めるんです、此間に處して板挾となつた、神月たるもの、宜しく彼を捨てゝこれを救ふべしぢやないか。（略）

總て女學校の教科書が貴夫人に化けたやうな譯で、まづ情話を聞かされると頭痛がして來るといやあ、生理上然云ふことのあらう筈はない、と云つた調子だから耐つた譯のもんぢやあない。

鰹は中落が旨くツて、比良目は緣側に限るといやあ、何ですか、其處に一番滋養分がありますか、と仰有るだらう。衞生盡めだから耐らない。やれ教育だ、それ睡眠時間だ、もう一分で午砲だ、お晝飯だ。お飯だ。亭主が流行感冒一つ引いても、眞先に傳染性なりや否やを醫師に質すやうな婦を、貴婦人だつて、學者だつて、美人だつて、年増だつて、女房にして居らるゝもんか。（略）

然るに蝶さんに至つては、其の今まで爲し來つた總ての、可いかい。平ツたくこれをいへば苦勞だ。其の苦勞は殆ど天下に大名をなしたものゝ、堅忍苦耐した位なもんだよ、其の閱歷に對する報酬として、唯、ひたすら、簡單に神月に見捨てられまいといふことを願つて又他

意なきを如何よ。其上に一意專念、神月の爲に形造るに到つては、男子須くこれがために名と體とを與ふべしさ、下らない名譽だの、財產だの、德義たのに、毛一筋も拂ふもんか。敢てこれは蝶吉のみでは無い。思ふ男の爲めには、一切をあげてたて引かなければならない。何時でも命を捨てゝ惜まない覺悟が必要なのだ。

かういふ女性にとつて幸か不幸か、鏡花世界のいろをとこは、現代に生るべく餘りにも無力である。意氣地無く女に庇護され、けしかけられ、勵まされて、あやふく男の面目を保ち得るやうなのも少なくない。恐らく、善玉と惡玉と、強い者と弱い者と、極端と極端を對比させる事を喜ぶ先生としては、理想の女を此上も無く引立たせる爲めに、男を意氣地なしにする事も必要なのであらう。

女性讃美者である泉先生が、今迄に描いた女は幾百人か知らないが、先生の理想を身ひとつに集める花形は藝者で、つゞいてはおいらん、貴婦人、令孃、おかみさん、むすめであるが、何れも若くて美しい事はいふ迄も無い。年寄は先生の好まないところだから、孫を可愛がり、孫に慕はれるおばあさんが稀にあらはれる位のもので、大概は嫁をいぢめたり、助平だつたり、強慾だつたり、いゝ心がけの奴は居ない。

初期に於ては、屢々年下の少年に慕はれる奥さんやむすめが、先生の思慕の情をほしいまゝに受けてゐたが、特別に興味のあるのは、「照葉狂言」や「髯題目」の如き女藝人を主役に持つものであつた。それが明治三十年代になると、俄かにおいらんが第一の座に直つた。「風流蝶花形」「辰巳巷談」「通夜物語」などが其の方の代表的のもので、案ずるに先生の新しい經驗が、取材の範圍を廣めたのであらう。威張つてゐる奴に反抗し、美しくして弱きものに同情する浪漫派の詩人にとつて、悲慘なる此の社會の女性は、哀切なる詩材を提供した。

おいらんの後を受けて、鏡花世界第一の人氣者となつたのは藝者である。「湯島詣」「起誓文」「舞の袖」にはじまつて「婦系圖」「紫手綱」「白鷺」「日本橋」の如き名篇か生れ、その他藝者がいゝ役廻をつとめる作品は數へ切れない。此の連中も亦先生によつて極端に美化され、いゝ氣持で鏡花世界を、我物顏に振舞つてゐる。

江戸讃美、下町崇拜のあらはれとして、藝者の外に、俠なおかみさんやむすめも描かれる。此の階級の中でも「三枚つゞき」の柳屋のお夏こそ、最も意氣旺んなるものであらう。無邪氣で、おきやんで、我儘で、氣が弱くて、そのくせ捨身になると何をしでかすかわからず、好きな人には甘つたれ、嫌ひな人にはつつかゝるのが、その特質である。

さういふ江戸下町の女に對して、一方には山の手の上流階級——時には郷里金澤の豪家——の夫人や令孃が、けだかい美しさをもつて描かれる事もある。けれども、奥さん令孃階級は、階級として先生の讃美を受ける事藝者おいらんのやうには行かない。まかり間違ふと、忽ち嘲罵の的となる運命を免れない。卽ち選ばれたる少數は素晴しくいゝめを見るのだが、然らざる大衆は、野暮と不粹の代表者としてやつつけられる。まして況んや先生の嫌ひな女學生は、人形芝居のおさんどんの如く人間ばなれをした取扱を受けねばならぬ。要するに、粹でたて引を知つてゐる下町に對して、山の手は權高かつたり、僞善だつたり、みじまひが惡かつたりして、作者の神經を苛立たせ、公憤を燃え立たせるのである。何しろ、威張つてゐる奴に對する反抗は頗る強く、華族、金持、軍人、道學者などは、屢々先生の筆端に揶揄飜弄嘲罵冷笑される。それに對して非現代的の英雄が一方にあつて、白熱の意氣をもつて鏡花倫理を說き、さかんなる聲援を受る事、恰も二つの超自然力卽ち鬼神力と觀音力の對立に等しい。

　さうかと云つて、泉先生は必ずしも權力階級や金持に對し、ひたむきに反抗する心を持つてゐる譯では無く、理論的に攻擊する意志も無い。寧ろその反對で、二重橋の前を通る時は、どんなに醉つてゐても必ず脫帽し、貴族や金持に對しても、不當の尊敬を拂ふやうな危險さへ持合せて

ゐるやうだ。さうして見ると、先生の嫌ふのはその連中の中にすつきりしない奴や威張る奴が多く、さういふ大面に對して、むらむらと癇癪が起き、默つて許しては置けなくなるものらしい。

先生の心には、年季をかけた專門家に對する職業神聖論が潛んでゐる。女の中で、特に藝者が讃美の的となるのも、そのひとつのあらはれであるが、女の藝者に於るが如く、男性の中で最上級の讃辭を浴るのは藝術家か、何か一藝に秀でた人物である。「聾の一心」以來名工は神の如きでを持ち、彫刻師廣常の作つた「さゝ蟹」は、夜な夜な人の枕頭を馳廻る。「取舵」の老船頭の鍛錬、「斧の舞」の老棟梁の意氣、その他此の一群に屬する神人は頗る多い。稍近代的色彩を帶びたのには、學士といふ一階級があつて、その卵の官立大學生と共に、あやふく神にまつり上られんとしてゐる。傑作「風流線」の工學士水上規矩夫はその方の代表的人物で、脚本「日本橋」四幕目第二場生理學教室は、その神人の道場の見本である。「婦系圖」や「白鷺」に出て來る紅葉先生の如き人物は殆んど尊敬の結晶で、その外めつかちの鐵砲の名人だの、庖丁とつては向ふものなき魚屋だの、剃刀を持たせては無敵の床屋だの、それぞれの道に於る名人達人は目白押に並んでゐる。

鏡花世界に活躍する各種の人物を一々紹介してゐてはきりが無いが、要するに先生の好きな人間と嫌ひな人間の對立で、一方が善玉ならば、片方は惡玉である。兩花道からあらはれて、紛糾

せる境涯にさまざまの葛藤を演じ、一方は聲援喝采をうけ、片方は引込めくたばれと怒鳴られる役廻を引受る。萬一惡玉の力量絶群で、善玉の力及ばず、いつ迄も舞臺中央に踏みはだかつてゐると、作者は自身舞臺にかけ上り、共に脚光を浴びながら、助太刀をして叩き殺してしまふ。登場人物は善玉か惡玉か、どつちかにきまつてゐるのだから、その葛藤は事件としては複雜でも、明治大正昭和へかけて幾多の小說家が苦心し、又得意とする心理解剖を伴はないから、解決には手間を取らないで濟む。彼等は素晴しく派手な衣裳を身につけて、色彩ゆたかなる繪畫美を描き出せば足りるのである。

先生は身邊雜記小說を書かないから、他の近代作家のやうに、生きてゐる人間をつかまへてモデルとし、寫生的に描く事はしないが、そんならモデルは全然無いのかといふと、隨分大膽に使つてゐる。たゞ之を描くにあたつては、自分の好むがまゝに善玉にし惡玉にしてしまふのである。自分は人生の從軍記者で、たゞ目擊する事實を世に傳へる事を職分とすると云つた自然派の作家があつたが、泉先生は冷かな觀察者では無く、又事實の記錄者でも無い。先生の態度は野球競技の應援團のやうに熱情的で、活躍する選手を聲援しないではゐられなくなるのだ。しかも先生の英雄崇拜は、一擧手一投足さへ美化しなければ止まないのだから、先生の描く人間は、吾々と共

に社會を營む人間のやうに、表裏陰影のある人間ではない。今日の社會狀態には無關心、今日の政治には無關心、時には物を食ふ事さへないのでは無いかと思はれる程、穢を知らない人物が多い。たゞ彼等は、強き感情の表現の爲めに努力する義務を負はされてゐるので、自然性の如きはいさぎよく犧牲にしなければならないのである。

しかし、それだからといつて、その人間が眞實性をもつてゐないかといふと、一概にさうとは斷言出來ない。彼等は精神的に生きる強い力を賦與されてゐる。情熱世界に於るいき方を、吾々の爲めに教へてくれる。だが、何といつても物足り無いのは、あまりに單純なる善玉と惡玉の對立に過ぎて、人と人との複雜な交渉、心理的の面白さを缺く點にある。殊に惡玉を描く段になると、善玉に對する時のやうた熱情が無いから、作者はいゝ加減にからかひ、甚しく滑稽化して喜ぶ惡癖をあらはす。浪漫派の作者にとつては、熱情を失ふ事が何よりもおそろしいのである。

人間を思ふが儘の型にはめこんでしまふ事は、先生の理想主義の結果であるが、既に性格描寫や心理描寫に左程の興味を感じない先生にとつては、それ等の人間を紛糾せる事件の渦中に投じて、その場その場の驚く可き開展と共に活躍させなければならない。先生がヌウベルやコントに大した面白味を感じないで、ロマンに終生努力を盡す所以である。從つてその作風は、著しく物

語風で、筋の變化を特徴とし、平凡人の日常生活には到底見出し難い驚異的の事件が多い。部分的には先生一流の主觀客觀いりまじつた、自由奔放な印象の強い描寫の筆をふるふが、全體としては物語を主とする。たまたま大がかりな物語よりも、小品に近い小說もあつて「女客」「祝盃」の如き逸品があるのだが、先生自身はさほどに思つてゐない。それよりも話の筋で讀者を釣つて行つて、最後に得意の悲劇的頂點に引摺込み、作者の感情を思ふ存分移入し、讀者をして鏡花世界の一員たらしむる事が目的なのだ。その點に於て、先生の素晴しい表現力は、いかなる場面をも意のまゝに描出す。東西古今を通じて、泉先生ほど文字を以て自由に繪を描いた人はない。色彩と香氣と音樂と、巧妙に錯雜した描寫は、人間技とは思へない。たゞあまりに達者過る爲め、物語の頂點に辿りつく迄に、道草を食ひ、遊び過る感がある。殆んど無用に等しい名文が、一篇の大部分を占める場合も無いとはいへない。

先生が物語の作者であるひとつの證據は、先生程のすぐれたる詩人にして、短詩形の詩の持合せの無い事である。先生の俳句は到底月並の域を出切れない。二三の例をあげると、

撫子やなほその上に紅さいて

ぼんぼりをかざせば花の梢かな

紅閨に簪落ちたり夜半の春

よしありて卯の花垣のおもひもの

誰が此の生れながらの藝術家の息のかゝつたものと思ふ事が出來よう。そこには、もつとも安手な型にはまつたいろどりがあるばかりだ。短い詩形に盛る可き訓練を經てゐないか、或は先天的に、物語の筋をともなふにあらざれば、詩境に達する事が出來ないのであらう。先生は詩人である。しかし小說以外の形式に於て、果して詩作し得られるかどうかは疑はしい。此の事實は先生が頭の天邊から足のさき迄小說家であるといふ強味を示すものと見ても差支へない。

浪漫派の作家にとつて熱情が生命である事は前にも述べた。然し熱情は年齡と共に內部に潜み易くなるのが普通である。泉先生の場合にも作家生活の初期に於る如き一本氣の熱情は夙に力を弱めてゐる。同時に又感受性もその若さを失つた。

人生に於る經驗の淺い時代には、見るもの聞くものが珍しく、新しい事物はみんな榮養となつて肉となり、血となるが、その消化力はいつ迄も續きはしない。たとへば泉先生の場合、讃美の對象たる女性は、年上の婦人、女藝人、おいらん、藝者と移つて行つたが、時代の推移が新しく生んだ女學生や、更にその次の時代の最も著しい特徵を持つて生れた職業婦人やカフェの女給は、

遂に先生とは緣の無い存在である。たまたま作中にとり入れられる事はあつても、先生一流のいたづらをほしいままにさせる端役に過ぎない。

おまけに一方では先生の理想主義が、早くも鏡花世界に立籠る事を要求するので、或時期以後先生の作品の變化は消極的方面にしか開展しなくなつた。空想は無限に延るといはれてゐるが、決して眞實ではなく、その限界には直きにぶつかつてしまふ。寧ろ現實は無限の進展を持つといふ方が眞實である。

それは物語風の小說を作る人にとつて、兎角伴ひ易い危險であるが、泉先生の如き藝術至上主義者さへ、あまりに讀者を目安に置いてゐやしないだらうか。先生の談話筆記の中に、昔は自分の作品を讀んだ人が、物凄い、冷い感じに打たれて讀後惡感を覺える事があつても一切御構ひなしだつたが、それはよくないと氣が付いて、なるべく快い心持を殘すやうに努めてゐるといふ意味の事があつた。その爲めであらう、時々とてつもないところに救ひの神樣が御姿を現はして、結末を目出度々々にしてしまふ事があるが、先生の作品のひとつの特徵は、北國的の陰鬱と、錦繪や草艸紙に見るやうな殘酷美の中に惱ましい詩境があるのであるから、先生本來の愛讀者はとつてつけた幸福大團圓などは望んでゐない筈だ。もつともつと殘酷でも、もつともつと陰慘で

も、構はないのである。鏡花先生獨特の深刻美こそ、讀者が待設けてゐる所のものなのである。

その他にもう一つ先生の敢てした間違は、本來の神祕主義を象徴主義へ進展させずに、怪談的傾向に延長させてしまつた事だ。それにはうでを賴む先生として、深山幽谷に神祕を描くのはわけなしだから、ひとつ白晝日本橋の眞中へお化を出して驚かしてやらうといふ心組があつたのであらう。同時に又此の傾向は、若々しい詩情を湛へた時代の憧憬は、容易に象徴世界に入つて行かれたが、年と共に心の柔軟性を失つて、しかけ物のお化しか出せなくなつたと考へてはいけないだらうか。

人は年をとるに從つて感受性が鈍くなり、一本氣の熱情を失ふが、同時に觀察の廣さと省察の深さを加へ、人生を見る眼が圓熟して來る。人生の味は老を加へて愈々深まさるものらしい。藝術家の中でも、肉體勞働の最も少ない小說家の如きは、年をとつてこそ始めて大きい仕事が出來るのでは無いだらうか。それなのに、泉先生は年をとつたと云はれる事を何よりいやがる。たぶん旅行先の宿屋では、十歳位さばをよむであらう。先生はいふ、藝術家は年齡を口にしてはいけない、年をとつたなんていふ感じを讀者に與へてはいけないと。私は此の說に服さないものである。年齡に從つて、書くものに色氣の無くなるのは、如何にも防ぎきれないと思ふ。一方に失ふ

ものゝあるかはりに、他方に深き判斷を得るのであるから、年をとつてもちつとも驚く事は無く、羞しがる事も無い。世の味ひは愈々深きを加へ、豐かに細かなる觀察と柔味を含む理解同情は、作品に海の如き底力と、いぶし銀の光を與へるであらう。

しかし、色氣を失ふまいとする泉先生は、何處迄も若々しい心持でゐようと努めて居られるのであらう。そこに多少の無理があつて、そのかみの純情の清さがたく、昔の熱情の本氣が無い。感情のきめのこまかさがなくなり、しかも當然加はつて來可き靜寂の味があらはれない。

尤もそれは小說の話で、感情の激越をめあてとしない隨筆には、近來先生の心境のおちつきが滲み出して來て、此の數年間に珠玉の如き名品が、つぎつぎにあらはれ、新たなる鏡花世界の魅力を發揮してゐる。

私は此の稿を起すにあたつて、泉鏡花先生の作品研究と題し、出來る丈多くの材料を集めたが、それを纏める丈の時日を得る事が出來なかつた。止むを得ず題をあらためてその一部を茲に記したのであるが、稿終つて明治大正昭和にわたる此の巨匠の功績を數ふる事の充分で無かつたのを何よりも殘念に思ふ。(昭和三年十二月二日)

――「中央公論」昭和四年三月號

小山内先生終焉の夜

大阪北の新地の名妓おかよ事毛利おふでさんが東京に進出して、新橋驛裏烏森に、ふでやといふ宿屋を開業した。私は先年大阪住居の當時、知を辱くした一人であるが、暮の二十五日に、かねて此の人のひとゝなりを崇拜する友達が上京して泊り、招かれて行つて酒になつた。

神妙に丸髷を頂いたおかみさんはとりすまして居るけれど、根がうはばみの事だから、呑友達を右左に、次第に盃の數しげく、雲を得た龍とならんとする潮時だつた。正確に時間を記憶してゐないが、多分七時十分か十五分過ぎた頃であらう、私の家から電話がかゝつて來て、たつた今龜島町の偕樂園で、小山内先生が重態に陷つたと知らせて來た。私は咄嗟に、もう間に合はないと思つた。友達とは久々の會合だつたが、盃を捨てゝ立上つた。

「おかへりに又どうぞ。」

それ程の事と思はないおかみさんの聲をうしろに、圓タクは凸凹の往來の水溜りを蹴飛ばして、大搖れに搖れながらかけ出した。新橋、銀座、築地、新富町、櫻橋、岡崎町――じれつたい道中の間、小山内先生の姿は彷彿として眼前にあつた。

正直のところ私には、先生の身の上に今日ある事は遠くなく思はれた。それは、先生が露西亞から歸つて來られたのを東京驛に出迎へた時からの私の直感だ。先生は此の二三年著しく健康を害して居たが、それにも拘らず不斷の活動をつゞけた。一生童心を失はなかつた先生には、仕事か遊戲の如く樂しかつたらしい。殊に今日日本人にとつて、一種のお伽噺の國とも見る可き露西亞へ招かれて行く事は、ピイタア・パンの心を持つ先生にとつて、素晴しくもの珍しい事だつたに違ひ無い。先生は疑も無く、自分の健康の傾いて居る事は自覺して居たと思ふが、からだの大事をとるよりも、心の飛躍を願にかけて、敢て招かれて行かれたのであらう。私は東京驛を立つ時の、先生を中心とする景色をはつきり覺えてゐる。

顔の廣い先生の事だから、見送人は多かつた。御一門の方々、文士、畫家、新舊最新並に活動寫眞の役者、いろいろの顔が入りまじり、混亂した中に、先生の大理石の顔が微笑してゐた。

その人々の群る歩廊をさしはさんで、二輛の汽車が出發の時刻を待つてゐたが、先生の乘る方

のでないのに、何處の國の女學生か、黑い着物に黑い袴の、十五六歲の一隊が乘つてゐた。それが何かのきつかけで、俄かに動搖し始めたと思ふと、忽ち勇敢なのが數人下りて來て、先生の正に乘らんとする汽車を目がけて突進して來た。まだ充分に發育し切らないフラツパアは、遠慮會釋なく吾々を掻きわけ、血眼になつて、人と人の間をくゞつて行く。恰も、ルウズ・スクラムを組むラグビイ選手の姿だつた。はゝあ、小山內先生もまだ女學生に人氣があるのかなあと、私はあつけにとられて見てゐた。ところが、何たる事ぞ、その女の子達は、デンメイ、デンメイ、デンメイと、念佛のやうにさゝやきあつてゐるのだ。活動寫眞を見に行かない私には、最初は何の事だかわからなかつたが、それは小山內先生を見送りに來てゐる鈴木傳明の姿を見つけて、突進して來たのだつた。何たる猥褻なる小動物であらう。或者はその俳優の外套に手を觸るゝ事を以て無上の喜びとし、歡喜の聲をあげて再び自分達の汽車にかけ戾つて行つた。そんな事は知らずに、小山內先生は、心から嬉しさうな笑顏で、ゆるぎ出した車上の人となつた。

私には、露西亞が小山內先生にとつて、それ程珍しいものを提供する寶庫とは考へられなかつた。恐らく先生は、往年藝術座の演技に驚喜したと同じ驚を期待して行かれたのであらうが、存外今日の露西亞の劇壇からは、學ぶ事の少ないのを嘆じつゝ歸つて來られるのではあるまいか、

同時に此の數年間自分が築地小劇場で行つて來た一切の事に、深い自信を得て歸られるであらうと想像した。

三週間後、同じ驛に先生の歸鄕を迎へた時、不吉な直覺が私を襲つた。その時の先生の顏の色は、すつかり血の氣が無く、土色に變つてゐた。露西亞で毒を盛られたのでは無いかと、根據の無い事を想像した位、私は先生の生命を氣づかつた。

近年むやみに忙しくなつた私は、どちらにも御無沙汰勝で、先生に御目にかゝる機會も極めて少なかつた。よそながら、先生の健康が舊の如くで無いとはきいてゐたが、親しく御見舞に伺ふ事も無く過ぎてしまつた。極度の神經衰弱だともきゝ、動脈硬化だともきいた。しかも先生は醫療を受けながら、築地小劇場の仕事を一身に背負ひ、又不斷に創作評論の筆をつゞけて居られた。私は、時々先生の顏を見ると、休養の必要を說いたが、先生は笑つて答へなかつた。

先生は仕事をする事に人一倍價値を置いて居た。仕事をしない人間は生存の理由を持たないやうに考へて居られた。しかも先生の仕事たるや並々の仕事では無い。常に劇壇の先驅者として、實力上の第一人者として、公の人として働かなければならないのだ。その一方に、先生の家族は多く、且先生の地位として、生活ははでになり易い。生計の負擔は、病軀にとつて堪へ難いもの

であつたらう。

いつだつたか、島崎藤村先生に御目にかゝり、小山内先生の健康の勝れない事を話したら、「小山内君は働き過る。あれではからだを殺してしまふ。」

といふ意味の事を云つて心配されたが、それが本當になつてしまつた。

去年三月十七日には、眞夜中に門を叩く人があるので、起きて見ると、小山内先生の御宅からの御使で、先生の呼吸が絶え、意識を失つたといふしらせだつた。その時は間もなく囘復されたが、主治醫は絶對安靜の必要を力說したさうである。だが先生は働く事を休まなかつた。自分にとつては絶對安靜は死に等しい、それよりも倒れる迄働き度いと云つて拒んだときいて居る。

がたがた搖れる圓タクの中で、私は先生の覺悟の念力に打たれて暗然とした。

偕樂園では、直に二階に案內してくれた。廣い座敷の床の間に近く、先生は意識を失つて寢かされてゐた。數人の醫師が取圍み、先生の太股に注射するところだつた。奥さんや御子さん達の外に、岡田夫人その他の御親族の方々が居られ、又築地小劇場の人達が多勢居た。私は先生の足の方に坐つて、重大な宣告の下るのを覺悟してゐた。

間も無く主治醫と他の醫師とが、かはるがはる聽診器を先生の胸にあて、低い聲でさゝやきあ

つた。歔欷の聲が、座敷にみちた。私は一生懸命で涙をこらへてゐた。
自動車の用意がとゝのひ、擔架が運ばれ、先生のからだは四谷南寺町の御宅へ歸る事になつた。その間偕樂園の主人夫妻、女中男衆は實によく行屆き、平素の訓練がはつきりわかつた。
みんなの自動車が行つてしまつた後に、まだ一臺殘つてゐた。私はそれに乘つて、あとを追かけ、四谷見附でやつと追ひついた。
、死んでも構はないから働くといつた先生はほんとに死ぬ迄働き通した。此の日も築地小劇場に行き、そこで奥さんと別れて偕樂園の招宴にのぞまれたのだが、元氣はふだんよりも遙かによかつたさうだ。現に奥さんは、先生と別れて帝國ホテルへ行き、そこで親戚の方と落合ひ、先生が極めて元氣である事を話してゐたところ、突然偕樂園からの電話で驚かされたといふ事である。
私としては、その數日前、新橋演舞場の文樂を聽きに行き、先生と同列の席を占めたのが最後の會見となつた。その時先生は中途で歸られたので、しみじみ御話するひまも無かつた。
先生のなきがらは御宅の二階に横たはり、人々は忽ち葬儀の準備に盡さなければならなくなつた。何といふ馬鹿々々しい人生なんだ。私はあんまりあつけなく先生を奪はれた腹立たしさを感じた。そして此の憤りは、翌曉家へ歸る時最も強く胸を壓した。月か星か、まだあけきらない空

なのに、晝のやうにあかるく眞青に澄んでゐた。その澄みわたつた空の色は、無慈悲に慘酷（さんこく）に見えた。人間の世の中なんかには、何のかゝはりも無いと云つたやうな、冷かにすました面つきだつた。私は、天にむかつて唾をし、何かしら面罵してやり度い忿懣に堪へられなかつた。（昭和四年一月十五日）

——「三田文學」昭和四年二月號

小山内先生のことども

小山内先生は一生涯働きつゞけに働きつゞけて死んでしまつた。先生には充分の休息が無かつた。四十八年のいのちは決して長く無く、その間にやつてのけた仕事の分量は大變なものだ。

詩人として、小說家として、戲曲家として、評論家として、海外文學紹介者として、劇文學者として、戲曲演出者として、映畫製作者として、働いた。

先生は働く事を人間の本分だと考へてゐた。あふ度に、何か新しい仕事に對する計劃、期待、覺悟をきかされた。さういふ時の先生は、眉をあげて語るといふ樣子だつた。無算當な強がりを云つて喜ぶ中學生のやうな子供らしささへほの見せた。

たまたま、先生自身何も働いてゐないと考へる場合には、こつちが何もいはないうちに、ひどく羞入るやうな容體を示しながら、いひわけをし、それから近き將來に於て大に働く事を宣言す

るのであつた。

私が小山内先生の知を辱くしたのは、明治四十三年、先生が慶應義塾の文科で近代劇の講座を擔當された時以來である。私は當時同塾理財科の學生だつたが、勝手に傍聽に出かけたのである。

その頃の文科は、年々二三名の卒業生を出すに過ぎない微々たる存在だつたが、何とかして景氣をつけようと云ふ先輩の意を體して劃策し、森鷗外上田敏兩氏を顧問に、永井荷風小山内薫小宮豐隆の諸氏を一時に招き、雜誌「三田文學」を創刊した新興のきざしの著しい時代だつた。

先生は年齢僅かに三十、その前年の暮に自由劇場の第一回公演を敢行して、大なるセンセイションをひき起した意氣さかんなる時だつた。藝術家に對して無上の尊敬を拂ふ事を惜まなかつた吾々が、いかに此の眉目秀麗なる先生を迎へたか、回顧する丈でも胸の躍る心地がする。

しかし、先生と私の關係は純然たる師弟の關係では無い。勝手に傍聽には出かけたが、一人特別に教を乞ふ事は無かつた。小説を讀んで批評して頂いた事も無い。文壇に出る手引をして頂いた事も無い。又、先生といふ人は、先生づらをしない人だつた。誰も彼も、みんな一緒に勉強する仲間と考へてゐた。

その仲間に對して、先生は常に何か新しい仕事の劃策を宣言した。吾々はそれをきゝながら、

先生の興奮のわけ前に醉つた。

何の問題だつたか、肝心の原因を忘れてしまつたが、たしか坪内博士の劇壇時評がたまたま小山内先生の自由劇場の仕事に觸れたのだと記憶する。先生はひどく興奮して、愈々坪内博士に對して宣戰するといふ意味の事を、多くの學生の前で宣言した。此の若き學者が斯界の權威とされてゐる人と一騎打をするといふのだから、事を好む私の如きは、その壯觀を想像して有頂天になつてしまつた。而して、頼まれもしないのに、自分も馬前に功名をあらはしてやらうと云ふやうな氣持で、坪内博士の戲曲に對する攻擊文を書始めた。喧嘩をするなら大將相手に限るといふ大それた考を持つてゐたのだ。だが、小山内先生は何時迄たつても博士に對して宣戰に及ばず、したがつて私のがむしやらな一文も發表の機を得ずに終つた。

小山内先生の文藝上の仕事は詩にはじまつたのであるが、私は其の頃の事を知らない。詩集「小野のわかれ」は、恰も私が學校を卒業した年に、久保田万太郎氏に貰つて祕藏してゐたが、その後久保田氏の手に返し、返したばかりに震災の時燒けてしまつた。私は今その詩風さへはつきりとは記憶してゐないが、素直に明快なるものであつたやうに思ふ。

傳ふるところによると、先生は學生時代に、主として英詩の形式を研究したといふ事であるが、

後年の先生の勉強のしかたとおもひ比べて、さもあらうと思はれる。西洋の詩は約束がやかましくて、日本の新詩のやうに自由無拘束では無い。天子様や将軍様の御膝元で育つた人間は約束の權威を尊重するものである。東京育ちで、子供の時から藝術に對して熱情を持ち、正統派的觀賞に馴れ、且秩序ある學校教育を受けた小山内先生が、先づ詩形の研究に沒頭したのは極めて自然である。

その態度は、後年短篇小說家として世にうつて出る時にも同じだつた。當時は自然派の全盛時代で、エミイル・ゾラの示した手本にのつとりながら、何時の間にか日本特有の平易化した作風にしてしまつたのが幅をきかせた中に、氣のきいた各種の表現形式を並べて見せたのだから、雜草の中に溫室の花のまじつた景色で、周圍とそぐはないものであつた。

自然派の運動は、今日のプロレタリア文藝運動などよりも遙かに力強いものであつた。それはあく迄も純粹文學論であるところに強味があつたのだ。又その派の團結力も極めて強大だつた。從つて異色ある作家は不當の評價をうける運命を免かれなかつた。先生は第三短篇集「笛」の序文に、自分の文壇に於る孤立の姿を、破れた笛にことよせて書いてゐる。

「また笛を吹いてるのかい。」

「ああ。」
「なぜ君はそんな穴だらけな底のない樂器を愛するのだ。」
「なぜだか、それは僕にも分らない。」
「ほかの樂器にはきつとどこかに隱れたところがある。神祕なところがある。君の樂器は餘りにあけツぱなしだ。蓋もなければ、底もない。少しも隱れた深いところがない。」
「でもしかたがない。僕はこれよりほかに樂器を持つてゐないのだから。」
「それに、君のだす音は如何にも輕い、如何にも浮かれてゐる。なぜもつと沈んだ、しんみりした音をださないのだ。」

たとへ破れた笛にしろ、自分は自分の笛を吹く。さういふ一つの宣言でもある。而してその笛で、いろいろの音を出さうとし、各種各態の形式を手がけた。

會話ばかりの小說もある、手紙ばかりの小說もある、日記體の小說もある、談話體の小說もある。その外いろいろさまざまの內容にしたがつて、文體を替へ、急速調もあれば、緩徐調もあつた。それからして第一に、時の批評家には氣に食はなかつた。內容なき技巧として否定されたのである。內容と形式の問題は、今日もなほ論理的遊戲の主題となつてゐて、遂に解決の道を見出

さないが、自然派にあらざれば人にあらずといふ時代に於ては、平面描寫法以外の技巧はむげに退けられた。無內容だ、人生觀が無いと、ひとくちにけなされるならひだつたが、それは自然派的人生觀が無い、自然派的觀點に立つ內容が無いといふ丈の話なのだ。作者には作者獨特の、明快にして機智に富む人生の解釋があり、これを才氣豐かなる表現形式に盛つたのである。

小山內先生がスタイリストだといふ事は、單に小說の場合ばかりで無く、戲曲家としても、演出者としてもいひ得るのである。先生にはどんな傾向の作品でも、理解し、それを踏襲し、演出する事が出來た。かういふものもある、かういふ書方も出來る、かういふ演出も出來るといふ風に、何でもやれた。

先生は詩人でありながら仕事師だつた。しかも、仕事をする時には寧ろ詩人の魂が活躍し、詩作する時にはかへつて仕事師の心が多く働いた。小說でも、戲曲でも、演出でも、先生は自分の胸奧の詩を殘らず吐出してしまふ事には役立てないで、寧ろ仕事師の計劃遂行の興味を以て臨んだ。而して、先生の業績は、詩人としてよりも仕事師として偉大だつた。

先生はいろいろの方面に仕事を殘したが、總括して、明治から昭和へかけての「芝居の先生」として一番深く記憶さる可きである。先生程廣く深く、且正しく演劇を理解した人は無い。たぶん

今日の新劇は、先生がゐなくても次第に發達の道を辿つた事と思ふが、若し先生がゐなかつたら、もつと邪道に踏迷ひ、かう迄速かに進んでは來なかつたであらう。先生は西洋の戯曲を文學として紹介する仕事に於ては森鷗外先生に及ばないが、それを舞臺の上に活かした第一人者だつた。先生あつて、はじめて演出者の地位は定まつた。先生は確かに世界的の名演出者だつた。

先生が働く事を使命と考へてゐた事は冒頭に書いたが、その働く事に伴つて常に前以て宣言する癖があつた。人は何の爲めに生れて來たのかといふつかまへどころの無い問題に頭を悩ました明治時代の青年にとつて、俺は働いてゐるぞといふ事は、ひとつの靈魂の救ひでもあつた。少なくとも小山内先生の場合に、此の事は眞實だと確信する。先生は、多分の感傷癖を以て仕事を夢み、多分の興奮を以てその仕事に取かゝる事を宣言して、心の中の不安や寂寞に對抗して居たのである。

坪内博士に對して一騎打を開始するといふ宣言が、遂に實行されなかつたやうに、先生の數限りない宣言は、屢々空手形（からてがた）となつて消え、又往々にして先生自身を裏切る事があつた。曾て映畫俳優の養成と映畫の制作に熱中してゐた頃は、芝居は間も無く亡びるに違ひ無いと、公開の席で講演した事さへあつたが、その頃は遠からぬ將來に築地小劇場といふ大事業を起す自分だとは知

らなかつたのである。

築地小劇場創立當時、先生は何箇條かの宣言を發表し、それが甚だぬかりが多く、殆んど稚氣を帶びたものだつたので、時の文壇人に取圍まれ、さかんに揚足をとられた。その宣言の中には、築地小劇場は民衆の爲めに存在するといふやうな一條もあり、その後も先生は民衆の爲めの藝術を口にし、又理想としてゐたのだらうが、先生自身は決して大衆の一人では無く、先生の仕事も決して大衆向では無かつた。先生は、大衆の一人たるには、餘りに藝術家であり過ぎた。

例之（たとへば）、自由劇場の仕事は、日本に於て、西洋の芝居の完全なる演出を見せた藝術的效果によつて新時代の藝術家を覺醒し、興奮せしめたが、決して大衆の喜びを迎へる事は出來なかつた。築地小劇場は、最新の戲曲演出道場として、同じく純粹藝術的效果を擧（あげ）る事によつて存在を尊くし、宣言の一箇條たる民衆の爲めに存在すると云ふには、無理押つけの理窟を案出しなければならないのである。

藝術上の議論は常に水かけ論に終る運命を免かれないが、民衆の爲めの藝術などゝいふ言葉も、漠然と考へれば通用するけれど、細かく分析して行くと何の事だかわからなくなつてしまふ。小山内先生はどういふ意味で用ゐたのかはつきりしないが、少なくとも世間の多數者には、先生の

仕事は高級過ぎた。その點に於ては、抱月須磨子の藝術座の方が、遥かに民衆的だつたといへる。
先生は父、人生の爲めに働くといふ理想を持つてゐたが、その働く事には功利的動機を伴はないで、詩的空想に等しい幻影を追及する形だつた。且一生童心を失はず、一學徒として勉強し、自分の修養練磨を心がけた先生は、第三者の爲めよりも先づ自分の理想に引擦られるのが自然だつた。
しかし、先生が藝術家的良心をもつて仕事をした事の影響は、たとへそれが直接大衆向で無かつたにしても、廣く大きいものであつた。或意味に於て、先生以後の新しい戯曲家、演出者、新劇の俳優は、すべて先生の呼吸のかゝつた人間だといつても差支ない。吾々の時代の「芝居の先生」の殘した功績は數へ切れないが、そのすべてが、詩人であり理想家であると同時に、仕事師であり實行家であつた一人格の賜である。(昭和四年二月十七日)

——「三田文學」昭和四年三月號

通勤のみち

島崎藤村先生の小說「並木」が世に出て、所謂モデル問題を惹起し、文壇を賑はしたのもふたむかし前の事になつた。小說といへば、いゝ男といゝ女を主役とし、むやみに目まぐるしい運命に飜弄させるのが、おきまりだつたのに、エミイル・ゾラの小說作法が渡來し、自然派の運動がすさまじい勢で文壇を席卷すると、小說のやうだと一口にいふ數奇な運命にもてあそばれたり、こんがらかつた筋に絡まれて泣いたり怒つたりする人物は次第に影が薄くなり、作者自身の如くぢゞむさい人物が、數をもつて幅をきかせる世の中になつて來た。

その轉換の潮先にあらはれた作品のひとつとして、「並木」は作品そのものゝ價値以外に文學史上興味ある出現であつた。作者は作中の人物を描くのに友人をモデルとした。しかも主役をつとめるのは、馬場孤蝶戸川秋骨兩先生である。今日でこそ、小說といへば必ずモデルがあるものと

一般に考へ、時にはモデルなんか無いと云つても讀者の方で信用しないやうな事になつてしまつたが、當時はそれが新しい議論のたねとなつた。孤蝶秋骨雨先生も默つてゐないで、被害者として筆を執つた。はつきりは記憶してゐないが、淡い諧謔をまじへた抗議だつたやうに思ふ。文壇としては、作家は生きてゐる人間をモデルにしていゝものか惡いものか、他人に迷惑をかけてもいゝか惡いかと云ふやうな問題となつて、雜誌新聞の編輯者を喜ばせた。

「並木」はさういふ時代的の面白さを伴つて一層有名な作品となつたが、今日讀んでも矢張面白い。藤村先生の作風は、多くの自然派の作家とは異なり、あるがまゝ見るがまゝの描寫による平敍體に倣はず、或中心觀念をはつきりあらはす爲めには思ひ切つた省略法と、思慮深い暗示法に據る特徵がある。「並木」は、毎日々々何の張合も無い、單調極まる生活をしてゐる勤人階級の生涯の象徵と見て差支ない。勿論二十年後の今日のやうに、俸給生活者の寄邊ない生活を社會問題として見ようとする意圖の無かつた事はあたりまへである。又階級そのものゝ世界苦を強ゐて誇張して描かうとしたものでも無い。寧ろ人生の觀察者でありながら、常にあふるゝ如き詩情を胸奧に湛ふる作者の感傷のあらはれと見る方が正しいであらう。

それはそれとして、作者は勤人といふ一階級の意氣地の無い、こゝろの無い、氣力の無い、發

展の無い生活を夙に認めてこれを創作の主題とした點に於て、たしかにすぐれたる觀察力を示した。

主人公相川に對して、作者は冒頭に斯う書いてゐる。

一度辨當を腰に着けると、八年や九年位提げて居るのは造作も無い、齷齪とした生涯を塵埃深い巷に送つて居るうちに、最早相川は四十近くなつた。

當時三十代のなかば位にしかならなかつた作者は、既に詩人として小説家として、立派な仕事をしたのであるが、四十といふ年をひどく老いたるものと考へてゐる。又八年九年の勤續を、かなり長いものと思つてゐる。それがどうだらう、私は會社づとめをする事既に足かけ十四年、年齢四十を越る事はやくも三年に及んだ。

作者は「何等の遠い慮もなく、何等の準備もなく、たゞたゞ身の行末を思ひ煩ふやうな有様をして」通勤する腰辨を、同じやうな高さに揃へられ、枝も葉も切り捨てられて、各自の特色を延ばすことも出來ない並木にたとへ、最後に相川の感慨をかりて、哀れなる通勤者の群に對し、手きびしい言葉を浴せかけた。

「もつと頭を擧げて歩け。」

當時まだ學窓に在つて、いろんな夢想をいだいて居た私の如きも、さういふ人間の生活を輕蔑したものであつたが、今日の自分がその並木の一本に過ぎないのを想ふと、汗顏の至に堪へない。私は毎日麴町下六番町から丸の內迄通勤するものである。明治十四年に出來た會社だから、設立願書の提出に對し、

書面の趣は追て一般會社條令發行迄人民の相對に任候條此旨可相心得候事。

といふ指令を受けた位で、その定款は多分外國のものを見本にし、且發起人の創意を加へて作つたものであらうが、一般世間の會社の定款と違つて、極めて古風な趣を存してゐる。會社の營業時間を九時から四時迄と明記してある一條の如きも類例の少ない事で窮屈不便を感じるから、豫て心にかけてゐたが、最近やうやく取除く事が出來た。

たとへ定款に定めが無いにしても、實際上勤務時間は定まつてゐるのだから、それに間に合ふやうに同一方向に急ぐ人間の數は大變なものだ。遲刻が幾度重なれば合せて缺勤と見做すといふけちな規則の所もあるし、タイム・レコオドを取る所もある位だから、朝と晝と夜といふ大ざつぱな時間の觀念の外に、ラツシユ・アワアと稱する特別の、あさましい時刻さへ出現するのである。

流石に當節は腰に辨當をさげて通ふ者はなくなつたし、交通機關が發達したので贅澤になり、遠方から歩いて來る人は少なくなつたから、「藤村集」の口繪にあるやうな景色は見られなくなつた。それに、ラッシュ・アワアの精神的肉體的鬪爭のはげしさは、到底頭をさげて歩く事を許さなくなつたので、「もつと頭を擧げて歩け」と叱咤される事は無い。時間に間に合はなければならないといふ責任感もあるし、遲刻して上役に睨まれるのが恐いといふ根深い惧もある。だから、意氣地なくうなだれて居る人間などは、何時迄たつても乘物に乘る事は出來ない。人をかきわけ、押のけて先を爭ふ姿は、堀端の柳のやうなしをらしいものでは無い。風の日の雜木林よりも騷がしく、たゞひとつの球を爭ふ蹴球選手よりも血眼である。

けれども、一列に頭をかりとられ、一定の型にはまつた生活を繰返して一生を終る事に於ては、二十年前の腰辨と何等の變りが無く、失職と出世の困難は、その頃よりも遙かに著しくなつてゐるのだ。

いけない事には、吾々階級の大部分は熟練勞働者で無い。會社銀行の大概の仕事は、專門的知識を必要としないのである。少數の專門家と、更に少數の企業心ある指揮者があれば、あとの仕事は讀み書きの出來るものなら誰にでも出來る。それを穿違へて、學問なんかに何等の興味もな

いくせに、たゞ勤人となる爲めの資格として大學を卒業しなければならないと考へてゐる多くの若者のある事は、氣の毒といふ可きか困つたものといふ可きか、大なる社會問題のひとつだ。我國の諸惡の源は大學卒業生の過剩にあるといふ主題で論文を書く事はわけ無しだ。あらゆる方面から、その無用と有害とを論じる事が出來る。

要するに、一般の勤人は、不器用でも頭が惡くても、大した差支は無い。たゞ柔順であり、規則正しくあればいゝ。だから、一定の型にはまつた「並木」は、勤人たる資格のひとつで、「各自の特色を延ばす」事などは、失職の端緒とならないとも限らない。從而その類型を求めれば、個性も無く、野心に乏しく、世間知らずで、贅澤を知らず、一切洒落はわからない。只管その日その日の無事に濟む事を願つてゐて、政變も國民思想の傾向も、どつちに向はうと頓着無く、月給の上る事と、物價の下る事が、最も身に近い憧憬である。

私は、さういふ並木の生涯を若い小說作家に話した事がある。つきあひの派手な一部文壇人の生活しか知らないその人は勤人の收入の少なさと、その辛抱強さに驚嘆した。

「いつたい勤人なんてものは、何が樂みでいきてゐるんでせう。」

殆んど叫ぶやうに質問した。

「君達のやうに刺戟の強い享樂なんてものは知らないのさ。」

私は簡單に答へた。多くの人はたゞ飢ゑない事を樂んでゐるといふ外は無い。たまには、碁、將棋、謠などに凝る者もあるが、それも金のかゝらない友人同志の慰みで終るので、堂々たる師匠をとつて上達を心がけるわけでは無い。狹い庭で草花を樂む人もあらう。緣側に朝顏の鉢を並べる人もあらう。實用を兼て鷄を飼ひ、商賣をこゝろざして十姉妹を世話する人もあるであらう。若き作家は、さういふ無色不透明な生活に滿足してゐる人間を想像する事が出來兼る面もちで、あく迄も私の言葉に信用を置かなかつた。

私は勤先へ通ふのに、省線でも、市電でも、青バスでも、圓太郎でも利用出來、その停留場迄歩く距離は大概似たものである。震災直後は、しばらくの間、往復共に徒步で通はなければならなかつたが、それでも一時間はかゝらないみちのりだから、都合よく乘物にぶつかれば、二十分を要さない筈である。しかし、ラッシュ・アワアには、中間停留場ではなかなか乘れない。大概は滿員以上で、車外にぶら下つて行く課長もあるのである。私は群集心理神經が鈍く、且つ近頃はやらない個人主義者だから、他人の人格も尊敬し、決して人を押のける事はしない事にきめてゐる。その爲めに、折角適當の時間に家を出ても、乘物に乘る迄に時間がかゝつて、大概每日遲

刹する。つとめさきには甚だ申譯無いが、どうも同朋意識の親しさを利用し、人を押のけて先を取る輕快なる心持にはなり切れない。

中では電車が一番數も多く、空いてもゐるが、これは乘つてゐる間の時間が長く、のろのろ進行するもどかしさと、澤庵臭い人いきれと、行儀の惡い乘客の爲めに疲勞を感じ易いので、なるべく乘らない事にきめてゐる。ひとつには、極端に時間を惜む私の根性が、速力の遲さに堪へられないのかもしれない。そんな贅澤をいはずに乘つてしまへば、いかに速力は遲くとも遲刻しないで濟むのに、私は甘んじて風と埃を浴びながら、二十分でも三十分でも、靑バスか圓太郎を待つのである。

それについて私がひどく感心した先輩がある。その人とは、馴染ののみやで時々顏を合せるのだが、向ふはつるつるの禿頭で、多分私よりも十か十五は年上であらう。或る大きな商店の支配人で、一日の忙しい仕事が終ると、うちに歸る迄の我慢が出來ず、刺身でひと銚子かたむける。尤もこれは奥さんにはないしよだから、ほんとに口を拭いて歸宅するわけなのだ。何かの話のきつかけで、私が朝晩の乘物の苦情をいひ、殊に電車の速力の遲い事を罵倒したところ、その先輩はひどく眞面目な樣子で私のほこさきをおつぷせてしまつた。

「もつたいない。私なんかは朝晩の電車が何より樂みです。天子様の御住居の横手を、青々した土手や水、時には水鳥の遊んでゐるのを拜見して通ふんですからね。恐らく日本一の景色ですぜ。」

その景色を眼前に見るやうに目を細くして、おいしさうに盃を干したのであつた。

はゝあ、無色不透明の並木の生活の中にも、斯ういふ心境がはぐくまれるのだなと、私はひどく感服した。だが、感服はその人に對して丈で、電車に對しては矢張嫌惡の念を消す事が出來ない。

ところが、昨年のいつからか、芝の佐久間町と市ヶ谷見附の間を往復する乘合自動車が出來て、我が借家の横町を出た大通でとまつてくれる事になつた。市ヶ谷から土手三番町の坂を上り、中六番町を通つて麹町六丁目の電車道を横切り、平河町から赤坂見附上に出て、永田町小學校に沿つてカアブし、目下建築中の議事堂を右に見て外務省の角でとまり、又電車道を横切つて日比谷公園裏區裁判所のところを曲つて終點に達する線だ。此の道筋の景色を知つてゐる人には直にわかるだらうが、大きな屋敷や官公署ばかり並んでゐて、人通の極めて少ないところだ。どうしてこんなところで商賣が成立つものかと思ふ外ないが、青バスや圓太郎と競合しないやうに、繁昌

の地を避けて許可したのであらう。

果して乗客は少なかつた。座席はたぶん十人位は腰かけられるのであらうが、ラッシュ・アワアでさへ滿員になつた事は無く、大概は四五人、少ない時は一人か二人が、悠然と足を延ばしてゐるのだつた。私の數ケ月にわたる經驗中、たつた一度滿員になつたのは、天子様が何處かへ御立ちになる日、日比谷附近に召集された警官の歸りで、鮨詰になつた時丈だ。警官は勿論無賃だ。だから會社の帳簿の上から見ては、決して滿員では無かつたであらう。

無賃といへば、此の線程無賃乘車の多いのは無い。すまして乘つて、すまして下りて行くのに、車掌も運轉手も賃銀を請求せず、かへつて叮嚀に頭をさげてゐるのだつた。どうした關係なのかわからなかつたが、人の話によると、永田町邊の大臣官邸に護衛に行く私服だらうといふ事だつた。さういはれて見ると大概太いステツキを持つた肩のいかつい連中だつた。

或朝の景色として、さういふ連中の一人と私とが、中六番町の停留場で乘合の來るのを待つてゐた。ところへ、素晴しく立派な自動車が疾走して來た。太いステツキの人物はその自動車を呼止めて、

「おい、乘せて行つてくれ。」

と叫んだ。

「今日は駄目々々。妾宅々々。」

運轉手は手を振つて拒んで、目の前の横町に曲つて行つた。その横町には、總理大臣田中義一君のお妾が住んでゐるのだ。

私は中六番町で乘つて、霞ケ關で下り、そこで又圓太郎に乘替るのであつたが、その圓太郎がなかなか來なかつたり、來るには來ても滿員だつたりして、隨分時間を空費した。

あんまり待つのがいやなので、晩秋の朝、風の無い日に、試みに區裁判所のところ迄乘つて、日比谷公園をぬけて見た。鶴のくちばしから水を噴く池のほとりの雜木林には小鳥の聲がしげく、落葉の香がむせるやうに濃く漂つてゐた。花壇には僅かに秋の花が土を飾つてゐるばかりで、芝生の色も褪せてゐたが、小みちの土は柔かく靴の底に親しみ、久しく石やアスファルトの上ばかり歩き馴れてゐた自分には、大變新しい感覺であつた。芝生の外圍の植込には、いろいろの樹が植ゑてあつて、いちいち名札がさげてある。珍しい樹の名を覺えるのも面白かつた。

「並木」の中にも、馬場先生の相川が戸川先生の原を誘つて、此の公園に散歩に來るところが書いてある。

新しい公園の光景は軈て二人の前に展けた。池と花園との間の細い小徑へ出ると、一かくれみの」の樹の葉が活々と茂り合つて居て、草の上に落ちた影は殊に深い綠色に見えた。
とある池と花園の間を、私は會社へ急いだのである。
公園の景色、殊に花園の芝生の間の小徑は實にいゝ。私はその日の夕方、馬場先から堀端を歩いて再び公園をぬけた。日の沈んだ後のしばらくを、霧とも靄ともつかないうす紫の夕ぐれが、池の水の上にも、芝生にも、樹立の中にも漂つて、あらゆるものを柔かい色調で包んだ。その黃昏の微光の中を行く女の遠景は、マリイ・ロオランサンの繪のやうに、やさしくとぼけたものに見えた。つめたく顏に觸れる靄の稍重い感觸も又なく嬉しかつた。
その日以後私は一層市ヶ谷佐久間町の乘合自動車を愛し、通勤のみちとして必ず日比谷公園を通りぬける事にきめた。
車は勿論粗末だが、靑バスや圓太郎のやうにひどく動搖せず、坦々たる大通ばかり選んで疾走し、お婆さんや子供が行手を邪魔したり、電車が追突する惧も無く、常に座席はがらあきで、自家用の自動車のやうな乘心地だつた。私は不圖、曾てのみやで聞かされた尊敬すべき先輩の言葉を思ひ出した。

「もつたいない。日本一の景色ですぜ。」

三宅坂と日比谷公園とは違ふけれど、此のがらあきの自動車と、花園の間の小徑は、私に「もつたいない」といふ心持を起させた。

だが、まことに心もとなく思はれたのは、たまたま客が私一人でゞもある時は、女車掌も客席に腰かけ、張合の無さゝうな様子で車を操縱する運轉手と、なさけない話ばかりしてゐるのだ。會社が儲からないから遠からずつぶれるだらうとか、五臺あつた車が四臺に減つたとか、年末の賞與も出ないのでは無いだらうかとか……

困る、困る、この自動車がなくなつては困るぞ――私はさういふ話を盜み聞く毎に冷々した。

此の冬は雨が少なく、東京名物のからつ風も存外手柔かだつたので、公園の風情は冬も亦惠まれた。一月のはじめ、雜木林の中に臘梅の咲くのを見た。おそらく公園の中で一番早く花をつけたものであらう。現代ばなれのした淡い花の色は、私の外の誰の目にも觸れないでしぼむのではないかと思はれた。

やがて春になつたら、花園は一層素晴しいだらうと、想像する丈でもいゝ氣持だつた。

ところが、我が愛する自動車の景氣は日ましに惡く、やがて二月のなかばの或日、突然街上か

ら姿を消してしまつた。風のつめたい朝だつたが、私はいつもの停留場で長い事待つてゐた。遂に自動車はやつて來ないので、止むを得ずその日は電車に乘つたが、終日不愉快な豫感があつた。夕方公園をぬけて裏門へ出ると、其處の停留場に貼紙があつて、當分運轉休止と書いてあつた。近頃これ程がつかりした事は無い。爾來誰にあつても此の話をするのだが、話術が拙ない爲めか、誰も實感をもつて聞いてくれない。

たつた一人神妙にきいてくれたのは、私が口を閉ると同時に、さも大なる發見をした樣子で、

「通勤のみちに好き嫌ひがあるやうでは、いゝ並木にはなれないぞ。」

とひどく眞面目に私をいましめた。(昭和四年三月八日)

——「三田文學」昭和四年四月號

「春泥」雑感

「春泥」は昭和三年の春、新聞に連載された久保田万太郎氏の長篇小説であるが、今年正月、ひどく凝つた装幀で、春陽堂から出版された。

いつの頃からか、大概の小説本は四六判ときまつた形になつてゐたが、これはむかしにかへつた菊判で、浮世繪風の密畫では無いけれども、木版色刷の口繪のついた、今どき珍しいものである。何となく紅葉露伴時代のなつかしさを誘ふものがある。日清戰爭時代のなつかしさだ。むかしをなつかしむ心は、やがて作者久保田万太郎氏の心である。

一

「春泥」の登場人物は新派の役者で、場所は勿論東京で、時代はその東京のありし日の面影をむざんに破壊した大地震の後だ。どこからどこ迄久保田氏好みである。

「春泥」は六つの小標題(こみだし)を持ち、それぞれ異なる場面を描いてゐる。先づ最初の「向島」では、天

變地異の爲めに姿かたちを一變した水邊の風景の中に、田代小倉三浦三人の新派の役者を點出した。元來此の作者は、人と景色との淡彩的調和を喜ぶ。それは俳句から來た影響でもあり、又氏自身の持つて生れたまるみと柔かみのあるひととなりの賜でもある。どぎつい原色の交錯には、此の作者の神經は對抗出來ない。必ず、ぼかしを用ゐて、柔かい諧調の效果を擧げなければ安心しない。一面からいへば臆病である。さまざまの色彩音響をひとつに集めて、力をもつて調和せしめるといふ冒險にぶつかつて行く意力は毛頭無い。だから、此の場にあらはれる三人の役者も、誰一人主役を演じる役廻を背負はされず、とりとめが無いといへばとりとめなく、あるといへば昔は榮え今は衰へた新派の運命を暗示するせりふをやりとりしながら、ぶらぶら散歩してゐるのである。その效果から見て、すぐれたる抒情的散文詩であり、又敍景的散文詩である。極月の曇つた空の下に、土堤と水と、枯木の景色は、うす墨の繪の趣を湛へ、人は昔の名所のむざんにいたんだ姿と共に、時勢に押流されて行く自分を嘲り歎いてゐる。久保田氏獨特の上品な感傷が、ひそかに伴奏をかなでてゐる。

「三羽烏」は、珍しくも地の文が多く、此の頃の久保田氏としてこれ程文字の數を費した事はないであらう。こゝでは、前の場の三人が向島をほつつき歩いてゐるのと同時刻に、他の場所にあ

らはれる新派の古い三枚目西巻金平なる人物によつて、矢張新派はどうなるのだらうと云ふ心配をさせてゐる。ほかの場面は二人若くは二人以上の會話を主として描いてゐるが、こゝばかりは地の文の巧みをつくして、西巻の過去を細舒した。魚屋から壯士役者となり、由良一座の三羽烏の一人となつた生一本の、時代遲れの三枚目を、喜劇とも悲劇とも、どつちとも見られるやうな、つかずはなれずの態度で行届いた說明をした。此の一節の面白さは充分推稱すべきものであるが、こゝ丈が大部分記述體で、他の部分との釣合を多少缺いてゐる憾がある。

扨て西巻は、自分達一座の屬する會社と、自分達の師匠由良との間に何か氣まづい事があり、その爲めに初春早々地方へやられはしないかといふ心配に惱んで、土產を持つて師匠の家を訪問する。折惡く主人も娘も留守で、新參の女中にそつけなく扱はれ、はかない氣持で大川端を步いて來る。附近の景色は、彼の感慨のたねとなる。

一ト晩といへどかれは俥をその河岸にとばさなかつたことはなかつたのである。芳町から柳橋へ、柳橋から芳町へ、役があがるとすぐかれは芝居を出、あるひは魚河岸の客に、あるひは兜町の最負に、あるひは木場の旦那に、呼上げられてはつねにその界隈の有名な茶屋小屋……岡田だの、福井だの、龜淸だの、柳光亭だの、深川亭だのに始終もう入浸りになつて

ゐたのである……

かれは眼を轉じて電車通りをみた。そこには廣い道の上を電車に交つて自動車と自轉車とが目まぐるしく行交つてゐる。その間を縫つてトラックが絶えずけたゝましい地響をさせてゐる。——が、嘗ての日のあれほど矢のやうに飛交つた俥の影は？……なつかしい、馴染のふかいあの俥の影は……？

「變つたなア……」

こゝ迄讀んで來て、思はず知らず微笑した。人力車の少なくなつた事は誰でも承知してゐる。しかし、それをセンチメンタリズムの小道具に持つて來たところは、何といつても淺草の詩人の仕事だ。私としては、新派の三枚目役者が、人力車の影を見ない事などに感慨を催さうとは考へられないのだが、作者はかなり大袈裟に、西巻金平と共に嘆息してゐる。

「私は人力車は嫌ひだから、子供の頃の外は、殆んど乘つた事が無いのだが、既に藝者と、仲買の御用きゝと、銀行へ行く會社商店の雇員と、觀光團の異人の外には乘らたいものとなつてからも、久保田氏は屢々車上の人であつた。時には宴會の果る迄門口に待たせてあるやうな景色さへ見た記憶がある。さういふ場合、勿論私は惡口をいふのだが、御本人は多少の芝居氣の外に、相

當人力車の美點を認めてゐて、しきりに抗辯したものだつた。尤も、流石の久保田氏も今日此頃は用ゐないらしいが、同じく下町子の小島政二郎氏は、近頃しきりに人力車の上にふんぞりかへつてゐるさうである。

それは餘計な事だが、兎に角久保田氏は、あらゆる機會にあらゆる小道具を使つて、時勢の推移をはかながらせ、且新派の衰運に結びつけて效果を擧る事に努めた。

第三節は「みぞれ」で、これは又殆んど會話だけで運んでゐる。場所は菊の家といふのみやで、出て來る人間は田代と元は芝居茶屋今は待合うたむらの亭主、後から小倉がかけつけて、やがてうたむらの亭主は歸つて行く。此の場に何故うたむらなんていふ人物が必要なのかといふと、これも亦時勢の推移を見せるのに都合がいゝのだ。芝居のいろんなしきたりが變るに連れ、芝居茶屋といふものも亡びてしまつた。さういふ手なのだ。

會話の間に、新派といふものは、このさきどうなるか、女形といふものは將來どうなるか、といふ質問を田代が出すが、結局その答案を作中に出す程作者は愚かでは無い。解決を急ぐのを避けて、曖昧のうちに話を轉じてしまふ。それが將來どうなるかといふ事などは、作者にとつては重大問題ではない。いゝものも惡いものも、ときよ時節で亡びて行くのだといふなりゆき哲學が、

むかしから久保田氏の思想をうらうちして居る。

「冬至」には、再び西巻金平を登場させ、此の威勢のいゝ三枚目、酒には不死身だと景氣づけてゐた役者も、次第に深酒が身に堪へて來る姿を描いて、新派の衰へてゆく歩みと並行させた。

「むほん」には、由良一座の若女形、藝筋がよくて、いゝ男で、親思ひで、弱氣で、氣だてのいゝ若宮を、淺草の興行師樂天坊主と、由良一座の三羽烏の一人で、西巻とはうらはらの惡玉にされてゐるけちんぼの小金貸、菱川とがぐるになつて筋を書き、一座を脱退させようとする事件を中心とし、新派の世界の重大事件の切迫を、田代と小倉の口をかりて運んだ。最も劇的の場面で、いろいろの人間の心持の紛糾が熱をもつて頂點に辿りついた。

ところが作者は、その闘爭的開展には筆をつけず、突然若宮を旅先で自殺させてしまつた。讀者にとつては意外千萬な出來事だが、作者は人情の分裂に陥る事を好まないのであらう。死をもつてそれをあがなつたのである。恐らく、一般長篇作家の手法としては、一度はむほんの成立するところ迄立入つて描くのが本當だらうと思ふが、久保田氏はさういふ動的な場面、混亂した筋立を喜ばない。この相違が、久保田氏をして常に情緒的寫實主義に居坐らせるのである。

その脈を引いて、最後の「夕燒雲」になると、由良一座の統領が、田代小倉三浦をつれて、谷中

へ墓參に行く。仲間うちのいざこざも、若宮をいたむ心に柔げられ、淋しさやうかびて遠き春の雲といふやうな句をおもひ案じさせ、その心境を以て一篇のしめくゝりをつけて完結した。
作者は、新派の衰亡といふ大きな材料をつかんだが、結局これを解剖的に取扱ふ事を欲せず、おのれの心持にひきつけて、ひと色の繪具でぼかしてしまつた。描かれた事が主となるよりも、作者の心境が主たるものとなつた。言葉をかへていへば、新派沒落のよつて來たる運命を中心にしては描かなかつた。その運命に押流されてゐる無力な人間を描く事によつて賴りない人生に靜寂なる詩境を見出したのである。why といふことばは久保田氏の好まぬものだ。何故新派の運勢が傾いたかをはつきりと主題化する事は嫌ひなのだ。それよりも、曾ては榮え、今は衰への道を辿る新派に對して、盡きない同情を寄せるのである。
久保田氏の心は、社會のあらゆる事象に對して、積極的に働きかける事が少ない。氏は將來の社會的變革に何等の希望を持つて居ないであらう。どんなプログラムにしたがつても、過ぎ去つた日をなつかしむ程ぴつたりと身柄にはまる世の中を想像する事は出來ないであらう。實行派の鬪士が血眼になつて論議する諸問題は、殆んど總て久保田氏の興味をつながないであらう。生產機關が國有にならうと、共有にならうと、はたまた永久に資本家の手にあらうと、彼にとつては

何でも無い。政治や經濟方面の社會生活を、此の詩人は自分のものとして痛切には考へないのである。自分の周圍、自分の好きな領域の間にのみ、彼の世の中がある。私は曾て或る雜誌の質問に答へて斯う書いた。

萬一此の人が作家にならなかつた場合を想像して見て下さい。たとへば官吏になり、軍人になり、會社員になり、筋肉勞働者になり――其の外あらゆる他の職業の何にでも携つたとしたら、やくざな人間だつたに違ひありません。

實際、久保田氏の心的活動の範圍は極めて狹い。彼の心を喜ばせ、悲しませ、樂しませ、慰めるものは藝術丈だ。彼が本氣になつて關知する事はそれ丈だ。內閣が變らうと、議會が解散しようと、金解禁にならうとなるまいと、普選だらうが婦人參政權だらうが、凡そ新聞紙上を最も賑かにする其の日其の日の問題は、噂を喜ぶ都會人の話材としての外、彼の心に何等の響を傳へない。又藝術を愛する心といふも、藝術を功利的に考へたり、利用しようとしたりする肚は毛頭ない。彼はたゞ藝道の玄人にのみ理解せらるゝ藝術の味ひを創造し、又味到する事に生涯を盡すのである。それは今日の、玄人と素人とのへだたりをなくなさうとする一般の人氣には反するものである。それは今日のアヂ・プロ根性とは全然相背馳するものである。彼はむかしの藝道の名匠のや

うに、たゞ一筋に自分の氣質に根ざしを持つ藝術にはげみ、工人としてのうでの練達に努める。

　さうかと云つて久保田氏は、書齋に閉籠つたつきりで世間の事は何も知らない偏屈人では無い。寧ろ愛想のいゝ世間人だ。たゞ自分の仕事だときめた人生活動の範圍が極めて狹く、それ以外の事に心を煩はす事を好まないのだ。しかも自分の心にかゝはりのない事に對して、輕蔑したり白眼視したりする意地惡根性も持つてゐない。かへつて、自分の世界以外に對しては臆病でもあり、謙讓でもある。自分なんぞが口を出したつてどうなるものかと、へりくだつた心持できめてゐるのである。それが、ひとたび藝術に關する事になると、忽ち彼の肚のどん底に、挺子(てこ)でも動かない強情が、鳥黐(とりもち)のやうに魂をつゝんでしまふ。

　いつたい都育ちの人の特性として、だいそれた事を考へない。目の前には天子様がゐらつしやる。その天子様を圍んで位人臣を極める人間がゐる。一生かゝつてもつかひきれないやうな大金持がはびこつてゐる。元帥もゐれば大將もゐる。どの方面を見ても第一流の人物が、肩を並べ陣を敷いてゐる。それより偉くなる事のむづかしさが、子供の頭にこびりついて、自然と野心をいだかなくなる。よくいへば謙讓になり、惡くいへば意氣地なしになる。

　そこへ行くと田舍の子は向ふ見ずだ。目のあたり見た事のない都會の偉大を空想し、憧憬し、

その都には自由があり、出世があると考へやすい。そこへ行つて一流の人間にならうといふ野望が強く、天下をとる事さへ樂々と想像するであらう。好んで天下國家を論ずるものは國者だ。

久保田氏は生拔の東京子だ。彼は曾て總理大臣にならうと考へた事はなかつたらう。代議士になつて國政に參與しようとも思はなかつたらう。銀行會社の社長頭取にならうとも夢想しなかつたであらう。坪内博士の向を張つて、演劇革新事業に携はらうとも思はなかつたらう。否々、彼は俳人として正岡子規の名聲をかち得る事の可能性も信じなかつたらう。小說家としても、戲曲家としても、一流の大家にならうなどゝは夢にも考へなかつたに違ひ無い。恐らく、出世作「朝顏」があれ程の評判を博する事さへ想像しなかつたであらう。彼はたゞ先輩の御眼鏡にかなひ、雜誌に掲載される丈で充分滿足するさゝやかな野心をもつて處女作の筆を執つたに過ぎないであらう。

大それた野心と懷疑は此の詩人のものでは無い。實行上のロマンティシズムは此の詩人のかゝはるところでは無い。彼は向ふ見ずにラッシュ・アワアの四辻を先頭に立つてつつ切る勇者では無い。同時に自分が斯うときめた好む道を歩む事に於ては、道端の草の花にも心をとめて、あだには見過さない。藝術製作者として、久保田氏程心的動搖の少ない人も珍しい。それが取材の範

圍の狭い缺點となつてあらはれ、他方に於ては稀にしか破綻を見せない行屆いた作風の中に、しつとりとした情緒を漂はせ、詩情と表現形式と共に純粋感の著しい特徴となつてあらはれる。

さういふ傾向の人であるから好き嫌ひがはげしく、好きなものには凝り、嫌ひなものは見向かない。そして、いつたん好きになり、その道に入つて行くと、そこに人情が湧き同情が生れ、彼自身の情緒を豊かにする泉となる。

久保田氏と、彼が深き同情を持ち、親切に世話をする新派との仲も、いつしかさういふゑにしとなつたやうだ。

私は近頃あまり芝居を見ず、殊に新派には常に御無沙汰勝なので、見當がはづれるかもしれないが、いつたい今の新派といふものは、創生時代の意氣を失ひ、何處から見ても新の字をかぶせ難い存在となつてゐる。演劇の革新を叫び、樣式的な歌舞伎に對抗して、寫實の旗じるしを立てたのは、明治時代の科學的精神と合致し、文學美術の潮流と合流するものであつた。片方は夙の昔に定型となつた技法を守る外に道の無い程完成しつくしたのに反し、一方はすべてが未開拓の自由を有し、その爲めに新鮮味を感じさせたのである。又純粋の歌舞伎を理解するには、相當の知識習練が必要であるが新派の方は誰にもわかりやすく、手取早く感激を托する事が出來た。演

技の巧拙のわからない、たゞ筋の面白さを辿る初學入門の芝居客にとつて、新派は喰ひつきやすいといふ特徴があつた。傳統的鑑賞眼を持つてゐないのがしあはせで、蕪雜な技藝も邪魔にならず、舞臺の上の悲喜哀樂を共に分つ事が出來るのである。若き新派にとつて、大衆の共感を得たといふ確信は何よりも強い後だてである。歌舞伎にとつてかはらうとする野心を抱き、信仰が生じた。新領土の開拓の爲めには、いかなる冒險をも辭さない情熱が湧いた。その挑戰に應じて、歌舞伎俳優の大頭株、今の歌右衞門幸四郎等が、新派とうでを競ふ意味で、當時流行の通俗小說を脚色した大甘物の束髮芝居を演じた頃が、新派の意氣最もあがつた時代であらう。

天下をとるには至らなかつたが、たしかに新派は一城のあるじとなつた。と、同時に、技藝の熟達の目ざましさに連れていつしか一定の型をつくり、マンネリズムに陷つた。新派式の形式美、新派式の感傷癖――あらゆる事か新派の定石によつて支配され、脚本の選定も、新派的好みに媚びるものでなければならなくなつた。一切の事が新鮮感を失ひ、かくして新派は新派自體に於て崩壞の道を辿り始めた。その上に、更にその全盛期を速かに終らせた原因としては、自由劇場文藝協會等が種を蒔いた新劇團の出現から、藝術座となり、澤正となる一つの潮流に、新の字を奪はれた事にもあるのだが、それよりも新派自體がいゝ氣になり、樂をし、太平の夢を見てゐた目

先の見えなさにあると云ふ可きであらう。

往年新派の客たつた新しい芝居客は、今の新劇の客に等しく、今の新劇の進出に對抗する新派の位置は、むかしの歌右衛門、幸四郎に比すべく、しかもその意氣に於て、遙かに頽敗的である。彼には據る可き歌舞伎劇の本城があるが、これには籠城すべき堅壘が無い。氣の腐れの甚しいのも無理は無いが、幸ひに新派には修得した寫實的技藝がある。此の際昔の壯士芝居の意氣込で、あらゆる新派式と名づけらる可きものをなげ捨て、素裸になつてかゝつたならば、局面打開の道がありさうだ。さうしない限り、新派の滅亡は文樂の壽命よりも早いかもしれない。恐らく、冷酷なる興行主は、衰運に向つてゐるものゝたて直しに苦心するよりも、亡びるまゝに亡びさせ、他のものをもつて之に替る方が算盤にあふ事を知つてゐるであらう。新派は自力で立直る外はないのである。

私はこゝで新派論をする氣は無いのだが、何故新派に拘つてゐるかといふと、「春泥」の作者久保田万太郎氏を眞魚板にのせて勝手な熱を吐くのに、これ程便利な景物は外に無いからである。さしみのつまの防風や、豚カツのつまの馬鈴薯の如きものではない。これなくしては、醤油の無いさしみとなり、ソオスの無い豚カツとなるであらう。

むかし讀んだ本の中に引用してあつたので、何處の國の誰の説だか記憶してゐないが、同情とは理解と同意義であるといふ説をたてた學者がある。それは全部的には承認出來ないにしても、少なくとも正しき同情は深き理解によつてのみはぐくまれる事は疑無い。久保田氏は新派の芝居のおもてもうらも知り盡してゐながら、今日舊劇と新劇の間にはさまつて、最も特色が無く、魅力が無く、人氣の無い新派に深き同情を持つものである。多分、文壇に於て、自作の脚本が上演されるかもしれないといふあてのある作家の外、しんけんに新派に好意を寄せるものは氏の外には無いであらう。

まことに、久保田万太郎氏は、新派の常套手段、長所短所から、新派の役者の技巧の末、內輪話に至る迄知つてゐる。高いところから低いところを見下すやうに、はつきりと見てゐる。見てゐるばかりで無く、共に感じ共に歎いてゐる。恐らく、文壇人とのつきあひよりも、もつと深いまじはりがあるであらう。常日頃、何が面白いといつて、新派の役者と話をしてゐる程面白い事は無いと云つてゐる位だ。ひとつの王國をきづきあげ、そのなかばかりで威張つてゐて、昔からの家柄が一切萬事物をいふ舊派の馬鹿々々しさを微塵も持たない新派は物わかりがいゝ。みんな苦勞人だから話が面白い。しかも、わかりがいゝ丈に弱氣である。往年新派が天下をとると夢み

た向ふ見ずの強さは、今はひとつの語草に過ぎない。新派は駄目だと自分からきめてかゝつてゐる程ものわかりがよく、且弱氣である。その意氣地なさは、プロレタリア文學論に脅かされた文士の如く、氣持の上に腐れが來てゐる。

さういふ向上精神の乏しい新派に對して、大概の人は既に何等の期待も同情も持たなくなつた。久保田氏と雖も新派の將來には期待をかけてゐないかもしれないが、深き同情を惜まない事は明白である。少しく詭辯に類するが、新派が往年の如く榮えてゐたら、久保田氏はそれ程の理解同情を持たなかつたかもしれない。せつかく技藝に細かい味を修得しながら多年いゝめを見ない新派の現狀こそ、寧ろ久保田氏の詩情に媚るものかもしれない。誰が考へても新派の代表的俳優だと思ふ故人高田實は、久保田氏の好まない藝風だつた。藝の蟲で、上手とも名人とも呼ばる可き喜多村綠郎は、他人の技藝に對して忌憚なき批評を下して讓らない人間であるが、高田丈は常に口を極めて激稱してゐる。若し高田が死なゝかつたらと思ふものは敢て喜多村ばかりで無く、新派一統のかへらぬ愚痴らしいが、恐らく此の說に眞向から反對するのは久保田氏であらう。

彼は大がかりな事、はげしい事、嶮しい事は一切嫌ひだ。英雄を崇拜せず、平凡人の正直なつゝましやかな生活をよしとする詩人だ。淸水の次郎長は彼の好まざる人物である。われわれのや

うに無責任に、斬つたりはつたりの話を興がる事は無い。さういふ凄い人間の存在は、詩人の心かうべなはない。トルストイもドストイエフスキイもゾラもバルザツクもニイチエもマルクスも、彼にはつきあへない人間なのだ。親分肌といふものは嫌ひだから、一代の代表作家で師弟の間のしつけのやかましかつた尾崎紅葉先生の如きも、彼は敢然として拒否する。九代目團十郎も嫌ひであらう。常陸山谷右衛門も嫌ひであらう。同じ理由で高田實も嫌ひなのであらう。

さうはいふもの丶、新派が衰運にあるから好きなのだと簡單に解釋してはいけない。又喜多村緑郎との古い友達づきあひや、それから延長された一團とのくされ緣の爲めばかりでもない筈である。多分久保田氏自身も氣がつかず、矢張友達づきあひの爲めの同情だと考へてゐるだらうと思ふが、私は一說を立てたいのだ。

第一、今の新派の持味には多分に久保田氏と共通のものがある。昔の新派の芝居は荒唐無稽のロマンテイシズムを事としたが、今の新派の芝居は一種の寫實である。それは現實主義と呼ぶべく躊躇されるところの寫實である。たとへば現代の社會組織、經濟組織などに何等の關するところの無い或風俗の寫實である。それは今日の中心興味となつてゐる新興事象にかゝはりの無い、まさに昨日にならんとする世態人情の寫實だ。それと同じく、久保田氏の寫實も、明日につゞく

今日の世の姿よりも、昨日につゞく今日を描く事にかゝはつてゐる。尤も、久保田氏はひとつの筋を追及する長篇物に多くの興味を持たず、殆んど俳諧の味に等しい短篇的風韻を喜ぶのに反し、新派の芝居は筋を賣物にする相違がある。だが、それは今日の新派のほんとの持味を生かすものではない。だらだらと筋を賣る通し狂言は、素人客の最も喜ぶものであるが、今日の新派の細かい寫實的演技は、夙の昔に浪漫的な筋をしいかす大まかな味を失つてゐる。だから、新派の大立物が、下座の鳴物をふんだんにつかつて、荒唐無稽な戀愛の場面をやる時なぞは、新派の新派たるうまさはあらはれないで、新派の新派たる臭味丈が露出する。それに引かへ、端役しだしのうまさは驚く可きものだ。ほんとにそのうまさは推稱に値ひするもので、しかもそれが芝居の本筋に何のかかはりも無いといふやうな不思議な光景を現出する。英雄嫌ひの、大がかり嫌ひの、浪漫主義嫌ひの久保田氏にとつて、平凡人の、日常生活的演技は最も親しみ易いものである。彼が新派のうまさを讃へるのは、此の日常生活的寫實主義に故郷を見出す爲めだらうと思ふ。

又久保田氏は、頗るつきの問題嫌ひである。露骨なる問題は彼の情緒的寫實主義の邪魔をするものとして排斥されるのである。然るに新派の芝居には曾て問題中心の劇は無い。テーマ芝居は無い。イブセン流の問題劇、勞農派的イデイオロ劇は決して新派と並行した事が無い。

勃興當時の新派は田舎者の寄集りだつたが、今日の新派は不思議に生殘つた三頭目をはじめ江戸子で固めてゐる。あくどく理窟にこだはる事は江戸子の好まないところである。今の新派と雖も、傳統的に筋のしち面倒臭さは持ちながら、決して内面的葛藤に及ばないのも、久保田氏の理解を容易に導く特徴のひとつではないだらうか。

又消極的には、今日の世の中の眞只中に渦巻く混亂紛糾をよそにして、やゝ世の中に取殘された形で、しかも自分の城のなかにたてこもつてゐる兩者の相似點も、互の理解同情を助けるものであらう。

實際今の儘にして置いたら、新派の亡びる事は確實だが、その亡び行く事に對しても、久保田氏はなりゆきに任せてしまふであらう。どうせ亡びるときまつてゐる文樂の人形淨瑠璃に對して、三宅周太郎氏が持つてゐるやうな執念深い愛着はないであらう。むかし久保田氏の作品に「なりゆき」と題するものがあつたが、なりゆき哲學は今もなほ根ざし深く心の底に巣くつてゐる。なりゆきに反抗してもがく事を敢てしない。寧ろなりゆきの悲運に際會した者に對し、同情ある觀察者の眼をもつて、はかなく見送るに過ぎないのである。

だから、新派の衰運といふ大きい問題をつかんでも、決してその問題に重要點を置かず、單な

る背景として、情緒の信託所とし、感傷の源泉として取扱つたのである。

したがつて「春泥」は、原稿紙の枚數に於ては長篇小說に違ひ無いが、その本質は抒情的散文詩であり、又敍景的散文詩である。しかも極めてすぐれたる詩である。作者の技巧のうまさは愈々動かし難きものとなつた。どんな場合でも、些かもあぶなつけなく書きこなすこまやかな筆致は、憎らしいばかりである。殊に二人若くは二人以上の會話をかりて話を運んで行く手法は、すつかり手に入つて誰人の追隨も許さない。

元來作者自身が、日常の會話の面白い人だ。隨分話好きでもある。時々はにかんで、變にしどろな話をする事もあるが、大體は言葉の選擇に意を用ゐ、いやみのない、氣のきいた、機智に富んだ話をする。會話のうけわたしの意氣も心得たものだ。それは東京育ちの人の特に惠まれた才能だが、意識的にも洗練を加へて居る。これが文字となる場合も、勿論巧妙を極めたもので、現代に於て會話のうまさ第一と稱しても過褒ではないと信じる。

「春泥」にあらはれる人物も、一人殘らず會話のこつを知つてゐる。彼等の會話の特徵は、決して長々と喋らない。半分いへば、相手が引取つてわかつてくれる。物わかりのいゝ、呼吸（いき）のあつた會話だ。しかもかなり皮肉な會話だ。何が皮肉かと云ふと、はなしてが口に出す言葉は、屢々

ほんとの心と逆の場合が多いのだ。ぞんざいな口をきゝながら感傷的だつたり、大事な事をさりげなくいつてしまつたりする。一分の甘つたれ、一分の皮肉、一分の諧謔、一分の自嘲を含んだものだ。そして、小說全體のはこびは悠々たるものだが、會話の間は頗る早い。

會て方面違ひの私の友人が、泉、小山内、谷崎、久保田諸氏に私を加へた宴席に列した事があつた。彼は平生人一倍雄辯で差向ひで話してゐても、熱して來ると演說口調になる傾向を持つてゐる程だつたが、その時は何一言も進んでは云はないで、私の隣席に沈默してゐた。どうしたのだと訊いてみると、あんまりみんなの會話のやりとりが早く、一人が半分いふと他の人が直ぐわかつてしまふ、俺の出る幕では無いぢやあないかと答へた。

又或人は、上記の諸氏から谷崎氏をぬき、そのかはりに里見、吉井、長田の諸氏を加へた會合にのぞんだ歸途、私にささやいて、今日程疲れた事は無い、どうして作家といふものはあゝも鋭どく頭が働くのだらう、側で話を聽いてゐて、その話を追つかけて行く丈でくたびれてしまつたと話した。それは常に放談をしつけてゐる文人の特技であり、東京育ちの人の惠まれたる地方的才能である。就中久保田氏は、その才能を文字にあらはす場合、斷然リイドしてゐるのである。氏の戲曲の最大の味は、會話と間に他人の企及し得無いうまさを有する事から生れる。まことに

會話は彼の特技だ。彼の小說はいつの間にか、段々地の文が少なくなり、手取早く會話で運ぶ事に昵んでしまつた。「春泥」も此の例に漏れないのである。

要するに「春泥」は、久保田氏の家の藝を代表するものである。新派といふ、誰よりもよく理解し同情する一團の衰運にある時機をとらへ、しかも之を描くのに決して問題化せず、主として會話で事件を運びながら、一切を自分の好みの情緒の中にとかし込んでしまつた。強ゐて缺點を擧るならば、新派に對する同情過多が原因となり、察しがよすぎて、突放し方が足りない事である。折角の大きな材料を、あまりに詩的に扱ひ過ぎ、作者も登場人物と共々、ひとつの感傷の波に押流されてしまつた事である。これは皆久保田氏の爲人のさせるわざに違ひ無い。

久保田氏は適度のあたたかみと柔かさを持つ尊敬すべき爲人を惠まれてゐる。猥雜野蠻は此の人の身に添はない。私は彼とつきあふ事二十年に及ぶが、未だ曾て一度たりとも、彼の口から猥談に類する事をきいた事が無い。殺伐なる言葉をきいた事が無い。それ程此の人はひとつの心持で統一されてゐる。輕佻に黑から白になり、白から黑になる眞似は出來ないのだ。常に自分の溫情の中にはぐくむ人情世界から愛着を絕たない。

彼は殆んど惡人を描いた事が無い。「春泥」の中の樂天坊主や菱川などは珍しい方で、常に善良

にして時勢に伴ひ兼ねる人間を好んで描く。平凡人のかたちづくる平凡世界、みんなが不平不満を持たず、怒號せず、靜かに分を守り、つゝましく暮らす町中の一隅にこそ、久保田氏の詩境はあるので、偉大なる物質文明の到來などは、夢想もしなければ希望もしないのである。

さういふ作者の心境が、當然「春泥」をして上述の如くならしめた。何から何迄知り盡し、深い同情を持つてゐる新派、それを衰亡のなりゆきのまゝに眺め、寂しく哀れんでゐるかたちである。意地悪く解剖し、衰亡の止むを得ない過程をさらけ出し、所以を說き、批判を與へる事は敢てしない。その渦中の人間にも一人々々なさけをかけ、決して突放して一人歩きはさせないのである。めいめいが心細く思はないやうに、誰の心にも共通の義理と人情を絡ませ、分相應の心配と安心とを與へる。其處に強味もあると同時に弱味もある。否々、上來述べて來た一切の事が、久保田氏の強味であると同時に弱味である。しかし、作者自身から見て、恐らく「春泥」は、彼が計劃した丈の事を、充分描き出したものに違ひ無く、作者の持味に詩情を誘はれる讀者にとつても、それ丈の效果は認められるのである。（昭和四年四月一日）

——「中央公論」昭和四年五月號

小山内家後事

小山内薫先生のおかくれになつたのはつい昨日の事のやうに思はれ、又時に、先生は今もなほ世に在るやうな氣もするが、はやく既に百個日も過ぎた。いろ〳〵の雜誌が追悼號を出し、多くの人が先生の一生の仕事の功績をたゝへ、先生の人としてのなつかしさを書いて手向けたが、事につけ折にふれ、先生が生きてゐてくれたらばと思ふ事が多く、惜みいたむ心は日を經てかへつて深くなつて行く。

私も「三田文學」の追悼號に執筆したが、更に新たに先生の仕事を丹念に研究し、その本質を明かにし、その功績を一層はつきりさせ度いと思つてゐる。然し、外の仕事に追はれてゐるので、何時にたつたら其の意を果すかわからない。或は何時迄たつてもさういふ時は來ないかもしれない。それより先に、私には先生の爲めに働かなければならない事が澤山ある。先づ第一に先生の

遺族の事が、私の心に重い負擔を加へてゐる。

先生在世中、私はあまりしげ〱と御宅へ出入した事が無い。先生の方から私をたづねて下さつた事は一度も無い。先生は年中忙しいからだゞつたから、用事の時は簡單な手紙か、お使の口上で濟まされた。私も先生に劣らぬ忙しいからだなので、火事地震病氣の御見舞の外に進んで先生を訪問した事は無い。私が未だ兩親の家にゐた時、泉先生や久保田氏といつしよに先生を御招きした事が一度ある。又、大正九年の耶蘇降誕祭の夜四谷坂町の先生の御宅へ御よばれした事があるが、先生が私の家の飯を食べ、私が先生の御宅の御酒を頂いたのは、お互にそれつきりだ。

度々書いた通り、私は直接先生の教を受けた弟子では無い。たま〱慶應義塾で講義されるのを傍聽した丈に過ぎないのだ。そのくせ、先生の爲めならばみがはりになる事も辭さないやうな心持をはじめから持つてゐた。私の性分として、さういふ崇拜の念があればあるで、遠慮なく先生にぶつかつて行く事もあつた。先生の議論や、態度に合點のゆかぬ事があると、つゝ込んだ進言もした。多分先生は、うるさい奴、野暮な奴とも思つて居られたであらう。しかし、私を自分の味方の一人だとも考へて下さつたであらう。それはあながち私の自惚では無いと信じてゐる。

先生のおかくれになつた日、御親類や築地の人々を除いて、私は最も早くかけつけた一人であ

る。その關係から、何の御役にもたゝないのに、お葬式の御相談に迄あづかつた。

先生逝去の晩、御親戚の或る方の御話では、先生は自分の死後全集發行の事あらば、その編輯は水木京太氏に頼め、家事の面倒があつたらば、氣の毒だが水上に相談しろと云はれたさうである。

此の事を傳へた時、水木氏は感激の涙をかくさなかつた。氏は小山内先生を神の如く崇拜してゐた。若し先生の惡口をいふものがあると、忽ち顏色を變へて怒る。打てば響くといふ形容を此處に使ふのは些か可笑いが、それ程適確に反應があらはれる。怒るのが面白いといつて、わざと小山内先生の惡口をいふ者もある位だつた。それにも拘らず、水木氏は先生に可愛がられた弟子では無い。或は、少なくとも或時代には、寧ろ憎まれた弟子であつたかもしれない。東北的の強情、多勢の中にまじつて神輿のかつげない性格は、可愛がられるよりも誤解され易い傾向を伴ふ筈だ。

とはいふものゝ、その性格の頼母しさも、小山内先生は知つてゐた。水木氏は先生の媒酌によつて好配を授けられた。ほんとに授けられたといふ可き良妻なのだ。だから、よしんば一時的に御覺え目出度くなかつたとしても、先生の心の底の底には、氏に信頼するものがあつたのである。

全集の事は水木氏に賴めと近親の方にいひ遺されたのも故ある事といはねばならぬ。恐らく水木氏は、矢張先生は自分を知つてゐて下さつたのだといふ、深い感慨をいだいたであらう。氏は、あらゆる事を犧牲にして働く決心をされた。

それにひきかへ私は、後事の御相談をうけた時、こいつは弱つたぞと思つたのである。逃げられるものなら逃出し度いと考へた。

小山内先生は一生涯働きつゞけに働き、我國の文化の爲めに素晴しい功績をのこされたが、物質的に酬いられる事は薄かつた。先生は多くの人の爲めに働く事を理想とし、實行したが、それによつて自分自身が充分の報酬を受けようといふ慾はちつとも無かつた。したがつて、先生は死後に財産らしいものを遺さなかつた。

しかも先生の家族は少なくない。未亡人、三人の坊ちやんの外に、生來病身の令姉がゐる。此の方は實に御氣の毒な方で、始終誰かゞ附添つてゐなければならない。御子さん方は十六と十四と十二で、何れも成城學校に通つてゐる。その御世話丈でも奥さんの御苦勞は一方ならぬものであらう。殊に御子さん方は頗る怜悧で、藝術的才能の豐かなところなど、父上の血統の爭はれぬものがあるが、合憎頑丈な體質で無い。

その御遺族の今後の事を考へると、私はたゞ憂鬱なる同情をもつてなぐさめの言葉を盡す丈ではすまないと思つた。さうかといつて、微力な自分などが差出がましい振舞をしたところで、どうにもなるものではない。私が先づ逃出し度いと考へたのは、卑怯ともずるいとも罵らる可きであるが、一面おのれを知るものとして許さる可きであらう。

幸ひな事に、小山内先生御夫婦の仲人、平岡權八郎氏が未亡人の相談役として一切の事を引受けられ、その他先生の友人知己御弟子の人々が一生懸命に働かうと云はれるので、私も危く踏とゞまつて「芝居の恩人」の爲めに盡さうと決心したのであつた。

吾々は今、小山内先生遺族の爲めに、三つの仕事を分擔してゐる。第一は小山内文庫の保存、第二は小山内薫全集の出版、第三は小山内薫遺兒教育基金の募集である。

傳へ聞くところによると、坪内博士が早稻田大學に寄附した演劇に關する書籍は約五千冊といふ事である。小山内先生の藏書は大凡八千冊で、その大部分は劇に關するものである。何れも驚く可き分量だ。坪内博士の方の事は知らないが、小山内先生の藏書は水木氏を主任として整理し、大體の目錄は出來上つた。たま〳〵家計緊縮の爲め未亡人は轉宅を斷行され、充分の置場所が無いので困つてゐたが、慶應義塾圖書館の好意で、同所に無料で預つて貰ふ事にした。若し特志の

方かあつて義俠的に買求め、小山内文庫の創設を企てゝ下さるならば、何よりもありがたいのである。

小山内薫全集は、老舗春陽堂から出版される事になつた。此の方の交渉は一切里見弴氏が擔任し、行屆いた取計をしてくれた。編輯委員は島崎藤村、谷崎潤一郎、吉井勇、長田秀雄、秋田雨雀、久保田万太郎、里見弴の諸氏に私を加へた八人で、大體の案を定めるのであるが、事務の進行を速かならしむる爲め、特に吉井久保田兩氏を煩はし、細目に至る迄の事務監督をして貰ふ事にした。上記の委員は小山内先生の遺志にしたがひ、編輯事務を水木京太氏に委囑する事に決した。島崎先生は内容見本のはしがきを執筆し、裝幀は有島生馬氏か擔當する。何しろ仕事が大仕事なので、委員は更に先生生前の知己に助力を求める事はいふ迄も無い。

小山内薫遺兒教育基金の募集は、假に數箇の團體を想像し、各團體夫々世話人を委囑し、募集の方法は各團體の任意と定めた。吉野博士が中心になつて、學士會が働いてくれる。國民文藝會や劇團の人々がいつしよになつて働いてくれる。築地小劇場と、劇と評論同人も、映畫方面の人々も働く。慶應義塾は、明治四十三年以來小山内先生が教鞭をとつたところだ。當時僅かに數人の生徒しかなかつた文科が、今日は本科豫科合せて五百人以上になつたといふ事である。さうい

ふ隆昌を招來する上に、先生の與へた力は大きかつた。こゝでは教職員、先輩、三田文學同人が協力して働く事になつた。

その間に處して、私も微力ながら一切の仕事の下働をつとめてゐる。うまく運んでくれゝばいゝがと年中心配しながら、かけ廻つてゐる。それにつけても何とかして、お子さん達を丈夫にし度い、活潑にし度い、明るい心持を持たせ度いと祈つてゐる。年少にして父親に別れた敏感な少年は、女中も書生もゐなくなつた家にあつて、ママの教訓に服し、以前よりも目立つて學業をはげむやうになつたさうだ。勉強はいゝ、しかしからだが何よりも大切である。

そこで私が肝入役を勤め、勤務先の運動場を借用し、小山內三人兄弟を中心とする組と、里見弴氏の二人の子供を中心とする組とで野球試合を行ふ事にした。一方は小山內家の御親戚で且先生の主治醫だつた蘆原氏の末子十二歲の義ちやんが投手、小山內家の末子十二歲の喬君が捕手、長男の徹さんが一壘、次男の宏さんが二壘、中堅は三十六歲の水木京太氏、右翼は四十三歲の私と云つた顏觸で、向ふは鎌倉師範附屬の小學校の六年生がバツテリイ、里見氏の長男が二壘、次男が遊擊、四十二歲のおやぢは右翼、その外里見氏の友人田中氏の子供の中學生が二人に、その、身內の慶應の大學生が一人といつた顏觸であつた。たゞかはない先から大分技倆に距りのある事

はわかつてゐたが、結局四回で十四對二といふ大差を生じて、コオルド・ゲエムとなつた。勿論こつちが負けたのである。

少年選手の中には、前夜から御飯が咽喉を通らないといふ程緊張してゐるのもあつたが、かう迄差が出來ては敵愾心も起らず、負けた方が泣出さずに濟んだのは何よりだつた。あとは仲よく混合テイームをつくり、終日遊びくらした。

三人兄弟には珍しい一日たつたらしく、しきりに復讐戰について論じあつてゐたが、結局相手が強過ぎて面白くないから、今度は自分達と里見さんの兄弟とそのお友達とが一組となり、三田文學同人を負かしてやらうと力んでゐる。當年四十一歳、體重十九貫何百と稱する久保田さんのをぢさんのかけ出す姿を想像して、止度なくはしやぐ事もある。

小山内先生の御遺族はどうしてゐらつしやるだらうと心配してゐる人が多いときくので、御近所に住み、往つたり來たりしてゐる私から御報告する事にした。(昭和四年四月十日)

——「三田文學」昭和四年五月號

島崎藤村先生の足跡

明治の小説のうみの親は、坪内博士の「小説神髄」だといはれる。それがはじめて世に出たのは、明治十八年の事で、その目的は寫實主義の提唱にあつた。同時に見本として、小説「當世書生氣質」が公けにされ、理論と實際と兩方面から新旗幟を明かにした。博士は「當世書生氣質」の序文の中で、全篇の趣向は專ら傍觀の心得にて寫實を旨とし、勸善懲惡を度外に置いたから、これを訓誨の料にするとも、奬誡の資にするとも、讀者の心まかせであると、勇しく宣言した。爾來我國の小説の主流は、近代歐羅巴の文學に追隨して、寫實主義を旨として今日に及んだ。

世態人情を寫すといふモツトオは、硯友社全盛時代をも貫き、やがて自然派の運動の勃興に伴ひ、一層徹底的になつた。いふ迄も無く自然派は、人生に對して科學者の態度を以て臨む事を主義とし、浪漫主義の排除、詩の追放に努めた。小説の目的は、面白をかしい架空のお話をつゞる

のではなく、人生の眞實を描寫するにありとした。既に架空をしりぞけるのであるから、經驗が重んじられるのは當前である。その經驗偏重の傾向は、やがて我國の小說の總括的特徵として、身邊小說或は心境小說の發達を促し、遂にはその弊に苦む有樣となつた。

身邊小說の味ひにも捨て難いものゝある事は否めないが、作家の生活が豐富で無く、經驗が廣く深くない場合、平凡單調に陥り易いのは自然の數である。尤も、身邊小說や心境小說の味は、玄人の味だともいへる。玄人でなければ深くは理解出來ない傾がある。だから、世間一般の讀者があきあきして顧みなくなる迄、文壇人は安んじて俳諧的陶醉にひたり、箱庭式技巧を弄んだ。おまけに、我國の文壇の他の特徵として、專門批評家が極めて少なく、作品に對する批評は、作家自身がお互にやりあふので、愈々讀者の求めるものとはかけへだゝつてしまふ結果を招いた。纖細なる神經の遊戲は、多數の讀者の感得しない所である。世間知らずの作者の身邊雜事は、多くの人にとつては餘りに縁遠い特殊相だ。

小說もいゝけれど、面皰靑年の戀愛小說にはあきあきしたとか、いつもいつも三文々士の家庭悲劇ではつまらないと云ふやうな非難は、明治文學の發生と共に綿々として今日に及ぶものである。

若しも小説の素材として戀愛を取扱ふ事を禁壓したならば、その寂しさは想像も出來ない。若しも古今東西の小説から、戀愛に關する場面を取除いたら、殆んど九割迄の小説は姿を消すに違ひ無い。誰が何と云はうとも、小説の內容として永久に勢力を振ふものは、戀愛とエロティシズムであらう。例を明治の文學にとれば、硯友社全盛時代には狹斜の街が戀愛道場の主たるものだつたから、おいらんや藝者といゝ男の若旦那やいなせな職人の情事が繰返して描かれ、さういふ都會文學にあきたりないか、或は田舍育の作者にとつては、野邊の少女に對する若者の戀がうたはれた。やがて女學生といふ階級が青年の戀の對象として出現すると、「青春」や「魔風戀風」がその方面の代表作となる、奥さん令嬢階級には、蘆花や北星が戀愛寶典を捧げた。時代が移つて、はかなく美しいロオマンスが排斥され、人生の事實を暴露し、醜を描く事を主とする傾向に迄進んで來ると、戀愛情事の取組は愈々千態萬様となつた。若様と小間使、書生と女中も事古りて、中年の小説家が若い女弟子に對し悶々の情やるせなく、移香のする蒲團に顔を埋める小説は、中年の戀といふ主題を提供して世の中を騷がした。更に進んでは、一人と一人の戀愛の單調にあきたらず、三角關係四角關係から、甲と乙との間を屢々往來するシイソオ女史や、キヤツチボオル・ガアルに迄發展した。しかも、むかしのやうに戀愛を美しいものときめて空想憧憬し、想像によ

つて描くのとは異り、多くは身邊小說の形式にそのまゝあてはまる自分の實驗記錄たのである。プロレタリア文學が喧しく鼓吹され、月々の同人雜誌を讀むと、淫賣婦と勞働者と巡査を登場人物とする戲曲、共產黨とおまわり、地主と小作人、工場主と職工を對立させた無數の小說にうんざりするが、それよりも更に多いのは、青年と有夫の婦、ダンサア、ウエイトレス、ストリイト・ガアルの交渉だ。それが、若い作者にとつては、單に有夫の婦であるといふ丈で冒險を感じ、單にダンサアだといふ事で新味を感じるのであらうが、悲しい事には何等の力ある解釋が伴はないから、むかしながらの戀愛小說の常套手段ばかり陳列される事になり勝である。

小說もいゝけれど、面皰青年の戀愛小說にはあきあきしたといふ非難の、綿々として盡きないのも無理は無い。尤も、さういふ非難の中には、全然文學に對する無理解から出てゐるものも多いに違ひ無い。戀愛を極端に危險視する立場から出て來るものもあるであらう。學校が小說を蛇蝎視し、家庭が小說を毒藥視するのは、其の適例である。

明治文學興隆期の批評家の中にも、極力戀愛小說を排して、英雄小說の出現をのぞんだ人もある。より廣き社會的背景を持つ小說の出現を希望した人もある。曾て、無戀愛小說といふ新語が文壇を賑はした事もあつた。夏目漱石國木田獨步島崎藤村の諸氏が競つて力作を發表した頃、偶

然それらの作品が戀愛小説以外のものだつたので、無戀愛小説と銘を打たれ、新領土が開拓されたやうにうたひはやされたのであつた。

何といつても明治以後の文學は未だ若い。批評家側、讀者側からいろ〳〵の註文が出ても、それに應ずる作品の出現はこれからでなければならない。紅葉露伴鷗外美妙二葉亭といふやうな諸先輩が一時にあらはれ、未開拓の地面におもひおもひの鍬を入れ、忽ち收穫を得たのは二十歳を越えるか越えないかの年齢である。紅葉山人はあれ丈の作品を殘したが、享年僅かに三十八歳であつた。それから一時代後の鏡花風葉春葉秋聲天外の諸氏も、若くして一家を成した。樋口一葉の如きは、二十五で死んでしまつた。あれ程大人びた口をきいてゐた齋藤緑雨さへ、四十歳にならずに死んだのだ。獨歩も早く世を去り、その外の誰彼も、若くして死んだ。「蒲團」の作者が中年の戀を描いたのも四十前で、當時作者は既に老人に近いものと自分自身を考へてゐたらしく、世間も亦いゝ年をしてどうしたものだといふ心持を露骨に示した。その頃は未だ日本も若かつた。小説作家にも不惑に達した人は少なかつたのだ。

けれども時代は何時の間にか推移し、作家の年齢も加はり、人生經驗も豊富になつた筈である。世態人情をうつす小説も、身邊小説も、心境小説も、ほんとに深味のある作品はこれから生れる

可きである。

小說もいゝけれど、いつもいつも面皰つらの男女の痴情では面白くないといふ非難に對し、若い者が若い者の心で小說を書くのはあたりまへだ、と思つてゐた私も、流石に年をとつたと見え、單なる戀愛小說は最早通俗小說家に任せて置けと叫び度くなつた。それは少女雜誌を賑かにし、安價なる淚と同情をもつて酬いられるがいゝ。吾々は大人の小說を求め度い。

幸田露伴先生がいつしか小說の筆を斷ち、廣津柳浪先生が、晚年一切筆を執らずに終つた心持は、最近やうやく推知する事が出來るやうになつた。四十代になつてはじめて小說を書いた夏目漱石先生が、ずつと年齡の若い自然派の連中と一緒になつて、現實暴露の悲哀にひたれなかつた心持もわかるやうになつた。晚年の森鷗外先生が、先生から見れば遙かに若い連中の向ふ見ずの強さを、あまり愉快に思はれず、時々揶揄嘲笑せられたのも無理はないと思ふやうになつた。若い者には若い者の文學があると同時に、それとは趣を異にした大人の文學がある可きだ。吾々が吹き出し度くなる程あさはかな少女小說なるものも、乳首の紅らみはじめた連中には、淚流れて果てなきおもひをさせるのである。

そんな憎まれ口はきくものゝ、私もむかしは感傷的な小說に淚組む事を知つてゐた。それが段

々成長し、容易には涙を誘はれなくなつたが、文學の味ひは愈々深くわかるやうになつた氣がする。四十にならなければ、人生の味も文學の味も、わかるものかと、同年輩の友達と共に、常日頃いひあふやうになつた。

小説の作家だつて、二十や三十で、持つて生れた力の全部を出し切れようとは思はれない。トルストイもユウゴオもドストイエフスキイもメレディスもハアディも、その傑作を世に問ふに至つたのは中年以後の事である。天賦の才能豊かなる作家は、年と共に益々思想も感情も深みを加へ、構成能力も大きくなるに違ひ無いのだ。たゞ天分が乏しいか、勉強が足りないか、若い中に何から何迄ちひさく固まつて、早老の歎を見る例の多いのは殘念である。

そんなら明治以降の作家の中で、誰が一番よく年と共に推移したか、若年寄とならず、情熱を失はず、省察の深きを加へて延びて行つたか。私は誰よりも先に島崎藤村先生に一票を捧げ度いのである。殊に近頃の作品「伸び支度」「嵐」「分配」を讀んでその感を深くした。

明治時代の産物である新體詩は、明治十五六年頃赤門の教授達の提唱によつて生れたものときくが、その人々は眞に詩人と呼ばる可き人ではなく、單に西洋事情を我國に移植すると同じ心持で、三十一字又は十七字の約束によらぬ詩を紹介したに過ぎない。緣雨が、新體詩見本と稱して、

外山調を次のやうにからかつたのは、隨分きびしい皮肉だつた。

火鉢の上に鐵瓶が
落て居るとて無斷にて
他人の物を持行くは
取も直さず泥坊で
泥坊元來不正なり
雲を霞と逃ぐるとも
早く繩綯ひ追駈けて
縛せや縛せ犯罪人

たしかにその人々の詩は、たかだか單歌の域に低迷するものであつた。散文的思想、常識的教訓を、七五調をかりてあらはしたに過ぎない。それが純粹の抒情詩となり、清新の格調を以て一代の青年子女の心に、一生涯忘れ難い程の感銘を與へたのは藤村先生の仕事であつた。文學史家は、他の多くの詩人の名を數へて功績を讚へるであらうが、作品價値からいつても、人心に與へた影響からいつても、到底比較にならない存在である。それらは總て今日は忘れられたに等しく、

今日もなほ昔日の如く若いものゝ愛誦感激するのは「藤村詩集」である。

「藤村詩集」は四卷の詩集の合本である。「若菜集」「一葉舟」「夏草」「落梅集」の四つだ。藤村先生は、詩集の序文の中で下のやうに云つてゐる。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頰をつたひしなり。

ほんとに當時の詩人は、多感の若者に違ひ無く、まだ詩形の研究も深くは行はれてゐなかつた時代だから、たゞ〳〵感激のあふるゝまゝにうたつたものと見て差支ない。藤村先生の詩と雖も、幼稚には違ひ無いのだ。しかし、その幼稚な詩が、其の當時の幼稚な讀者の胸を打つたばかりで無く、その後三十餘年を經過した今日もなほ、若いものゝ心を打つのは何の爲めか。年少の日の私も亦「若菜集」や「夏草」を讀んで涙を流した一人だ。それは多分、小學校から中學校へ移る頃の年配だつた。私は兄の本箱に祕藏してある詩集をひそかに拔出して、幾度となく繰返し、就中愛誦するものゝいくつかは、完全に暗誦する事が出來た。少年時の記憶力は強く、今もなほその幾節かを空に思ひ出す事が出來る。近年全く散文的の人間になつて、詩歌には多くの興味を持たな

い筈なのだが、頃日久しぶりで「藤村詩集」を手にして感慨深いものがあつた。勿論昔日の生々しい感激を再現させる事は無理だつたし、殊に古今集あたりから傳統的に脈を引いてゐる優雅な字句の、既に全く實感を伴はない事を痛切に感じたが、しかも私は此の詩集を、明治の生んだ第一の詩集なる事を否めない。むかし私が全部暗誦し、いつも涙を催した「終焉の夕」の如きは、詩集中最高位を要求すべきものでは無いのだが、讀返して、不覺にも涙腺に熱を覺えた。それは或は詩の力では無く、少年時の感激が今なほ私の肉體に殘つてゐる爲めかもしれないが、何れにしても私は詩人に對する感謝を新しくし、さういふ賜を受けた事を幸福に思つた。

私は思ふ。文藝作品の價値も時代と共に變化するには違ひ無いが、「藤村詩集」の如きは永久に若きもの丶心に喜びを與へる力を持つてゐるのではないだらうか。萬葉集の秀歌は今日なほ吾々に情熱をもつて迫つて來る。「藤村詩集」もそれに等しいものでは無いだらうか。いふ迄も無く、詩形は單純で、詩想は感傷的であるが、それだけ形式に捉はれず、思ふがまゝに青春のおもひをうたひ盡す事が出來たのでは無いだらうか。自分自身の心の要求のまゝにうたふ純粹の美と力がある。しかも極めて健康な美しさだ。湧出る泉の清さ、晴れわたる空の朗かさ、憂愁も悲哀も、すべてが新鮮なる色彩と香氣につゝまれてゐる。それが永久に若いもの丶心を打つ所以であらう。

しかし「藤村詩集」一巻の中にも、時と共に作者の心境の推移した跡はうかゞはれる。戀愛と自然とを素直にうたひ憧れた心は、次第に藝術愛慕に傾き、人の力を讃美すると同時に、人生の行路におもひを惱ますに至つた。更に進んでは勞働を讃へ、感情よりも意志の力を慕ひ求め、人生の闘士を稱揚する詩人となつた。絢爛は次第に淡靜となり、感傷はやうやく涙をかくし、線のふとくたくましい意力が漲つて來た。「落梅集」は明治三十四年に刊行されたのであるが、「若菜集」に比べて著しく男性的の感じを伴ふものである。けれども、此の集上梓の後、先生はふたゝびうたはず、淺間山麓の町に教鞭をとりつゝ、次の飛躍の準備にとりかゝつた。

藤村先生の小說の處女作「舊主人」は、不幸にして風俗壞亂のかどで發賣禁止の厄にあつたが、今日ならば決して禁止さる可きものでは無い。何とかして版を新たに起し、廣く人々に讀ませ度いものである。それは三十五年の「新小說」に出たのだから、詩作を終つて引續いての起稿と見られるのであるが、先生が小說家として文壇の中心に乘出したのは、長篇「破戒」を携へて信州から出て來た時である。第一の詩人が突然うたはなくなり、今度は長篇小說をひつさげて世に問ふのであるから、そこには何か急激な變化が起つたやうであるが、上記の詩集の變遷を見れば、先生の思想は一歩々々と移つて來たので、決して突然の轉換では無い。

私はさきに、先生は強い感情を抑へる更に一層強い意力を培つた事に言及した。散文の創作には、詩よりも多くの客觀的態度を持する事が必要である。情熱を內に抑へつけなければならない。感情と意志との鬪爭こそは、島崎藤村先生の一生を貫く努力であり、惱みであつたであらう。先生の詩の魅力は感情の強さから生れ、先生の小說の價値は意志の力の賜である。

先生の著書「嵐」の卷頭には、有島生馬氏の筆になる芭蕉の繪が寫眞版で掲げてある。それは何等かの重要なる意味をもつてゐるのかどうか審かにしないが、先生の飯倉片町の家の庭には芭蕉が植ゑてある。その葉を干して風呂に入れると、大變あたゝまると先生は話された。春になつたら根分けしてあげるとも云はれた。先生は芭蕉を好むらしい。

又先生は、俳人芭蕉の生涯とその仕事に深く心を打たれてゐるらしい。巴里の宿で、先生は芭蕉の書いたものを熟讀して居られた。折々の隨筆にも、芭蕉の事がよく引合ひに出て來る。曾て或る短歌雜誌の經營者の爲めに、資金の一部に充當する意味で、幾枚かの色紙を寄贈された事がある。その一枚を私が讓受けたが、それには、

あさをおもひ又夕をおもふべし

といふ芭蕉のことばが書いてあつた。

隨筆集「後の新片町より」に收められた「芭蕉の一生」といふ短文の中には、芭蕉の一生は生活を藝術とする努力だつたと說いてある。それは又藤村先生の一生にもあてはまる言葉であらう。長い間肩を並べて歩いて來た多くの文人の中で、先生の殘した足跡は、他の人のとは遙かに離れて、最も力強い印象を殘した。それは主として先生が、獨自の生活樣式を固守した事に基づくと云つてもいゝ。日常生活に於ては、嚴肅なる簡素淸貧の中に身を置きながら、先生の心は高き矜持に燃えたであらう。「破戒」を書く時の先生の貧困は、到底想像も及ばないものらしい。先生の作品の中には、榮養不良で妻が鳥目になり、子が病んで死ぬ慘憺たる光景が描かれて居る。寧ろ殘酷といふ可きだ。人道上許し難いといふ氣持さへ禁じ兼ない。恐らく往年の多感の詩人、藤村先生は冷かにこれを眺めてはゐなかつたであらう。しかし、その惱みも、意志の強さが抑へつけてしまつたのだ。先生が「藤村詩集」時代からの美に對する憧憬、仕事に對する思慕は、藝術創作の一途に集中されて、他のあらゆる慾望はすべて犧牲に供されたのだ。感傷の淚は人前にはかくされて、ひそかに書齋の內に於て、原稿紙を濡らす事屢々なるものがあつたであらう。

「後の新片町より」の中には「Life」と題する短章がある。

Life をして趨くまゝに趨かしめよ。

ただそれ丈でおしまひだ。先生は十九世紀末から二十世紀初頭へかけての我國の最高知識階級の一員として、當然自由主義者である。それが自然派的觀照態度を執る時、右のやうな短章を成さしめるのは寧ろ當然である。先生は強くうたはんとする心熱を殺して、人生の趨くがまゝの姿を冷酷に眺める事を欲した。けれども、いくら抑へつけても天賦の詩的情熱は燃えさかる。當年の自然派が、先生をかついで自派のチャンピオンとして推稱したが、先生の作風は果して自然派のものであつたらうか。自然派的客觀主義は、或は當時の先生の理想であつたかもしれない。しかし本質に於て、先生は又浪漫派でもあつた。少なくとも自然派が極力排除し、又先生自身も努めて抑壓しようとしたに違ひ無い詩情は、どの作品をも貫いて流れた。情意の闘爭の結果、おのづから二者が融合されて、覆ひ難き特徴となつたのであらう。主觀と客觀の融合は、此の詩人小說家によつて完成された。詩のある小說。これあるが爲めに、先生の作品の讀者には、女性が際立つて多いのであらうと思ふ。

先生は、人生は趨くまゝに趨かせるが、自分自身に對してはストイシズムの使徒の如く戒律をもつてのぞむ。こゝにも情意の闘爭がある。若しも先生が、「新生」を文字に書く事が出來なかつたらどうだつたらう。「新生」ばかりでは無い。萬一此の作者に、文學をもつて一切の心的苦惱を

發表する道が與へられてゐなかつたら、或は今日迄の人生の行路の中途で、自ら命を絕つに至つたのではないだらうか。それ程自分と闘つてゐる人だ。あく迄も自分の築きあげた生活様式を固守し、その堅壘に石の如く腰を据ゑながら、人生の諸相を見守つてゐる。それもたゞ科學者の如く見てゐるのではない。

物を觀るには眼を開いた丈では足りない、心の働が無くてはならぬ。

といふミレエのことばのやうに、眼と心とを、共に鋭く働かせてゐるのだ。

さういふ半生を經て來た先生が、五十代のなかばを過ぎて書上げた代表作が「伸び支度」と「嵐」と「分配」だ。

此の三つの作品は何れも所謂無戀愛小說だ。又身邊小說でもある。人生經驗の充分豐富になつた作家の、素晴しい構成力によつて、完全に組立てられた人生圖である。

「伸び支度」は、妻に別れ、男手で二人の男の子と、一人の女の子を育てゝ來た父親の靜かにうたふ詩である。父親は、近代日本の社會相を書齋から見守つてゐるのと同じ態度で、子等の成長を見てゐる。眼を開いた丈ではなく、たしかに心を働かせつゝ見てゐる。正にそれだ。

この子を生んだ母親は死んだ。その娘も十四五になり、人形をもてあそばなくたつた。原作の

かき出しは下の通りだ。

十四五になる大概の娘がさうであるやうに、袖子もその年頃になつて見たら、人形のことなどは次第に忘れたやうになつた。

これが藤村先生のかきかたの特徴だ。「袖子も十四五になると人形の事は忘れた」とは書かない。描かんとする一個の人間の記述を避けて十四五になる娘といふ一般的特性に筆をつけた。その效果は充分きいて、作品に觀念的の味を含ませる。

人形と遊ばなくなつた娘は、ひと頃はよく遊びに來た近所の年下の娘ともうとくなつた。そのかはりに、數へ歲二つにしかならない金之助さんを抱いて來て、遊ばせるやうになつた。突然娘のからだに變化が來た。それ以來一切のものを見る眼が違つてしまつた。女中が金之助さんを抱いて來ても、

袖子はもう以前と同じやうにはこの男の兒を抱けなかつた。

「伸び支度」には、作者の親としての慈愛があふれてゐる。しかしその慈愛の底には、人生の從軍記者である作家の眼が鋭く光つてゐる。たゞの親の愛よりも、その人生の解き難い不可思議を讃美する詩情がゆたかに盛られてゐる。この作はよくまとまつた逸品で、いかにも老大家のおち

つきを見せたものである。

「嵐」の方はそれとは違つて、頗る野心にみちた作品だ。「伸び支度」に穩かな父親の詩情がありとすれば、これには人生と鬪ふ父親の剛壯な意氣がある。此の一作を以て、文壇の第一線にははなばなしく陣を敷かうとする意氣組みだ。

此の作でも、妻を失つた父親が、三人の男の子と一人の女の子を育てながら、その成育に對して眼を開き、心を働かせて觀察して居る。

太郎は郷里で自作農をやつてゐる。自作農といふ好みは、いかにも自由主義の詩人の理想らしい。各人が、みづから耕し、みづから喰ひ、みづから詩をつくり、みづから歌ふ事が出來るならば何よりも樂しいだらう。だが、此の場合の父親の考へは、氣の弱い長男を、人間として強くする爲めに歸農させたのだ。そして、自身作れるだけの田と畑と、薪材を取りに行く爲めに要する丈の林と、それに家をあてがつた。餘分のものは一切やらない方針なのだ。かれこれ考へ合せて、これも亦先生のストイシズムのあらはれと見てもいゝのでは無いだらうか。但しさう考へると、我が子を犧牲にして迄も好むところに趨くのかといふ疑も避け難くなる。

次郎と三郎は夫々賦性を異にする畫學生だ。互に制作を見せ合はない程、別々のものを持つて

生れて來た兄弟だ。末子も次第に成長して九文の足袋をはく年頃になつて來た。

父親にとつては、單に體の延びて行くのを見守つてゐる時ではなくなつたのだ。子供等には子供等の、これから出て行く世の中に對する不安も喜びも芽ぐみはじめた。只管父親に縋り、頼つてゐたのか、次第に獨立した考へから、父にもあらがひ得る一本立ちの人間になりかゝつて來たのだ。

その一家の內部と照應させて、作者は時々家の外の世の中の變遷動搖を暗示的に描く事によつて、效果をあげる事に努めた。

幼い子供達の養育はむづかしかつた。中には寢小便をするのもある。それが大きくなつて、父親の兵兒帶の間にしまつてある蟇口から半月に一圓づゝの小使を貰ふ年齡になると、一層親心は負擔を感じる。おまけに父親には病氣が起つて來た。

丁度町では米騷動以來の不思議な沈默がしばらくあたりを支配した後であつた。市內電車從業員の罷業の噂も傳はつて來る頃だ。

地震も亦單なる天災として取扱はれたばかりで無く、それに伴ふ社會的出來事を見逃さず、作者は詩人らしい驚きを深くしてゐる。今の國政に反するものとして、此の大騷動のどさくさまぎ

れに殺された「早川賢」は、三郎の心に強く衝動を與へた。新しいものを求めてゐる子供等の心の中迄も、父親はぢいつと見守つてゐる。人生をして趨くまゝに趨かせよといふ理想は、子供の上にも延長されて、欲するがまゝに進ませ度いのだ。

よりすぐれたものとなるためには、自分等から子供を叛かせたい。

さういふ態度をとつてゐる。

内も外も多事だ。その交錯を、藤村先生は混雜させずに、靜かにおちついた筆致で書いた。しかし、その生活を「嵐」と觀じてゐるのである。

「家の内も、外も、嵐だ。」

「強い嵐が來たものだ。」

「過ぐる七年を私は嵐の中に坐りつゞけて來たやうな氣もする。」

と隨所に感慨をもらしてゐる。

そして此の父親は、長男を自作農にしたと同じ詩的憧憬から、次男を半農半畫家たらしめようとする考へをいだき、實行する。そして、郷里と東京と、太郎次郎の住む山と自分の住む都會とに、親と子の感情の交流を感じて、

子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の假の借家住居の間には、虹のやうな橋が掛つたやうに思はれて來た。

といつてゐる。先生といふ人は、嵐の中にもなほ詩を見出す。おし殺してもおし殺しても、先生の浪漫主義が承知しないのだ。

「嵐」がその題名に時代を暗示する意圖を含んでゐると同樣に、「分配」も亦新時代を匂はせる意識を有するものであらう。しかし、作品の主題は「嵐」に描かれた後の一家の私事にかゝはる。

太郎は郷里の山の中で農業に從事してゐる。次男は兄と共に住み、半農半畫家の生活を送つてゐる。三郎は社會運動に憧憬し、父の家を離れて仲間と一軒の家を借りてゐる。勿論親の脛噛りた。結局父の膝下には末子がゐるばかりになつた。その末子もやがては嫁ぐ日が來るであらう。老いたる父を殘して、家を出て行く日が來るであらう。父親の胸には、一脈の寂しさが迫つてゐる。彼は七十いくつかになつても生活を單純化しようと考へて、家も妻子も捨てゝ遁れんとしたトルストイにひきくらべ、自分の場合はその反對に、妻に死なれ、子供はやつと成長させると、順々に出て行つてしまつて、自分一人だけになる道を歩いて來たのだと感慨に耽る。

其處に思ひもかけない收入のある話が提供された。はつきりいへば、出版界の革命的騷ぎを招

來した圓本の印税が、およそ二萬圓入る事になつたのだ。

自分も矢張、金でも貯へて餘生を送らうとする年頃になつたのかも知れないと父親は考へては見たものゝ、彼は曾て金錢慾に惱まされた事の無い人間であつた。富とは生命より外の何物でもないといふ言葉に勵まされて來た人間なのだ。彼は結局その金を、子供達に分配する事にきめた。既に田畑を貰つてゐる太郎にも爲替が組まれた。次郎と三郎には各五千圓宛が與へられ、それは六ヶ月の定期預金となつて銀行に預入れられる。末子も幾何かの金が預金證書となつて與へられる。

分配が終つて、子等の樂しい笑聲にかこまれながら、父親には深い感慨が來る。

出版界が、あの世界の大戰以來順調な道を辿つて來てゐるとは、私には思へなかつた。その前途も心に掛つた。

うくわつには調子に乘らない大事とりの先生の心には、他の文人のやうな浮々した歡喜は湧かなかつたであらう。やがて來る出版界の混亂が、經濟理論を辿る迄もなく直感されたのだ。

私は茲に、三つの作の細かい批評をする企てを持つてゐない。たゞ私が深く感じる事は、明治の中頃に起つた現代文學も、多くの先輩の苦闘によつて、こゝ迄發達して來たといふ喜びである。

面炮青年の戀愛小說を踏み越えて、作家生活の豐富な、人生經驗の深く廣い人によつて、よなげた小說の出現する事は何たる慶事であらう。寫眞風に世態人情を寫すには、たゞ眼を開くだけでよかつたが、こゝには心の働が、冷かなる觀察に熱を加へ、うるほひを與へた。年齡をとつて、觀る眼は愈々廣く、おもひやりは益々深くなつた。「嵐」の中には「若者萬歲」と叫ばんとする心持が書いてあつたが、私は「としよりばんざい」と叫び度い。身邊小說と雖も、こゝ迄來れば個人の私事では無く、普遍性を帶びた人生詩として、大衆の心を打つであらう。

今、分配を終つた藤村先生は、更に新たなる氣力をもつて、一世一代の大作「夜明け前」にとりかゝつた。よき意味に於る野心と、情熱とが、豐かなる詩想を刺戟して、仕事の成就を完からしめん事を切に祈る。（昭和四年六月一日）

――「中央公論」昭和四年七月號

早慶野球決勝戰の日

よろづ消息通勝本清一郎氏の說によると、會社員水上瀧太郎は早慶野球戰を見る爲めに、その日迄休暇を貰はずにとつて置く程の紳士だといふ事であるが、野球試合を見る爲めに勤務先から御暇を頂いたのは、十四年間にたつた一度だ。今年も早慶戰だけは見度いと思ひながら、つとめの都合で見そこなつてしまつた。

六大學野球聯盟の今年の春の季節は、近年不振の早稻田が頗る好調子で、近年好調子の慶應が何となく亂調子の爲め、その決戰には多大の期待がかけられてゐた。早稻田には新聞といふ強大な味方があるばかりで無く、最近負けつゞけてゐるので、何とかして慶應と對等の試合をさせ度いといふ熱望が世間一般にあつた。弱い者には常に同情が集まる。そればかりで無く、早稻田には未だに木刀棍棒弓の折れなどを持ち、白袴をはき、からからに乾いた天氣の日でも朴齒の足駄

を穿き、手拭で鉢巻をし、その上に日の丸の扇を開いて指揮しようといふ型の應援團が存在する。あれは心あるものゝ眼で見ると、氣障な芝居と思はれるのだが、存外まだ世間ではあゝいふのを學生の正統的タイプと考へ、質實剛健の表徴のやうに思ふ連中もすくなくない。おしやれの慶應よりも、書生らしい早稻田の方がいゝといふ聲は、屢々聞くところである。

それが一回戰に早稻田の勝となつたのだから、一般ファンの喜んだ事はいふ迄もなく、一度も野球を見た事のない代議士も將校も兵隊も重役も旦那も院外團も課長も番頭も奥さんも令孃もおかみさんも女給も藝者も、すつかり興奮してしまつた。

「今年こそは早稻田ですなあ。」

「小川は偉いねえ。」

どこでもかしこでも、兩校應援團の熱狂のわけ前にありついて夢中になつた。

私は第一回戰早稻田優勝の報道が町々に傳つた晩、たまたま或る宴席につらなつたところ、座敷は勿論野球談で、ラヂオが傳へた知識の交換が盃と共にしげく、

「嬉しいわ、嬉しいわ。明日も早稻田が勝つてくれるといゝわねえ。」

と誰彼のみさかひなく握手して廻る藝者も出現した。

「さうか、君は早稲田最負か。」
求められた握手に應じないで、さういつて見たところ、
「あら、あんた慶應なの、慶應なんて駄目よ、あたし早稲田が大好きさ。」
ぐつと盃を干したのは、祝盃のこゝろであらう、忽ち
都の西北早稲田の森に
聳ゆる甍は我等が母校
…………………………
と黄色い聲を張上る（ちげ）と、あつちこつちに散在してゐる若い妓も、
わせだ、わせだ、わせだ、
わせだ、わせだ
とあつけにとられてゐる客をそつちのけにして、一齊に合唱し、合唱が終ると拍手した。
次の日は折角の日曜が降つた。此の雨はふだんの雨と違つて、重大なる運命を左右する雨だつたに相違ない。その雨でどつちが救はれたかといふ事も、いたるところで論じられた。小川一人を頼甲斐ある投手とし、他には一人も信用すべき投手が無いときめてゐる早稲田ファンの中には、

此の雨によつて小川が一日の休養を得、ストレイトで慶應を打破る事が出來ると考へたものもすくなくなかつたらしい。反對に、勝つと思つてゐた一回戰を失ひ、しかも絶對信用を置いてゐた宮武が頼むに足らず、水原も亦好調子で無いとなつて、まるつきりよりどころを失つた慶應ファンの中には、此の雨の一日が負けた選手の氣持の上に、いかによき覺悟と休息を與へたかを論じて、既に勝利は我がものだと斷言するものさへあつたさうだ。

實は私もその一人なのだが、しかし一回戰の戰況によつて、今年は早稻田にぶがあると見るのが大勢だつたらしい。

勤務先へ御用聞に來る株屋さんの話では、何事をも賭博化したければ滿足しない兜町蠣殼町邊の連中は、七分三分と見て早稻田側に賭けるものが十人の中九人迄だつたといふ。

ところが、第二回戰には慶應が勝つた。そこで今度は五分五分と見られるやうになつた。

「全く五分の勝負だ。」

と滿天下のファンが異口同音にいふ有樣だつた。

けれども、少しく深く觀察すれば、たとへ二回戰が接戰で戰績も五分々々だつたとしても、再び小川を立てゝ負けた以上は、早稻田の方がぶが惡いとしなければならない。私は早稻田として

はストレイトで勝つなどゝいふきれい事を望まず、二回目には松木でも清水でも多勢でも、そのほか誰でも構はず、萬一惡かつたら一回づゝ交代してもいゝから、小川丈はしまつて置く戰法に出るのが當然だと思ふ。一回戰を失つて立場の惡くなつた慶應は、二回戰には主戰投手として誰を賴む可きか、宮武も水原も昨年の如くでないとしても、奇兵を用ゐる事は許されない。どうしても、もう一度宮武を立てる以外に方法は無い筈だ。そこを早稻田は輕く受けて、負けたら負けたでいゝとし、三回戰に全力を盡すのがあたりまへだ。

二回戰の晩、私共親類のものゝ小集があつたが、殆んど慶應出身者ばかりなので、球場から勝報をもたらした者を取圍み、第三回の優勝の疑なき事を話合つた。

それにも拘らず世間では、五分の勝負と見てゐて、そして愈々決勝戰の日となつた。

私の勤務先は極めて行儀のいゝ會社であるが、この日は朝から何となく社内騷然としてゐた。會社は慶應義塾第一期の連中の發起創設したものであるから、自然慶應出身者が多く早稻田出身者は少ない。しかし第三者の勝負もある事だから、何れの勝利を祈るものもあるわけだ。平生の通り机にむかつてはゐるものゝ、ゐても立つてもゐられないやうな焦躁が、事務室の中に充滿した。

正午を過ぎる。

「もう入場したでせうか。」

「今頃はフリイ・バツテイングかなあ。」

人に話かけたり、ひとりごとめかして云つてみたり、誰の心も、會社の窓から見える皇居の樹々のしげみの遙か向ふの、神宮外苑の空の方に引かれてゐるのである。

「あゝ、はじまつたぞ。」

二時半の時計を見て、たんそくした者があつた。誰もそれを笑ふ心持にはなれなかつた。

事務室の外の廊下には、給仕連がふだんにも増してかけ廻つてゐた。

「早稲田は小川で、慶應は上野です。」

誰が何處からきいて來たのか、さういふしらせが社内にゆきわたつた。

「上野か。」

かつかりしたやうにつぶやく慶應贔負に對して、早稲田贔負には得意の色があらはれた。二人とも所謂新人であるが、小川は既に英雄であり、上野は全く未知數である爲め、片方は安心し、片方は不安を感じたのであつた。けれどもよく考へて見ると、宮武水原に信頼出來ず、上野をプレイトに送つた慶應の窮狀も推察出來るが、三度小川を立たせなければならない早稲田は、更に

苦境にあるものといふ可きである。
一人の給仕がかけ込んで來て、或る机の上にちひさい紙片を置いて去つた。それを取上げて見た人の顏色が變つた。
「早稻田が四點とつたさうです。」
その人は力無く附近の者に報告した。
「四點？　何回目に？」
「二回の裏ださうです。」
慶應出身者は顏を見合せて苦笑した。
「四點は大き過るなあ。」
私も、自分の豫想が一蹴されたかと思つて悲報に應じた。
「もう駄目だ。回復出來ない。」
「早稻田はよく打つんだなあ。」
めいめいのつぶやきが合して、愈々社内は騷然として來た。電話の呼鈴がしきりに鳴るのは、交換手が新聞社に勤めてゐる仲間からの報知を、更に社内へふりまくのだ。新聞社では、そんな

事をしてゐては應接にいとまが無いので、堅く禁じてあるのださうだが、しつつこく賴み込んでひそかに知らせて貰つてゐるのださうた。

「え、え、五點入つた？ どつちが？ 早稻田？ え、え、慶應が五點？ ありがたう。」

受話器を手から放すと、さつきは靑くなつたのが忽ち滿顏の笑をとゞめあへず、吉報を傳へると、聞かないふりをしてむつつりと檢算をする早稻田贔負もゐる。一方が四點とれば、他方が五點とる。空前の亂軍の光景を想像して、事務室のなかにも凄壯の氣が漲つた。

父さつきの給仕がかけ込んで來た。

「ちえつ、父早稻田が三點とつた。」

「七對五か。」

形勢は忽ち一變して、苦虫を噛みつぶしてゐた早稻田贔負が、快心の微笑をかくし切れず、隣席の者にからかひ面で何かいふ。

電話はしきりに鳴る。たまたま近所の人のゐない時、私も受話器を取上げた。

「五回のおもて、慶應が一點とりました。同回裏、早稻田はゼロで御座います。」

職業的に澄んだ交換手の聲が切口上で耳朶を打つた。

「慶應が一點丈かへしたさうです。」

ほかの人に傳へると、

「一點ぢやあ爲方が無い。」

と不滿の體で答へた。自分の贔負の方の吉報が來ると大喜びだが、悲報の場合には、折角知らせてくれる交換手に對しても、不當なる責任をしよはせて憤懣の語氣をもらす位だ。

戰報は刻々に來る。はじめのうちは得點を知らせる丈だつたが、段々細かくなつて來て、水原が三壘打をうつたとか、誰某が四球で出て次のカウントが三ボオルニストライクだとか、矢つぎばやの報告となつた。

四時になると、あわたゞしく仕事をしまつて、會社の門を出るや否や、馳足で四方に散つた。日比谷のプレイヤア・ボオルドをこゝろざす者、何處かのラヂオに吸ひつけられるもの、誰しも一刻も早く勝敗を知り度いのだ。

勿論私も馳出した。うちに歸る足場もいゝので、日比谷の綠地へ方向をきめた。會社を出る時は、私はまだ早稻田が一點リイドしてゐるスコアしか耳にしてゐなかつた。それがプレイヤア・ボオルドによつて見ると、八對七で慶應が逆にリイドし、アナウンサアは慶應が投手水原を宮武

にかへ、それに伴つて他の位置にも變更のあつた事を報告してゐるところであつた。

廣い綠地がいつぱいの人だ。私同様つとめ歸りの人間もゐる。學生もゐる。御用聞連中は自轉車を荷厄介にしながら、完全に商賣を忘れてゐる。中で一番目立つのは背廣服無帽の連中だ。これは夫々のつとめをうつちやらかし、ほんの五分か十分のつもりで出て來たのが、その儘歸るのを忘れて――忘れてゞはない、歸るのがいやになつてゞあらう、勤務時間後迄さぼつた連中なのだ。

私も人ごみの中に割込んで行つた。アナウンサアが氣取つた調子を張上げてゐた。ひとつひとつのボオルごとに、群集に拍手し舌打ちをし歡聲をあげてゐる。まだまだ亂鬪が行はれ、最後の回迄どつちの勝となるかわからないといふ緊張と不安が西日の光と共に漂つてゐた。

六回の裏、早稲田は三者凡退し、七回に入つて小川が退き、松木が投手板を踏む事になつた。それが報告された時、僅かなる拍手と、多くのため息が群集の間を流れた。英雄小川も遂にノック・アウトされたかといふ同情と、今年も亦早稲田は負けにきまつたのかといふ落膽が、慶應贔負の少數の拍手を、忽ち葬るため息となつたのだ。弱い方に味方する心理か、もう活劇は期待出來ないといふ自己本位の失望か、どつちにしても群集の半分以上は、つとめ先を、我家を思ひ出して、やゝ浮足になつたやうだつた。殊にこの回三二壘に走者を置いて二死の後、投手の失策か

捕手の失策か、逸球の爲めに二者生還し、三點の開きを示したので、もはや見るに堪へないといふやうな氣色をあらはし、足早に退場する者も出て來た。

退場者がある爲め、びつしり埋まつてゐた綠地にも、少しばかりの隙が出來て來た。私の眼の前の背廣無帽の二人連も、

「畜生、癪にさはるなあ。」

「いやぢやありませんか。」

といひながら、やけくそに人を押分けて行つてしまつた。

その隙間に、ついとあらはれて割込んだ二人の女があつた。近所の會社の事務員に違ひ無く、うす色のネルのお揃の着物で、せい格好も揃つてゐた。但し一人は誰が見ても相當のきりやうで、もう一人は誰が見ても不きりやうだつた。二人とも一語もまじへずに、一心にボオルド面の經過を注視してゐた。

その頃から、絕望的な期待が早稻田に對してそゝがれて來た。七回の裏、二死後に富永が四球で出て、次の打者水原の名が呼ばれると、さかんな拍手が起つた。しかし水原は凡死してしまつた。八回の表、慶應の加藤水原が四球を得た時は、殆んど手を叩く者は無かつたが、その回の裏、

早稲田二死後、森は一壘失、伊達は四球に出た時の騷ぎは大したものだつた。けれども、これもものにはならなかつた。

これよりも愈々最終囘に入つて、慶應無得點の後、早稲田のピンチ・ヒツタア西村が遊匍し、加藤が暴投を演じて二壘を許した時、つゞいてこれもピンチの内川が四球を利して無死走者二一壘とたつた時は、既に一切の期待を放棄した狀態にあつた群集が、思はず歡聲を擧げたものであつた。だが富永は凡打し、賴みに賴む水原は三振し、杉田屋は二匍して終つた。

アナウンサアの聲に對して相當の拍手が酬いられたが、群集の多くは悲痛な顏をして、うなだれ勝に動き出した。

「杉田屋君は、二壘ゴロでアウトとなり、ゲエム・セツトとなりました。」

その時私の眼の前の二人の女は、兩方から組合せたやうに相手の肩に手をかけてゐたのが、同時にその手を解くと、半巾(ハンケチ)を取出して顏にあてた。人目も避けず泣いてゐるのである。餘程の早稲田贔負なのだらう。選手の姉妹か友達か、と考へるのはあまりに大衆小說的だ。私もそれ程の浪漫主義は持合せてゐない。たぶん選手には關係なく、早稲田の學生の中にお兄樣と呼ぶ人がゐるか、ほんとの兄弟がゐるか、知人がゐるかして同情の淚をそゝいだのであらう。

私は人々に押されながら日比谷の裏門へ出た。しばらく休業してゐた市ケ谷佐久間町間の乘合自動車が、新橋迄延長を許可されて復活した。それに乘ると我家の側迄運んでくれるのだ。自動車は直ぐに來た。

私が乘り、發車しかけたところへ、

「おい、待つてくれ、待つてくれ。」

と呼び止めながら、同じく裏門から出て來た學生が三人飛び乘つた。ペンの徽章の學生だつた。

「たうとう勝ちやあがつたなあ。」

車が動き出すと、一人が大きな聲で云つた。

「いやんなつちやうなあ。今晩又銀座で騷ぎやあがるんだらう。」

と友達が應じた。

「全くたまらねえよ。外聞が惡くて爲方がねえや。」

と前のが顏をしかめて相槌を打つた。

「しかしねえ、銀座で騷ぐ奴あ、よそから來た奴が多いんだぜ。普通部から來た奴あ、一人もゐねえとさ。」

第二の學生が、多少吾々にも聞かせるやうな調子で云つた。

ふうん、さうか。私は滿足した。私は勝つて騷ぐのをむげにしりぞけないが銀座の醉態は醜態だと思つてゐる。それが、まだ慶應馴れない新入の學生の所爲で、慶應子飼の學生は一人もゐないとすると、普通部出身の私にはひどく嬉しく思はれる。こいつはいゝ話だぞ、近來にない素晴しい話だぞと、早慶試合に勝つたよりも更に深いよろこびにみち足りた。

學生は眼の前にゐる人間に、それ程のよろこびを與へたとも知らず、口では「勝ちやあがつた」とか「いやんなつちやう」とか「たまらねえ」とかいひながら、自校の勝利の歡喜はつゝみ切れず、

若き血に燃ゆるもの
光輝みてるわれら
………………

と小聲ながら二人が合唱しはじめた。すると、運轉手のそばのちひさい椅子に淺く腰かけてゐる車掌も、まだ新しい絹の靴下につゝまれた肉づきのいゝ脚の踵をあげて、輕く床をふみながら、調子を合せてゐるのであつた。(昭和四年六月七日)

――「三田文學」昭和四年七月號

小山内先生の戯曲

小山内薫先生は、詩人で、小說家で、戯曲家で、泰西文學紹介者で、劇評家で、劇文學者で、演出者で、映畫製作者で、新劇運動の指導者であつた。その生涯は不斷の努力勉強を以て貫いた。先生にとつてそれらの事は、衣食の爲の職業では無く、理想の爲の事業であつた。食へなくてもひるまずに敢行しようといふ意氣を以て終始した。

先生は一生涯童心を失はなかつた。世にも稀なる美貌の持主で、常若衆（じやうわかしゆ）であつたが、その魂も常に若々しく、みづみづしかつた。若年にして詩人として文壇に打つて出た先生は、後年詩作を廢したが、詩心は最後迄捨てなかつた。

先生は曾て基督教を信じたが、後には自ら背教者と名告（なの）つてゐた。自分では、信仰を失つた人間として、それをひとつの悲壯なる事のやうに考へてゐたらしいが、實は一生宗教心を振捨てる

事は出來なかつた。一時は大本教に凝つて、家を擧げて綾部の本山に赴かうとした事さへある。先生の童心は、世の中に奇蹟の行はるゝ事を疑はなかつた。

先生は藝術至上主義者であつた。後年民衆の爲の藝術を理想として宣言したが、遂に先生は民衆と妥協する事は出來なかつた。或る論文の中で先生は本音を吐いてゐる。曰く、需要が供給を生むといふ經濟學の原則は、今日の日本の芝居道にもあてはまり、一般見物の嗜好に投ずる事のみを專一としてゐるが、それは自己の藝術を持たない證據である、元來公衆の求めるものは藝術とは縁遠いものであるから、藝術家は自己の信ずるものを供給するだけでよく、公衆はそれによつて導かれるのである云々。

又曰く、眞の民衆藝術とは、藝術を民衆へ引き下げることではなくて、民衆を藝術へ引き上げることとである云々。

先生のこの信念は強かつた。けれども、先生は象牙の塔にたてこもり、ひとりで藝術を樂む態度を嫌つた。藝術家として、此の人生に貢獻する事を理想とした。先生は詩人であると同時に企業家であつた。仕事を以て人生の爲に盡さうとする熱情が、既成宗教に別れた後の先生の宗教であつた。その信仰を胸に抱き、勇敢なる鬪士として、我國演劇運動のトップを切つたのである。

先生は幼少の時から歌舞伎劇には深く親しみ、眞砂座時代の伊井蓉峰一座の作者の一人として劇場の修業を積み、劇文學に關する書籍を涉獵して泰西の新劇運動事情を極め、充分の知識と勇氣を蓄へた上で、自由劇場の運動を起した。それは坪内博士の文藝協會と共に我國の新劇運動の口火を切り、しかも前者よりも遙かにすぐれたる演出を見せ、且比べる事も出來ない程大きい影響を殘した。文藝協會は分裂して藝術座を生んだが、これは自由劇場に比して遙かに民衆的であると共に低級であつた。以後、幾多の劇團が生れ、忽ち泡沫の如く消えた。當年の新劇運動を回顧して、誰しも自由劇場の功績を第一に數へるのはあたりまへである。自由劇場は、はじめて近代劇の正しき演出を示し、我國に於る戯曲の誕生に強い刺戟を與へた。自由劇場が無かつたならば、此の國の新劇運動は、暗中摸索時代をもつとながく經驗しなければならなかつたであらう。

先生の企業的精神はそれ丈では止まなかつた。先生はひと頃、映畫の制作に熱中し、その方面の俳優を養成した。先生一流の狂熱的信仰は、一時芝居を活動寫眞に見かへる迄深く進んだ。

近年、築地小劇場の運動を起すと、先生は遂に身命を賭けてその指導に任じた。

築地小劇場は演劇の實驗室として尊い使命を果した。けれども、先生が演劇の實驗室に供したのは、たゞに築地小劇場のみでは無い。先生の一生の仕事振を見ると、恰も我國の劇壇を、大な

る實驗室と見做してゐたのでは無いかと思はれる。

第三者から見ると、先生はながからぬ一生に素晴らしい仕事をしてのけたのだが、先生自身にして見ると、まだまだ將來に試み度い仕事は澤山あつたに違ひ無い。すぐれたる理解力と、廣く深く身についた知識を傾けて、芝居に關するあらゆる試みを敢行し度かつたに違ひ無い。先生は完成品を制作する事に專心なるよりも、指導者として、開拓者として、吾々の時代の先頭に立つ役廻を引受る人であつた。

以上は私の見る小山内先生の總論であるが、戲曲家としての小山内先生も、これ以外の人では無い。先生は自分自身立派な戲曲作家である事を心がけ、又確かに立派な戲曲家であつたが、それよりもなほ大きい先生の姿は、後から生れて來る戲曲家の爲に、戲曲の書方の範を示したところに見出される。

先生は天性のスタイリストだつた。日常生活に於ても、先生は自分のスタイルに無頓着ではゐられなかつた。それは服裝の末に至る迄敏感だつた。例之(たとへば)或る仕事をする時のみなりは、その仕事にぴつたりあてはまると考へたものでなければ承知出來ないのだ。他の異なる性質の仕事をする時には、又別のみなりをしなければ氣が濟まない。それが仕事の上にもはつきりあらはれて、

往年自然派の運動の旺んだつた時代には、平面描寫が一般に行はれた手法だつたが、先生は多種多様の短篇小說を書いて、ひとり獨自の道を開いた。戯曲制作の場合にも、先生は完全にスタイリストの本分を發揮し、さまざまの形式の戯曲を提供し、又いろいろの演出の見本を示した。

しかし總括して見れば、先生の戯曲の著しい特徵を數へる事が出來る。先生は戯曲を文學から引離す事に努力した。戯曲の形式をかりた文學を作らうとはしなかつた。文學的の味を持つ事は意識的に排除した第一人者である。戯曲は演出によつてはじめて生かされるものでなければならない。

先生は言ふ。抒情詩の目的は抒情そのもので終る。小說の目的は說話そのもので終る。ところが戯曲の目的は戯曲そのものでは終らない。戯曲が一種の文學であることに異論はないが、それは決して文學に終るべきものではない。戯曲は舞臺の上に躍動して、はじめて本來の目的を達するのである。戯曲は演出の臺帳としてのみ價値があるのである。

さういふ立場から、讀んで感じる文學的感興の如きは、極力否定する事に努力した。此の場合、先生の詩人的氣稟は、戯曲から詩を追拂ふ努力の讚美となつてあらはれた。詩的低徊趣味はあくまでも排斥された。したがつて、先生の戯曲はテンポが急速で、いきぎれのしたやうな短い會話

が、いそがしくとりかはされるのである。

先生は戯曲の對話についてはつきりした主張を持つてゐた。小説の會話は讀まれる詞であるが、戯曲の對話は話される詞で、且行爲の伴ふ詞であるといふのだ。

先生の戯曲の會話は、登場人物に特殊の思想を語らせる爲の會話ではない。作者の思想、作者の主張を放送する爲の會話でもない。舞臺の上に氣分を漲らせ、詩情を漂はせる爲の會話でもない。それは作中の人と人との行爲に伴ふ必然的會話である。有機的にその場面の進展と共に働く會話である。同時に又先生は、寫實的の自然らしさをねらつた會話を書かずに、思ひ切つた省略を加へ、エッセンス丈を抽出し、簡單明瞭を旨とした。限られたる時間と限られたる場面に於て演出せらるゝ戯曲の性質が、寫實的の自然らしさを求める事を許さないのである。だから、先生の戯曲の簡單明瞭な、急速調の會話を讀む時は、舞臺上の演出の場合を想像して讀まなければならない。極端に省略された會話は、巧妙なる間と、抑揚と、やりとりのいきによつて、はじめていきいきとした效果をあらはすのである。

先生は又ト書の省略を斷行した。ト書は、戯曲を讀む人の爲には舞臺面を如實に見せる一助となり、演出者や役者にとつては、いかに手がく可きかを指示する役目を持つてゐる。時には、そ

れがあまりに細かい指定を敢てする時、演出者や役者を窮屈に束縛する結果を伴ふ事さへある位だ。だが、舞臺で芝居を見る人には、一切無くても差支ないものである。先生は演出者の立場から、細かいト書のわづらはしさを感じる側にあつた。作者と役者の外に、演出者の參加を必要とする以上、演出者を束縛するト書は限定的でなく、ゆとりのあるのが望ましいに違ひない。ト書は、小説の地の文とは全然性質を異にするのである。

演出者としての先生も亦、あく迄もスタイリストだつた。寫實的演出のみに頼らず、屢々自由奔放なる手段を用ゐた。既に演出の様式が多種多様であるとすれば、戯曲の書方も自由になる。おもふに、近代戯曲の發達の一特徴は、演出の進歩によつて促されたであらう。すぐれたる演出者としての先生の戯曲が、演出の飛躍と伴つて最新様式を採つた事はいふ迄も無い。幾場面の變轉、映畫式舞臺推移は、先生の自由自在に驅使した一方法であつた。そして幾多亞流の徒が、いきを切らして追隨した。

先生は戯曲をかりて自己を語らうとした事が無い。素材を取扱ふ事にかけては、完全に客觀的態度を保つた。史上の英雄をとりあつかつても、それに對して崇拜の主觀を微塵もまじへなかつた。同時に又滑稽化する事もしなかつた。ある場面の中に生きる多くの人の中の一人としての外、

特に誇張した役目を與へなかつた。先生にとつては、あまりに英雄化する傾向の強かつた過去の芝居に對する反抗もあつたであらう。演劇道の局面展開の意圖もあつたであらう。隅から隅迄芝居を知りつくしてゐた先生が、いかに所謂お芝居になる事を避けたかは、先生の戯曲の實證する特徴の一つである。

お芝居は避けた。だが、先生程芝居の約束を完全に守つた人はない。だから、先生の戯曲は、少數の例外を除いて、殆んどすべて上演された。讀む戯曲でなく、演出さる可き戯曲である事を明かにした。

言葉の誇張を敢てすれば、それは文學的戯曲といふよりも、工學的戯曲である。名人のさしものしの仕事のやうにきちんと寸法があひ、すぐれたる技師のひいた設計圖のやうにぬきさしならぬものである。(昭和四年六月二十日)

――「三田文學」昭和四年八月號

「一つの時代」と「南京六月祭」

數年前の事である。或る雜誌の編輯者の訪問を受けた時、自分の雜誌は當代一流の大家の作品を載せる事をほこりとして居るが、これからは大に新人の作品を紹介し度いと思ふ、若しあなたが編輯者なら、今賣出の作家の中から先づ誰を選ぶかといふ質問に接した。私は卽座に犬養健氏の名をあげて答へた。その時編輯者に、私の說に從つてどうしようといふ考の毛頭無かつたのは勿論の事で、たゞ座談のついでに訊ねたに過ぎないのだが、たまたま私の答はその人の腹案と一致し、間も無く此のすぐれたる若き作家の作品はその雜誌を飾つた。

その癖當時の私は、氏の作品をそれ程多くは讀んでゐなかつた。否、その當時ばかりで無く、その後も氏の作品を、人に先んじてむさぼり讀むやうな事は無かつた。私の怠慢には違ひ無いが、ひとつには氏の作風が、讀者の熱情を煽る性質のもので無い爲でもある。第一小說集「一つの時

代」さへ、親戚の若者に借りたまゝ、長く机上に埃を浴びさせた。それにもかゝはらず、時々雜誌で讀む作品には愈々感服の度を增し、将來の大成に深い望をかけつゞけて來た。かくれたる愛讀者の一人であつた。

その頃私は犬養氏にあつた事も無く、その後もおつきあひは無い。先年芥川龍之介氏が自ら命を絕つた時、お通夜の席で挨拶をかはしたのが初對面で、最近氏が支那へ行く前に、私の勤務先へ立寄つてくれたのが二度目で、それつきり御目にかゝつた事は無い。

私が彼の編輯者と話をした當時の氏に關する知識は、犬養木堂先生の息子で、新潮社發行の日記帳のしまひについてゐる文士錄に名の出てゐる人の中で、最も年少だといふ事しか無かつた。

犬養木堂先生は私の好む型の政治家である。これ亦度々風貌に接した事はないのだが、先年大阪在住時代に、同窓會の席上講演を聽いた事がある。歐羅巴大戰がもたらした好景氣に醉つてゐる國民に對して今後の日本の多難なる事を說き、思想問題に及んでは當時流行の民主々義や、露西亞革命の根本思想の透徹した批評があつた。瘦つぽちで背中が曲つてゐて、本來ならば貧弱な見かけの筈なのだが、素晴らしく鋭い眼光で、それ丈でも充分人間力を見せ得るのが、頭腦の冴えと莊重な辯舌で、よき藝術に對する時のやうな緊張感を與へた。よくある政治家型の誇張や感

傷調の微塵もないのもこゝちよかつた。

健氏の小説を讀む時、私には嚴父の印象を忘れる事が出來なかつた。ひとつには、その人を知らずに作品に感心し、どんな人かしらと想像する心の隙間に、大阪ホテルの川に面した露臺のやうなところで、多數の人間を嚴しくいましめる態度で、時々拳骨を突出して話した木堂先生の矮軀が浮ぶのであつた。

しかし、健氏の作品には、嚴父と同じものわかりのよさ、解釋の正しさはあるが、老大人のそれの如き鋭さや凄みを伴はない。聞くところによれば木堂先生は、事物に對する味到力の強い人で、刀劍硯書畫の如き、何れもすぐれた觀照力を持つてゐるさうであるから、賦性は同じでも、生ひ立の相違が二者の風格にへだゝりを生んだのかもしれない。若し木堂先生をして艱難辛苦の政治家の生涯を踏ませず、偉い父を父とし、貴族富豪の子弟の通ふ學校に通はせたならば、あゝいふ凄味のある政治家とならず、情緒豐かな小説作家になつたかもしれない。若し健氏をして嚴父の如き生ひ立ちを運命としたならば、鋭角の度はもつと著しいものであつたかもしれない。

いづれにしても「一つの時代」「南京六月祭」の作者は、よき家に育ち、正統の教育をうけ、世の嶮しさに觸れずに成人し、惠まれたる才能はすこやかに延び、年若くして作家生活に入つた人で

ある。その純情につゝまれた作品は、くもり無くほがらかに澄んだものである。

よき意味に於て、無色の若い心の上に強い影響を與へたのは、同窓の先輩が經營した雜誌「白樺」一派の作家達である。人の一生のうち、一番強く人を崇拜し、その影響をうけ、內部革命を遂げるのは少年期から成年期に移らうとする頃であらう。大人になつて感受性が鈍くなつては、他人の影響をうける事は少なくなる。恰も「白樺」が若い魂に藝術愛好の熱情を與へたのは、犬養氏の心の攝取力の最も旺盛な時代だつたに違ひ無い。その時代の感激は、肉體の組織となつて殘るかと思ふ程強いものである。

一口に「白樺」派の人道主義といふが、「白樺」が廣く若者の心に與へた影響は、人道主義的精神よりも、むしろ藝術愛好の熱情を湧き立たせた所にある。西洋文明に早く觸れる機會の充分惠まれてゐる境遇に育つた人達だから、いちはやく西洋藝術の觀照の道を開き、ロダンに感激し、トルストイに驚き、ストリンドベルヒに打たれ、セザンヌに醉ひ、ゴツホに參り、「隨分感心した」とか「隨分驚いた」とかいふ流行語をつくり出した。正確なる批評をもつて紹介するよりも、漠然とした以心傳心的感激で、善良無垢の若い魂を、底からひつくりかへしてしまつたのである。「白樺」流の陶醉は、さかんなる勢で瀰漫した。このつかまへどころの無い、しかし力強い感激は、

事細かに事物の詮索をしたければならぬ文學青年よりも、遙かに頭の働きの單純な畫學生に影響するところが多く、世人がいふ人道主義的精神よりも、藝術愛好の熱情を煽る方に結果があらはれた。

その「白樺」のひと粒種とも見る可きのが犬養健氏である。一時は、志賀氏の亞流、武者小路氏の亞流、有島氏の亞流、里見氏の亞流がかなりはびこつたが、何時の間にか姿を消して、しつかりと根をはやしたのは犬養氏一人だと云つても差支へあるまい。氏には――殊に「一つの時代」當時の氏には、「白樺」派のすぐれたる諸作家の特徴が、その持味の中に融合しながら、なほ且分離して指摘する事が出來るのであつた。小說の構成法、文體、觀察、理解、反省力等に志賀直哉氏の影響が著しく、文壇一般の常識として、犬養氏といへば直ぐに志賀氏に學ぶ者と見做すのもあながち無理では無いのである。たしかに此の作者の神經質は、志賀氏の電波を受けて鋭くなつたものと考へられる。たゞ、志賀氏に見るやうな極端な氣むづかしさ、時には病的とも見え、意地惡とも見えるあの氣むづかしさは無く、もつともつと朗かである。此の二作家の作品を比較する時、レムブラントとルウベンスの繪を想ひ浮べる。

人道主義的精神は有島武郎氏の遺産とも思はれるが、武者小路實篤氏の人生哲學の影響は更に

深く刻印されてゐる。たとへば或事件に當面した時の解決のつけ方は、あく迄も武者小路式である。恐らくは無意識のうちに、武者小路哲學をもつて生活上の規範としてゐるのではないだらうか。例を作品にとれば、第一著作集「一つの時代」の巻頭を飾る「愚かな父」は一人稱で書いてあつて、談話者は作者とは年齢の甚敷く違ふ老人であるが、事件に對する解釋は、作者自身のものと見てよさゝうである。愚かな父は、自分でも無學な凡人だと思つてゐる實直な老人だが、娘を文學者肌の若者の嫁にやる。娘は一時に境遇が變つたので、身邊の事が一切氣にかゝり、それが重荷となつて居たゝまれなくなり、逃げ歸つて來る。先方でも自分達のしうちが悪かつたと思ひ、良人がつれ戻しに來るが、最初から氣に喰はない婿に對し、老人はつゝけんどんに拒絶してしまふ。だが娘は次第に良人が戀しくなり、置手紙をして嫁入先へ逃げて行つてしまふのである。

その出來事の登場人物は、すべて武者小路式の自己肯定に近い解決をして、すくなくとも動的の悲劇を生まずに濟ませてゆくのであるが、文學者肌の若い良人が妻を連れ戻しに來て、玄關先で愚かな父と對談する會話や態度は、完全に武者小路哲學の影響を證明する。又娘の置手紙にも、愚かな父の述懐にも、同じ事が明白にうかゞはれる。そんなら、何が武者小路式かといへば、事件の解決にあたつて、迷ひ無く、單的に、明るい方へ進んで行く事である。父と良人と妻と、此

の三人の主役の示す明快主義は、やがて若き作者自身の心であらう。

ついでにいへば、志賀有島武者小路三氏の影響は明かに見られるが、「白樺」の生んだもう一人の名作家里見弴氏の影響は、此の人のうちに見出す事が出來ない。趣味の相違が全然うけつけなかつたと見る可きであらう。たとへば里見氏は、山の手の屋敷育でありながら、町方の趣味を多分に持つてゐるが、犬養氏は全然その方向に追隨して行かない。又里見氏は、ひとつの思想を尊重し、それに捉はれ、その發想に專らなる作者ではなく、どんな世態人情でも書きこなさうとする玄人作者だから、他人へ影響する力が、客觀描寫の絢爛なる場景の中に散在して、單的に人に迫らないといふ點も考へられる。尤も此の頃は「まごゝろ」を說く事しきりであるが、あれは主として自分或は作品の主人公の行爲を是認する場合に役立ちこそすれ、「まごゝろ」をもつて他人の心に觸れる力は存外弱いから、これも亦影響を及ぼす方向には働かないものと見て然る可きであらう。

「一つの時代」の作品の多くは、大正十年から十二年迄の間に制作されたのであるが、たゞひとつ「弱い生徒」は大正七年の作で、年少の作者が純情を以て語る少年時の追憶詩である。その中には、その後の作者の心の芽が純粹無垢に見出される。正義感、友情、傳統的教養、理智と感情の

均衡のとれた美しさ――それは犬養氏の作中に登場する人々の人格をかたちづくる要素である。この作について何よりも驚く可きは、此の作者の育つた階級の少年達が、いかにおとなしく、素直で、上品で、浮世のいやな事に無智であるかといふ事だ。大きい屋敷の奥深く育ち、家々にはやかましい掟があり、それを疑ふ事なく守り、みだりに街頭の塵にまみれない美しさは羨む可きだ。若しすべての人が斯程に善良であるならば、その人々は永久にしあはせであるが、世の中はもつと不都合に出來上つてゐる。此の境遇に育つた人が大人になつてどうなるか、世上の實際に照らして見ると、結局しあはせかどうか疑はしい。よき保護者があり、よき指導者のある限り、しあはせは續き、美しさは保たれるが、一人立ちになり、複雜多岐な世の中のこすつからい人間に伍して、浮世の荒浪を乘り越えて行く力を缺いてゐる。「弱い生徒」の主人公「私」は、子供のくせに利巧過る、才があり過る、早熟でいけないと先生に訓戒される少年だ。彼は自分でも、小利巧といふものがどんなものかを知つてゐて、何故自分は先生の氣に入るやうなおつとりした品のいゝ少年になれないのかと寂しく考へる。何も知らないでゐろ、上品であれといふ訓戒の下に育つのだから、早くから稼ぐ事、儲ける事、人のきげんをとる事に心を向けねばならぬ境遇の者とたゝかつて、どつちが生存力を持つてゐるかは說明する迄もあるまい。少なくとも處世の上、世

渡りの上に於て、一騎打をする力は比較にならない。さういふ人形のやうに脆く、手ぎれいに育つた少年の一群の中に、友情と正義感を求むる「私」がゐる。かなり強く、彼は正しき事に憧れてゐる。けれども、此の作者には純粋浪漫派が持つてゐるやうな狂熱が無い、昂奮が無い、宣傳が無い、絶叫が無い。他人に迄も正義に對する共感を強ひるところが無い。あるものは、それによつて只管自分を磨かうとする事丈である。そこに犬養氏のよき持味があり、純一にして多岐なき弱味があり、やがて聰明なる作者をして、自らの進む可き道が何處にあるかを迷ひ惱ませるみなもとゝもなつたであらう。

もうひとつの學習院物「朧夜」も、上流子弟の育てられてゐる生活が、吾々に未知の小世界を展開して見せる。私には一種の異國趣味を覺える程だ。先生も生徒も、吾々の經驗界の外の存在だ。他人を傷つけず、自分の品位を汚さない心持、同情深く、己れをつゝしむ行儀のいゝ人々である。意地が惡くなく寛容であり、且自分が寛容である事を認めて、自分の行爲を是認する立場に在る人々だ。この人々は、年齢と、地位と、職業と容貌こそは各々異なるが、共通の美點と弱點をもつて「一つの時代」の隨所に登場する。

かういふ善良な人物が登場する舞臺は、それにふさはしい靜かな、長閑な風景に圍まれてゐる。

その代表的なものは「眼白」である。郊外の小春日和に上氣したやうな家庭が描かれてゐる。極めて育ちのいゝ若夫婦の善良な結合は、まことに羨望に堪へないものがある。嫁いで來て、未だ子供の無い細君――それはまだ子供の無い事を寂しがるところ迄も行かないうぶな細君で、犬を飼ひたがり、小鳥を飼ひたがるのを、學生々活から遠く離れない良人が、おだやかに、しかし注意深い眼をもつて見守り、時には輕くたしなめ、からかひ、よき友達のやうに暮らしてゐる。その細君に對する愛情のみちた觀察、小動物や植物に對する觀察は、充分のゆとりを持ち、何等の誇張を件はずに柔かい照明を投射してゐる。此の良人の姿は直ちに作者の姿を彷彿させる。正しき眼、親切な觀察は、此の作者に惠まれた天賦のものだ。その眼は、單に物の姿を正しく見てとるばかりでなく、同時に素直な心に反映し、反省を呼び起す。一本の草のそよぎさへも、あだには見過さず、何かを心に與へる。あらゆるものに觸れて、心の糧を攝取する。明鏡が、作者の胸にいだかれてゐる。犬や眼白によつて引起される小事件に當面して、よき夫婦が取替はす會話、一擧一動、ふれあふ心、すべてがこまやかに、柔かく取扱はれ、描寫されてゐる。作者の濁りなき心境は羨しく、自分の險しい心に引きくらべて、あまりの相違になさけなく思つた。それは望んでも行かれない遙か向ふの國だ。「山の彼方の空遠く、さいはひ住むと人のいふ」といふ有名な詩

を想ひ浮べる程、私の經て來た年齢と、多事な經驗は、氏の描く景色に憧れながら、しかも其處に住む資格を私から奪つてしまつた。手の屆かない理想郷として、一層此の善良なる人々の住む世界を尊く思ふ。

「姉弟と新聞配達」も、「眼白」と同じやうな善良な若夫婦の家庭が描かれ、あらゆる事が善意に解釋されて行く朗かさは甚だ氣持よく、まとまりのいゝ、含み味のたつぷりある好短篇で、「一つの時代」の中で最も愛好すべき作品である。

「冬の出來事」は集中異色のあるもので、羨しいやうな一家團欒の中にありながら、不圖した事から地球の壽命、人間の死といふ問題に恐怖を感じ出した學生が描かれてゐる。だが、その心を脅かす底知れぬ恐怖感には、讀者を引擦つて行く丈の力が無い。おもふに、此の種の變態的心理は、明朗なる作者の心境にしつくりと融合しないのでは無いだらうか。その中心興味よりも、寧ろ主人公のあたゝかい家庭、殊に若い妹の姿などは、明色ばかりで描いた繪畫のやうに柔い諧調で、正統派の確實な手法で描寫されてゐる。

「何よ。兄さん。」

後ろの、一段高い階段から夏子は兩手を兄の肩にあてゝ、優しく彼にのしかゝりながら、

から寄つて尋ねるのだつた。――紫の矢がすりの銘仙の袖が、柔かく彼の片頰を包んだ。

「何といふ、自分と血を分けた、親しい間柄なのだらう！」

彼女の輕い身體をしつかりと、兩肩で受けとめながら、そんな考が良一の頭をかすめて通つた。

かういふ名描寫が隨所にある。階段を下りてゆく兄のうしろから、紫の矢がすりのきものを着た妹が全身の重みをもたせかけながら甘つたれた口をきく肉身の情愛の中に、文字を以て體溫迄も描き出した。性慾的で無い肉感を、此の作者は屢々のびやかに描寫する。

假に「弱い生徒」と「朧夜」を學習院物として、「眼白」と「姉弟と新聞配達」を若夫婦物とすれば、「初夏」と「二人兄弟」は兄弟物と呼んで差支へないであらう。

私は犬養氏の家族の事を知らないが、此の二作によれば、或點迄は氏と氏の兄なる人をモデルにしたものと想像される。「初夏」には、兄と弟の美しい心持が丹念に描かれてゐる。尤も、同じ美しい心のあらはれを捉へてはゐるものゝ、兄の場合と弟の場合とは全然別の軌道を走つてゐる。要助と充造は同じ腹に生れ、二人とも養母の手に育つたのだが、兄は結婚問題から廢嫡され、その後は生母とのみゆきゝしてゐる。世間並の眼から見て、兄は出來のよい方でないが、弟は全く

反對の性格で、學者風のほめられ者である。一方はあくせくとみすぎよすぎにうきみをやつし、一方は大きな商家の若旦那として不自由なく暮らしてゐる。いかなる點から見ても、兄は弟と肩を並べて立つ事が出來ないのだ。それにも拘らず、兄は何のひがみも嫉妬も持たないばかりか、かへつて弟を尊敬し、美化し、英雄化し、偶像化して滿足してゐる。彼は弟の如き知識人ではない。學問は出來ない。いゝ息子では無い。偉い人間になり得る性格は微塵も惠まれてゐない。しかし、何といふよい人間であらう。自分の弱點、過失は充分知つてゐて、一切の事をいゝ意味で見ようとするまごゝろの人間だ。

弟は兄よりも複雜な、氣むづかしい性質で、彼は兄の心の底の美しさは知つてゐるが、いろいろの事に對する批判的の氣持から、そのまゝ是認する事は出來ないのである。兄弟は言葉づかひさへ反對で、兄が弟に氣兼しつゝ叮嚀な口をきいてゐる。だが、此の弟とても、敎養と境遇から生れる矜持をかなぐり捨てれば、兄と手をとつて理解しあへる人間なのだ。

母は母で善良であり、兄の妻も、弟の妻も、養母も、みんないゝ人ばかりだ。

その弟が結婚し、はじめて妻を連れて、兄夫婦實母達をたづねる日の場景が、此の一篇の主要なる頁を占めてゐる。新夫婦を迎へる生母や兄の心づかひは、あまりに善良過ぎて讀む者をほろ

りとさせる位だ。

此の作者の、善良なる人ごゝろの讃美は廣く深くゆきわたつてゐる事斯の通りであるが、その一方に卑賤、低能、下品等を嫌ふ心持は相當強い。しかしそれは、世俗の貴族階級に見るやうな無反省におもひあがつた心持から來てゐるのでは無く、よき人格を求むる心の強さの反對面として現はれるのである。したがつて、露骨にそれを罵りさげすむ事などは無く、時々朗かなる心境に陰影を投げて、瞬間的に不機嫌にする程度に止まるのである。

「二人兄弟」の兄と弟は、「初夏」の兄と弟の名前と、そのあらはれる場面とたかへたものに等しい。兄は、極端から極端に感情が移りかはり、學問嫌ひの不良兒で、やがては養母に刄物をつきつけるところ迄行つてしまつた。その性根を直す爲め、或る教育家にあづけられ、遂には遠く四國の私塾に入れられてしまふ。弟は頗る出來がよく、萬事が兄とはうらはらで、二人の相違は東京と四國の距りのやうに遠ざかつて生育する。ところが或日、兄は突然私塾を逃出して實家へ戻つて來た。けれども、嚴格な父親に叱責され、忽ち四國へ連戻られる。十數年たち、兄は相變らず親に迷惑をかけつゞけてゐるが、弟は大學を卒業して創作家になる。その二人が銀座で邂逅する。弟は兄に對し優越感を持ち、時には叱りつけるやうな口さへきいてゐる。だが、反省のうら

に、兄をおもふしんみの情愛の深い事がわかつて來る。

「一つの時代」全部を貫くものは作者の倫理感である。此の年少の作者には、己れをよくしよう、正しくあらしめよう、意地惡でなく、卑屈でなく、他人を傷つけず、おとしめず、理解と同情をもつてひとにのぞみ、練磨と反省をもつてみづからをいましめようとする熱情がある。しかしそれを他人にも強ひる心は毛頭ない。純一に統整した自己を中心として、叮嚀に自然人事を觀察し、自らが正しいと信ずる判斷をもつて一々解釋を下して行く。その態度に狂ひが無く、自分の殼を守る事は極めて堅固で、かりそめにも浮調子にならないから、作品の特徵として格調の正しい均齊の美が生れ、それが此の作者の生命となつた。そこには韻律を崩さない典雅な詩が在る。デツサンにごまかしのない繪畫がある。その美は人を打つて敬服させる。けれども、決して魅惑的でなく、溺れさせ、痺れさせ、或は狂氣させ飛躍させる力を持つてゐない。智情意がめいめい三分の一の持ち分を守つて爭はず、他の領域を侵さない。奔放不羈な情熱や、一本氣の主張の強さは、觀察のみだれを招き、手法の破綻の因となつて、作者を冒險の渦卷の中に陷れ、靜閑の中に求めた品格を突崩すであらうから、それは意識的にも避けたと見られる節もある。作者と雖も、自分以外の世の中の鬪爭喧騷邪惡混亂に全く盲目なのではない。しかし、自分の倫理を以て統一した

世界を求める爲に、さういふ複雜多岐、善と惡との紛糾してゐる眞只中へ突入する事はしないのである。だから「一つの時代」の中には、善人ばかりが登場し、無理解や不公平が生む悲劇は起らない。稀には、兄弟物の中にあらはれる兄のやうな、やくざな人間もあるにはあるが、しかもそのやくざな半面は僅かに暗示されるにとゞまつて、他の半面の善良性が甚だ多く示される。時には一つの意志が他の意志と衝突しさうになる瞬間もなくはないが、忽ち同情し、理解し、握手する。齟齬確執をなるがまゝにならせ、絶交しようと格鬪しようと御勝手だといふ純客觀の殘酷な態度は此の作者のものでは無い。適度の主觀をもつて調味料とし、鋭い刺戟は柔らげられる。

「一つの時代」は、或る意味に於ての完成品である。よく聞く「玉の如き作品」といふ言葉のしつくりあてはまるものである。柔軟性があり、適度の色彩があり、確實な表現力を持つ文章、賢明なる構成法、殊に効果ある省略のうまさは、心憎いものがある。

けれども、吾々讀者は貪慾である。作者のうでを信じれば信じる程、その作者のたてこもつてゐる小世界をのぞく丈では滿足しない。もつと廣い、複雜な社會に視野をひろげ、もつと重量のある材料を手がける事を切望する。經驗の豐富を望み、觀察の深く徹する事を希ふ。掌中の珠でなく、鐵の如き力を求める。

ところが、聰明なる作者は、自分自身夙に此の要求を內部に持つてゐた。自分が確立した小世界を、習得した手法で描寫するあぶなつけのない仕事の繰返しでは安んじて居られなくなつたらしい。自分のうちたてた倫理道德をおとなしく守つてゐる人間を集めた溫柔鄕に、ひとりで口笛を吹いてはゐられなくなつたらしい。年齡と經驗とは絕えず新しい刺戟を生み、常に進行推移を止めない社會の展開に直面して、今迄きづいて來た心境にはゐたゝまれなくなつて來たに違ひ無い。犬養氏の作品に迷ひの跡があらはれ、破綻が生じ、新しい藝術境に到達しようとする意力と惱みが歷然として來た。「南京六月祭」の中に收められた諸篇は、此の過渡時代の所產と見る可きものが多いやうに思はれる。

「一つの時代」の中で一番新しいのは大正十二年十一月の作であるが、「南京六月祭」の中で一番古いのが大正十三年六月の作で約半年のへだたりがあり、以後昭和三年度迄の所產が集まつてゐる。便宜の爲め年代順に見ると、「硝子玉の存在」は前の分類を踏襲すると若夫婦物に屬し、此の集に入るよりも、「一つの時代」に入れられる方が似つかはしい愛すべき小篇である。上品なヒユウモアが作品を際立つて明るくし、色彩をはつきりさせる效果をあらはした。いつたい「白樺」の人達は、武者小路氏にしろ、里見氏にしろ、あの氣むづかしい志賀氏にしろ、みんなすぐれた機

智と諧謔を多分に持合せてゐる。融通のきかない馬鹿正直だといはれた有島武郎氏——私は全然此の說に服さないものであるが、假に世間の言葉を借用する——さへ、樂々と機智を弄し得た。私自身子供の頃遊んだ友達の經驗によつても、東京育ちの者は田舍者よりヒユウモアを解し、東京育ちの中でも殊に學習院と高等師範附屬中學に學んだ者は頓智が働いた。何故か。恐らくはその家が代々の知識階級であり、社交性をおのづから持つてゐる爲であらう。犬養氏にもそれがある。だが、里見氏のやうに達者なものでなく、志賀氏のやうに銳いのでなく、武者小路氏のやうに突拍子もないものでもなく、極めて內氣に、上品に、控目のヒユウモアである。

「Kamerad」と「正義と烟草」も機智に富む好短篇で、後者には稍皮肉な形をとつてあらはれてゐるが、決して人を刺すやうなはげしさはなく、結局はおだやかに心地よい心境におちついてゐる。

いつたい此の時代に此の作者は、どういふ態度で創作してゐたのだらうか。全くの推測であるが、既に一人前の作家として認められ、原稿市場に於る需要が生じ、註文によつても書くやうになつてゐたのではないだらうか。恰も文壇はコントの流行を見、諸雜誌が小氣轉のある短篇を求めた時代だ。原稿を賣る生活は、作者にとつて一つの新しい社會との接觸だつたに違ひ無い。さ

ういふ事も、創作態度に影響し、ひいては作風にも變化を來す原因のお手傳ひになつたであらう。自己の心境を語る境地から、廣い世の中を見る境地へ出て來て、人生を客觀的に見る方向へ道を開いて行く楔となつたのでは無いだらうか。さういふ進出があつたとして、旣に體得した技法で書きこなす事は大した苦心を要さなかつたに違ひ無い。之等の小篇は、それ丈巧妙に、或は輕妙にさへなつたが、同時に氏の持味の純眞なる詩情的傾向には次第に遠ざかつて來たのである。

その適例として「松吉の場合」がある。それ迄、犬養氏の作品の大部分は、作者自身を主人公と見て差支へないものであつたが、松吉を作者その人と見るのは些か無理である。勿論松吉の心持には作者の息がかゝつてゐるし、例の兄弟物の中に類別しても不都合の無い作品であり、或は例の兄弟を町家風に飜案しようとするのが本來の目的であつたかもしれないが、廣く世の中の姿を描かうとした客觀的立場に立たうと努力したものゝやうに考へられる。少年時の詩をうたひ盡した作者が、次第に世間智を加へて、制作の分野を廣めんとする道程の第一歩を踏み出したものと見ていゝのであらう。それ丈力作であるが、手馴れた作品とは勝手が違ふ爲か、構成上に均齊を缺いてゐるやうに思ふ。

「アリストテレスと語學教師」は極めておだやかな良家風景を描いた作品で、強ひて分類すれば

若夫婦物に入る可きものである。これも亦構成上に間のびのしたところがあつて、讀者の心に迫る力は稀薄だが、犬養氏の故郷の唄と見る可き、愛す可き作品である。短篇構成の技法は、志賀氏に學ぶ所が多く、人にすぐれてゐた作者が、時々破綻を見せるやうになつたのは、先人の影響の外に脱出しようとする努力の結果と見てもいゝのではあるまいか。

信濃の高原の避暑地に家を借りて、辭書の編纂仕事をしてゐる語學敎師の一家と、隣の一家とのおつきあひは、英國風の繪畫の主題を、佛蘭西風の色彩で描いたやうな、丹念な趣がある。育ちのよさ、適度の敎養、浮世の暗黑面には觸れた事の無い兩家の人々は、現實の存在としてゝよりも正に畫趣である。その人々の中で、隣家の次男が、一番心に動搖を持つ人物である。

自分の才能の範圍を今からきめてしまふのが淋しいのだ。彼は哲學にも音樂にも科學にも自分に適した一部分があるやうに感じてゐるのだ。信二はそのために志望を定める――彼の心持から云へば志望を一つに限る――ことが出來ずに迷つて居る譯だつた。私はその焦慮を美しいと思つた。その焦慮は個物の全能を信じかねないのだ。死者の復活を信仰するにも劣らない。これこそあどけない信仰ではないか。このやうな信二の焦慮は、丁度すべての枝から新芽を一面に吹き出させようとしてゐる樹の努力を私に聯想させた。

これはその次男に對する語學教師の理解であるが、一部分作者その人にもあてはまるべきことばである。又知識階級に共通の特徴でもある。ものわかりがよく、ひとつの事に執着し兼ね、あれもこれも理解出來るので、自分が果して何に一番向くか、何を選んで一生の仕事としようか、如何なる主義方針によつて自分を指導しようか、狹く強く立場を決定する事はむづかしいのだ。自分をあざむく事が出來ないのだ。だが、作者はたしかに此の迷ひを切抜けて、「新芽を一面に吹き出させようとしてゐる樹の努力」を盡しつゝあるやうに思はれる。

「黄色の花」にも描寫領域開拓のあとは見られるが、特に作者の求めてやまない心の要求を表徴する作として「牧歌」をあげ度い。

どうしたものか短篇集、「南京六月祭」の中には、大正十五年度の作品はひとつも無く昭和二年度の作品も僅かに「牧歌」がある丈である。しかもこれは十二月の作だから、凡二年間制作は中止されたのであらうか。又は書く事は書いたが、作者のきびしい選擇の篩にかけられて除外されたのであらうか。どつちにしても、此の時代に、作者は旺盛なる制作力を一時的に失つてゐたのでは無いだらうか。初期の時代の完成を終り、次の時代に移る迄の休息を欲したのか、疲勞に襲はれたのか、新しい進路に迷つたのか、恐らくはいろ〳〵の事がいりまじり、作者の制作力を奪つ

たのであらう。

「牧歌」は私の最も好む作品である。假に上述の休止時代を經過したものとして、こゝには張り切つた制作力が、捲土重來の意氣ご私を打つ。

遊んでばかり居られなくなつた年ごろの、學藝にこゝろざす少年の、何か心にしつかりしたよりどころを把みたいと願ふ時代の一記錄である。彼は、ゴオガンの描くタヒテイ島の土人のやうに日に燒けて水泳場で友達と騒ぎながら、矢張心の空虚に惱んでゐる。二里の遠泳に卒業して歸京したが、直ぐに鎌倉の禪寺へ出かける。それには學校の英語教師に禪居士があつて、その人の影響もあるのである。少年は、頑固猛烈な坊さんの御寺で、まづい飯を喰ひ、曉に起きて掃除をし、坐禪堂に坐る事もする。何かを求め何かを考へ、それが何であるかは彼自身にもわからないが、十餘日は斯くして暮れる。そこへ、赤城山へ行く友達から誘ひの手紙が來る。その山には先輩の小說家松峰順一が居る。彼は心が動いて寺を去り、友達と一緒に赤城へ行く。たつた二週間、人工的な課目の勉強に努力した彼は、山上の無拘束な空氣の中に、想像したとは違ふ名作家を見出した。少年は人生を抽象一點張に考へてゐた。ところが、「さぞさうだらうと思つて居た松峰は、たゞ眼の前のありのまゝの現實生活を叮嚀に扱つてゐる人だつた。」

此の小説は、たゞ何かを求める少年の心持と、如何なる環境に彼があり、如何なる風景の中で動いたかを、模範的のうまさで描寫した丈で、それ以上の發展には及ばないが、新鮮なる若者の心持は、適確なる表現によつて遺漏なく盡された。その若者の求むる如く、作者も藝術上の立場を求める心を持つ事が、まざ〳〵と窺はれる。その意味に於ても、今日迄の作者の作中、最も重要なるものゝ一つに違ひない。

「女優」は量的に力作であり、こゝにも在來の型を拔け出ようとする意力が認められるが、餘りに事實に捉はれ過ぎて冗長に陷つた。そのくだ〳〵しい話の展開よりも、私にとつて興味があるのは、作者自身と見る可き主人公が、何もしないで安樂に育つた自分にひけめを感じ、とにかく働き鬪つてゆく女優に尊敬を持つ心持である。「一つの時代」の頃には無い、積極的活動の萌芽である。

「南京六月祭」にも冗長感がつきまとふが、これも作者の進歩成長を記念する作品である。

「聖ピノッチェット」は、私にははつきりと理解出來ないものであるが、恐らくは作者の迷ひが破調を試みさせたのであらう。どう考へても、此の作者本來のものではない。

私は、犬養氏が「一つの時代」の小規模の完成品にあきたりなくなり、どこかに進展の道を打開

しようと努力してゐるものと見て來たが、第一の到達點として「亞剌比亞人エルアフイ」を發見した。此の作は「牧歌」よりも更に力の充實した物である。作中の人物の言葉をかりて、作者は自分がこれから求めようとするものをいひあらはしてゐるのではないだらうか。マラソン競走の優勝者エルアフイは、小説家アンドレ・ジツドによつて自分の力を發見する。ジツドはいふ。

「君は亞剌比亞馬に喩へられたのは不平かね。どうしてだらう。僕に云はせれば君が三年前に見せたのは、あれは美しい動物力だ。あれこそ僕たちの先祖傳來の力だよ、文明はあれから溢れて來たのさ。（略）僕は神のかはりにこいつを信じて居るんだ。こいつを信じて快活になるのだ。（略）」

エルアフイはジツドの言葉を忘れず、「祖先代々の人間の一番の強みだといふ、限りない動物力を胸一杯に感じて、それを呼吸して、砂漠のなかでこの上なく傲慢になる」のである。たぶん、作者は長い間悩まされたヂヤアナリストの御都合主義的批評や、政爭用具としての藝術論を踏破つて、自分の體内に潛在する祖先傳來の動物力に信頼し、新たなる努力に進まんとするものではないだらうか。

正直のところ私は「一つの時代」と「南京六月祭」を比べて、前者の方を多く好むものである。そ

れは集中の全作品を貫く純一無垢の感情と形式上の完成美が、私の鑑識にぴつたりとはまるからである。だが、私は二つの集を比べて、「南京六月祭」の方に作家的努力の尊さを見出す。作者自身が跋文の中で斷つて居る通り「この本から出る聲はひと色でない。」そこには在來の型を破り、先人の影響を脫し、將來に大きい希望を置いて、新境地へ到達しようとする息詰る程の努力がある。若し私の推測するやうに、曾ては靜かなる溫柔鄕に美を求めた作者が、動物力を振ひ起して、廣い人生の眞只中に突進しようといふのならば、成敗を別にして喝采し度い。私は、藝術を政黨の實行目的の爲に利用しようとする說をも是認する。たゞ、それこそ藝術價値の高いものだといふ宣傳は否定する。一輪の薔薇の花を描く丈でも、巧みを盡せば立派な藝術だ。私は此のすぐれたる天分を惠まれてゐる若き作者に對し、廣き新領域の開拓を切に望むのであるが、同時に氏が今日迄に練磨して來た、一木一草を描いても眞と美を表現する自己の腕力に、あらゆる確信を置かれん事を同時に希ふものである。(昭和四年八月四日)

――「中央公論」昭和四年九月號

倉島竹二郎氏の人と作品

明治四十三年創刊の雜誌「三田文學」は、大正十四年の春突然休刊し、翌年の四月に無理算段のあげく復活した。同人の數はすくなく、資金は乏しいのだから、賣品として廣い市場を持つ事はむづかしいと見なければならない。それで、吾々は最初から、此の雜誌を、新しく世に出ようとする作家の發表機關としようときめた。三田の山の上で、雜誌復活の報告演說會を開いた時、私は宣言して「三田文學」は新作家を生む爲に存在すると云つた。

その演說會の後で茶話會を催し、大勢の學生が集つた。同人の誰彼が卓上演說をやり、學生側からも立上る人があつた。めいめい氣焰をあげ、覺悟を述べたのであるが、會が終つた後迄も、みんなに忘れられないはつきりした印象を殘したのはたゞ一人だつた。

「あの郵便局長の息子はなんていふんだい。」

「倉島竹二郎だよ。」

「あの大男は誰ですか。」

「倉島ですよ。」

甲も乙も丙も丁も、愉快な印象を更に濃くする爲に、その人が誰であるかを問ひたゞすのであつた。

彼は身長五尺六七寸、體重二十貫を越る肥大漢である。子供の頃は、すもとりぼんと呼ばれたさうである。色白く、頬ぺたや、耳や、鼻の頭は牛肉のロオスのやうに赤く、長髪を額に垂らし、一見忘る可らざる特殊の風釆だつた。それが、どことなくしまりの無い京都辯で、且訥辯で、自分は京都祇園の乙部と稱さるゝあまり上等で無い廓の中で育ち、父は郵便局を引受けてゐた、自分が小說作家にならうとする事は父の喜ばないところだつたが、熱心に希望するので遂には許してくれた、その父の生きてゐる中に、立派な小說を書いて見せ度いと念じてゐたが、殘念な事には先年死んでしまつた、今はたゞ一生懸命に勉強して、父の靈前に名作を供へる事を期してゐると云ふ意味の事を述べた。斯う書くと、極めてまともな、平凡な挨拶としか思はれないだらうが、その時の氏の口から出た言葉の調子は、特殊の風格と相俟つて、滿場を笑はせ、喜ばせた。それ

が彼の持味である事は後でわかつたが、その日その場に於て、彼程はつきりと存在を示したものは無かつた。

間も無く、此の大男の小説は「三田文學」にあらはれ、爾來その雜誌を發表機關とする若い作家の中、最も多産且最も人氣のある人となつた。御目見榮の御挨拶で、巧んだやうな巧まないやうな一手を見せて素早く人の心を捉へたと同じやうに、多くの同輩を抜いて、いちはやく讀者の心をつかんだ。私の知る限りに於て、氏の小説の愛讀者は頗る多く、

「あゝ、又倉島さんの小説で泣かされちやつた。」

と眼の中をうるませてゐる人も見た。或る大劇場の要職に在る人は、非常なる倉島黨で、先年來毎興行必ず氏を招待してゐるといふ事である。尤も、此の人は羞かしがりで、未だ倉島氏に對して名のりをあげないさうで、同時に倉島氏の方も、生來の呑氣から、御禮の挨拶に行かうともしないらしい。

倉島氏の小説は今日迄に二十篇程發表されたと思ふが、大部分は一小家庭悲劇の中に、善良なる涙と笑を見出すものが多く、その種の作品には、作者自身と母親と甥の久富(ひさとみ)といふ子供が登場する。作者自身のやうな人物は、時には武夫と呼ばれ、時には沌助と呼ばれ、又時には浩吉とも

呼ばれるが、子供は常に久富だ。それ故、吾々は此の系統の作品を「久富物」と名づけてゐる。

處女作「喧嘩と子供」以來、作者の愛情を一身にあつめてゐるこまつちやくれの久富は、やんちやの癖に大人の心をよく知つてゐて甘つたれるやうな子供だ。そのやんちやと利口の組合せから、作者は笑と涙を巧妙に誘導する。

その手は最初から倉島氏のもので、恰も茶話會の卓上演說で、父に死なれた悲しさを口にしながら、尙且人を笑はせたのと同じ效果をねらつたものである。流石に處女作は、文章もたどたどしく、一篇の組立ても緊密を缺いて效果は些か薄かつたが、二度三度と同一傾向のものを繰返して手がけてゐるうちに、一種の短篇小說の型を容易に會得してしまつた。

それは照應の面白さとでもいふ可きものだ。笑ひの中に涙を感じ、憤りの後に憐みを感じ、極道の中にまごゝろを見出し、惡戲の裏に純情を悟るといふやうなものだ。喜劇の中に涙を感じ、悲劇の中に笑を見出すのである。

倉島氏は現代の若者のやうに理窟屋ではない。論理の爲に感情を抑壓し、強ひても一元論的立場に立たなければ承知しないのとは違つて、人生の複雜多岐なる諸相はその儘に、どうにもならないものとして受け入れながら、涙と笑の媚藥で、あるがまゝの感情を流露させようとする側に

の中で泣出す人物である。

彼は秀作「浩吉の道化」の中で、作者自身に外ならない主人公浩吉の性格を下のやうな素描で説明してゐる。

「面白い男」「滑稽な男」「氣樂な男」「茶目」「お坊ちやん」「大様な男」「何でもかまはず云ふ男」「呑氣者」「變人」。一般に餘り物事に頓着しない、どちらかと云へば、神經の鈍い男だと思はれてゐた。だが、しかし……。

これはたしかに倉島竹二郎氏その人である。浩吉は家庭の暗さを打消す爲に道化る事をおぼえたと云はれてゐる。彼は弱氣でもあり、づうづうしくもあり、呑氣でもあれば神經質でもある。それを無理に一方に統一するよりも、ありのまゝをよしとするのである。

「浩吉の道化」は倉島氏がねらつた主題を簡單に組立て、明瞭に描出した好箇の短篇で、此の一作によつて作者は充分の自信を得たらしく、以後「久富物」に於ける手法は一定し、いゝ方では樂々と書きこなすやうになり、惡い方では次第に類型の渦卷にまきこまれさうな傾向を示して來た。

その型を破る積りで、且又長篇の腕だめしの心懸もあつたのであらうか「戀愛破産者」と題する

ものを發表したが、「久富物」で獲得した巧妙なる技法は應用されず、冗長平淡幼稚なものに終つた。もう一つ「淡の輪」といふ吉田絃二郎式の感傷的作品があるが、これも平素の倉島氏を裏切るものであつた。

此の二作の失敗は吾々に疑惧の念を抱かせた。素早く短篇小説のこつをのみ込んだと思つてゐたが、あれは「久富物」に限るので、それ以外の題材のものは一切駄目なのではないだらうか、それが心配になつた。作者も此の不評には參つてしまつたと見へて、忽ち「久富物」を續けさまに書いて健腕を示し、爾來今日迄、故郷の唄をうたひつゞけてゐる。

それ等の作品に何時も顏を出す人々を紹介すると、先づ家長たる浩吉の父親、久富の祖父は、喰べる物も喰べずにつましく暮らし、相當の資產を殘して死んでしまつた。少しく無智で、只管浩吉を頼りにし、何かにつけて亡夫の位牌の前で念佛を唱へる母親である。兄の太吉は極道者で、好きで夫婦になつた女房も離別し、子供は母と弟の手に殘したまゝ、行衞もわからないやうな身の上となり、年中母親を悲しませ、弟を憤らせてゐる人間だ。その長男の弘は他人の家にあづけられ、弟の久富は浩吉と祖母といつしよに、東京市外洗足に住む。久富は前にも書いた通りのこまつちやくれで、我儘で、吾々が見ては餘り可愛らしくもないのだが、祖母と浩吉との愛を一身

にあつめてゐる。

父親の生存中は立派に暮らしてゐたのが、極道者のあととりの爲に忽ち不如意となり、その極道兄貴も他郷で自由勞働者に迄身を落し、女房は離別され、子供等は親の手を離れてちりぢりになつてゐるといふのだから、誰が見ても此の一家族の現狀は、開幕當初から悲劇の舞臺面をあらはす筈だ。ところが身心共に健康無比の此の作者は、時々感傷癖に溺れかける事もあるが、大體は樂天的に運命を甘受し、或場合には、落日になつた爲にかへつて情愛を深めた親子の仲を痛切に感じて、熱い涙に醉つてゐるやうなけしきさへ見えるのである。そして、それを題材として愉快に笑はせたあげくに、ふとしたきつかけでほろりとさせてしまふ手を、短篇小說家倉島竹二郎氏は確實に獲得した。

人としての倉島氏は、友達のみんながいふやうに人情家である。親孝行である。子煩惱である。どつちかといふと近代味の少ない、動物愛に近い感情だ。彼そのまゝの浩吉を見よ。彼は母に對しても、兄に對しても、久富に對しても、意地惡や皮肉をちつとも持つてゐない。時々むかつ腹を立てる事もあるが、忽ち情愛の涙に融合してしまふ。その涙で結びつけられる一家の景色は、犬小舍の中で產後間も無い母犬が、仔犬共をなめてやつてゐる時のやうになごやかな、肉體的快

感をさへ想はせるのである。近作「すまうの一景」の中には、雪の夜兄弟が曖昧屋で酒を飲んだあげく、畑のまん中で相撲を取るところが描かれてゐる。二人は四つに組んだが、弟の浩吉の方が力が強く、ぐつと引きつけ釣上げて、正に投げ倒さうとする瞬間、兄の體臭が鼻をつく。それは幼時を想ひ出させるものだつた。弟はおもはず力が弛む。と同時に、勢は逆轉して、浩吉は地響打つてひつくりかへるのである。

「どうや參つたか。」兄は白い息をはきながら立ちはだかつた。

「參つた。參つた。」と、私は汚れた雪の中で叫んだ。私は暫く立上ることさへ出來なかつた。が、何故か私の胸は幸福で一ぱいになつてゐた。

倉島氏の獨壇場だ。多くの讀者は斯ういふ本能的の肉身感に心を打たれ、涙を催し、倉島黨となるのである。

もうひとつの著しい強味は、表現の簡單明瞭な事である。既に主題が萬人共通の肉親愛に基礎を置き、それを表現する文章も形式も、誰にもわかり易いものなのだ。うでの力ももとよりであるが、同時にスタアトを切つた人達に比べて、倉島氏が廣い讀者の範圍を得たのは故ある事である。

凡そ如何なる部門の藝術でも、それが傳統的に築かれて來た審美眼から見て、左程懸隔の無いものでも、大衆的稱讃を博すものは必ずわかりいゝ藝術である。カフェの女給がうたひ、客が合唱し、御用聞が口笛を吹く流行唄は、音樂的には智惠の無い、單調なものに限つてゐる。共にすぐれた藝術家でも、その作品がわかりいゝかわかりにくいかで、大衆的稱讃をかち得るか得ないかゞわかれる。尾崎紅葉先生は幸田露伴先生よりも大衆性を有し、夏目漱石先生は森鷗外先生より大衆性を有し、菊池寛氏は芥川龍之介氏よりも大衆性を有してゐる。殊に菊池寛氏の場合、いかにわかりよき藝術が人氣にかなふかの適例を見る。勿論菊池氏のすぐれたるところは澤山あるのだが、氏の作品にもられたる道德又は道德批判は、一般知識階級にはもつて來いのわかりいゝものであり、又その文章や一篇の構造は、何等特殊の文學的素養の無いものにも直ぐに受入れられるものである。それが氏の名聲をどの位助けたかわからない。或有名な實業家が、相當重い病氣に罹り、長い間の病床にあきあきしてしまつた。文壇人などの想像もつかない程忙しい生活をしてゐる實業家のならひとして、小說などは讀んだ事も無く、勿論輕蔑してゐたであらう。しかし、たいくつのあげく、家人に勸められて現代の小說といふものを讀む氣になつた。明治から大正へかけての諸大家の作品が、次から次と手渡しされたが、どれもこれも面白くない。何處に面

白味があるのかわからない。中には、何が書いてあるのか全然捕捉出來ないものさへあつた。ところが、たゞ一つ菊池氏の作品丈は、はつきりわかり、わかつた爲に大變面白く、氏の作品集を大部分讀了したといふ事である。氏一流のテエマの提供があり、氏一流の明快なる常識的解釋によつて、さしもの實業家にも、バランス・シイトの如くはつきりとわかつたのである。視野の廣狹に甚しい距離があり、一切の比較が無理であるが、倉島氏の作品も內容と形式の、共にわかりいゝといふ強味は具備してゐるのである。

倉島氏は、既に一つの形式の短篇小說を完全に手に入れてしまつた。だが、見樣によつては、此の成功の爲に第一の難關に直面した事にもなつた。今後どの方向に進展して行くかゞ問題になつて來た。前にも云つた通り、「久富物」以外には推稱すべき作品が無い。「久富物」は既にあまりに繰返し、最近の作「離情」の如きは、うまい事はうまいが、二人の子役を使つて徹頭徹尾泣かせようとし、その意圖が見え透いて浮調子にさへなつてゐる。存外目先の早い氏は、恐らく自分の危機を感知し、新境地の打開に力を盡してゐるであらうが、それは容易の事では無い。先づ第一に、今日迄の利器がかへつて邪魔となる事もあるに違ひ無い。たとへば、人情と人情との融合、血と血の共感は、一篇の小說をまとめる爲に役立つと共に、規模の擴大を妨げる場合もあらう。

作者得意の泣き笑ひは、深い感情から出るものかもしれないが、一面から云ふと、どつちつかずの心持である場合もある。ひとつの心持を貫くのでは無くて、或るところ迄行つたら、人情を枷に使つて方向轉換をするのである。それは作品に機智の面白さをつけ加へはするが、強い力となつて迫る事を妨げる。

又彼の特徴である簡素な表現は、頗る效果をあらはすが、それは意識的に招來したといふよりも、語彙の乏しさの自然のあらはれでもある。彼は小說を書く事にかけては精力絕倫であるが、乍遺憾讀書をしない。ありのまゝの人間の強味はあるが、より大きい自己を成長させる努力がおろそかになつては詰らない。さういふ事が、彼を大作家にする事を妨げはしないだらうか。

倉島氏は自分のうでにかなりの信賴を持つてゐて、よき運が開かれる事を期してゐる。彼を愛するお母さんは、息子は偉くなるものと信じ、息子の書きあげた小說を讀んで貰つて聽くのを、何よりの樂みにしてゐるさうである。どうかして此の惠まれたる強健の肉體と精力をもつて、行手に横はる萬難を排し、一日も早く亡父の靈前に傑作を供へる事にして貰ひ度いものである。(昭和四年八月十一日)

――「三田文學」昭和四年九月號

今年の夏・鯉・金魚

私にとつては、今年の夏も、去年の夏も、一昨年の夏も、大した變りは無い。定刻に起き、定刻に出勤し、定刻に退出し、歸宅する。汗を流し、麥酒を飲み、飯を喰へば、日が暮れる。夜風が涼しければ喜び、蒸暑ければかこち、机にむかつて原稿を書く。十二時になる。一時になる。一時には曉に及ぶ事もある。さういふ場合にも、朝は又定刻に家を出て行かなければならない。一定の型にはまつた生活は、敢て夏に限る事では無く、三百六十五日大概同じなのだが、一般に夏は休息したり、怠けたりするならはしに引比べて、あまりはげしい相違だから、つい我身のつまらなさを深く感じる事もある。

私の勤務先の會社では、一年を通じて十四日丈休暇を貰ふ事が出來る內規になつてゐて、大概は暑中に交代で休むのであるが、此の處數年間、私は夏休みを貰つた事が無い。自分の擔任して

ゐる仕事の性質から、なかなか自由の時間が得られず、來週こそ休まして貰はうと樂しんでゐても、何彼と差支が出來、順番の廻つて來ないうちに、夏はおしまひになつてしまふのである。

私は、なるべく短時間に充分の仕事をして、長く遊ぶ事を理想としてゐる。會社の營業時間は七時間だが、退出時刻後迄も殘つて仕事をするやうな遣口は、自分で好まないばかりで無く、他人にも求めない。同じ理由から、折角會社が認めてゐる十四日の休みは、是非とも休む方がいゝとみんなに勸めてゐる。回章を持つて廻らせたり、時には自分で各室を廻つて勸說する。だが、勤人といふものは、存外休み度がらないものだ。

「金かなくて旅行も出來ないから、休んだつてしかたが無い。狹苦しいうちに寢てゐるよりも、會社の方が涼しくてよござんす。」

さう云ふ返事を屢々聞く。金の無いのは大概の場合事實であるが、事實以上に金が無い金が無いと云ふのは勤人共通の謙遜でもあり、卑下でもあり、自嘲でもあり、禮儀でもある。尤も、どういふ意味の場合でも、此の返事に接しると、私はぐつと詰つて引下つてしまふ。何故か。實は私も、強ひて夏休を貰はないのは、懷中の乏しさの故でもあるからだ。

夏になると、私はきまつて無一文になる。私の勤務先の賞與が、世間並よりは稍すくなく、殊

に上半期は申譯ばかりの額なので、眞夏の頃が一番生活苦を感じるのである。元來私は體質上、夏よりも冬の方が強く、嚴冬も自宅では股引も足袋もはかず、暖爐も火鉢もあまり好きでない位だが、夏はしみじみ暑さを感じ、休息を欲する事が屢々ある。それなのに休暇の味もしらず、且私の創作の多くが、眞夏に書かれたといふ理由は、どうしても稼がなくてはならない必要の爲もあるのであつた。今迄書いた物の中で一番長い「大阪」も「大阪の宿」も、原稿紙を汗で濡らし、書いた文字の滲むのに難澁しながらしあげたのである。そのくせ、初夏の頃には、毎年々々樂しい空想をほしいまゝにする。今年の夏は船に乘つて長崎迄行つて見ようとか、箱根の湖畔で暮らさうとか、鎌倉のホテル住居をして見ようとか、その爲に明日から儉約をするのだなどゝ、悲壮な決心を家内にもいひきかせるが、持つて生れた無算當な性分は、少しでも財布がふくらむと忽ち氣が大きくなつてしまふので、計劃は遂に實行に立到らず、その儘夏は過ぎてしまふのである。

今年の夏も御たぶんにもれず、汗みどろになつて稼ぐ丈で、休暇を樂しむ事は出來なかつた。したがつて、勤務先への通勤の外には、門外へ出る事も稀であつた。「小山内薫全集」賣廣めの爲に、久保田里見兩兄と名古屋へ行つたのが大もので、あとは毎月二十三日に催す九九會に出席した外、殆んど何處へも出かけず、家にばかり閉籠つて居た。

ところが、私が今拜借してゐる家といふのが、馬鹿に暑い家なのだ。何しろ、二百年とか二百五十年とかたつた古屋敷で、德川家御さかんの時代には、よしある旗本の住んだに違ひ無い景色だ。同町内の泉鏡花先生が元祿屋敷と命名し、同じく同町内の有島生馬氏が「大東京繁昌記」山の手編の中で、かういふ古い屋敷はながく殘して置き度いと云つた位、極めつきの家だ。總坪數四百坪といふのだから、古くでもなければ、到底私などには入れない屋敷だ。尤もその四百坪の長方形の地面の中には四軒あるので、私が獨占してゐるわけではない。私の拜借してゐる家の庭の奧に、小ぢんまりした半洋風の家を建てゝ、家主が住んでゐる。それと接して、二室に臺所つきの新しい家があつて、曾ては勝本清一郎氏が住み、次にはその弟英治氏が住み、今は橋本哲夫さんといふ若い會社員が住んでゐる。門長屋を改造した家には、家主の親類の方が住んでゐる。扨てかんじんの私の家は大部分西向で、冬は寒く夏は暑い。どうして斯ういふ向に建てたのだらうと、來る人も不思議がるが、むかしは庭を南向に作つたので、座敷は西か北を向かなければならなかつたのだ。人間よりも樹木の方がいたはられてゐたのだ。

夏暑く冬寒い家といへば、誰しも住みにくい家だと思ふであらう。朝日は庭の樹や草にはあたるが、家の中には射して來ない。それが午後になると、家中西日を受けるのである。東京特有の

爽かな夏の夜風も、我家には吹き通らない。いたづらに塀や羽目板にあたるばかりである。それでも此の家は住みよいのである。

折釘形の間取は、かくれ場所が無くて不便だし、床が朽ちて來たゝめか、歩くと疊の上のものが震動する場所もあるが、それでも此の家は住みよい。

何がいゝかといふと、第一には麴町といふ土地がいゝ。私のやうに時間の惜い人間には、勤務先への往復に時間をとられる事は堪らない。こゝは、どの方角に行つても、直ぐに乘物の便利がある。連絡さへうまく行けば、乘合自動車と電車を利用して、僅かに十五分で行つてしまふ。

又附近の住民の人氣がいゝ。大きい屋敷は別として、近所の店々には、十數年住み馴れた人が多く、二代三代續いて住居してゐるのも珍しくない。

靜かだ。電車の音が聞えない。一寸大通を横にはづれてゐるので、自動車の震動も少ない。

庭が廣く、大樹のあるのもありがたい。

そんな事の數々よりも、何よりいゝのは大屋さんだ。若い御夫婦と坊ちやん一人の家族だ。御主人はあまり頑丈でなく、奥さんははれやかな方だつたが、四年前に坊ちやんを生んだ頃から健康を害し、今年も夏のはじめに病氣になり、日あたりのいゝ部屋に寢て居られたが、わづらはし

い都會よりも閑靜な田舍の方がいゝといふので、家をしめて信濃の國へ行かれた。私は不精で、御見舞狀も差上なかつたが、あちらからは私の好物、トマトオと玉蜀黍を澤山送つて下さつた。

家主が遠き故郷の山の幸わかたれし日は酒すごしけり

大屋さんは萬事頗る寛大だ。家屋の修繕、疊替、庭の模樣替など、すべて私共の喜ぶやうに先手を打つてして下さる。殊に感謝の念を深くしたのは、先年　　たしかに夏の事で、例の通り無一文になり、一生懸命で「大阪の宿」を書いてゐる時、突然敷金を返して下さつた事だ。お金が欲しい、お金が欲いと思つてゐる心が顏にあらはれ、それを讀みとられたのでは無いかと疑つたが、何といつてもありがたく、その札束を押頂いた。

それにつけても大屋さん御夫婦を健康にしてあげ度い。どうにかならないものかしら。私はふと、超自然の出來事を空想する事もある。

去年の夏か秋の頃と思ふが、財界の長老澁澤榮一翁の八十八だが九十だかの御祝があつた。その時有名な金魚屋が、一萬尾の鯉の子を帝國劇場前の濠に放し、此の多幸の翁の壽を祝つた。私の見た新聞には、だぶだぶの洋服を着た長壽翁が、大きなたまですくつた鯉の子を、足下の水にぶちまけてゐる寫眞が出てゐた。全くそれはぶちまけるといふ形容以外には適切な表現が無い程

無雜作に、高い岸から低い水へ、かよわい魚が無數におちてゆく景色だつた。何といふむざんな眞似をするのだらうと、私は不快に思つたのである。あんな取扱ひを受けては、生れて間も無い鯉の子は、水面に頭をぶつけて氣絕しはしないだらうか。そのまゝ白い腹を上にして、おだぶつになつてしまふのでは無いだらうか。

それなのに、金魚屋の親方が新聞記者に語るところによると、此の御目出度い機會に、御目出度い御年寄の手で、おそれおほくも天皇陛下の御城を圍む濠に放たれた鯉どもは、數年ならずして三尺の大魚となり、悠々として藻を分け、水を切つて泳ぐ美觀を呈するであらうと云ふ事だつた。

私は素人の事だから、充分の材料を揃へて反對の論陣を張る事は出來ないが、どうも自分の貧しい經驗と直覺では、此の一萬尾の鯉程悲慘なものはないやうに考へられた。私のつとめる會社の窓から見える濠の水は、綠青色に腐つてゐて、決して子魚の棲息には適してゐない。その上、年中水鳥が來て、魚をねらつてゐる。鴨が下りる。鷺が來る。鵜は貪慾な顏つきで、さかんに水中をあらし廻る。鷗は群をなして水面を物色してゐる。一萬尾の中の幾尾が、果して三尺の魚となり得るであらうか。それは澁澤翁よりも更に幸運に惠まれたる魚でなければならない。

一萬尾の鯉の成育は、私の心配の種となつた。會社のゆきかへりに、屢々濠端に立つて子魚の泳ぐ姿を注視したが、どうも無事に成長しようとは考へられなかつた。或る大雨の日には、日比谷寄りの水門から、芥と共に流れ落ちる無數の鯉の子を見送つた。間も無く、著しく數の減つた鯉の子は、水が惡い爲か、流行病の爲か、鰓(えら)や鰭(ひれ)や尻尾の腐りかけた、なりんばうの姿で喘いでゐた。

　私が此の鯉どもの運命に深く同情したのは、この數年間庭に池を作つて、金魚を飼つてゐる爲でもある。最初は家内が病氣の時、その妹が見舞にくれた駄金魚に子をうませ、次第に數をふやしたのであるが、私の弟の一人が本式にやつてゐて、毎年品評會に出してゐるのに刺戟され、蘭虫も手がけるやうになつた。風通しの惡い、西日のあたる我家の庭は、頗るコンデイションが惡いのだが、兎に角毎年孵化させて、人にも分けてゐるのである。

　ところが、今年の夏のはじめ、折角大きくなつた蘭虫が、ばたばた死んでしまつた。原因は喰はせ過ぎと、原稿稼ぎの忙しさに、つい水替を怠けたからだと思ふが、それをきつかけにして、私は金魚の世話をやめてしまつた。池をつぶして芝を植ゑよう、もう生物(いきもの)は一切飼ひますまいと、家内にもいひきかせたのだが、此の方はなかなかうんといはないで、暑氣あたりでへこたれなが

ら、強情に水をかへたり、餌を買ひに行つたりしてゐる。病氣見舞の駄金魚を先祖とする今年生れの駄金魚が、今もうじやうじやゐるのである。

そこで私は考へたのだ。澁澤翁の長壽を祝ふことろで、濠に放たれた一萬尾の鯉の子は、一年後の今日かげも見せなくなつたが、御本尊の澁澤翁は愈々元氣で年を加へてゐる。放した鯉の死んでしまつたのは、いかにも縁起が悪いやうだが、或はそれらが身がはりとなつて、人は益々長命を保つのではないだらうか。ふと浮んだかんがへが、頭の中で繰返されてゐるうちに、さういふ因緣もむげにはしりぞけられないもののやうに思はれて來た。

私は今考へてゐる。金魚どもには氣の毒だが、大家さん御夫婦の健康を祈願する爲に、我が庭の池の駄金魚の子を、のこらず濠に放たうかと。(昭和四年九月六日)

——「三田文學」昭和四年十月號

素人の小説

敢て小説に限らず、藝術作品は、玄人の手に成つたものよりも、素人の手に成つたもの丶方が面白いといふ説は屢々聽く。詭辯に似て、一面の眞理を語る説である。

玆に玄人といひ素人といふ、その限界が何處にあるか、截然と區別する事は難事であるが、それを職業とするかしないかで分(わけ)るのもひとつの方法であり、又制作技術の習練の程度に從つて分るのもひとつの方法である。どちらにしても、今は素人でも、やがては玄人となる者もあるし、一方には永久的素人もあるに違ひない。

それはそれとして、玄人の作品よりも素人の作品の方が面白いといふ説の主たる要素は、玄人の制作の熱情誠實を離れて、職人的技巧の末に走り、型に陷る誘引が多分にあるのに反し、素人は純眞なる處女性を有し、素朴單純なる表現の中に、新鮮感眞實感を保つ事が容易であるといふ

事實に歸する。よく新聞や雜誌の懸賞小說などに當選して、いゝ氣になつた作者が、商賣雜誌からの執筆註文が殺倒すると、忽ち墮落した作品を書き、素人のよさを失つて、玄人の惡いところばかりを學び、遠からずして行衞不明になつてしまふ實例は頗る多い。卽ち、玄人の作品よりも素人の作品の方がいゝと云ふ說が、一面の眞理を語るわけなのだが、あく迄もそれは一面の眞理で、無條件で肯定し難い事はいふ迄もない。

最近、最も廣く讀まれた小說は、鶴見祐輔氏の「母」だと云ふ事である。一版が幾冊なのか知らないが、既に二百版を超えたといふ噂だ。各地の圖書館の調査によつても、借覽者の數は群を拔いて居るさうだ。人氣が湧いたといふ見極めがつくと、忽ち戲曲化して、帝國劇場專屬の女優が演じ、又他の脚色によつて、新派の役者がおつかぶせて演じた。鶴見氏は申す迄も無く素人であるが、それ程の人氣がどうしてあるのか、氏が若手の政治家として人氣がある爲か、作品が多數者の心に觸れるものを持つてゐる爲か、多分兩者の入りまじつたものであらうと想像しながら、私は相當の好奇心を持つてゐた。鶴見氏程の世間人が、その知識と經驗から得た社會觀を、小說の形式の中に生かして表現出來るならば、今日の日本の玄人の小說家が得意とする身邊小說や心境小說とは全然違つた重量のある作品となるであらう。よしやそれが技巧上には缺點だらけだと

しても、素人の手に成るよき藝術品に屢々備はる氣魄、情熱、眞摯、新鮮感の豊かなものであるかもしれない。萬にひとつの期待ではあるが、巻を手にした時、全く知らない相手と勝負事をする時のやうな、興味と緊張を感じた。

巻頭の序文がはりの「母として の日本婦人」と「この小説を書いたわけ」といふ添物は、此の長篇を讀むのに、いゝたよりとなつた。

想ふに鶴見祐輔氏は、現代的進歩主義者で、自由思索家で、理想家で、歐米崇拜家で、フェミニストで、通俗の意味に於けるリファインド・ジェントルマンに違ひ無い。それ等の資格は、すべて今日の通俗小説の讀者に喜び迎へられるものである。いつたい、通俗小説の作者にとつて、フェミニストであると云ふ事は、何よりも強い武器である。現代通俗小説家が愛用する他の要素——ちやんばらや變態性慾よりも、女性おだて主義は、讀者をうつとりさせるのに有效である。何故ならば、通俗小説を讀む人の大多數は女たからである。若しも女性が小説を讀む事を嚴禁したならば、今日謂ふ所の通俗小説は、あれ程跋扈する餘地を與へられなかつたであらう。世界中で一番遠慮無く女のはびこる亞米利加は、世界一の通俗小説國である。あの國では、男は働く事、儲ける事に沒頭してゐて、本を讀むひまが無い。本を讀むのは女で、女の方が學問知識に於ては

まさつてゐると云はれてゐる。少々かけねはあるが、嘘では無いやうだ。殊に小說を讀むのは女である。我國に於ても、雜誌の中で一番發行部數の多いのは婦人雜誌で、その婦人雜誌は女の好奇心を滿足させる猥褻記事と、女の好む通俗小說で埋められる。すべての事件の裏面には女がゐる。如何に多くのよき素質を持つ作家が、數をもつて迫る女の讀者の誘惑に負けて、調子を低くし、又いかに多くのぼんくら作家が、無批判なる女の讀者の爲に——女の讀者の爲にのみ不當の名聲と過當の物質的報酬を得てゐるか、考へる迄も無く實例はざらにある。

その女を相手にして、大概の女の一生の最後の運命である「母」を主題としたのは第一の成功であつた。

鶴見氏はまぎれも無い歐米崇拜家で、恐らくは日本婦人よりも遙かに知識藝能の豐かなものとして彼の國の婦人を上位に置く人であらうと思ふが、それにも拘らず、現代に於ては一般に日本婦人の缺點と目され勝な忍從苦艱に堪へる特性を、母としての一大特質として認め且稱讚してゐる。私は此の明快なる序文に同感を惜まない。おもふに明治年代から今日迄、日本人は餘りに日本の女の特質と、その職分と、地位に盲目であつた。歐米の女といへば、無闇に偉いものに思ひ、そのうはべ丈を見て天國に住む者のやうに考へ、同時に日本の女は地獄に苦むものゝ如く斷定す

る連中が多い。これは基督教傳道師のいだいた謬見と、その商賣上のかけひきを、そのまゝ拜借した耶蘇の一味の感傷主義である。婦人矯風會的井蛙觀である。少しく餘事にわたるけれども、たとへば、西洋の結婚は當事者雙方の自由選擇によつて、好いた同志が結合されるに反し、日本の結婚は親や他人の意志によつて取運ばれるから不合理だといふ非難の如きは、此種皮相觀の一例である。西洋に於ても、男女の交際は無制限に自由では無く、今日の日本程無拘束では無い。娘の夜歩きの如き、カフェはひりの如き、ダンス・ホオル通ひの如き、寧ろ西洋の方が窮屈であらう。又雙方が好きな人を自由に選ぶと云つても、それは形の上の話で、實際は一切の男女關係がさうである如く、手近いもの同志がいつしよになるので、選擇の自由は字義通りには働かない。ついでにつけ加へて置くが、基督教傳道師や矯風會連は、日本の公娼を非難する事は頗るきびしく、それは正しく同感であるが、同時に西洋の多くの都會の夜、途上行列をつくる辻君の群に言及する事を避けるのは狡猾であり、卑怯である。自分達の議論を都合よくする爲に、我國の事といふと何でも彼でも痛烈に攻撃する偏見に陷つてゐる。東西の婦人を比較する場合にも、屢々同一の例を見せつけられる。

しかし、何と云つても、日本の女が西洋の女に比べて、陰と陽との關係にある事は否めない。

しとやかに坐つて、無表情を禮儀と心得、女大學の重荷に壓迫された姿を示してゐる事は確かだ。とはいへ直ぐに、だから日本の女は不幸だといふ斷定を下すのは、餘りに婦人參政權論者好みである。

そこで、日本の女を西洋の女に比べて、何がこつちの強味かといふと、鶴見氏が主題とした「母」としての女である。その外の何ものでも無いと斷言してもいゝ位だ。鶴見氏はいふ。「日本の女性は決して失つてはならない多くの美しき淸きものを持つてゐる。その輝ける一つは、母としての情操である。云々」更に又曰く。「日本の女性は、母となつたときに、實に莊嚴な玉座に坐つてゐる。云々」又曰く。「世界の國々の女性たちは、それぞれ色々の特色を持つてゐる。しかし、母となつたときには、日本の女性に及ぶものはないと、私はいつでも考へてゐる。さうして、そこに日本の女性の榮光があると考へてゐる。」これらの言葉は、現代の急進的婦人——現狀に滿足してゐないで苛々してゐる婦人達には喜ばれないであらうが、將來の事はその時になつて見る事にして、少なくとも今日の大多數の日本婦人には、寧ろ媚るが如き甘さをもつて受入れられるであらう。小說「母」が、さかんに版を重ねるのも故ある事である。

小說「母」は、日本女性の最大美點であり、又最大の強味である母の典型を示さうとこゝろざし

たものであらう。決して或個性を如實に描く事が目的で無く、類型としての母を描けば足りるのであらう。作者は最初に「純清なる藝術品としての小説を書かうとするのでは無く、一個の時論記者として、自分の議論を小説の形に托して天下に送る」のだと云つてゐる。

しかし、小説作者としての鶴見氏は自身卑下する通り素人に違ひ無いが、子供の時から小説を好んで讀んだと云ふ丈あつて、讀む方ではまんざら素人では無さゝうである。したがつて、「今迄の小説の型や約束に少しも拘泥しないで、勝手た形式で、物語を記し、勝手なところで議論をする」といひながら、何時の間にか習得してゐた在來の小説の形式を離れる事は出來なかつた。第一章の「日は輝く」の如きは、そのかきかた丈は、本格小説のゆき方を學んでゐるのである。此の一章丈をきりはなして見ると、その構成法も、描寫法も、寫實主義の流を汲んで、かなりくろつぽいところを見せた。尤も、寫實主義は寫實主義でも、自然派以前卽ち德富蘆花草村北星時代のものである。往年自然派の批評家が、皮相寫實と呼んだところのものである。

いつたい小説のかきかたには、大別して物語體と描寫體とがある。前者は筋を運ぶのには都合がいゝが、場面々々を生彩ある迫眞感をもつて展開するには後者に據らねばならぬ。鶴見氏も玄人らしく、先づ描寫體で行く意氣を示したのであるが、到底それ丈の筆力をもつてゐないので、

何時の間にか物語風を主とするかき方に變つた。それは巻頭の斷り書のやうに、勝手なところで物語をし、勝手なところで議論をするといふやうな意識的のものでは無く、話の筋が進むにつれて描寫體ではやりきれなくなり、知らずしらず物語風を主とする形式に變つて行つたやうに見える。そこに素人の素人たるところがある。

扨て「母」の女主人公朝子は、熱海の細工物を商ふ家の子に生れ、五月の日の輝く山路で、偶然出あつた東京の客に見染められて、その妻となる。相手の男大河澄男は一種の近代型で、一擧一動氣障(きざ)な奴だが、作者は氣障男を描く積りで書いてゐるとも思はれず、存外好意を寄せてゐるらしくも見える。又此の小説の讀者の大多數なる現代婦人にとつては、寧ろ好ましい型の人間であるかもしれない。彼は帝國大學の法科を出、父の遺産を繼ぎ、父の關係してゐた銀行に入り、私費で留學し、外國殊に亞米利加崇拜家で、文學好(ずき)と自信し、とりわけ佛蘭西文學の情調を懷しみ、熱海の山でモオパツサンの紀行文「海の上に」を讀み、見知らぬ女に馴々しく聲をかけ、いきなり「お寫眞を一枚撮らして下さいませんか」といふ程押も強く、「弱き心は、美しき娘を得ることなし」といふ英語の諺を自分自身にいひきかせながら、猶豫なく懷のヴエスト・ポケツト・コダツクを出して「よく撮れたら、お送りします。下手だつたらご免なさい」と、一寸節をつけて言つた

と言ふ人物だ。しかもこれが日露戰爭以前の事なのだから、不良型紳士のはしりと見ても差支ないやうだが、作者は彼が善良なる坊ちやん育ちの正直者である事を確說してゐる。

何れにしても、此のおつちよこちよいの亞米利加崇拜型の男は、一にも押、二にも押で、忽ち細君型の娘を獲得する。子供か生れ、進と命名される。こゝに一人の「母」が出來上つたわけだ。

時は恰も日本國民が、急激なる發展を遂げんとする明治三十年代の事である。新婚の三年目に、日露の國交斷絕し、進が數へ年四つの時、日本海大勝利の歡喜が到來する。その號外を手にして、國民的感激の極父親澄男は天皇陛下の萬歲を叫んでわつと泣き、母の朝子は我子をひしと抱いて啜り泣く。「何も解らない進も、兩親の泣いたのを見て、火のついたやうな聲を出して、わつと泣いた。」

斯ういふ場面を綴出して、特殊の時代相を描き、「その四つの折の泣き聲を、彼はおぼろげながら、大きくなるまで憶えてゐた。精神分析學者が言ふならば、それは進の潛在意識のうちに英雄的情操を織り込んだのだ。」と御談義をつけ加へたが、かういふ場面は一篇の構成の上に何等の有機的關係を持たない無駄である。

通俗小說の常道を踏んで、萬事都合よく運んで來た新婚の甘つたるい生活は、又簡單に破れて

しまふ。澄男が道樂をはじめたのである。だが、こゝで作者は澄男をただの道樂好の男としては描かない。吾々が見ると、少しばかり新しいきものを着た輕薄才子に過ぎないが、作者は一生懸命になつて、此の男の存在價値を高めようと努力し、その道樂も、夫婦の性格の相違に歸した。賑か好きの金持のお坊ちやんと、貧しい家に育つた朝子の寂しいかげのつきまとふ性格とを對照させ、離反のやむを得ない眞因とした。それはよき解釋に違ひ無いが、それを演繹して「外國文藝の教養の乏しい朝子には、澄男のユウモアが解らなかつた。時としては皮肉と間違へて沈んだり、冷笑かされたかと思つて怒つたりした。それが澄男に堪らなくつまらなかつた。さうして、自分のユウモアにどつと笑ひ崩れてくれる話し相手が欲しくなつてきた。」と說明してゐるのは、あまりに皮相である。多くの外國崇拜家と同じく、此の作者も西洋人のユウモアをひどく高尚なものと考へてゐるやうである。長い間外國住居をした同胞の多くが、日本人にはユウモアが無くていけないと云ふ。成る程、日本人のやうに苛々した心根のものには、亞米利加人のやうに呑氣きはまるユウモアは乏しいかもしれない。だが、日本には日本流のユウモアがある。極く洗練された、ひりゝと辛い味を含むユウモアがある。それは都會的教養が無いとわかりにくく、ヤンキイ式のヂョオクに類するものとは些か趣が違ふ。鶴見氏に、日本流の洗練された洒落がわかるか

どうかは知らないが、少なくとも鶴見氏の描いた大河澄男にはわかるまい。彼はユウモアを寶物のひとつに數へる男であるが、自分では洗練された洒落の積りで、他人にとつては駄洒落に外ならぬやつを、臆面もなく連發して相手を惱ます人物としか受けとれない。

更に作者はつけ加へて、澄男を詩人肌の豪放なる派手好みとし、朝子を打算的分析的な科學者と見立てた。しかし、それは作者の讀書の知識で、すべての人を詩人的氣質と科學者的氣質に分る事が出來るといふ説の不用意なる使用に過ぎ、此の場合の二人に強ひてあてはめるのは、あまりに不自然である。

作者の説明は當を得てゐないが、兎に角澄男は遊びはじめる。朝子の第一の惱みであり、又日本の多くの女の惱みに違ひないから、女性の讀者は朝子に同情して澄男を憎むであらう。しかし、果して幾人の女の讀者が、遊びの場所に於る澄男の氣障な樣子に義憤を發するかは推測しがたい。あまりに氣障だから見本として引き出す事を許して貰はう。

「さつきからお待ち兼ねですよ。」

と待ちの字のところに力を入れて、たしなめるやうにいふ。

「俺を待つ奴があるとは、近頃珍しい。抑々それは男か女か。」

と芝居の臺辭めいた口調でわざと、とぼけ乍らきくと、

「なんです、ご存じの癖に。」

とピシヤリと、平手で輕く肩を叩く。

「あいたい。あいたい。といふは君にあらず他に思ふ人あり！」

と輕口を叩き乍ら、光る程拭き込んだ廣い梯子段を、トトトントンと小走りに走り上つて、金の衝立を左に手際よくするりと廻つて、半分開いた襖のうちに、ぬーつとはいると……どうです。このいやみつたらしく重苦しい無駄を喋る男に、ユウモアがわかるかしら。トトトントンと小走りに上つて、衝立を左に手際よくするりと廻る景色を想像して見て貰ひ度い。しかも驚く可き事には、これが氣障男に對する作者の揶揄でも、ユウモアでも無く、寧ろ氣の利いた新型の通人を表現する爲の描寫らしい事である。

これ程氣障では、いくらいゝ男でも、金があつても、女には好かれまいと思ふのだが、曾て客に惚れた事の無いといふしつかり者の藝者に惚れられる筋になつてゐるのは、しあはせ極まる男である。

事のついでに指摘して置き度いのは、鶴見氏の書く會話に、むやみに「お」の字のついてゐる事

である。これは昔は華族女學校出身者に限つたものだつたが、近頃はふんだんにつかはれる。お繪、お習字は女學生の一般語となり、お餅、お空は童謡作者によつて普及された。鶴見氏は「おしばらく」「お着物」「お學校」など、ごていねいを極め、遂には「お喧嘩」といふの迄飛出して來た。又、役人などが新橋や赤坂で遊ぶ時はさういはせるのかも知れないが、普通東京では、大河澄男ならば「おーさん」とはいふだらうが、「おーさま」とはいはない筈だ。さまづけは名古屋流だ。濱子といふ藝者の口から、自分のみうちを「お父さま」「兄さま」と云はせるのも變だし、「お旦那さま」もをかしい。

さて、心ある者の目から見れば、はなつつまみの筈の澄男が大もてにもてるので、朝子のなげきはしげくなる。由來悲劇の主人公には、敵役と味方役を配して、時には悲しませ、時には喜ばせるのが定法である。そこで作者は澄男の妹の月子といふ上流婦人型の無智の代表者を出して朝子をいぢめさせ、一方には亞米利加じこみの婦人運動者長谷川治子女史なるものを登場させて、朝子の力だのみとする。もう一人澄男の親類の木下一郎といふ學者も出現し、これは作者の代辯者となつて、事毎に道理づける役廻をつとめ、且心中朝子に戀してゐるといふ儲役である。

さるほどに、お坊ちやん育ちの澄男がいゝ氣になつてゐるうちに、親讓りの銀行はつぶれてし

まひ、つゞいて病氣にかゝつて死んでしまふ。あまりに突然の死であるが、こゝらであの世へやつてしまはないと、「母」の母たる見世場がなくなるわけであるから、筋立の上からいへば極めて當然の事で、些かも異存は無い。時に、長男の進は十一歲、長女の春子は八歲、次男道男は滿一歲にもなつてゐなかつた。

忽ち貧乏になり、良人を失ひ、三人の子供を抱へて、朝子は「母」として人生に直面した。我が子を偉い人間に育てる事、それが「母」の義務であり、又此の小說の主題である。誰しも、漠然と偉い人になり度がるものであるが、鶴見氏は人一倍功名心が強さうである。篇中至る所で、偉い人になれと說いてゐる。何か、あまりに功利的に思はれて、もつといゝ人になれといふ教をきゝ度く思ふ。だが、少年進は父の遺骸の前に額づいて祈る。「僕は勉強します。勉強して僕はきつと、日本で一番偉い人になります。僕はきつと、偉い人になります。」

偉い人になる徑路はどうかと云ふと、恐らく鶴見氏は、小學校から優等で、ませてゐて、第一高等學校に入り、雄辯家で鳴らし、帝國大學に進み、銀時計を頂戴し、代議士となり、大臣となる一路を胸裡に藏してゐるのであらう。

朝子とてもその通りの理想を持つてゐるに違ひ無い。雄々しくも子等の爲に、華族のやしきに

奉公する。こゝでは、昔はやつた立志小説の定石を學んで、その家の若様と進とが對立する。勿論若様は馬鹿で我儘だ。進は負ぬ氣の少年だ。二人が「お喧嘩」をし、年少ながらも進は勇敢に若様となぐりあひ、取組あひ、遂には敵を池の中へ放りこんでしまふ。おまけに、剛情な進は、次の日になつても謝罪しない。あやまれと云はれても斷じてあやまらない。母の朝子も息子の態度を是認して、「あなたは男です。決して故なく人に讓つてはいけません。どんな位置身分のある方でも、どんなに大勢の人に向つても、自分の道理のあるときは、一歩も引いてはなりません。どこまでもお戰ひなさい。」と賢母振を見せて勢をつけ、やがて此のやしきを見捨てゝしまふ。

親子は亞米利加じこみのオールド・ミス、女權論者の長谷川治子女史の家に引移る。富裕なやしきが住みにくかつたから、つましい此の家は住みよく、愉快な日のつゞくのは通俗小説のおさだまりである。

更にその通俗小説的色彩を濃くするものは、亡夫のかたみを持つて、生前良人が馴染んだ藝者濱子を訪問する場面である。喜多村と河合で大向を唸らせようといふ場面だ。

その間、木下一郎をかりては作者の理想を述べ、又子供の教育の爲には田舍の方がいゝといふ議論の爲か、偉い人にならうならうとしてゐる少年進を、一時學校嫌ひにして、母親の生地熱海

へ赴かせたり、何の關係もなく外國の學者で政治家だといふ人物や、その娘などを引張出して、作者の西洋崇拜症を露出させてゐるなどは、緊密なる可き小說の構成組織を弛緩させる無駄であつて、調子に乘過ぎた素人の悲しさを示すものである。

小學生のくせにクロムウエルの傳記などを讀んでゐる可愛氣のない進は、たゞ偉くならうならうとこゝろざしてゐるのだが、註文通り中學の入學試驗を受けて一番で合格する。此の早熟なこどもに對して、作者は異なる場所で異なる人間に、同じほめ言葉をいはせてゐる。ひとつは中學一年生の進がラムのシエクスピア物語を讀んでゐるのを發見して驚く長谷川女史が「えらいのね。一年生の癖にもうこんな本を讀み出したの。あの兒は、どの位偉くなるか判りませんよ。朝子さん、今は苦しいでせうけれど、あなた先は樂しみよ。進さんはきつと總理大臣になるわ。」と云ふのだ。もうひとつは、急性の病苦に惱む母の看護をする進を見て、藝者濱子が、「奧さま、もう私は、これで安心いたしました。もうこれで、大河家のお後は立派に立ちます。あの偉い若樣が、あなたについておいでになります以上は、どんなことがあつても、奧さまはお困りになることはありません。大河さまのお邸は、この若樣の御代に、きつと先代より、もつと立派にお榮えなさいます。若樣は、きつと、きつと、總理大臣におなりになります。」と云ふのである。偉い人卽ち

總理大臣といふ單純正直な目標は、何となく作者のひとゝなりを示すものゝ如く想はれ、おのづから微笑が湧く。私共には、かう云ふところに、作者が期待せざる多分のユウモアが感じられるのである。

いろいろの事を經驗して、朝子は次第に人として完成して行く。そして作者は此の婦人をかりて、日本女性の古い型を乘越てゆく、ひとつの理想型を見せようとしてゐる。これはたしかに面白い企てゞある。たゞその書方は、いかにも新聞記事的で、藝術的描寫になつてゐない爲、深い印象を殘さないのは殘念だ。先づ吾々はどうして殘つてゐたのか不思議に思ふのだが、熱海に所有してゐた土地が賣れて、相當の金が朝子の手に入る。それをもとでにして、一軒の店を構へ、藥屋を開業する。其處に歐洲戰爭が爆發する。玄人小說家が兎角閑却しがちな政治經濟方面の知識が役立つ筈なのだが、これも亦新聞記事的の說明にとゞまつて、よき效果をもたらさなかつた。

先づ到來した不景氣で、朝子は窮地に陷り、おまけに腦貧血を起したりして、氣の毒な事になるが、その上にも難境に追ひやつて、亡夫存生中目をかけた男の入智慧で、亡夫の同級生で、生前「あんな厭な奴はないね」と云つてゐた山路進一郎を頭取とする銀行から金を借るはめになる。

こゝで完全に通俗小說、卑俗小說のおきまり型に陷つたのは、此の山路が朝子の苦境につけこん

で、その操を奪はうとするのである。女の無智を利用し、契約の更改などゝいふ都合のいゝ手も用ひられる。

だが、通俗小説の主人公は決して悲境の底に沈みきりに沈まないのを通例の運命とする。朝子一家も一時はどうなるかと思はれたが、戰爭が長引き、日本が思ひもかけない戰爭景氣に見舞はれると、忽ち手持の獨逸藥の値が出て大儲をする。山路の銀行にも返濟し、且たんかを切つて溜飮をさげる。

その上此の女成金は、儲けのちひさい藥屋を未練氣も無くやめてしまつて鐵屋になり、熱海で親代々の商賣をしてゐた弟を呼寄せて、支配人にする。「大正五年の夏には、もう朝子の身代は、押しも押されもせぬ程、太つてゐたのである。」

尤も、ウイルソンの平和勸告書に誘發された暴落を喰ひ、朝子の弟が山路にだまされて、五萬圓の約手を書き、二進も三進も行かなくなつたところを、藝者濱子に救はれるなどゝいふ場面もある。だが、結局交戰國が平和拒絕の通知を發したといふ號外が出て、又相場が刎ね返したのをいゝ機會にして、朝子は商賣に見切をつけ、郊外に居を移してしまふ。進は中學の四年になつた。けれども、やつと安心したと思ふと、朝子は腎臟病で死んでしまふのである。「母さまは、もう

よく眼が見えません。この部屋も暗い。しかし、母さまの心は明るいのよ。お父さまは明るいことがお好きだつたのよ。あなたも明るい人間になつて頂戴……明るい五月……明るい日本……」――それが臨終の言葉だ。

鶴見氏は素人作家である。そして、玄人作家の陥り易い缺點を知り、素人の割込む餘地のある事を認めてゐる。けれども、こゝに注意すべき事は、「母」を讀了して、素人に特有の組立ての下手、會話の下手、描寫の下手はしかたがないとあきらめるが、これらの缺點を打越して、素人の強味を示す可き特質の乏しいと云ふ事である。氏が自負する思想の宣傳にどれ丈役立つのか。全篇に漲る總理大臣病が卽ち英雄主義だと云ふのか。少年進の如きは、寧ろ片意地な偏屈人だ。出て來る人間の殆んどすべてが、本質に於てはひどい事大主義者で、又無反省であるかのやうにも疑はれる。さうだ。無反省こそは、此の小說全篇を貫くひとつの特色であらう。だが、明るく朗かなる事が、無反省から來るのならば、ほがらかなる事もわざはひである。同じく作者の自負する博い知識も、誰でも知つてゐる程度の新聞的事實で、それが此の小說に何等の重味をも加へてゐない。又人間の觀察に、些かも高貴な精神のうかがはれないのも物足りない。一例をとれば、大河澄男は「つむじ

のぎりぎりからつま先まで江戸つ兒だつた」と云ふが、彼の言語動作は完全に田舍者である。表現されたる彼のいやみと氣障も、作者の意識した仕事では無いやうである。

ゆくりなくも思ひ出すのは、いつか或る文人の話した事だ。その人は地方講演に賴まれて行つて、偶々鶴見氏と同じ演壇に立つた。自分の番をすませ、氣樂な氣持で、しんうちの鶴見氏の演說を聽いてゐた。なにしろ、學生時代から名だゝる演說つかひであるし、その後日本語でも英語でも雄辯家の名を馳せてゐる人だから、さぞかしうまいものだらうと思つてゐたところ、果してうまい。聲がよく、流暢で、いきがつゞいて、抑揚があつて、美辭麗句が續出し、適度の諧謔があり、熱があり、正に一流の辯士だつたさうである。それにも拘らず、その人は、長く聽いては居られずに、樂屋へ逃込んでしまつたといふ。席にゐたゝまれない氣がしたのださうである。何故か。うまいにはうまいのだが、きいてゐても羞しくなるやうな一種の調子がある爲だといふ。いやみなのか、氣障なのか、辯者自身には氣のつかない臭味があるのでは無いだらうか。それは恰も小說中の人物、大河澄男が待合の玄關で女將や女中と取かはす會話のやうな、トトトントトンと小走りに梯子段を上つて、金の衝立を手際よく左にするりと廻る時の姿につきまとふ雰圍氣が、むらむらと身邊に立ち迷ふのでは無いだらうか。ところが、演說が終つて、辯士が樂屋へ下つて

來ると、聽衆の中の特別崇拜者なる青年が、どやどや後にくつついて來て、先生々々と叫びながら、感激して縋りつき、中には感極まつて泣く者もあつたさうである。往年竹久夢二氏にあこがれた女學生、近年西條八十氏を慕ふ文學少女のやうに、地方の政治青年の中には、鶴見氏と共に國を憂ひ、鶴見氏の爲ならば水火の中へも飛び込まうと云ふ多感の人物が多いさうである。さういふ人々は、西洋芝居の幕外の獨白の如く抑揚のある、美辭麗句をつらねた演說に感傷の涙をしぼるのである。何といふ幸ひであらう。それに引きかへ、氏の演說のうまさを充分認めながら、ちつと聽いてはゐられなかつた人の如き感覺を持つ者は、何たる不幸であらう。言葉を換へていへば、そこに素人作家の強味があり、こゝに玄人作家の弱味があるともいへるのである。

何といつても、此の小說は大衆の喜び迎へるものである事は疑もない。作者が知名の政治家で、殊に雄辯家の名をうたはれる流行兒であり、且小說の主題は萬人向のものである事既に述べた通りであるから、數百版を重ねることも故ありといはねばならぬ。だが、吾々の期待する素人小說の美點は何もない。ありきたりの通俗小說の亞流に過ぎない。最も望ましい素人の處女性が無い。純眞新鮮の感が無い。素人は素人でも、大分惡ずれのした素人である。それは恐らく、氏が小說家としては素人でも、文筆業者としては玄人に近い事から由來してゐるのであらう。ふた昔も前

の「美文錦粹」に培はれた文章は達者であるが、レディメヱドたる事を免れない。往年島崎藤村先生が、短篇小説「弟子」の中に用ひて、名印象描寫だとうたはれたセンテンスをその儘借用して、「彼女は體中耳だつた」などゝやつてゐる程擦れてゐる。辯士として、あまりに聽衆をあつかひこなし過ぎてゐる事が、小説創作の場合に惡疾として祟つてゐるのだ。

私は「母」を繰返して讀んで、ひとつの確信を得た。最近藝術作品の價値問題に關し、往々にして藝術品の價値の高下は、それを享樂する人間の數の多いか少ないかによつて定まると云ふ說が、全然のたはごとであると云ふ事である。（昭和四年十月二日）

――「中央公論」昭和四年十一月號

休暇・典型的勤人・人造人間

拙文「今年の夏・鯉・金魚」――昭和四年十月號「三田文學」所載――の中に、毎年夏休を樂みにして待ち焦れながら、いざとなると勤務先の都合で休めなくなり、今年も亦空しく夏の終らんとする事を書いたところ、友人知己の誰彼から、いろんな質問が出た。いつたい君は會社でどんな仕事をしてゐるのだ、いくら忙しいからと云つて、數年間つゞけて夏休が貰へないといふわけはあるまい、君が休んだら、誰かゞ代つて仕事をするだらう、病氣の時はどうするんだ、といふ人もあつた。君は頑丈だから、他人のやうに休息を欲しないのだらう、とかんたん素朴な斷定を下した人もあつた。毎年休暇を貰はないといふ事を賣物にして、上役に媚びてゐるのだらう、といふきびしい批評もあらはれた。

元來私の友達は、全くかけはなれた二種類に分つ事が出來る。一方は本名のつきあひで、他は

筆名のつきあひである。そして、右の如き質問をするのは、十中の八迄水上瀧太郎の友達であるが、悲しい事には、本名のつきあひの場合にも、往々同様の質問を受るのである。私が會社に於て、人並の仕事をしてゐようとは考へられないと云ふ人間さへあるのだ。

本名のつきあひの方の人は、大概時間を粗末にしないが、水上瀧太郎の友達は時間の觀念が乏しい。此の連中が時間に縛られるのは、原稿〆切の時に限るが、それさへ、〆切なんかを氣にして、きちんきちんと間に合せるのは常識的でいけないといふやうな、都合のいゝ文人かたぎもあつて、吾々が毎朝の出勤時間を氣にする程痛切なものでは無い。朝は腐つた獸のやうに寢てゐるだらうし、朝飯のなかばに正午のサイレンを聞く事もあるだらうし、夜どほし將棋や麻雀をやつてゐるのもあるだらうし、好き勝手に晝寢もし、散歩も旅行も自由であらう。凡そ時間ぎめの規則にしばられる事については何等の經驗がないものだから、年中縛られ通しの生活をしてゐる人間に對して、現實感をいだかないのである。想像の豐富を必要とする仕事に携はりながら、勤人の日常には正當なる推測を向ける事が出來ないのである。時々私は中腹で、若い文科の學生などにいつてやる。君達は駄目だよ、男女關係だと無闇に細かく心が働いて、閨の睦言迄想像をたくましくするけれど、政治や經濟の事は何も知らないぢやあないかと。

ほんとに此の人々は、プロレタリア小說家や新聞紙婦人雜誌連載の通俗小說作家と同じく、重役といへば布袋腹で、禿頭で、葉卷をくはへ、シヤンの女祕書かタイピストを傍に置き、かへりの自動車に乘せて待合へ連れて行くといつたやうな他愛のないものだと思つてゐる。したがつて、たとへ重役では無いにしても、會社で相當古顏になり、頭髮は日に日に薄くなりまさる私に對しても、右の如き重役概念から類推して、會社に於ては安樂椅子にでもふんぞりかへり、悠然と烟草をくゆらしながら、めくら判を押してゐるものと考へてくれるのである。だから、自分の好き勝手な時に、十日や二十日位休む事はお茶の子だらうと考へてくれるのである。

私は元來典型的の勤人では無い。十數年勤續の月給取で、もう一二年たつと、商工會議所から表彰されさうな無疵の履歷をもつてゐるが、どうもしんそこからの勤人にはなり切れない。若し月給をあてにしないでも樂に生活出來るのだつたら、私は今日迄勤續しなかつたかもしれない。その根性が面つきや言葉にもおのづからあらはれると見えて、外觀が旣に勤人らしくないさうである。さうかといつて、藝術家といふやうなしやれた樣子でない事は斷る迄も無い。今でも、勤人ばかりの酒席につらなりながら、たゞ一粒の變種だと酌人達に思はれるやうな不器用な勤人だ。つい此間も、知人の御馳走になり、たまたま私の同僚の噂の出た時、主人は傍の藝者をかへりみ

て、此の人も彼の人と同じ會社の人なんだよと云つたが、相當世の中を鵜呑にしたやうな年増さへ、あらいやあだと一笑にふして、信じてくれないのであつた。

そんならどういふのが典型的の勤人かといふと、私は手近にその實例を見る。私の尊敬する先輩は、獨立力行一大會社の實權を握り、既に古稀に近い齡にも拘らず、壯者をしのぐ元氣で、朝は早く起き、平社員と共に出勤し、夕方は誰よりも遲く退出し、夜は遲く迄手紙を書き、つきあひは廣く、お義理の宴會には必ず出席し、全國に散在する支店を絕えず巡廻し、まんべんなく代理店を訪問し、夜間數時間の睡眠の外は、殆んど休息の味を知らず、時たまの病氣以外には、數十年間休暇をとつた事が無いのである。此の先輩にとつては、日曜さへも無駄なものに思はれると見えて、先年ふとした談話のついでに、日曜祭日と雖もどういふ用事が突發するかもしれないから、店の扉は閉さず、交代で出勤した方が客に對して親切であらうといふ說をきかされ、日曜祭日を何よりも好む私は、反對論を唱へるより先に、默禮して引下つた事があつた。その數十年變らないといふ勉強振は、たゞたゞ敬服するばかりで、誰一人眞似も出來まいと思ふが、私には私の說があつて、休暇の間に頭腦をやすめ、日常の仕事を客觀的に見る餘裕をつくる事は、事業家にとつて何より必要な事だと考へるので、此の先輩に對しても、毎年々々夏休みをとつて手足

を延ばす事を勸めてゐるが、遂に未だ功を奏さない。別莊はあつても、それは子供の行くところて、自分は眞夏と雖も會社を休まず、長途の出張旅行をも苦としない。ちつとお休みになつた方がいゝと思ひますがと、奥さんに話して見た事があるが、奥さんの言葉によると、會社から報酬を貰つてゐる間は斷じて休まない、後日隱居したら充分休むからよろしいと云つて居られるのださうである。これこそ典型的の勤人であると、私は悉く感服し、内心常に休暇を欲してゐる自分の至らぬ事を恥るのである。

だが私には、矢張休暇が欲しい。山にも行き度い、海にも行き度い。我家の疊の上に大の字になつて、何もしずに終日寢てゐるのも惡くない。今年こそ二週間つゞけて休まうと切に思ふものだから、つい口に出して人にも話す。話すと、是非休め、一緒に遊ばうと云つてくれる人もある。當分鎌倉に住むといふ中戸川吉二氏には、夏の初めから約束して、きつと行く、久保田万太郎氏を引張つて行くと繰返して斷言したが、秋もなかばの今日となつても、未だその意を果さない。同じ鎌倉の住人里見弴氏にも同じ約束をした。此の方は釣好きで、めじまぐろの子を釣つて、濱邊でぶつに切つて食つたなどゝいふ壯快な話をしてくれる。たとへ子供と雖も、まぐろは素人には釣れないだらうと抗辯して見たが、此の手で釣つて此の口で食つだといふのだから間違ひは無

い。よし、自分も釣つてやるぞと、ひそかに腕を撫してゐるのだが、から秋もふけて來て、めじまぐろが果して寄つて來るかどうか、心もとなく思はれる。

なんとしても、斷然休暇をとらなければならない。夏は過ぎたつて構はない。さう決心して、たまたま或る席で典型的勤人である先輩御夫婦とおちあつたから、この機會に休暇を貰はうと思ひ、先づ義理として先輩に休暇をとるやうに勸說した。いゝや、私は休まなくてもいゝ、別段休み度いとも思はないと、いつもの通り首を横に振るそばから、奥さんが私を呼びかけて、あなたもお休みにならないで感心だと、宅が申してゐるんですよと、私にとつては手きびしいほめ言葉を眞向から賜つた。私は時の非なるを知つて苦笑するばかりだつた。

どうだい、ほんとの實業家つてものはかうしたものなんだぜと、うちに遊びに來る若者を捉へて、いかに我が先輩が典型的勤人であるかを話した。ところがどうだ。この文學青年は、へえ實業家なんてものは人造人間みたいなものですねと、輕くあしらつてしまつた。

うまい事を云ふなあと、心中ひどく感心したが、あまり愉快な批評では無かつたから、澁い面をしてその儘話題を變更した。ところが、翌日會社へ行つて見ると、上は重役から下は小使給仕迄、みんな人造人間のやうに思はれて來た。玄關には、ばねのきかなくなつた姿で、人造人間の

受附が立つてゐる。男のと、女のと、人造人間が、列をつくつて出勤簿に判を押してゐる。人造人間がおびたゞしい札束を數へてゐる。人造人間がそろばんを弾いてゐる。人造人間がタイプライタアを叩いてゐる。人造人間が電話をかけてゐる。そして私は——人造人間の書きさうな下手な字をせつせと書いてゐるのだ。

こいつはいけない、うつかりすると此のまゝ人造人間になつてしまふかもしれないぞ。私はあわてゝ半紙をのべて、休暇御願と書いた。そして、やうやく三日間の休暇を貰つた。これでやうやく人造人間にはならずにすんだと思つてほつとした。

その晩又、文學青年がやつて來たので、私は勳章を買つた事がまだばれない間の實業家のやうな得意の色をうかべて、休暇を獲得した事を話した。へえ、人造人間でも油をさす事はあるでせうからねえと、若者は私をあはれむものゝ如く、無表情で應じたのである。(昭和四年十月八日)

——「三田文學」昭和四年十一月號

天覽野球試合陪觀之記

天子様にベエス・ボオルを御目にかけたい——これはかねてよりの私の心からなる願ひであつた。

吾々民草は、御治世のありがたさで、勝手氣儘に行樂をほしいまゝにしてゐるが、天子様には日夜此の國のまつりごとに大御心を煩はされ、いかなる御仕事があるのか吾々にはうかゞひ知る事も許されないが、御精勵の程仰ぐもかしこしとうけたまはる。それにも拘らず不心得の役人どもは、砂利を喰ひ鐵を喰ひ、不正のお金を懷中したり、最もだいそれた奴になると、おそれおほくも天子様より下したまはる勳章を金づくで賣つたり、言語道斷のふるまひが多く、宸襟を惱ましたてまつるとは、何たる申譯の無い事であらう。

たゞさへ御忙しいところを、奸臣どもが御心を煩はす事が多いのであるから、たまには青空の

下に雪白の熱球の飛ぶ壯觀を御目にかけ、御慰め申上るのが、善良なる人民の忠義のひとつである。身分いやしくして、御側近くへ侍する事はかなはずとも、せめては嘘いつはりの無い遊びの庭に台臨を仰ぎ、うるはしきみけしきをおろがみまつる事こそ、こよなき喜びであらねばならぬ。

この心持は、敢て私のみのものでは無かつたと見えて、この度明治神宮體育大會の六日目に、各種競技をみそなはせられ、慶應と早稻田の野球試合をも御覽遊ばされたのである。吾等が幸ひ何にかたぐへん。その日スタンドの一隅に卑賤の身を謹んで陪觀の榮に浴した私は、些か感想を記して子孫の爲に傳へようと思ふのである。

慶應と早稻田とは、あらゆる意味に於て對立してゐる。兩校の創立者福澤大隈の一生が描き出した風格をそのまゝ校風とする以上、源氏と平家、上杉と武田、獨逸と佛蘭西、紅葉と露伴、常陸山と梅ケ谷、團十郎と菊五郎、ケムブリツヂとオツクスフオオドといつた具合に、何彼につけて結びつけられ、比べられ、ほめられそしられるのは免れざる運命である。とはいふものゝ、それは蛇と蛙、鰻と梅干といふやうな喧嘩づらや喰ひ合せのたぐひでは無く、りやうりやう相下らざるおほもので、一方を缺いては完全の景色とならない事正に鶴と龜、龍と虎の如きものである事は、斷る迄も無いのである。一方が實學問の敎にはぐくまれ、まかりまちがふと創立者の高邁

なる精神を忘れて意氣地なしとなるおそれはありと雖も、兎に角間違の少ない銀行員や會社員を世の中にはびこらせれば、片方は些か空漠たる憾はありとするも、高遠の理想を呼吸して、天下を乘取らんとこゝろざす院外團や操觚者を世に瀰漫させ、一方がおしやれと罵られる場合があれば、他方は野蠻とあざけられる事もあつて、山王樣と明神樣のおみこしが一時におでましになつたやうな盛觀を呈してゐるのである。但しその據つて來るところは、私立の二大學といふ意味もあるにはあるが、主として昂奮と感激の歴史を有するベエス・ボオルのおかげと見なければならない。

扨てその野球試合だが、往年早稻田の應援團が機略にはしつて約束を無視し、人數の制限を破り、ごろつきを糾合し、兇器を懷に呑むもの、審判官に脅迫狀を送るものを出し、遂に不名譽なる中止の止む無きに立到つた迄の試合は完全に見たが、復活後は、復活當初早稻田斷然優勢を示した二試合と、久しき後慶應がやうやく勝ちはじめた頃二度見た事がある丈で、日常の稼ぎに追はれて球場に臨む事を得ず、僅かにプレイヤア・ボオルドによつて慰められたのであつた。

ところが、近頃始終顏を合せる連中の中に、きちがひと呼んでも異議を申立てさうも無いファンが澤山ゐる。「三田文學」編輯擔任者和木清三郎氏、同編輯委員横山重氏はその最たるものであ

る。此の二人の如きは、春秋二季に熱狂するばかりで無く、一年中昂奮し、追懐と豫想に耽つて、或は滿足し、或は慨歎してゐるのである。二人にとつては、慶應と早稻田の野球試合は、空氣であり、日光であり、水であり、火であり、米の飯である。これなくしては健全に生きてゐられない有樣にさへ見受られる。

この兩雄の熱情に動かされ、遂に私も六大學リイグ戰のスタンドに、一喜一憂を味ふ身となつたのである。

公平に見て、復活以後二三シイズンは比較にならない程早稻田が強かつたが、今日の兩軍の力量は、六分四分で慶應を強しとするのが常識で、戰前多數學生集會の席上、斯道の先輩飛田、盧田二氏も、實力に於ては慶應が上位に在る事を斷言したさうである。此のシイズンの最初から試合を見て來た私も、勿論慶應の勝を信じてゐた。若し早稻田が勝つならば、第一回戰丈で、萬一第一回戰を失へば、直線的に敗退する外は無いと思つてゐた。理由は簡單だ。慶應の健棒の前に、陣を堅くするに足る投手は小川たゞ一人であるからだ。

玆で斷つて置き度いのは、私は勿論慶應贔負であるが、ベエス・ボオルに於ては早稻田を讚稱する事を惜まない。昔から慶應には天才プレイヤアが多く、本場の選手のやうに、大試合に臨ん

でも自由奔放に、いかにも野球技そのものを享樂してゐるやうな美技を演じるのに比べて、早稲田のは頗る島國的で、どうでも勝たうといふ精神の強さが、技倆の巧緻をたのしむ餘裕を與へない程さかんなのだ。たとへば宮武山下の如き大打者や、加藤本郷水原楠見の如き天衣無縫とも稱す可きうまさは、少なくとも今の早稲田には一人もゐない。それは事實だ。だが、伊丹水上水原森の如き、はなばなしさは缺きながら、刻苦勉勵のあげくに底力を養ひ、日本式武藝者の鍛練を想はせるものゝあるのも亦稱讃すべきである。そして、本場らしい慶應のうまさをたゝへるのは玄人筋に多く、日本的負じ魂の強さをほめるのは素人大衆ファンに多いのも事實である。曾て菊池寛氏は、慶應義塾の大ホオルに開かれた講演會の壇上で、文學は三田の方が好きだが、野球は早稲田の方が好きだと云つたのも、菊池氏らしい好みで面白い。

それは餘談だが、兎に角今秋の兩軍の實力は、六分四分で慶應の勝と見るのが當然だつた。にも拘らず、慶應は一回戰に負け、二回戰に勝ち、もう大丈夫となつてゐながら、決勝戰の最後に於て意想外の籤を引き、敗北の憂目を見た。何が試合を逆轉させたか。運だ。結果論としては、八回に一點回復された時宮武水原の交代を行つた事が難ぜらるゝであらう。しかし、それはベンチの頭腦的失敗では無い。寧ろ鋭ど過るやり口を、運命が憎んだのだと考へる外は無い。早稲田

には幸運が宿り、慶應は完全に見捨てられた。水原が無死の時打つた投手足下を拔くグラウンダアは、土を嚙んで中堅迄達すべき筈でありながら、二壘のベエスに當つて高くはずみ、富永をしてファイン・プレイを演ぜしめた。かと思ふと、第四回目に早稻田の森の遊撃はイレギュラア・バウンドとなつて生き、これがやがて點となつた。九回、伊達が二ストライキを取られ、閉口し切つて打つたあたりそこなひは、彼自らも豫期しないテキサスとなり、更に小川のバントは、一度線外に出て、その儘ファウルとなる可き球質だつたのに、全く見えざるものゝ手がいたづらをしたのであらう、ふらふらとダイヤモンド内に戻つて、水原の大暴投を招いた。恐らくあの球は、ファウル線外の小石か土塊の爲に方向を轉換したのに違ひ無い。若しもその小石か土塊が無かつたら……

幸運に惠まれた早稻田は、六對三といふ意外の開きを見せて勝つたのだ。早大側の應援團が狂喜し、その夜神樂坂や新宿のカフエで大騷を演じたのは無理の無い所である。慶應が勝つて學生が銀座に進出すると、大々的のみだしをつけて惡意の報道をする新聞が、一齊に沈默を守つたのも、新聞王國を牛耳る早稻田出身者の態度として之亦重々無理の無い事である。

勝つたと思つた試合に負けた慶應の選手の氣の毒さは今更いふ迄も無いが、その味方のファン

の中には、完全に食慾を失つたのもあり、家庭不和の源ともなつたのである。

我が熱烈なる院外團的應援者、和木横山兩氏の如きも、累を奥さんに及ぼした事は疑も無いが、恰もよし前代未聞の天覧試合が行はれる事になつたので、一年の中に春を二度迎へたやうな陽氣を回復した。

扨て當日は早朝から入場しないと、いゝ場席がなくなるし、御警衛の爲に交通の遮斷される心配もあるので、和木氏と同行、午前八時前に三壘側本壘近くのスタンドに席を占めた。午前中に、中等學校の試合がふたつあつたが、あまり面白くなかつた。

此の日天子様の御前であるにも拘らず、平生の通り應援をさしゆるされたのは、ありがたい思召である。殊に私が天覧のありがたさを痛感したのは、早稲田の應援隊が、いつもと違つて極めておとなしい様子をしてゐた事である。慶應は常に制服を着用してゐるが、早稲田と來ると、木綿の紋つきの羽織、白袴、素足に足駄をはき、中には白だすきといふ凄いのもあり、軍扇をかざすのはまだしもいゝ方で、何の必要があるのか棍棒や、弓の折れ、木刀などをひつさげたのもあり、苦々しい事に思つてゐたが、此の日はみんな制服で、一人も異風の者を見なかつたのは氣持がよかつた。例の芝居がかりの豪傑風が、天子様の御目に觸れてはおそれおほいといふ理由で差

捺へたのかとも思ふが、一説には、前以ておかみの注意を受けたのだとも云ふ。どつちにしても、天子様の御前に出られないやうな無禮な風體は、平生から愼むのが當前だから、今後はあまり人を脅かすやうなよそほひはやめる方がいゝ。

この日は朝來曇天だつたが、天子様が御臨場になる少し前、俄に球場にうす日がさした。えらいもんたなあ、天子様がいらつしやつたら後光がさしたと、誰かうしろの方でつぶやいた。

愈々天子様がいらつしやつた。練習を切上げた兩軍の選手も、朝の試合に出た中等學校の選手も、審判官も列をつくつてお迎へ申上げ、吾々陪觀者も一齊に起立した。

帽子をとれ、帽子をとれと、他人の頭の蠅を追ふやうに怒鳴るのは早稻田側のスタンドで、慶應側には大聲を發する者は一人もなかつた。

陸軍々樂隊が君が代の曲を奏し、四萬の人民か頭をさげて敬禮する。おそれおほい事ではあるが、私は玉座の方を一心に見詰めてゐた。

あ、平沼さんだ——さう思つた時、いつも元氣よく、鳥打帽をかぶり、足の裏にばねのついてゐるやうな歩き方をする平沼さんが、今日はシルク・ハットを手にして靜々と御先導申上(あげ)る。直くに天子様の玉體が拜された。カアキイ色のマントオをおつけ遊ばされ、かしこくも一同の者に

對して禮を御かへしになり、御着席遊ばされた。

秩父宮様の御姿も拜した。御兄弟とは申せ、吾々下々の者とは違つて、御禮儀が正しいのであるから、宮様は天子様のなゝめうしろに、稍間隔を置いて御叮重なる禮を遊ばされ、少し離れた椅子に御かけになつた。妃殿下もいらつしやつた。その他の宮様方も御揃ひだ。秩父宮様のおうしろに、社會民衆黨の大だてもの安部磯雄氏と長與又郎博士が控へてゐる。

こゝで私が、早稻田といふ學校がいかにすぐれたる政治家であるかに感服したのは、天子様が玉座に御つきになると直ぐに、應援團が聲を限りに校歌をうたひ出した事だ。恐らく、機略に富む者がゐて、かねて示し合せてあつたのであらう。慶應側はあわてゝ、追かけて應援歌をうたひ出した。たしかに一歩も二歩も遲れてゐた。

審判も大事をとつて四人がかりで、慶應先攻で試合は開始された。氣がつくと、天子様には御風氣のおあとと承るのに、マントオを御脫ぎになり、陸軍通常御禮服の御姿凛々しく、子等が遊びをみそなはすのであつた。

兩軍の應援團は熱狂する。秩父宮様は天子様の御側に行かれ、先づ早稻田側を指さし、次に慶應側を指さして何か御說明遊ばされた。天子様にはいちいち大きくうなづかせ給ふのであつた。

茲に是非共記し度いのは、此の日のライン・アップを見た時、慶軍は今秋のシイズン中、あまり出場する機會を與へられなかつた岡田主將を捕手に、三谷を二壘に、梶上を右翼に置いたので、すつかり滿足した事である。空前の天覽試合だ。長く苦勞して來た古顏の選手に位置を與へるといふ事は甚だ結構だ。私は涙ぐましい心持さへ感じつゝ、腰本壽氏の心の中を奥床しく思つた。

第一打者楠見が出た。

戰前和木氏は、和木氏一流の斷定癖で、若し劈頭に楠見が安打して出れば、その一球が勝敗を決定すると云つてゐた。私には斯ういふ風に威勢のいゝ、同時にあまりに唯心論的なものゝ見方は出來ないのであるが、果然楠見が一二壘を拔いて出壘した時は、慶軍はやくも榮冠を頂いた事を感じた。あの一打が、いかに味方に力強く影響し、同時に敵軍の膽をうばつたかは、くだくだしくいふを要さないであらう。この時楠見は遺憾ながら殘壘となつたが、たとへ點にはならなかつたにしろ、完全に敵投手を威嚇しつくした功績第一等である。たゞさへ神經質な小川が、天子樣の御前試合でかたくなつてゐるところを、容赦なく死地に突落してしまつたのだ。

梶上がバントで送り、山下が長棍を振りながらあらはれると、秩父宮樣は天子樣の御側に立たれ、何か御說明遊ばされた。宮樣方はどういふ御言葉を御使ひになるのか知らないが、たぶん、

あれは山下と申すリイディング・バツタアでありますといふ意味の御説明があつたのであらうと拜察する。天子様は大きく御うなづき遊ばされた。

山下が四球で歩くと、宮武がボツクスに立つ。秩父宮様は再び何をか天子様に御説明になる。たぶん、これも大變なうち手でありますといふ意味の事を御耳に入れたのだらうと拜察する。

得點はなかつたが、慶應はさかんに壓迫し、早稻田は手輕にしりぞけられて第一回を終り、第二回には町田が三壘を強襲して出壘し、岡田の犧打、加藤の二飛で三壘に達し、再び小川の膽を寒からしめた。そして第三回目に、遂に早稻田の陣は潰滅した。私はこゝに試合の經過を書かうとは思はない。たゞ、慶應が小川を打ちまくり、小川は顏色を失つて先づ四球の押出しで一點を入れた後で、岡田主將の一撃よく三壘打となり、三走者を一掃した事丈を特記し度い。ライン・アツプを見てこの人の出場を喜び迎へた私は、この人の爲にも腰本監督の爲にも、目出度い三壘打を祝福しなければならないのだ。天子様は、慶軍主將の勇姿を永く御記憶遊ばすであらう。

この回慶應は五點を收めて完全に勝利を確保し、早稻田は引つゞき宮武に打撃を封ぜられて、攻守共に美技を御覽に入れる事が出來なかつた。

天子様には三回迄御覽遊ばされたが、隨員が一度二度何事かを言上すると、御うなづき遊ばさ

ね、やがて還御の時となつた。

ふたゝび君が代の奏樂のうちに、天子樣の尊き御姿は、玉座をはなれさせ給ひ、池田審判官の發聲で、吾々人民は聲を盡して萬歲を三唱した。

試合はつゞけられたが、慶應は益々調子づき、早稻田は混亂に混亂を重ね、小川は四回にノック・アウトされ、かはる松本も忽ち劣勢と交代しなければならなかつた。おまけに打擊はちつとも當らず、遂に三壘を踏む者も無く、十二對零で薄暮の爲、八回でコオルド・ゲエムとなつた。

前代未聞の天覽試合が、かくの如き愚戰を以て終つたのは、天子樣に對し申譯の無い次第であるが、おそれおほい事ながら、野球競技は、天子樣の御心にかなつたやうに拜し參らせた。尊い御體であり、又御政務が御忙しいのであらうから、望んでもかなはない事かもしれないが、出來る事ならば最終回迄御目にかけ度かつた。そして來春からは、慶應と早稻田との試合の度每に天覽を忝くする光榮に浴し度いものである。

天皇陛下萬歲。萬歲。萬歲。（昭和四年十一月九日）

——「三田文學」昭和四年十二月號

三田新聞記者の態度を難ず

昭和四年十一月八日の三田新聞三面に、規約改正後最初の評議員選擧施行せらるといふ大きいみだしで、先頃行はれた慶應義塾評議員選擧に關する記事が出てゐるが、それについて私の談話が掲げてあるのは意外であり、不愉快である。

三田新聞記者平野某君が拙宅を訪はれたのは十一月六日の夜で、その時客があつた。久保田万太郎氏と、もう一人最近香港から歸つて來た友人である。私は客來中だから御目にかゝれないと斷らせた。斷つたけれども歸らない。家内は客のゐる部屋と玄關と空しく三度往復した。同君の用件は、評議員當選の感想を語らせるにあると聞いたが、その時は未だ當選の通知にも接してゐないし、客に對して中座するのは失禮と考へて立たなかつた。家内はすつかり惱まされてしまつて救を求めるのである。久保田氏が見兼て、私自身で行つて斷つて來いといふので、澁々玄關へ

出て、折角の來訪ではあるが、客があるから失禮する、此の儘引とつて貰ひ度いと云つた。平野君は、明日が新聞の發行日だから、今夜記事にしたければ間に合はないのだといふ。二三押問答の結果私は特にかんべんしてくれといふ言葉さへ使つて、談話を斷つた。平野君もやうやく納得して歸つてくれる事になつたが、最後に、例の高等部の問題について近日又來るといふので、私は更にそれを拒んだ。

こゝで一寸說明して置かないとわからないが、私が平野君にあつたのは其の晩がはじめてゞは無い。前にも訪問を受けてゐるのである。それは今年の夏、三田新聞の人の依賴によつて「問答二三」と題し、慶應義塾移轉問題についての卑見を述べた中に、高等部廢止說をつけ加へた。これは敢て私丈の議論でなく、その後慶應倶樂部の會報にも二三の人が論じてゐた。しかし、高等部の先生や學生としては愉快な議論ではないに違ひ無いから、間も無く三田新聞紙上に、同部の教授高木壽一氏の反駁文が出た。私は高木氏の御說に推服出來ず、直に討論に應じようと思つたのであるが、或友人から、此の際此の問題をむきになつて論じられると、現在高等部在學中の學生に心配させ、殊に卒業期の近い者に迷惑をかけるからやめてはどうだといふ注意をうけた。いかにも尤もな話なので、當分此の問題には觸れまいと心に誓つたのであつた。

ところへ平野君がたづねて來たのである。一度は留守で無駄足をさせ、二度目には客があつたので玄關で面會した。用件は、高木氏の反駁に對して更に反駁せよといふのである。そこで私は上記友人の注意にしたがひ、多くの人に迷惑を及ぼす議論はしないと云つて斷つた。その時私が驚いたのは、平野君自身も高等部の學生だといふのに、どんなに問題が大きくなつてもいゝから反駁の反駁をやつてくれと、異常なる熱心を示した事である。

おもふに此の人は、既成新聞記者の中に往々にして見る一つの型に屬し、他人に迷惑が及ばうとも、少し位噓があらうとも、強引に特種（とくだね）を作らうとする主義で、その方では充分將來を期待するに足る度胸と手腕を持つてゐるらしい。しかし私は繰返して、徒らに問題の爲に問題をつくる心持はなく、多くの人の迷惑を顧慮しないで議論をするのは差控ふ可きであると云つて斷然斷つたのである。

それにも拘らず同君は數日後に手紙を寄越して、例の高等部の問題について御說を聽取し度いが何月何日に面會してくれるかと問合せて來た。熱心といへば熱心だが、あまりにきゝわけの無いのには閉口し、あなたにはあれ程いつてきかせた私の心持がわからないのか、或はわかつてゐてもしつつこく押して來るのか、どつちにしてもあの問題は御免かうむると返事をした。

さういふいきさつのあつた後なので、其の晩同君が歸り際に、例の高等部の問題について近日又來ると再びいひ出した執拗には驚いた。私は又多數に迷惑をかける事になるからその問題は御免だと繰返し、同君も私の言葉をよく諒解したやうな様子で歸つて行つたので、はじめて安心したのであつた。

それなのに、十一月八日の三田新聞には、私が評議員に選ばれたからは、高等部廢止運動が擡頭するだらうと書いて煽情的效果をあげる事に努めてゐるのだ。何といふしまつの悪い遣口であらう。

私は三田新聞將來の爲に抗議しようと考へてゐると、平野君から手紙が來た。その大意をつまむと、あなたはあの記事に對して不滿をいだいてゐるさうだが、自分は決して間違つた事はしてゐない、斷られたにも拘らず面會を強要したのは新聞を作る立場として止むを得なかつた、記事は自分が正確と信ずるところを記したのであり、又高等部の問題を持出したのは一つの觀測で、しかもそれは自分一個の觀測ではなく、三田新聞としての主觀である、ヂヤアナリズムといふものには絶對客觀は存在せず主觀の色彩が表現されるのは止むを得ない、自分はどうかへりみても悪い態度はとらなかつたといふのである。

尙その外に滑稽なのは、記事の中に阿部君としてある「君」を、私が咎めもしないのに氣にしてゐて、三田新聞は總理大臣濱口君として得々たるものですなど〻脫線してゐる。そんな事は敎へて貰ふまでもないのだ。私が問題として反省を求め度いのは左の二點である。

訪問記者が求める談話筆記を拒み、無駄足させて御氣の毒であると明白に斷つたにも拘らず、何故勝手に都合のい〻記事につくりあげるか。

多くの人の迷惑となる事だから、好意をもつて論及する事を避けると、幾度となく斷つた問題を何故書き立てるのか。

それがヂヤアナリストには當然許さる〻遣口なのか。三田新聞はさういふ態度をよしとするのか。（昭和四年十一月二十二日）

――「三田新聞」未揭載

帝劇嗟嘆

今日は帝劇明日は三越――とは、たしか前者の印刷物に年中載つてゐた後者の廣告用語であつた。

それは多くの女どもの理想とする行樂の代表的のものに違ひ無い。女にとつて、何が一番大切かといふと、むかしから直ぐに貞操と答へるならはしになつてゐる。しかし、その貞操も、きものと役者の爲には屢々手輕に交換された。少なくとも、きものと芝居にうつとりした心狀は、耶蘇をしていはしむれば旣に盜みをし、又姦淫を遂げたに等しいものであらう。かみがたの人のいふ「女子の好きなは芋、蛸、南瓜(なんきん)」よりも、今日は帝劇明日は三越は、遙かに一般的であり、又明治大正的である。私はあまりさかり場を好まないので、三越にも足を踏み入れた事は稀たが、あゝいふ場所に集まる女どもの顏を見ると、一種物凄い表情が露骨にあらはれてゐて、

美しさやさしさは微塵も無い。あれ程他人の眼を氣にし、かみかたちをつくろふ事に命をかけてゐる女性が、きものゝ賣場に立つ時は、誰が自分を見て居ようとおかまひなく、顔いつぱいに醜い慾望を露出させ、他をかへりみる暇は無いのである。

その醜さに對抗し得る他の醜い表情は、役者に見とれる時の女どもの顔面以外には一寸見當らない。芝居へ行く女は、平生のつゝしみを家に留守番させて來る。どこの劇場の近くでも、開場時間前後には、異常に興奮して先を急ぐ事恰も我慢した後ではゞかりへかけ込むやうに取亂した、粧ひこらした女どもを見るものである。丸髷もあり、島田もあり、銀杏返しもあり、七三もあり、斷髪もあり、時には切さげのお婆さん、法體(ほったい)の御隱居も見かけるであらう。芝居へ行くといふ丈で早くもわれを忘れ、一刻も早く目的地へ着かうとあせり切つてゐるので、裾のみだれも、太股のあらはれるのも、敢てかへりみる暇は無いのである。一度幕があき、のつぺりした役者が出て來ると、邪心の兆した表情をあからさまに、一種猥りがましい緊張感を漂はすのである。それ程女どもの心を捉へる芝居と呉服やとを結びつけた廣告は、廣く人口に膾炙した。

然るに、明日は三越の三越は、彼の大正十二年の大地震の際猛火に襲はれたにも拘らず、忽ち元氣を回復し、建増しを斷行し、分店を設け、日に日に吸收する人間の數愈々多く、一割五分の

配當をしていや榮えに榮えてゐるが、今日は帝劇の帝劇は、震災を境として落目になり、配當どころの騒ぎでなく、借金の利拂にも四苦八苦で、いつ盛返すかいつ盛返すかと世間の贔負をはらはらさせつゝ、遂に何等のふんばりを見せず、宿敵松竹の前に甲を脱いで平つくばつてしまつた。新聞紙の傳へるところによると、帝國劇場株式會社は今後も存續するらしいが、興行は向ふ幾年間か松竹の手に委ねられるのださうである。果して然らば、帝國劇場株式會社は帝國建物株式會社と改稱する方が至當であらう。

帝國劇場株式會社なるものが何時設立されたのかは知らないが、開場したのは明治四十四年の春である。その發起人達は、在來の芝居者でなく、當代第一流の實業家で、創設の目的も決して營利の爲では無く、我國にも近代歐米諸國に在るが如き形式の劇場をこしらへ、外國人が遊びに來ても恥しくないやうにしようといふのであつた。それは確かに發起人が、口にし又筆にして天下に呼びかけたのだから間違ひは無い。即ち知る帝國劇場は、金儲を職とする實業家が、しばらく金儲を度外視して、國家の體面上又國際間の交際を圓滿ならしむる目的の爲に、特に東都の中心を選んで建てたものである。纔に外國人を念頭に置いた臭味はあるが、それも明治といふ時代の濃厚なる色彩として許し、兎に角慾張とばかり思はれ勝な人々が、金錢上の損までも覺悟して

やらうといふのだから、そのこゝろざしは稱讃すべきである。あまり御趣意が立派で、且宮城に面した地域に建てられ、その名稱が帝國劇場といふのだから、愚夫愚婦の中にはおかみの思召で出來たものだと誤信した者も多かつた。

此の株式組織の大劇場は、當時歌舞伎座にたてこもつてゐた役者の中から梅幸、幸四郎、宗十郎、松助等を引つこぬき、外に我手で育てた女優を賣物にして開場した。昔からの女役者とは違つて、教養ある新時代の女性が、一生を藝術の爲に捧げるのだといふ宣傳だつた。今でこそ華族の息子や娘も活動寫眞の役者になるが、當時は、代議士の娘で高等女學校を卒業したのが女優になつたといふ事で、賑かな新聞種となつた程平和な世の中だつた。その女優の母校では、勿論良妻賢母を育てるのがたてまへで、女優を養成する事はもつての外だから、校友會から除名するなどゝいふ騷動も起きた。女同志のつきあひはうるさいといふが、はなやかな檜舞臺に出てやんやとはやされる同窓のおきやんに對し、幾多の良妻賢母が嫉妬の眼を光らしたのだ。もつとも、それからずつと後になつて、その女優の弟が在學した第一高等學校では、寄宿舍の記念祭に女優風情が足踏みしたと云つて非難攻擊したといふから、あながち女學校ばかりが馬鹿々々しい騷ぎをするわけでもない。少しく橫道にそれるが、いつたい第一高等學校の校風といふものは、喜劇の

材料として最も愉快なものである。喜劇作者太郎冠者氏の奮起を促し度い。

何しろ、これらの新時代の女優の中から、サラ・ベルナアルが生れ、レヂヤンが生れ、エレン・テリイが生れるのだといふ事であつた。女優諸君もその重大なる使命を自覺し、第一期の卒業生幾人かは、一生嫁に行かず、只管藝道に身を捧げる事を互に誓つたさうである。何たる悲壯な決心であらう。此の誓が果して實行されてゐるのかどうか知らないが、少なくともその中の名だゝる幾人かは、實際お嫁入はしないらしい。但し、妾又はそれに準ずるものになるのはよしませうとは誓は無かつた様子である。それはそれとして、何しろかんしんなのは、爾來二十年、毀譽褒貶を滿身に浴びながら、皺の寄る迄舞臺生活を捨てない事である。時代物ならば村田嘉久子、世話物ならば初瀨浪子、喜劇ならば森律子、それらのどれにでもつきあふ河村菊枝を四君子にたぐふ可きか、おまけに老役の藤間房子を加へて五歌仙と稱すべきか、いづれにしても一方ならぬ苦勞を重ねて來た事は稱讃すべきである。

とはいふもの丶、私はあまり帝劇の芝居を見てゐない。豫てより私は、帝劇はいゝ役者を何處かゝらつかまへて來なければ、人氣を失ふに違ひ無いと力說してゐた。梅幸はたしかに當代隨一の女形に違ひ無い。だが、女形を座頭としてよき芝居の出來ない事は、女形本來の性質から云つ

ても當前である。相手役の幸四郎は、柄は立派だが、無類の不器用で手がつけられない。宗十郎は達者だが、緞帳臭味が濃厚で格が下る。ひと頃ひどくほめられた勘彌は、全く買ひかぶられ過ぎたので、もともと菊五郎吉右衞門と比肩すべき役者では無い。宗之助死に、榮三郎死に、松助が死んで、しかも補充が出來ないとなつたら、もう帝劇の先は見えたと云つていゝ。其處へもつて來て、それらの惜まれる役者の死と前後して、地震といふ痛事が襲ひかゝつた。

丸の內の堀端で、コンドル會禰兩氏合作の明治生命保險會社と、橫河民輔氏作の帝國劇場とは、明治時代の洋風建築史上に特筆さる可きものと思ふが、その上出來の洋風劇場の屋根の上に、金ぴかの翁のつくり物が袖振りかざした姿を雨露にさらしてゐたのは、心あるものゝ笑の種であつた。その不調和な翁は、勿論建築家の責任では無い。國家の爲に帝國劇場を設立した殊勝なる金持の趣味で、つけ加へられた景物である。西洋人を喜ばせる爲に、或は西洋人に對する劣等人種的の見榮から、帝都の眞中に歐風劇場を建てようと考へついた連中が、いざ出來上つて見ると、それ相當の大和魂から、澤庵と味噌汁の味がなつかしくなり、日本舞踊の象徵として翁の姿をとつてつけたのである。見樣によつては、明治時代の成金の渾沌たる趣味を代表する文化史的興味もなくはないが、あたら名建築の風趣を害する事甚しいものであつた。然るに震災當時の無遠慮

な火の舌は、此の翁の手引で劇場の内部へ侵入し、大損害を與へてしまつた。若し此の翁が屋上で呑氣に踊つてゐなかつたら、防火設備の完備した劇場は、燒けずに濟んだ筈である。だが事實は、帝國劇場の大御所澁澤榮一翁が天譴と呼んだ震火は、屋上に狂ひ踊る翁の姿を憎んだ爲か、此の有德の老實業家が創設した帝國劇場にも容赦なく天譴を加へた。特志を以て國威發揚の一助となさんとした帝國劇場に、天は何をか咎めんとする。恐らくは天の方が血迷つたのであらう。だが、きちがひ程恐いものはない。それ以來此の劇場の衰運は著しくなつた。

今手許に考課狀が無いから正確な事はいへないが、たしかそれ迄は八分か九分か或は一割の配當をしてゐたのが、五分となり、無配當となり、劇場經營の全權を敵手に委ぬる迄成下つた。詳しい事情は知らないが、地震で弱つた帝劇が、地震で參つた東京會館を合併した事にも無理があつたのでは無いだらうか。恐らく、東京會館と帝劇とは同一系統の資本家によつて經營されてゐたのでは無いだらうか。死に瀕した方を先づ助ける爲に、きずついた方に重荷を負はせたのでは無いかしら。

茲で私にはひとつの疑が起る。今度帝劇が面目をつぶして松竹の前に頭をさげたのは、みつともないと云へばみつとも無いが、株主にとつては五分の配當を確保する唯一の途かもしれない。

若し意地を張つて自力で經營してゐたら、此の先幾年か無配當をつゞけなければならないのでは無いだらうか。損をして迄商賣をする奴があるものかといふのならそれでもいゝ。しかし、帝國劇場創立當時發起人が宣言した國家の爲に、外國人の爲に、帝都の面目の爲に、營利の念を捨てゝ設置すると云つた趣旨にはそむくものと云はねばならぬ。むろん株式會社の事だから、株主の顏ぶれは始終轉々と變つてゐるに違ひ無いが、大株主には異動は無いやうに見受られる。少なくとも、開場當時立派な口をきいた大頭は、今も大株主として頑張つてゐる筈である。商賣人は商賣人だ、利得の外に何もないのだと尻をまくるのなら、徹底してゐていさぎよい。儲かると思へばこその御國の爲なら、怪しからぬ話である。當時流行の調べる小説家よ。調べて、煩瑣冗長なる調べた小説を書け。

けれども、帝劇が興行權を松竹に賣つた事が、必しも劇壇を不幸に陷れるものでは無い。競爭は屢々石を玉にするが、獨占も亦かへつてよき結果をもたらす場合もある。今度の如きは、役者の融通が自由になり、梅幸幸四郎といふ無理な顏合せがなくなつて、見物の爲にはしあはせかもしれない。私が帝劇の悲運を悼むのは全く他の意味に外ならない。何か。私は帝國劇場株式會社專務取締役山本久三郎氏の爲に、又瘦我慢の精神の爲に遺憾とするのだ。

山本久三郎氏は吾々同窓の先輩であるが、御目にかゝれば挨拶をする位で、平素親しく御つきあひを願ふ機會に惠まれなかつた。しかし私は平生同氏に深き尊敬をもつてゐた。兎角無責任に不平がましい事をいひたがるのが世の下役のならひなのに、山本氏の支配下に働く帝劇の人々の口々から、曾て氏に對する惡聲不滿をきいた事が無い。先年死んだ久米秀治氏は、特に山本氏の脊顧をうけた人であつたが、常に山本氏を德とし、偶々同氏に對して兎や角いふものがあると、久米氏一流の柔味のある話ぶりで、圓滑にしかし熱心に辯明これ努めた。今帝劇の一部の事務を管掌する某氏の如きは、山本氏の爲ならば一身を犧牲にする事も惜まないと云つて居る。その間には、血をすゝりあつた親分子分の如き強い楔があるやうに想はれる。山本氏は上州の產ときく。名だゝる長脇差の輩出した土地だ。人をひきつける情熱を多分に持つて居られるのであらう。私はいろいろの場合に、氏のひとゝなりをなつかしく思ふ事が多い。先年何かの雜誌で見た噂話によると、氏が三田の山に學んだ當時の下宿料は一ケ月三四圓だつたが、氏は三田通の氷屋に一夏三圓の借金をこしらへたといふ事である。又當時の學生の飮場所だつた學校門前の牛屋で酒食の後、綱引後押の人力車で校內の寄宿舍へ歸つたといふ事である。これは、眞僞不明の噂話で、かういふ所に再び記すのはどうかとも考へたが、決して氏の人格をきずつける類のもので無く、寧

ろ聞いて愉快を覺え、親分肌の風格を偲ぶよすがともならうかと思つて敢て採錄した。

大正五六年の頃、交詢社で小山内薫先生に講演を依賴した事があつた。その時私が前座をつとめ、歐米の芝居と我國の芝居とを比較紹介した中に、偶々帝國劇場の事に及び、幸四郎を大根役者だと評した事がある。聽衆の中に山本氏が居られ、之を聽いてひどく憤慨し、幸四郎は決して大根では無い、水上瀧太郎の言は間違つてゐると、諸方で話して居られたさうである。私は夙に幸四郎の鈍物用ふ可らざる事を口にし又筆にして來たが、今日では少しく芝居の數を見た人は、誰しも彼の大根たる事を否定しなくなつた。それは定說となつた。それにも拘らず、當時山本氏の憤慨された事をきいて、私は甚だ愉快だつた。察する所山本氏は、自分の身邊の人間をいつくしむ事人一倍深く、その技倆の如何などは末の末の問題で、身內の爲ならあく迄庇護しようといふ親分の精神を多分に持つて居られるのだと理解したからである。

年代は忘れてしまつたが、曾て帝劇で某戲曲家の作品を上演した時、所謂改作問題なるものが持上つた。今は死んだが帝劇の大株主の一人の自分勝手な好みで、戲曲の一部が作者の充分なる諒解を得ずに改められたのだ。私は、たとへ大株主であらうとも、得手勝手な申出に服した山本氏の遣口には贊成しない。しかし、それが一度公の問題となり、口やかましい文士連が束になつ

てかゝつて來るのに對し、單身應酬に努め、全責任を負つて是が非でも頑張らうとした意氣と態度には喝采し度かつた。その後のいろいろの事をおもひ合せて見るのに、私の推察は間違つてゐないで、山本氏には人を引つける長所が備つてゐるやうだ。帝劇の人達が幾人寄つても、氏の惡口をいはない所以もうかゞひ知られるのである。

山本氏は根からの芝居人では無い。その點で、大谷竹次郎氏や白井松次郎氏とは違ふ畑の人間に違ひ無い。恐らく、帝國劇場に入社する迄は、あまり芝居などは見た事もない人だつたかもしれない。しかし、現在の大資本を要する劇場經營者としては、昔の興行師肌の人よりも、地みちな會社員の方がまさる場合が少なくあるまい。たゞ、松竹と帝劇の競爭を第三者の立場から見た場合、遠き將來はいざしらず、少なくとも當面の競爭に於て、帝劇は到底松竹の敵で無い。何故か。當節はやりの經濟學的觀點からすれば、大資本が小資本を壓倒したのだとも云へるが、此の場合それはひとつの觀念論で、事實には遠いものと考へる。若し資本力をもつてのみたゝかひ得るのならば、帝劇は松竹の前に平伏しなかつたであらう。私は第一に、實際仕事にあたつてゐる人に、一切の權力を與へるか與へないかによつて分れた優劣と見るものである。大谷氏は正に近代の英雄の一人に相違無い。しかし山本氏も亦持前の親分肌と、仕事に對する熱情とに於て、恐

らくはすぐれたる首脳者であつたに違ひ無い。だが、同じ株式會社とはいひながら、松竹は大谷氏兄弟が全權を握り、自ら指揮經營の任にあたり、一切を總覧してゐるに反し、帝國劇場には財界の有力者が鰯の罐詰の如く居並び、社長以下の重役何れもおれきれきで、それがかへつて専務取締役の思ふがまゝに采配を振る事を掣肘する形となりはしなかつたか。一方が専制の強味を充分に發揮するに反し、他は多頭政治の弊に流れて、機を逸する事が多かつたのでは無いだらうか。きくところによると、重役や株主の中には、月々の出し物に迄干渉し、自分の特別贔負の女優の配役にも口をさしはさむ者もあつたさうだ。私が殘念に思ふのは、實際事にあたつてゐる人間に、思ふがまゝにやらせなかつたのでは無いかといふ點にある。これは帝劇ばかりの問題では無い。何事でも、當面の人以外の者が、小やかましい隱居のやうに口を出しては、仕事は出來るわけが無いのである。

もうひとつの殘念は、帝劇は何故もつと頑張つて、松竹に對抗しなかつたかといふ事である。既に最初のたてまへが、創立者の口にした如く營利以外の目的にあつたのなら、なほつゞけて無配當に甘んじ、何等かの策を廻らしてはどうだつたらう。最近の帝劇はたしかに苦しい決算をつゞけて來た。だが、かつかつにはやつて行けた筈だ。むろん株主の利廻(りまはり)を考へれば馬鹿々々しい

に違ひ無いが、國家の爲に忍ぶのが本來の趣旨に添ふのでは無かつたか。そろばんの前には一切の宣言も取消しだといふのなら、はつきりさう宣言して貰ひ度い。

しかし、今更何と云つても爲方が無い。帝國劇場は、小屋貸會社となつてしまつた。とはいふもの丶帝國劇場は、その存在の二十年間に、いろいろの意味で功績を殘した。彼の後に興行界の追隨した事も數へられる。劇場建築にも範を垂れた。出方を廢し、椅子席とし、觀客席で飮食喫烟しない事も一般的になつた。珍らしがられ、新らしがられた女優も、此の大劇場以外には出演させないといふ保護政策の下に箔をつけたが、今では此の座專屬のが一番古いといはれる程後進が輩出した。數へればいろいろさきがけした事はあるだらうが、就中大きいのは、西洋の音樂家をつぎつぎと招いて紹介した功績である。第一流の歌者も來た。第一流の舞踊家も來た。洋琴の名手も來た。提琴の天才も來た。又、本場のものに比べては規模も質も劣るとはいへ、伊太利や露西亞の歌劇團も來た。支那の名優も來た。これが爲に、我國一般の音樂を味ふ感覺がどの位洗練されたか、どの位豐富になつたか、言葉をもつては感謝し盡せない位である。文壇の正論家藤澤清造氏は、此の功績を表彰する爲に、國家は山本久三郎氏に勳章を與へよと唱へてゐるが、雙手をあげて贊意を表するものは私以外にも多い事と思ふ。帝國劇場はおちぶれても、將

來萬一つぶれても、此の事丈で充分存在の價値はあつたのだ。(昭和四年十二月二十七日)

——「三田文學」昭和五年二月號

我が飲屋

昔から飲む打つ買ふと一口に云ふが、私は打つ方も買ふ方も不器用で、飲む丈が先づ道楽といへばいへる。勝負事は好きだが、賭る興味は無い。御ほうびといふ物が子供の時から嫌ひだつた。遊びも眞の味を知らない。おいらんは見た事も無い。藝者もさほど面白い相手とは思はない。私自身どゞいつひとつ歌へ無い。十年越顔見知りの藝者もゐるが、その連中は私を目してどし難い野暮たときめて居る。たまに何か云ふと、「あら、貴方でも洒落をいふ事があるんですか」と眞正直に驚く老妓さへある位だ。

飲む方は血筋だ。亡父は昔慶應義塾で講義をしながら、机の側に土瓶を置き、番茶と見せて飲んでゐたと云ふ位で、家では毎晩寝しなに燗酒二合の後で、こつぷで一杯冷酒をあふつた。宴會に行つても、家に歸るとおきまりの寝酒は飲んだ。膝も崩さない酒だつた。母の兄弟は皆一升酒

で、早く死んだ叔父の如きは、下宿の晝飯に酒をかけて喰つた。私はそれ程の量ではないが好きだ。晝は會社勤、夜は書物をするので、晩酌は一合ときめてゐる。氣の合ふ友達ならゐてもいゝが、お酌はゐない方がいゝ。飮みたければ飮む。盃を下に置くと直ぐ勸められたりするのはいやだ。獨酌黨だから自宅が一番氣樂でいゝ。尤も、書物が完了すると、自分慰勞の心持で飮みに出かける事にしてゐる。何處でも構はず馴々しく入つては行けない性質だから、自然方角はきまつてゐる。我飮屋があるわけなのだ。

一番始の馴染は銀座の「加六」だ。赤坂に獨所帶を張つた頃は、會社の歸には必ず寄つた。酒量も多い時代で、七八合飮んで歸つて原稿を書いた。あゝいふ家にはきまつた客があるもので、西山さんといふ人などは、三百六十五日缺かさず來た。酒精中毒の症狀を完備してゐた。西久保弘道さんも握太の杖をつき、巨軀を運んで來た。當時帝大在學中の息子さんもいける口と見え、友達を誘つて來るのであつたが、先づ窓から首丈出しておやぢの在否を確め、ゐる時はこつそり引返して行つた。加六には隨分通つたが、かみさんが客の前で養子をひつぱたくのが不愉快で喧嘩をし、それつきり行かない。

加六と緣が切れてからは、日本橋槇町の「灘家」に通つた。小粒の女中が桃われに結ひ、白粉氣

はいつさいなく、木綿づくめで、紺がすりの上張(うはつぱり)を着てゐるのが、べたつかない風俗でよかつた。おかみさんがいゝ人と見えて皆よくゐつく。喰る物も相當だつた。若槻禮次郎さんの御贔負とき く。總理大臣になつた時、新聞に大きく寫眞の出たのを見て、槇町邊の小僧さんが「此のぢいさんならよく灘家で飲んでらあ」と云つたさうだ。私の好な家で今でも行き、酒を分(わけ)て貰つてゐるが、正直にいふと、喰る物はいぜんより落(おち)たやうだ。

灘家はいゝのだが、私には足場が悪い。それで一時は新橋の「江戸銀」に通つた。だが「何かうまい物をくれないか」と云ふ客があると「俺ん所にはうまくねえ物はねえんだ」と拳固で鼻の頭をこすらうといふのだから、忽ち御免かうむつた。

一番足場のいゝのは銀座の「岡田」だ。酒は菊正宗だが、素晴らしくいゝ樽にぶつかる時と、餘り感心しない時とある。此頃それがひどくなつた。おやぢは酒呑だけれど無頓着で、自分の家の酒は無類だと信じてゐる。もう一樽別銘のを置いて競爭させて見ろと勸めてもきかない。年中鉢巻をしてゐて、自らはち卷岡田と呼ぶ。それを氣障(きざ)だと云ふ人もあり、むつつりした男なので誤解して、あのおやぢが癪だから行かないと云ふ人もあるが、そんなに深いたくらみのある人間では無く、震災後、銀座一帶が砂漠だつた眞中に小屋を建て、すゐとん時代を尻目にかけて刺身で

飲ませ「復興の魁は食物にあり、滋養第一の料理は岡田にある」と大書して貼り出した人物だ。銀座から勳章をやつてもいゝ位だ。おかみさんの柔かみのある客扱ひは、亭主のぶつきら棒をかばつてゐる。

この家の困るのは夕五時から始めるので、銀行は三時諸會社は四時退の當節、わざ／＼小一時間も待つのは馬鹿らしく、つい家の方へ足が向く。

近所では、飲屋といふのはをかしいが、四谷見付のすしや「みさご」が、素敵な白鷹を飲ませる。鮨も山の手第一とほめて差支へない。但しおやぢが樂をして職人まかせの時は駄目だ。

最近足繁く通ふのは富士見町の天ぷらや「たから」である。主人は昔私の同僚だつた。ませた口をきくかはりにそろばんも達者といふ若者だつたが、上野の宿屋に養子に行き、間もなく地震で叩きつけられた。家業がなくなれば養子はいらない、離縁といふ事になつたが、本人同志は別れないと云ふ。いろ／＼揉めたあげく、連て逃げてもいゝでせうかと相談に來たから、よからうと答へた。廻り廻つて天ぷらやになつた。素人のくせに器用で、家は狹いが魚がよく、粉がよく、油がよくてしかも安い。泉鏡花先生が來る。岡田三郎助先生が來る。和田三造さんが來る。久保田万太郎さんが來る。喜多村緑郎、花柳章太郎といふ顏も見える。主人もすつかり天ぷらやさん

になり切つて、若禿の頭を光らせ、一生懸命だ。この方が會社勤めよりも働き甲斐がありさうだ。皆さん一度ためして下さい。

この原稿を淸書して都新聞に屆けたら、ゆつくり飲み廻らう。我飲屋に幸あれ。（昭和四年十二月二十九日）

——「都新聞」昭和五年一月一日・

大江賢次氏の印象

近年愈々多忙なのと、年のせゐで記憶がよくないから、年月の程ははつきりしないが、大江賢次氏が拙宅へ來るやうになつたのは、たしか一昨年の夏頃からである。當時近所に住んでゐた武者小路實篤氏の紹介狀を持つて來た。私は武者小路氏と面識は無いが、その作品は愛讀してゐる。此の人道主義的モルモン宗徒の第何番目かの女の巣が、私の通勤の途に在つた。月給取の私は、朝夕その家の前を通つたが、つひぞ主人の姿を見かけなかつた。武者小路氏の紹介狀にもはつきりと、あなたには未だ御目にかゝつた事は無いが、此の人物は自分の家にゐるものだからあつて吳れといふ意味の事が書いてあつた。

それは夏の事に違ひ無い。何故ならば、はじめて私が大江氏を玄關に迎へた時、氏は白地のかすりの着物に、つんつるてんの袴をはき、長いすねを出してゐた印象が明かに殘つてゐるからだ。

その頃私は何かかきものに追はれてゐたと見えて、こちらがひまになつたらこちらから知らせるから、それ迄待つてくれといつて、氏が懐に入れて來た原稿丈受取つて歸つて貰つたやうに記憶する。

約束通り、私のからだにひまの出來た時、會社への行きがけに武者小路家に大江氏を訪ひ、應接の日をきめて來た。

當時大江氏は、武者小路氏の家に厄介になり、玄關番兼下男として働いてゐたものらしい。私の家に來る目的は、原稿を見てくれといふのであつた。何故御主人に見て貰はないのかときいて見たら、先生はお忙しくて、とても讀んでは下さらないといふのだつた。こつちだつて忙しいのだ、忙しい方なら負けやあしないと思つたが、兎に角彼が持參の原稿は讀んだ。手堅い、寫實的描法を用ゐて、山陰の小村の小作農の悲慘なる生活を如實に描くのが彼の目的らしく觀取された。

爾來彼はしげじげやつて來る人の一人となつた。あいにく、拙宅にはもう一人大江姓の人が來るので、うちの者同志の勝手で、最初は「武者小路さんとこの大江さん」と呼んでゐたが、その顏面の特徴の絕對性から、やがて氏を呼ぶに顎をもつてするに至つた。「顎の大江さん」「顎」「顎ちやん」といふ風に、その時々の便宜にしたがつて用ゐた。後に知つたのだが、彼には「顎」と題す

る未發表の自傳體の長篇小說がある位で、彼はその惠まれたる顎を、今更羞かしがつても何にもならない事を知つてゐて、寧ろ逆手を用ゐて此の特徵を有利に利用する心がけを持つてゐるやうである。はじめて帝國劇場へ行き、三階だか四階だかから舞臺を見下してゐると、頗るいゝ男でしかも自分同樣の顎の持主があらはれてやんやと喝采を浴びた、それが守田勘彌といふ名高い役者だと知つた時は嬉しかつたといふ話、箇閱點呼に呼び出され、固くなつて整列してゐると、突然將校が上を向いて顎をつき出してゐてはいかんと叱咤したといふ話などは、彼が多人數の席で忽ち存在を明かにする爲に充分の效用を發揮する。それ程彼の顎は長く、且前方にそつてゐて、その長さと反り加減は、一寸文字では書きあらはせない。ひと昔前にはやつた花王石鹼の廣告繪には、三日月に目鼻が書いてあつたが、あれとこれとを想ひ比べても、さほど誇張の想像とはいへない位だ。

私は彼の生ひ立ちや、現在どうして飯を喰つてゐるのか、詳しい事は知らない。彼の小說は冗長の弊を伴ふ迄眞正直に描寫し說明して行く手法によるものであるが、彼の日常の會話は極めて斷片的で、一瞬間の面白さで人を笑はせる話術は充分手に入つてゐるが、綿々と物語る風は無い。私も亦人の身の上の事を、根掘葉掘きく事を好まないので、そのまゝ今日に及んでゐるのだが、

斷片的の話を寄せ集めてみれば、彼は鳥取縣日野川のほとりの一村落に生れ、家は相當の農家だつたが、好人物の父親の代につぶれ、自分は小學校以上の教育を受る事は出來なくなり。百姓をしながら獨學で勉強したといふ。父親が外國へ出稼ぎに行つた事もあるやうな話だつたが、これは私の聞き違ひかもしれない。或は彼の話し違ひかもしれない。何故ならば、此の農民小說家は、その場の座談を面白くする爲に、時には出たらめもいひ兼ないからである。

彼の村は餘程の貧村らしい。好きな本を買はうと思つても、三里行かなければ本屋が無いと云ふ事だ。豆腐屋へ三里といふ文句から思ひついた洒落かもしれないが、兎に角不便極まるところらしい。さういふ山間の貧村で、小學教育しか受けず、且お小遣も乏しい筈の大江氏が、どうして文學的教養を得たかは、ひとつの不思議である。うちへ遊びに來る慶應のお坊ちやん學生よりも、遙かに正確な文字を使ひ、時には片假名もまじへるのである。

父も母も死に、今鄕里には身內といつても叔母さんが一人居るだけだといふ。勿論身についた物は何も無い筈だ。武者小路氏をたよつて來たのは、どういふきつかけからか知らないが、恐らくは文名を知り、それに縋つて身を立てようといふ地方文學青年型の虫のよさから東上したものであらう。最初は武者小路家の本邸の方にゐたといふ話もきいた。

大江氏が小説を書きはじめたのは何時からか知らないが、素晴しい健筆で、柳行李にいつぱいためてあるといふ事だ。それをみんな持込まれてはたまらないから、長篇と短篇と各々得意のものを見せてくれといふと、直に數篇を携へて來た。戯曲もあつた。取材は全く農村に限られてゐて、彼自ら農民文學の建設に努力する事を宣傳してゐる。

彼が拙宅へ來るやうになつて間も無く、どうかした都合で武者小路家を去らなければならなくなつた。さうなると、忽ち食に困るのは當前だが、さりとて職が無いからといつて居据つてもゐられなかつたと見え、間借の生活をはじめた。御用は多くとも、人づかひが荒くとも、ひとの家に世話になつてゐれば食事には事を缺かないのが、いくら安い疊代にしろ、一室を借り、三度の飯を喰ふには、收入の道を探さなければならない。嘗て實業之日本社に職を奉じた事があるといふので、それならばもう一度その社に使つて貰ふのが一番いゝとすゝめたけれど、頼んでも成功しなかつたと云ふ事であつた。本人としては、百姓をして身心を鍛へたものだから、どんな仕事でも辛いとは思はないと云ふのであるが、引きつゞく不景氣の折柄、何處でも人べらしの肚はあつても人を採らうとはしない。第一番に希望する新聞社や雜誌社でも、人間に對する需要よりも供給の方が多く、とても割込む餘地は無いのであつた。私も同情して、一二心當りをあたつて見

たが、うまく行かない。なんとかなりませんかと度々いはれるので、そんなら生命保險會社の外交員として働いて見たらどうかと勸めて見た。現代に於て、無資本の人間にとり、これ程有利な仕事は一寸無い。たゞ、事業の急激なる發展に伴つて、無理な契約の勸誘をやり過る爲め、世間一般に好まれない職業となつてしまつたが、仕事そのものは惡くない。百姓の忍苦を、一種の詠嘆的調子で物語る大江氏にとつて、勤勉努力が唯一の資本である此の仕事を勸める時、直にも奮起するであらうと想像してゐたのだ。ところが、最初から尻込みして、やつて見ようとは云はない。私はその時些かの疑をもつた。此の人は山陰道の村落に於る白い手をした詩人では無いかと。

恰度その頃私の家の庭に、彼の蒔いてくれた草花が、うまく芽を吹かない事があつた。それは偶然の不運であつたのだらうが、何となく彼が口程にも無い詩人百姓のやうな氣がして、ひそかに痛快に思つた。

誰をつかまへてもいふ事だが、今後小說で飯を食ふ事などは出來ない世の中になるのだと、屢々大江氏にも話した。しかし彼には職業が無く、しかもどうにかして喰つて行く。そればかりでは無く、今では郊外に一軒の家を借りて住んでゐるのだ。どうして家賃を拂ひ、どうして米を買ひ、どうして着て行かれるのか、私には全くわからない。殊に彼は存外お洒落で、いつの間にか、

曾て武者小路家にゐた時のやうな素朴な風體では無くなつた。いがぐり頭だつたのが、近代風の長髪となり、夏服を質屋にあづけてあるのでやむを得ず冬服を着てゐるのだといつてゐるかと思ふと、忽ちきちんとした背廣であらはれたり、露西亞かぶれのモダン・ボオイのやうな扮裝をする事もある。尤も、今ゐるところは小說家片岡鐵兵氏の隣家で、食事なども始終同家の御世話になつてゐるといふ話も聞いたから、或は他人の好意に賴るすべがあるのかも知れない。但し、それについてをかしいのは、或人が彼の言を信じて片岡家を目あてにたづねたら、決して隣同志では無かつたと云つてゐた。ささいな事ではあるが、恰も他にもほんとで無い事があつたのと合せて不快に感じ、私は單刀直入に、座興の爲に下らない噓をつくのはよくないと忠告した。どうも少し話を面白くし過ぎましたと彼は答へた。

彼は最初私のところへ來た頃は、文壇には知合ひは無いと云つてゐた。その頃はほんとにさうだつたのかも知れないが、少なくとも今ではつきあひの廣い人間の一人で、文壇の消息に暗い私は、屢々ゴシツプ的特種(とくだね)の供給を受ける。さういふ消息通だと氣のつかないうち、私は彼の言葉を眞正直にうけて、強ひてつてを求めて諸雜誌の編輯者に原稿掲載の依賴をした。又誰彼に賴んで、その知合ひの編輯者に話をして貰つた。ところが、方々の雜誌編輯者が彼の名前を知つてゐ

て、あまりに名前丈が知れわたつてゐる爲、かへつて原稿に處女性の乏しいといふ印象を與へ、どこでも首をたてに振らないと云ふのだ。此の時も私は中腹で、君はあんまり方々に顏を出し過るのがいけないと云ふ事だぜと切込んでしまつた。大江氏の常に笑を含む顏面に、一瞬間正直な憤怒の表情のあらはれたのは此の時だけだ。自分のやうに無縁孤獨のものは、方々へ顏を出さないでどうしてやつて行けるのだといふ意味の反駁をうけた。

その時の大江氏の意氣には凜々しいところがあつて甚だ氣持がよかつた。私の眞意は、方々へ顏を出す事がいけないといふよりも、何故方々に顏を出してゐる事をかくすのかと、その心狀を咎め度いのであつた。

それはそれとして、私は引つゞき氏の原稿の賣込みに努めたが、雜誌の編輯者は、新しき作家を發見するよりも、既に發見せられたる作家の後を追ひかける事に忙しいので、市場價値の未だ備はらない作家の作品などは、ろくに讀んでもくれないのである。結局原稿料を拂はない「三田文學」の編輯者に賴んで二三の作品を出して貰ふ外に手段が無かつた。ところが、貧農の生活苦をこくめいに描いた底力のある作品は、一度印刷されると忽ち具眼の士に認められた。殊に長篇「行け、ブラジル」は一般月評子の間にも好評を博した。藝術作品に對して頗る嚴しい批判を下す

久保田万太郎氏も、此の作品には感服し、若し「行け、ブラジル」が故人長塚節氏の「土」以前にあらはれたなら、必ずや文壇を驚かし、問題を提供したであらうと云つてゐる。すぐれたる鑑識を有する記者の主宰する某新聞の學藝部は、近く此の作者に連載小説の舞臺を與へるといふ噂である。

私は、私に對する大江氏の態度について常に好感を持つてゐるわけでは無い。しかし、氏の創作熱心と、その健筆には驚嘆する。私は既に彼の作品數十篇を讀んだ。

前にも云つた通り、彼は農民文學の提唱者である。又その描法は現實派に屬するものである。したがつて取材は故郷の村落に限られてゐる。寒暑に拘らず山野で働き、夜はよなべをし、樂しいおもひを知らず、一生涯喰ふや喰はずで暮らす農民を描く事にかけては、彼は屈指の手腕を示す。農民と、故郷の山川に對する彼の愛は詩情を醸し出す。しかし女學生的感傷癖に陷らず、あく迄も自然と人生の眞實の姿から眼を放さない。彼は一木一草をもゆるがせにしないで描く。それは決して纎細な筆致では無く、あく迄も素朴な木綿の手ざはりである。田園の四季の風物、農家の年中行事は、時に此の農民詩人をして低佪趣味の誘惑を感じさせるやうであるが、その場合にも決して對象を極度に美化する弱味は見せない。都會の詩人が一種の異郷趣味から、詠嘆調を

もつて田園をうたふやうななまやさしい態度はとらない。彼はたゞその對象をいゝ加減に見捨てゝ立去る機會をつかむ事に失敗する丈だ。したがつて冗長の弊は時に免かれ難い。だが、私は此の冗長をむげに排斥し度くない。それは描寫のこくめいを意味する。觀察をおろそかにしない結果でもある。概念でかたづけない美點である。

農村の生活は概して悲慘だ。けれどもその貧しい生活の中にも朗かなる樂しさは見出されるであらう。大江氏は少なからぬヒユウモアをもつて、農民の姿の一面を描く事を忘れない。又現代人の極度にもてはやすエロテイシズムもある。田植の男女が互に民謠におもひを托してうたひあふ。畑の中のであひがある。夜這ひがある。こまかい技巧を弄さない田舍の戀のをかしさがある。彼等の戀愛にはしちめん倒な會話のやりとりや、氣取つた手紙のとりかはせや、香水や、白粉や、散歩や、珈琲店の待合せや、自動車のドライブや、ダンスに手間ひまをかける必要は無い。女と雖も、決して袖袂をいぢつたり、疊のさゝくれをむしつたり、半巾(ハンケチ)で口元を覆つたり、腕時計に視線のやり場を求めたりする所作はいらない。時に屢々女の方から、露骨に持ちかける戀もある。それは、やむにやまれない本能の姿そのまゝだ。大江氏の小説には、かういふ農村の男女の間に、たゞ一人の羞かしがりやとして、彼自身を純眞化したやうな青年があらはれる。これは作者の理

想型の農村詩人なのであらうが、それは模範青年ではあつても、變種に違ひ無い。他の多くは、相互におもひを達し、夫婦になり、むやみに澤山子供を産み、一生涯泥土にまみれ、あかぎれに難澁し、喰ふ物も喰はず、着るものも着ず、天と人とを恐れつゞけて死んで行く。

だから、戀の樂みは長い慘苦の生涯の僅かなる挿話に過ぎない。作者はそれをいろどりとして描くが、全篇を貫くものは無理想無目的の忍從の世界である。しかし、作者は此の悲慘なる農民の生活をあるがまゝにあらしめて滿足してはゐられない。彼はそのみじめな實狀を描出して世に訴へんとしてゐる。私が大江氏の作品に接したはじめの頃は、大體純客觀描寫をもつて繪卷物のやうに人生詩を展開する手法を得意とした。それが近頃では、文壇の流行にかぶれ、階級鬪爭的色彩をつけ加へる行き方に傾いて行つた。それはほんとにつけ足しなのだ。八分迄は自然派の手法で書きながら、突然目的意識をつけ加へる事を思ひ出してやる仕事なのだ。私は農村の悲慘なる實狀を味ひ盡した作者が、反抗的傾向に赴く事を當然とする。しかし、地主と小作人を人形芝居化し、勸善懲惡主義と等しい觀念をもつてあらはす事が、かへつて作品の效果を弱めるものと思ふ。大江氏の場合にも、以前の作風に比して近時のものは現實感が稀薄で、深き感動を受けないものが多い。一時の痛快を購ふ爲、一時の流行の滿足の爲、つい易々と邪道に陷る事もあり勝

の事だ。よくよく反省すべきであらう。
大江氏には平生座興をそへる事に熱心のあまり、しないでもいゝ滑稽な所作をしたり、いはないでもいゝまことらしからぬ話をする癖がある。それが作品にあらはれる時、屢々過剩のをかしみと、浮いた調子の駄洒落となり、又身につかない借物のつけ加へとなる。世の辛酸を甞め過ぎた悧巧人にとつて、やむを得ない處世の道かもしれないが、ほんとは肚の底にたいしたものを持つてゐる此の作者の如き人には、はやくさういふ薄羽織を脫がせて、隆々たる筋骨を赤裸々に見せて貰ひ度いのである。(昭和五年二月六日)

――「三田文學」昭和五年三月號

父の「米國紀行」

亡父のかきのこしたものに「阿部泰藏一代記」と「米國紀行」がある。前者は明治三年から大正七年に至る迄、時々書きとめた一身一家の記事で、後者は明治九年米國へ渡航した時の日記である。一代記の方にも渡米の事は簡單に書いてあるが、それは後日認めたものらしく、紀行の方は和紙横綴のポケツトに入る位の帳面で、最初の少しは鉛筆でかき、あとは毛筆でかいてある。恐らくは、船室や旅舍の窓で、旅硯を取出して認めたものであらう。

父は非常に無駄を嫌つた。無口だつた。無駄口のきけない人間だつた。自慢話の出來ない質だつた。強い性格のあらはれとして、身を守る事極めてきびしく、何も彼もさらけ出して人に見せると云ふ側で無く、己を語る事をいさぎよしとしない傾向があつた。家に在つても、子供達と口をきく事などは稀だつた。大概書齋に引籠つて讀書をし、或は一人で將棋を並べて樂んでゐた。

何の道樂も無かつたが、將棋丈は一時熱中し、暑中休暇には箱根や鎌倉へ名人小野五平翁をつれて行つて稽古して貰つてゐた。當時の仲間の殿樣初段の中では稍強い方であつた。

私は、父の低い聲や、平生の極端な無口から推測して、演說とか、卓上挨拶とかいふものはまづいに違ひ無いと思つてゐた。三田演說會に引出された時などは、私は普通部の生徒だつたが、壇上に於る父は非常にみじめなものだらうと想像して、敢て聽きに行く勇氣が無かつた。「君のおやぢの演說うまいなあ」と、その翌日上級生に云はれたが、私はほんとだとは思は無かつた。ところが、晩年父の卓上挨拶を聞く事が屢々あつた。門野幾之進先生の還曆祝賀會だの、父自身の事業界引退披露の時の挨拶など、そのうまさに感心した。それは一字一句も無駄の無い、よく選擇された言葉で組立てられたものであつた。

父の手紙といふものは、全く飾の無い、要件丈を最少の字數で表現した、格調の正しい、彫刻的の名文だつた。

これらの點から考へても、いかに無駄に己を語る事を好まなかつたかは窺ひ知られるのである。一代記も紀行も、文章の綾などは全然無い。幼少にして齋藤拙堂先生の門に學び、後小野湖山先生に師事して詩文を修めた經歷にも拘らず、文字を弄ぶ事は努めて避けたらしい。殊に日記や

紀行は自分自身の心覺えで、他人に見せるものとは考へてゐなかつたらうから、要領を記すにとどめたのであらう。

「米國紀行」は、

明治九年丙子卽ち西暦一千八百七十六年四月六日式部寮丼史官より明七日午前十時參官可致旨申來る

といふかきだしで、翌日出頭すると、文部省六等出仕に被補、文部大輔田中不二麿氏が米國フイラデルフイアに派遣されるに付隨行を命ぜられる事にはじまる。

父はその時二十八歳で、前々年妻を失つて獨身生活をし、芝區新銭座の慶應義塾に在つて、インテレクチユアル・フイロソフイの講義をしてゐた。尤も、その直ぐ前迄は役人をしてゐたのであるから、召出されたのは不思議でないが、何故役人をやめたのかは審かで無い。恐らく當時の慶應義塾の氣風として、役人嫌だつたものらしく、これは終生變らなかつた。最初役人になる時も、ひどく澁つた様子で、それは一代記の中で最も面白い部分だから、聊かわき道へそれるきらひはあるが、玆に抜書きする。

明治三年二十二歳の九月、福澤先生丼にその家族と熱海へ赴き、自分丈別れて鄉里三河へ歸省

し、しばらく滯留してゐると、豊橋藩に對し、

其藩士阿部泰藏儀御用候間至急上京可被申付候也

といふ朝令が達した。これは大學南校の教師として出仕させようとしたのである。父は間も無く上京するが、ひどく出澁つて、構へて病氣の屆出などをしてごまかしてゐたが、結局大學大丞加藤弘藏氏(後の弘之氏)を訪ひ、斷つて來る。又藩邸に赴いて、當分の間病氣全快覺束ないから、その旨御上へ屆出てくれと依賴して塾に引上げた。

だが、藩からは又呼出狀が來るので、澁々出向いて行くが、餘程氣が進まなかつたものと見えて、指示された時刻に遲れてしまふ。「遲刻に付公用人立腹」と一代記の中に書いてある。御用の筋は、再び御上から藩に對し、藩士阿部泰藏同道罷出よといふ御達しがあつたのだ。結局公用人に引張られて太政官に出頭し、大學出仕を仰せつけられてしまふ。南校の教師になると同時に、父は慶應義塾を出て、吳服橋內の藩邸に引移つた。

父の役人生活は、大學から文部省へかはり、足掛八年間つゞくのであるが、その間祭典祝日には、いつも所勞屆を出して參官してゐない。一代記の中には所勞斷書の雛形迄も書いてある。明治初年の急進派だつた慶應義塾の風として、儀式めいた事を好まなかつたのであらうが、又ひと

つには父の極端なる不精の爲で、これは不幸にして私にそつくり遺傳してしまつた。
當時役所の制度は改革につぐに改革を以てしたと見えて、その度毎に役人は免職になり、直ぐ新らしく任命されたものゝやうである。明治八年九月には「改革に付正院中諸課局被廢候に付余輩一同免職」といふ一節があるかと思ふと、直に六等出仕に補せられてゐる。しかし、結局役人はいやになり、免職願書を出す。

私儀腦病相發奉職仕兼候間被免出仕候様仕度此段奉願候也

望の通り免職になると、此の腦病患者は、上記の如く再び慶應義塾に歸つて講義を開始したのである。

それが約五箇月で、今度は米國行の爲に又召出されたのだ。
文部大輔田中不二麿氏は何の爲に米國へ派遣されたかといふと、此の時が恰も合衆國獨立百年祭にあたり、フイラデルフイアで萬國博覽會が催され、我國からも數十名出張した。それに各國から教育に關する書類器具等が出品されたので、文部省からも特に役人を差遣する事になつたのである。一行は田中氏夫妻、中督學畠山義成、六等出仕阿部泰藏、八等出仕手島精一、九等出仕出浦力雄といふ顔ぶれだつた。

私は幼少の頃田中氏夫妻の當時の寫眞を見、洋裝の夫人の容姿頗る端麗、リツトン卿の小說中の女主人公の如きに感服してしまつた。夫人は今も御存命で、最近々親の者の結婚披露の際特に御出席を願つた。そのむかしの麗人も、今は古風な御隱居樣であつた。

畠山氏は此の訪米旅行中に病み、船が故國へ着く迄に死んでしまつた。手島氏は後の高等工業學校長、出浦氏は後に辯護士となつた。「米國紀行」の附錄として見る可きものに「游米雜記」と題する手記があるが、これは一種の買物帳で、渡米前及旅中の諸拂（しよはらひ）の覺書である。

父が文部省から受取つた支度金は貳百拾八圓で、東京で買つた品々は、浴衣四枚、黑八丈一枚、手拭、ハンケルチーフ、内外一覽、手帳一冊、ペン・ナイフ、禮帽、ゴム沓、上沓、紙入、メリヤス襦袢四枚、メリヤス肌着上下八枚、錦繪、博物圖、帽子、手袋等總計百四拾九圓九錢五厘である。錦繪は土產にするつもりだつたのだらう。博物圖は途中勉強して知識を貯へようとしたものではなからうか。諸物價の安い時代ではあるが、禮帽が二圓二十五錢で、たゞ帽子とるしてある方は僅かに七十錢に過ぎない。

四月二十四日の晚は、上野精養軒で文部省の役人連六十餘名が送別會を催した。「頭に頂く高帽子、ぱつぱとくゆらす卷煙草」と街頭で歌ひはやした官員萬能時代の風景として、此の夜の有樣

を想像すると愉快である。

この日父は天機御伺に參內したが、主上正院に臨幸の後だつたので拜謁する事は叶はなかつた。それで翌二十五日再び參內拜謁し、緞子一卷、羽二重壹疋、酒饌を賜つた。この事は米國紀行の中に書いてあるが、歸朝の後拜謁仰せつけられた時の事は書きもらしてゐる。武家育で、斯ういふ父の無頓着に氣を揉む母が誰かに代筆させて、一代記の欄外に附記させたのを見ると、萌黄緞子壹卷、紅白羽二重、御土器、御料理品々を賜つたのである。

船は米國太平洋郵船コロラド號で、一行は二十五日の夜乘船し、翌早朝出帆した。此の船は四千噸積で、父はその大きさを、

船の長さ三百六十ヒート卽ち我一丁程にて幅は廣狹一様ならず

と記してゐる。

はじめは天氣清朗波靜かに「萬里一碧水光接天時々水鳥の飛ぶを見る」など丶書いてあるが、夕方から風雨になり、船體頗る動搖した。

然れども余は携へ來れる藥を服したる故か不快を覺えず

と鉛筆で書いてある。船の傾く爲であらう、此の邊の文字にはかきにくゝて困つた跡がありあ

りとあらはれて居る。さういふ負惜みを書いてゐるが、次の日は我慢が出來なくなり、爾來三日間終日船床を離れる事が出來なかつた。その後も逆風強く、頗る難航をつゞけ、田中氏夫妻の如きは出帆後十二日間床を離れる事が出來なかつた。

船中の見聞感想の中で面白いのは、支那人船客に就て記したものである。

支那人凡八百七十餘名下等の室より甲板上に出で檢査を受けたり、是等の支那人は多くは廣東邊の者にて本國に在ては生計甚だ難きを以て遠く米國の西岸なる諸州に赴き力役して金を得んと謀る者なり、固より卑賤の者のみなれば身體不潔にして衣服は黑き綿布を着せる者多く年齡は凡十四五歳より三十歳位までなり、然れども皆靴を穿ち跣足の者無し、蓋し船中の規則に依て然らざるを得ざるか又は自國の風なるかを知らざれども之を我人力車夫の群に比すれば稍整齊なるを覺ゆ、支那人の米國に赴き生計を營まんとする者は頻年不絶太平海郵船の米國に赴く毎に必ず數百名を載す、米國の職夫よりも廉なるを以て米人之を用て奴婢と爲し工人と爲し爲に米國の職夫も多くの傭銀を得る能はず大に不平を唱ふる由なり。

その頃から既に移民問題はあつたのだ。船中米人が時々船客を集めて演説をする事なども特記してある。一米人は、一千八百六十五年支那に在て官軍に與し、長髮賊を伐ち、あやまつて生擒

され、辛苦を嘗めた顚末を物語り、米人船醫某は支那にある事十八年、自由に支那語を讀み且談じ、支那の古詩を英譯して一同に話した。

古昔秦の始皇萬里の長城を築きたる時烈婦メンチェンなる者嫁して數日其夫役夫となり長城に赴き長城に在て死したるを知らず之を尋て萬里の山川を跋涉し長城に到て其遺骨を拾ふ、秦皇其美色を見て之に逼りたるを以て終に河に投じて死したる始末を語れり

航海日數二十四日にして船は桑港に到着した。「游米雜記」によると、船賃百二十五弗だ。父は極めて酒を好んだので、船中の酒代五弗を計上してゐる。

桑港に於る買物の一番はじめに帽子五弗とあるのを見ると、日本で買つたのが時勢遲れで、とてもかぶれなかつたのでは無いかと思ふ。その外には、鐵道案內、ネキタイ、袖ボタン、襟ボタン、名札、時計等が列記してあるが、ひとつ不思議に思はれるのは拾貳弗五十仙ふんぱつして喇叭を買つた事である。敎育器具としての買物なら、何もあわてゝ到着早々の桑港で仕入れる必要はない。或は貴府の博覽會場に於て、日本國家を代表する行列を行ひ、これを莊嚴ならしめる爲の效果を想像したのかもしれないが、それにしても誰が吹く積りだつたのだらう。若しこの冗談に等しい想像がほんとなら、誰にでも容易に吹けるものと思つてゐたのであらう。

桑港には八日間滞在した。宿泊料三十三弗である。此の間の見聞中特記してあるのは、ゴールデン・ゲート公園に行った時の事である。

公園の一方は太平洋に濱し海岸に「クリフ・ハウス」といふ休息所あり、玆に休息すれば压下に三四の岩あり恰も我國伊勢の二見浦に似たり、此岩石上に許多の「シール」と云ふ海水中に住する獸群集して觀客の眼を喜ばしむ、「シール」は獺の類にして大なるは七八尺もあるべし其性陸に上て睡ることを好む、他所にては人此獸を殺して其皮を用ふれども此處にては游客を慰めん爲取る事を禁じたるに因り少しも人を避くるの色を見ず、余輩は「クリフ・ハウス」にて暫時休息し夫より馬車にて諸處を見物し「ウードウード・ガーヅン」と云ふ游園に到れり、園中には百般の鳥獸草木を集め熱帶の花寒帶の草相接し河海の魚を養ひ熊を馴らして戯を爲さしめ虎を檻にして食を與へ靑草の美なる事氈を布くが如く籠鳥の歌ふは樂を奏するに似たり、老若男女園に入て逍遙する者甚多く一名各縱觀料二十五仙を出す、少年少女等は相集て鞦韆の戯を爲すあり池水に舟を棹す者あり、實に人目を悦ばしめ且つ知識を博むるの益あり一覽し終りて客舍に歸る

文部省の役人の事だから、一行は學校の參觀を怠らなかった。しかし、父は「學校の模様は米

國學校見聞記に載するを以て玆に略す、以下之に倣ふ」と書いてゐる。果して「米國學校見聞記」なるものが他にあるのかどうか知らないが、想像をたくましくすれば、それは役所へ提出したものではないだらうか。尤もミルスセミナリイを訪問した事丈は書いてゐる。恐らく女學校といふものが非常に新しい存在として特別の興味があつたのであらう。

此學校はミル氏の私立にて女生徒二百零七人あり、ロツキイ山の西方にて之を第一等の女學校とす、本日ミル氏は家に在らざりしが妻君幷に他の女教師等余輩を遇する懇切を盡せり、女教師中に佛人ベビル女なる者あり、嘗て横濱に在りし事二年餘少しく日本語を解し殊に余輩の到るを悦ぶ

その他造幣寮を見物し、又顯微鏡協會なるものに招かれて行く。若くして知識慾に燃えてゐた時代の父の風貌は、色彩の無い文章の中にも躍如たるものがある。

五月二十七日一行は桑港を發し、二十九日オグデンに着いて一泊した。汽車の旅の途すがら、アメリカン・インディアンを見た驚を、父は下の如く記してゐる。

サクラメントを經てコルフアクスと云ふ處に到り始て印度人を見る。此邊の土人は白人の風習に化し衣服は粗なれども白人に異ならず、印度人は顏色銅の如く、加ふるに赤色の物を塗

て飾となす事我國の婦人紅粉を用ふるが如く他國人より見れば其醜を增すやうなれども土人中にては之を美とするならん

オグデンには一泊したきりであるが、その時父は眼を病んで醫師を招いた。醫師は日本の事情に暗く、日本は支那の屬國かと質問したと書いてある。この無知は父を驚かしたらしいが、勿驚大正のはじめに於て、私は米國の各地で同じ質問を受けた。恐らく、無頓着極まる亞米利加の無知識階級には、今もなほかゝる質問を發して自負心の強い日本人を面喰らはせる奴が無數に棲息してゐるであらう。

ニユウヨオクへ到る途中、一行の見物した重なる所は左の通りである。

オマハ高等學校にて男女室を同うして學ぶを見る。

同所にて鑛物溶解所を見る。

セントルイスにて獄舍を見る。囚人顏色黃なる人間を見て珍らしがりチヤイナメンと叫ぶ。

同所にて幼稚園、小學校、女子師範學校等を見る。

六月七日正午ニユウヨオクに着き、此處にも八日間滯在した。音樂場を見物した日の日記の一節を拔く、

場中數千の客を容れ無數の瓦斯燈を點じ奇草珍樹を植ゑ泉水には魚鼈游泳し斷崖には瀑布を迸らせ場中央には樂人樂を奏し恰も極樂界に游ぶが如し

セントラル・パアク見物の記の一節。

草木青々目を慰め池水には禽鳥戯れ遊び或は小舟に棹して歌を唱ふる少女あり又園中動物園植物園等ありて人の知識を博め或は體操場ありて人の身體を強くす、秦皇隨帝の奢侈も恐らくは此の如きに至らざりしと思はれたり。

六月十五日一行はニユウヨオクを發してフイラデルフイアに赴く。最初コンテイネンタル・ホテルに泊つたが、市中の喧噪甚しきに閉口し、グリイン街第二千二百十九號に轉じた。父は又、日本人同志が一所にゐては英語に熟する事が出來ないと云ふ理由で、一人別に室を探して移つた。費府には我國の博覽會事務局があり、その事務員の案内で直に場内を見物し、その夜は陸軍中將西鄕從道氏の訪問を受けた。

到着四日後文部省の出品を整理陳列したが、文部省以外の出品も多かつたと見えて、その出品人達は會場内に日本風の家を建て、日本館と稱して住居してゐた。父は時々其處で日本料理を味ひ、酒杯を傾けた。此の日本館は米人の眼を驚かし、彼等は室内を觀ん事を迫つて陸續として絕

えたかつたが、雜沓を恐れて之を許さず、日本人丈で氣樂な世界を形造つてゐた。

博覽會はその年十一月のなかば迄開かれてあつたが、一行はその間に諸方を見物して廻つた。當時米國には上記の西鄕中將の外に、全權公使吉田清成氏が在り、化學者宇都宮三郎氏在り、伊澤修二氏在り、留學生監督目賀田種太郎氏がゐた。父は目賀田氏と一番親しく往來してゐた樣子である。

又井上馨氏も英國へ赴く途中立寄つた。

七月三日は米國獨立百年祭の前夜とて、市中はさかんなる催しをしたものらしい。「即興詩人」の名文には比ぶべくもないが、父の粉飾を避けた事務的記述によつても、その賑ひは想像する事が出來る。

三日晴、此夕トルチライト・プロセツション(炬火行列)とて我かんてらの如きものに火を點し凡そ一萬人程之を肩にして列を爲して市街を步行し、終に彼の檄文を草したるインデペンデンツ・ホールに達せり、此列に與かりたる者は合衆國にて有名なる官吏數人、ブラジル帝ドン・ペドロ、博覽會に與かりたる諸國の理事官等にして各馬車に乘じ車前に方形の燈を點し歐羅巴諸國幷に日本支那等の理事官も各其國名を朱書したる方燈を點して列に與かれり、

其外府民歌を唱へて歩行する者あり、或は兵卒に扮して喇叭を吹き大將らしき者黑衣を着し高帽を戴き馬に騎する者あり、或は顏面を赤く塗て印度人の眞似を爲す者あり、殊に可笑しかりしは印度人に扮したる一名來て路傍の婦人とシエーキ・ハンドを爲したりしに婦人の手血を灑ぎたる如く赤色に變ぜり

一行の中、中督學畠山義成氏は元來病弱の人たつたが、渡米後胸部の疾患よろしからず、一人費府郊外に靜養してゐた。しかし、快復のきざしも見えないので、遂に一行に先立て歸國する事になつた。不幸にして此の人は、再び故國の土を踏む事無く、太平洋上で永眠した。

八月の末、田中氏夫妻をはじめ隨員はナイヤガラ瀑布からカナダの方へ旅行した。費府を立つ時、父は旅舍に荷物の切手を忘れて取りにかへり、遂に一汽車乘遲れるの失敗を演じた。

もう一つ汽車の失敗を重ねたのは、カナダ旅行から引つゞきボストン方面へ向ふ途中、乘換驛でない所を乘換驛と思ひ込み、先づ手ぶらの田中夫人が下車し、男達はめいめい荷物を持つて正に下車しようとした時、汽車は夫人一人を殘して忽ち發車してしまつたのである。次の驛に着くと、田中氏と手島氏は馬車を驅つて元の停車場迄引返したが、夫人の姿は見えない。夫人は行違ひに一行の後を追ひ、しかも父や出浦氏の待つてゐる驛で下りずに他の驛で下りてしまつた。や

うやく再會するにはしたが、一行のあわてた樣は想像するに難くない。
父はボストンで田中氏に別れ、手島氏と共に一足先に費府に歸り、更に又ワシントンに出かけた。其處では吉田全權公使の案内で、大統領グラントを訪問した。
父の買物帳は相變らずこくめいに記入してあるが、旅費宿泊料、物品購入代の間々に、トバコとシガルとビヤが出て來る。麥酒は十仙とあるのが一杯立のみで、五十仙とあるのが一本の代金では無いだらうか。又、時には痛飲したと見えて、ビヤ壹弗八十仙などゝいふのもある。
十一月の末には博覽會の殘務も濟ませた。その晩父は日本館で、目賀田氏と別杯を傾けた。
十二月一日、一行は見送りの目賀田氏を殘して費府を立つた。一切の感傷を潔癖に嫌つた父も、此の時は流石に感慨が深かつたと見えて、
一日晴、午前十一時半過ぎヒラデルヒヤ停車場にて目賀田種太郎氏に別を告げ汽車博覽會場の傍を過ぐ、頗る別を惜むの情あり、行く事數十里殘雪野に滿ち、此夜雪降る
と書いてゐる。
一行は歸途シカゴを訪ひ、カリフオルニア州を見物して桑港に着き、十二月十六日郵船ゲーリツク號に搭じ米國を離れた。

歸航も天候に惠まれず、激浪甲板を洗ふ事もあつたが、翌年一月八日無事に橫濱へ着いた。

父は自己を語る事を好まなかつたので、私共家族の者も、父の口からその生涯の事を聞くのは頗る稀だつた。だから、父の渡米についても殆んど何も知らなかつたのである。たゞ、幼時を追想すると、父が亞米利加から土産に持つて歸つたといふ玩具の幻燈があつて、私はロッキイ山を越（こえ）る汽車の姿や、ナイヤガラ瀑布の壯大なる風景の寫眞を次々に挿入して、眼鏡に顏を押しつけ、一心に見入つたものであつた。今父の遺稿を整理し、私の年をとつてづうづうしくなつた心にも、感慨深きものがある。（昭和五年三月四日）

——「三田文學」昭和五年四月號

卒業式

或日或學校に奉職してゐる先生に用事があつて出かけた。三月もなかば過ぎ、草も木も力強く新芽を吹き、櫻の梢には蕾が紅く目立ちはじめた頃である。學校は、恰も小學部の卒業式だつた。金持の子供の多い小學部の事だから、門前には自動車が、さまざまの型を陳列してゐた。ひなたぼつこをしてゐる運轉手が無駄口をきいてゐる。

「何しろ君、一寸咳が出るとか、水鼻を垂らしたと來ると、學校なんか休んじまへと、親の方からいふんだから爲方が無いや。」

「利口にはならないねえ。しかしよくしたもので、金持の子は馬鹿になるといふが、それだから世の中はもつて行かれるんだぜ。」

不圖耳に入つた會話だ。此の頃の小說のやうに都合よく、資本家を恨んだり憎んだりする悲痛

た調子を含んではゐなかつた。全く、ひなたぼつこの無駄話に過ぎなかつた。

卒業式ははじまつてゐた。國旗と校旗を交叉した會場の入口にも、春の日ばやぶさかならず、たつぷりとあかるい光を浴せかけてゐた。

私のめざした先生はゐなかつたが、受附子のすすめるまゝに、遠慮なく中に入つてみた。二階が空いてゐるといふ注意に從つて階段を上り、扉を押して足を踏入れると、むうつと脂粉の香が鼻をつく。階下にいがぐり頭を並べてゐる我子の一擧一動に目を放さないモダアン・マダムが、半他所行程度の扮裝で、幅廣く顔を列ねてゐるのだ。

見下す演壇には、一人の先生が愛嬌笑を滿面に湛へつゝ口を動かしてゐる。正に爲になる御話に違ひ無い。然るに何事ぞ、私の耳を打つ言葉は下品な巻舌だ。

「俺あ、いくつ喰つたか知らねえよ。」

これには私もびつくりした。豫てきく世のお伽噺業者が、聲色まじりの話をして子供の御機嫌をとり結ぶといふ、それかと思つた。

「はじめに鮪、次が赤貝、その次が鮪二つ、その又次が赤貝……」

何の話かと思ふと屋臺の鮓の立喰で、鮓屋は客がいくつ喰つたか知らない、客の方が喰つたや

つを順々に思ひ出して勘定を求めてゐる場面を、舌一枚で描寫しつゝあるところであつた。

或親がつくづくなげいて、近頃子供を毒するものは、民衆教育家面をしたお伽噺屋である、落語家ならば子供の方が馬鹿にしてゐるから害は無いが、フロック・コオトやモオニング・コオトを着て、髯をはやし、且人々が先生といふ敬稱をもつて呼ぶお伽噺屋を、無邪氣な子供は單純に偉い人だと思つてゐる、その偉い人が變な聲を出し、變な節をつけ、ぢいさんになつたり、婆さんになつたり、王子になつたり、娘になつたり、鬼になつたり、猿になつたりするので、子供は意外の儲物をしたやうに喜び、げらげら笑ふ、喜び笑ふのは結構であるが、好尚の下卑(げび)る事の惡影響は恐るべきものがあると云ふのだ。

壇上の先生の鮓屋の描寫は隨分あぶらつこい。しかし、それは決して落語家やお伽噺屋の眞似をしてゐるのでは無い。先生は教育家だ。だから、いたづらに鮓屋のおやぢの聲色を使つて下情に通じてゐる事をほこるやうな怪しからぬ仕儀では無い。かゝる世俗卑賤の例をとつて話をするのも深い慮(おもんぱかり)のある事で、明確なる目的意識の下に行はれてゐるのである。つまり、屋臺の鮓屋の御客といふものは極めて正直で、決してさばをよむやうな眞似はしないから、鮓屋の方も安心して只管鮓を握る事に專心する。したがつて鮓もうまい。

「だから皆さんも、これから中學へ行くやうになつても、決してカンニングなどをしないやうに心がけなければなりません。」

と一段聲を張上(あげ)て訓戒を與へたのである。實に面白く且有益な御話であつた。

ところが純眞なる子供等は、此の御話の面白をかしい部分も、身の爲になる部分も差別無く、ちつとも身にしみて聞いてゐない。元來此の學校は傳統的に自由を尊び、型にはめない叱らないと云ふ事を看板にしてゐるので、並び大名の諸先生と卒業生は、つとめて嚴肅に卒業式の氣分を出さうとしてゐるが、一年二年三年あたりの小粒な氣儘者どもは、叱られないのをいゝ事にして、仲間同志で喋合ひ、つつきあひ、勝手に騷いでゐるのである。大人の話には最初から退屈してゐるのだ。兎角卒業式などゝいふものは、子供の心を知らない大人本位の、見せかけの儀式に陷り憂鬱にさへなり勝であるが、流石に進歩した學校の事とて、長閑な春にふさはしい景色であつた。

正直であれ、カンニングをしてはいけないと云ふ先生の訓話が濟むと、又一人別の先生が登壇した。子供達は拍手して迎へたが、矢張聽いてはゐないのである。尤も話をする先生の方でも、子供に聽かせるよりは親に聽かせ度いのかも知れない。今度の先生は前の先生よりも一層長々と話すのであつた。前の先生の方は、自宅で充分腹案をつくり、或は奥さんやお子さん達を相手に

練習して來たかとも思はれる位構成がしつかりしてゐたが、今度の先生は出たとこ勝負で行く丈の度胸と自信があるらしく、その爲にも話が延びるのであつた。或有名な登山家と一緒に山に登つた時の話で、最初は登山家のゆるゆると歩いてゐるのを追越して笑つた者が、次第に道が嶮しくなつて來ると、呼吸が切れて苦しくなつて來る、それに反して登山家の方は、いつ迄たつても同じ歩調で悠然と登つて行く、スロオ・エンド・ステディの必要を說いたものであつた。皆も此の登山家のやうな態度で勉強しなければならないといふ極めて有益なお話である。しかし子供は聽いてゐない。がやがや騷ぐ聲は愈々高く、先生のお話に更にお話がつけ加はり、おしまひかと思ふと又つゞく度每に、喧騷の度はいやまさるのであつた。たしかに子供達は戶外の春光にあこがれ、又明かにお晝の御飯を戀しがつてゐるのである。

だがお話は今度の先生の後に更に老先生のがあるのだ。これも亦有益な訓話に違ひ無いのであるが、二階にゐる者にはちつとも聞えない。モグアン・マダム達は身を乘出して片言隻語を捉へようとするのもあり、苦笑しながら、

「いつもかうなんでございますよ。」

たゞさゝやきかはしてゐる場馴たのもゐる。子供達は殆んど參つてしまつて、就中ちひさい

連中は、椅子から腰を浮かしたり、前の子供の耳を引張つたり、背中をどやしつけたり、喋つたり、笑つたり雜然騷然として、一層老先生の低聲を打消てしまふのであつた。時々優等生らしいのが、大人ぶつて、しいつしいつとたしなめても、ちつとも效果は擧らない。

突然下級生の一團の眞中どころで、何事か起つた。一人立ち二人立ち、五人立ち六人立ち、座席が亂れて來た。だが、皆無邪氣な笑顔をしてゐる。忽ち一人の先生が、その亂れたグルウプの中から、たつた一人笑顔をしてゐない子供を連出した。この可愛らしい坊ちやんは、あまり長いお話の連續に忍べなくなつて、おしつこをもらしたのである。

二階のマダム達は、若や我子の失體では無いかと心配して、白粉の首を突出したが、他所の子供と見極めがつくと、互に微笑を取替はせて、元の涼しい顔にかへつた。

此の出來事の間にも、よき校風はうかゞはれた。たとへば、平生無闇に子供を叱りつけ、無理に性情をためてゐると、おしつこをした子供に對し、その身邊の他の子供は、あらあらあらとはやしたり、口汚なくからかつたり、いやしんだり、さげすんだりするであらうが、此の際育ちのよい子供達は、恰も夕立の過ぎたやうな、かゝはりの無い態度で看過した。諸先生の平素の敎へのよい事が察せられ、まことに奥床しく思はれた。

老先生のお話が終ると、五年生總代が送別の辭を朗讀した。言文一致で、極めて率直に眞情の流露したものであつた。正直なのは子供達で、大人の話の間は勝手に騒いでゐたが、自分達の仲間から役者があらはれたとなると、忽ちしいんと靜まつて聲を出す者は一人も無い。大人達の魅力の無い聲と違つて、子供の聲は朗に、よどみ無く、會場の隅々迄ゆきわたつた。大人のやうに長々と喋らないので、印象も深く、ぴいんと胸に響く。私は不圖、眼底に何かを感じ、しまつたと思つたが、既にその時は、あちらこちらで半巾を取出すマダムがあり、鼻をすゝるマダムがあつた。

送別の辭の次に、卒業生總代の謝辭朗讀があり、これ亦至極上出來で、マダム達の涙は一層分量を増した。小粒の、可愛らしい、いかにも利口利口した總代は、讀終つて降壇し、にこにこして席に戻つた。

「まあ、いゝお坊ちやんですこと。」

私の目の前に襟足を見せてゐたマダムが、感激の聲を發した。

次には英語の謝辭があつた。この子供とて、前の總代に劣らぬ優等生であり、いゝお坊ちやんに違ひ無いが、不幸にして外國語の暗記といふつまらない配役なので、マダム達の涙をそゝる事

も無く、稱讃の言葉もかけられないのであつた。ちひさい子供に、何等の感情も伴はない棒暗記の英語などを喋らせるのはよくない事である。多年のしきたりらしいが、先生方の考慮を煩はし度い。

最後に、螢の光の替歌が五年生によつて唱はれ、おもへば尊し我師の恩といふ明治時代からのお別れの歌が卒業生によつて合唱され、一度をさまつたマダム達の涙を新しくした。想へば此のマダム達も、かつては此の歌をうたひ、少女特有の感傷にひたつた事がある筈である。古き歌のふしに大人はしめやかな氣持になり、子供達は長々しい式が終つて解放された喜びで、會場を流れ出た。戸外は春光ゆたかにみなぎり、春はひしひしと身邊に迫るのであつた。（昭和五年四月二日）

――「三田文學」昭和五年五月號

帝都復興祭餘興

帝都復興祭の第一日、私の毎日の通勤のみちは、天子様の御通路にえらばれる光榮に浴したので、たぶん朝早くから一般人民の交通は遮斷されるに違ひ無いと拜察し、珍しくも省線電車に乘つた。ラッシュ・アワアの事だから、車内は滿員だつた。車窓から街路を見下すと、はやくも往來には蓆を敷き、老若男女が土下座して、天子樣を拜まうと短い首を延ばしてゐる。いつもの事だが、すめらみくにのありがたさで、天子樣の御出ましの日は、日本晴だ。

水道橋と神田で大分降り、東京驛近くなつた時は八分の客で、座席が無くて立つてゐるのは數人に過ぎなかつた。

突然大きな聲で車內に呼びかけたものがある。

「みなさん、我東京市も復興致しまして、まことに御目出度う存じます。」

すつくと立上つたのは、年配四十と五十の間と見うける洋服子で、非常に裾長な外套の前をはだけ、胸には何か徽章をつけた――紳士である。(以下特に紳士と呼ぶ)

おそろしく切口上ではあるが、われとわが振舞に興奮してゐるのか、或は東京市又は日本帝國の爲にふるひ立たんとする雄心おのづから激越なる爲か、些か震(ふるへ)を帶びた高聲で、車中を驚かせた。復興はしたが、今が我帝國にとつて一番大切な時だから、お互に儉約を旨とし、輕佻浮華の振舞をつゝしまねばならない。

「此の際女でも、あまり白粉を濃く塗つたり、華美な服裝をしたり、又男でも變なみなりをする者には警告を與へる。」

さういひ切つて一禮したが、そのまゝ座席には歸らないで、つかつか進むと、車中たゞ一人の婦人で、出入口に立つてゐるのゝ前に立ちはだかつた。

「あなたの頭はよくない。白粉も濃過(こすぎ)る。人妻としてつゝしんだらいゝだらう。」

國を憂ふる熱血男兒は、何らの手むかひもしさうもない婦人を怒鳴つけた。

その婦人は何處から乘つたのか知らないが、一見して丸ビルへ通勤する事務員らしかつた。年齡は三十近く、ほつそりした姿で、手にはパラフィン紙に包んだカアネエションを持つてゐた。

問題になつた髮は別段異樣なものでもなく、たゞ少し波を打たせ、額を狹くつくつてゐた。白粉はたしかに少し濃い方で、且うつすりと頰紅も刷いてゐたかもしれないが、それも丸ビルの水準からすれば、敢て目立つ程にも思はれなかつた。しかしそれは、私がついつい脂粉の刺戟にそゝのかされる心持を失ひ、その方面の感覺の鈍つた爲であつて、雄心勃々たる憂國の志士の眼から見ると、國を傾ける程強烈な色彩であつたのであらう。

叱咤して置いて、紳士はくるりと踵をかへし、意氣揚々と自席へ戻らうとした。

「ちよつと。」

婦人は紳士の背中に聲をかけた。

「失禮ですが、人妻か人妻でないか、どうしておわかりになりますの。」

紳士は意外な質問に足をとめられたが、とつさにうまい返事が出ないやうだつた。到底手むかひしまいと思つた相手が、存外たちむかつて來たので、肚を据ゑるのにひまがかゝるのであらう。

「わかる。俺にはわかつとる。」

怒聲をもつて答へて、さつさと行かうとした。しかし婦人はそのまゝにはして置かなかつた。

衆人環視の中ではぢしめられたのであるから、顔面にはこはばつた筋肉があらはれてゐたが、つ

とめて微笑を浮べてゐた。

「どうしておわかりになるのです。」

「見ればわかる。」

紳士はたゞたゞ聲を大きく、怒號した。

「年齡の割に白粉が濃過る。そんな事では日本帝國は亡びてしまふ。國を思ふ熱誠のあまり忠告してやるのだ。」

たゝみかけて威壓しようとしたが、婦人は極めて冷靜だつた。うるさい相手と見てとつたか、或は婦女子ともに語るに足らずと考へたか、紳士はしきりに自席へ戻らうとしたが、婦人はどこ迄も手をゆるめなかつた。その氣概頗る人を打つものがあつたが、茲に甚だ遺憾なのは、この勇敢なる婦人に東北訛のある事である。

「御名刺を下さい。近日御宅へ伺ひますから。」

「何。」

紳士は全く豫期しなかつた相手の要求に、面上朱をそゝぎ、つかつか引かへして婦人と對立した。

「御名刺を下さい。」

婦人は相手の當惑の色を見てとつて、重ねて迫るのであつた。紳士は、名刺を與へる事の不利を知つてためらつたらしかつたが、之を與へないのも卑怯だと考へたのであらう、遂に婦人の手に一葉の名刺を渡した。

「御住所は。」

裏をかへして見ながら、婦人はあく迄も追求した。

「書いてなくてもわかる。」

恰も列車は東京驛の構内へ入つたので、紳士はそのまゝつつ放して、いちはやく下車した。

「どちらですか、御住所は。」

婦人はその後を追つたが、紳士はふたゝびふりむかず、大またに歩き出した。

私は此の紳士が或團體の一員として、國を憂ふる熱誠のあまり、華美な服裝や、濃厚なる白粉を排斥するのか、又は一個人として默視するに忍びず、目にあまるのを引捉へて面責するのか知らないが、いづれは忠君愛國の上であつて、帝都復興にもさぞかし努力貢獻した人物である事を疑はないが、同時に又衆人環視の中で、突然大聲叱咤する男子に對し、冷然として應酬し、一歩

も引かない氣概を示した婦人も、恐らくは彼の大地震の後、燒土となつた東京に於て、一人前の働きを爲し得た一人である事を信じ度い。

驛の外へ出ると、恰も天子樣は皇居を御出ましにならうとする時刻であつた。帝都復興に參與する民草の中に、斯の如き憂國の志士があり、斯の如き勇氣ある婦人の在る事をしろしめしたならば、さぞかし心強くおぼしめす事であらう。(昭和五年四月三日)

——「三田文學」昭和五年五月號

加宮和香子の追憶

一昨年の春から夏へ移る頃、三田文學同人が、九品佛から調布へかけて遠足した事がある。朝定刻に澁谷の驛で待合せてゐると、加宮貴一さんが可愛らしい洋裝の女の子をつれて來た。それが和香子さんだつた。お父さんの加宮さんは並々ならぬ神經質で、羞しがりが皮肉に變形したやうな口をきく人だから、今では顏の表情にもふくよかなところは失つてゐるが、幼い頃は可愛らしい子供だつたであらうと想はれる眼や口を持つてゐる。和香子さんはお父さん似で、こどもながら神經質な線が、顏にも擧動にもあらはれてゐた。

我子に對する加宮さんはまことによきパパであつた。

一行は正午頃調布の松本博士邸に着き、お辨當をひらき、手厚いもてなしをうけ、庭球をしたり、多摩川原へ出て小石を投げたり、草の中に寢ころんだりして、呑氣に遊んだが和香子さんは

突然氣分が悪くなり、ぐんにやりしてしまつた。加宮さんも、他人の家の事ではあり、我子の上を氣づかつて、青ざめた顔をし介抱に手を盡してゐた。松本家の方々も大層心配して下さつた。幸ひ私の妹が自動車に乘つて來てゐたので、それで加宮さん親子を御送りする事にし、一行とは別れて先に歸つた。

當分の間、私は家内と屢々加宮さん親子の話をし、和香子さんの病氣の經過を心配した。その時は別段の事もなく、間も無く元氣になつたときいたが、家内は時々思ひ出しては、加宮さんの御子さんは弱さうねと云ひ、私は、あの子はどうも神經質過るよと自分の感じを口に出して云つた。

りこうな子供は早く死ぬといふ。加宮和香子さんもりこうさうな子だつたが、父母の歎きをのこし、いとけなくして死んでしまつた。

草の葉の露のこぼるゝはかなさか

あかつきの星消ゆるあはれか

（昭和五年五月十九日）

――「加宮和香子の追憶」昭和九年秋

「ベース・ボール」創刊號埋草

三宅大輔さんが來て、今度「ベース・ボール」といふ雜誌を出すから、景氣をつける爲に何か書けといふ。

「ベース・ボール」と名告る以上、專門雜誌に違ひ無いから、吾々の出る幕では無い。第一どんな雜誌か――高級なのか低級なのか、科學的なのか俗向なのかわからない。すべて後の部類に屬するものなら、吾々も多少のいろどりになるかもしれないが、前の部類に屬するものなら全然手が出せない、まあ御免かうむりませうと云ふと、いゝえ書く事なら自分にいくらでも種があるが、一人の名前が澤山並んでゐるのでは賣物として面白くないから、なるべく多勢の顏を揃へ度いのだ、發刊を祝すといつたやうなもので結構ですと、三宅さんは三宅さんらしい、はつきりした口をきくのである。まさか總理大臣や文部大臣の祝辭を載せるわけでもないだらうが、賑かしにな

るなら、ファンの一人として、未だ出ない雜誌に對する希望を述べる事にしよう。

「ベース・ボール」は高級なものであり度い。今は野球全盛時代だと云はれて居る。全盛は即ち大衆の人氣である。大衆は無知識だ。ファンの大多數はほんとに野球を理解してゐない。「ベース・ボール」は、先づ「馬鹿野郎」「アンパイアをとりかへろ」式ファンを向上させる爲に努力して貰ひ度い。それによつて、ファンは一層深く野球を味はふ事になるであらう。

然し、高級は高級でも、あんまり堅苦しいのはいけない。六法全書的のものでは困る。多分の柔味と面白さを持つてゐて貰ひ度い。但し野球小說、野球俳諧、野球川柳などは御免かうむり度い。病氣の選手が無理に出場し、最初から押され氣味で、スタンドには彼の妹の同級生で且彼を慕ふ令嬢が涙ぐんでゐる。愈々九回目二死にして四十度の大熱の彼が本壘打をかつ飛ばして勝つなどゝ云ふのはまつぴらである。

常に批評的精神を忘れないやうに望む。各學校に對し、選手に對し、監督に對し、審判員に對し、應援團に對し、一般ファンに對し、殊にいろきちがひ的女性ファンに對し、又新聞雜誌の野球記者に對して。

絶えず新鮮なれ。その意味は、野球道の大先輩をかつぎ出すよりも新人の發見起用に努力して

貰ひ度いのである。二十年前の選手よりも、今の選手の方がうまいのと同じく、野球批評も元老より新人の方が遙かにすぐれてゐる。（昭和五年八月二十八日）

——「ベース・ボール」昭和五年十月創刊號

後記

本卷には大正十四年一月から、昭和五年八月に至る「貝殼追放」六十三篇を收錄した。先生三十九歳から四十五歳までの五ヶ年間の作品である。

震災で中絶した「三田文學」を先生の主唱によつて大正十五年四月復活第一號が刊行された。當時、慶應義塾大ホールに於て講演中宣言された言説を重んじ爾來「三田文學」に毎號執筆された。しかも、昭和三年十二月「鏡花世界瞥見」以降「素人の小説」迄約一ヶ年間隔月「中央公論」に執筆され、その上長篇小説「大阪の宿」を初め「果樹」「順風」「遺產」他七篇の小説を創作されたのを見れば、此頃の先生の文學活動は一生を通じて華かな時代であつたといふ事が出來るであらう。

卷中「無題」なる一文はそれぞれ「三田文學」六號雜記欄に寄稿されたものである。また「加宮和香子の追憶」は、加宮貴一の長女和香子孃の「追悼錄」に執筆されたものであるが、何れも從來のどの單行本にも入つてゐなかつた。おそらくは、出版の際、編者が取落したものと認め、この年次に入るべきものは悉く收錄する事

にした。既刊本「貝殼追放」の發行書肆が既に廢業したり、絶版になつてゐるものも多くその散佚するを恐れ、改造社から「貝殼追放」（改造文庫第二部第二百四十二、三篇）に纏めたときも、編者であつた私も全く不注意のためこれに氣がつかなかつた。

この他「三田新聞記者の態度を難ず」は、當時「三田新聞」が掲載しなかつたものを、先生の死後これを筐底から發見されたものである。

本卷は昭和四年七月大岡山書店發行の「第四貝殼追放」と、昭和八年八月日本評論社發行の「貝殼追放」とを底本とし、掲載の雜誌、新聞紙及び原稿の保存されてあるものは、すべてそれに據つて校合校正を行つた。送假名は、執筆の年代によつて明かに違つた使ひ方をされた。「爲め」「爲」の如きも、昭和四年六月の「小山内先生の戲曲」以降、從來「爲め」とあつたのが「爲」となつて先生の慣用に變化を來たしてゐる如きである。

本卷の校合校正に荻野忠治郎、水木京太、平松幹夫の叱正を得た。（和木淸三郎）

昭和十六年五月五日印刷
昭和十六年五月十日發行

水上瀧太郎全集　十卷

著者　阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店

精興社印刷　長澤製本

東京府規格外許可已資紙規第一五四號



